

ラブライブ！サンシャ
イン！！～Step! ZERO
to 000～

白銀るる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

青年、島村耀太《しまむらようた》はロリ女神によって天界へ連れてこられた。そしてロリ女神は耀太に第二次コアメダル争奪戦で自身が持つメダルを現世へとバラまいてしまったことを話す。

現世に散っていったメダルを再び集めるために、耀太はオーズの力を手に入れるが、降り立った世界は耀太がいた世界ではなく、《ラブライブ！サンシャイン!!》の世界だった。

耀太とメダルと少女たち。

夢と欲望、背中合わせの少女たち戦士の物語が、今始まる――。

目次

1st Season

青年と女神とコアメダル	1
少女と声とカマキリお化け	6
欲望の王と赤い腕とアイス	18
転校生sとスクールアイドルと原作崩壊	28
二人の少女と想いと繋ぐもの	34
試練とまだない名前と新たな力	44
ファーストライブと二人目のライダーと最強コンボ	62
小さな二人と本と憧れ	76

二人のキモチと変身と灼熱のコンボ	87
転生と墮天と重力コンボ	100
天使と墮天使とリトルデーモン	112
PVと進化と守りたいもの	123
TOKYOとそれぞれの想いと強敵	140
0と過去と素直な心	164
破られた約束と決別と悪しき力	177
願いの涙と約束と炎のコンボ	189
海の家と合宿とシャイ煮	210

	友情と奪えないモノとひとつの想い	227		新学期と転校生と再スタート	326
	μ☒sとAqoursと進む道	237		雨と個性と超バイク	333
	Aqoursと輝きと海のコンボ	254		苦手と輝きと新ライダー	349
	女神と偽りと真実	273		ダブルブッキングライブと方法と鳥ヤ	
	特別編 映画とダイヤ監督とライダー	279	ミー		361
魂			お金とバイトと呼ばれた名		378
	サバイバルとミステリーと未来へのト	296	デートと尾行と二人のオース		390
レジャー			恋する少女と耀太と無敵のコンボ	404	
カザリと鞠莉と居場所		316	犬と偶然と出会い		423
			地区予選と挑戦と起こす奇跡		442
			希望と廃校と守るべきもの		456
2nd Season			怒りの変身と夢と新グリード		476

お菓子と好きなものと偽りの愛

494

HAKODATEと妹と姉

513

二人の妹と聖なる夜と成長

534

入れ替わりと果南のココロと耀太の秘

密

550

年明けと流れ星と告白

575

メズールと人生ゲームと伝える想い

594

記憶とメダルの秘密とWアंक

617

アंकとみかんと託されたメダル

637

コラボ長編 時空を超えた饗宴

660

閉校祭と妙案と準備

795

開催とデート・リターンズと三人のサ

プライズ

806

狙われた少女とカザリの戦いと謎のメ

ダル

825

明かされた真実と秘密と休息

欲張りな少女と王たちと復活

終わりの始まりとそれぞれの戦いとグ

リードたちの想い

885

理由とぶつかる二人とMIRAIのコ

ンボ

906

神と少女と伝わる想い | 921

復讐と決着と八つのコンボ | 939

最後の戦いとキセキの炎と消失

952

救世と帰還とラブライブ! | 961

卒業と想い出と輝きの物語 | 997

ラブオーズ外伝

仮面ライダーアークア | 1022

仮面ライダーバース | 1058

仮面ライダーオーズ | 1085

1st Season

青年と女神とコアメダル

「ぬしが島村耀太しまむらようたじゃな」

“神様”なんて本当に存在するのだろうか。

世界には様々な宗教・神話が存在し、そしてその全てに“神”という万物を司る存在がある。

文献によって姿形・性格などはそれぞれだが、あえて言おう。

今俺の目の前で神を名乗るその人は、

「わらわは女神。ようこそ天界へ」

変人、いや変“神”であると。

女神、そう名乗った彼女。まだ名乗ってもいない俺の名前を当てたことや、その服装から嘘では無さそうだ……が。

「子供？」

見た目が完全にロリだ。

「誰が子供じゃー！わらわはこれでも千二百歳じゃー……って、何を言わすんじゃぬしは

！」

いや、あなたが勝手に喋ったんでしよう。なんて言うと話が進まなくなりそうだからやめておこう。

「まあ良い。それよりこれじゃ。ぬしはこれが何だか分かるな？」

ロリ神様が指を鳴らすとその手元にケースが現れる。そしてそれには俺もよく知っている模様が彫られていた。

「それって仮面ライダーオーズのメダルホルダーですか？」

「そうじゃ、コアメダルもあるぞ」

そう言つてホルダーを開けたが、そこに収められていたのはタカ、トラ、バツタ、そしてカマキリの四枚のみだ。圧倒的に枚数が少ない。

「……実はな、ぬしら現世の世界でコアメダル争奪戦があったように、天界でも争奪戦が起こつたのじゃ」

マジか。

神様の間でもそんなことが……。いや、それより天界でも仮面ライダーつてやつてたんだな。

「争奪戦中にいろいろあつたんじゃが、わらわはなんとか全てのメダルを手に入れることに成功した。しかし新しい映画で復活することになったじやろう？結果、第二次コア

メダル争奪戦がはじまってしまったんじやよ。卑しい邪神転売ヤどもも再び活発化し、メダルを持つ神のもとに漁りに来るようになった」

うわあ……。

少しというかもうかなりドン引きだ……。第二次コアメダル争奪戦とか邪神転売ヤとか、マジかよ（語彙力え……）。

「当然わらわの所にも、明かりに群がる羽虫のように押し寄せてな。やむなく最後の希望に賭けたんじや」

「最後の希望……」

どっかの魔法使いを連想させる言葉だけれど、女神様の行動にはツツコまざるを得なかった。

「わらわは現世にコアメダルをバラまいたんじや、ちよつとした細工を施してな」

「アンタなんてことしてんだよ!？」

アホなのか!？この女神ひとはバカなのか!？

「ちなみにその細工って言うのは……」

もう最悪な答えしか頭に浮かばないが、それでも僅かな希望をこめて聞いてみる。

「無論、グリードの力を与えて」

「バカかつ!？アンタバカなのかつ!？」

うん、もうコレ読めた。俺がこんな所に呼ばれた理由！

「そこまでは良かったんじやがのう」

「何が良かったのっ!? アンタの所為で大変なことになるかもしれないだぞっ!」

「案の定、現世で暴れ始めてな」

「いや分かれよっ! そうなるでしょうよ、グリードの力なんて与えちやったらっ!」

「そこでぬしの出番というわけじや」

「うん、知ってた! オーズになってメダル集めて来いって言うんでしょっ!」

「おー! さすが分かつてるのう!」

いや、話の流れで大体わかるわ! じやなきや俺を呼んだ意味だもんな!

最初からぶっ飛んだ話してたけど、この女神ひとが一番ぶっ飛んでる。

「それなら俺以外でも良いでしょう……」

「そういう訳にはいかないのじや。ぬし以上にこの仕事に適性のある人間はいない。それにタダでやれとは言っていないぞ」

「へ?」

「無事全てのメダルを集められたら、ぬしの願いを何でも三つ叶えてやろう。」

「なん…でも…?」

「うむ。何でもじや」

報酬が発生するのなら、まあ……やろうかな？

「ま、まあ、俺以外にやる人がいないって言うのなら少し考えても……」

「本当か!? いやー、助かった！ 恩に着るぞ！」

「え？ まだやるとは言って……」

「わらわのメダルとオーズドライバーを使うがよい！」

メダルホルダーとドライバーが女神様から俺の手に収まる。

そして……、

「向こうの世界ではナビゲートと少しの支援くらいしかしてやれんが、頼んだぞ！」

「え、ちよま！ ええええええええええええつ!!!?」

こうして俺、島村耀太の仮面ライダーオーズとしての戦いは始まったのだった——。

少女と声とカマキリオ化け

碧く輝き、どこまでも広がっている海。

そして海から風に乗って届く潮の香り。

大海という存在を身に染みて感じていた俺は……

「どこだどこだおおおおおつ!!」

叫んでいた。

傍から見たら間違いなく不審者だろうが、そう思う人にはぜひ想像してもらいたい。

高校三年、青春最後のページを綴っている最中に突然天界（笑）に拉○られて、さらにリアルコアメダル争奪戦に参加させれる。人の都合を考えないとか、神は慈悲も持ち合わせていないのか……。

『ぬしが良いと言ったんじゃろーが』

「いや俺は考えても良いって……いつ……た……」

『ん？どうした？』

空耳だろうか？今あのロリ神の声が聞こえてるような……

『誰がロリじゃ！誰が！』

「心読まれてる!?! ってかどっから話しかけてるの!?!」

『ついにタメ口になりおった……。まあ良い。わらわは天界からぬしの心に直接話しかけてるんじゃない。ドラゴンボールの界〇みたいな感じじゃない』

「そ、そうなのか……」

ドラゴ〇ボールもあるのかよ。

『それはさておき、今「ここはどこだあああ」とか言っておったな』

「言っただけど、マジでどこ?」

『静岡じゃ』

「は?」

『だから静岡じゃと言っておるだろう』

「なんで? コアメダルって現世にバラまいたんじゃないの? もしかして静岡近辺に落ちたとか?」

『それは“この世界”なら当たりま……』

ロリ神様（聞こえてるだろうけどこのままでいこう）はそこまで言ってお止める。

『スマン。一つ大事なことを言うのを忘れておった』

「は?」

『ここはぬしが暮らしていた世界ではない。謂わばパラレルワールド、ぬしらの言う“

ラブライブ!」に近しい世界じゃ』

「……は?」

爆弾と言つても差し支えないその情報は俺の脳みそをフリーズさせ、それが処理されると同時に、

「はあああああああああああつ?!」

また俺は叫んだ。

透き通るような青い海。

一帯に響く波の音。

そして潮の香り。

どれも東京では見ることも、聴くことも、感じることも出来ない。

でも――

わたしの求めていたその“音”は、聴こえない。

今日も今までと何も変わらないまま終えるんだと、その場を立ち去ろうとした時、

「?..なんだろう?」

波打ち際で何か光った。目を凝らしてもそれが何なのか分からないのは、ほとんど埋まっていたせいだ。

「メダル？」

拾い上げたそれは赤いメダルだった。

鳥の意匠が彫られたメダル。

「なんだか不思議な感じ……。ただのメダル……。だよね」

触れた途端、何かわたしに訴えてるような、そんな気がした。

「どこだっ！ おおおおおっ！！」

「っ!？」

不意にどこからか叫び声が聞こえて驚く。

今度は何なの？

声のした方を見ると、わたしと同じくらいの歳に見える男の子が一人でブツブツ喋っていた。まるで誰かと会話しているみたいに。

「はあああああああああああああっ!？」

また叫んだ。

本当に何なの？というか大丈夫？

なんだろう……。すごく関わりたくないのに、それと同じくらい気になっちゃう……。
「……の世界って！なんで!? やっぱリアホなの!？」

なんて言ってるんだろう? ここからじゃ聞こえないなあ……。

「なんでここにコアメダルバラまいちやっただのさー！」

コアメダル……今拾ったのってもしかして……。

鳥の赤いメダル。もしかしたら彼が探しているというのがこれかも。

「はあ……こうしているだけじゃ一歩も前に進めないか……。うん、ご丁寧にライドベ
ンダーまであるし、この辺りを探してみるか」

また一つ聞き慣れない言葉が出たと思うと、彼は銀色の何かを自販機に入れた。普通
なら飲み物なんかが出てくるはずだけど、その自販機は倒れて、バイクに変形した……。

「何なのあれ……」

言葉の通りに開いた口が塞がらない。

彼はそれに跨って、どこかに走り去ってしまった……。

「これ……どうしよう……」

ライドベンダーを走らせること十分ほど過ぎた。

平和だなあ……。メダルぶちまけられたことが嘘みたいは何もねえな。

『そうじゃなあ』

「元凶が何言ってやがる」

『わらわ女神じゃぞ!? 扱いがだんだん雑になってないか!?』

「まあまずは寝泊まりする所を探さないとな。……でも金がねえ」

無理矢理連れてこられたから財布に入ってる分しか持つてないし、銀行もこっちのやつは使えないだろう。仮に口座に預けてるのを合わせたとしても心許ないが。

『なんじゃ、そんなことか』

「そんなことつて、俺にとつちや充分問題ですから」

『ふっふっふっ……こうなることを見越して、既に手は打つてある』

せめてろくでもないことでありませぬように。

心の中でそう祈り、ロリ神様の指示通りライドベンダーを走らせた。

十千万。

着いた先で営まれていた旅館の名前だ。

そしてAqoursのリーダー高海千歌の実家でもあるのだが……

「ここでどうしろと？泊まるにも金が無いぞ」

『ふっふっふっ……実はぬしの名前で事前にバイトの面接の連絡を入れておいたんじゃない』

またこのロリ神は勝手なことを……

『住み込みで食事も付く。いいとは思わないか？』

「是非受けさせていただきます」

ここまでしてくれたらやるしかないよね？」

いやー、流石女神様ですわ。

面接の結果は合格だった……が、面接官をしてくれた若女将の高海志満さんの発言から新たな問題が発覚した。

「部屋はここね。誰も使っていないし、お客さんも入れてないから自由に使つてね」

「はい、ありがとうございます」

「それから浦の星学院にはうちの千歌ちゃんも通つてるから、道はすぐに覚えられるわ」
「え」

「それじゃあ」

そう言つて志満さんは行つてしまった。

「さて、話を聞こうかロリ神様？」

返事のないただの屍のようだ……。

「いや屍のようじゃやねーよ！おーいロリ女神！……ホントにいないのか。……しょうがない、今日はもうやることないしメダル探し再開するか……」

今日はなんか変だな、わたし……。

あの男の子のことすごく気になるし、これ返しそびれちゃうし……。

はあ……。

もう帰って休もうかな……。

「うわあああああつ！」

そう思った矢先にわたしの目の前に現れた限りなく生物に近い何か。

手に刃物を持って、いや、生えているそれ。

生き物で例えるならカマキリのよう。

「コアメダルを渡せ」

喋った……！というかコアメダルってやつぱり……

カマキリのようなものは少しづつ距離を縮めてくる。

『おいー！』

さつきとはまた違った声が聞こえた。

本当に何なのよ……。

『ヤツに俺のコアは絶対渡すな！』

聞こえたというよりは心……というか脳に直接話しかけられたような感じ……？

でもどつちにせよ、今は逃げなきやあれに襲われるっ！

来た道に戻るように向きを変えて走り出した。

「はあ……」

十千万を出てもうそこその時間が経過した。

が、めぼしい情報なんかは全くもって見つからなかった……。

聞き込みしても誰も知らぬ存ぜぬだし、ロリ神なら何か分かるかなと思って呼んでは見たものの、警察の人の職質されるし（一人で、しかもロリ神なんて叫んでたら当然かもだけど）。

……頼みの綱として最後まで取っておいたSNS。

現代社会において珍しい物が見つければ即拡散される可能性が高い、というかほぼ確実にされるだろう。

現在人脈の乏しいとかいうレベルじゃない俺にとって一番確実な手段だから、これだメなら見つけるのは無理だろう。

どうか！どうか見つかりますように！

キーワード、メダルで検索。

……びっくりするほど何もねえ。

いやまだだ！オーズ本編だとカザリが拡散されていた。

怪人、もしくは怪物で検索すればワンチャン……！

……

キタ——ッ!

出てきたのはグリード……ではなく、グリードがセルメダルを集める為に、人間の欲望を糧とし（例外はあるが）、使役する怪人ヤミー。

画像とともにアップされていた文章を読むと、

「えーつと……『女の子を追い回す変態怪人wwww』……」

なんだろう。ヤミーを生んだ奴が変態だったとか。

何にしたって早く見つけて女の子を助けなきゃ。

また狙ったようなタイミングで、ライドベンドーを発見。絶対ロリ神の仕業であることは確定として、今は件の女の子とヤミーだ。

「場所は……まだ遠くまで行っていないはず。これなら飛ばせば間に合う！」

再び俺はライドベンドーを走らせた。

逃げきれない。

現状がそうであるというだけじゃない。ヒトの本能がそう訴えている。

走って、隠れて、また走る。それを繰り返していくうちにわたしの体力はどんどん消費されていった。

それに対してあのカマキリお化けからは疲れを感じない。

そんな二人（？）が追いかけてこをしてもどちらが勝つかなんて、火を見るより明らかだった。

カマキリオ化けの目的はこのメダル。渡してしまえば、この恐怖からも解放されると思う。

「でも……やっぱりダメだよね……」

今は逃げ切る。それだけを考えよう。

でも——、

「そんな……」

まだこの辺りに詳しくないことがたたって、追いつめられてしまった。

目の前に広がる海。後ろからはカマキリオ化け。もう逃げ場がない。

「コアメダルを渡せ。そうすれば命はとらないでいてやる」

嘘。それが感じられない。多分これを渡せばあいつはわたしを殺すことはしないだろう。

じりじりと迫るカマキリオ化け。

メダルを握りしめて睨む。

カマキリオ化けは足を止めて構える。

この時、わたしは生まれて初めて「死」というものを意識した。

刃が振り上げられたと同時に目を閉じてしまう。そして次の瞬間には振り下ろされて……。

けれど、

「待あああてえええッ！」

その時が来ることは無かった。

そしてその代わりに、彼がやって来た。

欲望の王と赤い腕とアイス

パトカーに見つかれば普通に捕まるほどの速度でライドバンダーを走らせる。見つからないことを祈りながら。

『いやーすまんの、少し用が出来てな。席を外しておった』

「そうか。学校のこととはまた後で聞くとして、今ヤミーを探してるんだ。どこにいるか……」

『分かるぞ。誰かを追いかけてるようじゃが……不味いぞ。どうやら追われている者がコアメダルを持つているようじゃ』

マジか。つてことはグリードの差し金じゃねーか。

『もつとスピード上げんか！早くせんと、手遅れになるぞ！』

「これ以上は流石にやばいだろ」

『心配するな。女神の力で地上の警察には認知できないようにしておる』

「いや、そういう問題じゃ……」

『それいけー！』

ロリ神の掛け声に合わせてライドバンダーは自動で走行速度を上げた。

「おかしいだろおおおっ!!」

どこか遠くの世界で裁判にかけられ、貴族の権力行使による理不尽な判決を受けそうになっている冒険者のように俺はまた叫んだ。

それからほとんど時間はかからなかった。

「危機一髪つてところか」

女の子が一人とカマキリヤミーが一体。確かにこの絵面だけ見れば女の子と変態怪人だな……。

「悪いことは言わない。俺の邪魔をするな」

「そうはいかないな。その娘を守るのと、次いでにメダルも集めなきゃならないからな」
「何?」

それまで女の子の方に向けられていた体は俺の方に向けられる。

「邪魔をするのであれば、ただの人間でも容赦しないぞ」

「まさか丸腰でここまで来たと思ったのか?」

カマキリヤミーを軽く挑発し（乗ってはくれなかったが）、それを取り出す。

「!!よせ、使えばタダでは済まない!」

「ごめん、もう手遅れ」

ヤツの警告は既に遅く、俺はオーカテドラルを腰に当てた。次の瞬間にはベルトが出
現し、完全に装着された。

タカ・バツタのメダルを同時にセット、トラメダルを真ん中に装填して、バツクルを
傾けてオースキャナーでスキャンした。

「タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

歌が流れて俺の体はアーマーに覆われる。

赤・黄・緑。

三色のカラーが特徴的な基本フォーム、オーズタトバコンボへの変身が完了した。

『あああああつ！あのセリフ頼むの忘れたあああつ！』

……女の子とヤミーには聞こえていないものの、俺にはバツチり聞こえているので雰
囲気ぶち壊しだ。

「気を取り直して。いくぞー！」

カマキリヤミーに向かって走り出す。

殴る、殴る、殴る。先制攻撃は決まった。が、当然反撃が返つてこないわけじゃない。

カマでの連続攻撃がボディを斬りつける。

アーマーから火花が散って煙が上がる。

すかさず俺もそれに応えるように蹴りを加える。カマキリヤミーは吹っ飛んでセル

メダルが数枚零れ落ちる。

追撃するためにヤミーに迫る。

「甘く見てくれるなよ」

「何……っ!!」

深追いして反撃を食らう。

胸部にエネルギー刃の強斬撃。

Xの字に斬られて、今度は俺が飛ばされる。

『ぬし！メダルを変えるのじゃ！』

「……分かってるさ」

トラさん、ホント不遇過ぎるっ！ていうかトラクロー使ってねーし！

そう思いつつ、トラメダルをバックルから抜き取ってカマキリメダルをセット。

「目には目を。カマキリにはカマキリだ！」

「タカ！カマキリ！バツタ！」

亜種形態のタカキリバにチェンジ。

オーズの武装の一つであるカマキリソードで斬り返す。

バツタレッグの脚力も併せて回転ジャンプ斬り。

またカマキリヤミーからメダルが落ちる。今度はかなりの量だ。

ヤミーは膝をつき、攻撃が当たった箇所を押さえる。

『それ今じゃ!』

「だから分かってるって!」

感覚的に肩から腕へ、腕からカマキリソードへと力を込める。

再びバツタレッグで跳ね上がり、カマキリヤミーにX字の斬撃を叩き込む。

「セイヤー!!!」

攻撃は直撃。とどめの一撃となり、カマキリヤミーは爆散してメダルだけがそこに残った。

「ふう……イツテエ……」

変身を解いてみると結構傷が出来ていて、少量ではあるが流血もしていたが、

「良かった。なんともないみたいで」

女の子は無傷。本当に危機一髪だったようだ。

「俺、島村耀太です。怪しいもんじゃないから」

「……わ、わたし桜内梨子って言います。ありがとうございます、島村さん。……その大

丈夫ですか?」

「ああ、このくらいの傷なんて大した事ないって」

さつきまで怖い思いをしていただろうに。

俺の傷を案じてくれるなんて、どんだけ良い娘なんだ！

「本当に平気だから。それより、ヤミーに襲われてたつてことはメダルを持つてるんだよね？」

「は、はい……。さつきのカマキリみたいなの、ヤミーつて……」

「うーん……説明するのが難しいんだけど、一言で言うのであれば人の欲望の形……かな」

「欲望……」

「ひとまず今回君が狙われてしまったのは、君の持つメダルが原因なんだ。元々俺の知り合いの物だし、返してくれるとありがたいんだけど」

「分かりました。これはお返し……あれ」

俺の要求に応じ、桜内さんはメダルを取り出そうとしてくれたのだろう。しかしそこで何らかの異常があったようだ。

「無い……さつきまであったのに！」

「『え!?!』」

その反応はウソをつく時のような時の挙動ではなく、本当のようだ。ならばどこに？それは彼女の表情が物語っていた。

「恐る恐る後ろに振り返る。

さつきまでカマキリヤミーだったメダルたちが集まってその形を変えていった。

赤い鳥——。

桜内さんがそう言った。

しかしその直後に体が崩れ去り、右腕を残すのみとなった。

「ふん！ やつば一枚だけじゃ全然足りないか」

俺（とロリ神）はそいつの名前を知っていた。

「それにしても……まさかこんなところでオーズに会うなんてなあ……」

赤い腕——アंकは浮遊している。まるで獲物を定めた鳥のように。

「丁度いい」そういつてコイツは、

「これである程度動けるように……」

「おいバカ！ 今すぐその娘から離れろ！」

桜内さんに取り憑いた。

すぐに剥がそうとするが、

「ふおおおおお！ 全然取れねー！」

「この体はもうオレのもんだ」

「ふぎげんな！ とつとと離れろおおおおおつ！！」

どれだけ踏ん張ってもこの場では離れることはなかった。

十千万にて。

「えつと……」

分かる。桜内さんが何を言いたいのか。

気が付いたら会って間もない男の部屋にいるなんて、話だけ聞いたら誘拐と言われても仕方がない。

「本当にごめん！桜内さん！そこでアイス食べてる奴が桜内さんに取り憑いた所為で！」

めちやくちや警戒なされてる桜内さんに全力土下座。なおアंकはアイスを食べ続けてる模様（身体はロリ神がどつか持って、いや、連れてきた？）。

「え？取り憑い……え？ええええ！」

この後暫くカオスな状態が続いた。

「オーズ、グリード、ヤミー……そしてメダル……」

カオス空間が収まったのは、桜内さんがこれらに興味？みたいなものを持ち始めてからだ。

オーズやメダルに関しては知っている限り（と言っても前に小説やネットで得たもの

ばかりだけど)を彼女に教えた。

「グリードとヤミーって何が違うんですか?その話だと親と子みたいな関係なのかなって」

「ああ、それはね……」

「メダルだ」

桜内さんがその話題を振ると、アंकがアイスを食べながら食い付いてきた。

「俺たちグリードとヤミーは主にセルメダルで身体を構成している。だが決定的に違うものが一つある。コアメダルだ」

アंकはそう言っ自分のコアメダルを見せる。

「コア、核になるものが存在するかどうか。このアイスと同じだ」

「アイス?」

手に持っているうちの一本を俺の口に突っ込んで、棒だけ抜き取る。

「アイスそのものがセルメダル、この棒がコアメダルだ」

身近なものに置き換えての説明は、桜内さんにもかなり分かり易かったようだ。

「ヨータ、今のでアイスが無くなった」

「いや食いすぎだろ……」

「ははは……」

「まあ丁度いいや。桜内さんも送らなきゃならないし、そのついでに買ってきてやるよ」
「え。わたしは一人でも……」

「遠慮しないで、元々こうなったのも俺たちの所為なんだし……」

とまあこんな感じで、結局送るということになったが、偶然かはたまた
ロリ神うの差めし金いか、彼女の家は十千万の隣だった……。もう驚く気力もねえよ……。

「じゃあ、桜内さん。今日はこれで」

「はい。その……わたしのことは梨子でいいです」

「じゃあ俺の方も敬語はなしで」

向かい合って笑ってみたり。

うん、すつげえ青春してる気がする。

「じゃ、またね梨子ちゃん」

「うん」

これがすべての始まりだったということ、この時は誰も知る由もなかったのである。
る。

たった一人を除いては。

転校生sとスクールアイドルと原作崩壊

浦の星学院。

少子化等による生徒の入学数の減少に対策……という名目で女神の謎パワーにより数年前に共学化したという。

が、入学希望者は減り続ける一方で、廃校が濃厚となってきたらしい。

まあ……普通そうだよ。自ら進んで女の子だらけの所に行こうなんて、ハーレム厨でもなければ思わない。つか男子生徒一人しかいなかったって何よ。しかもその生徒も一年生つてことは、実質いなかったんじゃない！

職員室で話を聞いた後、そんなことを考えながら先生の後に続く形で教室へ向かう。ちなみにここに来るまでで、あったことはまた後ほどということにしておく。

「ここで少し待っていてね。先にホームルームを始めちゃうから」
「分かりました」

賑やかだった教室がほんの数秒で静かになった。

先生の「どうぞ」を合図に教室に入ると、また賑やかに……というかどよめく。

まあ……ですよね。

見渡す限り女子女子女子。男は一人もいなかった。女子ばかりのクラスにいきなり男子が入るなんてイベントありえないんじゃないか。

「はいはい。いきなりだから驚いちゃうのは分かるけど、まずは自己紹介ね」

「島村耀太です。両親の仕事の都合（ロリ神の捏造）で、今日から通うことになりました。突然男が入ってきて驚くかも知れませんが、この地域や学校についてまだ知らないことが沢山あるので、教えていただければ有難いです。一年間よろしくお願いします」

「それじゃあ島村くんの席だけど、あそこ、松浦さんの隣ね」

「はい」

松浦果南。俺がお世話になっていている高海家ところの末っ子、千歌ちゃんの幼馴染で、春休みの間に何度か会っているため初めましてではない。

知り合いが近くにいるのは心強い、そう思うと同時に俺はあることを思い出す。

これがアニメを正史とする世界線ならば、現時点で彼女は休学している。

今日までにあつた出来事（梨子ちゃんのピアノスランプ等）からその可能性が高いと推測していたが……。

やはりグリードやオーズ、そして俺という存在が影響してしまつてるのだろう。

そんなこんなで時間はあつという間に過ぎていった。

「今日は至る所で見えるなあ……」

「何してるの?」

一人でそう呟いたと思っていたら、いつの間にかいた果南ちゃんが、

「あれ」

「ああ。千歌と……」

「桜内梨子ちゃん」

「二人とも何してるの?」

「千歌ちゃんが梨子ちゃんをスクールアイドルに勧誘してるみたい。なかなか難航してるみたいけど」

「へえ……」

少し表情が曇ったのを見逃さなかった。

変わりつつあるこの世界のことだから、どんな事があつたのかは分からないが、それ以上勘繰るような発言は控えた。

「あ」と果南ちゃんは何かを思い出したようで俺に言った。

「桜内さんで思い出したんだけど、内浦で暴れ回ってた怪人って知ってる?」

……当事者過ぎる話題が来た。

「か、怪人? コスプレとかじゃなくて?」

「とんでもない! 車も壊したって見てた人が言ったんだよ! それも真つ二つに! 誰かを

追つてみたいで、追いかけられてた娘が桜内さんに似てたらしいんだ」

あの野郎、梨子ちゃん追い回しながらそんなことしてたのか。

「しかもね、それが一体や二体じゃなくて三体なんだって。カマキリみたいなのと、いろんな虫が混ざった感じのと、赤黄緑の信号機みたいなやつなんだって。最後の信号機はカマキリを倒してみたいだけだ」

はい、その信号機俺です。つかさりげなくウヴァのことも言つたつぽいな……。

「へ、へえ……そうなんだ……」

なんとという情報伝達速度……。あの時はそのおかげで何とかなつたけど、俺にしてみても十分厄介なものだな……。

「本当、世の中物騒だよね」

「ウン、ソウダネ」

果南ちゃんその言葉に物騒おそのれ一は棒読みを出来る限りこらえながら肯定するのだった。

とある日の十千万にて、

「……っていうわけで、いろんな子に話しかけたんだけど、メンバーは今のところ三人だけなんだよ」

「今さらつと私たちのことも頭数に数えたよね？」

千歌ちゃんによつて収集された果南ちゃん、そして旅館での仕事が休みの俺。

「スクールアイドルつてすつごく人気だし、可愛いし……、絶対やりたくなると思うんだけどなあ」

「まあ梨子ちゃんや果南ちゃんとはかく、俺男なんですけど」

「男の子だからスクールアイドル出来ないなんてきまりないでしょー？」

それは考えたことなかったな。アニメとか漫画とかで観てた頃は男なんて穂乃果ちゃんと真姫ちゃんのお父さんくらいしか出てこなかったし。ましてや男のスクールアイドルなんてなあ……。

「んー……そんな決まりは聞いたことないけど、需要はなさそうだな」

「えー、人気出ると思うけどなあ」

うん、ないね。絶対。

「その話は一旦置いておいて、どうしてスクールアイドルなの？」

果南ちゃんの質問は少しの間を置かれて答えられた。

「前に東京に行ったときにね、わたし出会ったの。わたしと同じくらいの子たちがすつごく綺麗でかわいくて。特に？ s はね、キラキラして輝いてた……」

その輝きを目にして、一瞬のうちに心を奪われた。そして自分も同じように輝きた

い、そう思ったのだ。

「なるほどね。でもそれならどうして梨子ちゃんを……つて聞くまでもないよね……」
「だって？sの、音ノ木坂から来たんだよ！美人さんだし！スタイルも良いし！絶対ス
クールアイドルに向いてる！間違いない！」

ふんっ！という鼻息とともに胸を張る。

いやそこ千歌ちゃんが胸を張るところじゃなくね？

「それに——梨子ちゃんも、もちろん耀太くんも、もう内浦の仲間になったんだもん。子供の少ない内浦で、一旦仲間になったらどんなことでも強制参加。じゃないとドツジボールも出来ないってこと、きつとわかってもらえるところなんだ——」

そう語る彼女の、高海千歌の表情は、瞳は青空のように澄んでいて、海のように輝いていた——。

二人の少女と想いと繋ぐもの

最近、わたしには一つ悩みが出来ました。

内浦に引越してきて、東京とは全く違った環境に置かれて、それでも周りの人たちはとても親切で、友達も出来た。

大変なことに巻き込まれてしまったけど、それも含めて今は前より少し楽しいと思えるようになった。

そんなわたしの悩み。それは……

「梨子ちゃん!」

「ごめんなさい!」

友達の千歌ちゃんのスクールアイドルの勧誘です。

浦の星に来てから毎日毎日毎日!いつでも、どこにいても千歌ちゃんがひよっこり現れて「一緒にスクールアイドルやろう!」って……。

誘ってくれるのは素直に嬉しい。だけどわたしは……。

「りーこちゃん!おはよう!」

「お、おはよう、千歌ちゃん……!」

こんな調子でまた今日も始まりませ……。

今日もまた千歌ちゃんはスクールアイドルの勧誘に勤しんでいる。だけど暫定メンバーは千歌ちゃんと果南ちゃんと俺の三人。果南ちゃんに関しては「もう少し考えさせて」とのことなので本当に仮の状態だ。

「さてと、これからどうしたもんかね」

Aqoursにはあまり干渉せずに守ることに徹しようと思っただが、千歌ちゃんの言葉を聞いてしまい、そもいかなくなってしまったらしい。

一人で良い案を考えるために早く来たんだけど……。

「あれ？ 耀太くん？」

嘆息したところで後ろから声をかけられる。渡辺曜、千歌ちゃんのもう一人の幼馴染で水泳部員であるはずだけど……。

「ああ、おはよう曜ちゃん」

「おはようソーロー！」

ふう……やっぱ曜ちゃんかわええわ……。

モニター越しで観てた時より断然可愛いっ……じゃなくて！ やばいやばい。顔に出る前に平常心に戻らなければ……。

「今日は千歌ちゃんたちと一緒にじゃないんだね」

「少し考え事をね。一人で考える時間をなるべく多くとりたいたいから」

「それって千歌ちゃんと関係してたり？」

「Exactly」

流石は幼馴染、よく分かっていらっしやる。

「スクールアイドル部(仮)のメンバーがなかなか集まらなくてね。俺も何かできることはないかなーって」

「そっかあ。わたしも何か手伝ってあげたいけど、水泳部があるし……。あ！朝練に遅刻しちゃうー！ごめんね！」

「こっちこそごめ……」「よーい……ドンー」うつそお……」

陸上部も真つ青の走りを見せて、彼女は去っていった。

結局何も思い浮かばないまま、生徒たちが登校し始めた。

「だめだー！解決策が見えてこなーい！」

「千歌のお守り大変そうだね」

他人事のように果南ちゃんがそう言う。

「ああ、大変だよ。あんな本気の瞳を見せられちゃったらさ」

「本気かあ。……で、耀太はどうして頭下げてんの？」

「いや、かなり考えたけどもうこれしかないかなって」

「それってつまり」

「千歌ちゃんの力になって欲しい」

しばらくの沈黙。

過去にどんな事があつたのか俺には分からない。でもこれが果南ちゃんにとって迷惑以外の何物でもないということは俺でも分かる。

でも感じてしまつたんだ。

——可能性を——

——光り輝く彼女たちの未来を——
ビジョン

「どうしてそこまでしようとするの？まだ出会つたばかりで、何も知らない千歌の為に」
険しい表情とトーンで迫られる。

「見てみたい。千歌ちゃんたちが見る世界を、俺も。これは誰の為にでもない俺の為にやるんだ」

「耀太の為？」

「そう。千歌ちゃんと手を繋いで、誰に手を伸ばして、誰と繋がって、誰と輝くのか、知りたくてしようがないんだよ！」

頭に浮かんでくる言葉をどんなにうまく繋ぎ合わせても、それしか出てこない。

「それに確かに今は何も知らない。けど、これから知っていけばいいと思う。だって俺ももう……」

「内浦の仲間だもんね」

「そういうこと」

果南ちゃんの表情が和らいでいく。勧誘成功か？

「分かった。耀太と耀太の言う千歌の本気に免じて、わたしも参加する」

「まじで!?」「ただし!」え」

「その“本気”が口先だけじゃないか、確かめさせてもらおうよ!」

「望むところさ!」

この約束のちに大変な事態を招くのはもう少しだけ先のお話。

「スクールアイドルかあ……」

千歌ちゃんと東京に行ったあの日、千歌ちゃんが魅入っていた女の子たち。

とてもキラキラしていて、わたしと同じ高校生だっていうことを疑った。

果南ちゃんや梨子ちゃんを誘ってるって言ってたっけ。きつと可愛いんだろうなあ

……。

そう思つて少し想像してみる、可愛い衣装に身を包んで、ステージに立つ千歌ちゃん

や果南ちゃん、そしてもののついでに自分を……。

瞬間、脳に電撃が走った。

これまで数多の制服を見て、それでも今までこんなこと無かった。

アイドルの衣装を着ること自体、恥ずかしくないわけじゃないけど……。

でも、それでも、ほんの一瞬だけでも「やってみたい」と思ってしまった。

それから何より、幼馴染の、千歌ちゃんのやりたいこと。この渡辺曜がやらない訳にはいかない！

思い立ったが吉日！早く千歌ちゃんに……、

「あれ？千歌ちゃんは？」

「千歌ならまた梨子ちゃんを追いかけて行っちゃったよー」

「やっぱりそうだよーね。」

「ありがとう、探してみよう」

そうは言ったものの、どこから探したものか。

千歌ちゃんだけならまだしも、梨子ちゃんを追いかけたなら、梨子ちゃんが行きそうなところを探さないと。

ああ、でも梨子ちゃんの行きそうところってどこだろう？皆目検討がつかないよ……。

そうしていると前から耀太くんが来て、

「千歌ちゃん見なかった(つって教室に)……」
被った。

「もしかして耀太くん(曜ちゃん)も……?」

耀太くんも千歌ちゃんに用があるみたい。でも教室にはもういないことと梨子ちゃんを追いかけて行ってしまったことを話すと、

「それなら音楽室に行けばいるかもしれないな」

「音楽室?」

「千歌ちゃんに用があるんでしょ?なら一緒に行こう」

「うん」

音楽室に近づくにつれてピアノの音が聞こえ始めて、どんどん大きくなっていった。

その“音”はとても優しく、まるで海の中にいるみたい——。

音楽室に入ったけれど梨子ちゃんも千歌ちゃんもわたしたちに気付いてない。

邪魔するのも憚はばられる、耀太くんもそう思ったのか演奏が終わるまで待つことにした。

「あれ!?!耀太くん!?!曜ちゃんも……」

終わると同時に思わず拍手してしまい、二人を驚かせちゃったみたい。

「ごめんね梨子ちゃん、立ち聞きしちゃった」

「梨子ちゃんがこんなにピアノが上手なんて知らなかったよ!」

「そんなことないよ。それに大勢を前にしちゃうと……」

俯く梨子ちゃん。触れられたくない「ナニカ」に触れてしまった気がして「ごめん」と謝る。

しばらく気まずい空気が流れるも、それを変えるためか耀太くんが「そうだ!」口を開いた。

「スクールアイドルのことなんだけど、果南ちゃんがね「参加してくれるって!?!」近い近い……」

千歌ちゃんがグツと顔を近づけると耀太くんはたじろぐ。まあ、本当に近過ぎて一歩間違ったら……。

「まあ、そんなとこかな。千歌ちゃんの「本気」を見せてくれたらっていう条件付きでだけ」

「やったー!これでまた一歩前進だね!」

やっぱり果南ちゃんもなんだね。よし、わたしも!

「千歌ちゃん、わたしも千歌ちゃんと一緒にスクールアイドルやりたい!」

「本当、曜ちゃん!?!」

「うんー」

千歌ちゃんは文字通り、飛ぶように喜んでくれた。

耀太くんが、そして曜ちゃんが千歌ちゃんにスクールアイドルのことで、前向きな答えを示した。でもやっぱりわたしは……。

「梨子ちゃんはどうする？」

耀太くんが優しく語りかけてくる。

「わたしは……」

わたしが内浦に来たのは、失ってしまったものあるいは得られなかったものを見つける為。

でも結局何も得られないまま、多分ピアノもまだ十分には弾けない。

そんなわたしに……

「出来るかな？」

気づけば熱が目から溢れて頬を伝っていた。

「わたし、千歌ちゃんが言ってくれような子じゃ全然ないし、ピアノだって千歌ちゃんたちの前だけでしか弾けないし、スクールアイドルのことだって全然知らないし——」
不意にぬくもりに包まれた。優しく、心が安らぐような温かさに。

「千歌ちゃん……?」

「大丈夫だよ、梨子ちゃんなら。今がダメでもきつとできるようになる。梨子ちゃんがスクールアイドルはごめんなさいって言ったとしてもわたしは梨子ちゃんの力になるから——」

涙が止まらなくなってしまうた。やっぱり千歌ちゃんには敵わない。

「千歌ちゃん……」

「梨子ちゃん、わたしと一緒にスクールアイドルやってくれますか?」

「はい——」

試練とまだない名前と新たな力

静岡、某日某所。

「ウヴァはまたセルメダル集めに行ったの？」

ネコ科動物を模した怪人と、

「ええ。少なくとも二枚、自分のメダルがオーズに使われているんですもの。早く取り返すために力が欲しいはずだわ」

水棲生物を模した怪人がもう一体をあやししながら、そう言葉を交わすのは、人目のつかない、何者も近づくとくことがない場所。

「ふーん」

「ここまでの会話を聞いて分かる者なら、彼らが何者なのか、既に察しがつく者もいるだろう。」

「それじゃあ、次はボクが行こうかな？」

ネコの怪人、カザリが動く。

「待って」

「？」

水棲生物の怪人のメズールがそれを止めると、もう一人のサイの角と象の鼻を彷彿とさせる顔のガメルが首を傾げる。

「その前にそこにいる人間からセルメダルを頂いていきましよう」

「ひっ、ひいっ!?!」

メズールが攻撃を飛ばすと、遮蔽物が吹き飛んで二人の人間が悲鳴を上げる。

ここは誰も寄り付かない。ただし、よっほどな物好きでない者に限る。

元々、いわゆる心霊スポットと呼ばれていた所に、グリードカレが棲みつき、噂や都市伝説として謳われていたものが本物になった。それを確かめようとする命知らずが寄り付くようになった。

逃げ惑う人間に、二体のグリードはそれぞれ一枚ずつセルメダルを挿入投げ入れした。

「うわああああつ!?!」

「スキヤニングチャージ!!」

「はああああ……セイヤー!!」

ダメージを与えて動けなくなったカプトヤミーにタトバキックを叩き込み、セルメダルへ還元した。

「だいぶセルも集まってきたなあ」

「そりゃあ、あれからも結構倒してるしね」

初めてカマキリヤミーを倒し、アंकと出会ってから数週間が経過した。その時以降、ヤミーが頻繁に出現するようになり、世間でも奴らの存在が認知されるようになってきた。

「ただなあ……」

セルメダルが集まってアंक的には嬉しいづくめかもしれないが、俺はそうじゃない。い。

俺には学校、そして十千万でのバイトがある。戦闘を重ねるごとに戦いには慣れたが、学生であるべきこと、そして高海家への奉公が完全に疎かになっているのだ。

「やっべえー早く戻らないとー」

変身を解いて時計を見ると、針は既に昼休み終了五分前を指していた……。

「す、すいません……！ちよつと昼寝してたら寝過ぎました……」

「またですか……。いくら成績が良いからと言っても遅刻のし過ぎは好ましくありませんよ」

「はい……」

学校に戻ると案の定授業は始まっていて、ヤミーが出た時はほとんどまともに受けられない。

最近ではヤミーや俺の目撃者も増えて、学校の、それもクラスの何人かには俺のいなくなるタイミングとオーズの出現タイミングから、俺がオーズであることが疑われ始めている。

バレてしまったら、その時はロリ神様が何とかしてくれると言っただけでこつちに関してはずいぶん問題は無いだろう。

本当に厄介なのはここからだ。

「部活が設立出来ない？」

「うん、生徒会長に設立許可を届けに出ただけど……」

曜ちゃんがそこまで言うと、

『わたくしが生徒会長でいる以上、スクールアイドル部は認めませんわ！』だって……」

千歌ちゃんが会長の、黒澤ダイヤの真似をしてみせた。

俺がいない間にそんな事があつたのか……。

「三回行けばもしかして……」

「三顧の礼じゃあるまいし、無理じゃないかな……」

「それじゃああとは……」

「「うーん……」」

三人ともほぼお手上げ状態みたいだ。

残った方法といえば……。

「……一つだけ」

「え？」

「一つだけ方法がないでもないんだけど……」

「それ本当!？」

毎度のことながら千歌ちゃんの食いつきがすげえ。

おかげで少しキョドってしまった。

「あ、ああ……それなんだけど……」

ところ変わって理事長室前。

「えっと……もしかして理事長に直談判？」

「That's right」

「いやなにその時々英語で答えるの」

「何となく？」

「なんで疑問系……」

ツツコミに回っている曜ちゃん。やっぱり可愛い。もう少し堪能しておきたいけど、見つめ過ぎると変態だと思われかねないので、先に進めることにした。

ドアをノックして、

「失礼します」

部屋には理事長が仕事をするための机と空席の椅子。

「あれ？誰もいない……？」

「ちよつと早すぎたか」

「え？それつてどういうこと？」

「すぐに分かるよ」

そう言うのと、「彼女」はすぐにここにやって来た。

「ソーリー、少し遅れちゃったわ」

「こつちこそ悪いね、急に呼んだりして」

「この子たちが件の……」

「スクールアイドルの卵つてところかな？」

千歌ちゃんたちを品定めするように見る彼女。

そしていきなり現れた彼女に戸惑いを隠せていない様子の千歌ちゃんたち。

「三人ともベリーキュート！こんな子たちを侍らせるなんてやるわね、耀太！」

「誤解を招くような言い方やめて！」

やめて！ホントやめて！約二名からの視線が痛いから！

「こほん……えー、紹介するよ。同じクラスの……」

「小原鞠莉よ。マリーって呼んでね」

冷たい視線はなくなつたが、やっぱり三人とも「は？」状態だった。まあ、ぶつちやけ普通のリアクションだけど。

「ねえ、耀太くん理事長は？」

聞いてきたのは梨子ちゃん。

「わたしはここにいますよ」

「えつと、鞠莉さんは生徒ですよね？」

「あのね、梨子ちゃん。鞠莉ちゃんは生徒だけど理事長でもあるんだよ」

「……………え!?!」

うん、普通そうだよ。

「言いたいことはわかるよ。けどそれだと話が進まないから、まずはそつちを解決してからで」

「う、うん……」

まずはスクールアイドル部の問題を解決しなくてはいけないので、鞠莉ちゃんについてはまた後でということにした。

「なるほどねえ。人数が足りなくて設立が出来ないだけじゃなくて、ダイヤが」

やれやれと言いたそうな表情カオをする鞠莉ちゃん。そして、

「分かったわ。理事長権限でスクールアイドル部の設立を許可しましょう！」
「本当ですか!？」

その発言に「それって職権乱用なんじゃ」というツツコミが飛んだ……かと思われたが。

「ただし!ここでライブを開いて、会場を満員にすること!それが出来なければ直ちに解散してもらいます」

天使のような笑顔で悪魔のようなことを言い放ったのだった。

会場に選ばれたのは体育館。学校の体育館であるため、本物のライブ会場には見劣りしてしまいが……。

「ここを満員……」

「やめる?」

「ううん!やるよ!」

「オーケイ。それではライブを行うということだ」

ライブの承認を受けた鞠莉ちゃんはそのまま戻って言ってしまった。

「ねえ、一つだけ聞いていい?」

「どうしたの梨子ちゃん?」

「この体育館を満員にするのにあと何人必要?」

「えつとねー……あれ？」

梨子ちゃんの言葉により、千歌ちゃんはその体育館を満員にするために必要なことに気づき、現在。

現在、俺たちは沼津に来ているのだった。

「チラシ配りかあ。確かにこれなら人を集められるかも！」

「はい、質問良いですか、千歌先生？」

「何かな、耀太くん？」

「どうしてアंकまでここにいますか!？」

「知るか！そんなこと俺が聞きたい！」

「だって人数は多いほうがいいし。それに協力してくれれば一つ三百円のアイスを買ってあげるって約束したしね」

「くっ……！」

わあお。もうアंकの扱いに慣れ始めていらっしやる。

「まあまあ、それじゃあ行こっか！」

こうしてライブの宣伝チラシ配りが始まった。

ちなみにチラシを配っている時、曜ちゃんが結構手際良かったり、千歌ちゃんがそれ

に対抗したり、梨子ちゃんがポスターに向かったり、俺がタカカンドロイドを使って、アंकがセルメダルを無駄遣いするなどキレたり、いろいろあった。

「よろしくお願ひしまーす！」

チラシを配り始めてから一時間ほど経過した。

作業はとてども順調でこれなら、と思い始めた時だ。

「ヨータ」

「なんだよ、アंक。言っとくけど自分の分は自分で配れよ。俺の分だってまだこんな
に……」

「ヤミーだ、行くぞ」

「は？」

マジで、は？

「おいアंक待てよ！」

「あれだ」

「嘘だろ……」

目の前にあつたのはスクールアイドルショップ。そしてそこにいたのは一人の男と、その男から上半身だけを現してグッズを貪っている白ヤミーだった。

「アंक、メダル」

「は？バカかお前。あいつはまだ成長する。それまで待つ」

「そういうと思ったよ」

おもむろにドライバーとアंकからくすねておいたコアメダルを三枚取り出した。

「お前!」

「生憎ただの馬鹿じゃないんでねっ!」

取り込むのに夢中になっているヤミーに気付かれないように、しかし急いで近づくと、

「変身!」

「タカ!トラ!バツタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!」

「はーなーれーろーっ!!」

白ヤミーに掴みかかって、先のタカカンドロイドにグッズを持ってもらい、剥がそう

とした。が、

「ツ!?うお!」

ナニカが高速で向かってきて、一撃浴びせられる。

「困るんだよね、ボクのヤミーに手を出さないでもらえるかな」

転がる俺に向かってそう投げかけたのは、ネコ科のグリード、カザリだった。

「勝手な真似しやがって。だからこんな目に遭うんだ」

「やあ、久しぶりだね。アंक」

キレ気味なアंकにカザリが話しかける。

「カザリか。そう言えばお前のヤミーはそんなだったな」

「今日はボクのコアメダルを返しにもらいに来たよ。素直に渡してくれればアंक、キミのことは見逃してあげるよ」

「はっ！それは出来ないなあ。コアメダルとこいつは俺のコアを探すのに必要なんでなあ」

「そう、交渉決裂だね。キミもオーズもここで消す」

カザリの攻撃が振りかざされる。

両手のトラクローを展開しそれを防ぐ。が、

「なんて重さだ……！ヤミーとはまるで比べ物にならない……！」

「当たり前だよ。完全体にならなかつたって、今のキミを倒すくらいボクにはどうつてことない」

空いているもう片方の腕が胸を直撃する。

「がはっ………！」

思い切り吹き飛ばされ、胸部が点滅する。

「ヨーター！コアをこいつに変えろ！」

「ハアハア………」

アंकから受け取ったカマキリコアとトラコアを入れ替えて再度スキャン。

「タカ！カマキリ！バッタ！」

亜種形態タカキリバにフォームチェンジしてカマキリソードを展開、反撃を仕掛ける。

ヒット！ヒット！ヒット！攻撃を喰らいながらも、確実に当たっていく。

「甘いよ、オーズ」

再び吹き飛ばされてカマキリも使用不可能になってしまい、変身が強制的に解除される。

「はは……これはやばいな……」

「これで終わりだよ」

トドメの一撃が来る！身に迫る死を感じた。が、その攻撃はいつまでたっても来なかった。

無人で走ってきたライドベンダーが俺とカザリの間に入ろうとし、カザリを弾き飛ばした。

「これ……もしかして……」

ライドベンダーにはラッピングされた直方体が乗せられていた。

間違いない。ロリ女神の仕業だ。

箱を開けるとそこにはメダジャリバー、セルメダル三枚、そして二枚目のトラメダルだ。

「っ!?ボクのコアメダル……!」

人遣い荒いなあのロリ女神……。でも今はありがてえ!

「タカ!トラ!バツター!タ・ト・バ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!」

再度タトバコンポに変身。メダジャリバーにセルメダルを三枚装填する。

カザリの攻撃を今度はメダジャリバーで受け流す。

俺は疲労のおかげで力が抜け、もう一枚の自分のメダルが現れたことによる焦りで無駄に力の入ったカザリ。おかげでカザリの攻撃はするりと交わすことが出来た。

カザリの背中にメダジャリバーを振り下ろす。当然これだけではダメージは通らない。しかし、

「トリプル!スキヤニングチャージ!!」

ゼロ距離でオーズバツシュ!

建物・地面ごとぶった斬り、カザリ以外はすべて元に戻る。

「うわあああああっ!?!」

ダメージを受け過ぎたカザリからメダルが二枚弾け飛ぶ。

アंकはそれを見逃さなかった。

「はあ……はあ……ボクのメダル、キミたちに預けておくよ……」

一度に二枚のメダルを失い、カザリは退散して行つた。まさに二兎追うものは一兎も得ず、かな。

「カザリ相手にここまでやるとはなあ」

「メダルは……とられな……」

俺の意識はここで途絶えた。

その後、アंकが俺を運んでくれて、その間にロリ女神が傷の治癒をしてくれたように、痛みは完全に引いていた。異常な回復速度にアंकは少し怪しんだが、千歌ちゃんの奢りの高いアイスのおかげですぐに興味を失つたようだ。

「で、一体どうしたの？」

カザリとの戦いから約一時間半。結局ヤミーの行方はわからなくなつて、チラシ配りも既に終わつていた。俺とアंकの分はタカカンドロイドたちが配つたらしい。

「それがね、チラシ配りの途中でルビィちゃんにあつてね……」

千歌ちゃんから説明されたこと、まあ早い話がグループ名を決めようということだ。ルビィちゃんのこととはまあ、知っている。黒澤ルビィ、ダイヤさんの妹だ。

そのルビィちゃんにグループ名を聞かれたらしい。

で、内浦のスクールアイドルということで海に因んだ名前にしようと、沼津駅の方が

ら戻ってきたのだ。

確かに土地や地域に縁のある名前にしようと思っただらそこに行くのが一番かまだけど……今日の俺には少々酷だった。痛みは取れても疲労は取れなかったからな……。

「それでいい案とかあるの？」

「……………」

「ないんだ……。じゃあまず言い出しつぺの千歌ちゃん！」

「えーつと……浦の屋スクールガールズ、とか？」

「まんまじゃない……」

「えー、じゃあ梨子ちゃんは？」

「ええ!? うーん……わたしたち海で出会ったから、スリーマーメイド……なんて」

「それじゃあ果南ちゃんが入ったあとは？」

「……………」

「完全に失念してたみたいだね。じゃあ曜ちゃんは何かある？」

「制服少女隊！」

「なんか違う気がする」

あーだーだとして論争する三人。そして漏れなく俺もターゲットに。

「じゃあ、次耀太くん！」

「へ？お、俺か。そ、そうだな……」

「何これカザリと戦った時より苦しいんですけど、俺の案ってことになっちゃダメな気がするというか絶対ダメだし……」

「頭を抱えて砂浜を見つめる。すると、

「？耀太くん？」

「何かうつすらと線があるのが分かった。そうか！これだ！

「俺の行動を不思議に思ったのであろう曜ちゃんか、

「耀太くん、何してるの？」

「文字をなぞってるの。消えそうだけど、なんだかい名前になりそうな気がして」

「浮かび上がってきた言葉。やつぱり。

「Aq……ours?アキユア？」

「Aqoursじゃない？」

「Aqours——うん、これだ！」

「——わたしたちは、Aqours!!——

「千歌ちゃんの声が海にこだまする。

「こうしてスクールアイドル、Aqoursが誕生した。

「しかし、これからの未来をまだ誰も知らなかった。

A q o u r s のファーストライブに、黒い欲望の影が忍び寄っていたことを。

ファーストライブと二人目のライダーと最強コンボ

浦の星学院の新生スクールアイドル、Aqours。

そのファーストライブの宣伝のために、今日一度十千万に集まってから活動を始めることになった。

「まさかこんなに早くライブすることになるなんて……」

「いつかは絶対やるんだし、早いうちに人前に出るのに慣れるのに丁度いいんじゃない？」
「いつそ梨子ちゃんをセンターに……」

曜ちゃんの言葉に梨子ちゃんは一気に青くなって首をブンブンと横に振る。

「冗談だよ」

「そんな心臓に悪い冗談は言わないで！」

「まあまあ。梨子ちゃんにはいざれワンマンライブをやってもらおうとして……」
「耀太くんも便乗しないっ!!」

今度は顔を真っ赤にして叫ばれた。

「しっかりと宣伝して、たくさんの人に来てもらわないと」

「そうだね」

「よーし！頑張ろうー!!」

今日はリハーサル。

土曜日に開かれるライブのため千歌ちゃん、梨子ちゃん、曜ちゃんは町内放送、俺とアंकはよいつむトリオと一緒にリハの準備と昨日に引き続きチラシ配りだ。

アंकは文句こそ言ったものの、また高いアイスを引き合いに出されて渋々と引き受けた。ちなみに鞠莉ちゃんに理事長権限を発動してもらい、ちゃんと入校許可証ももらった。

「ありがとうね、こっちの仕事手伝ってもらっちゃって」

「いいえ。千歌のやりたいことをサポートするのはわたしたちのやるべきことだと思ってるんで。先輩こそ千歌に振り回されたりしてませんか？」

「思いつきりね。俺はともかくアंकまで手駒にするとは思わなかったけど」

正直これは一番びつくりです。

「勘違いするな！俺はアイツにアイスを奢らせるための貸しを作ってるだけだ！」

「はいはい。そういうことにしといてやるよ」

アंकは舌打ちして作業へと戻っていく。

「音響の方はどう？」

「バッチリですよ先輩！」

よいつむトリオの他にももう一人。一年生の宮沢慎司。みやざわしんじ

「宮沢もありがとう。全然関係ないのに手伝いに来てくれて」

「困った時はお互い様。こういう時は助け合いですから。それに先輩とは入学した時から長い付き合いじゃないですか」

「よし、次は……」

どこかで聞いたことあるようなセリフだと思いつつ、次の指示を出そうとすると、

『こんにちは！浦の星学院のスクールアイドル、Aqoursです！』

『待つて！でもまだ学校から正式な承認もらってないんじゃない？』

『じゃあ、浦の星学院非公認アイドルAqoursです！』

これには笑いを禁じ得ない。

『今度の土曜日、十四時から浦の星学院の体育館でライブ……』

『非公認って言うのはちよつと……』

『じゃあなんて言ったらいいのーっ!!』

そして千歌ちゃんの叫びが町内に響き渡った。

ライブ当日、生憎の雨。

ただどライブは室内、よほどのことさえなければ雨天決行。

「ねえ、このスカート短すぎない？」

「そんなことないよ。梨子ちゃん似合ってる！」

「本当？」

「本当だよ！ね、曜ちゃん？」

「うん！梨子ちゃんも千歌ちゃんも、二人ともよく似合ってるよ」

「それを言ったら曜ちゃんだって」

「これから本番だというのに、三人はいつものように変わらないやりとり。表に出して
いないだけで、きつと相当緊張や不安があるはずだ。それをバックアップしなければ。

「そろそろ時間だね」

「緊張するな……」

「大丈夫。梨子ちゃんたちならきつと成功させられる。だから思いっきり楽しんでくれ
ばいいよ」

「楽しむ……」

「そうだよ梨子ちゃん！」

完全にはいかないが、梨子ちゃんの不安も和らいだようだ。

「さてと、俺とアंकは次の仕事だ」

「おいチカ！アイス一年分忘れんなよ！」

「分かつ……えええええ!?!」

鬼かこいつは。

ライブ開始まであと五分。駐車スペースに車は一台もない。

「なあアंक、この間のヤミー……」

「ああ。まだ成長してる。これで仕上げって感じか」

少し前に倒し損ねたヤミー。スクールアイドルシヨップを次々と襲っていて、目撃者は後を絶たない。駆け出しとはいえ、スクールアイドルと銘打っているA_彼q_女o_たu_ちr_ちsはいい餌になってしまっているのだ。

「俺はライブを守る。お前はセルメダルがたんまり手に入る。ウインウインってことね」

「そういうことだ」

利用する形になってしまったことはいつか必ず謝ろう。

そうこうしていると、車が一台、二台とまばらにはあるが敷地内に入ってきた。

「よし、駐車場の整理だな」

駐車場に入ってくる車を誘導していると、

クラクションが鳴り出した。それも一度だけでなく何度も。

それが鳴らされた方を見ると、暴走車が入ってきた。

その車は駐車場に停めずに、体育館の方へ向かっていく。

「アंक、メダル！」

「きっちり稼いでこい！」

「了解！」

「タカ！トラ！チーター！」

オーズ、タカトラーターに変身し、暴走車の前を強引に止めた。

「やっぱりの時の……」

「ヤミーの親か」

スクールアイドルシヨップにいた男性。ヤミーに寄生されているせいか、前より肥満気味になっている。

「たす……けて……もう……これ以上は……」

降りてきた男性は助けを訴えるが、最後まで言い切ることなくシヤムネコヤミーに取り込まれてしまった。

「待っててください！今助けに……」

「きゃあああああつ?!」

「え……」

ヤミーに向かおうとした瞬間、背後から悲鳴。

ピラニアヤミーの群れが空を覆い尽くしていた。

「ちっ……面倒なことになったなあ……」

「どうすりゃいいんだ……」

先輩たちのライブが始まってから少し経った頃、観客は十数人。体育館とはいえ満員にするにはまだまだ足りないな。

それでも歌い続ける先輩たちにはかつての彼女たちに通ずるものがあつた。

島村先輩や俺の「介入」がいけない方向に進みつつあるのか、それとも……
そう思考した途端視界がいきなり真っ暗になった。

どこかに雷が落ちた……いや、そんなもの今日の予報にはなかつたし、遠くで鳴っている音すら聞こえていなかった。

「俺ちよつと見てきます」

体育館を出るとその答えもすぐに出た。

空を覆う大量のヤミーだ。

「宮沢!?!」

そして既にオーズに変身している先輩とシャムネコヤミーが視界に入る。

「なるほど。これは想像以上にやばそうだ」

「早く逃げろ！ここは俺が……」

「俺も手伝いますよ、先輩」

「は？」

シヤムネコヤミーに向かって走り出し、ドライバーを腰に巻きメダルを挿入する。

「変身！」

レバーを回転させると巨大なカプセルが展開。

さらに複数のカプセルからバースの装備が全身に装着される。

バースへの変身が完了した。

「はあああ！うおりやああ！」

先輩が押さえていたシヤムネコヤミーに軽く一撃与える。

「お前それ……」

やつぱり驚いてるなあ。教えてなかったから当然か。

「あーこれですか？まあ後で説明します。コイツは俺が引き受けますから、これ使つてあつちの方を」

「……よく分かんないけど、ありがとう」

こつちに来てすぐに拾ったクワガタコアを渡すと、先輩はピラニアヤミーの方へ向かった。

「さてと、先輩が攻撃しなかったってことはまだ中に人がいるみたいだな。それならカプセルを閉じてメダルをもう一枚挿入、レバーを回転させる。」

「ドリルアーム」

「うおりやああああ!!」

右腕にドリルアームを装着してシャムネコヤミーの腹のメダルをかきだす。

どんどんメダルがどんどん溢れ、零れていく。

「たす……けて……」

「今助けますから！手を……!」

空いている左手を男の人へと伸ばす。あと少し、あと少しというところでメダルが邪魔になってしまう。

「うおおおおお!」

そして遂に……。

「掴んだ！せええのっ!」

思い切り反動をつけて男の人を引っ張り出した。

助け出した人は気絶してしまっただが、無事なようだ。

「これで遠慮なくっ!」

シャムネコヤミーを立たせてドリルアームで殴る！殴る！殴る！

攻撃がヒットする度にメダルが零れ落ちる。

「そろそろ決めようか！」

もう一度セルメダルを挿入し、セルバツシユモードを発動する。

「うおおおおおっ!!」

パワーをアップさせたドリルアームでヤミーを殴りつける。

セルメダルをどンドン削いで！削いで！貫く！

ヤミーの体をドリルアームが貫通。ヤミーは爆散してセルメダルを散らした。

「あつちもそろそろ……」

状況を整理しよう。シャムネコヤミーが現れたと思ったらピラニアヤミーまで現れて、どう打破しようか考えていたら宮沢がやってきてバースに変身して、コアメダルを渡されて……。

「とにかく細かいことは後回し。これがあればアレを……!」

宮沢から渡されたクワガタコアメダルに目線を落とす、再び顔を上げる。

「アंक！カマキリとバツタ貸して！」

「何する気だ？」

「何って、あの数を倒すにはコンボしかないでしょ！」

「お前、正気か？」

「正気だよ。やんなきゃ、千歌ちゃんたちのライブが中止になっちゃうー！」

「ふん！好きにしろ、どうなっても知らないからな」

渋りながらもアंकはカマキリとバツタのコアメダルを出してくれた。

バツクルを戻し、メダルを抜き取る。新たにクワガタ、カマキリ、バツタのコアメダルを装填。バツクルを再度傾けてスキャンした。

「クワガタ！カマキリ！バツタ！ガータ・ガタ・ガタキリッパ！ガタキリバ!!」

翼を広げた鳥の意匠だった頭部はクワガタの顎を模した角が伸び、緑色だった複眼は橙色に。

頭部から脚にかけて緑色で統一された。

クワガタ、カマキリ、バツタ。

オーズ、ガタキリバコンボが誕生した。

ピラニアヤミーに襲われている人たちを助けるために走り出す。その数を増やし、ヤミーを払いながら。

「早く逃げてくたさいー！」

五十人に分身した俺はヤミーを斬って斬って斬りまくる。

何体が零れても、別の俺がそれ以上通さない。

「やつぱり狙いは千歌ちゃんたちか」

このヤミーもスクールアイドルのファンから生まれたヤミー。同じ欲望なのに種類が違うだけでこんなに面倒くさいなんて……。

かなりの数のヤミーを落としたが、

「そろそろ体力の限界が……」

ヤミーの方もこれ以上は数を減らすまいと考えたのか、集合して巨大なピラニアヤミーとなる。

『スキヤニングチャージ!!』

『セイヤーーツ!!』

ピラニアヤミーと総数五十のスキヤニングチャージが激突。ガタキリバキツクを叩き込み、さらに内部に侵入して斬り裂いた。

大量にいたヤミーを全て殲滅し、宮沢の方も無事助けられたみたいだ……。

強制的に変身が解除されて、身体が一気に重くなる。

「やつぱりまだ……完全には使えないか……」

敵は撃破したものの、コンボの力に耐えきれなかった俺はその場で倒れてしまった。保健室のベッドの上で俺は意識を取り戻した。

「宮沢……」

「大丈夫ですか？」

「俺……」

「コンボなんか使うからだ。あれは当分は控えた方が良さそうだな」

アंकに軽い説教をもらってしまった。

「そうだ……ライブは……」

「無事終わりました。先輩と（女神さま）のおかげですよ」

「そうか……え」

深いため息が出て心から安堵した。が宮沢の発言には驚きを隠せなかった。

『ふっふっふっ。体育館に特殊な障壁を張ったのじゃ。流石に侵入されれば防ぐことは

出来ぬが、ぬしが戦ってくれたおかげじゃよ』

「（……その、ありが……）」

「耀太くん!？」

女神さまにお礼を言おうとすると、千歌ちゃんたちが息を切らしながら保健室に入っ

てきた。衣装を着たままなので、終わってすぐに来たのだろう。

「良かったあ……心配したよ……。車を誘導してる最中急に倒れたって聞いたから

……」

「えつと……」

『流石にあれば大事になりかねんからな。本来の記憶をブロックして、偽装した記憶を目撃した者には刷り込んでおいた』

今まで本気でやってなかったような仕事ぶりを発揮してくれたんだな、あの女神さま。てか本当に本気じゃなかったんじゃないか……。

新たな疑問も生じたが、今はこれで言うことにした。

「ごめん、それからありがとう」

今どこかで見ている女神さまと、俺の身を案じて駆けつけてくれた三人に深く感謝した。

「千歌ちゃん千歌ちゃん」

曜ちゃんが何かを促すように言う。

「あ、うん！ 耀太くんたちのおかげでライブ、大成功だよ！ 部活動としての参加も認めてもらえてね、それでね——」

かくして、彼女たちの物語は始まった

彼女たちが望むのは

夢か

欲望か

それを知るものはまだ誰もいない

小さな二人と本と憧れ

「ここは本屋。」

前の世界から買っていた本を、僅かな希望をもって探していたのだが……。

「あるのかよ」

サブカルチャーはこちらもあちらもあまり変わっていないようだ。

「ルビイちゃん決まったのー?」

聞き覚えのある声が、これまた聞き覚えのある名前を呼んだ。

「うん!これにする!」

名前を呼ばれた少女黒澤ルビイともう一人、国木田花丸である。

「あれ?耀太さん?」

花丸ちゃんが俺に気づいたようで声をかけてくれた。それと同時にルビイちゃんは持つていた本で顔を隠した……。

「ははは……ここにちは、二人とも」

本屋に来たということとは二人とも何かしら本を買うために来たということだが……。

「花丸ちゃん……それ重くないの?」

ルビイちゃんはともかく、花丸ちゃんかなりの量の本を風呂敷に包んで背負っている。

いや、確かにそうだね。アニメでもそんな描写あったね。でもさ、これリアルで考えるとゾツとする。

男の俺でもあんなに軽々と持ち上げられないぞ……。

「大丈夫です。いつもこのくらいですから」

……すげえ。

「そ、そうなんだ……」

どうしよう……話が続かない。千歌ちゃんはなんて話しかけてたっけ……。

「お前がオーズか」

どうしようか考えていると、俺たちの前に見たことのない男、正確には「この世界」では会ったことのない男がいた。

「どちら様？つて言いたいけど……。花丸ちゃん、ルビイちゃん逃げて！」

俺がそう叫んだ刹那、やつはその正体を現した。

「耀太さん……？」

「いいから早く！」

怯えるようにして言う通り逃げて行った。あーあ……こりや嫌われたかな？

「俺のメダルを返してもらおう！」

「残念ながら今は持ち合わせが無い！」

グリードの一人、ウヴァ。その攻撃を避けて逃げる。

「そうか。ならばお前にはここで消えてもらう。オーズのいない今のアंकなど、赤ん坊のようなものだからな」

「そういう訳にもいかないな！」

手持ちのタカカンドロイドとバツタカンドロイドを二つ開けて、

「アंकのところまでお願い！そっちは足止めよろしく！」

ライドベンダーを見つけてバイクに変形させる。

走り出す直前に足止めを頼んだタカカンドロイドは破壊されてしまった。

「タカちゃんごめん！」

ライドベンダーを発進させた。

走り続けること五分、手持ちに残しておいたバツタカンに連絡が入る。

『どうしたヨータ？』

「今ウヴァと追いかけてっこしてる。なるべく早く来てくれ！」

『まったく！俺が行くまで絶対に捕まるな！』

「分かってるよ！つか……」

ウヴァは道路を走る車の屋根を潰しながら追いかけてくる。

「捕まったら殺される……！」

電撃を仕掛けられたり、攻撃がギリギリのところまで外れたり、アंकと合流するまで正直何回かもう終わりかと思った。

「さっさと変身してメダルを稼いでこい！」

「言われなくても！」

並走してメダルを受け取り、ドライバーを腰に装着、メダルをセットしてスキャンする。

「変身！」

「タカ！トラー！バッター！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

ターンして向きを変え、メダジャリバーを取り出してライドベンダーごとウヴァに突撃していく。

「ハアツ！」

斬撃がウヴァにヒット。しかし俺もウヴァの攻撃を食らい、投げ出される。

「ウヴァ！あの二人に嫌われたらお前のせいだからな！」

「知ったことか！」

二撃目を振りかざすも弾かれて右手の鉤爪で反撃を食らう。

「ヨーター！コアをこいつに替えろ！」

投げ渡されたチーターとカマキリのメダルをキャッチ。

そしてウヴァも出てきた自分の二枚目のメダルに目の色を変える。

「俺のメダル……！」

「タカ！カマキリ！チーター！」

亜種形態、タカキリターターにチェンジして反撃開始！

ウヴァの攻撃をチーターレッグのスピードで回避、カマキリソードでカウンターを食らわす。

「グッ……ちよこまかと！」

ウヴァの攻撃は空ぶるばかり。俺は次々と攻撃を当てていく。

「残りのメダルも返してもらおうぞ！」

「スキヤニングチャージ!!」

ウヴァの周りを高速で回り、カマキリソードで無数の斬撃を与える。

「ハッハッハッ!!セイヤーーーッ!!」

セルメダルが大量に零れ、その中から緑のメダルが二枚弾け飛び、上半身がセルメンとなった。

「こいつは儲けたなあ」

「クソ！次は必ず返してもらおう……！」

苦し紛れの捨て台詞を吐いてウヴァは退散していった。

翌日。

理事長である鞠莉ちゃんにスクールアイドル部を承認してもらい、三人で部室に赴くと、

「あれ？果南ちゃん？」

「やっほ、千歌」

「どうしてここに？」

千歌ちゃんがそう尋ねると、

「千歌たちの『本気』を見せてもらったからね」

「それじゃあ……！」

「うん！」

満面の笑みでそう答えて見せた。

扉を開けて部屋に入ると、そこは物置と化していた。

「うわあ……汚い……」

「仕方ないよ。今日は全員で掃除しますか」

『タカカン』

タカカンドロイドを三つ開けて掃除を手伝うよう指示した。

「おお……」

「……どうしたの？」

「耀太くんってよく不思議な道具を使うよね」

曜ちゃんがカンドロイドを見ながらそう言う。

「うーん……用途は色々あるけど、まあ便利なものと思ってもらえればいいかな」

「へえー」

千歌ちゃん、曜ちゃん、果南ちゃんはタカちゃんに釘付けになっている。

「見とれてないで掃除を始めましょう」

梨子ちゃんがそう手を鳴らすと、三人ともこの部屋の状況を思い出したようで片付けに取り掛かった。

結果、

「本多いね……」

結構な冊数の本が発見され、山積みになっている。

「これ全部図書室の本かな？」

「多分そうじゃない」

「よし、持ってくか」

山の一つを持ち上げる。「重っ!」と思った直後、昨日花丸ちゃんたちにあつたことを思い出した。

「あの娘はこれくらい難なくもてちゃうんだろうな……」

「あの娘?」

軽いため息を吐いて、本を図書室に運び込んだ。

「花丸ちゃん!……とルビイちゃん!」

「千歌さん……?」

千歌ちゃんに名指しされて扇風機の後ろに隠れていたルビイちゃんが出てきた。

「こ、こんにちは……」

ルビイちゃんの俺を見る目が明らかに怯えてる……ウヴァの野郎許さねえからな。

「これ部屋にあつたんだけど、図書室のじゃないかと思つて持ってきたんだけど……」

「多分そうです。ありがとうございま……」

「スクールアイドル部へようこそ!」

いつの間にか千歌ちゃんが前に出て来ていて、花丸ちゃんとルビイちゃんの手を握つていた。

「結成したし、部にもなったし、大丈夫!悪いようにはしませんよ!」

「おーい、下心丸出しのエロ親父の顔してるぞー」

「あ、耀太さん……」

「や、やあ……」

あーちくしょうウヴァめ……。

この時は結局図書室に本を戻しただけで、千歌ちゃんの勧誘は失敗に終わった……と
思っただけ……。

千歌さんたちが戻っていった後、最後まで図書室に残ったのはマルとルビィちゃんの
二人だけ。

スクールアイドルの勧誘を受けた時のルビィちゃんは複雑な表情をしていた。

理由はやっぱり会長であるお姉さん、黒澤ダイヤさんだった。

以前はダイヤさんもルビィちゃんと同じようにスクールアイドルが大好きだったと
いう。

けれど、ある日を境にして大好きだったはずのスクールアイドルを目の敵にするよう
になってしまったとのことだった。

大好きなお姉さんの嫌いなスクールアイドルを好きになっただけとはいけない、そう言え
てしまうほどルビィちゃんは優しい子なんだ。

「なるほどねえ。それで俺も一緒に三人で体験入部ってことか」

「ダメかな……?」

「……分かったよ。幼馴染の頼みだからな」

「ありがとう、慎司くん!」

「でもなんで俺なんだ? どうせだったら A q o u r s のマネージャーの耀太先輩に言えばよかったんじゃない?」

「それは……」

耀太さんは虫の怪人に襲われた時に……。

マルたちを逃がした方向と逆の方向に怪人を誘導して守ってくれた……みたいだった。た。

「花丸? 熱でもあるのか?」

「な、なんでもないぞら!」

「ふーん、まあいいよ。それで、花丸は?」

「え?」

「花丸はやりたいの? スクールアイドル」

「ど、どうしてオラが……」

「それ、スクールアイドル雑誌いつも読んでたみたいだったから。あとオラになってる」

「オラ、マルは……」

その時は言葉を濁してしまい、言うことが出来なかった。
自分の本当に本当の気持ち。

二人のキモチと変身と灼熱のコンビ

「体験入部？」

花丸ちゃん、ルビィちゃん、そして慎司の申し入れに首を傾げた。

「つまりお試してみたいなものよ」

「そう、実際に体験してやってみたいと思うならそのまま正式に入部して、やっぱり合わないと思っただらやらないって感じかな」

梨子ちゃんと曜ちゃんの丁寧過ぎる説明を受けた千歌ちゃんは、

「これでよしっ」と

それを全て聞き流していた模様。

手作りポスターにペンで三人の名前を書き足していた。

「千歌ちゃん、人の話は聞こうな」

「この部を知ってもらうにはやっぱり練習の体験かな」

「果南ちゃんの言う通り……なんだけど……」

発足したばかりのこのスクールアイドル部には練習する場所が無い。グラウンドも中庭も既に他の部活が使用している。

「どうしようか?」

困り顔な千歌ちゃん。

正式なスクールアイドルとして承認されたばかりのAqoursの新たな問題。

見つからない練習場所は案外早く解決された。

「これなら確かに練習出来るね!」

解決策を出したのは体験入部中のルビィちゃん。

μsも練習場所として採用していた屋上を案に出し、行ってみると確かにどこも使っておらず、広さも充分でもってこいの場所だった。

「よおーし、練習始めるよー!」

学校での初練習は好調なスタートを切った。

Aqoursがようやくスタートラインに立った頃、彼らも次の動きを見せようとしていた。

「ウヴァも取られちゃったんだね、コアメダル」

白髪の青年、カザリが暴れている青年、ウヴァにそう言う。

「クソ! あのおかしな道具の所為だ!」

自身を足止めたタカカンドロイドを思い出して、ウヴァの荒ぶり具合はエスカレー

トする。

「そう嘆くことはないよ。僕にいい考えがある。ガメルとメズールも協力してくれるよね？」

「それは良いけれど、一体どうする気なの？」

メズールの言葉にカザリは不敵な笑みを浮かべるのだった。

昼休み。

教室を出た俺が足を向けるのは部室……ではなく図書室。

実は図書委員会に所属しているのだが、以前一度仕事をすっぱかしてしまい、軽いお説教をもらって今日の昼休みにその埋め合わせを約束したのだ。

お昼を速攻で済ませてなんとか時間前に着くと、既に一人カウンターで本を読んでいる娘がいた。

「耀太さん、こんにちは……」

「こんにちは、花丸ちゃん……」

互いに挨拶を交わすと、

「……………」

会話が続くことはなかった。

なんか目もそらされたし、隣に座ると少し離れられたし、もう泣いていいかな!?

と既に半泣き状態になっていると、花丸ちゃんが読んでいる本に気づいた。

「あ、それスクールアイドルの雑誌。やっぱり花丸ちゃんも好きなの?」

「オラ…じゃなくて、マルは……」

間違えて顔を真つ赤にしながらも言い直す花丸ちゃん、可愛いわあ……。

「マルはその……スクールアイドルってどんなのかなって思ってた……」

そう言いながら彼女はページを一枚めくり、とあるページを眺めていた。μsを見

ていた千歌ちゃんのような憧れをみる瞳。

そしてその瞳と同時に本を閉じた。

真剣な眼差しを俺に向ける。

「実はルビイちゃんのことと相談が……」

時間は飛んで放課後。

体験入部二日目は淡島神社での階段ダツシユ。

……を今頃やっているんだろう。

俺はというと先生にこき使われもとい、手伝っていたため、遅れている。

教材を運ぶだけならいいかと思っていたら鬼のような量だった……。

それはさておき、一番気がかりなのは花丸ちゃんとルビイちゃんだ。

二人はその小さな体とは裏腹に、大きなものを抱え込んでしまっているようだ。

スクールアイドルが大好きで、ダイヤさんのことはもつと大好きなルビィちゃんは良くも悪くもダイヤさんに影響され、そんなルビィちゃんを放っておけない花丸ちゃん。

「優しい娘、か……」

花丸ちゃんはルビィちゃんのことをそう言っていた。

ライドベンダーを走らせていると、目的地の途中で件の彼女、花丸ちゃんが向こうから歩いてきた。

俺はその手前でバイクを停める。

「花丸ちゃん、どうしてこんな所に……」

「耀太さん。……マルの夢はもう叶えられたから……」

「本当に？」

「マルは……」 そう花丸ちゃんが口を開いた刹那、それはやってきた。

彼女を庇い、背中に痛みが走る。

「いつつ……花丸ちゃん大丈夫だった？」

「マルは平気です……でも……」

「このくらいどうつてことないさ。それにしても、不意打ちの上に四人でお出迎えなんてやってくれるじゃないか」

俺と花丸ちゃんの周りはグリード四人が取り囲んでいた。

「キミとアंकは一緒にいないことが多いからね。メダルを持たないキミさえ倒せば、簡単にコアメダルを手に入れることが出来る」

「なるほどね。四人で袋叩きにすれば確実に仕留められるってことか」

「そういうことよ。悪く思わないでね、オーズのぼうや」

作戦の立案者はカザリだろうな、間違いない。

「ま、簡単には倒れてやる訳にはいかないな」

「メダルも無いのにどうやって？」

「誤算だったなカザリ。メダルならあるんだよ。アंकの奴も相当借し渋ってたけど」

ドライバーを腰に装着、メダルを三枚セットする。

「花丸ちゃん、このことはみんなには内緒にね」

俺たちの話についていけない様子だが、うなづいてはくれた。この娘なら言いづらいこともないだろう。

「変身！」

「タカ！トラー！バツタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

タトバコンボに変身、ライドペンダーからメダジャリバーを引き出した。

カザリとウヴァアの同時攻撃を刀身で受け、跳ね返す。が、すぐにガメル of 打撃が腹部

に直撃。

「かはツ……!?!」

膝をつくとうヴアが首根つこを掴んできてガメルの攻撃跡に鎌で斬りつけてくる。

「随分弱いよね、ぼうや」

メズールがさらに一撃加えてくる。

滅多打ちにされてアーマーの下では皮膚は裂け、骨もいくつか折れている。

血の味が口に広がる。吐き出したいが、アーマーごしにはできないので気持ちが悪い。

「へえーまだ立つんだ」

メダジャリバーを杖替わりにして立ち上がる。

「ふふ、返してもらおうよ」

カザリがドライブバーに手を伸ばし、向きを戻す。

そのままメダルを引き抜こうとするが、

「やめときなよ。今のキミの腕くらいへし折るのは簡単なんだから」

メダルは渡すわけにはいかない。今この場でそれを失えば、俺の後ろにいる、確かに未来のある彼女を守れなくなってしまう。

「悪あがきなんて醜いよ」

無慈悲な一撃が放たれる。下からの攻撃はメダルを二枚弾き飛ばして、顎へと直撃した。

その場に倒れ込む。

もう体が動かない。

意識が途切れた。

「やれやれ……ぬしは頑張りすぎじゃ」

前に一度来たことのある部屋でロリ神さまが目の前に座っていた。

「俺死にました？」

「ギリギリじゃな。まったく通常業務に加えて、わらわの仕事を増やさんでくれ」

「いやグリード相手に四対一はかなりキツいんですけど」

「しょうがないのー。ほれ、これを持っていけ」

そう言ってロリ神さまはメダルを一枚投げ渡してきた。

その直後、床が開いて俺は闇の中へ落下していき、再び意識がなくなつた。

少しずつ意識が回復していく。痛みはあるが、さつきほどではない。

ついでに手の中にさつきのメダルが握られていた。

ロリ神さまの声の代わりに花丸ちゃんの啜り声とアंकの口の悪いセリフが聞こえてきた。

「妙な連絡が入って来て来てみれば、まさかお前たち四人がかりとはなあ」

「ボクとウヴァのメダルは返してもらったよ。あとはアंक、キミが持つてるメダルを全部渡してもらおうよ」

「はっ！俺が一人でこんなところに来ると思ったか？」

アंकがそう言うのと淡島神社の方から飛行物体もといバースがカッターウイングを展開して突撃してきた。

「何してんだてめえらああああ!!」

カザリとウヴァを吹き飛ばしていく。

「気は進まないがお前と宮沢アイツで半分ずつだ。さっさと決めてこい」

「これでも怪我人だぞ。少しは労わってくれ」

アंकはメダルを二枚出すが、

「アंक、バツタじゃなくてチーターちようだい」

「は？」

「外傷は癒えたとはいえ、長期戦はちときつい。コンボで一気に決める」

ロリ神さまが渡してくれたライオンメダルを見せる。

「そんなポロポロの体でコンボなんて使ったら死ぬかもしれないぞ」

「じゃあ二人ここで仲良くお陀仏だな」

そう言うとアंकはトラメダルと、バッタメダルの代わりにチーターを渡々と出した。

「花丸ちゃん」

「はい……」

「これやった後言えなくなりそうだから、言つとくね花丸ちゃん。好きなものにはもつと正直になつていいと思う。もし今の自分がそれに似合わないと思つても、まずは始めてみるのが大事だと思うんだ。そうすればきつと何かは変わると思う。君が見ていた『星空凜』のように」

「耀太さん……」

「だから見ていて……俺の『変身』！」

「ライオン！トラ！チーター！ラッタア・ラッタア！ラトラーター！！」

ライオンのたてがみを横して、青い複眼を持つライオンヘッド、さらにトラアームとチーターレッグを合わせ、爪先から頭まで黄色一色に。

オーズ、ラトラーターコンボへの変身を完了した。

「アंक！その娘、花丸ちゃんのことお願い！」

「ちっ……おいお前、こっちに来とけ」

バイクで遠ざかる二人を背後にガメルとメズールが襲いかかろうとするが、

「遅いっ——!」

高速で二人の目の前に移動し、トラクローで切り裂き、

「きゃあああつ!?!」

「うわあああつ!?!」

ライオディアスを発動させる。

熱に弱いメズールは大ダメージを受けてメダルが弾け飛び、光に弱いガメルは怯む。

「私のコアメダルが……」

「メズール、しっかりしろ!メズールのコアメダル、返せ!」

ガメルがメズールを横たわらせると、こちらに突撃してくる。が、

「それはこっちのセリフだ!お前のメダルも返してもらおう!」

ウヴァと戦った時のように高速移動で攪乱し、タイミングを見極めて、ガメルの体に

トラクローを突き刺した。

「うう……俺の、コアメダル……」

偶然とはいえ、見事三枚セットでメダルの奪取に成功した。

「そろそろ潮時だね」

「ちっ!」

「あ、待てコラ!」

バースと戦っていたカザリとウヴァはこちらの戦果を見て逃走し、

「メズール、逃げるぞ」

メズールとガメルも逃げて行った。

戦闘後、俺はなんとか倒れずに済んだ。

聞けばアंकがタブレット端末でコアメダルやグリッド、ヤミーの目撃情報を調べている最中に、俺が滅多打ちにされているリアルタイム映像が謎のアドレス（絶対ロリ神さまだ）から送られてきたという。

慎司に関してはテレパシーで直接きて、練習を一時抜けてきたそうだ。

「耀太さん……マル……分かりました。ううん、本当は最初から……。スクールアイドルが好き、やってみたいって……でもマルみたいな子は向いてないと思って……」

「そんなことないよー」

いつの間にかやって来たルビィちゃんが花丸ちゃんに向かって叫んだ。肩にはバツタカンドロイドが乗せられていた。まあ慎司の仕業だろうな。

「ルビィね、花丸ちゃんのこと見てた!!ルビィに気をつかって、スクールアイドルやってるんじゃないかって!!ルビィのために無理してるんじゃないかって……心配だったから」

ルビイちゃんの口からその想いを乗せた言葉が紡がれてゆく。

「でも、練習の時も、屋上にいた時も、話していた時も、花丸ちゃんとっても嬉しそうだった。それ見て思ったんだ。花丸ちゃんもルビイと同じくらい、スクールアイドルが大好きなんだって！だからね、ルビイ……花丸ちゃんと一緒にスクールアイドルがやりたいよ!!」

「ルビイちゃん……」

その日から彼女は少しずつ変わり始めた。

彼女とそして彼女の友達が大好きなスクールアイドル。

六人になったA q o u r s が次に出逢うのは、

天使か

悪魔か

それとも――。

転生と墮天と重力コンボ

『感じます……。精霊結界の損壊により、魔力構造が変化していくのが……。世界の趨勢が天界議決により決していくのが……。果の約束の地に降臨した墮天使ヨハネの魔眼が、その全てを見通すのです！全てのリトルデーモンに授ける。墮天の力を！』

そう囁く少女が映るモニター。

キーボードの上に頭を垂れる。眠っているかのように動かない青年は言葉通り魂を抜かれていたのだった。

救急車のサイレンが住宅地に鳴り響いた。

事の始まりはA q o u r sの朝練が始まる少し前の時間に宮沢と出会ったところからだ。

「なあ、宮沢」

「はい」

「花丸ちゃんとルビィちゃんが入部したのに、なんでお前は入部しなかったんだ？」

「ふっふっふっ……。それを聞いてしまいますか、先輩」

かなり中二の入ったポーズをとり、

「何故俺が花丸たちと一緒に入部しなかったのか……。その答えはただ一つ、スクールアイドル部にもう一人、入部させなくてはいけない一年生がいるからだああ!!」

どこそのゲーム会社の元社長だった神（自称）みたいな口調とテンションで叫ぶ。

Aqoursの一年生メンバーの最後の一人、それは……。

『感じます……。精霊結界の損壊により——』

動画投稿サイトに動画をアップしているこの娘、墮天使ヨハネこと、津島善子。

この学校の生徒のはずなのだが、一年生の教室ではまだ一度も見たことが無い。不登校児なのだ。

原因は高校デビューの失敗だ。

「そう言えば少し気になるニュースもあったよな」

「ニュース？ ああ、ある動画を見てた人が次々と倒れるってやつですか？」

「気になって少し漁ってただけで、その『ある動画』ってのはこれらしいぞ」

「は？ いやいや、まさかそんなあるわけ……」

彼女の動画と一連の事件の関連性を疑わせる書き込みのあるスレッドやSNSの投稿を宮沢に見せる。

「倒れた人の家族や知り合いがその人のPCの履歴を見たらそれが最後に見ていた動画

らしい」

「だから善子が犯人だって言うんですか？」

「いや、ただの女の子がこんなこと出来るわけないし、彼女がヤミーの親って線はアंकが否定した。つまり……」

「この動画を見ている誰か……」

流石に飲み込みが早い。早急に対処しなければ彼女の身を危険に晒してしまうかもしれない。

「ま、幼馴染とバースの名にかけてそれだけはさせませんよ」

宮沢はそう言った。

バースに変身するこの宮沢慎司はロリ神さまが遣わした、俺と同じ世界の人間である。正確には「だった」と言うべきか。

宮沢慎司という人間は元の世界で一度死んでしまい、そこをロリ神さまに拾われたらしい。

時間的には俺の少しあと、丁度梨子ちゃんと出会う前だが、宮沢はロリ神さまに頼み、善子ちゃんと花丸ちゃんの幼馴染として生まれ変わるよう頼み、赤ん坊からリスタートした。

「記憶の方はどうしたんだよ」と尋ねると、一時的に記憶にロックを掛け、俺の初陣時と

ほぼ同時にあのクワガタコアを拾ってそれが解除されたというとてもややこしいものだった。

まあ、要約すると「前世の記憶を持ちながら同一人物として転生」したということだ。

「お前……やっぱややこしい」

「？」

ここがアニメなら頭上に巨大なクエスチョンマークを出現させるように首を傾げる宮沢であった。

入学式、そして盛大にやらかしてしまった自己紹介から時間は経った。

あれじゃいけない。卒業しなくてはいけない。堕天使なんていない。何度そう言い聞かせても、同じことを繰り返してしまう。

でも今回は！

その決意を胸に秘め、学校までやって来た。

……………けど。

同じ制服を着た生徒、そして先生が来るたびとつさに隠れてしまう。どこか落ち着ける場所を……と思ってきてみた屋上も。

「もう先客がいるなんて……」

しかもその中には見知った顔が一人。

「あーっ。」

なんでずら丸がいるのよ！

他の生徒の時と同じようにサツと身を隠す。が……。

「善子ちゃん？」

見つかった……。

その後、ずら丸がこつちに来る前に逃げようとしていたら、屋上に上がってきた慎^{シン}司にも見つかった……。

「どうして今まで学校来なかったんだよ？心配してたんだぞ」

「しょうがないじゃない！あんなこと言っちゃって来れるわけないでしょ!？」

あの自己紹介のことは、思い出すと今でも死にたくなってる……。

「クラスのみんなはなんて言ってる？変な子だねーとか、ヨハネって何？とか、リトルデーモンだつてぶ。ぶwとか！」

「誰も言つてないよ。ていうかみんな心配してる。どうして来ないんだろうとか、悪いことしちゃったのかな、とか」

「………本当？」

「……でウソ言う理由が無いだろ」

ずら丸とシンの言葉に嘘は無い。ということとは…

「まだやり直せる……！まだ希望はある……！」

津島善子普通化計画は満を持してスタートした。

……はずだったが。

「何がどうしてこうなった」

耀太先輩がそう尋ねてくるが、一年生の教室で起きてしまった悲劇は言うまでもない。

花丸と部室まで来た善子は机の上に突っ伏している。

「なんでこんな物学校に持ってきてるのよ……」

「それはまあ、ヨハネのインデンティティみたいなものだから、あれがなかったら私は私でいられないっていうか……はっ！」

どうやらこの問題は善子の意識を根底から改善しなければいけないようだ。

「ルビイも今日聞いたんですけど、中学生の頃まで自分が墮天使だって信じてて、そのくせが抜けてないみたいなんです」

「中二病をこじらせたんだな」

「実際今でもネットで占いやってますし」

ノートパソコンに映されたのは例の動画。なんとという公開処刑。「やめてえええ！それよりなんとかしてよ！」

モニターは速攻で閉じられる。

善子は助けを求めろが、どうしたものやら……。

「可愛い……」

「え？」

「これだよ！津島善子ちゃん！いや、墮天使ヨハネちゃん！スクールアイドルになりませんか!？」

そんな善子とは真逆にいつものペースを乱さない千歌さんであった。

千歌ちゃんたちが善子ちゃんをスクールアイドルに勧誘している間に、俺は集団昏睡事件をどうにかするために動いていた。

「にしても囮作戦なんて気乗りしないな」

「見つけれなければそれだけ多くの人間がヤミーの餌になる。そう考えれば得だろう」

反論したいが、アंकの言葉は正論だ。

あの子の調べでヤミーの標的になった人は、みな善子ちゃんの動画の熱狂的信者で

あったことが分かった。

ありつたけのカンドロイドを飛ばし、彼らを張り込ませていたところ、次のターゲットと思しき人物を見つけたので、今はその人の家付近を張り込んでいる。

「来るぞ、準備しとけ」

「あいよ」

返事を返した直後、張り込んでいた家の二階の窓からアゲハヤミーが飛び出してきた。

「早速おいでなすったな、変身！」

「タカ！カマキリ！バッター！」

亜種形態タカキリバに変身した。

バッターレグに力を込めて飛んでいるアゲハヤミー目掛けて跳ぶ。

初撃でたたき落とすことに成功した。

「むう、オーズか。丁度いい、我が崇高なる儀式の最後の贄は貴様にしてやる」

ヤミーは翅から鱗粉をばら撒く。鱗粉が地面やアーマーに当たるたび、爆発が俺を襲う。

「ソイツの翅を切り落とせ！」

「言われなくとも……！」

アゲハヤミーは再び飛ぶ。俺ももう一度も跳び、叩き落とそうとするが、

「はあっ!」

「何っ!?!うわあああ!?!」

突然の襲撃を受けて吹き飛ばされ、そして変身が解かれてしまう。

「返してもらったぞ、俺のコアメダル」

奴の手にはドライバーに収まっていたはずのカマキリメダルが握られている。

「ちっ……何のつもりだウヴァ」

アंकは襲撃者——ウヴァに突っかかる。

「それはこっちのセリフだ。俺のヤミーに手を出すな」

アゲハヤミーはウヴァの方へ降りていく。

「セルメダルは順調だな。コアメダルの方は見つけたか」

「これを」

アゲハヤミーは二枚のメダルをウヴァへと渡した。

「メズールとガメルのメダルか」

ウヴァはそれをしまつて俺とアंकの方へ向き直る。

「残りのメダルも返してもらおうぞ」

まさしくピンチ……まあ前ほどではないけれど。

「アंक、ガメルのメダル貸して！コンボでやる！」

「好きにしろ」

前回のアレで言っても聞かないと分かったのか、素直にメダルを出してくれる。

二枚のメダルを取り替えて……、

「あれ!?アंक、ゴリラは!?!」

「取ってこい」

ウヴァを指さしてアंकはそう言う。

「無理無理！これじゃ変身できないって！」

「ちっ……絶対に取られんなよ！」

三枚目のメダルをアंकから受け取ってドライバーに装填し、スキャンする。

「サイー!ゴリラ!ゾウ!サゴーズ!サゴーズ!!」

赤い複眼にサイのようなツノ、両手に装備された大きなガントレット、そして力強く踏み込めるゾウレッグ。

重力を操るオーズ、サゴーズコンボ。

ドラミングをすると空気に振動が伝わっていく。

ガントレット、ゴリバゴーンを飛ばしてウヴァとアゲハヤミーにヒットさせる。

「ぐう……」

ウヴァは身の危険を感じたのかすぐさま退散していった。

「これで終わりだ！」

「スキヤニングチャージ!!」

足を揃えて跳び、着地すると地面が割れる。

アゲハヤミーも飛んで逃げようとするが、時すでに遅し。割れた地面がアゲハヤミーを捕らえて俺の方へ引き寄せる。

「はああああ……セイヤー……!!」

目の前まで来たアゲハヤミーにゴリバゴーンとサイヘッドでの頭突きの三重奏、サゴーズインパクトを食らわせる。

アゲハヤミーは爆発してセルメダルへと成り代わり、俺の変身も解かれた。

「はああ……やったか……」

安堵したのもつかの間、

「半分だけな」

アंकはそう言つて爆風の向こう側を睨む。

煙の向こうに影が現れ、それが消えるともう一体のヤミーが姿を現した。

「まさか……分離したのか……」

「お前の魂を贄とできないのは残念だが、我が崇高なる計画はこれで完遂される。我ら

の魂は偉大なる墮天使、ヨハネさまと融合するのだ！」

「そんなことさせ、うっ……」

飛び去るクロアゲハヤミーを追いかけようとするが、体が言うことを聞かなかつた。

「あいつの欲望は『ヨハネ』とかいう人間と自分の同一化か」

「同一化……もしそれが実現したらどうなるんだ？」

「多分、多過ぎる魂の量に器となった人間が耐えきれず、全ての人格が消滅して暴走するだろうな」

「マジかよ……早く宮沢に知らせないと……」

スマホを取り出して宮沢に電話をかける。

善子ちゃんの身に迫った危機を伝えるために。

天使と墮天使とリトルデーモン

善子の動画と千歌さんの一言から始まった墮天使アイドル。Aqoursのランキングをアップさせることと善子をAqoursへ勧誘することが目的である。

まあ千歌さん^{当人}と善子は楽しそうではあるが。

「この前の衣装より短い……。踊ったら流石に見える……」

曜さんが持ってきた墮天使衣装のスカートを押さえながら恥じらう梨子さん。何が見えるのかは聞かないでおこう。

「大丈夫だよ、ほら！」

そして千歌さんはなんの躊躇いもなくスカートをまくった。ここは天国ですか？

「ちよつと千歌ちゃん!? 慎司くんもいるのにそんな……!」

梨子さんに睨まれ、視線を落とす。俺は何も見えていない、そう何も……。

「本当にいいの?」

「いいんだよ! この衣装でライブして、みんなに墮天使の魅力をアピールするの!」

「墮天使の……魅力……」

今の千歌さんの一言が善子を妄想の世界へと誘^{いざな}ってしまったようだ。一名以外から

冷たい視線を受けているというのに、不気味に笑い続けていた。

今この場面を耀太先輩に見せたら彼はどっち側になるのだろう。

その後、梨子さんが高海家の飼い犬であるしいたけに追い回され、ダイナミック帰宅を披露したのちにA q o u r sの新しい動画をアップロードしたのだが、これがまたすごかったな。

衣装合わせ後、今日の活動は解散になった。

バイクで帰宅……しようかと思っただが、善子を一人にはいけないので彼女たちと一緒にバスで帰ることになった。

『伊豆のビーチから登場した待望のニューカマー、ヨハネ！みんなで一緒に墮天しない？』

「やってしまった……」

昔の名残というか後遺症的なものに苦悩している元中二病患者のような姿の梨子さんであった……。

が、やはり効果があったのかランキングはかなり上昇していた。

というかルビイと果南さんS U ・ G O ・ K U ・ N A ・ I ?

二人に関するコメントが突出して多い……。よくよく見てみるとグラマラスな果南

さん当然として、ルビイの方はというと……、

『ヨハネさまのリトルデーモン四号、黒澤ルビイです……一番小さい悪魔……かわいがってね!』

……これはいけない。何がいけないのか言うと、絶対にヤバイ層、言うなれば大きいお友達が何か大変なことをしてかしかねないくらいの可愛さを誇っているということだ。

「慎司くん、鼻血出てる。大丈夫すら?」

「へ?だ、大丈夫だ。問題ない」

あぶねえ……、ルビイのリトルデーモンになるところだった……。

真逆の武器を持つAqoursの秘密兵器の片鱗に触れたのだった。

そして……。

「Oh! Pretty bomb a head!」

「プリティ……?どこがですか?こういうものは破廉恥というのですわっ!!」

ダイヤさんの逆鱗に触れました。

「果南さん!耀太さん!貴方たちというものがありませんながら何故止めなかったのですか!」

「つて言われましても俺は昨日いなかったし……」

「大体ルビイのスクールアイドル活動を認めたのだから、節度を持って自分の意志でやりたいと言ったからです！こんな格好をさせて注目を浴びようなど……!!」

「ごめんなさいお姉ちゃん……」

「とにかく、キャラが立ってないとか個性が無いと人気が出ないとか、そういう狙いでこのようなことをするのはいただけませんわ」

繰り返される過ち。かつての伝説彼女たちと同じことをしてしまったわけだ。いやあれよりは全然可愛いものだけだな。

「でも、一応順位は上がったし……」

「あんなもの一時的なものにしかすぎませんわ」

ダイヤさんが見せてくれたスクールアイドルランキング。昨日見たものより順位が落ち、現在も落ち続けている。

「本気で目指すならどうするべきか、もう一度考えることですね！」

「はい……」

「俺がヤミーを探してる間にそんなことがあったのか」

「結局昨日は見つからなかったんですね」

サゴーズコンボまで使えるようになり、ヤミー自体は一度倒したらしいのだが、その直前に分離されて逃げられたとのこと。昨日も探し回ったのだが、結局姿を見せなかつ

たらしい。

「善子と同一化……そんなはた迷惑な欲望のヤミーなんて俺が……！」

「耀太くん、今の話……」

向こうで千歌さんたちといたはずの梨子さんが来た。どうやら今の話を聞いていたらしい。

「聞かれちゃったか。なるべくみんなに心配かけないようにしたかったんだけど」

「ごめんなさい。でも今の話が本当なら不味いんじゃない……」

「どうしたんですか？」

「善子ちゃん帰っちゃったの。二人に今日は解散って言おうとしたんだけど……」

最悪の事態になってしまったらしい。

タカカンドロイドを飛ばして彼女たちを捜索させた。

結果、善子は案外あっさり見つかった。

「やっぱりここにいたのか」

「シン……」

「懐かしいなこの公園も。あの時は『わたしは天使なの！』って言ってたっけな。いつからだろうな、善子が墮天使になったのって」

「いつかしらね。それも今はもうどうでもいいことだわ……」

辺りは既に暗くなっていて、俯いている善子がどんな表情カオをしているのか分からない。でも多分本当に想っていることを彼女は言葉にしていけない。

「もう墮天使は卒業。明日からは普通の高校生、『津島善子』よ」

「いいのか？それで」

「……………」

返事は無い。今彼女は葛藤の中にいる。墮天使でありたいのか、普通に戻るのか。

そして水を差すようにヤツは現れた。

「見つけましたよ、ヨハネさま」

耀太先輩が取り逃がしたヤミー。

「え、なに、あれ？」

「お前の動画を見てたやつ誰かから生まれた、欲望の怪物だよ」

「わたしの動画を……………」

詰めてくるヤミーに対して善子は引いていく。

「ヨハネさま。わたしたちと一つになり、真の墮天使として覚醒するのです！」

ヤミーは翅を広げて大げさに振舞う。それをバースターで妨げた。

「悪いなヤミー。墮天使ヨハネはもういないんだよ。だからとつと倒させてもらう

！」

ドライバーを腰に巻いてセルメダルを取り出して装填、レバーを回転させる。
「変身！」

カプセルがいくつも展開されて全身に装着される。

バースバスターを撃ちながらヤミーに近づき、飛び掛かった。

何よこれ……一体どうなってるの？

シンと話してたら怪物が現れて、その怪物はわたしの動画を見ていた誰かから生まれた欲望の怪物で、そのシンもいきなり姿が変わって戦い始めて……。

あの怪物が言ってくれたことはよく分からないけど、わたしが原因なのよね、多分……。怪物は腕の翅をを広げて飛んだ。

「空中戦はお前だけの特権じゃないぞー！」

「カッターウイング」

今度はシンのアレの背中から羽が生えて怪物を追いかけて飛んだ。

「シヨベルアーム」

今度は左腕に武装が追加されて怪物をたたき落とす。すると、怪物から光の粉がまき散らされた。

「同士の魂が……」

「まだまだいくぞー！」

「ドリルアーム」

シンは右腕にドリルを装着して怪人に突き立てる。ドリルは刺さったまま回転して怪物の体を抉った。

怪物から肉の抉れるような生々しい音はせず、ガリガリと金属が削れる音が響く。怪物からは血の代わりにメダルが零れていた。

ドリルに突き刺さった怪人を思い切りぶん投げる。

「クレーンアーム」

右腕がさらにごつく(?)なり、ドリルが射出される。また刺すのかと思いきや、ドリルとアームの間にワイヤーらしきものが伸びていて、怪物をそれで拘束し、ドリルを地面に突き刺して完全に自由を奪った。

「ここまで来たらいつと、おまけにこれでフィニッシュユだー！」

「キヤタピラレツグ。ブレストキヤノン」

足にキヤタピラ、胸部に砲身が装着されて光が収束されていく。

「セルバースト!!」

そして怪物目掛けて、アニメで見えるようなエネルギー波が発射された。

「が……がああAAAAAAAA………!!?」

エネルギー波を受け続けている怪物は声にならない悲鳴をあげる。

『ば、ばかな……！僕ヨハネへの想いが！こんなガキに負けるなんて！』

シンでもあの怪物のものでもない声が響く。

「想い？こっちは十年以上の片想い中なんだ！善子と同一化したいなんてふざけた欲望叶えさせるわけにはいかねえんだよっ！！」

それに負けないシンの大きな声が公園に響いた。つて……え？

「ええええええええっ?!?!」

「うおおおおおおっ!!」

エネルギー破の光はさらに力強くなり、怪人は爆散。銀色のメダルが降り、さつきと同じ金色の光が分散していった。

「ね、ねえ今の……」

「多分捕まっていた人たちの魂じゃないか？」

「そうじゃなくて！その……か……片想い中って……」

「ん？悪い、なんて言っただけ？」

意地の悪い口才でそういうシン。

「ちよっ！そういうボケはいいから！」

「しょうがねえな」

シンはそう言うのと一呼吸おいて、

「ずっと昔に墮天使に魅入られたただのリトルデーモンだよ」

屈託のない笑顔でわたしにそう答えた。

翌日、屋上まで来た善子ちゃんを前に俺と宮沢を除いて茫然としている。

「昨日はごめんなさい！」

頭を下げる善子ちゃん。彼女の言葉はさらに続く。

「わたしに合わせてくれたばつかりに生徒会長に怒られて、拳句の果てに逃げて……。こんなの、虫が良いことだって分かっている。でも！わたしをスクールアイドル部に入部させてください！」

最初こそ戸惑っていたものの、千歌ちゃんたちはすぐに笑顔になり、

「顔を上げて、善子ちゃん」

千歌ちゃんがそう言って手を伸ばし、善子ちゃんはゆっくりと顔を上げる。

「ようこそ、スクールアイドル部へ！墮天使ヨハネちゃん！」

こうして新たに一人のメンバーを加え……「ちよつちよつちよつ！」

「何だよ。せつかくいい感じに締めようとしてたのに」

「メタいわ。ていうかもう一人忘れてませんか？」

「んー？ そうだっけ？」

「この人ヒデエ」

「冗談だよ、冗談。これからよろしくな、慎司」

「こちらこそですよ」

新たに二人のメンバーを加え、A q o u r s は次なるステップへ。

しかし、そんなA q o u r s に既に黒い欲望の影が迫っていることを誰も知る由は無かった。

PVと進化と守りたいもの

暗い夜の町を一人徘徊する少年。

彼ほどの見た目の者ならば、年齢的にこんな時間に外出することはほとんどない。

もしいていても、

「ちよつと君！こんな時間に何してるんだ！」

このように見回りをしている警察官に見つかり、補導されるからだ。

「オーズとアंकが持っているボクのコアは最低でも四枚。どうやって取り返すか考えてたんだよ」

「メダル？何か盗まれたなら警察に任せて、君は家に帰りなさい」

「へえ、キミが探してきてくれるの？」

「ああ。だから君は早く家に……」

少年を呼び止めた警察官は言葉を失った。何故なら、

「ば……化け物！」

少年「だった」ものが怪物へとなり変わっていたのだから。

「キミの欲望、解放してあげるよ」

警官の額に挿入口が現れ、怪物——カザリはセルメダルを一枚投入した。

「うわああああっ!？」

警察官はその体をヤミー、否、その欲望に支配された。

警官が去り、カザリがそこに残る。

「そこにいるのは分かっているよ。出てきたらどうかかな」

カザリが嘆息すると陰から男がコートを羽織った男が姿を現す。

「見られるのは好きじゃないんだよね。キミ何者?」

「これはこれは申し訳ございません。出ていくタイミングを逃してしまったもので」

なんとも苦しい言い訳である。

カザリは不審な男に対して敵意を剥き出しにする。

「落ち着いてください。私は貴方の味方です」

「味方?」

「ええ」

「ふうーん。で?ボクにキミを信じろっていうの?無理な話だね」

カザリの言葉に男は笑い出す。

「何がそんなに面白いの?」

「失敬。貴方たちグリードから“信じる”なんて言葉がでるなんて思いもよらなかった

もので。ではそうですね、これでいかがでしょうか」

男は一枚、「メダル」をカザリに投げ渡す。

カザリは受け取ったメダルを見て驚愕する。

「これはボクのコアメダル!? どうして……!」

「貴方にはオーズを倒して欲しいのです。その為には貴方自身が進化する必要があります
!」

「進化?」

男はさらにオーメダルを差し出す。

「はい。他のグリードのコアを取り込むのです。暴走しないようにコントロールすれば、さらなる力を手に入れることができますよ。完全体をも超える究極の力を」

「完全体を超える?」

「後で答えを聞きにもう一度お伺いします。良い答えを期待していますよ」

不気味に笑いながら男は姿をくらました。

「完全体を超える進化……」

今度こそ一人残ったカザリはそうつぶやいた。

「統廃合!」

部室どころか、体育館内にまで響き渡るみんなの声。

これはまた大変なことになる予感です。

「それ本当なの!？」

「沼津の学校と合併して浦の星学院は無くなるかもって……」

「それっていつ!？」

「それは……まだ。来年の入学希望者数をみてどうするか決めるみたいですけど……」

静まり返る部室。ようやく軌道に乗って来たっていうのにそんなことになっちゃったらショックだよな……。

特に千歌ちゃんはA q o u r sの発起人だ。一番落ち込んでいる――

「廃校……キター! ついにキター!」

ことは全くなく、たいそう喜んでいらつしやった……。

「統廃合ってことは廃校ってことだよね!？学校のピンチってことだよね!？」

「ま、まあそういうことだけど……」

あまりのハイテンションぶりに少し引き気味ながらそう答えた。

曜ちゃんと梨子ちゃんは千歌ちゃんの心配をしだす。

いやまあね、普通は心配になりますよ。学校が廃校になるかもって言われているのに、それ聞いて喜ぶなんて。

まあここで彼女が喜ぶ理由は分かるんだが、やはり一般的にその考えは解せないようだ。

「それってμ、sと同じってことだよね!？」

突然部室を飛び出したかと思うと、クロックアップも真つ青な速度で帰って来た。

「わたしたちで学校を救うんだよ!そして輝くの!あのμ、sのように!」

「そんな簡単にできると思ってるの?」

「できるよきつと!」

「花丸ちゃんはどう思う?」

ルビィちゃんの問いに花丸ちゃんは――

「統廃合!？」

こつちもだった。

「ずら丸は昔から相変わらずね」

「相変わらずといえは相変わらずだけどな……」

善子ちゃんと慎司の幼馴染二人も苦笑している。

「モノを感知して明かりのつく照明灯で『未来ずらく』とかやってたもん……」

「そんなことしてたん……」

花丸ちゃんの場合は沼津の学校と統廃合になればそちらの生徒になれるというのが、

魅力的な話に聞こえたようだ。それには善子ちゃんも「いいんじゃない？」なんて言っていたが、

「そうなれば中学校の頃の友達に会えるね！」

「統廃合断固反対!!」

よほど触れられたくない過去がおありになるようだった。

「というわけで、今日からこの浦の星学院を廃校から救うために行動します！」

千歌ちゃんがそう言うのと、

「ヨーソロー！そうだよね、スクールアイドルだもんね！」

なんだかんだ言ってみんな結構やる気なようだ。

やっぱり無くなって欲しくないという想いがあるのだろう。

しかしここでまた一つ、新しい問題が浮上した。

「でも行動するって具体的には何をするのか？」

梨子ちゃんのそんな疑問が盛り上がっているこの空気を現実に戻したのだった。

「廃校を阻止する為に、sがしたことって、ランキングに登録して……」

「ラブライブ！に出場、優勝して音ノ木坂が有名になって生徒を集めただけだね」

よくよく振り返ってみてもそれだけ。

「あれ？さつきまで気付かなかったけど、果南ちゃんは？」

曜ちゃんがやっと果南ちゃんがいけないことに気付く。廃校の危機!^{からの}↓流れるようにハイテンションな感じの所為で気が付かないのも無理ない気もするけれど。

「果南ちゃんは今日来てないんだよ。体調を崩したからって連絡があつたみたいだけど」

「そうだったんだ。あとでお見舞い行かなきゃね」

曜ちゃんがそう言い、俺もそれに賛成した。が、

「お見舞いは後で行くとして、A q o u r sの方はどうするの?」

「それなら俺に良いアイデアが……」

慎司が提案したのはP V作成だった。

これはかなり良いアイデアだ。P Vなら浦の星や内浦の魅力を映像を使って伝えることができるし、簡単に作れる。

この案は翌日すぐに決行された。

——が

ことが順調に進むことは無かった。

少しとかかかなりお手軽ではなく、出費もそこそこ。

さらにはネタ切れまで起こす始末だった。

結局松月に寄ることになったが、俺はアंकとタカちゃんに呼び出されてみんなとは

別行動をとることになった。

「はあ……なあアंक、グリードはTPOをわきまえないのか？」

「まだ誰も完全体になれてないんだ。頭ん中にあるのはコアメダルのことだけだろうな」

「ですよねー」

グリードだもんね！

畜生ヤミー早く出てこいや！

なんて考えていると、

「た、助けてくれ——っ!!」

男の人とその人を襲うライオンヤミーが現れた。

「とつとと倒して千歌ちゃんたちのところに戻るぞ！変身！」

「タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ!!」

オーズに変身してヤミーに掴みかかる。

「カザリのヤミーってことは中に人がいるのか。アंक！メダル！」

メダルを要求すると、アंकはすぐにチーターメダルを投げ渡してくれた。

ヤミーを掴んだままバツタメダルと入れ替えてスキャンし直す。

「タカ！トラ！チーター！」

地面を蹴り上げてその勢いでヤミーに蹴りを叩き込む。

連続で蹴りのラツシユを決めて取り込まれていた人を助け出す。

「早く逃げて！」

助けた人はその恰好からして警察官。襲われていた男はその不審な身なりから良からぬ人だったのだろう。

『悪人を懲らしめたい』欲望のヤミーなのにバツタじゃないんですね……」

そんな心の声を漏らしながらメダジャリバーを取り出し、セルメダルを装填。オースキヤナーでスキヤンする。

「トリプル！スキヤニングチャージ!!」

横に真一文字に振り、オーズバツシユを決める！

空間ごとヤミーは裂けて爆散、空間だけが元に戻った。

ヤミーを倒すとそこに（多分飲み込まれていた）たくさんの人が現れる。

これ全員悪いことした人だよ……。捕まえた方がいいのか……？

そんなことを思っていると、

「あーあ。またボクのヤミーを倒しちゃったんだ」

「カザリ……！」

カザリは俺とアंकを睨む。

奴をの様子に少し違和感を感じたが、アंकがその正体を見破った。

「お前、コアメダルを取り戻したのか」

「まあね。予想外なこともあったけど、キミたちに教える義理は無いよ！」

カザリは竜巻攻撃を繰り返す。

俺はそれをかなりギリギリでかわす。

「今度こそボクのメダルを返してもらおうよ！」

次は強烈な水流による攻撃!?

「今のはメズールの……!?!何故お前がその力を!?!」

あのアंकが動揺している。当然だ、何せカザリがメズールの属性の攻撃を繰り返したのだから。

「何故って言われても、ボクがメズールのメダルを取り込んだだけだよ」

対するカザリはそれが当然であるかのように返す。

「コントロールさえ出来れば、他のグリードのコアを取り込んでさらに強くなる事が出来るのさ。もちろんヤミーも、ね」

カザリがそう示した先にヤミーがもう一体。しかも今度は合成ヤミーであるライオンクラゲヤミーだ。

「ウオ——ッ!!」

ライオンクラゲヤミーは雄叫びをあげてこちらに突っ込んでくる。

「くそっ！」

俺がそれを倒そうとするが、カザリがただ突っ立っているだけなはずがなく、案の定俺とヤミーの間に割って入る。

爪で一撃。さらにヤミーの攻撃が直撃する。

「半分はメズールだが、半分はカザリか……ヨーター！メダルをコイツに変えろ！」

アंकは合成ヤミーとカザリを考慮し、メダルを二枚投げ渡してくる。

「俺のメダルだけは絶対取られるな！」

「了解……っ！」

元のメダル二枚をアंकに返し、渡されたメダルをドライバーに挿入する。

「クワガタ！カマキリ！チーター！」

亜種形態、ガタキリーターにチェンジしてクワガタヘッドで放電攻撃。

「あまり手間をかけさせないでよね」

ライオンクラゲヤミーにはかろうじて効いたものの、カザリはそれを防ぎ、もう一度竜巻を発生させる。

チーターレグで加速してかわすが、カザリの狙いはそれだったようだ。

また強烈な一撃を貰い、三枚のメダルが全て吹き飛ばされて、変身解除まで追い詰め

られてしまった。

「フッフ。ボクのメダルはこれであと三枚」

迫り来るカザリとヤミー。

しかし――、

「アアアA A A A A A ……!?!」

突然ヤミーが苦しみ始め、カザリへ襲い掛かる。

「!?!どうして……!?!」

味方であるはずのヤミーからの攻撃に戸惑うカザリ。

「よく分からんがここは退いとくぞ」

「あ、ああ………」

カザリとヤミーが戦っているうちに、俺とアंकはこの場から去った。

そこに傍観者がいたことを知らずに。

ここ数日で完成させたP Vを鞠莉ちゃんに見せに行った結果、

「すう………」

寝てしまわれた。

「ね、寝てるし………」

「もうー！ちゃんと見てくださいよ！本気なんですから！」

「本気？このテイタラクですか？」

テイタラクって。

「そんな言い方しなくても……！頑張つて来たのに……」

と曜ちゃん。まあ鞠莉ちゃんの言いたいことも分からないでもないんだよなあ。善子ちゃんも言つてたけど、実際そこまで面白いというわけではないし。

PV作成を提案したご本人さまは下手な口笛を吹き始めた……。

「結果と努力は比例しません！それにこれは貴方たちがこのTownやSchoolの魅力を十分に理解していない証拠デース！」

鞠莉ちゃんからの動画の評価はかなりの辛口だ。

だが、それは決して嫌味でも、中身の無い指摘でもない。

「じゃ、じゃあ理事長はこの町の魅力を分かっているっていうのかよ」

下されたこの評価の低さに怒りを感じたのか、物申した慎司の口調はいつものような敬語(?)ではなく、タメ口になっている。

「少なくとも貴方たち以上は」

しかし、そう言われると慎司は言い返せなくなつた。

「俺たちの知らないこの町と学校の魅力を教えて欲しいか」という鞠莉ちゃんの助言

は、千歌ちゃんは丁重にお断りし、振出しに戻ってしまった。

「ねえ千歌ちゃん、どうして理事長から聞かなかったの？」

「聞いちゃダメな気がしたんだ。自分たちで気づけなくちゃ、人に教えることなんて出来ないでしょ？」

こういうところでこの娘はとても鋭い。

俺もここに来てからたくさんものを見たけれど、それは全部千歌ちゃんたちが教えてくれたものだ。

“俺自身が見つけた魅力”ではない。

やっぱり彼女はAqoursのリーダー足り得る存在……

「あー忘れ物とって来るー」

……だと信じた。

千歌ちゃんが忘れ物を取りに行くと、そこにはダイヤさんがいた。

ルビィちゃんたちのことがあってから、彼女は元々スクールアイドルが好きだったということが分かっていた。

それから何かがあって、ダイヤさんのスクールアイドルに対しての姿勢が変わってしまった。

だが、それが分かっても尚、千歌ちゃんはダイヤさんをAqoursに誘おうとした。

ダイヤさんの返事はもちろんNOだった。

それでもという千歌ちゃんだったが、ルビィちゃんがそれを止めて、結局今日は本当に何も進展しなかった。

翌日、俺は朝早くから起こされた。

海開きをするらしい。

「にしても眠い……」

「シャキツとしてくださいよ先輩。アंकクだつてちゃんと起きてますよー」

慎司はアंकクを示して言った。

アंकクとはそこそこの付き合いになるけど、グリードって睡眠とかどうなんだろうな。いやでも今は人間の体に憑依してるから寝てるのか？

「あー……でもアंकクはシャキツとしてるっていうよりイライラして目が冴えてるんじゃないのか？」

「チカの奴……今日はとびきり高いアイスにしてやる……!」

うん、そうとうブチ切れていらっしやる。

千歌ちゃんのお財布をお陀仏させる発言を聞き流す。どうやら千歌ちゃんたちには聞こえていないようだ。

「あれ？ 耀太くんどうしたの？」

「いや、何でもないよ」

千歌ちゃんに哀れみの視線を送っていたことを悟られぬよう返事をした。

「おはよう……」

「おはヨーソロー！ 梨子ちゃん！」

眠そうな顔をして梨子ちゃんがやってきた。

良かった、仲間がいたよ。

「はい、これ梨子ちゃんの分」

「あつちの橋から海に向かってやるんだよ」

千歌ちゃんたちが梨子ちゃんの分の袋を渡そうとすると、

「ねえ曜ちゃん」

「何？」

「海開きって毎年こうなの？」

「そうだよ。町の人たちみんなでやるんだ。もちろん学校のみんなも！」

梨子ちゃんが無かを感じたように、いや感じたからこそ、ふとそう言ったのだと思う。

「これなんじゃないかな？ この町の——内浦の良いところ」

この海に集まった大勢の人たち。今この瞬間、彼、彼女らは確かに“一緒”になって

いた。

千歌ちゃんもそれに気が付いたようだ。

それから彼女はこの場所にいる全員呼びかけた。

「みなさん！私たちは浦の星学院でスクールアイドルをしているAqoursです！学校を残すために……！生徒を集めるために……！みなさんに協力してほしいことがあります！」

梨子ちゃんが気付いたのは景色とか名産とか、そういう形あるものではない。

それは内浦この町に住むたくさんの人の一つの想い。

内浦を、大好きな町をずっと残したいという。

Aqoursの新しいPVにはそんな想いが込められている。

千歌ちゃんたちはこの想いを紡ぐために歌う。

そして俺はその想いを守るために……いや、守りたいから戦い続ける。

TOKYOとそれぞれの想いと強敵

ある日の放課後、部室に来てみるとルビイちゃんたちがパソコンを立ち上げて何かを見ていた。

「ルビイちゃん、何見てるの？」

「あ、耀太さん。AqoursのPVをチェックしてたんです」

「凄いもんね、そのPVの再生数の伸び」

Aqoursが公開した「夢で夜空を照らしたい」のPV。ルビイちゃんにモニターを見せてもらうと、

「五万!?昨日家で観た時よりさらに増えてる!？」

「はい!わたしもびっくりしました!」

公開して数日で五万で……大物YouTuberみたいだな……。

「ヨソロー!」

「みんな早ーい!」

曜ちゃんを筆頭に二年生もやって来る。来れるメンバーは既に揃ったようだ。

「今日も果南ちゃんは休みなの？」

「みたいだよ。お見舞いに行こうかなと思っただけど、果南ちゃんからメールで大丈夫って……」

「そっかあ……」

みんな少し落ち込む。特に曜ちゃんと千歌ちゃんは果南ちゃんのことをより心配しているだろう。

少しでも元気づける為に話題をそらさなければ。

「そうだ、みんなこの前のPV見た？」

「あ、うん。もう五万回も再生されてるんだね」

曜ちゃんが自分のスマホを取り出して動画を再生する。

「ランタンが綺麗とか、結構コメントもあるよね」

「ランキングも凄いな。九十九位だ」

「九十九!? 全国出五千人以上いるスクールアイドルの中で百位以内!?!」

「うんうん。立派に……」

似非お年寄り言葉で腕を組む慎司

「一瞬のものかもしれないけど、確かに凄いわ!」

はスルーされている。

「やれやれ、りっ……」

「このままいけばラブライブ！優勝も出来ちゃうかも！」

スルー。

「り……」

「いやいや、そんな簡単に出来るわけではないでしょう」

浮かれる千歌ちゃんに梨子ちゃんが現実的な一言。

慎司はやっぱスルーの方向で。

「……」

「そうだねー、もっとたくさん練習してランキングが上がれば出来るよ、きつとー！」

遂に黙ってしまった。

ラブライブ！に関しては曜ちゃんと同意見だ。

そうしてあーだこーだ話していると、

「メール？」

ルビィちゃんの言葉につられて会話がストップ、パソコンの方へ集まる。ついでに慎司も立ち直った。

Aqours宛てに送られてきたメールを開封する。

「東京スクールアイドルワールド……？」

「なにになに……『浦の星学院 スクールアイドル部 Aqours のみなさん。東京

スクールアイドルアイドルワールド運営委員会です』……」

一通り読んで要約すると、「今度東京でイベントをするのでぜひ参加してください」という感じだな。

「東京……?」

「ん? みんなどうし……」

ハモって少しの間フリーズ。そして、

「東京だ——っ!!!」

またハモった。

「東京? はっ、そんなことより早くメダル集めてこい!」

「無茶言うなよ……。今は仕事の休憩中だぞ。俺がさぼったらアイスも食えないぞー」

「ちっ……」

早速東京に行くというのをアंकに話したが、やはりあまり良く思っていない。

当然といえば当然なのだが。こっちを離れている間に他のグリードに越されてしまうのが嫌なんだろうな。

カザリのこともあるし、それは尚更のようだ。

これはもう切り札ジョーカーを切るしかないな。

「そっかあ、それは残念だなあ。東京に行ったらそこでしか食べられないアイスがあるんだけどなあ」

「何？」

「かかった！」

「いやー、調べてたら見つけたんだけど美味そうだなあこれ。アンクに買ってきてやりたいけど、アイスじゃ溶けちゃうからなあ」

さらにひと押しし、アンクは揺らぐ。アイスをとるかメダルをとるか。

「……アイスは絶対買ってもらうからな」

よし！折れた！

抱えていた懸念の中でも最大のもが無くなった！

大体のお客さんが眠りにつき、仕事もやっとなんとんとと段落がついた。

アンクの他にもう一人、果南ちゃんへの連絡もしなければ。

A q o u r s のマネージャーとしての義務を果たす。なんて大層なことはさらさら無い。ただ心配なんだ。

果南ちゃんの携帯へ電話をかける。

『もしもし、松浦です』

繋がった。

「もしもし、果南ちゃん？ 耀太だけど……」

『耀太……』

俺が名乗った直後の彼女の声は少し曇っていた。電話越しだから、というわけではなさそうだ。

「どうかしたの？」

『……ううん、何でもない。それより何か用事？』

「実はね——」

Aqoursが東京で開催されるスクールアイドルのイベントに参加することになったと伝えると、

『そっか、東京に行くんだ……』

元気がないというよりは不安を感じさせる返事。

『分かった。千歌たちに耀太から言っておいて』

「じゃあやつぱり……」

『ごめん。わたしは行かない……』

拒否の返事とともに少しの間、沈黙が訪れる。

「……分かった。じゃあまた」

『うん、ごめん……』

果南ちゃんとの通話が終了した。

今の果南ちゃんから迷いや後悔といった負の感情は感じられるのは明らかだった。

それが原因で千歌ちゃんたちと離れているのだとしたら……

「なにが人と人を繋ぎたいだ……」

何も出来ないでいる自分がただただ腹立たしい。情けない。

あの時の約束。俺の本気。もしここで終わってしまったら……。

「タカー」

最悪の未来を思い浮かべてしまったが、タカちゃんの鳴き声で現実に戻される。

「どうしたんだい？ ヤミーでも見つけた？」

タカちゃんパソコンを示すので、起動させてみる。すると、ホテルと思われる建物の部屋が映っていて、さらにその部屋には人が確認できた。

「ん？ よく見えないな……。タカちゃん、悪いけどもう少し近づいて。バレないようにね」

手元のバツタカンドロイドを起動し、指令を送る。

近づいて隠れさせたため、映像は送られてこないが、音声は拾うことが出来た。

『どういふことですか？ あの子たちを東京に行かせることの意味を十分分かっていますわよね？』

「この声、ダイヤさん？」

ダイヤさんと話しているのは……。

『なら止めればいいのに』

鞠莉ちゃんだ。ということはこのホテルは淡島ホテル!?

『ダイヤが本気で言えばあの子たちも諦めるんじゃない?』

ダイヤさんがイベントのことを知っているのはルビィちゃん経由だろう。だとしたら鞠莉ちゃんは?

『ダイヤも期待してるんじゃない?わたしたちが超えられなかった壁を、あの子たちなら超えられるんじゃないかって』

「わたしたちが超えられなかった壁」……多分俺が想像していることで、大体あつてると思う。

これまで果南ちゃんが時々見せた複雑そうな表情と今の話。この世界でも彼女たち三人が、前に一度スクールアイドルを立ち上げたのは間違いないだろう。

話はさらに続く。

『もし超えられなかったらどうしますの?取返しをつかないことになるかもしれないですよ!』

『でもやるしかない。本気でスクールアイドルで学校を救いたいというのなら』

ドンっという音が響く。

『本当に変わってませんわね……あの頃から』

かなり重要な情報が流れてきている。出来れば邪魔はされたくないのだが……。

「やっぱ風呂上りはアイスに限るな」

フラグだったよコンチクショウ！

風呂上りのアイスにハマってしまったアंकが見事なタイミングで入って来る。

『今誰かの、それも男の人の声がしたような……』

聞こえてしまった……。

『気のせいじゃない？』

『いえ……確かに声が……』

「お前何してんだ？」

『っ！やはりどこからか見られていますわ！』

うわあああああああっ!!

頼むタカちゃん、バツタくん！見つからないでくれええ！

『鳥？いえ、何か変ですわ』

という願いも虚しくあっさり発見されたようだ。

「タカちゃん、離陸！」

『その声は耀太さん!?!』

咄嗟に声を出してしまい、ダイヤさんにバレた。

タカちゃんが飛び、モニターが空を映し出した……と思ったら、カンツと音が鳴り、落下する。多分タカちゃんに何かを当てて、バツタくんが離されたのだろう……。

床に落ちてしまったバツタくんの映す映像はタカちゃんがいないにもかかわらず、上に上がっていく。

そして、

『捕まえましたわ!』

ダイヤさんの顔がモニターに映し出される。

「ひいひいひい!!!」

『一体何の真似ですの、耀太さん! 年頃の女性の部屋を覗きなど!!』

「待ってください! これには深いわけがあるんです!」

『問答無用っ!!』

この後ダイヤさんの怒りが落ち着くまでモニターは揺れっぱなし、俺とダイヤさんは叫びっぱなしだった。

鞠莉ちゃんが仲介に入ってくれたおかげでダイヤさんの怒号はひとまず止んだ。

『つまり耀太さんは怪人を見つけたために、覗きをしていたと』

「……………」

ぐうの音も出ない。

『……………もう少しマシなウソはつけませんでしたの?』

そして誤解も解けていなかった。

「ウソじゃないです。内浦を守るために、オーズとして細心の注意を払っていたんです……………」

『そう言われましても、一介の高校生が怪人と戦っているなど信じられません。仮にそうだとしても、わたくしたちを覗く必要はありませんの?』

「だから覗きじゃないんだって……………。怪人、ヤミーはグリードっていう別の怪人が人の欲望を使って生み出すんだ」

『人の欲望?』

「そう。ヤミーは親となった人間の欲望を、どんな手段を使っても満たそうとする。だからグリードたちにヤミーを生み出させないよう、あるいは早期発見できるようにしてたんだよ……………」

信じられないという気持ちだが表情から見て取れる。

そりゃあ、証拠も何もないただの“お話”だもんな、今のままじゃ。

一方鞠莉ちゃんはどうと、

『……………すう』

「これまた可愛らしい寝息をたてていましたとき。」

『鞠莉さん！今の話聞いていました!?!』

『ん、んー……………Sorry、少し眠くなっちゃって……………』

「なんかデジャヴを感じるな、なんて。時間も時間だし仕方ない。仕方ない……………よな？」

『はあ……………分かりましたわ。今回は大目に見ることにします。ただし！これからまた同じようなことがあったり、万が一ルビィに何かしたらその時は……………』

「分かっています！大丈夫です！何もしませんからー！」

「その時のダイヤさんの剣幕は、モニター越しからでも鬼気迫るものを感じた。」

「怖え……………。将来ルビィちゃんをお嫁さんにしたという男たちは、お父さんよりダイ

ヤさんに気圧されるんだろうな……………」

『それはそうと、さっきの話ってどこから聞いてた?』

「え?……………それは、その……………」

『耀太さん?』

「はいいいっ!」

『このことは他言無用でよろしく願いしますね?』

「は、はい……………!」

ニコツと微笑んだ彼女の可愛らしさに反し、放たれるオーラはとても黒く恐ろしいものだった……。

そして当日。

千歌ちゃんと梨子ちゃん、花丸ちゃんとルビイちゃん、それから俺とアंकは、一度十千万で集まってそれぞれ志満さんの車とバイクで出発、曜ちゃん、善子ちゃん、慎司と合流することになったんだけど……。

「千歌ちゃん……その格好は何……？」

「東京トップス！東京スカート！東京シューズ！そして東京バッグ！」

三名ほどとんでもない格好で来てしまった……（ルビイちゃんはまだ可愛く見えるけどね）。

梨子ちゃんも驚きと呆れの狭間のようなカオをしている。

「これで渋谷の険しい谷も大丈夫ずら！」

「よし、今すぐ着替えてきて」

速攻で別の服にチェンジさせた。

東京に行くだけなのになぜそんな服を着てきてしまったんだ……。

そして曜ちゃんたちのところでも同じ現象は起きていた。

「天つ雲居の彼方から、墮天使たるこの私が、魔都にて冥府より数多のリトルデーモンを召喚しましょう」

顔を白塗りにしてさらに模様も加えたうえ、なっがいネイルまでできていた。

どうしてこうなった。

「お母さん、あの人何ー?」「しー、見ちゃいけません!」

Oh……

「善子ちゃん、それ早く落としてきて」

「善子じゃなくて、ヨハネ!溜まりに溜まった墮天使キャラを開放しまくるn「いいから早く落としてきましょう」はい……」

本人はどうか知らないけど、こっちは恥ずかしさレエベルウMAXなんですけど。MAX大赤面なんですけど。

「なんで止めなかったんだ慎司!」

「ふっふっふっ……リトルデーモンは墮天使ヨハネの全てを肯定し、従う。それに反故するなどもつてのほk「よし、この着メロをみんなに配布しよう」すいません許してください」

やつとのごとで全員をまともな格好にし、電車に乗る準備が整った時だ。

「これクラスのみんなからの差し入れです!」

「それ食べて浦の星の凄いとこ見せてやって！」

よしみちゃん、いつきちゃん、むつちゃんの三人が千歌ちゃんたちのクラス代表として見送りに来てくれた。

ホントいい子たちだ……。

電車の乗り継ぎで少し迷ったが、無事東京までたどり着くことが出来た。

「こういうところではしゃいでると、地方から来たって思われるよね」

「まあ、普段通りになれば全然問題は無い「ほんっと、原宿っていつつもこれだからマジヤバくない？」……」

流石にこれは曜ちゃんも苦笑。

もうちよつと羞恥心を持つとね、千歌ちゃん。

「千歌ちゃん、ここは原宿じゃなくて秋葉よ」

「テヘペロ」

うん、いきなりハメが外れてますね。

その後、千歌ちゃん、曜ちゃん、花丸ちゃん・ルビイちゃん、善子ちゃん、慎司、梨子ちゃん、そして俺・アंकと、一日目はみんなバラバラに行動することになった。

途中で、

「はー壁クイ……！」

「梨子ちゃんどうしたの?」

「な、なんでもないのよ!なんでも!そ、そうだ千歌ちゃん!わたしちよつとお手洗い行ってくるね!」

「う、うん……」

連絡手段はあるし、しばらくは大丈夫か……。

「ねえねえ耀太くん」

「梨子ちゃんが入っていったお店って何が置いてあるの?」

「どれどれ?」

「あれだよ」

千歌ちゃんが示したのは……。「女性向同人誌専門店オトメアン」……。

「……千歌ちゃん、世の中にはね、知らない方が幸せなこともあるんだよ」

「え?え?どういうこと!?!ねえ耀太くんってば!」

つてことがあった。

ちなみにアंकも俺の財布を中破させるほどのアイスを食べ、強制的に止めたの満足したようだった。

夕方、空が赤く染まり始めた頃、全員である場所に訪れた。若干一名おかしい格好の人がいるけど、そこは無視の方向で。

そのある場所とは、

「……だ……」

神田明神、男坂前。

「……が、sが練習で登ってた……」

本当にあの九人がいたんだな……。

千歌ちゃんにつられてというわけではないが、結構感激している。

かつてフィクションとして見ていた存在をこれほど近くで感じられるとは……あれ？俺もう近くでというか、形はどうであれ一緒に住んでたり、お隣さんだったりしてよね？あれ？あれ？

「ねえ登ってみようよ！」

千歌ちゃんに続く形で（アंकを除く）全員が駆けだす。

みんな階段ダッシュには慣れてる所為かへばることはない。

一步、また一步と上上がっていくにつれて歌声が聞こえ始める。

そして本殿まで辿り着くと、歌声の主である女の子二人がそこにいた。

言葉を失うくらい綺麗な歌声で、歌が終わると彼女たちはこちらに振り返った。

「こんにちは」

「あ、えつとこんにちは！」

返事を返すのに少し遅れる。

「あなたたち、もしかしてAqoursのみなさんですか？」

女の子たちは既にこちらのことを把握していた。

「PV見ました。素晴らしかったです」

「Aqoursのことご存知なんですね」

「ええ、それは。あなたがAqoursのマネージャーの島村耀太さんですね。それからそちらが宮沢慎司さん」

「お、おう……」

「もしかして、明日のイベントでいらしたんですか？」

「はい」

「そうですか。楽しみにしています」

どこか上から見下しているように聞こえる。

おおよそ好印象とは言い難い。

サイドテールの娘の方が一礼し、ツインテールの方の娘が続く。そして、後方伸身宙返り1／2ひねり！

「では」

二人はそう言って去ってしまった。

「す、すごいです！」

「東京の女子高生ってみんなあんなにすごいぞら!？」

「当たり前でしょ!東京よ!東京!」

いやその理屈はおかしい。というかあの子たち北海道の人だよ?というツツコミは無粋だろうか。

神田明神を後にし、予約を入れていた旅館にチェックイン。夕食、入浴を済ませて後は明日に備えてゆっくり休むだけだ。

もちろん部屋は男女別だ。こっちの部屋には俺と慎司、最後にアंकと三人。

アंकは普段から同じ部屋だから慣れてるけど、そこに慎司が入ると大分違う感じがする。

「にしても今日の出費はでかかったな……」

昼間、アंकがアイスを食べ過ぎた所為で懐が大分寒くなった……。

「あー…:そういうえば、今コアメダルってどうなってます?他のグリードがどれくらい持つてるかとか」

「大体このくらいだ。今のところはこっちが十一枚。グリードたちの中で一番多く持つてるのは多分カザリだ」

アイスを食べながらタブレットを操作するアंक。

「俺たちはカザリのコアを三枚持つてる。だけでももしかしたら、他の属性のコアを取り

込んで完全復活するっていうのも考えられるな……」

「ただ、それには暴走の危険があるし、カザリならやらないかもですね」

ほんの僅かな希望を除き、ネガティブな考えしか浮かんでこない。

「あと、アングの復活が右腕だけなのも……」

「(女神さまなら知ってますよね……)」

これからどうなっていくのか、そう遠くない未来で、またカザリたちと戦わなければならぬことだけが、今明らかになっていることだ。

この先の不安を数えると、キリがない。

「きやあああっ!?!」

隣の部屋から悲鳴が聞こえた。

「先輩!」

深刻な話をしていただけに、俺も慎司もいつもより心配していたが、杞憂だったようだ。

部屋に駆けつけると、

「……なにがあつたんだ」

いやマジで。

部屋中におまんじゅうが散乱し、ルビイちゃん以外のみんなが布団の下敷きになって

いる。

「みんなー！旅館の人に聞いたんだけどねー！……あれ？みんなどうしたの？」

何かいいことがあったのか、嬉しそうに駆け込んできた千歌ちゃんも立ち尽くしていた。

夜中、みんなが寝静まった頃、催した俺はトイレにたった。

用を足し部屋に戻る途中、千歌ちゃんたちの部屋の前を通り過ぎようとした時、話声が聞こえた。

「音ノ木坂って元々音楽が有名で、わたしも中学の頃にピアノの全国大会まで行って期待されてたんだけど、高校の大会では上手くいかなかったの」

前に一度だけ聞いたことのある話だった。

結局その後スランプに陥ってしまい、浦の星に転校してきたのだ。

期待……か。

そういえば今朝もよしみちゃんたちが来てくれたっけなあ。

今の千歌ちゃんたちも、内浦の、学校みんなから間違いなく「期待」されている。

「期待」は「不安」に変わる。

なんでもそうだけど、何かをする時、期待してくれる人は少なからずいるものだ。それは間違っても嬉しくないなんてことはない。でもその期待に応えようとすればする

ほど、失敗を恐れ、何も出来なくなってしまう。

もしかしたら「あの三人」もそうだったのかもしれない。

その後、千歌ちゃんと梨子ちゃんはその話を切り上げ、明日の為に眠りについた。

盗み聞きという形にはなってしまったものの、千歌ちゃんたちの本心を知ることが出来た。

俺はそんな彼女たちを全力でサポートする。

そう心に決めたのだった。

そして当日。

「それじゃあ、上位に入れば一気に有名になれるってことですか!？」

俺や慎司には馴染み深いアキバリポーターのお姉さんからこの「スクールアイドルワールド」の説明を受けていた。てか全然変わってねえ……この人今いくつなんだよ……。

なんて俺の疑問は他所に話は進んでいく。

このスクールアイドルワールドはライブを見ているお客さんに投票してもらい、ランキングを決めるのだ。

したがって、曜ちゃんの言う通り、無名でも本当に技術の高いグループは一気に名を知れらることになる。

「そういうことね。A q o u r s の出番は二番目！元気にはつちやけちやつてねー！」
お姉さんはそう言って行ってしまった。

「二番……前座ってことね」

「仕方ないですよ。周りはラブライブ！の決勝に出たことのあるグループばかりですから」

やや士気が下がってしまいそうになるのを、見過ごさない。

「いいじゃないか。どうせなら後のグループにプレッシャーを与えられるようなライブにしよう！」

すかさずフォローを入れる。

「そうだなあ。お前たちがここにいる奴らの欲望をどれだけ満たせるのか、見ておいてやるよ」

「アंकさん……」

珍しくみんなにフォローするアंक。

「アंक……お前アイス食べ過ぎたんじゃないのか？」

良い感じに六人を見送ろうと思ったのに台無しにしていく慎司だった。

「宮沢、今度お前にツケてアイス食わせてもらおうからな」

「は？」

アंकと慎司の面白おかしいやり取りを見て笑い出す。

緊張は少しでもほぐれた方がいい。あとでアंकにはアイス買ってやらないとな。

「ありがとう。耀太くん、アंकさん、慎司くん。行つてくる！」

スクールアイドルワールドは始まった。

そして同時に、俺が知っている未来を、大きく変える出来事が起きていたことを俺は知らなかった。

0と過去と素直な心

東京から内浦へ。

来た時と同じように何度か乗り換え、最後の電車に乗る頃には既に日が傾き、窓から覗く夕焼けはとても美しいと思えるだろう。

車内はとても静かで、その静寂が夕日をさらに助長する。

しかしこの場にそんなことを思える者は一人もいないだろう。

ここにいる全員が見ているのは、幻想的な風景ではなく、残酷な現実だった。レベルの違い。

みんなは東京で、あの場所でのライブを成功という形で収めた。それも今までを大きく超える、最高の完成度で。

だけどそれでも届かなかった。

S a i n t S n o w 。

千歌ちゃんたちの前にパフォーマンスしたグループ。神田明神で会ったあの二人だ。

期待の新星も謳われていた二人だったが、結果は九位。入賞すら出来ていなかった。

全然ダメだったわけじゃない。むしろその実力はラブライブ！の決勝進出経験のあるグループにも引けを取らない。

イベントが終わった後でもう一度、俺たちは彼女たちと会った。

『お疲れ様でした。素敵な歌でとてもいいパフォーマンスだと思いました。……でも、もしμsのようにラブライブ！を目指しているのなら、諦めた方がいいかもしれませ
ん』

『ちよつとあんた、そんな言い方……！』

『慎司』

カツとなつて突つかかろうとする慎司を引き止める。

『……』

無理もない。

マネージャーとしてこれまでのAqoursの練習をずっと見てきた。いいライブが出来るように。みんなが楽しんでくれるように。そうしてきた彼女たちの努力をたつた一言で否定されたのだから。

俺もそれには頭に来たが、鹿角聖良さんは間違つたことは言っていない。

そして聖良さんの妹、鹿角理亞さんは、

「泣いてたね、あの子。きつと悔しかったんだね……」

「だからって『ラブライブ！は遊びじゃない！』なんて……」

みんなは決して遊びだったわけじゃない。ただそう見えたのだ。

だからこそ、その言葉はみんなの心に突き刺さった。

だからこそ、悔しい。

それが一番強いのは、きつと千歌ちゃんだ。でも……

「わたしは良かったと思うけどな。努力して頑張つて東京に呼ばれて、それだけですごくいいことだと思わない？ 胸張つていいと思う。今のわたしたちの精一杯が出来たんだからー！」

「千歌ちゃんは悔しくないの？」

「それは悔しいけど……でもわたしは満足だよ——」

千歌ちゃんは「そう」は言わなかった。

「千歌ー！」

「みんな、来てくれたんだ」

沼津駅から出てすぐ千歌ちゃんたちのクラスの子たちが出迎えてくれた。

「どうだった？ ちゃんと歌えた？」

「う、うん。今までで最高のパフォーマンスは出来たよ」

笑顔でそう答えるが、やはりぎこちない。

それでも気付かれてはいないみたいだけど。

「それってやっぱりラブライブ!の決勝戦もいけちゃうってこと?」

「えーっと……」

安堵したのも束の間、むつちゃんのその一言に千歌ちゃんは言葉を詰まらせる。

「そ、そうだねー。だと良いけど……」

笑って誤魔化す千歌ちゃん。一年生や梨子ちゃん・曜ちゃんの表情は暗くなるが、向こうで話が盛り上がっているのがあって気付いてはいないようだ。いや、いなかったよ。うだ。彼女が来るまでは。

「お帰りなさい」

「お姉ちゃん……」

優しい声とともに現れたのはダイヤさん。そして……

「う……うう……うわああああ!」

「よく頑張ったわね」

お姉さんの顔を見たおかげで、気持ちを抑えきれなくなったのか、ルビィちゃんはダイヤさんの胸に飛び込んで泣き崩れる。

俺も、慎司も、そしてみんなも。

この光景を目の当たりにして、やりきれない表情を堪えることが出来なかった。

「得票0ですか。やはりそうなってしまったのですね」

泣きつかれて眠ってしまったダイヤさんは妹を撫でる。

「最初に言っておきます。あなたたちは決してダメだったわけではありません。スクールアイドルとして十分な練習を重ね、見る人を楽しませるに足りるだけのパフォーマンスをしている。ですがそれだけではダメなのです」

「ダメだったわけじゃないのに、それだけじゃダメって、どういうことだ……ですか？」
「7236。この数字が何か分かりますか？」

先の質問と合わせて、さっぱりだという顔をしている慎司を見る。その表情は次第に真剣なものになった。

「去年ラブライブにエントリーしたスクールアイドルの数ですわ。第一回大会から比較して、十倍以上。スクールアイドルの人気はラブライブの大会の開催によって爆発的なものになり、A—RISEとμsによってそれは揺るぎないものになった。アキバドームで決勝が行われるようになり、そしてそれがレベルの向上を生んだのですわ」

ラブライブの歴史において、偉大なる先人となったA—RISE、そしてμs。彼女たちが競い合い、見せた数々のライブ。

そしてその二つのグループが中心となり開かれた、スクールアイドルのスクールアイ

ドルによるスクールアイドルの為のライブ。

その影響を受け、スクールアイドルというものは、良くも悪くも高次なものへ昇華されていったということか。

ダイヤさんはさらに続ける。

「あなたが誰にも支持されなかったのも、わたくしたちが歌えなかったのも、仕方のないことなのです」

「ダイヤさん、それは……」

「いいのですわ。いつかは話さなければいけないことですから」

今度は千歌ちゃんたちの方が理解に追い付いていない。

「実は二年前、浦の星には既に統廃合になるかもという噂があったのです——」

それからダイヤさんたちの「過去」が語られた。

かつて浦の星にはスクールアイドルがあつたこと。

そのメンバーはダイヤさん、鞠莉ちゃん、そして果南ちゃんの三人だったこと。

そして千歌ちゃんたちと同じく、イベントに参加して、しかし、他のグループに圧倒されてしまい、歌えなかったこと。

「あなたたちは歌えただけ立派ですわ」

「じゃあ今まで反対してたのは……」

「いつかこうなることが分かっていたからです」

自らが経験したからこそ、それを伝えられた彼女たちの心情は穏やかなものではないだろう。

その夜のこと。

部屋に戻り、布団に転がって考えた。

「また明日から練習、だけど……」

完膚なきまでに叩き潰されたも同然の結果に、みんな立ち直ることが出来るのか。

「なあ、アंकも何か考えてくれよ」

「知るか。俺が考えるのはメダルのことだけだ」

薄情なヤツめ。今日は少し見直したと思ったのに。

「……そうだな。一つ言えるとすれば、人間はそんな簡単に欲望は捨てない」

「欲望は捨てない……」

もし、アंकの言う通りなら俺がやらなきゃいけないことは……。

「！ヤミーだ。行くぞ」

「こんな時間になんて迷惑な」

誰も起こさないように、こっそりと十千万を出た。

波打つ夜の海に立つ二人の少女、鞠莉と果南。

時間にして、丁度千歌たちがダイヤからスクールアイドルと、そして自らの過去を告げられていた頃だ。

「ダイヤと……それから耀太から聞いた。千歌たちのこと。どうするつもり?」

「それはこっちのセリフよ果南。学校にも来ないで、一体何をしているの?」

問答に次ぐ問答。

果南は答えない。

「わたしはまだ諦めないつもりよ。学校を救うにはスクールアイドルしかない、だから

……」

「無理だよ。ラブライブに優勝して学校を救うなんて」

「無理じゃない。千歌たちならそれが出来る。だから……果南」

鞠莉はそう腕を広げる。果南を抱きしめる為に、あの時の、あの頃のように。

「わたしは諦めた方がいいと思う。誰かが傷つく前に」

しかし、すれ違うように歩いていく果南はそう鞠莉に告げる。

「わたしは諦めない!必ず取り戻すの、あの時を!果南とダイヤと失ってしまったあの時を!わたしにとつて宝物だったあの時を……!」

鞠莉の表情は一変し、叫んだ。

けれどその悲痛の叫びは果南には届かない。

鞠莉と別れたのち、果南にソレが近づく。

『誰かが傷つく前に諦める』。賢明な判断ですよ、松浦果南さん」

「これはあなたの為じゃない。わたしの意志」

「分かっていますよ。ですが、真に誰も傷つかない為には……」

「……………」

男はそれだ言つて姿を消した。

「誰も傷つかない……………」

一人残つた果南はその言葉を反芻する。それがまたウソなのだと分かっているながら。

早朝。日はもう昇っているはずだけど、雲が空を覆っている所為でまだ暗い。

「千歌ちゃん？」

千歌ちゃんが海の方へ向かっていくのがベランダから見えた。

気になって後を追ってみると、そこに千歌ちゃんはいない。まさか……………！

「千歌ちゃん！千歌ちゃん！！」

精一杯の声を出して彼女の名前を呼ぶ。返事はない。

そんな……………千歌ちゃん……………。

しかし、そんな心配は杞憂だった。
海の中から千歌ちゃんが出てきた。

「千歌ちゃん……」

千歌ちゃんが早まらなかつたことに安堵し、胸をなでおろす。

「何してたの？」

「何か見えないかなって思って……」

「見えたの？」

「ううん、何も見えなかつた。でもね、だから思った。続けなきゃって。わたしまだ何も見えてないんだって。このまま続けても0なのか、それとも1なのか、10になるのか、ここでやめたら全部分からないままだって……だからわたしは続けるよ、スクールアイドル。だってまだ0だもん」

千歌ちゃんはわたしに笑顔を向けてくれる。だけどすぐにその表情は曇る。この空のように。

「あれだけみんなで練習して、歌も作って、衣装も作って、それからPVも作って。頑張って頑張って、輝きたいって……！なのに0だったんだよ!? くやしいじゃん! やっぱりわたし……くやしいんだよ……!!」

きつと今まで抑えていたものが爆発したんだ。必死にこらえて、けれどやっぱり自分

を誤魔化すことは出来なかつたんだね。

「差がすごいあるとか、昔とは違うとか、そんなのどうでもいい！くやしい!!」

紛れもない、心の底からの千歌ちゃんの気持ち。

「やっど——素直になれたね」

わたしは千歌ちゃんを抱きしめる。

「だつてわたしが泣いちやつたら……みんな落ち込むでしょ……？みんな、せつかくスクールアイドルやつてくれたのに……」

「バカね。みんな千歌ちゃんの為にスクールアイドルやつてるんじゃないの。みんな自分で決めたのよ」

いつの間にか来ていたみんな。曜ちゃん、花丸ちゃん、ルビィちゃん、善子ちゃん、慎司くん。そして今この場にはいない耀太くんとわたし自身も。

確かにきっかけをくれたのは千歌ちゃんだった。けどみんな自分の為にスクールアイドルを始めた。

それぞれが輝きたいと願って。

「だから一緒に歩こ。一緒に」

「今から0を100にするのは無理だと思う。でも、もしかしたら1にすることは出来るかも！」

わたしは千歌ちゃんの手を取る。そしてみんなも集まって来る。

「出来る！絶対に出来るよ!!」

不意に聞こえた彼の声。

それがした方へ視線を向けると、アंकさんの肩を借りて立っている、ボロボロの状態の耀太くんが。

「ど、どうしたの、その傷!？」

「ははは……派手にすつころんじやつて」

「いやこれは転んだってレベルじゃないでしょ!」

流石にその言い訳は苦しい。曜ちゃんにもツッコまれてるし。

「行こうみんな。Aqoursならきつと0のその先に行ける0のその先へ!」

「うん!輝こう、みんなで!!」

こうしてAqoursは再起した。

超えられなかった壁を今度こそ超える為に。

ただ、本当に哀しく、辛い事件が動き出していることに、まだ誰も気づいていなかった。

破られた約束と決別と悪しき力

朝、俺はソレを見つけて自分の目を疑った。

いつものように部室に入り、朝練の準備をしていると、一封の封筒が机から落ちた。

「退部届」差出人は「松浦果南」そう記されていた。

「耀太せんばーい？どうしたんすか、そんなところで固まって。早く行かないと、梨子先輩に……」

慎司はそこまで言つて黙る。その目線の先は俺の手元。退部届だ。

「それ……果南先輩の……？」

「そうみたいだ」

「どうして退部届なんて……」

原因があるとすればアレしか考えられない……。スクールアイドルしか。

「耀太くん、慎司くん？遅いよー？」

「ご、ごめん！今行くー！」

梨子ちゃんに呼ばれ、とっさにそれをポケットに突っ込んでしまう。

本当はこの時に伝えておくべきだった。

こんなことになる前に。

こうして今日という最悪な日を、俺たちは迎えてしまった……。

ホームルーム

朝のH R。

先生が何か話しているが、内容が頭に入ってこない。

誰もいないとなりの席。本当なら果南ちゃんがいるはずの席だ。

「松浦さん？さつき話したはずだけど、ちゃんと聞いてなかったのね？松浦さんなら休学届が出されたわ」

「休学……ですか」

「そうよ」

HR後、果南ちゃんのことを尋ねると先生からそう告げられた。

「もういいかしら？それから人の話はちゃんと聞くようにね」

「はい……すいません」

そういえばPVを撮影したあの時から果南ちゃんのことを見ていない。

やり取りもメールか電話で精々声を聞くくらいだった。

事情が分かる人がいるとすれば、ダイヤさんか鞠莉ちゃんだけど、

「ごめんなさい。わたくしもこのところ果南さんの姿は見えてませんの」

「そっか…、ダイヤさんも……」

「ただ、前に千歌さんたちの話をした時、一度だけ電話はいたしましたわ。その時に『ごめん』と一言だけ……」

また「ごめん」か。以前俺が話した時にも言ってたな。もしかしたら、いやもしかしなくてもこのことだったのかもしれない。

「鞠莉さんなら何か知っているかも知れませんが……」

鞠莉ちゃんはかなり落ち込んでいた。果南ちゃんの休学と関係は……。

「ダイヤさん、放課後、時間空いてる？」

「いきなりなんですの？」

「大事な話がある」

真剣な表情でダイヤさんを見る。俺の意思が理解出来たのか、

「それなら生徒会室まで来てください。そこで伺います」

「了解」

ダイヤさんと約束し、千歌ちゃんに部活を休む了承を得るため、メッセージを送ると「了解」の意のスタンプが返ってきた。

そして約束の時間、生徒会室を訪ねた俺は、

「まあ……そうなるとは思ったよ」

ダイヤさんの手伝いをしていた。

「みなさん部活との兼任で人手が足りないんです。それに、このくらい手伝ってくれないバチは当たりませんわ」

「実は寂しかっただけだったりして」

「違います！~~~~っ!!……そんなことより早く本題に……!」

机に思いつきり手バンし、その手を押さえ、痛そうにするダイヤさん。

「大丈夫?」

「……早く本題に……」

あまり迷惑かけるのも良くないので、すぐ終わらせて手伝おう。

「ダイヤさんたちのこと、スクールアイドルをやったって話だけどさ」

「それならこの間——」

「あれだけじゃ、ないんでしよう?」

「どうしてそう思いますの?」

いつになく真面目な雰囲気のダイヤさんだ。

ただ俺がこの答えに行き着いたのはただ単にアニメ時代のことを思い出しただけで、そんなこと言えるわけもなく、彼女が納得できるようなもつともなウソを吐いた。

「果南ちゃんってさ、一度や二度の失敗で簡単に何かを諦めるような性格じゃないで

しよ？そんな人がたった一回、ライブで歌えなかったからスクールアイドルをやめる、なんて言わないんじゃない。それはダイヤさんの方がよく分かっていると思うんだけど」

しばしの間、室内は静かになり、部活の掛け声が響く。そして、

「——耀太さんの言う通りですわ。わたくしたちがスクールアイドルをやめたのはあのライブが失敗したからではありません。本当の理由は——」

生徒会の仕事が終わわり、ダイヤさんと俺は帰路についた。話をしてくれたことのお礼と、遅くなってしまったお詫びも兼ねて彼女の家まで送っている。

「ありがとうございますわ、仕事を手伝っていただいたうえに、送ってくださいって」

「本当のこと教えてくれたんだし、これくらいやんないと。それに女の子を一人で帰したらなんて言われるか……」

「？何か言いましたか？」

「いや、何にも」

その話はそこで終わった。

それからしばらくは雑談を交わしながらの帰宅だった。主にオーズの。

しかも未だに信じてくれないらしい。

ダイヤさんに回収されたバツタクくんは、ひとまずダイヤさんとの緊急時の連絡手段としてある。そんなことなければいいのだけれど。

と、そうこうしているうちに、

「ここまで送っていただければ大丈夫です」

「そう、じゃあまた明日」

「はい、おやすみなさい」

そう言つて彼女は家に入つていった。

それからは早かつた。

近くでライドベンダーを見つけ、走らせる。

なるべく人気を避けられる場所へ（まあ大分いい時間だし、そこまで人はいなかつたけど）。

「タカー」

タカちゃん俺のところまで降りてきて岳に戻る。

「さてと、ここまでくればいいかな。出て来いよ、いるのは分かつてるんだ」

学校を出てからずっと俺たちを見ていた、追つていた追跡者。バツタくん不在のため正体は分からないが、大方グリードだろう。

既に暗くなっているうえ、街灯がほとんど無いのと、生憎の曇り空で誰かはわからないけど、足音が近づいてくる。そして、

「サメー・クジラー！オオカミウオ！」

オースと同じく、三枚のメダルの読み込み音と酷似したメダルのエネルギーに包まれた人影は、その変身を遂げた。

「……………きげんよう、島村耀太くん。いや、オース」

奴は槍、ディーペストハーブーンを携えて迫る。

「あんた、何者だ……………」

「おかしなことを聞くじゃないか。君は既に知っているはずだ」

「そうか。で、見たところ味方って訳じゃないよな！」

腰にドライバーを装着してメダルを三枚セット。オースキャナーで読み込む。

「タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

オースに変身しヤツを、ポセイドンを睨みつける。

「出来ればあなたが持つそのメダルを渡してもらえれば穏便に済むのですが……………」

「はいそうですか、なんて言うと思うか？」

答えはNOだ。直感が告げている、ヤツにメダルを渡してはいけなないと。

「そうですか……………残念です。あくまで抵抗するといふのですね」

闇の中でポセイドンの目が光る。

刹那、ポセイドンから威圧感が放たれる。

凶悪にして強烈。グリードたちのソレとは一線を画している。

メダジャリバーで先制攻撃を仕掛けるが、ディーペストハーブーンで受け止められる。そして跳ね除けられて、腹部に一閃。

腹に響く痛みには耐えながら次の攻撃。今度はそれを左腕で受けられる。それ以上斬ることが出来ない。

「何だこの硬さ……くそっ!」

相手からは余裕すら感じられるのに対して、俺は必死だ。力の差は大きい。

「ふっふっふっ……、流石はオーズの器。その力は素晴らしい。ですが、あなたはわたしには勝てない。絶対に」

「そんなこと言っているのか? どう考えてもフラグだぞ」

「果たしてそうかな?」

挑発にも乗ってくれやしない。

こんな時アंकがいれば……。

「そうそう、君のグリードのお友達のことですが、今かなり危ないかも知れませんかえ……くっくっく」

「なんだと!」

アंकが狙われているということは必然的に十千万に……。つまり千歌ちゃんや梨子ちゃんが……!

「ならお前を倒してすぐにでも……!」

「それは出来ません。もつとも出来たとしても手遅れだとは思いますが」
「やってみなくちゃ分からないだろう」

その言葉にポセイDONは頭を抱えながら笑った。

「何がそんなにおかしい」

「失敬、あなたがそんなに非情な方だとは思わなかったもので」

「非情だと?」

「そうです。あなたは自分のお友達をその手にかけることが出来るのでしょうか?」
友達を手にかける? 一体何のことだと思ひ、その意味に辿り着く。

考えうる限りの最悪答えに。

「……っ!」

ポセイDONはその半身をメダルへと還元し、その姿を見せる。

俺を睨むのはポセイDONではなく、松浦果南だった。

「どっして!?!」

俺の叫びは届かない。再び装甲に覆われ、槍を突き立てる。

「言っておきますが、彼女は自らの意思でこの力を、わたしの半身を纏っていますので悪しからず」

信じられないことをポセイドンは言い放った。

彼女自身の意思？自分でその力を……

衝撃の余り、棒立ちになる。

「スキだらけですよ！」

「くっ……！」

対処しきれず、斜め斬りが直撃。

その場に倒れ伏す。

「カハッ……！」

さらに蹴りを加えられて仰向けに。

一面に広がる黒い空。その隅からポセイドンの姿が現れる。

「そろそろメダルを頂きましょう」

ポセイドンは槍の先を下に向け、オーズのアーマーを纏う俺の身体へと突き立てる。

「ぎやあああああああつ!!」

アーマーは貫かれ、肉を抉られる。

「これは失礼。暗過ぎて手元が狂ってしまいました」

狂気を感じさせる笑い声が耳に届く。

二度、三度と刃が肉が裂き、血が溢れる。

これまでしてきた怪我とは比べ物にならない激痛が腹部から感じる。

「おやおや？ 苦しそうですね。これはやってしまいました。メダルを取るはずが、身体を刺してしまうなんて」

意識が朦朧とし始める。この感覚……前にも似たようなことがあったな……。

だけど前とは違う。明確に死が迫っている。このまま意識がなくなれば、そこで待っているのは誰だろう？ ロリ女神さまか、それとも別の誰かだろうか？

もはやどうでもいいことを思考していると、風が直接身体を打ち始める。変身が解かれたのだ。

「もうすぐ楽にしてあげますよ……」

ポセイドンが何か言っている。だけどそれを聞き取るだけの力は俺に残されていないかった。

「はああああ!!……まだ抵抗するのですか、自ら選んだ道だというのに」

もう何も見えない。ただ一つの光を除いて。

「——?!?なんだ!?!この光は!!」

光が収まり、視力が戻り始めると、ポセイドンは困惑した。

そして何かを悟ったように唸り、たった一人その場で立ち尽くす。

「……………の仕業か」

その場に残ったのは一人と半身。

そして目的を果たし得なかつた彼らはこの場をあとにしたのだった。
この世界から、島村耀太という青年の存在は完全に消失した。

願いの涙と約束と炎のコンボ

どこまでも広がるこの謎の空間。

そして二脚の椅子。一つはとても簡素で、もう一つは神々しさを放っている。椅子なのに。

てかここって……。

「久しぶりじやな、耀太」

聞き覚えのある声が俺の名前を呼ぶ。

「ロリ神さま!？」

「……ぬし、そろそろバカにしたような呼び方はやめぬか」

ええー、だってロリですし。

「はあ……それより、何故ぬしがこんな所にいるか、分かるか？」

「確か……」

ポセイドンと戦って……。

「あれ!?腹に傷がない!」

「そりやそうじや。今のぬしは謂わば霊体の状態。故に肉体はない」

「え……それってつまり……」

「間一髪じゃ。あと数秒遅れておったら今頃はあの世じゃな」

マジか……。前にもあったよな、こんなこと。

なんだかんだ女神さまには助けられればなしだな、俺。

「じゃが……身体の損傷はかなりなものじゃった。再生は出来たが、今降りたところで万全の状態で奴と戦うことは出来ん」

「そんな……」

早く戻ってやらなきゃいけないことがあるのに、それじゃあダメだ……！

「まあ、落ち着け。耀太、ポセイドンの言ったように今のぬしでは奴には勝てん」

「それは果南ちゃんがいるから……？」

「そうじゃ。ポセイドンは松浦果南の心のスキの弱さと願いに付けこみ、彼女の中で今の行為を正当化させている」

「じゃあ、自分の意思で変身したっていうのは……」

「ポセイドンの力が強く作用し、松浦果南の心を暴走させられている状態に近いのかもしれない」

……そんなの、そんなのってないじゃないか！

怒りが溢れ、拳を強く握る。

「早く戻りたいか？」

「当たり前だよ。俺がいない間に好き勝手やらせたくない！」

ロリ神さまはため息を一つ吐いて、

「——一つだけ、方法がないでもない」

俺は息を飲んでそれに答える。

「本当!？」

「ウソは言わん、神に誓ってな」

いや神はあんただろ、なんて無粋なツツコミはしない。

今はそれにかけるしかないのだから。

一体何が起こっている？

黒澤宅に集まった面々が思っていることだ。

始まりは千歌が、耀太が十千万に帰っていないことに気づき、梨子たちへ連絡したことだ。

曜たちが何も知らないとする中、ルビイからその話を聞いたダイヤが彼女らを招いたのだ。

一同からは不安や焦り、アंकに至っては、カザリの奇襲を受けメダルを奪われたた

め、苛立ちが頭になっっている。

「このような事態を招いてしまったのは、すべてわたくしの責任ですわ……」
「どういうこと、お姉ちゃん？」

「わたくしは昨日耀太さんと帰宅したんです。そしてその帰りにきつと……」
「どうしてダイヤさんが？」

梨子の問いにダイヤは「それは……」と少し間を置き、話し始めた。

「……耀太さんに話したのです。いつかあなたたちにした話の偽りと続きを」
「話って、ダイヤさんたちのスクールアイドルの……？」

花丸が言い、ダイヤは頷く。

「他のスクールアイドルのパフォーマンスに気圧されて、歌えなかった、と言いました。ですが、本当のことを言うと歌えなかったのではなく、歌わなかったのです」

ダイヤ、鞠莉、慎司、アंकを除いて驚嘆の声を漏らす。

しかし、またアंकを除く三人は表情が暗くなる。

「ステージに立った時、鞠莉さんは足を怪我していたのですわ。わたくしも果南さんも止めたのですわ。ですがいくら言っても鞠莉さんは聞かず、果南さんは……」

「で、でも！それなら怪我を治してからまた練習すれば——」

「それだけではありません。その時、いえ、鞠莉さんには度々留学の話が持ちかけられま

した。しかし鞠莉さんはその話をすべて断っていたのです」

「当然でしょ。留学なんてする気無かったもの。わたしは果南とダイヤと一緒にスクールアイドルを——」

「だからですわ。いつも思っていたのです。わたくしたちと一緒にいることで、鞠莉さんの未来が奪われてしまうのではないかと……」

三年間自分の中に閉じ込められていたダイヤと、そしてここにはいない果南の想い。誰でもない、鞠莉への。

「……ない。誰もそんなこと頼んでないっ!!」

語られた胸の内の言葉。それに反発するよう鞠莉は叫んだ。

「どこへ行きますの?」

「ぶん殴ってくる……!」

「おやめなさい。果南さんはずっとあなたのことを見てきたのですよ。あなたの立場も、気持ちも……将来も——」

しかし、鞠莉はダイヤの静止を振り切り、飛び出してしまいました。

「欲望と欲望がぶつかって、誰も得のしない結果が生まれたか。やっぱり愚かとか言えないよ」

アंकがダイヤと、走り去った鞠莉。そして果南をそう評する。

「アंकさん、そんな言い方——!」

「良いんです。梨子さん」

「ダイヤさん……」

「彼の言う通り、わたくしたちは愚かだったのかもしれませんが。一人一人が気持ちを閉じ込めて、想いあっているはずなのに傷つけて」

「想いと行いを省みる。」

「最善の策をとったつもりで、今こうして最悪の事態を招いてしまっていることを。」

「後ヨータのやつのことだがな、あいつは自業自得だ。勝手に戦いやがって」

「そう言えばさつきからメダルメダルってブツブツ言ってたけど、あんた何なのよ?」

「そうだなあ、ただのメダルの塊ってところか」

「善子に答え、アंकはその右腕を本来の姿へ変身させた。」

「や、ヤミー!」

「あんなのと一緒にするな。俺はグリードだ」

「圧をのせた声で言い残し、アंकは去っていった。」

「ねえ、善子ちゃん。ヤミーって?」

「そ、それは……シン!」

「は!?!ちよ、なんで俺に振るの!?!」

善子が不意に漏らしてしまった発言によって、少し賑やかになる。

また梨子が眉をひくつかせながら笑みを浮かべていると、

「梨子ちゃん梨子ちゃん、アंकさんって人間じゃないのかな？」

「さ、さあ？」

こちらも千歌に対して言葉を濁すのだった。

「どこへいくのですか？」

振り続ける雨の中、鞠莉の呼び出されて学校へと歩いていった。

「学校」

「何故です？」

「終わりにするの。全部」

「なるほど……。ですが、きつと彼は……」

男の言葉を聞き流し、足を動かす。

あの場所で、わたしが鞠莉とダイヤと三人ですべてを始めたあの場所で、何もかもを

終わらせる。

誰かが自分たちのようになる前に。

学校に着き、歩みを止める。雨はさつきより強くなっていた。

鞠莉の待つ部室に行こうと、再び歩きだそうとした時、

「来ましたよ」

男がそう言い、わたしはまた足を止めた。

「待ってよ、果南ちゃん」

背後からの声が尋ねてくる。

「浦の星で何をするつもりなの？」

「あなたには関係無い」

「関係無くない！だって——」

「関係無いっ!!」

わたしは彼に向かって強く叫んだ。

わたしとあなたは『敵』だから。

冷たい雨と風が肌をうつ。

だけど今はそれ以上に彼女の冷たい言葉が胸に突き刺さる。

「サメー・クジラー！オオカミウオ！」

ポセイドンへ姿を変え、見据えられる。

「戦うしかないのか……！」

心苦しく思いながら、オーズドライバーを装着。メダルを三枚挿入してスキャン。変身した。

「タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

あの姿には正直トラウマといっても差し支えないくらいの恐怖を感じる。なにせ、殺されかけたのだから。

ディーパストハーブーンを構えるポセイドンに対してこちらはメダジャリバーを構える。

お互いの間合いに入り、斬り合いを始める。

「どうしてこんなことするの!？」

「言ったでしょ？あなたには関係無い!」

武器同士がぶつかり、火花を散らして、金属音を立てる。

剣を弾かれ、後方へと跳ぶ。

「だから言っただろ！関係無くない!」

再び距離を詰める。

「千歌ちゃんたちが待ってる!それに鞠莉ちゃんとダイヤさんだつて——!」

「もう遅い!」

「——っ!」

初めのうちは互角に競り合っていたが、ポセイドンは長い柄を利用し、攻撃を当てて来る。

「もうわたしはみんなに会わない……。あなたを斃して、わたしも——」

ヤツの槍は俺を捕らえるが、俺の剣は空を斬る。

「そんなことさせない！」

「シングル！ スキヤニングチャージ！」

斬撃波を数回飛ばすも、ポセイドンもエネルギー波でそれを相殺。いや、ヤツの方が強いようで、斬撃波を貫通して俺に届く。

「はああああ!!」

メダジャリバーを投げ捨てて、トラクローを展開。エネルギー破をたたき割り、肉弾戦へと移行する。トラクローは武器だって？ 爪だから問題ない。

「なっ……!? めちゃくちゃな……!!」

「斃せるものなら斃してみろ！」

槍撃を左のトラクローで受け止め、右で攻撃。やっとまともな攻撃が通った。

ここから切り返し、攻撃をどんどん当てて、果南ちゃんを追い詰める。

「くはっ……!!」

「……………ここまでだよ。もう変身を——」

解いて、そう言葉にする直前、ポセイドンは不敵に笑う。その後、ヤツの身体からメダルが分離し蠢く。

メダルの塊はライオンクラゲヤミーに変身した。

「あの時のヤミー……」

そのヤミーは以前、カザリとともに現れた個体だった。

そして何故あの時、カザリが攻撃されたのか、理解した。

「このヤミー、果南ちゃんが親だったのか……」

「ええ。『彼女の大切なものを守りたい』という欲望を利用させていただいたのですが……やはりあの時は迷いがあったようでした……」

果南ちゃんではなく、あの時の声が答える。

「ですがご安心ください。彼女の中の迷いはもう——」

拳を強く握りしめ、身体が震える。

さつきまで感じていた恐怖ではなく、怒りで。

誰かの為の怒りがこれほど強くなったのは、この世界こゝに来てからはもちろん、生まれて初めてだ！

「ふざけんなああああつ!!」

ポセイドンに向かって走り出すが、大量のクラゲヤミーが立ちはだかる。

トラックローで薙ぎ払うが、数が多く、さらに電撃攻撃を仕掛けてくるため、本体のライオンクラグエヤミーとポセイドンに近づけない。

「勇ましいですね。ですがこの数を前にしてそれは無謀というものです」
くっそ！今すぐぶちのめしたいのに……！

「これじゃキリがない……」

かなり不利な戦況の中、ライドベンダーに乗ったアंकがやって来る。

「何もたまたましてる！ さっさとぶつ飛ばしてメダル稼いでこい！」

……何かあったのか、苛立っているのは目に見えて分かる。

「つて言われても……ガタキリバさえ使えば……」

ないものねだりは無駄である。しょうがない。

「そうだ！ チーターちょうだい！」

「ない」

即答かよ。てかないって……。

「カザリに取られた」

「はあ!？」

「お前が急にいなくなるからだ！」

ああ……昨日ポセイドンが言ってたな、そう言えば。

やっぱりカザリがアंकのところに来て……。それじゃあヤミーアレレに対するにはどうしたら……。

この状況は打破する為にどうすればいいか思考していると、

「クジャクー」

鳴き声……。というか名乗り？の機械音が聞こえてきた。

「なんだ？」

アंकが目を凝らし、俺もその方角を見る。すると、何かを何かを持って飛んできていた。

ソレは俺の方まできて、持っていたものを落としました。

「おっと……。これ、コンドル？でもこれだけじゃ……。…」

「そうか……。こいつを使え、ヨーター！」

「え？」

アंकが一枚、メダルを投げ渡してくる。こっちも両手でキャッチする。

「クジャクメダル!?これどうやって……。…」

「カザリが持ってた。一枚だけだったけどな」

チーター取られて、クジャクを取り返したのか。一体どうやって……。いや、今はそんなことより。

「これでヤミーとポセイドンを……！」

トラとバツタのメダルを抜き取り、クジャク、そしてコンドルのメダルを挿入する。バツクルを傾けて、オースキャナーを走らせる。

「タカ！クジャク！コンドル！タージャードルウー!!」

赤いフレアを発し、それを受けてタカヘッドはタカヘッド・ブレイブに変化。さらに翼を展開することの出来るクジャクアームに、真空波での攻撃が可能なコンドルレッグ。

胸部のオーラングサークルは分割されず、それぞれの特徴を持った一羽の鳥、火の鳥を模したものに。

タカ、クジャク、コンドルの赤の、アंकのメダルで完成する鳥系コンボ、タジャドルコンボに変身した。

「はあああ……はっ！」

クジャクフエザーを展開し、火炎弾を発射。クラゲヤミーを全滅させる。

「ウオオオオオ！」

ライオン^本クラゲヤミー^体が雄叫びをあげながら突貫してくるが、翼を広げて飛翔し、それを回避。空中で一回転してこちらからヤミーに突撃攻撃を二、三と繰り返す。

「ちっ……」

俺がヤミーを圧倒し、面白くないらしいポセイドンは舌打ちして、叩き落とそうとエネルギー波を飛ばしてくる。

対して俺は左腕を前にかざし、タジャスピナーを顕現させ、エネルギー波を防ぐ。

「お返しだ!」

タジャスピナーから発射される火炎弾をポセイドンとヤミーに食らわし、また上空へ。確実にヤツらを追い込んでいく。

「はあ……はあ……。バ、バカな……。この体はお前の仲間の女の子のものだぞ?」

「自分もいなくなる、なんてバカなこと言ってるヤツはぶっ飛ばしてでも止めるんだよ! 誰も……。誰も望んでなんかない! 何より俺が望まない!」

ポセイドンとヤミーを弾き飛ばし、再び上昇。

「スキヤニングチャージ!!!」

二度目のスキヤンで技を発動。コンドルレッグの能力を解放し、ポセイドンたちを目掛けて急降下。

プロミネンスドロップを叩き込む。

「セイヤーーツ!!!」

技は直撃、爆散してメダルが飛び散る。

「くっ……。貴様……。本気で……。!」

が、ポセイドンは倒れてはいなかった。もつとも無事ではなかったようだが。

「これが『俺の本気』だ。——果南ちゃんツ!!」

蓄積ダメージが許容範囲を超えたのか、仮面の一部が割れて、果南ちゃんの顔の半分が露わになる。

そしてそこからのぞく潤んだ瞳を見据えて叫ぶ。

「あの時の約束。今の俺の本気は、果南ちゃんがA q o u r sに入るだけの価値はあった!」

声には出さず、果南ちゃんは頷いた。

「果南ちゃんは、君はどうしたい?」

「わたしは——」

涙を流しながら、確かな声で彼女は答える。

「わたしはまた、千歌や鞠莉たちと……みんなと一緒にいたいっ!」

確信した。それは彼女の心からの願いだと。

「バカな……! わたしの力が精神に及ばないだど?! ……っ!」

翼を広げて高速でポセイドンの目の前まで飛翔、そして、

「はああああああつ!!」

ヤツの身体に腕を突っ込んで果南ちゃんの腕を掴む。

そしてポセイドンに取り込まれていた彼女を引きずり出し、抱きとめた。

「アंक！」

「アイツは野放しにしておくには厄介だ。ここで倒しとけ」

「言われなくてもそのつもりだ。よくも果南ちゃんをこんな目に遭わせやがって！」

果南ちゃんをアंकに預け、満身創痕のポセイドンを睨んだ。

わたしを助け出した彼は、またあの男とぶつかり合っていた。

あんなに酷いことを、惨いことをしたのにどうして……。

「どうして耀太は戦うの……どうしてわたしを助けようとするの……」

「ヨータはそういう奴だ。面倒くさい欲望を持って、面倒くさいやり方で叶える。アイ

ツ自身の欲望をな」

「耀太自身の、欲望……」

欲望という言葉を聞くと、あまりいいイメージが湧いてこない。

だけどわたしの中で、あの時耀太言ったことが思い出された。

——見てみたい。千歌ちゃんたちが見る世界を、俺も。これは誰の為でもない俺の為

にやるんだ——

——千歌ちゃんと手を繋いで、誰に手を伸ばして、誰と繋がって、誰と輝くのか、知

りたくてしようがないんだよ！——

正直、無謀だと思った。

出来るはずない。必ず挫折するって。

だけど彼の目はそれを言わせなかった。

そして折れることも無かった。

今も、敵に臆することなく、炎を纏って闇を全てを焼き尽くしてくれた。

「依り代が無くとも貴様程度……っ！」

満身創痍で槍を構えるポセイドンに対して、

「お前こそ、もう立っているのがやっつとだろう。だけど許すわけにはいかない！」

三度^{みたび}飛翔し、ドライバーからメダルを外す。そしてそれをタジャスピナーにセット

し、スキャンする。

「タカ！クジャク！コンドル！ギン！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン!!」

鳥型の炎エネルギーを纏い、ポセイドンへと突撃。

「セイヤー……ッ!!」

ポセイドンはこれをディーペストハープーンで防ぐ。

「この程度……跳ね返すことなど造作も……！」

「出来ない！人の欲望を利用して、欺くようなお前にこの攻撃は跳ね返せない！跳ね返

させない!!」

ピシッ、バキンッ。

「ツ!? バカナ! こんなはずでは——!」

柄が音を立てて折れ、攻撃はポセイドン本体に直撃。先程のヤミーと同様、セルメダルが散つてさらにコアメダルが飛んでくる。

が、三枚のコアメダルはキャッチした直後に砕け散つた。

「終わったな……」

ポセイドンの気配が消えたのを確認し、アंकの方へ歩きだす。

「早くしろヨータ」

「はいはいっと! 危ないだろアंक、女の子を投げちゃ」

「それよりメダルだ。早く返せ」

「ほら」

アंकから果南ちゃんを引き渡され、俺はメダルをアंकへ返す。

「これで二枚。プラマイゼロか……」

……なんか気になる発言があつたが、それは後で聞くことにしよう。

今はそれより、

「耀太……」

「終わったよ。行こう、きつと鞠莉ちゃん待ってるんじゃない?」

「う、うん……」

俺から離れて立とうとするが、ふらつく。

「まだ回復しきつてないんだ。俺が連れてくから。よつと」

果南ちゃんをおぶさつて歩き出す。

「ちよ、耀太!?!わたし重いから!」

「そんなことないさ。あれだけのこと日常茶飯事なんだから」

こうしてひとまずの平和が訪れた。

果南ちゃんたちは仲直りし、改めて三人をAqoursとして迎え入れることになった。

まあ正確には初代Aqoursが戻って来たつてところなんだけど。

それから、

「耀太くんが三色の戦士だったなんてね。確か……“オーズ”だっけ?」

「むうー、黙ってるなんて酷いよ、耀太くん!」

「変に喋ってみんなに危害が及ばないようにと思つてたんだけど……」

ジツと慎司の方を見る。下手な口笛を吹いていた慎司の目は完全に泳いでいた。

「そ、それより早く練習しないとだろ?夏祭りでのライブもしなきゃいけないだし!」

話をそらしやがったな。今月分のアングのアイスは慎司に払ってもらおう。

今回の件はいろいろなことがあった。

大変だったなことばかりだったけど、一切のわだかまりは無くなり、彼女たちの笑顔が見れるなら――。

「耀太、私たちも行こー！」

走り出すみんな。

果南ちゃんに背中を押されて、女神さまから受けた力の反動の痛みを耐えながら、明日も平和であることを願うのだった。

海の家と合宿とシャイ煮

夏休み。

それは学生が送る生活の中で、最も長い休暇である。

長い理由はいろいろあるみたいだけれど、それも彼らには関係はないようで。

「暑い……」

本日は雲一つない晴天。セミは休みなく鳴き続けていた。

「……なんかセミが鳴いてると夏つて感じするよね……」

「暑さも倍加してる気もするけどね……」

学校に集められた内、五人が暑さに堪こたえていた。

「ダイヤさん、急にどうしたの？みんなを呼び出したりして」

「ふっふっふっ……みなさん、ついに今日から夏休みですわ！」

「Summer vacationといえぱー？」

鞠莉ちゃんとダイヤさんが尋ねてくるが……。

「えーつと……海？」

「夏休みはパパが帰ってくるんだー」

などなど、一部省略するが誰一人まとまった答えが出てこなかった。
ダイヤさんはプルプルと身体を震わせる。

「ぶつぶーですわ！あなたたちそれでもスクールアイドルですの!?!片腹痛い片腹痛いですわ!!」

いつになくテンションの高いダイヤさんは、またいつになくご立腹である。

所変わってスクールアイドル部の部室。

ホワイトボードに貼り付けられていたのは、見たことのあるスケジュール表で、
“A
ours”の張り紙が追加されたものだ。

「夏と言えば、ルビィ?」

「多分、ラブライブ!」

「正解ですわ!可愛いでちゅわー。いい子いい子でちゅねー」

赤ちゃん言葉でルビィちゃんの頭を撫でる。

今までのthe生徒会長とも言うべきダイヤさんから一変、妹に甘々デレデレな親
バカならぬ姉バカにジョブチェンジしてしまった……。

「ちよつとつい最近までとのギャップが……」

「何この姉妹コント……」

「コント言うな!」

いや、うん。仲がいいのはいいことだよね……。

「コホン……夏と言えばラブライブが開催される季節。それに参加する為、わたくしたちはこの特訓を行います！」

「なるほど、だからダイヤさん、今日は朝からテンションが高かったのか」

「その通りです。そしてこれはわたくしが独自のルートで入手した、“μ³”の特訓メニューです！」

うわあ……やっぱりかあ……。

「遠泳十キロ……」

「ランニング十五キロ……」

ああ……μ³の歌詞担当の方が考えた鬼畜とも言えるこの練習メニューをお目にかかれるとは……。

でも普通の女子高生がこんなメニューこなせる訳……

「ま、なんとかなるでしょ」

……こなせる訳ない……よな？

「ダイヤさん、何でこんなやる気なの……」

「多分、今まで我慢してた分が一気にシャイニーしちゃったのかも」

これには流石に苦笑せざるを得ない。

「あ」

その曜ちゃんが何か思い出したみたいだ。

「そう言えば海の家の手伝いをお願いされてなかった？」

「ああー！自治会で出してる海の家のお手伝いがあるのです！」

「ん、なんかしてたね、そんな話」

「あ、そう言えばわたしもだ」

「決してサボりたいという訳では無いのですが……」

「そのスケジュールでは……」

先約がある以上、詰め込まれたあのメニューには参加出来ない。なかったとしても出来るかどうかは別だが。

「ていうかこんなクソ暑い中で、その練習は……」

慎司の発言に、ダイヤさんは「そういうと思っていました」と言わんばかりに、怪しい笑みを浮かべる。

「なら夏場でも涼しい、Morning and eveningにすればいいじゃない」

「でもそれだと時間が……」

「その問題を解決する方法が一つありますわ」

ダイヤさんと鞠莉ちゃんを除く全員が唾を飲む。

「合宿ですわ!!」

「合宿かあ、確かにいいかもしれない。みんなで集まっていれば、朝と夜は練習、昼は手伝いが両立できるしね。それで場所は？」

尋ねるとダイヤさんはだんまりになる。

「え? え? 場所まだ決めてないの?」

「それは……」

「じゃあウチなんてどう?」

困り顔のダイヤさんに助け舟を出したのは千歌ちゃん。

「ウチなら頼んで一部屋くらい借りれるし、すぐ目の前が海だし」

「異議がある人は……いないみたいだ。じゃあダイヤさん、いつから——」

「早速明日の朝四時に集合ですわ!」

「早っ!? てか朝四時!?!」

かつてない早さで、かつてないテンションのダイヤさんは早朝四時という早過ぎる時間設定。

この日は解散となり、翌日から合宿が始まった。

ちなみに、時間までにちゃんと来たのは花丸ちゃんだけで、言い出しつぺのダイヤさ

んは来なかった。

天高く登るお天道様。

照らされて輝く紺碧の海と白い砂浜。

そして目を開ければ、九人の水着美少女が！

「生きててよかったなあ……」

「そうですね……」

誰かの為に戦う戦士といえど、一度その鎧ひたびを脱げば、健全な男子高校生なのだ。

そんな俺たちからすれば、ここはパラダイス。戦いで作った傷（女神さまが治してるけど）を癒し、さらに目の保養にもなる。

これで泳ぎが苦手じゃなかったら百点満点だったんだけど……まあ、それでも至福な時であることに変わりはない。

「耀太耀太！どう、似合ってる？」

サーフボードを持ってやって来た果南ちゃん。

「うん、水着も可愛いし、サーフボードもカッコいい！」

「ありがと！耀太も似合ってるよ」

「そうかな？」

こんなやり取りを女の子の子としてるとどうしても思ってしまう。

俺、今スツゲネリア充してる！前にもあつたな、こんなこと。

「耀太先輩……リア充ですな……」

一方こちらは妬みオーラ全開でジツと見てくる。

「やっぱそう見える？」

「爆ぜてしまえ！」

今までずつと殺伐とした戦いの中にいた所為で、こんな感情久しく忘れていた。

「みなさん完全に遊んでいますわね」

「それだけ平和ってことだね」

「それはそうと、海の家のお手伝いは午後からでしたね！はて？わたくしたちが手伝う

お店はどこに——？」

わざとらしくキョロキョロするダイヤさんに慎司が、

「現実を見なよ。やるべきことは現実の先にあるんだ」

黒衣を纏った賢者が言いそうな言葉と共に、厳しい現実を再確認させたのだった。

「ボロボロ……」

「それに比べて……」

こちらの店は、漫画でもよく出てきそうな雰囲気のお店なのに対して、となりは華やか

な感じだ。

「都会ずら〜」

「うん？あそこにいるのアンクか」

「今日はかき氷か……。しかし流石というべきか。よくも女の子だらけの所で冷静でいられるよ」

「ダメですわ……」

既に身内が一人（かき氷に）取り入れられてしまっている。それを踏まえても、こちらはかなり不利だろう。

「都会の軍門に下るのでーすか!？」

そんな敗北感漂う空気を壊したのは鞠莉ちゃんだった。

「わたしたちはラブライブに出場するのでしょうか？なら、あんなチャラチャラした店に負けるわけにはいかないわ!」

「よく言いましたわ、鞠莉さん!」

「ここがアニメならカッコいいS Eが鳴りそうなシーンだ。

「これ……何……?」

千歌ちゃんと梨子ちゃんが宣伝の為の（センスが爆発している）格好をさせられた。

「これでお客を集めるのですわ!聞けば去年の売り上げも隣の店に負けたとか。ですか

「ら今年はわたくしたちが、この店の救世主となるのです!!」

店の屋根に登ったダイヤさんが熱く語る。

「九人の救世主……キュウレⁿ」

「ストツプそこまでだ」

変なこと（少なくともこの世界では）を口走りそうになった慎司を止める。

「果南さん！耀太さん！」

上から飛び降り、俺と果南ちゃんに迫る。

「あなたたち二人はこれを持って客引きですわ！」

「だ、ダイヤ……？」

果南ちゃんはかなり引き気味である。

「女性の魅力を十二分に持っている果南さんと、校内の女子からの人気が高い耀太さんでドシドシお客を連れてくるのです!!」

「待ってダイヤ（さん）その話詳しく!!」

果南ちゃんとハモる。そして何故か彼女はすぐに顔を逸らした。

「浦^{うら}の星は元々女子校。共学化したとはいえ、男子はまだたつたの二人。しかもルツクスが良くて気遣いが出る男性に、惹かれない女性のが少ないですわ」

「そんなアホな……気遣いって……俺は普通にしてるつもりだし……それにイケメンの基

準が低すぎない？」

「とにかく二人が適任なんです。よろしくお願いしますわね」

何を言おうが、ダイヤさんは諦めないだろう。仕方ないので、言う通りお客の呼び込みを開始した。

さらに料理担当は、曜ちゃん、善子ちゃん、鞠莉ちゃん、慎司の四人に当たり、曜ちゃんはヨキソバを、鞠莉ちゃんはシャイ煮を、善子ちゃんは墮天使の涙を、そして慎司は仮面ライダーのキヤラ飯を作っていた。

ヨキソバとキヤラ飯はかなり好評だったようで、その二品は完売したのだった。

そして夕飯になったのだが、この日の夕飯は昼に売れ残ったものということになった。

「なんでこんなに作ったのか疑問を覚える……」

「申し訳ない」「でーす」

反省はしているようなので咎めるのはやめておこう。

「売れなかったのは……まあ見た目だよね」

「でも味は分からないし、食べてみたら意外と美味しいかも！」

というわけで実食。すると、

「おおおっ!!」

なんだこれ!? シャイ煮美味っ!!

見ただけでは分からなかったけど、本当に美味しい!

花丸ちゃんはかなりガツツリ、アングの舌にも合ったようで、全員から好評だ。

しかし問題はその値段の方で……。

「美味しい……けど、これ一杯いくらくらいなんですか?」

梨子ちゃんが禁断の問いを投げかける。

「うーん……十万円くらい?」

三人を除き、全員が吹き出す。

「た、高過ぎません!?!」

「そう? 普通だと思っただけ」

指すがお嬢様。感覚が違い過ぎる。

「これだから金持ちは」

果南ちゃんはその気持ち、すっごく分かる。

「じゃ、じゃあ堕天使の涙はつと……」

ソレを口に運んだルビィちゃんの顔は見る見るうちに赤くなっていき、終いには叫びながら外に飛び出してしまった。

「善子さん！一体あれには何が入っていますの!？」

「タコの代わりにタバスコで味付けをした、これぞ墮天使の涙——！」

ルビイちゃんには申し訳ないが、心の底から安堵した。

「食わなくて良かった……。ん？」

あちらが賑わっている一方、千歌ちゃんたちは部活の話をしていた。ラブライブの予備予選がもうすぐの為の新曲のことだろう。

あまりよく聞き取れなかったが、どうも歌詞の方が出来ていないらしい。

後で俺も手伝おう。

翌日。

今日もまた客引きだ。

本当にダイヤさんの言った通り、お客さんが集まってくる。

「賑わっておるのう」

……聞き覚えのあるというか、最近も聞いたばかりの声だ。

「女神さ……っ!？」

「どうした?？」

いやどうしたじゃねーよ！

まじビツクリだわ！

声は同じなのに、容姿が全く違う。いつものロリショージョの姿ではなく、大人の女性だ。

「そうか！すまんすまん。下界に来る時はこの格好大人モードで来ているから……驚かせてしまったな？」

いたずらっぽく女神さまは言った。

大人モードって……リリカルな魔法少女の娘か。

「少し待っておれ。デバイスの設定を変えてと……」

女神さまが操作しているのはうさぎのケースに入れられたスマホのようなデバイスだ。いやそのケース、マジで聖ウ○サイオ王リスペクトしてくるのかよ。

「設定完了じゃ。これで他の人間にはさっきの姿のままで見えている」

いつものロリっ子に戻ったロリ神さま。

「いろいろとツツコみたいけど、まず何でここにいるのか説明してもらえるとありがたいんですが……」

「わらわも今日から夏休みでな。ぬしらを見守るついでにわらわも下界で遊ぼうと思ったんじゃよ」

「なるほど」

神さまにも夏休みつてあるんだな。

「それにしても大変じゃったの」

「大変なんてもんじゃないさ。もう二回も死にかけてるし、メダルだつて二枚手に入れたけど、結局二枚は取られてるからプラマイゼロだし」

おまけに取られたのはライオンとチーター。カザリは俺の持つトラを最後に完全復活を目前にしている。

「そうじゃったな。じゃがポセイドンを退けたのは見事だつたぞ。奴はカザリに協力している。その半身を失うのは大きいじゃろう」

奴がライオンクラゲヤミーを従えてるのを見て、それはなんとなく分かった。

そのうち本人とも戦わなければいけない。

「ま、そんな難しい顔はするな。どうせ今は襲つてこないし、カザリ相手でもわらわの恩恵の上からコンボを使えば互角に戦うことは出来るじゃろ」

「やだよ！ 効果切れた後めちやくちやしんどいんだもん！」

実際タジャドルコンボに変身して、二回技を発動しても、身体への負担は全くなかったが、変身解除後しばらくしてから少しずつ来て、その後一日はほとんど動けなかった。「あれは本当にヤバい時だけでお願いします」

「分かった分かった。と言っても今のカザリと戦うことになったら、それ自体ヤバい気

もするが……」

ああ……どつちにしろお世話になるかもしれないのかよ……。

「ところで……」

「うん？」

「さつきからジツとこつちを見ている娘むすめがおるんじやが……」

うん、さつきからずつと見てるもんな、果南ちゃん。

ちよくちよく何でなのか考えてはいるけれど、ある一定まで達すると、思考が止まる。答えに辿り着いてはいけないような気がして。

そんな考えをよそに、俺と果南ちゃんを二度程見直し、女神さまはニヤニヤし始める。

「……なんか良くないことを考えてない？」

「うーん？何も考えおらんよ？」

うん、怪しい。おもむろに果南ちゃんの方へ近づいていく。

いやマジで何する気だ!?

「こんにちは。あなたが松浦果南さん？」

「え、あ、はい……」

「耀太がいつもお世話になってます」

ぺこりと一礼。……誰だあれ。

「い、いえこちらこそ……あの、耀太のお母さんですか？」
「耀太の叔母です」

何勝手に設定してんの。てか本当にあの女神さまなの!?
何気なく大人モードに戻ってるし。

「それにしても……こんなに可愛らしい方が耀太のガールフレンドなんて」
「……………」

多分脳の処理が追いついていないのだろう。数秒間フリーズした後、赤面させていた。

「ちよ、何勝手なこと言ってるのさ!」

果南ちゃんから湯気が出ている。周りの声は聞こえていないと思うが、念の為小声で話す。

「別にいいじやろ。女神として、少女の手伝いをじやな……」

「手伝いをじやな、じやねーよ!海にでも潜って頭冷やしてこいよ!」

とんでもない爆弾を置いて、ロリ神さまは海の方へ歩いていったのだった。

「果南ちゃん……う?おーい、聞こえますか?」

そう声をかけると、

「が、ガガガガ、ガールフレンドな、ななななんて……」

某カードゲームのモンスターの名前を読んでいるみたたく、言葉を上手く発せてない果南ちゃん。

しばらく十千万に滞在するという女神さまには、それなりの制裁を受けてもらおう。

「う、海行こう、耀太！」

「え？ちよ!?!」

そして俺はというと、果南ちゃんに手を引かれて、海へダイブ。

無事溺れて助けられたのでした。

実はこの時、梨子ちゃんに転機が訪れていたのだけど、それを知ったのはこの合宿が終わった頃だった。

友情と奪えないモノとひとつの想い

「どうして俺もこんな面倒なことをしなきゃならない！」

ヌルヌルとしたプールの中に立って、苛立ちで震えるアंक。

その手に握られているのは、アイス……ではなく、清掃用のモップである。

次のシーンはここに至るまでの話である。

東京で開かれるピアノコンクールに参加する梨子ちゃんを送り出す為、スクールアイドル部全員＋αで沼津駅へ。

「ちっ……なんで俺まで……」

一名苛立っていたが。

「そんなカッカすんなって。お前だって梨子ちゃんとは長い付き合いなんだからさ」

「ははは……」

もはやお馴染みになってきた俺とアंकのやり取りに、梨子ちゃんが苦笑する。

「そうだよ、アंकさん。友だちなんだから」

「勘違いするなよ。俺がお前たちといるのは、利用価値があるからだ」

「はいはい。そういうことにしといてあげる」

すげえな、千歌ちゃん。日に日にアंकの扱いが上手くなってる。アंकが上位に立てる日は来ないんじゃないだろうか。

「梨子ちゃん、しつかりね！」

「うん！」

とまあ、こんな感じなのだが、このプール掃除に参加させられていることに、アंकが憤っていたのだ。

「人手も男手も足りないんだ。分かったらさっさと掃除する」

そんなアंकに喝を入れたのは、意外にも慎司だった。

けれど、今のアंकにはまさしく、「火に油を注ぐ」発言だったようで、モップを捨てて慎司に突っかかる。

「やめてください、アंकさん！ 慎司さんの言う通りです！ 梨子さんが不在の今、より多くの人の力が必要なんです！」

制止をかけるダイヤさん。彼女の言い分は最もなのだが……。

「確かにちよつと面倒くさいよね」

果南ちゃんがアंक側になる意見をする。

「だから夏休みに入る前に言ったのに、『プール掃除どうにかしないとー』って」

さらに鞠莉ちゃんが追い打ちをかけ、ダイヤさんが「うっ」と痛いところを突かれた

と声を漏らす。

「だ、だからこうしてどうにかしてるんですわ!」

ははは……。そうね、確かにどうにかはなってるけど、これ俺たちが手伝わなかったらかなりやばかったんじゃないか?

愚痴をこぼして、文句を言っつて、時々ふざけて怒られて。なんだかんだでプール掃除は終わりを迎えた。

「ねえ、ちよつとここで練習してみない?」

誰かがそう言うのと、流れでそのまま少し練習へ。

もちろん滑って転ばないよう注意は払った。

「うおっ!」

……払った。

「大丈夫、耀太?」

「イテテ……ありがとう果南ちゃん」

差し出された手を掴んで起き上がる。お尻痛てえ……。

「気を付けてね」

「うん……」

ロリ神さまの悪ふざけ以来、少し避けられることがあったが、またこうして以前のよ

うに接することが出来ている。

あの女神はまだ下界に滞在しているが、あの日ちゃんと釘は指しておいたし、あんなことはしないだろうけど。

予選に向けての練習が始まったのだが、

「あ、ごめん、曜ちゃん！」

「ううん、大丈夫だよ。もう一回やってみよう！」

少し……というか大分違和感があるフォーメーションだ。

理由は言わずもがな。

「ごめん、曜ちゃん……。どうしても梨子ちゃんの時のステップになっちゃって……」

梨子ちゃんの名前に反応するように、曜ちゃんの表情が少し曇る。よく見ないと分からないほどだけど。

「……………」

けど結局、練習が終わったその後もしばらくいつしよにいたにも関わらず、彼女にそれを聞くことは出来なかった。

今日ほど、こんなに胸の奥がもやもやしたことは無い。

どうしてなのか。答えは簡単だった。

わたし、嫉妬してるんだ。

鞠莉ちゃんに言われて、わたしは自分で自分が嫌になった。

小さい頃から、いつもみんなと、千歌ちゃんと同じことがしたいって思ってた。

だからあの時、スクールアイドルに何かを、輝きを感じて、千歌ちゃんと一緒に出来るんだって思えてすごく嬉しかった。

でも、千歌ちゃんのとおりにはいつも梨子ちゃんがいて、耀太くんやアंकさんがいて、気付いたらみんながいた。

そしたら、もしかしたら千歌ちゃんは、わたしと一緒に嫌なのかなって……そう思うようになって。

——そんなの

そんなの嫌だ——

「奪われたくないか？」

「え」

突然、緑衣に身を包んだ人がそこに現れた。

いつの間にか、その時のわたしには考えられなかった。

そしてその人は、怪人へと姿を変えて、だけどわたしは立ち尽くしたままで。

ただ奪われたくないって、失いたくないって想ってたから。

「だったらその欲望、解放しろ」

きつとその言葉に負けてしまった。

その声が聞こえなくなっていたら。

「曜ちゃんっ!!」

わたしを正気に戻したのは、大好きで。

「危機一髪つてところかな？」

「大丈夫だった？何もされてない？」

優しい友だちだった。

二人の優しい声を聞いたなら、熱いものが頬を伝って、止まらなくなった。

「な…!?!ウヴァ、よくも曜ちゃんを泣かしたな！」

「タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ!!」

耀太くんが変身すると、怪人は耀太くんの方へ跳んで、戦い始める。

千歌ちゃんはそのれに巻き込まれないよう、わたしを二人から離してくれる。

「大丈夫だよ、曜ちゃん。きつと耀太くんが——？」

わたしを想ってくれている友だちを疑うなんて、わたし、バカだ。バカ曜だ。

「ごめんね！」

「よ、曜ちゃん？」

わたしは千歌ちゃんを抱きしめた。

「ごめんね、ごめんね……！」

精一杯の声を絞り出しながら、ぎゅつと。

千歌ちゃんのお願いで、曜ちゃんの家まで千歌ちゃんを送ったら……。

「な……!? ウヴァ、よくも曜ちゃんを泣かせたな！」

「タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ!!」

「俺はあの人間の欲望を解放してやろうとしただけだ！」

なおタチが悪いわ！

メダジャリバーを引き出し、ウヴァと競り合う。

「だが丁度いい。俺のコア、返してもらおう！」

「それはこつちのセリフだ！」

剣と鉤爪が激突し、火花を散らす。

鉤爪を弾き飛ばして、一閃する。

しかしウヴァはそれを跳んで避け、蹴りによる一撃を食らわせられる。

「くう……やっぱり強え……だけど……」

歯を食いしばって立ち上がる。

「絶対に負けられない……!」

「まだ立ち上がるか」

「当たり前だよ。大切な友だちを、二度も利用させるわけにはいかないんだよ!!」

トラクローを展開して、再びウヴァに食らいつく。

ウヴァの鉤爪を左手で弾き、右手のクローで斬りつける。が、右腕、左腕と掴まれて膝蹴りが腹部にヒット。

さらに背中に一撃。倒れ伏す。

「これだけ痛めつければ——!?!」

だけでもう一度、立ち上がる。

「言っただろ、大切な友だちを利用させるわけにはいかないってっ!!」

身体の所々が痛い。だけど、この間に比べれば、この程度どうってことはない。

「これで終わりにしてやる!!」

ウヴァがフラグ臭漂うセリフを吐いて、一撃。

俺も同時に一撃を加える。

互いに弾かれ、そしてウヴァの手に一枚、俺の手に二枚が握られている。

ウヴァの上半身が弾け飛ぶ。

「グハ……俺のコアが……」

ダメージは相当大きかったようで、膝から崩れ落ちる。

「ここは一旦退いて——っ!？」

退散しようとしたウヴァにむかって放たれたセルメダルのエネルギー弾は全段命中。逃走を阻止する。

「間に合ったみたいだな」

「みたか！百発百中の名狙撃手の力！」

足止めしてくれたのは、バースバスターの銃口をフツと息を吹きかける女神さま（大人モード）だった。

「ヨーター！絶対逃がすな！コンボで一気に決める!!」

そして女神さまが連れてきたアंकが投げたメダルをキャッチ。それをドライバーに装填する。

「サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーズ！サゴーズ!!」

「くそ！覚えてい——」

「逃がすか！はああああああっ!!」

跳んで逃げようとしたウヴァに重力波を向け、引きずり込んで思いつきり、

「や、やめろおおおお!!」

「セイヤー——ッ!!」

地面にめり込ませるイメージで、ウヴァにゴリバゴーンを振り下ろした。

「うわあああああつ!!」

ウヴァは爆散、ヤツが持っていたコアメダルが弾け飛んで、アंकと女神さまが全て

回収した。

予選当日、八人と三人は無事に今日を迎えることが出来た。

「やっぱりここは質の良い欲望が多いな」

「今ほどお前がヤミーを作れなくて良かったと思つたことは無いぞ」

心臓に優しくない発言をするアंकと、それに冷や汗をかく俺と慎司。

そして衣装に身を包んだみんな。

全員、その右手首にシユシユを付けている。梨子ちゃんが送ってくれたものだ。

離れていても、想いはひとつ。

この時確かに、みんなの心はひとつだったんだと、俺は思う。

μ ⊠ s と A q o u r s と進む道

松月にて、俺たちはラブライブの予備予選突破グループの発表を待っていた。

なんとなく分かつてはいいたけど、みんなソワソワして落ち着きが無い。

「あーもう落ち着かない！わたしちよつと走ってくるー！」

「果南ちゃん、結果分からなくていいの？」

「うう……」

結果を知りたい欲求と落ち着きたい欲求が天秤にかけられているようだ。

「なんで耀太はそんなに落ち着いてるの!？」

「おわつ!?! どうどう果南ちゃん……落ち着いて。あと顔が近い……」

「い、いめん……」

少し顔を赤らめて遠ざかる果南ちゃん。周りで何人かがニヤニヤしている。あとちよつと今にも刺してきそうな視線も一つあるんだけど……。

「俺が落ち着いてるのは、普段から緊張感のある戦いばかりしてるからだと思うよ」

もうこの世界に来てから何度死にかけたことか。

死線すら超えればこのくらいでは、なかなか動じなくなってくる。

まあ、それ以外にも理由はあるんだけど。

「来たー！」

とはいえ万が一はあり得るため、その結果が気にならない訳では無い。

俺や慎司も含めたアイドル部全員が、たった一つのスマートフォン画面を、その目で穴が開くんじやないかと思えてしまうくらい凝視する。

「ライブ予備予選突破……」

「Aqoursの“あ”ですわよ！あーあー！」

ダイヤさんが壊れた。てかAqoursなら“あ”じゃなくて“A”じゃね？

なんてどうでもいいことを考えていると……。

「イーズエクспレス……」

「落ちた……!?!」

「そんなあ……」

自分たちの名前を確認出来ず、お通夜ムードに突入しかけたが、

「あ、エントリー番号順だった」

というボケをかました曜ちやんだった。

気を入れ直してもう一度。

画面を下にスクロールしていく。

イーズエクスプレス

グリーンティーズ

A q o u r s

海音おとめ

………

さつきとは一転、全員の表情が明るくなる。

憧れのステージにまた一歩近づいた。その喜びはとても大きいだろう。

舞い上がっていると、千歌ちゃんのスマホの着信音が鳴る。相手は……まあ、分かりきっていることだな。

『予選突破おめでとう』

電話越しに聞こえてくる梨子ちゃんの声は、とても優しく、そして自分もやりきったと感ぜられる。

きつと梨子ちゃんもピアノを弾くことが出来たのだ。

「これなら学校説明会も上手く行きそうだね」

「学校説明会？」

「Yes。Septemberに開く予定なの」

「これならば説明会に参加したいと思う人も増えるだろう。」

しかし胸に膨らむ期待は、そうそうに破られることになる。

鞠莉ちゃんが自分のスマホを操作し、浦の星のホームページを確認すると。

「……0」

「え」

「0だね……」

「えええええ!?」

夏空の下、俺たちの声が木霊した。

やっぱり0。

Aqoursがこの数字を叩きつけられるのは、これで二度目だ。

分かっていたとはいえ、やりきれないのは確かだ。

「何がいけないんだろうな……なんて、考えるのも無駄だよな」

音乃木坂を救ったμ☒sと浦の星を救いたいAqours。

アニメとして見てた頃は、この二つのグループは何が違って何が同じなのか、どんなところが似ているのか、友だちと議論することが何度かあった。

その時はいろいろ似ていると思うところがあつたけれど、今はどうなんだろう。

彼女たちと友だちになって、同じ時間を過ごして。

μ□sのことは、今も客観的にしか捉えられてない。だけどAqoursは……。
「耀太、準備が出来たぞ」

そこまで思考したところで女神さま（大人モード）に呼ばれる。

μ□sとAqoursの相違は一旦保留。

女神さまと彼女の泊まっている部屋にむかう。

「ヨータ、この女は何者なんだ？」

部屋では既にアंकが待機していた。

「そうだな、端的に言えば神」

「は？」

そんな反応をされるのは薄々というか、普通に分かった。

意味が分からないという顔をするアंकは置いて、女神さまは一枚の封印された

コアメダルと、二百枚程度のセルメダルを用意した。

「……まさかウヴァを復活させるとかいう気じゃないだろうな」

「そのままかだよ」

「前々から思っていたが、やっぱお前バカか？」

「バカで結構。まあ見てろって」

台図を送ると、女神さまはウヴァの意識を内包したコアの封印を解き、セルメダルの

中へ放り投げる。

すると、セルメダルはコアメダルへと集まって行き、あの日倒したウヴァへとたちまち姿を変えた。

「……………!?!? どういうことだ……………」

復活したウヴァは状況が飲み込めていないようだ。

倒されたかと思えば、すぐに復活し、しかも目の前には敵対しているはずのオーズ俺とアंकがいる。そんな事態を理解出来るわけではない。

「オーズ……………お前たちが俺を復活させたのか」

「それ以外考えられないだろ、この状況で」

「アंक、どういふつもりだ」

「俺が知るか。このバカ二人に聞け」

ウヴァは俺と女神さまを睨みつける。

攻撃しようもんなら女神パワーで再封印されるから問題ない。

「お前に協力してもらおうと思っただ」

「協力だと? 笑わせるな、本来グリードとオーズお前は天敵同士だ。アंकがそちら側についてること事態異常なことだというのに、何故俺まで——」

「俺たち以外でお前のメダルを掌握していたとしても、か?」

「何?」

ウヴァは首を傾げ、俺は話を続ける。

「お前は今、カザリがどこで何をしているか知ってるか?」

「知らない。それがどうした?……まさか」

今日このセリフを聞くのと、言うのは二回目だ。

「そのまさかだよ。あいつはお前のコアを持つてる。もしかしたら取り込んでるかもな」

「……ふふふ。そんなハツタリ通用するとも……」

「ハツタリじゃない。俺はこの目で見たし、この身体で受けた。カザリはメズールの力を使った。これは紛れもない事実だ」

念を押して強く言う。ウヴァは何も言わない。間違いなく混乱はしているだろう。今まで他のグリードのメダルを取り込もうなど、考えなかったはずだ。

「それが本当だとして、俺はどうすればいい? お前たちと手を組んで、大人しくメダルを渡しているとも言うのか?」

「メダルをくれとは言わない。貸してくれるだけでいい」

「俺にはなんのメリットがある。それが無い限り、俺は手を組むことは考えない」

「カザリは俺やグリードとは違う、誰かと手を結んでる。そいつの強さや性格、頭のデキ

は半端じゃない。そんなヤツら二人とやりあう気になるか？」

「……………」

「お前はメダルを手に入れて完全復活がしたい。俺はアイツらにメダルを渡したくない。そうだろう？」

「……………いいだろう。カザリと良くわからない奴が手を組んでいる間は、俺もお前たちに協力してやる」

「ありがとうウヴァ。恩に着る」

「勘違いはするな。俺は俺の為にそうするだけだ」

俺たちはカザリとポセイドンの本体（仮）に対抗する一手を手に入れることに成功した。

そしてこの時、別の場所ではAqoursが次のステップに進む為の準備がされていた。

Aqours in TOKYO again。

昨日一段落終えた後、千歌ちゃんから東京に行こうと告げられた。

μ☒sとAqoursの何が違うのか、見つけに行きたいらしい。

ウヴァのことは女神さまに任せ、俺とアंकもそちらに参加するのだった。

「みなさん気を付けるのですよ？東京に飲まれないように!!」

「ダイヤさんが鬼気迫る表情で注意を促す。」

「大丈夫だよ。わたしたちももう子供じゃないんだから」

「甘いですわ!」

物凄い剣幕で千歌ちゃんに迫る。久しぶりに見たな、あんなダイヤさん。

「お姉ちゃん、小さい頃に東京で迷子になったことがあるみたいで……」

ルビイちゃんが苦笑しながら、ダイヤさんのちよつとしたトラウマを語ってくれた。

「ま、まあはぐれないようにするのは悪いことじゃないしね」

アメリカで迷子になったどっかの誰かのように。

「そう言えば梨子ちゃんは？」

「ここで待ち合わせのはずなんだけど……」

「あれじゃないんです？」

慎司が見つけた梨子ちゃん。なんかロッカーに押し込んでる。

「梨子ちゃん!」

「ち、千歌ちゃん!」

「何しまってるの?」

千歌ちゃんが興味を示したソレ。なんとか誤魔化そうとするが。

「えーっと、お土産とかお土産とかお土産とか？」

「わー！お土産！」

“お土産”という比喩は千歌ちゃんを余計焚き付けてしまったようだ。

入り切らなかつた袋が、勢い余って落ち、中身が露見する。

この時点でもはや察してしまった。

「これ何？」

落ちたお土産毒い本を、千歌ちゃんは拾おうとするが、目を塞いでそれを阻止する。

他のメンバー（俺と慎司を除く）＋アंकは、何故梨子ちゃんがこんな行動に出たのか、理解出来てないみたいだ。

「梨子ちゃんは何をしているの？あれ本？みたいだけど……」

と果南ちゃん。多分みんなそう思ってるよね。

とりあえず梨子ちゃんへの被害を最小限に抑えることにしよう。

「何だろうね……でもあのままだと話が進まないから、ちよつと手伝ってくる」

千歌ちゃんを取り押さえて両手が塞がれている梨子ちゃんに代わり、なるべく本が見えないように袋に戻し、ロッカーに押し込んだ。

「東京に来たわけだけど、どこに行くか決まってるの？」

ようやく開放された千歌ちゃん。目の周りにパンダみたいな痕が残ってる。

「うん！まずは神社に行こうと思う」

「また？」

「実はある人に話を聞こうと思って。色々調べたんだ。そしたら本当に会ってくれるって」

「いったい誰ぞら？」

「それは会ってのお楽しみ。だけど話を聞くにはうつつつけの凄い人だよ！」

「東京…神社…」

「凄い人……」

ラブライブ、そしてμ'sが好きな人ならば、その単語を聞けば、間違いなく「あの人」を連想させるはずだ、今の黒澤姉妹のように。

まさかまさかかと引つ張って、待っていたのは……。

……まあ、結果からすると全然違う人たちだったんだね。

「お久しぶりです、Aquoursのみなさん」

期待を裏切られて崩れるダイヤさんとルビィちゃん。

いやそんな露骨に残念がらないであげようよ。

「お久しぶりー」

と神田明神で再会したAquoursとSaint Snowは場所を変えて話し合

うことになった。

「予選突破おめでとうございます」

「Very coolだったね」

「まあ悪くはなかったよ、うん。べ、別に魅入ってなんか無いからな」

Saint Snowの二人に賛辞を送る梨子ちゃんと鞠莉ちゃん。そしてなんかツンデレコメントを残した慎司。

「褒めてもらわなくて良いですよ。動画の再生回数はあなた達の方が上なんですから」

嫌味……という訳ではなさげだ。むしろ、

「でも大会ではわたしたちが勝ちます」

Aqoursを同じステージに立つライバルグループの一つとして見ている、ともとれる。

「わたしと理亜は、A-RISEを見てスクールアイドルをはじめようとおもいました。だからわたしたちもかんがえたことがあります。A-RISEやμ☒sの何が凄いか。何が違うのか」

聖良さんは語り始めた。

この話は、何もAqoursに限った話ではなかった。Saint Snowも、そして多分、全国にいるスクールアイドル全員も。

「答えはできましたか……？」

「いいえ。ただ、勝つしかない。勝って、彼女たちと同じ景色を見るしかないのかなって」

「……勝ちたいですか？ラブライブ決勝、勝ちたいですか？」

ゆつくりと千歌ちゃんは聖良さんに問う。

「勝つしかない」。そこに妙な引っかけかりを覚えたのか、それとももつと別な何か、定かではない。

「勝ちたくなければ何故ラブライブに出るのです？A—RISEやμ'sは、何故ラブライブに出場したのです？」

質問に次ぐ質問。

その答えを返すことは出来なかった。

梨子ちゃんの申し出によって、音ノ木坂学院を訪れることになった。

「これが音ノ木坂学院……」

μ'sが守った学校。普通の学校のはずなのに、感動が込み上げてくる。

「なんかさ、敷地を踏むのも憚られる気がするんだけど……」

「奇遇ですね、先輩。俺もですよ」

まさにμ☒sの、スクールアイドルの聖地と言っても過言ではない。サンクチュアリ・オブ・サンクチュアリだ。うん、何言ってるのか良く分かんねえ。

「あれ？アंकは？」

「ああ、アイツならまたアイス買いに行ってると思う。お金は渡したけど、そんなにたくさんは食べれないだろう」

この発言が後のフラグとなったのはい言うまでもない。

「もしかしてスクールアイドルの方ですか？」

不意に後ろから話しかけられた。

制服からして音ノ木坂学院の生徒。リボンは緑だから三年生か。

「すいません、迷惑でしたか？」

「いいえ、スクールアイドルの方はよくここにいらつしやるんです。でもここにはもう何も無くて」

「何も無い？」

「はい。自分たちの物も、優勝記念品も、記録も。物なんか無くても、心は繋がっているから、それでいいんだよって」

“心で繋がる” 何ともまあ、彼女たちらしい、μ☒sらしい言葉な気がした。ただどそれは、μ☒sが伝説と謳われている所以の一つだろう。

「気を付けるのよー」

「大丈夫！」

小さな女の子が向こうから駆けてきて、手すりを滑っていてく。

瞬間、脳に響き渡る。

——だって可能性感じたんだ——そうだ：ススメ！——後悔したくない——

——目の前に僕らの道がある——

滑り終わった女の子は笑顔でピースサイン。

そして音乃木生の方へ振り返ると、そこには誰もいなかった。いつの間にか去ってしまったのだろうか。

しかし、そこにはもういない彼女は大切なことを教えてくれた。とても大切なことを。

この世界の東京の海は、とても澄んでいて綺麗な。

穂乃果ちゃんたちが、絵里ちゃんたち三年生に、μ~~□~~sをおしまいにすることを話したあの海。

そのことを思い返すと、少し涙が出てくる。バレないように隠すけど。

そんなふうに思っていると。

「ねえ、耀太くん」

「何、千歌ちゃん？」

「わたし分かった気がする。 μ s の何が凄かったのか」

みんな千歌ちゃんの方を向く。

「多分追いかけてちゃダメなんだよ。 μ s も、ラブライブも、輝きも」

「どういうこと？」

「意味が分かりませんわ」

「わたしは何となく分かる気がする」

善子ちゃんとダイヤさんが疑問符を浮かべるが、果南ちゃんが同意を示した。

「 μ s の凄いところって、何もないところを走り続けたことだと思う。みんなの夢を叶える為に」

遠くを見据えたまま、千歌ちゃんは続ける。

「 μ s みたいに輝くってことは、 μ s の背中を追いかけることじゃない。自由に走ることなんだよ」

かつて μ s が 彼女たち そうであったように。

きつといるんな壁にぶち当たる。

でもそれ乗り越えて、時にはぶつ壊して。

1 0
か から
ら 1
0 そ のへ
0 のへ
0 先
へ。

A q o u r s と輝きと海のコンボ

「こつちこそごめんね、千歌ちゃん。うん、うん……」

電話の相手は千歌ちゃん。

今頃、A q o u r s は地区予選の会場でライブに向けて備えているはずだ。

「みんなのこと応援してるから。頑張ってる！」

通話を終えて、体の向きを奴らの方へ変える。

「随分優しいんだな。話してる間待つてくれるなんて」

「お礼を言われるまでもありません。お友だちとお話出来るのは、これが最後なんですから」

カザリと並ぶ男は不快な笑みを浮かべて、悪党のお決まりの台詞を吐く。

あらゆる創作において、その台詞は主人公に敗れる前の台詞なのだ。

「それはどうかかな？」

そのドライバーを手にする男のソレは、そんな生易しいものではない。

「「変身！」」

A q o u r s の運命を賭けた戦いの火蓋は切って落とされた。

地区予選に向けて、今日もA q o u r s は練習だ。

夏休みに入ってから、ほぼ毎日ぶっ続けでやっているため、心配が無いと言えは嘘になる。

だけど。

「お疲れ。みんなの調子どう？」

「うん、どんどん良くなってる。た毎日の練習と耀太たちのサポートのお陰だよ」

「俺たちは自分に出来ることをやっているだけなんだけど……でもそう言ってもらえると嬉しいよ」

練習が一段落ついたみんなの表情は、充実している。

これならきつと、地区予選ではいいライブが出来るはずだ。

「そろそろアंकと慎司が帰ってくるはずだけど……」

「アंक…袋片方持ってくれよ……」

「両手が塞がってるから無理だ」

「樽をすれば、だね」

コンビニに買出しに行った二人が戻ってきた。

アंकは両手にアイスを、慎司は袋を両手に抱えている。

「俺は自分の分のアイスを買いに行つたんだ。お前の仕事を手伝いを引き受けた覚えはない」

助けを求める慎司に対し、冷たい対応。

俺は苦笑しながら袋を受け取る。

「ありがとうございます、先輩」

「なんかごめんな。実質一人になっちゃつて」

「いえいえ、これくらい先輩がしてきたことに比べればどうつてことないですよ」

慎司はそうフォローしてくれるが、実際は慎司の助けもあつてのことだ。

何度この後輩に命を救われたことか。

「そう言えば大丈夫なんですか？ウヴァのこと」

「そうだな…不安が無いわけじゃないけど、それはあいつも同じはず。それに今は人間の『感覚』を満喫してるし、何かあれば、めが…叔母さんが何とかしてくれるよ」

アंक以外のグリードと協定を結ぶ。

共通の、それも強大な敵が現れた以上、オーズもグリードも単独で勝つのは無理に等しい。ならば、グリードたちと手を取り合う、それが一番の最善策なのだ。

幸い女神さまがウヴァの監視役兼保護者としてついている。心配は杞憂だろう。

「ねえ耀太。ウヴァ…：さんつて前に言つてたグリードつて怪人の一人なんだよね、ア

ンクさんみたいに」

「……警戒するのは分かるよ。果南ちゃんも酷い目に遭わされたのも。でも今は手段は選んでられないんだ。それにもし何かあったとしても、俺が絶対守るから！」

以前グリードと、あの男Ⅱポセイドンに利用されてしまった果南ちゃんはウヴァとの協力を良く思っていない。

「そっか……うん、分かった。わたしは耀太を信じるよ」

「ありがとう、果南ちゃん」

「お礼を言うのはわたしだよ。あの時は本当にありがとう、私を助けてくれて——」

「お礼なんてそんな……俺はただ……」

空気は一気に変わる。

シリアスな雰囲気は一気に甘酸っぱいムードになっていく。

「ひゅーひゅー」

「二人ともラヴラヴだねー♡」

……こともなく、茶々を入れる鞠莉ちゃんと、いつの間にか彼女の方へ回った慎司。

「フツ……」

「しゅんしゅんしゅんじゅんじゅん！」

「まあしゅんしゅんじゅんじゅん！」

慎司と鞠莉ちゃんを二人で追いかける。

そこにいたほぼ全員が笑い、アंकすらも鼻で笑う。

そしてダイヤさんは、「またこいつらは…」と言いたそうな表情でため息を漏らした。

その日の夜。

「ふい〜……疲れた……」

一日にやることを全て終えて、布団に倒れ込む。

地区予選をすぐ目の前に控えているからか、疲れはあるのになかなか眠りにつけない。

「遠足に行く小学生か、俺は」

今はアंकも風呂に入っているか、アイスを食べているし、千歌ちゃんも寝てしまっていると思う。

だから少しだけ一人で思案することにした。

気になっていることと言えば、もちろんラブライブだ。

最初に言っておくが、他のスクールアイドルを軽視するわけじゃない。けれど、A q o u r s は間違いなく他のスクールアイドルより、今回の大会と向き合っている。

浦の星を存続させる為に。

そして俺にとってここからが最も重要。

ポセイドン、あの男がまたA q o u r sに手を出してくる可能性があること。

以前奴は明らかかな悪意をもって、果南ちゃんに近づき、凶行に走らせた。そんな危険極まりない人物がまた何かしでかすのではないか。そう不安ばかりが募る。

そして運命は、俺を嘲笑うかのように事態を悪い方向へと導いていくのだった。

翌日、千歌ちゃんたちは予選会場へ。

俺と慎司、アंकとウヴァは人のいない海辺に来ていた。

「本当にここであつてるのか？」

「間違いない。志満さんの言っていたことが本当ならな」

昨日、十千万にあの男が訪ねてきたらしい。

俺が留守であることを確かめると、この場所に来るように伝えてくれと志満さんに残したという話だ。

「カザリの奴…必ず取り返してやる…！」

未だ来ていない敵に、ウヴァは怒りを滾らせる。

「あまり勝手なこととはするなよ。俺や先輩の足を引っ張るようなことすれば、メダルを取り返すどころか、取られるんだからな」

「その言葉、そのままそっくり返してやる」

……慎司とウヴァがバチバチと火花を散らす。

相手が違うんですけど。まあ、それだけの余裕を保てれば……。

「初めまして。いえ、あなたとはお久しぶり、の方が正しいかな？」

耳覚えのある声とともに、その二人は現れ、慎司とウヴァは静かになる。

「出来れば会いたくなかったよ。あんなクソみたいな半身の本体となんて」

「その節はどうも、わたしの半身がご無礼を」

頭を下げる男。そいつから放たれている重圧は半身と対面した時のソレとは比にならない。

「それにしても……あなたもご一緒でしたか。ウヴァさん」

「不本意だがな。メダルを取り戻すのに最善の手を取っただけだ」

「なるほどね。進化したボクや彼に対抗するためにオーズと手を組んだ…ウヴァ、キミにしてはいい考えじゃないか」

「なんだとっ!？」

カザリがウヴァを挑発。ウヴァはそれに乗ってしまう。

今にも戦いが始まってしまいそうなか、一本の電話がその空気を一度止める。

「どうぞ出てあげてください。きつとあなたを待っているお友だちからです」

男が出るように促す。

それはまさに、勝者の余裕とでも言うべきか。

「もしもし、千歌ちゃん？」

『ごめんね、耀太くん。忙しいって言ってたのに』

「こつちこそごめんね、千歌ちゃん」

『大丈夫だよ。ちよつと待ってね……よし。それでは耀太くん！みんなに一言お願いします！』

スピーカーに切り替えたらしく、スマホからみんなの声が聞こえてくる。

これから大事なライブを控えてるんだ。不安にさせないように、俺たちのことを悟られないようにしなくては。

「今までいろいろあったけど、それも全部乗り越えられた。だから大丈夫だよ。みんなのこと応援してるから。頑張って！」

千歌ちゃんたちはきつと大丈夫。

だから俺たちも……！

スマホをしまつて男の方へ向き直る。

「随分優しいんだな。話してる間待ってくれるなんて」

「お礼を言われるまでもありません。お友だちとお話出来るのは、これが最後なんです

から」

小悪党のセリフもこんな奴が言うのと、普通におつかない。けど。

「それはどうかな？」

それぞれがドライバーを取り出して腰に装着。

「変身！」

「タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

「サメ！クジラ！オオカミウオ！」

並び立つオーズ、^俺バース、そしてウヴァ。

対するはポセイドンとカザリ。

それぞれが戦うべき相手へと走り出し、競り合いを始める。

俺はポセイドンと。バースとウヴァはカザリと。

ウヴァとともにカザリに挑みかかる。しかし、

「バース、邪魔だ！」

「危なっ！ちゃんと狙えよな！」

ついこの間まで敵同士だった俺たちが息を合わせて攻撃することなんて出来るわけがなかった。

ウヴァの攻撃はカザリにあっさり避けられ、俺のスレスレを通っていく。

「ちっ!」

ウヴァが舌打ちする。イライラするのはこちだつっの。

「ドリルアーム」

ドリルアームでの攻撃。

「うらあっ!!」

腕を引いて溜め、思い切り突き出すが、ドリルを掴まれて投げ飛ばされる。しかも、投げ飛ばされた方向にはウヴァが。

「うわっ!」

「ぐわっ!」

当たり前だが、俺とウヴァは激突し、カザリにはかすりすらしない。

酷い有様にカザリの奴は嘆息し、呆れている。

チクシヨウ舐めやがって!

「カッターウイング」

ウイングを展開してドリルを向けて突貫。

「またそれ? 何度やっても同じだよ」

また掴まれて投げ飛ばされる。が、今度は軌道修正してウヴァには突っ込まず、もう

一度カザリ目掛けて飛行する。

「キヤタピラレッグ」

キヤタピラレッグを足に装着。

さらに空中で半回転し、キツクの体勢に入る。

カザリは腕をクロスさせて防御。が、キヤタピラが回転しているため、ガリガリとセルメダルを削り取る。

「くっ……ふふふ」

攻撃を食らっているのに笑っている。そのわけはすぐに分かった。

頭の触手が束になって俺に絡みつく。そしてウヴァの力と思われる電気攻撃。

「いつまで耐えられるかな？」

「耐久レースか……いいいぜ。お前には絶対負けねえ!!」
ゼツテエ

触手の締め付けと電撃が強くなり、アーマーにヒビが入り始める。

やがてシステムも停止に近づき、ドリルとキヤタピラの回転は弱まり、ウイングも折られる。

カザリは、苦しむ俺から視線を移してウヴァと向き合う。

「ねえ、ウヴァ。オーズたちなんかとは手を切つて、ボクらと一緒に来ない？」

「俺のコアを持っているお前とか？」

「そうだったね。それじゃあキミがこつちに来てくれたら、キミのコアは返すよ。それにボクたちといればオーズたちというより、コアもセルも集められる。手に入らないものなんてないんだ。悪い話じゃないでしょ?」

ウヴァを引き入れるつもりらしい。

もしアイツが裏切れば完全に勝機はなくなる。

「なんでも手に入るか。確かに悪くないな」

「決まりだね」

二人のグリードは並び、俺は依然絞められたまま。

カザリは無性に腹の立つ声で笑う。

「というわけだから、苦しそうだし、そろそろ終わりにしてあげるよ」

止めを刺すと告げ、最後の一撃を繰り返そうとするカザリ。しかし、その攻撃はいつ

まで経っても俺に届くことは無かった。

なぜなら、

「ど……うして……?!?」

カザリの身体はウヴァに貫かれていたからだ。

「悪いなカザリ。確かに悪い話ではないが、それだけじゃ俺は満足出来ないらしい」

ウヴァがカザリから腕を抜くと、触手は引いていき、俺は地に落ちる。

「はあ……はあ……後悔するよ、ウヴァー！」

怒りの矛先はウヴァーに向き、俺のことなど眼中に無い。なら、カザリを倒す絶好の機会は今！

「ブレストキャノン」

ボロボロになったアーマーにブレストとキャノンを装備。バースの状態的にも、撃てるのは一発だけ。

「今度はこつちのターンだ！喰らえカザリ！」

「セルバースト！」

「まずい……！」

今ソレを受けることは危険であると察知したカザリだったが、

「させるか……！」

消耗している所為で動きが鈍り、力も入らないカザリを狙うなんて造作もない。

「ブレストキャノン、シユート！」

その砲身はカザリを捉え、

「うわあああつ!!」

砲撃は見事命中、何枚かコアメダルが飛んでくるのをキャッチする。

「倒れては……いねえな」

炎と煙が収まると、膝をつくカザリが現れる。

「ここは退くよ。覚えておくんだね、バース、ウヴァ。次はこうはいかない……」
捨て台詞を吐き、風を巻き上げてこの場から姿を消した。

最後にブレストキヤノンをぶつ放した所為で、バースは完全に機能停止、変身が強制解除された。

「ウヴァ、ほらよ」

「俺もこれはいらん」

互いにとったメダルを交換。俺はライオン、クワガタのうちクワガタを渡して、ウヴァからはチーターを受け取った。

二人合わせて手に入れた四枚のうち、二枚をウヴァは取り込む。

「後は……」

「向こうだけだ」

あの二人が戦っているであろう海に、俺とウヴァは目を向けた。

ポセイドンと戦うのはこれで三度目だ。

一回目はポロクソにやられて負け。

二回目は女神さまの加護とタジャドルコンボと果南ちゃんの抵抗があり、打ち勝つ

た。

三回目の奴、ポセイDONは今までと明らかに強さが違う。

これが半身と本体の違いというやつなのか。

「前はあなた方のステージ：地上で戦っていましたね」

「そうだな。それがどうした？」

競り合いながらそう言ってくるポセイDON。

かなり嫌な予感がする。

「今度はわたしのステージで戦いましょう！」

「は？」

突然、天と地が逆転する。

身体を掴まれ、跳ばれたのだ。

視界の下に空。上には地面——否、海だ。

「おわっ?! ぼぼぼほ?!」

「どうですかこのスピード! 追いつけますか?!」

海の中を自在に動き回るポセイDON。

対する俺は……、

「おやおや?もしかして泳げないのですか?」

自由な動きを奪われ、もがいていた。

苦手と言えば苦手だが、全く泳げないわけじゃない。が海中、それもそこそこな深さがある場所では、プランクトンにも及ばない。

「ですが、戦いとは非情なもの。手加減はしません!」

特性を生かしたポセイドンの攻撃は次々ヒット。

だが、俺を襲うのはそれだけでは無い。

息が……。

呼吸が出来ない。

このままじゃ……本当に死ぬ……。

「こんな奴、コンボでさっさとぶっ飛ばせ!」

酸欠寸前でやって来たアंक（水中が平気なのはグリードだからなのか、腕だけだからなのか……）がメダルを変えて、スキャン。

「シャチ!ウナギ!タコ!シャ・シャ・シャウター!シャ・シャ・シャウター!」

深海でも視力、聴力を機能させることが出来るシャチヘッド。ウナギアームには電気を放つ、ウナギウィップを装備。そして八本に展開することが出来るタコレッグ。

シャチ、ウナギ、タコのメダルで変身する、オーズシャウタコンボだ。

変身完了と同時にアंकを掴み、水上へ飛び出す。

「あつぶねえ！サンキュー、アंक」

「礼はいい。さつきと行ってこい」

「了解！」

今度は自ら海に飛び込む。

本当は泳げないのだが、シャウタコンボの恩恵故か素早く動ける。

「ポセイドン！さつきはいいようにやられたけど、今度はこつちのターンだ！」

「そう来なくては面白くない！」

高速で行き交うポセイドンとの水中戦。

すれ違いざまに攻撃を与え合う。

一、二、三連撃と繰り返し、互いの武器を構え始める。

四度目の撃ち合い、俺と奴の武器は衝突……しなかった。

「何?！」

シャウタコンボの固有能力、液状化を發動してポセイドンをすり抜け、背後で実体化。

「スキヤニングチャージ!!」

「セイヤーーツ!!」

ウナギウィップで拘束、タコレッグの能力を解放し、シャウタの技「オクトバニツ

シユ」を繰り出す。

再び水上に飛び出し、そのまま二人とも地面に落下。

俺は上手く着地し、技を受けたポセイドンは横倒しになる。

「千歌ちゃんたちと話すのは、あれが最後だとか言つてたよな。悪いけどそうはいかない。みんなの輝きを見るまでは絶対に死ねないんだよ！」

そう、こんなところでは死ねない。

一生懸命輝こうとしているみんなを見ていない今はまだ。

「……ふふふ、そうですか。ですが、残念ですね。恐らくあなたのお友だちは、みなさん既に死んでいる頃です」

「どういふことだ？」

「あなた方は餌に引つかかっただけですよ。わたしたちという餌に。ここに来る前、カザリくんが作ったヤミーに彼女たちのあとを追わせただけです」

「お前……っ！」

怒りと焦りが同時に湧いてくる。

今千歌ちゃんたちを守る人は誰もいない。

つまり……。

血に染められた最悪の結末が頭をよぎる。

しかし、

「そのことなら心配はいらんぞ」

「っ！女神（姉）さま!？」

ライドベンダーで駆けつけてきた女神さま（大人モード）。

今ポセイドンがサラリととんでもない事実を言ったのだが、この時はそれどころではなかった。

「ぬしの相方が作ったヤミーは既に倒されている」

「何だと…!？」

「いい加減こんなことはやめて、早く天界に——」

「……今日はここままでしておきましょう。次会った時は必ず！——あなたの望む輝きを黒く染め上げるっ!!」

いつの間にかカザリの姿は無くなっていて、一人残されたポセイドンは捨て台詞を吐いて、その姿を消した。

このすぐ後、女神さまからコアメダルとグリード。そして彼女を「姉さま」と呼んだあの男のことを聞くことになる。

途方もない真実が明らかになる中、無事に帰ってきた千歌ちゃんたちの姿に、俺たちは安堵するのだった。

女神と偽りと真実

千歌ちゃんたちを送り出し、ポセイドンたちを退け、ひとまず危機は去った。

だけどそれでも、戦いの時からのピリピリとした空気が抜けずにいた。

理由は先の戦いの終わりに発覚した真実を、女神さまが話そうとしているからだ。

「ぬしらにはまず謝らなければならぬ。本当に済まなかった」

女神さまは深々と頭を下げる。そこにはいつものように、おちやらけた雰囲気のリロリ神はいなかった。

「なあ、女神さま。あなたはポセイドン——あの男と兄妹つ言ってたけど、本当なの？」

「ああ、紛れもない事実だ」

今度は慎司が尋ねた。

「じゃあ何が嘘なんです？」

「ぬしらをこの世界に連れてきた時、わらわはメダルを集めて欲しいと頼んだな？」

「はい。邪神からメダルを守る為に、グリードの力を与えて、この世界にバラまいたって

言っていましたよね」

「それが嘘じゃ。邪神はわらわがでっち上げた。メダルに細工をしたというのものな」

〔販売ヤ〕
 邪神が嘘、メダルに細工をしたのも嘘。つてことは俺やアंकが持っているメダルは……。

「既に察しているやもしれぬが、それらは全て本物じゃ。わらわの愚弟が造り上げてしまったな」

「造り上げたつて……何の為にオーメダル（こんなもの）を？」

「人間を滅ぼす為じゃ」

「人間を……滅ぼす……？」

「そうじゃ」

どうしてそんなことをしようとするのか、分からなくはない。

人間は争いを、同じ過ちを繰り返してきた。

それを見るのがもう嫌になった。そんなことだろうとは思ったが、やはり俺の予想は正しかった。

「そしてそれを実行する為に『欲望』という力を選んだ」

「なるほど……。自らの『欲望』によって人間は滅ぶ。この上なく相応しい末路つてことか……」

神を狂気の道に走らせてしまうほどに、人間は愚かである。その事実は嫌でも業の深さというものを分からせてくる。

「奴の計画は完璧じゃった。ただ一つ、わらわに明かしたことを除いてな。その計画を知ったわらわはすぐに対抗策を用意した。一部のメダルを奪い、さらにその中から一部を下界に落とし、一部をわらわが持つことにした。下界に直接触れることは禁忌。腐っても奴は神。それを破ることは無かろうと思っていた。……じゃが、その考えは甘かった……」

現に女神さまの弟は、こうして下界に降りてきて、何度も戦っている。

が、女神さまのように神々しさが感じられなかった。今の彼女は人の姿をとっているが、やはり神。彼女から感じる気配は只者ではない。じゃあ何故奴は……。

「奴は神の力を捨て、転生した。己が最も憎んでいた人間にな」

「……………」

言葉を失った。人間を滅ぼす為に、自分が人間になるなんて……。

「あれ？でも女神さまって何回かこつちの世界に干渉しまくってるよね？それはダメなんじゃないの？」

「今回の件は既に最高神殿に報告済みじゃ。これを解決する任に付けられ、ある程度のことなら許容される権限を持っている」

「最高神って……」

スケールがデカイ……。

俺たちがグリードやポセイドンと戦っている裏で凄い神たちが動いてたんだな。

「他に何か聞きたいことはないか？ 答えられる質問なら、何でも答えるぞ」

聞きたいことといえば……アイツのことしかないよな。

「女神さま、アंकのこと聞いていいか？」

「ああ」

「この世界に来た日、俺は梨子ちゃんとアंकと出会った。それでアंकのヤツ、梨子ちゃんに憑依して……まあ、すぐ剥がしたけど。アイツの今憑いてる身体って何なんだ？ それに何でアイツは右腕以外が復活しないの？」

「アंकに与えた身体は、わらわが造り出したホムンクルスじゃ。本当ならホムンクルスにメダルの回収を命じる予定だったのじゃが……やはり人間であるぬしらに託したのじゃ」

「どうして？」

女神さまは「そうじゃのう」と一息おいてから、

「わらわは人間を信じている。ぬしらや、Aquorsの者たちのように、友を信じ、敬い、支えあつていける。時に道を違えても、再び歩み寄ることが出来る、と。それを愚弟に教えてやりたかったんじゃ——」

そう答えた女神さまの顔は、神ではなく、一人の姉としてのものだった。ルビィちゃ

んを想うダイヤさんととても似ていて、そしてとても悲しげだった。

「アंकが右腕のみの復活については、奴が本体を持ち去って行ったからじゃ」
ってことは、もう一人のアंकとも戦うことになるのかもな。

「女神さま」

「何じゃ？」

「女神さまはとんでもねえもんを押し付けて、その上嘘まで吐いて、謝ってくれた。けど俺たちは、少なくとも俺は感謝こそすれど、恨んでなんてない」

「ちよ！先輩なんで一人だけそんなこと言うんですか!?俺だって女神さまのこと恨んでません！」

「ぬしたち……」

「確かに最初は「は？」って思ったけど、みんなと出会えて、みんなを守る事が出来る。そんな力をあたえてくれたんだから」

「そうですよ。俺なんて死にかけてたのを助けてもらったんですから、恩返しの意味も込めて戦いますよ！」

……なんか自分で言っていてすげえ恥ずかしい。

とは言え、これは紛れもない本心。

なんなら俺だって、何度も死にかけているところを助けてもらった。

女神さまには感謝してもしきれない。

「たっだいまー!」

聞こえてきたのは、いつものような元気な声。

「千歌ちゃんたち帰ってきたみたい」

「よし、三人で迎えに行きましょう!」

「え? ちよ、何故わらわまで!」

「いいから早く!」

女神さまも引つ張って、俺たちはみんなを迎えた。

色々あったけど、これからも今日みたいな戦いは続く。

けれど、それでもみんなが笑ってくれるなら。

俺たちはその為に戦い続ける。

この世界に平和が訪れるその時まで。

特別編 映画とダイヤ監督とライダー魂

『映画あ?』

ダイヤさんと鞠莉ちゃんを除く全員の声が見事に揃った。

夏休みに入って学校も、そして今日は部活も休みのこの日、部室に呼び出した俺たちにダイヤさんはそう告げたのだった。

「どうして急に?」

今全員が思っているであろう疑問を鞠莉ちゃんが代表してダイヤにぶつけた。

「実は今度行われる地域交流会でわたしたちAqoursにも参加してほしいとRequestが来たの」

「なるほど!だから俺たちで映画を作ってそれを交流会で放映しようってことですね!」

「慎司さんの言う通りですわ」

そういうことだったのか。理由が分かった途端、みんなやる気が出てきたようで、ライブをする時のあの表情が現れ始める。

「それでどんな映画を作るの!」

という千歌ちゃんにダイヤさんは、

「『仮面ライダー』ですわっ!!」

と告げた。は？

「ちよつちよつちよつ!？」

「なんですか、耀太さん？何かご不満でも？」

「いや、不満って程の事じゃないけど、仮面ライダーって……」

「ああ、『仮面ライダー』というのはわたくしが考えたヒーローです。バイクに乗って仮面を被り、正体を隠しながら怪人の魔の手から人々を守る戦士。仮面のライダー、仮面ライダーですわ」

いや、知ってる！それは知ってるし！てか俺の世界ではみんな知ってるううう！

「正体を隠して人々を守るかあ……。耀太くんと慎司くんみたいだね」

と曜ちゃん。

え、いや、あの、俺たち仮面ライダーなんですけど……。

「その通りですわ、曜さん！そしてこの映画の主役はあなたです、島村耀太さん！」

えええええ……………。

「どんなストーリーなの？」

千歌ちゃんの質問にダイヤさんは得意げな笑みを浮かべて答えた。

「主人公、『島村耀太』はその頭脳と身体能力がとても秀でた青年でした。しかし、そのことが原因で悪の秘密結社、『シヨツカー』に攫われてしまうのです——」

はい。ダイヤさんの説明が、凄く熱が入った上に長くなってしまったので、ざっくり言うと、主人公がシヨツカーに捕まり、肉体と脳改造の手術を施されたけど主人公の想い人によってその洗脳が解かれ、シヨツカーを倒すという話だった。

いや、聞いたことあるとかそういうレベルじゃねえ……。

「それって耀太以外の役も決まってるの？」

「その点は問題ありませんわ。登場人物に見合った方を選んでいきますから」

「わたしとダイヤの独断と偏見で決定したキャストは……これよーっ！」

ホワイトボードに配役とキャラクターの名前（つていってもそのまんまだけど）の載せられた企画書の一部らしきコピーが貼られた。

主人公が俺・島村耀太。

その恋人役が果南ちゃん。

主人公たちのバックアップを担う組織の会長が鞠莉ちゃんとその秘書がルビィちゃん。

敵役はシヨツカーの首領が善子ちゃんとその部下が千歌ちゃんと花丸ちゃんとアンク。

曜ちゃんは悪の科学者で、梨子ちゃんは正義の心を持ったシヨツカーの科学者。
というものだった。

「何この配役……つていうか恋人役わたしなの……う？」

「はい。女性としての魅力もあり、さらに男性に勝るとも劣らない力持ちな果南さんが一番適役です」

「ダイヤ!?わたしも女の子だよ!」

「果南さんの役を決めたのは鞠莉さんですわよ」

「まあああいいいい!」

顔を真っ赤にしながら果南ちゃんは鞠莉ちゃんに迫る。

「落ちていて果南。これはあなたのことを想つてのことなのよ」

「わたしを?」

「そう!こうすれば合法的に耀太と二人に……」

「ちよつと待つて!なんであたかも俺が違法みたいになつてるの!」

とばつちりがきた。

果南ちゃんと一緒になつて鞠莉ちゃんを追いかけていると、

「ダイヤの役は?まさか一人だけサボろうだなんて……」

「ぶつぶーですわつ!!わたくしは……」

善子ちゃんの発言を否定すると、ダイヤさんはどこから取り出したのか、帽子とサングラスを身につけ、拡声器で、

『監督ですわっ!!』

かなりの音量で叫び、俺たちの鼓膜に音撃を仕掛け、また、自らもその反動を受けたのだった。

翌日から映画の撮影はスタートした。

学校を通してきた依頼ということで、機材などは学校の物を使い、素人だけでは心配ということ、演劇部にも助っ人を要請した。

『何やら面白そうなことをしておるのー』

「(他人事みたいに言いやがって……)」

『他人事じゃからの』

休憩中に入ってきたロリ神からのテレパシー。

くっそ！殴りてえ!!

「(まあまあ、楽しいからいいじゃないですか)」

慎司もそこに入ってくる。いやまあ楽しいの本当だけどさ……。

「(でもさ、正直女神さま的にどうなのさ。オーズこのカをこういうことに使われるのって)」

危険な力であるが故に、つい最近までこの存在ちからのことは、なるべく話さないでいた。

そんなものを映画作成の小道具にしてもいいのだろうか。

『わらは別に気にせぬぞ。どんな目的を持ってどう使うのか、その結果どうなるか、それはぬし次第じゃ。ただの兵器なのか、それとも……おっと、そろそろ戻らねば。完成したらわらわにも見せてくれ』

「(……分かったよ。精々楽しみにしててくれ)」

『期待しておるぞ』

そうして女神さまとの通信は切れた。

オーズの力をどう使うか……か。

「耀太さんー、そろそろ再開しますわよ」

ダイヤさんの呼ぶ声に「今行く」と答えて、俺はまた映画の登場人物へと意識をシフトしていくのだった。

「それではもう一度いきますわ」

ダイヤさんの指示で撮影が再開する。

『島村耀太の改造手術が完了と洗脳のリプログラミング』。

曜ちゃん和梨子ちゃん演じる科学者が変身した俺ののったベッドを運ぶシーンから始まった。

『島村耀太の改造手術及び脳改造が完了いたしました』

『ワオウツ！ウウウウ……』

『ご苦労。フツフツ……島村耀太、お前に与えられたその力をもって、世界を我がシヨツカーの手中に収めるのだ！はーっはっはっはっは!!』

このシーンで俺は変身して手枷と足枷のついた手術台のセットの上で寝ころびながら叫んでいたのだが、曜ちゃんも善子ちゃんのキャラになりきっている。善子ちゃんは伊達に動画配信していないってことか。

現役の厨二病は格が違うな。曜ちゃんの演技力もかなりのものだった。

続いて梨子ちゃんのシーンだ。

善子ちゃんたちがいなくなった後（という設定の）部屋に梨子ちゃんが一人戻ってくる。

『あなたのその力は、人々を守る為に使うべき力。完全に洗脳を解くことは出来ないけれど……せめてあなたの大切な人の記憶だけは……』

『ウオオオオツ！』

コンピュータにディスクをセットして……というシーンだが、梨子ちゃんもそれらしい感じだ。

「オツケーですわ！流石です、曜さん、善子さん、梨子さんも。素晴らしいですわ！わた

くしの見込み通りですわー!」

「ふふふ……わたしは墮天使、悪に身を墮とした者を演じることなど容易いわ」

「ちよつと緊張したけど、やってみると結構面白いね!」

「あはは……ありがとうございます……はあ」

ダイヤさんに褒められて善子ちゃんはご満悦、曜ちゃんも楽しそうだ。

梨子ちゃんは……。

「お疲れ、梨子ちゃん」

「耀太くん、わたしの演技どうだった? 変なところとか……」

「ダイヤさんも言ってたでしょ? 近くで見ても全然問題なかったよ」

「良かったあ……」

そつと胸を撫で下ろした。相当緊張していたらしい。

「今日の撮影はこれにて終了とします。みなさん、お疲れ様でした」

この日はこれにて解散となった。

そして翌々日。

この日はアクション多めのシーンの撮影になった。

「た、助けてくれーっ!!」

逃げ惑うエキストラに当たらないよう注意してメダジャリバーを振る。ちなみにエ

キストラは慎司の男友達や俺の知り合いが出たいと言ってくれたので、その人たちにお願いをした。

『ウオオオオツ!!』

まるで本当に怖がっているみたいだなあと思っていたのだが、マジで恐怖を感じたらしい。

「次はいよいよ、恋人との再会シーンですわね。この作品の中でも重要な場面になるのでお二人とも気合を入れて臨んでください!」

降り続ける雨の中「耀太」と「果南」の再会の場面。この雨は鞠莉ちゃんが用意してくれた。どうやってるのか聞いてみたところ「ヒ・ミ・ツ♡」とだけ返って来た……。

傘もささず、公園で一人たたずむ「耀太」。そこに恋人「果南」が現れる。

『『よう………た?』』

『『………ツ!?!』』

「果南」の姿を見て過去の記憶の一部がフラッシュバックし、頭を抱えながら苦しむ演技。

『『耀太!?!大丈夫?!?!しっかりして!!』』

傘を投げ捨てて「耀太」に近づこうとする「果南」。しかし、

『『きゃっ?!?!』』

「耀太」は彼女を拒絶する。

ふらふらとした足取りでそのまま立ち去っていき、「果南」は拒絶された哀しみを胸にその背中を見えなくなるまで見つめ続ける。

「カット。良い感じですよ、果南さん。耀太さんのシーンですが、もう少しアングルを変えてみましょう」

このあと滅茶苦茶撮り直した。

自室でこれまでに撮影、編集した箇所のチェック。

映画の作成が始まってから家にいる時はほとんどこの為に時間を割くようになりました。

もちろんA q o u r sのみなさんともこの作業は行いますが、家族にもチェックしてもらったり、時には一人でも。

今日もその作業に入りますが……。

「みなさん一人一人に問題はありませぬわね……。やはりエキストラで参加してくれる方を募集した方がよろしいでしょうか……」

イマイチ迫力に欠けるといふか……。やはり怪人側の人数的な問題が……。

「へえ、なかなか面白そうなことをしてるね」

「完成にはまだまだ程遠いですわ」

「アंकも出てるんだ。ははは！アंकのこの格好、面白い！」

「それはわたくしが一生懸命考えて……!?」

突然現れたその人はわたくしが振り向いた刹那、人間から怪人へと変わりました。

「カザリさん……でしたわね……」

「覚えててくれたんだ」

「当たり前ですわ！」

「まあいいや。今日は面白いものを見れたからね。オーズとアंकによろしくね」

「お待ちなさい！」

しかし彼は風のように去って行ってしまいました。

最悪の置き土産を置いて。

「アクション！」

『変身！』

「タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

ドクロの模様のタイツに身を包んだ人たちと、怪人衣装を着た千歌ちゃんとの対峙する。

千歌ちゃんたちの向こうには縛られている果南ちゃん。

簡単に説明すると敵に捕まったヒロインを助けるシーンだな。

『ハ！ハ！セイヤー!!』

エキストラの戦闘員をなぎ倒す。もちろん思いつきり手加減して。

『やるね、仮面ライダー！だけどわたしたちには……!』ってあれ？」

セリフを言い間違えたのか、途中で切れてしまう。

「カット！カット！カットですわ！千歌さん、そのセリフはまだ……あれ！」

千歌ちゃんを注意したダイヤさんだったが、そのダイヤさんも俺の方を見直して首を傾げる。

ちなみに俺はというとまだ戦闘員と戦っている。しかも戦闘員の攻撃が強くなって
るんだけど。

「一、二、三、四……おかしいですわ。最初に点呼を取った時より人数が増えていま
す……」

『え』

動きを止めてよく見てみると、確かに数が増えてる……っていうかなんか違うのも混
ざってる!!

シヨツカー以外にデストロン戦闘員、ワームやドーパントなどその他もろもろ……。

「あれは続編に登場予定だった戦闘員!? どうして……!?」
「ダイヤさん!? この映画単発だよね!」

戦闘員を倒しながらダイヤさんにツツコミをいれる。

続編で……。

「てかコイツらヤミーだ! しかも流れからして親はダイヤさんじゃないか!」
倒した敵がセルメダルへとなっていく。

「この数はメズール? いや……」

「ちよつと! 離しなさいよ!」

善子ちゃんの叫び声。彼女が登場するはずだった位置に善子ちゃんを掴んだイカジャガーヤミーがいた。

「カザリの仕業かあ」

「テメエ! 俺の善子に何しやがる!」

「誰があなただよ! それに善子じゃなくてヨハネ!」

バースに変身した慎司がイカジャガーに突撃していく。

「うおおおお!」

「ふん!」

「ええ?」

イカジャガーヤミーは善子ちゃんをバースに投げつける。すかさずキャッチすると、
「ハアッ!」

「は!? くそ!」

善子ちゃんとバース目掛けて攻撃を放ってきた。身を呈して彼女を庇い、バースはダメージを受けてしまった。

「くう……イッテエ……!」

「だ、大丈夫……?」

「あ、ああ……。これくらい大したことない」

立ち上がろうとするバースと寄り添う善子ちゃんにイカジャガーヤミーはジリジリと近づいていく。

「アंक! クジャクちようだい!」

「ちっ……絶対無くすなよ!!」

舌打ちをしながらも出してくれたクジャクメダルをスキャンし亜種形態に変身、火炎弾をイカジャガーヤミーに撃ち込む。

「仮面ライダーは……倒すっ!」

「上等! やれるもんならやってみな!」

上手く注意を逸らしてヤミーを引き付けた。

「ふんっ！」

「いつつく……！なんて重い一撃だ……。グールドほどじゃないにしてもこのままじゃダメだ！」

アंकに三枚目のメダルを要求しようとする直前、

「困っているようじゃのう」

「え!? 果南ちゃん!? その口調はまさか……」

「気づいたようじゃの。それよりこれを使い。一度限りの限定品じゃ」

「なるほどね、おっと」

メダルを受け取ると果南ちゃんは崩れるように倒れ込み、俺はそれを受け止める。体を一時的に乗っ取られたせいか気を失ったみたいだ。

果南ちゃんを守るように前に立って再びメダルを入れ替えてスキャン。

「タカ! イマジン! ショッカー! ターマーシー! タマシー! ターマーシー! ライダー……魂ッ!!」

おなじみのタカヘッドに、両肩にオレノツノを装備したイマジンアーム、ショッカーレッグからなる形態、オーズタマシーコンボ。

「うおらあっ！」

イカジャガーヤミーを思い切りぶん殴って戦闘員たちのところに吹き飛ばす。

「見ろーこれが俺のライダー魂ー」

「スキヤニングチャージ!!」

シヨツカーとイマジンの力を融合させて放つ一撃、魂ボンバーで戦闘員ヤミーともどもイカジャガーヤミーを吹き飛ばした。

ヤミーたちは爆散し、アंकは大量のセルメダルを回収、変身を解いたあとイマジンとシヨツカーのコアメダルは消滅した。

全ての撮影を終えて試写会が開かれた。

参加者はA q o u r sをはじめとし、撮影に協力してくれた人たち。

今しがたスタツフロールが流れ終わりこれでジ・エンドかと思つた刹那、俺を含む約二名が凍りついた。

エンディングが流れるバツクで、本編では出なかつたキスシーンがここで出てしまつた……。

その後二人はバイクに乗って行ってしまい、フェードアウトしていき、THE END
ND……。

拍手喝采。もとより映画に興味のなかつたアंकととてつもない羞恥を受けた二名を除いて。

「ダイヤさん？」

「マジでこれ流すの？」

「当たり前ですわ！とても素晴らしい作品になったじゃないですか」
にこつと笑うダイヤさん。

「いや、あの……地域交流会って年配の方や子供たちも来るんだよね？それにしてはその……か、過激なシーン多くなかった？」

詰め寄る俺と果南ちゃんにダイヤさんは、

「……はー」

「はーじゃなーい!!」

「それではこれは文化祭用ということでもた編集し直して……」

「ダアアアイイイアアア!!」

とても軽い身のこなしで逃げていくダイヤさんを追いかける二人。

結局この後ダイヤさんを捕まえて、目の前で編集と元データの削除をさせた……はずだったが、実はバックアップが残っていて、ディレクターズカット版としてマジで文化祭で放映、逃げたダイヤさんを追いかけて捕まえ、キツイお説教を食らわせたのはまた別のお話。

サバイバルとミステリーと未来へのトレジャー

ラブライブの地区予選、そしてポセイドンの襲撃から数日が経った。

「はあ……最近マジで物騒というか、敵が以前より強くなってるというか……」

慎司がバースバスターを磨きながら嘆息する。

事実、グリードの一人であるカザリが、他の属性のメダルを取り込んで進化を始めている為、ヤミーやカザリ自身は前より強力になっている。オーズも五種類のコンボが使えるようになったのだが、相手陣営にはポセイドンもい

る。

いざ戦闘となると、体力・気力ともにごっそりと削り取られるのだ。

「まあ、この間の戦いで奴らにも打撃を与えたから、しばらくは出てこないと思うけど……」

こちららも先の戦いでバースが大破し、現在女神さまが修理している。

ちよつとフラグっぽく言っちゃったけど……。

今日は千歌ちゃんから話があるということで、慎司も呼んでいるのだが……。

「ごめんね、二人ともー」

噂をすればなんとやらだ。

「ううん、大丈夫だよ。それより、手伝って欲しいことって何？」

「そうそう。ダイヤさんの提案で、みんなでキャンプに行くことになったんだけど、その準備を手伝ってもらおうと思って」

キャンプ……気分転換には持ってこいかもしれない。

「了解、手伝わせてもらいますよ」

慎司も俺と同じだったのか、即了承。

「二人ともありがとう！」

「んじゃ、早速始めようか」

というわけで、俺たちスクールアイドル部は、全員でキャンプに行くことになった。が、この時は予想だになかったことが起こることになるのだ。

ちなみにアंकは留守番だ。曰く「アイスがないなら行かない」だそうだ。

大瀬テント村へ到着。

今回は全員がバスを利用した。俺と慎司はバイクでも良かったけれど、たまにはみんなと一緒に行くのも良いだろうと、女神さまに言われたのだ。

A q o u r s のみんなとだけでなく、バスの利用者の人たちとも交流を深めること一

時間、目的地へと到着した。……したのだが……。

「あの、一つというか、色々いいですか?」

「どうしたの?」

「俺たちって何しに来たんだけ?」

「何って、キャンプだよ?」

「そう言い切る千歌ちゃんだが、明らかにおかしいことが一つ……どころか、二つ、三つ以上ある。」

「いや今の話の流れだと、思いつきりサバイバル生活なんですけど!」

話の流れというのは、ここに着いてからの話だ。

テント村に着いたはいいものの、寝袋や飯ごうなどはおろか、食料すらも人数分揃って無い。そんな状況下で梨子ちゃんと俺を除く全員が、自然の中で自給自足しようとしているのだ。

「やっぱりおかしいよね、耀太くん!」

「何がおかしいの?食料を取ってこないと、ご飯抜きになっちゃうよ?」

「いやいやいや!俺たちと一緒に用意したよね!?!なんで食料が一つも入ってないの!?!なんで食べ物じゃなくて、地球儀やらボーリングのボールとピン一式やらタイヤが入ってるの!?!」

「まず地球儀は、山の中で迷った時に……」

「いや、そこは普通の地図にしよう?」

「タイヤはロープを付けて特訓を……」

「今どきタイヤ引きなんてイナ○レくらいしか見たことないよ……」

「あと、ボーリングのピンって十本ビシツと並んでるでしょ? だからわたしたちもあのピンみたいに団結して……」

「いやわたしたちって九人だよ? 耀太くんたちを入れても十一人だし、そもそもボーリングってそのピンをなぎ倒す遊戯じゃ……」

ツツコミどころ満載である。

「二人とも……」

千歌ちゃんはいつになく真剣な表情になる。そして……

「キャンプって書いて、なんて読むか分かる?」

「えつと……キャンプはキャンプなんじゃ……」

至極当然の答えを出す梨子ちゃんだが、「全然違うよ……」と千歌ちゃんは肩を落とす。

「いい? 二人とも。キャンプと書いて……」

「キャンプと書いて?」

ゴクリと唾を飲み込み、千歌ちゃんはまたしても一般論から逸脱した台詞を放り投げ

る。

「キャンプと書いて、団キャンプと読むんだよ！」

「ばばん！という効果音が相応しいこの場面。肝心の俺と梨子ちゃんはどうと……。

「は？」

全く理解出来ないでいた。いや何その超理論。

「だーかーらー、団地の『団』に結婚の『結』で団結。これくらい常識だよ？」

もはやこの世界の常識が分からない。どうしてキャンプをそんな風に読めるのだろうか。

「てかさつきボーリングのピンが団結うんぬん言ってたのつてそういうことなの……

？」

「そうだよ」

既に呆れの領域に突入したらしい梨子ちゃん。

もはやツツコむ気力も無くなり、結局二人ともサバイバルに参加することになりました。

果南ちゃんに海に連れて行かれ、プール以来の恥を晒しましたとき。

その日の夜、みんなが寝静まった頃に事件は起きました。

現場はわたしたちが借りたバンガロー。被害者(?)は高海千歌ちゃん。彼女が並べていたピンがいつの間にか倒されていたということですよ。

いや、事件というにはかなり大袈裟だけど、解決しなければみんな眠れないだろうということで、犯人を暴くことになった。

「えっと、じゃあ誰が倒したのかだけど、素直に名乗り出てくれれば嬉しいんだけど……」

応答無し。どうやら出てくるつもりはないらしい。

ダイヤさん怒られるのが嫌だからなのか、それとは別に理由があるのか、思考していると、

「ゴーストだよ……」

「え?」

「この中の誰もやってないなら、ゴーストがやったんだよ!!」

「そんなことあり得ません。第一、足の無い幽霊はつまずけないでしょう」

「そう思ってるのは日本だけだよ」

鞠莉ちゃんは幽霊だと主張するが、ダイヤさんがそれを即座に否定。確かに幽霊がつまずくなんて考えられない。

「……ん?」

「何か引つかかることでも?」

「少しだけ…ね」

なんだろう、この違和感。

わたしの違和感に気付いたように耀太くんは。

「君なら解き明かせる。その違和感は重要なフアクターだ」

この違和感が…:…そうか!

「みんな、犯人が分かりました」

「っ!?!」

それまで騒がしかったみんなが静まり、わたしに注目する。

「一体誰なの!?!」

「犯人は——ダイヤさん、あなたです!」

「えっ!?!」

全員驚愕のこもった声を漏らす。

「ど、どういうことですか? わたくしが犯人だと言うのなら、証明してご覧なさい!」

「いいですよ、では——」

証明開始!

「まず始めに変だなど思ったことがあります。犯人が名乗りでなかった理由です」

「それはダイヤに怒られるのが嫌だったからじゃ……」

「普通そう思いますよね。でもあの場で名乗り出ない理由として、考えられるケースがもう一つあります」

「……ダイヤ自身が犯人だから……」

わたしは推理を続ける。

「そして二つ目。ダイヤさん、何故あなたは犯人しか知らないはずの情報を知っていたのですか？」

「は、はあ？ 犯人しか知らない情報？ 一体何のこと？」

「何故ダイヤさんは犯人が、つまりいたと分かったんですか？」

「!? そ、それはその時の状況を考えれば自然と——」

「確かに犯人が蹴ったという場合も考えられます。けど、鞠莉ちゃんに対してダイヤさんはこう言い切りました。『足の無い幽霊はつまずけない』と。まるで犯人のことを見ていたような口振りですね？」

「うっ……」

「さらに言うのであれば、つまずいたというダイヤさんの証言が正しいのなら、この事件の最後の証明へのファクトが残っているはず！」

「最後のファクト……」

「ピンは全て倒れているストライクの状態。そうなるにはきつとボールを強く蹴ったはず。硬いボールをそんなに強く蹴ったなら、足に残っているはずなんです、その時のダメージが！」

「なっ……！何かと思えば……そんなものあるはずが……痛っ！」

「お姉ちゃん……もしかして足を……」

「やつぱり……ダイヤさんだったんですね……。これでQ. E. D. です！」

証明完了！

「ダイヤさん……どうしてこんなことを……」

「……そうですね。梨子さんの言う通り、わたくしがこの事件の犯人。そして何故このような行為に及んだのか、全てをお話しますわ——」

みんなの視線は依然としてダイヤさんに注目したまま。

そして彼女は真実を語り始めた。

翌朝、一番に目を覚ましたわたしは、とあることに気付いた。

「そう言えば耀太くんにお礼言っただけでなかったな」

昨日の事件（？）を解決出来たのは、彼が助言をしてくれたから。男子は別に寝ていたはずだけど、きつとカンドロイドを使って助けに来てくれたんだ。

「へ？何の……？」

「へ？つて、昨日わたしが推理するのを助けてくれたでしょ？」

「えつと……昨日何があったの？梨子ちゃんの言ってることが良くわからないんだけど……」

え……じゃあ昨日わたしに助言してくれた耀太くんは……。

とある洞窟。何故こんなところにいるのか、理由は昨晚まで遡る。

『黒澤ダイヤモンド事件』が起きた昨日、ダイヤさんから犯行？に及んだ動機を聞いたそうだ。

それがこの洞窟に眠っている黒澤家の秘宝を掘り起こすというもののだが、

「こんな所に洞窟なんてあったんですねー」

「なんか出そうな雰囲気だね」

「出なくていい出なくていい！」

梨子ちゃんとルビィちゃんがハモる。

軽い冗談のつもりだったんだけど……。

「宝物って何なんだろうね？」

「大判小判は……」

「明治時代に埋められたものなんでしょう？時代的に違うんじゃない？」

「いやいや、もっと前の代から受け継がれてきたものとも考えられるでしょ?」

宝物の内容の考察が始まる。確かに宝物と言えば金銀財宝ってイメージだけど、そんなものがあるのかなってというのが正直なところだと思う。

「洞窟で冒険って、なんかロマンあるよな」

「そうね、ダンジョンには我が眷属たちが蔓延って……」

「ゲームじゃないんだし、それはないと思うよ」

「でももしかしたら、ご先祖さまの霊が……」

「びぎいいい!?!」

千歌ちゃんがさっきの俺と同じようなことを言い、ルビィちゃんが叫ぶ。千歌ちゃん……面白がつてやってない?

「大丈夫だよ、ルビィちゃん。ご先祖さまが子孫であるルビィちゃんに酷いことするわけないよ」

「ほ、本当?」

「きつとこんなに可愛く成長してくれたことを喜んでくれるよ!」

面白がつてやってるなんてこと、全然なかったな。

「こんな風に宝箱を持って現れて……」

「「え?」」

どこからともなく取り出された、怪しげなというかあからさまな箱。

「ち、千歌ちゃん……！そ、それ！」

「あーこれ？そこに落ちてたんだよ。だからこれを宝箱だと仮定してね……」
「仮定っていうかそれが宝箱なんじゃ……」

「そんなはずないよー。こんなにあつさり宝物が見つかるわけ……」

箱を持ったまま数秒フリーズ。そして、

「ええええええええええええ!!」

ハイパーボイス並みの音量で叫ぶ千歌ちゃん。洞窟内に声が響き渡る。

「こつちが『ええええ!!』だよ!」

「だってだって！宝箱って言ったら普通番人とかトラップとかあるでしょ!」
「無いよそんなもの！てかあつてたまるか!」

というフラグなのでした。

「そ、それより箱をダイヤさんとルビイちゃんに……」

「う、うん……」

宝箱は千歌ちゃんからダイヤさんに譲渡され、受け取ったそれを、ダイヤさんはゆつくりと開ける。

「これが宝……?」

箱から出されたのは写真と紙が一枚ずつ。そして笛と三枚のメダル!?

「どういうことダイヤさん!?メダルが宝物って!?!」

「わたくしが知りたいですわ!こつちには……『ガート此処ニ眠ル』……どういうことですの?」

「そつちの写真は何なの?」

「これは普通の写真ですが……」

ダイヤさんのご先祖さまと思しき人物と、他に九人。

その中に一人、気になる人物が一人いる。

「これ……耀太にそっくりじゃない?」

「……マジだ」

こつちいう時は女神さまに聞くのが一番だな。

「(女神さま女神さま!)」

『どうした?いいお土産でも見つけたのか?』

「(ちよつと気になるものを見つけたんだけど、これについて教えてくれないか?)」

『どれどれ?』

視覚を女神さまとリンクし、俺の目を通して写真を見せる。

『……なるほどな。この写真の者じやろう?この男はグリードじゃ』

「(じゃあこれと一緒にあったメダルは……)」

『そのグリードの物で間違いない』

じゃあこのガートって言うのが、この人の名前……。悪いグリードには見えない。むしろ、ご先祖さまたちと友だちだったのか？

「ち、千歌ちゃん……！」

思考回路を働かせていると、曜ちゃんが震えた声を出す。

「どうしたのー?」

「後ろ! 後ろ!」

「後ろ?……わっ!」

曜ちゃんの示した先、千歌ちゃんの背後にいたのは、

「鶴ヤミー!?! どうしてこんなところに!?!」

「もしかして宝の番人!?!」

いやそれはない。何にしてもみんなを守らないと!

「変身!」

「タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!!」

メダジャリバーを持って斬り掛かるが、左手の骸骨に白刃取りされ、頭部からの火炎弾をモロに食らう。

「いったあ……なんだこのヤミー、合成ヤミーと同等かそれ以上はあるぞ」

『これは我が愚弟が百年ほど前に生み出したヤミーじゃ』

「なんでそんなもんがまだいるんだよ！」

『黒澤ダイヤたちの先祖を襲い、それを守る為にガートが戦ったのじゃ。その命と引き換えに倒しはしたが、それは一時的なもの。時の経った今、欲望の力を感じて蘇ったのじゃ』

「ご丁寧な解説どうも！ 慎司、絶対みんなを守れ！」

「了解！」

今そんなこと聞いたってほとんど意味無いんじゃ……。

「カハッ……」

鋭い一撃が腹部に突き刺さる。

「先輩！ 他のメダルは!？」

「…全部アंकとウヴァが持つてる。なんでこんな時にいないんだよ…」

どうする!?! タトバじゃコイツには……!!

と、
鶴ヤミーをどう倒せばいいか、彼女たちを守るにはどうすればいいか思考している

「耀太さん！」

「ダイヤさん!？」

「これを使って!」

ダイヤさんが投げた何かをキャッチ。

「これは……」

「それはご先祖さまが残した、来るべき日に備えてのものですわ!」

「なるほどね……」

いつかの未来に復活するヤミーを、今度は完全に倒すためにガートとご先祖さまたちはこれを残したんだ。だったら!

「使わせてもらうよ!」

ドライバーにセットしていた三枚と交換、スキャンする。

「コブラ!カメ!ワニ!ブラカーワニ!!」

ターバンのような形状が特徴的なコブラヘッド、高い防御力を誇るゴウラガードナーを両腕に備えたカメアーム、そしてスライディングでの移動が可能なうえ、強力な蹴りを放つことの出来るワニレッグから構成されるコンボ。

ブラカワニコンボへの変身が完了した。

——守って。

「え?」

突然どこからか声が聞こえてくる。

——僕の友だちの子供たちを 守って。

「そうか。このメダルの……。もちろん守るさ、絶対に！」

このフォームは防御に特化した形態。さらにそこから攻撃に繋げるカウンターアタック！

鶴ヤミーの攻撃をガードナーで弾き返し、よろめいたヤミーに一撃を叩き込む。

攻撃の勢いを殺さず、回し蹴り。

ヒットすると同時にワニ型のエネルギーが、ヤミーを噛み砕く。

よろめきながらも鶴ヤミーは攻撃をやめない。今度は首の蛇を操り、向かってくる。

あれに対抗するには……！

「ダイヤさん！その笛ちょうだい！」

「は、はい！」

再びダイヤさんが投げしてくれた笛をキャッチ。

「その笛で一体どうしますの？」

「こうするんだよ！」

受け取った笛で演奏を開始。ダイヤさんは「こんな時にどうして!？」と言うが、

「あ！」

ヘッド部分のコブラが動き出すのを見て、驚嘆の声を上げる。

そんな彼女らを気に止めず、俺はそのコブラを操って、鶴ヤミーの蛇を噛み千切らせた。

「過去から繋いでくれたこの力で！今度こそ倒す！」

「スキヤニングチャージ!!」

鶴ヤミー目掛けてスライディング。攻撃も仕掛けてくるが、それを全て回避する。直前で飛び上がり、蹴りを叩き込む。

「セイヤーーツ!!」

さらに直撃した瞬間に、ワニ型エネルギーがもう一度ヤミーを噛み砕く。今度は確実にヤミーを粉碎した。

ヤミーを撃破し、洞窟を出た後のこと。

「まさかその写真が宝物だったなんてね」

「わざわざ洞窟に入って、あんな目にまで遭ったのに…割に合わないわよ……」

「全く散々だよ……って言いたいところだけど、俺はそんなことないと思うよ」

ダイヤさんが手に持った写真。

今回見つけたそれは、値打ちがあるとかそういうものじゃない。けれど、

「そうですね。大切に思っていたものが、いつ失われてもおかしくない。そんな時代だったのでしょうか——」

「ダイヤ、それどうするの?」

「持つて帰りますわ。もう失われることもありませんから」

「それじゃあ——」

パシヤツ!と不意にシャツターが切られた。

「わたしたちも撮ろうよ! それでこの写真と交換で、この洞窟に置いてこうよ!」

「いいね! それじゃカメラマンは、ゴリラくん! 任せたよ!」

慎司の言われると、ゴリラくんはブンブンと腕を回して了解の合図を出す。

「みんな撮るよ! はいチーズ!」

「チーズってちよつと古くない?」

「ノンノン! チーズの『チ』にアクセントを置くといい笑顔になるんだよ!」

そうだったのか。それは知らなかったな。

「よし、じゃあみんなで! セーのっ——」

「「チーズ!!」」

こうしてA q o u r sの波乱万丈のキャンプは終わった。

橙色の三枚のメダルは、全てダイヤさんに返却。

あの写真とともに、大切にしまっておいてほしいと頼んだ。
鶴ヤミーと戦った時、“彼”は教えてくれた。

例え何があろうとも、俺は守っていく。

みんなと生きる、この大切な時間を。この大切な世界を。

カザリと鞠莉と居場所

手に入れるのは難しく、けれど失うのは簡単。

それは誰でも、どんなものでも同じ。

それが例え、人以外であつたとしても。

「申し訳ありません、カザリくん。あなたはもう用済みです」

彼が得た力は、それをもたらした者により奪われた。

力を奪われたカザリは傷口を押さえもがきながら、男を見上げる。

「どう……して……っ!？」

「あなたを凌ぐ器がいるからですよ」

男の隣に舞い降りた影。その影は倒れ伏す自身に向けて、攻撃を仕掛けようとしている。

「さようなら、不完全な器くん」

そして無慈悲に攻撃は放たれ、カザリの視界は真っ白になっていく。

こうして彼の悪夢は終わりを迎える。

「今の……まさかグリードのボクが夢を見るなんて……」

カザリが目を覚ましたのはベッドの上。

何故このような場所に自分がいるのか、答えはさつき見た悪夢だ。

そう、裏切られたのだ。

たった一度の敗北で、あの男はカザリをまるでトカゲが尻尾を切るように、裏切った。その時に意識を内包しているライオン・コア以外の全てのコアメダルを奪われ、その時のダメージからセルメダルも不足し、倒れたのである。

「やつと目が覚めた？」

不意にドアが開けられ、この部屋（？）の主らしき人物が話しかけてきた。

「随分とうなされていたみたいだけど、怖い夢でも見たの？」

「……キミは？」

「人に名前を聞く時は、普通自分から名乗るんじゃない？まあ別に構わないけれど」

金髪の少女は、警戒する少年に近づく。

「そんなに警戒しても何もしないわよ。わたしは小原鞠莉。このホテルに住んでいる人間よ」

少女、鞠莉はカザリを諭すように名乗る。自らを“人間”と称したのは、彼が人間でないことに気付いていたからだろうか。

「あなたの名前は？」

「……カザリ」

「……カザリ?どこかで聞いたような…」

鞠莉は少し考える。そして、

「そう言えば前に耀太が、果南からヤミーを生み出して、利用したって言ってたグリードの名前がカザリだって言ってたわ。近くにこれがあったから、グリードだという気はしてたけど、あなただったのね……」

「キミ、グリードのこと知ってるんだ……」

カザリは鞠莉を前にして、本当の姿を現す。カザリは怯える鞠莉を想像したが、
「なるほど。本当の姿はこっちで、普段は人間たちに化けてるのね」

彼女は驚くことすらしなかった。

「怖くないの?その気になればキミを殺すことだって——」

「出来たらとつくにしているでしょう?」

言い返せなくなる。それは彼女の言葉通りだったからだ。

セルメダルが不足している今、この姿を保っていることすら危うい。

カザリが人間の姿に戻ると、鞠莉はカーテンを解放する。

「ソーリー。友だちが来たみたいだから、少し待ってて」

まるでペットを待たせるように言って、部屋を出ていった鞠莉。

一人残されたカザリは、ただただ思うのだった。
変な人間、と。

部活バイト共に休みの今日、鞠莉ちゃんに突然呼び出された。
何事かと思い、連絡船で来てみたら……。

「は？」

目の前の光景に絶句した。

なんでカザリがホテルホテルにいるのっ!?

なんでベッドで寝てるのおおおおおっ!?

「やあオーズ」

「やあじゃないよー！なんでナチュラルに挨拶かわせんの!?!この間まで戦ってたよね!?!鞠莉ちゃん！なんでカザリがここにいるのさ!?!」

聞きたいことはかなりあるが、ひとまず一度話をまとめることにした。

二人に話を聞いてまとめると、

「まずカザリがポセイドン、あの男に裏切られてメダルを奪われて、どうにか逃げてきたけど力尽きて倒れたと」

「それでわたしが倒れてた彼を拾って助けたの」

「いやそんな捨て猫を拾ってきた感覚で言われても」

グリードだと分かっていたうえで今回の行為、それも今まで敵対していた相手だ。鞠莉ちゃんは将来大物になる気がする。

「まあ何にせよ探す手間が省けたってことだな」

「探す手間ね……言っておくけど、今のボクを倒してもメダルは手に入らないよ」

「それはお前のその姿を見れば分かる。セルメダルも足りないんだろ？生憎これしか持ち合わせてないけど」

ライドベンダーとカンドロイド用の十枚。そこから八枚をカザリに渡す。

「どうしてボクに？」

「戦う前から弱ってる相手を一方的に殴るのは好きじゃないんでね。それにどうせそれだけじゃ何も出来ないだろ？」

「何を言ってるの？キミ程度なら今のままだって十分勝てるよ？」

「へえ？俺の方も負ける気はしないんだけどな？」

バチバチと火花を散らす俺とカザリ。

「ストーツプ！二人とも喧嘩はノーセンキューだよ！」

「ゴ、ごめんなさい……」

二人の間に入ってきた鞠莉ちゃんが、チョップで制止してきた。

二人揃って謝ったところで、本題に入ると促した。

「それじゃあまず俺からカザリに一つ提案がある。カザリ、俺たちと手を組む気はないか？」

これはウヴァの時とほぼ同じだ。

ウヴァの時はカザリとポセイドンが厄介な同盟を結んでいた為、それに対抗する手としてこの二人が手を組んでいる間は共闘し、最低限使う分のメダル以外は譲渡するという条件だった。

今カザリの証言によって（嘘の可能性も否めないが）続ける必要は無くなったが、女神さまに与えられた感覚を気に入っているため、再び敵対する可能性はほとんど無いだろう。

今度はカザリとも共闘し、ゆくゆくはグリード全員を味方につけたいところだが……。

「興味ないね。ボクは人間と、それもオーズと手を組む気はサラサラない」

正直断られるような気はしていた。ウヴァの時は……とか思ったりもしない。ウヴァとカザリは「違う」のだから。

「そうか」

本来なら戦う者同士、武力抜きで話し合えたことすら奇跡だ。

同盟の内容まで説明して断られたのなら、もう何も言わない。次会った時は敵として全力で戦うだけだ。

……とは言ったものの、俺が与えたメダルで初めより力は安定したはず。鞠莉ちゃんを一人にしておくのは危険と判断し、しばらくはここにすることに。すると、

「ねえ耀太」

「ん、なに？」

「グリードとオーズは元々は敵同士なんでしょ？ならどうしてアंकやウヴァはあなたと共にいるの？」

鞠莉ちゃんにそう問われた。

そう言えば鞠莉ちゃんたちには、それぞれの概要と関係だけを話し、実際にあった（？）歴史そのものことは説明していなかった。

「アंकはさ、初代オーズとも協力関係にあったんだよ。それでも最後は裏切られてメダルを奪われて、拳句の果てにオーズはその欲望とメダルの力で暴走。石棺封印されてしまいましたとき」

その話をする、少し険しい表情になる。

「……耀太は大丈夫なの？」

「ああ……そうだね……」

正直暴走しないとは限らない。俺はオリジナルと違い、ちゃんと欲をたくさん持つている。女神さまは心配ないと言うが、万が一は起こり得るのだ。

無責任に「大丈夫」とは言えない。

どう答えようか迷っていると、

「それじゃあ約束。もし耀太が暴走しそうになったら、わたしが止める」

「鞠莉ちゃん……」

「あなたはもう何度もわたしたちを守ってくれたんだもの。だからあなたがピンチになつたら、必ず助ける」

優しい——慈愛に満ちた、と形容すべき笑顔でそう言ってくれた。

「ありがとう——」

彼女への想いはそれ以外、どうしても表せなかつた。

その日の夜。アंकたちのこともある為、耀太は帰宅。ホテルにはカザリと鞠莉の二人が残つた。

「キミは変な人間だね」

話を切り出したのはカザリだった。

「あら？それはどういふことかしら？」

「どうして諦めようとするの？」

その一言は、鞠莉に問いの意味を即座に理解させた。

「……彼に相応しいのはわたしじゃないもの」

寂しそうな笑みを浮かべ、静かに答えを返す。

「やっぱりキミは変な人間だよ。少なくとも、ボクが見てきた人間の中ではね」

ある程度回復したカザリは、部屋の中を歩きながら話を続ける。

「人間は誰しも欲望を持つてた。それらのほとんどが、本人には不相応だったり、不似合
いだったりしてたけど、それでも叶えようと必死だった」

「そう」と答え、鞠莉は少しの間を開けて、口を開いた。

「——わたしはもう失いたくないの。わたしの、大切な居場所を……」

その気持ちを言葉にすれば、きっとまた傷付けてしまう。それなら胸にしまって、忘
れよう。

大切な場所を守ってくれた彼を。

大切な親友を。

二度と傷つけないように。

そう切に想う鞠莉を見たカザリは、彼女に興味を抱いた。

彼女の欲望ではなく、彼女自身に。

翌日、やっぱり鞠莉ちゃんが心配になり、再び連絡船に乗って淡島へ。しかしその心配は杞憂だったらしい。

「協力って…本当かカザリ!?!」

「まあね。少し興味あるものも見つけたし、しばらくはここにいてもいいかな」

「そっか、なら後でコアメダルを渡すよ」

「よろしく頼んだよ」

どういう風の吹き回しかと聞きたくなったが、それを聞くのは野暮な気して、結局聞くことはなかった。

手に入れるのは難しくて、失うのは簡単。

それは誰でも、どんなものでも同じ。

だからこそ、人は大切なものを失わないよう、必死に抗う。例えそれが、何かを諦めることだとしても。

2nd Season

新学期と転校生と再スタート

長いようで短かった夏休みが終わり、ついにやって来た新学期。

今までは何とかやってこれたが、ここからは本当に未知の領域だ。

でもそれはそれでありだなと思う今日この頃。

鞠莉ちゃん、そしてダイヤさんの話が終わり、転校生紹介に入る。普通はHRで済ませてしまうものだが、どうせなら全校生徒に知ってもらおうという鞠莉ちゃんの提案で、始業式という場で行われることになった。

「今学期から一年生と二年生、それぞれ一人ずつ転校生を迎えることになりました。それでは二人から自己紹介をしてもらいたいと思います」

まず段の上に立ったのはカザリだ。

カザリとは夏休み中に色々あり、現在は協力関係になっている。

「ボクはカザリ・K^{キングス}・リオンドール。よろしくね、みんな」

「うわー！イケメン！」「一年生羨ましい……」「わたし狙っちゃおっかな」などなど、かなり人気なようだ。

ちなみにカザリと十千万で働いているウヴァは、かけると誰でも五感を得ることが出来る。「五感メガネ」(神にも耳が聞こえなかったりする神ひとがいるらしい)をかけている。本当にもうなんでもありだな。

そして二人目。こちらに関してはほとんど情報が無い。敢えていえば、彼が仮面ライダーであることのみ。いや、それだけで結構なことなのだが、この転校生の自己紹介は強烈過ぎて、どんな人間なのか、仲間になってくれそうかなど、そんな思考は一瞬でぶっ飛ばされた。

「佐藤晴也、仮面ライダーをしてている者です」

「ええええええええええええええええつ!?!」

そこにいるほぼ全員が驚愕の声をあげる。てか叫ぶ。

なんか普通通にカミングアウトしましたけど!?!何その「趣味でヒーローをやっている者だ」みたいな!?

「この町には仮面ライダーがあと二人いると聞きます。その二人と共にこの町と世界を守っていききたいと思っています」

「お、おお……!?!」

その一言一言に驚きを通り越し、もはや拍手まで起こるレベル。すげえよ、あの転校生……。

大したものだと彼を見ていると、一瞬だけ目が合った気がした。いや、目は合ったけど彼、佐藤晴也は視線をすぐ元の高さに戻した。

新学期始まって早々、とんでもない人が来たようです。

空前絶後の始業式が終わり、授業も今日は無いため部室に集まった。二年生以外は全員揃っている。

「自己紹介…凄かったね」

「うん、あれはバツチリ覚えられるだろうね」

やっぱりあの自己紹介は、脳裏に鮮明に刻まれたようだ。

「一年生のクラスも凄かったぞら…」

「上級生も見に来てたもんね…」

「まさに神々の黄昏…ラグナロクツ…！！」

一年生の教室に押し寄せる上級生か…確かに一年生からすればとんでもない事態だな…。

「で、件のカザリは来てないようだけど？」

「カザリくんなら学校を探索するって言って、行っちゃいました」

「なるほど、んじゃそのうち来るかもな」

鞠莉ちゃんを除く全員、特に果南ちゃんは警戒心が強く感じる。

そりやそうだ。休み前にはあんな目に遭わされて、恐れたり怒ったりするなという方が無理だ。

「ノープロブレム！心配いらないよ！なんたつて耀太と慎司がいるんだから！」

「もちのろん！バースドライブもこうして戻つて来たし、第一完全復活してないカザリなんて余裕余裕！」

それは盛大なフラグなのでは？

「ふ…シン、フラグ立ちまくりね」

「不吉な事言わない言わない。にしても千歌ちゃんたち遅いな…」

……まさかカザリに何かされて…。いやそんなわけないよな。……ないよね？
しばらくして。

「こつちだよ、晴也くん！」

さつきまで話題になつていたその名を呼ぶ声は、確かに千歌ちゃんだ。

「みんなお待ちせー！」

「うん、何となく予想は出来てたよ。千歌ちゃん」

「へ？何が？」

千歌ちゃんの後ろから梨子ちゃんと曜ちゃん、そして千歌ちゃんに佐藤晴也の姿があった。

「まあいいや。晴也くん、ここがスクールアイドル部だよ！」

「……た、高海さん、スクールアイドルって何ですか？」

「え!?晴也くん……スクールアイドル知らないの!？」

「知らないものは知りません。俺はこの町の仮面ライダーに会えると聞いたから来たんですよ」

スクールアイドルを知らないことはひとまず置いておいて、仮面ライダー——つまり俺と慎司に会いに来たってことか。

「会いに来たって……いやあー、俺たちも有名人になったんですねー!」

「島村耀太だ。こっちは宮沢慎司。よろしくな、佐藤」

「よろしくお願いします」

俺は手を差し出し、佐藤もまたその手を握ってくれた。

……なんか佐藤の手、凄く濡れてるような……。

「島村先輩はここで何を？」

「あ、ああ。マネージャーだよ。スクールアイドルA q o u r s のね」

佐藤は俺の言葉に首を傾げる。……何かおかしいことを言っただろうか？

「その……さつきから言っているスクールアイドルとは一体……?」

「スクールアイドルっていうのは、千歌ちゃんたちみたいに学校での活動の一環として

アイドルをする人たちだよ。かなりポピュラーなジャンルで、もう全国に五千ものスクールアイドルはいる。そして彼女たちが目指すもの、それは——」

「ラブライブだよ！かつてμsが優勝して伝説を作った、スクールアイドルの祭典、ラブライブ！」

「なるほど……。ラブライブ！」と「μs」とはそういうものだったんですね」

それは知ってたのか。じゃあやっぱりアニメは知ってた感じなのかな？

「じゃあ俺はこの辺で……」

「ちよちよ！え？今のって入部してくれる流れじゃないの!？」

「悪いですけど、俺はあまり興味ないんで」

「そんなあ……」

やっぱりすげえ……。本人たち目の前にして、興味ないとかバツサリ言えるのか。俺出来ないわ、そんなこと。

「興味はないけど——ラブライブ？を本気で目指すのなら、応援くらいはしますよ！それじゃあ」

そう言い残して佐藤は部室を去って行った。

「何が『応援くらいはしますよ』だよ！格好つけやがって！」

佐藤が帰った後、練習を始めたAqours。

その端で、慎司は佐藤に対して悪態をついていた。

「まあまあ、応援してくれるならいいじゃない」

「それを抜きにしても、あれは無いです！」

「はいはい」

慎司は佐藤のことをお気に召さなかったみたいだ。良い奴だと思っただけだな。

一緒に戦うことはもちろんあるだろうし、なるべく仲良くやって欲しいよ、俺は。

「はい、みんな休憩。二人ともー」

「お疲れ、飲み物とそれからまだ暑いし、アイスも用意してあるからねー」

それぞれ一つずつみんなに手渡す。

「どう？ 耀太たちから見るAqoursの練習」

「そうだねーみんな楽しそうだよ。みんなあの笑顔見ると、不思議と大丈夫って思える気がする」

「そうそう！ 今のAqoursならライブ決勝大会出場、廃校阻止も夢じゃない！」

そう、夢じゃない。そう思ってた。だけど、俺たちは大事なことを忘れていた。それを出すのは、もう少し後になる。

Aqours、仮面ライダー、グリード、そして神々。

それぞれの想いと思惑がする物語が再スタートした。

雨と個性と超バイク

学校説明会。それは来年度の入学を希望する中学生の為に開かれる、自分たちの学校のことをよく知ってもらおうという、在校生にとつての一大イベントだ。

しかし、浦の星学院はこの学校説明会を行えないということまで来てしまっていた。

鞠莉ちゃんのおかげで、条件付きで開いてもいいということになったのだ。

予選と学校説明会。二つの会場で披露する為の新曲を作る為、二グループに分かれた俺たち。

次の場面は予選の為の曲を作る俺たちが、奮闘するところから始まる。

ラブライブ予備予選に向けて、三年&一年チームで新曲を作ることになったのだが……。

「ねえ、俺たちって何しに来たんだったっけ……」

淡島ホテルの鞠莉ちゃんの部屋で、用意されたお菓子とお茶をいただき、ティータイムと洒落こんでしまっていた……。

「何って……なんでしたっけ？」

「それ本気で言ってるの、ダイヤさん？」

「じよ、冗談よ。予備予選で歌う新曲を作りの為です！」

ガチトーンでボケるダイヤさんに、ガチトーンのツツコミで返す。そんな声で冗談を言うのはやめていただきたい。

「じゃあ新曲について何かいい案がある人ー」

……あれ？誰も手を挙げてくれないのは何故だろう……。

答えは簡単。ルビィちゃんはテレビに釘付け、善子ちゃんは寝そべってスマホを弄り、花丸ちゃんはポツプコーンを驚掴み……。

人の話を聞いてねえー……。

「鞠莉さん鞠莉さん、俺の話を聞いてくれる人がいないんですが……」

「どうしてかしら……。曲を作る為に最高の場所を用意したんだけど……」

「最高過ぎたんじやない？快適な空間って居心地がいいけど、それが逆に意欲を掻き立てないって言うか……」

一理あるとかそういうレベルじゃねえ。

人とは娯楽が近くにあると、作業に集中出来ない生き物だ。

みんなもそれなりにくつろいでしまっている。完全に落とし穴にハマってしまっ

いる。

「……場所を変えた方がいいわね」

改めてここが今はよろしくない場であることを確認、移動することになった。

が、問題解決の糸口は見つからなかった。むしろ悪化した……。

何とか新曲のアイディア出すところまでは辿り着いたのだが、花丸ちゃんと善子ちゃんは無」、鞠莉ちゃんと果南ちゃんが「ロック」を取り入れたいと、意見が対立してしまつたのだ。

「とりあえずどこからツツコんでいいか教えて」

「ええ?! わたしたちに問題は——」

「問題大有りです! ルビィちゃんたちを見てよ!」

「え?……あ」

ロックは耳に合わなかつたらしく、一年生は鞠莉ちゃんの持つてきた音源でダウンしていた。

その後も話し合つたものの、この日のうちに決着が着くことは無かつた。

翌日、三年生と一年生はもう一度集まることになった。

黒澤姉妹と話し合つて、一つの答えが見えてきたのだ。その答えとは、

「三年生と一年生ってちゃんと話すことって少ないでしょ？だからこれを機に、もつと仲良くなれば曲作りも滞りなく進むと思うんだ」
とどしお

「確かにそうかも。流石マネージャー！みんなのことをよく見ているのね！」

「ダイヤさんとルビイちゃんがいなかったら、俺だって気付かなかったよ」

「……でもどうしてカザリまで？」

俺を盾にしてそういう果南ちゃん。まあそうなるよね。

「みんなで色々やろうと思ったんだけど、人数が半端になっちゃうかもかもしれないし、来たって言うから呼んだんだよ」

「そういうことだから、ボクも参加させてもらおうよ」

ついこの間まで本気で戦い合っていたとは思えないほど、フランクな感じだ。そもそもこれがカザリの素なのだが。

というわけで三年生チームと一年生チームに分かれてドッジボールをするこに。

三年生チームの内野は果南ちゃんと俺。外野はダイヤさんと鞠莉ちゃん。

一年生チームの内野は善子ちゃんとカザリ。外野はルビイちゃんと花丸ちゃんだ。

「行くよ、鞠莉！」

果南ちゃんの一投からスタート。鞠莉ちゃんへパスし、「シャイニートルネード」が炸裂。善子ちゃんに当たるが、ワンバウンドしてカザリがキャッチした。

……これドッジボールだよね？

「ボクたちの番だね。戦いでは負けたけど、今度は勝つよ！」

風を利用したカザリのボール。ソレは横に弧を描いて俺に向かってくる。

「つて！冷静に分析してる場合じゃねえ!？」

「タカ！トラ！バッター！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ!!」

過去最速でオーズに変身してボールをキャッチ。

「あつぶねえ……危うくドッジボールで大怪我するところだった……」

この後も試合は続いたものの、一年生はカザリを除いて全滅してしまった。

ちなみに勝敗が着く前に俺とカザリ以外の全員がダウンしたので、引き分けとなったのだった。

ドッジボールの次は、一年生の提案で図書館へ。

「八百年の間に、人間たちの読む物も随分面白くなったよね」

「確かにそうかもだけど……すげえな。俺はそんな本読む気にもなれないぞ……」

カザリが手にしていたのは歴史書。それも数冊は積まれている。

「読書は一人で読むのも、みんなで読むのもどっちも楽しいぞら」

図書委員である俺と花丸ちゃん、善子ちゃんはもちろん普段からアイドル雑誌をよく読んでいるルビィちゃんとダイヤさんは問題無し。

しかし果南ちゃんと鞠莉ちゃんは、

「おーい、二人とも起きてますかー？」

「……………」

……………寝てる。

「二人は読書や難しい話が苦手ですから……………」

ダイヤさんはそう苦笑する。

……………正直、普段の感じから薄々そんな気はしてた。

しばらくしても二人は起きず、これ以上はあまり意味が無いと、読み終えられなかった名残惜しさを感じつつ、図書館を後にした。

「予想以上に噛み合わないね……………」

インドア派の一年生とアウトドア派の三年生。

まさかここまでとは思わなかった……………。

「ボクはどつちも楽しかったけどね」

「まあ、人それぞれだから……………」

「はあ……………」

どうすれば良いだろうと思考していると、思わぬ襲撃者に会ってしまった。

「久しぶりね、オーズの坊や。それからカザリ」

人間の姿をしているのに、ルビィちゃんは少し退く。無意識に恐れているのが伺える。

「誰？」

「カノジヨはメズール。グリードの一人だよ」

カザリが答えると、メズールは本当の姿へと変異していく。

「ポセイドンの坊やが言ってたことは本当だったのね。オーズと手を組むなんて、気でも狂ったの？」

「ボクは自分にとって最善の手段を選んだだけだよ。コアメダル一枚でアイツに勝てるなんて思っていないからね」

カザリはメズールの挑発には乗らない。しかしその発言から、メズールはポセイドンと関わっていることが分かった。

「やっぱりお前も奴に関与してるんだな。てことはガメルも一緒か？」

「ええ。わたしもガメルも後はあなたたちの持つているメダルを手に入れば完全復活が出来るのよ」

「残念だったね。キミたちのメダルは全部アंकが持つてるよ」

カザリの言葉を聞くと、メズールは笑い出した。そんなこと言われなくても分かっている、と。

「わたしの役目は坊やたちを足止めすること。アंकのところには今頃ガメルが行っているはずよ」

勝利を確信した笑い。だが、その笑いはすぐに止むことになった。

「そうか、それは残念だったな」

「……どういうこと?」

「今日は頼りになる後輩を二人もおいてきたんでね。今頃ガメルはやられてるんじゃないか?」

「ならすぐに坊やを倒して行くまでよ!」

「オーズ!」

メズールの不意打ち。しかし、

「変身!」

「ライオン!トラ!チーター!ラッタア・ラッタア!ラトラーター!!」

変身と同時にライオディアス発動で攻撃は蒸発。もちろん威力は調節し、後ろの鞠莉ちゃんたちに被害が及ばないように。

「はあああつ!」

瞬時にトラクローを展開してメズールを切りかかる。

が、メズールは防御はおろか、避けることすらしない。

次の瞬間地面からサメヤミーが飛び出し、メズールを庇い爆散した。
「なっ……!？」

目の前で起こった事を上手く飲み込むことが出来ず、棒立ちになる。
「隙だらけよー!」

防御が間に合わず、徒手での攻撃をモロに受ける。

「自分のヤミーを……盾にするなんて……」

これじゃあいくら攻撃してもヤミーに防がれてしまう。

でも無数にいるメズールのヤミーを……。

やるしかない……。

クラウチングスタートの体制に入り、

「よーい……ドントッ!」

腕を広げてメズール目掛けて突撃。もちろんヤミーも現れるが、そいつらごと体当たりする。

「うらあああああああつ!!」

何百メートルか走り、ヤミーが出てこなくなった段階で腕をクロスし、メズールとヤミーを弾き飛ばす。

「な、なんて滅茶苦茶な……でも時間は充分稼いだわ。また会いましょう、オーズの坊

や」

「待てー！」

追いかける暇もなく、メズールの逃走を許してしまった。が、戦いはまだ終わっていない。

「厄介なもん残しやがって……！」

残されたヤミーたちが地面に潜り直し、逃走を図ろうとしている。

一体一体相手するのは時間と体力が……。

辺りを見回すと「これを使え！」と言わんばかりにライドベンダーが設置されていた。

「……デジャヴるんだけど、そんなこと言つてられねえやー！」

まずセルメダルを一枚投入してトラカンドロイドを入手。さらに一枚追加し、今度はバイクに変形させ、カンドロイドを起動。

トラくんは巨大化し、ライドベンダーはさらに変形。二つは合体し、トライドベンダーが完成した。

「おお！体がさつきより軽い！じゃなくて！」

何故か一人ボケとツツコミをしてしまった。

「まだそう遠くまで言つてないはず、見てるだろ！女神さま！」

『なんじゃ、休憩中に』

夏休みを終えて天界に戻った女神さま。休憩中なのは申し訳ないが、こっちはかなりピンチなんだ。協力してもらわなければ。

『仕方ないのう…ヤミーを見つければいいのじゃな…おるぞ。数百メートル先で暴れておる』

「サンキュー女神さま！行くぞトラくん!!」

「グレアアアアツ!!」

トライドベンダーの雄叫びと共にアクセル全開で走り出す。

合体前よりもマシンのパワーが上がっている為、女神さまが示してくれた場所にすぐに到着。

ヤミーたちはアスファルトの中を速い速度で移動していた。その奇妙な光景を見た人たちは悲鳴をあげ、逃げていく。が、腰が抜けてしまったのか、逃げ遅れた人にヤミーが迫っていく。

「トラくん、お願い!」

トライドベンダーはメダル型のエネルギー弾を発射し、ヤミーを一体撃破する。

「早く逃げてください!」

その人の盾になるように停車、逃げたことを確認し、メダジャリバーを取り出して再発進。

「トリプル！スキヤニングチャージ!!」

「グルアアアアツ!!」

トライドベンダーの咆哮で、地中から飛び出した数体のサメヤミーにオーズバツシユを放ち、トライドベンダーもエネルギー弾を発射。全てのヤミーに命中、爆発四散した。「よしよし！いいコだトラくん！」

撫でてやると、トライドベンダーは勝利の雄叫びを上げるのだった。

「ただいまー」

さっきの場所に戻るやいなや、みんな俺の方へ駆け寄って来た。

「中々戻って来ないから心配してたんだよー」

「ごめんごめん。数が多くて手こずっちゃってさ…おつと…」

「耀太!?大丈夫…?」

トラくんと一緒だったのが途中からだったからなのか、少しよろめく。

「大丈夫だよ。ほらカザリ」

果南ちゃんに肩を借りながら、カザリへメダルを返却する。

「その様子だとメスールには逃げられちゃったみたいだね」

「メダルはいつでも取り返せるさ。それより……」

メズールの所為を撃退したはいいものの、タイミング悪く雨が降り始めた。

幸いなことに、花丸ちゃんのお寺が近いので、彼女から連絡してもらい、使つてもいいことになった。

お寺の中はとも暗く、灯りはロウソクのみ。

少し動くと「ギイ…」と軋む音が――

「ハグーッ!!」

「え?」

何今の声可愛い。

「果南は怖いものが苦手だからね」

「そうだったんだ……誰にでも苦手なものってやっぱりあるもんなんだな」

足に力を込めて音を鳴らしてみる。

「ハグーッ!!」

可愛い。

ギイ……。三度音みたびが鳴る。

「耀太!」

「え!?こ、今度は俺じゃないよ!」

三回目のは本当に俺じゃない。その事を弁解していると、

「この猫が犯人だね」

カザリが腕に猫を抱えていた。

「みやあお」

「なあんだ……」

ホツとため息をついた直後、ふうつと風が吹き、ロウソクの火が消えた。

火をつけ直してパニツクに陥った果南ちゃんとルビイちゃんを落ち着かせ、今日一日のことを振り返る。

「みんなバラバラだね……」

「本当だね……」

一体感の無さを痛感する。

数秒間沈黙が続き、やがてあることに気づいた。

雫が一滴、天井から落ちてきた。

「雨漏りしてる。どこかに受け皿になるものない？」

「はい、耀太」

受け取った器をそこに置く。すると、それまで何も無かったのが嘘のように、次から次へと雨漏りし始める。

「こつちにもちようだい」

「そつちにも」

水が床に垂れないように器を集めて受け皿にする作業が始まる。

雨漏りは至る所にあつたけれど、そのうち床に落ちる水は無くなつた。

外から聞こえてくる雨の音。そして中では、受け皿に水が落ちる音が。

「ボク思うんだけどさ、わざわざ合わせる必要つてないんじゃない?」

「え?」

「今まで色んな人間を見てきたけど、その中でも同じ人間なんて一人も見たことない。似ている人間はいたけど、やっぱり違う。こうして聞き分けられるようになった声や音だつて、全然違うしね」

……そうかもしれない。いや、確かにそうなんだ。

どうしてみんなバラバラなんだろう、違うんだろう。当たり前だ。みんな同じじゃないんだから。

「全く違う個性を持ったみんな」

「好みも苦手なものも全然違うけど」

「けど、そんなAqoursだからこそ——」

一人一人の違った音色だからこそ、ひとつの曲を紡ぐことが出来る。

「それじゃあそれを忘れないように、今日はここで合宿よ!」

鞠莉ちゃんの宣言通り、この日はここで合宿となった。
そしてついにラブライブ予備予選の為の新曲は、完成したのだった。

苦手と輝きと新ライダー

「どうしても頼みたいことがあるんだ」

とある休日、俺こと佐藤晴也に一本の電話が入った。

詳しい話は旅館「十千万」で、と言われ、向かった。

「……つまり先輩が出掛けている間、高海さんたちのことを見ていてくれと?!」

「うん。俺も三年生と一年生をどうにかしないといけないから」

十千万に着き、島村先輩にそう言われるやいなや、俺は思う。

……どうしよう、断りたい。

「……宮沢さんだけじゃダメなんでしょうか。それにウヴァだっているんですね?」

塵ほどの希望を込めて尋ねる。

「うんダメ」

即答かよ。

「お前も知ってるだろ。今俺たちが敵にしている相手」

「それは、まあ……」

実際に戦ったことはないが、女神さまからそのことは言付かっていた。手段を選ば

ず、凶悪極まりない神の成れの果てだと。

「ポセイドンはもう何度も千歌ちゃんたちを狙って来てる。守ってあげれる人はできるだけ多い方がいいんだ」

彼の瞳は真剣そのものだった。もちろん、命を守るのに浮ついたも何も無いのだが。

「……その仕事を引き受けるにあたって、一つ問題があるんですが」

「問題……?」

そう、彼の頼みを受けるにはどうしても伝えなければいけないことがあるんだ。

その問題とは――

「女の子が苦手?!」

俺の告白に先輩は予想通りの反応を見せた。

先日の挨拶を見ていれば当然ではあるのだが。

「し、始業式の時は何で平気だったんだ?」

俺は頭を掻きながら、

「あの時体育館にいた人全員を野菜だと思っていました」

「そ、それなら今回はあの時より確実に人は少ないんだし、尚更大丈夫なんじゃ……」

肩を落とし、嘆息する。

「ダメなんです。野菜作戦は人が多いときじゃないと不自然過ぎて……」

「……どういうことだよ？」

「違和感なく野菜がある場所と言えば、畑か八百屋ですよね？」

「そう……なのか？」

「人がいればいるほど野菜の数は多くなり、その場所は八百屋、そして畑と重ねやすくなる。けれど、野菜が少ないと……」

ポカんと口を開けて耀太は立ち尽くす。しばらくしてその口を閉ざしてこう言った。

「いやそれも色々おかしいだろ！」

ツツコミを入れられながら、結局先輩に押し切られて高海さんたちの護衛につくことになった。

十千万の千歌先輩の部屋にて、今日はいつもととは違う珍しい面子が揃っている。

千歌先輩たち二年生に加え、転校生の佐藤晴也。そして俺だ。

集まった目的としては、今度の学校説明会で披露する新曲作りと、万が一グリードやポセイドンが出た時の為の対処だ。

が、

「千歌ちゃん、歌詞浮かびそうにない？」

「はあ……全然分かんないよ……」

このように作業がほとんど捗っていないのだ。

「『輝き』っていうのをキーワードにしようと思うんだけど……」

「『輝き』、か……」

反応から察するに曜先輩も梨子先輩も、二人ともピンと来ていないんだろう。俺もだ
けど……。

「はーるやくん!」

「……うわああああつ?!」

「『ツ!?!』」

千歌先輩に話しかけられた途端、佐藤が甲高い悲鳴を上げて音撃をかます。

「静かにしろっ!……うちにまで聞こえてきてうるせえんだよっ!!」

耀太先輩の部屋にいたらしいアंकが乗り込んできた。

「誰だ! デカい声出した奴は?! お客に迷惑だろっ!!」

アंकに続き、従業員姿が板についてきたウヴアが部屋に入って来る。

「ご、ごめんなさい……」

その剣幕は凄まじく、その場にいた全員が謝ったのだった。

二人が部屋を出ていった後、佐藤は俺たちに土下座してみせた。

「そ、そこまでしなくても……。大体いきなり話しかけた千歌ちゃんだって悪いんだし」

「ごめんね、晴也くん。びっくりさせちゃって」

「い、いえ……俺がこんなだから……」

謝罪に次ぐ謝罪。千歌先輩はもちろんそして佐藤も普通に良いヤツなわけで、多分これじゃあどれだけ時間があってもキリがない。というわけで、

「ストツプ、そこまで！」

「慎司くん？」

「千歌先輩も佐藤も謝るのはそのくらいにして——」

「……実は俺、女性が苦手なんです」

「そうそう。女性が苦手で……へ？」

佐藤の発言にしばらく時間が停止。数秒して再び、

「ええええええええええっ!？」

「だからうるせえって言ってるんだろっ!!!」

「ごめんなさあぁあいつ!!」

今度は佐藤を除く全員が叫び、アंकとウヴァが召喚されたのだった。

このまま黙っているわけにもいかなないと感じた、そう言つて佐藤は話した。

「……俺、小さい頃にいじめられてたんです」

幼い頃のトラウマが脳裏に焼き付き、それ以来女性を見ると、その時の記憶と共に恐

怖がフラツシユバックしてしまいうらしい。

さつきとは打って変わって、深刻な雰囲気はなしに包まれていく。

佐藤の過去はなしは、千歌先輩たちとは縁遠い話だろう。周りがみな敵だなんてこと、きつと想像もつかないはずだ。

「そうだったのか……」

その証拠に三人とも言葉を失い、悲しい表情をしていた。

「だから——」

「ありがとう」

「え……」

何かを切り出そうとしていた佐藤の言葉を遮ったのは千歌先輩だった。

数秒前までの悲しげな彼女はそこになく、佐藤に向けられていたのは、とても優しい笑みを浮かべていて。

そして震える佐藤の手を優しく包み込んでいた。

「わたしたちのことも苦手だーって思ってたのに、晴也くんは助けてくれたんでしょ？」
「助けてくれた？ どういうこと、千歌ちゃん？ わたしたち、晴也くんはまだ会ったばかりじゃ……」

「ラブライブの地区予選があった日、わたし聞いたんだ。怪物と戦ってる戦士を見た

！って。それって晴也くんなんですよ？」

「え、あ、そ、それは…そうだけど…」

「だから、ね」

あれ？ すぐえドキドキするんだけど。ヤバくね？

いかんいかん！ 俺は善子一筋なんだ！！

意思を強く保って正気を取り戻し、佐藤の方を向くと、彼は泣いていた。

表情こそ変わっていないが、その瞳めから一筋の涙が零れていた。

「わわわ、ご、ごめんね！ いきなり手なんか握っちゃって！」

「…いえ、ありがとうございます」

そう答える佐藤は、佐藤ちゃんはきつと大丈夫だ。

「きやあああああ！」

……なんてタイミングだ。結構いい感じだったのによ！

降りて外に出ると、ガメルが暴れていてウヴァが応戦、アंकが観戦していた。

「アंकー、メダル、返せー！」

「はっ、残念だがそいつは無理だな」

「モタモタするな、お前たち！ 早く変身して手伝え！」

「あいよ！ っって危ねっ!？」

ドライバーを腰に装着した瞬間、エネルギー波が飛んで来た。

「この感じ、アイツか」

アングの睨む先にいたのは、ディーペストハーブーンを携えたポセイドン。そして奴の視線は俺たち、正確には佐藤に向けられていた。

「行くぜ、佐藤ちゃん！」

「ええ、宮沢さん！」

改めてセルメダルを取り出し、佐藤も変身の体勢に入る。

「変身！」

セルメダルをドライバーに投入し、ハンドルを回転させて変身を完了させる。

「変……身……身……」

そして佐藤は、仮面ライダーよろしくの変身ポーズ。からのドライバーに水が吸い寄せられ、姿が変わっていく。

伝説のあのライダーを彷彿とさせるフォルム。

まるで水面みなものように、陽の光を反射するボディ。

その戦士の名は――

「俺はアクア。仮面ライダー、アクア！」

この力を得て、この世界に来て、二度目の変身。

最初は女神さまには「とある少女たちを守って欲しい」と言われた。

けど、あの時はただ敵を倒した“だけ”だった。

「守れ」と命じられた人たちに近づく敵を、振り払うだけでいいと、そう思ってた。

「ありがとう」

その言葉をかけられたのはいつぶりだろう。

たった一言なのに、胸が熱くなって。

守りたいと思っていた。

眼前の悪から！

リーチはポセイドンに及ばないものの、アクアの強みは水このカを力に変えること。

海のあるこの町なら——！

「俺は負けない!!」

ポセイドンの攻撃を紙一重で回避し、徒手による連撃。

「すげえ……ポセイドンポセイを圧倒してやがる」

「オーズと同等……いや、それ以上か？」

流れるように蹴りを加え、攻撃の隙を与えない。

さらに水を吸収して攻撃の威力を上げ、ラッシュを仕掛ける。

「ポセイ^こイドン^カが圧倒的差をつけられるとは……ふふふ、ははははー！」

狂ったように笑い出すポセイドン。

不気味だが、奴を仕留めるには絶好のチャンスだ。

「オーシヤニックブレイク!!」

スライディングで勢いをつけて放つ必殺技のキックを叩き込んだ。

いやマジですげえ……。

本当にポセイドンを倒しちまった。こりゃ負けてらんねえな！

「シヨベルアーム」

「うらああ!!」

左腕に武装してウヴァと共に同時にパンチ、そこから回し蹴りを食らわす。

セルメダルの消費が激しいガメルに、CLAWSでメダルを削り取られながらの攻撃は有効なようで、攻撃の質がさつきから落ち続けている。

「うううう……やめろおお！」

「悪く思うなガメル。ここを襲わせるわけにはいかないんだ」

ウヴァの一撃がガメルを吹き飛ばす。

「つしやあ！こいつを食らいな！」

「ブレストキャノン！セルバースト!!」

よろよろと立ち上がろうとしているガメルに砲身を向け、ブレストキャノンをぶつ放す。

「うわああああ!!」

砲撃は命中し、ガメルは悲鳴をあげるとともに爆発した。

「おめでとうございます」

刹那、後方から佐藤ちゃんが倒したはずのポセイドンの声が。

振り向くと、倒れたと思っていたポセイドン、さらに今倒したはずのガメルも健在で、ポセイドンの腕でウヴァの身体を貫いていた。

「が……貴様……俺のメダルを……」

腕が引き抜かれると、ウヴァはセルメダルを零しながら地に膝をついてしまう。

そしてポセイドンの手には、二枚のコアメダルが握られていた。

「おいお前、今何をした？」

「何を？メダルを頂いただけですが？」

「ちつ……答える気は無いか」

ヤツが何かをしたことには気付いたのか、アंकは。

「それではまた会いましょう」

そう言い残し、ガメルとともにポセイドンは消えてしまった。

『またアイツに……』

「はい……あ、でも悪いことばかりじゃなくて！」

コアメダルを奪われてしまったこと、佐藤ちゃんの快勝、彼が苦手を少し克服し、そのおかげで曲が完成したことなど、今日起きたことを電話で耀太先輩に伝える。

向こうも結構大変だったみたいだけど、最後はカザリに助けられたらしい。

『そっか……、大変だったな』

「それはお互い様ですよ」

『そういうやさ、いつの間にか佐藤“ちゃん”になったんだな、呼び方』

「んー、まあ語呂がいいからですかね」

佐藤ちゃんは明日、正式にスクールアイドル部に入部することになった。

新たな仲間が加わり、心機一転……といきたいところだったが、運命の神さまは残酷^トであるという知らせが入るのだった……。

ダブルブッキングライブと方法と鳥ヤミー

予備予選、そして学校説明会で歌う新曲の完成を報告し合い、いい感じの雰囲気になつていた所にその連絡は入つてきた。

「学校説明会が延期!?!」

「そうなの。雨の影響で道路の復旧に時間がかかるから、一週間延期にするって……」

これは痛い……。延期だけなら良かったものの、「一週間」という言葉がついたお陰で、事態は良くない方向へ傾き始める。

「ど、どうしてそんなに頭を抱えてるんですか?」

「そうだよ。一週間くらい延期になつたって全然問題は——」

晴也は知らなくて当然なのだが、……まさか千歌ちゃん……。

「千歌ちゃん、学校説明会が一週間延期になりました。さて問題です」

「一週間後の日曜日、一体何があるでしょう?」

曜ちゃんと梨子ちゃんがそう問いかけると、

「そんなのライブ予備予選に決まってるのじゃん。……あれ?」

どうやら本気で気付いていなかったらしい。

「同じ日曜日だ!？」

一難去つてまた一難。

神さまは骨の髄までDSなようだ……。

「どうすればいいの……」

予選会場と学校。

地図で見る限り二つの場所は結構な距離がある。

限られた僅かな時間でどう移動するか、それが今直面している問題だ。

「もし予選で一番に歌うことが出来れば、ギリギリバスに間に合いますが……」

予選の歌う順番を決める方法、くじ。

これで一を引くことが出来れば、ダイヤさんの案は無事通るのだが……。

「もつと確実な方法は無いの?」

「うーん……そうだ! 鞠莉ちゃん家のヘリで!」

「おー! 流石千歌っち! その手があったです!……というところで?」

「やっぱり?」

「パパには自分たちだけで何とかするって約束したんです! それをいまさら力を貸してなんて言えませんか!」

困ったときの鞠莉ちゃん最頼みもダメと……詰んでね？

「はあ……空を飛べればなあ……」

誰かがそう眩くと、一斉に俺と慎司に視線が向けられる。

「無理だよ。物理的にも身体的にも」

「だよねえ……」

定員オーバーな上に身体への負担がかかり過ぎる。

それに代わる曜ちゃんのお父さんの船作戦が提案されたが、当然却下。

結局ダイヤさんが挙げた運頼みで一番を狙うことになったが——無理ですね。

結果は二十四。所詮運は運ということだ。もつとも引いた本人善子ちゃんは喜んでいたが。

「いよいよ万策尽きたって感じだね……」

「せっかくみんな頑張ったのに……」

学校説明会を取るか、ラブライブを取るか。

一つしか選ばせないなんて、この世界の神さまは鬼畜じゃないですかね？

完全にお通夜ムードに入ってしまったている中、梨子ちゃんが、

「二グループに分ける？」

「うん」

四人と五人のチームで説明会とラブライブ、二つのライブをこなす。それならば合理

的だし、みんなにかかる負担もぐんと減る。ただ一つ引つかかることがあることを除けば完璧だ。

「でもそれってAqoursって言って良いのかな……」

「それは……そうだけど、それでもわたしはこれが最善だと思う。わたしたちに奇跡は起こせないもの——」

初代Aqoursは果南ちゃんたち三人。千歌ちゃんたちが立ち上げたAqoursは四人だった。そこへ一年生が参加して七人へ。そして紆余曲折を経て九人になった。

ここに来るまで何度も人数やメンバーは変わったけど、“今のAqours”は紛れもなく九人いてこそだ。

二手に分かれてライブをしたとして、果たしてそれはAqoursと言えるのか。答えは否だ。

が、そうは言っても梨子ちゃんが出した案以外に有効な方法は……。

俺も俺なりに頭を抱えていると、

「みかん？」

梨子ちゃんがモノレールに積まれた大量のみかんを見つけた。

「こんなに収穫されるもんなんだ」

「そりゃあ、内浦のみかんは美味しいし、有名だしね」

「へえ」と二人で感心していると、

「そうだよ！みかんだよ！」

唐突に千歌ちゃんが叫びだした。しかも以前見せた時と同じ、光輝く瞳の笑顔で。

どうやら分かったらしい。『奇跡を起こす方法』が。

それなら俺も、時間を稼ぐことくらいなら……。

ラブライブ予備予選及び学校説明会当日、梨子ちゃんの提案通りみんなは二手に分かれた。

予選に向かったのは千歌ちゃん、梨子ちゃん、曜ちゃん、ダイヤさん、ルビィちゃん。そして果南ちゃん、鞠莉ちゃん、善子ちゃん、花丸ちゃんと俺たち三人は学校に残ることに。

「ルビィちゃん大丈夫かなあ……？」

花丸ちゃんがそう言葉にする。他の三人も、口には出さないもののその顔色から何を考えているか伺えた。

「行きたい？五人の所に」

「そりゃあ出来るならそうしたいけど……」

「そしたら説明会が……」

「大丈夫。ライブか説明会か、二つのうち一つだけなんて選ばせない。じゃないと絶対満足できないでしょ？」

それが正気であること、本気であることを彼女たちに伝える。
すると、

「分かったよ」

果南ちゃんたちは承諾してくれた。

「でも今からじゃバスも間に合わないし……」

「そのことなら心配いらないわ」

その声は最早聞きなれてしまった俺の叔母を勝手に自称した女神さまのものだ。

当然果南ちゃん以外とは面識がないので説明はした（叔母というのが自称であること
を除き）。騙しているようで良心が痛んだが、致し方が無い。

「じゃあ行ってくるよ」

「うん。みんなが戻ってくるの待ってるから」

女神さまの運転する車に乗り、四人は予選会場に出発した。

残されたのは俺と慎司と晴也の三人。

「行ってしまいましたね」

「ああ。俺たちは俺たちにしか出来ないことで千歌ちゃんたちの力になる。やるぞ、二人とも！」

「はい！」

俺たち三人に課せられた役割は二つ。

一つはよいつむの三人と他の生徒と一緒に、ライブの会場を準備すること。

そして二つ目は、A q u o u r s が浦の屋に戻って来るまで時間を稼ぐことだ。

この二つ目の仕事はカザリとウヴァの協力を得て行う。

初めはステージの準備をしていて、その途中でグリード態になったカザリたちが襲ってくる。それを俺たち三人で撃退するという芝居をする。

早い話が夏休みにダイヤ監督のもと撮影、放映された映画「仮面ライダー」の舞台版だ。

「おいヨータ。今日は忙しいって言ったよな？」

ここで突っかかってきたのはアंकだ。

口調から察せるように、今アंकは機嫌が悪い。

曰く、今日行きつけの店で「アイスが安くなる曜日」だそうだ。

「そう言うなって。アイスなら後でいくらでも買ってやるからさ」

「その言葉忘れるなよ！」

「分かっています分かっています。だから手伝ってよ」

ぶつぶつと文句を言いながらも結局は手伝ってくれるアंकは、浦の星では「ツンデレお兄さん」という形で、カザリにも引けを取らない人気があるということだけで、ここで述べておこう。

とにかく作戦は完璧！あとは女神さまからの連絡を待つだけだ。

四人を送り出してから数十分の時間が経ち、女神さまから念話があった。ライブは無事終わり、今しがたこちらに向かったとのことだ。

慎司と晴也にチラシを配ってもらったお陰で、結構な人数が揃っているが、さらに集める為に校内放送を行う。

『間もなく演劇部とスクールアイドル部による演劇、「仮面ライダー」が始まります。ご覧になる方は、特設ステージまでお越し下さい』

見学に来ている人たちの歩みが、次第にステージの方へ向いていく。

「よし、いいぞ！もつと人を集めて時間を稼げば、千歌ちゃんたちのライブを見る人も自然と多くなるはず！」

やがて劇の始まる時間になると、百を超えるであろう人数が集まっていた。

「後はみんなが戻ってくるまで、来てくれた人たちを楽しませるんだ」

「任せて。ボクたちが力を貸すんだから、きつと最高のステージになるよ」

ダイヤさん考案の二代目シヨツカー首領の衣装を着たカザリとその部下ウヴァが出ていった。

『浦の星学院に集まりし人間たちよ。今日からここは我々シヨツカーの支配下に置かれる。諸君らは栄光あるシヨツカーの戦士として、生きてゆくのだ。はーっはっはっはっ！』

セリフそのものは古典的な悪役としてありがちなものだが、カザリの演技力が幼稚さを忘れさせ、一層恐怖感を煽る。

『そこまでだ、シヨツカー！』

次いで出ていったのはバース・アクアに変身した二人。

『これ以上、お前たちの好きにはさせないぞ！』

『バース：アクア：。裏切り者の仮面ライダーめ！今この場で貴様ら二人を処刑してやるぞ！ゆけ！我が部下たち！』

『『イー！』』

カザリが腕をかざすと、戦闘員の衣装を着た演劇部員たちが二人に襲いかかる。

数が多いがやはり戦闘員。次々と二人にいなされていく。もちろんかなりの手加減をしてだが。……なんだろう、凄い既視感。

『最強の怪人になるはずだった仮面ライダー……やはりそう簡単には倒せないか……』

いいだろう、お前の力を見せてやれ』

『は……』

幹部であるウヴァの参戦。戦いの流れは敵側へと変わっていく。

桁違いの攻撃力と身のこなしで二人を圧倒する。もちろん演技ではあるけれど。未来の後輩たちは彼らの演技に釘付けのようだ。

『ふん。弱い、弱過ぎる。やはり所詮は旧式ということか』

『クソ！俺たちだけじゃダメなのか……！』

『諦めるな！あの人と約束したろ?!日本の平和は俺たちで守るって!』

ポロポロになりながらもなお立ち上がるアクア。「そうだったな……」と答え、バースもまた立ち上がる。

そんな二人の様子を観た人たちは、「仮面ライダー頑張れ!」とか「負けるな!」とか、声援を送り始める。

「さてと、俺も負けてらんないな」

ドライバーを腰に当ててメダルをセット。登場の準備だ。

『ぐはあ!』

『しっかりしろ!バース!』

『俺に構うな!アクア、避ける!』

『ふん!』

「タカー!」

最後の攻撃が振り下ろされる直前、鳴き声と共に飛来したそれが、アクアへの攻撃を防ぐ。

『何だこれは!?!』

『……………』

「タカー!トラ!バッター!タ・ト・バー!タ・ト・バー!タ・ト・バ!!」

『あなたは……………!』

『オーズ……………!』

変身を完了させ舞台へ登場。同時に観客たちのボルテージが上がっていく。

『よく頑張ったな、二人とも!この戦い、俺も参戦させてもらおうぞ!』

『始まりのライダー、オーズ。その力、俺に見せてみる!』

ウヴァ演じる敵幹部が先に出る。その攻撃をうまく防御し、カウンターを食らわす。攻撃を受けたことで怯むも、相手はこうげきのをゆるめない。が、そのすべてを躲しあるいは受け流してこちらの攻撃をしっかりとヒットさせていく。

『ならばこれを喰らえ!』

角からの電撃が放たれ、俺に直撃。しかし――

『ノーダメージ……だと……!』

それをものともせずウヴァに迫る。

ホントはめちやくちや痛かったけどね!?

後ずさるウヴァ。そしてその背後には。

『ぐは!?!……』

突如、ウヴァが倒れた。理由は単純。カザリがウヴァにトドメをさしたのだ。

『何?!?お前、何故自分の部下を!?!』

『決まっている。そいつが使えないからだ。オーズ……初代首領、我が母の仇、ここで

お前を倒す!』っ!?!』

マントを翻し、変身しようとする直前、目の前に火炎弾が放たれた。

「すげえ……あれも演出かな?」「でも空飛んでるよな……」

周りの人たちの言葉を聞き、空を見上げる。

「なっ!?!……」

空を舞っていたのは、

「……鳥?」

鳥のようなシルエット。それは鳥であって鳥にあらず。

「まさかアंकの奴、ヤミーを……!」

「違うよウヴァ……」

「何？どういふことだカザリ。アレは間違ひなくアンのクの——」

「そう、アンのクのヤミーだ。けど、今ここに居るアンのクのじゃないよ」

カザリが言い放つたその言葉は決して聞き捨てならないが、今はそれどころじゃない！

空飛ぶヤミー（遠目でしか見れない為名称不明）が攻撃するだけして、逃げていく。しかも、女神さまが果南ちゃんたちを送っていった方に。

「追え、ヨーター！絶対見失うな！」

「分かつてる！」

アンのクから二枚メダルを受け取ってドライバーに装填。コンボチェンジする。

「タカ！クジャク！コンドル！タージャードルウー!!」

「ウヴァ、カザリ、晴也。三人はみんながパニックにならないよう見てて！慎司は俺とあいつを追いかけるんだ！」

「了解（分かったよ）」

慎司もカッターウイングを展開。俺も翼を広げ、ヤミーが飛んでいった方向へ飛翔する。

「どうするつもり、アンのク？」

「何がだ」

「アレ、罨かもしれないよ？」

やっと追いついたあのヤミー——オウムヤミーは、鳥系だけあつて流石に速い。飛行が出来る形態でもなかなか追いつけない。

「待て！それ以上は……！」

火炎弾を放つが、ことごとく避けられる。バースのバースバスターも同じだ。

「ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン!!」

セルメダル七枚をスキャンしてエネルギー刃を放つが、それも躲されてしまう。そしてヤミーはそのまま方向転換し、火炎弾を放ってくる。

「うわあああつ！」

数発目でそれが命中して勢いで落ちてしまう。

「先輩！てめえ！」

「ドリルアーム」

落ちていく中、ドリルアームを装着して戦うバースとオウムヤミー以外に、赤い影が視界の隅を素早く通過していく。

「今の……まさか」

体勢を立て直して着地。辺りを見回すが、不審な気配は感じない。が、後ろを向いた直後、前から飛んでくる火炎弾が、頬を掠っていく。

オウムヤミーは未だ上空。ヤミーが他にもいるのか、それとも……。

「ウヒヤヒヤヒヤ！」

答えは前者だったようだ。もつとも、まだ危惧していた展開でないとも限らないが。

「ただ……本当にお前だけなことを祈るよ！」

「アヒヤアヒヤヒヤヒヤ！」

奇妙な笑い声をあげていて、とてもイラつくが、今の状況はかなり分が悪いことを忘れてはいけない。

その特性上、タジヤドルコンボは鳥系ヤミーやアंकと相性が悪いからだ。

「ウヒヨオオオ！」

笑いながら徒手空拳での攻撃。それに応じてこつちも仕掛ける。

拳を叩きつけてゼロ距離での火炎弾発射。相手も火属性の為、あまり効いてはいないが、ノックバック程度ならできる。

「時間が無いんでね。これで決めさせてもらおう！」

「スキヤニングチャージ!!」

「はっ！」

再び翼を展開して飛び上がる。すると、オウムヤミーも追いかけてくる。

「セイヤー……!!」

先に体勢を変え、コンドルレッグを能力解放し、プロミネンスドロップを叩き込む。

「ウヒヤアアアア!?!」

ヤミーもかなりの速度で近づいた為、避けきれず、双方のスピードから生じた力によつて潰され、爆破四散した。

「せんば……い!」

「慎司、そつちもやったみたいだな」

ドライバーを外して変身解除した直後、

『何をしておる、ぬしら!早くせんと、ライブが始まつてしまうぞ!』

「「うわ!?!」」

何とかピンチは切り抜けられたと思いきや、女神さまから念話が飛ばされてきた。

「つて、もう着いたの!?!」

『あと数分で学校に着く。そんなところで油を売ってないで、さっさと戻らんか!』

……そんな所つて……見てたんなら助けてくれよ。

そんなこんなでAqoursのみんなが戻る数秒前に学校に戻り、なんとかライブには間に合った。

「何で取り逃した!？」とか「どうしてステージの一部が焦げてるの?」とか言われたりして、大変な一日ながらも、今日のところは平和に終われそうだ。

そして今日という日が静かに終えようとしている中、また静かな眠りから目醒めようとしている強大な力を、俺たちは知る由もなかったのである。

お金とバイトと呼ばれたい名

スクールアイドル部の部室で、そわそわとパソコンの前で待機するAqoursのメンバーとプラスα。

そして練習着姿で窓を拭く千歌ちゃんという奇妙な光景が目に入る。

「ねえ、耀太くん。千歌ちゃん、どうしちやったの?」

そう尋ねてきたのは梨子ちゃんだ。

「どうって……どうもしてないと思うけど……」

「もしかして今日が何の日か忘れちゃってるとか?」

曜ちゃんがそう言うが、それは無いと絶対に言える。

何故なら今日という日を誰よりも待ち望んだのは、件の彼女だからだ。

「千歌ちゃん、今日は一体何の日でしょう?」

「何って、ラブライブ予備予選の結果発表の日でしょ?」

「「おお」」

みんなが一斉に声を上げる。いやそんなに?」

「緊張はしないの?」

「しないよー?」

ルビイちゃんの違いに自信ありげに答える。どうしてかと言うと、

「だってあんなに素敵な歌を歌えて踊れたんだよ!それに聖良さんもトップ通過は間違いないって!」

「いつの間にそんなに仲良しさんに……」

そう、あのSaint Snowの鹿角聖良さんにも御墨付きを頂いている。それに間違いは無いだろう。

「あ、来た!」

「Aqoursは……」

その名前が出てきたのは一番初め。

「ねえこれってトップってこと!」

「やったあ!」

ひとまず一難は去っていった。

……が、一難去ってまた一難がもはやテンプレ化してきているこの世界で、新たな問題が浮き上がらない訳がなく……。

「えー!?!この間、みんなで千円ずつ入れたのに!?!」

うちうちーの貯金箱から一枚の硬貨——五円玉が出てきたことが、現在Aqours

が財政難に陥っていることを告げていた。

「何で五円……」

「ラブライブにご縁がありますようにってことじゃないですか？」

誰かがそんな洒落を言うが、現状それは洒落にならない。

Aqoursは自費で衣装や交通費を賄っている為、財政面で弱い傾向がある。

勿論俺も出来る限り協力はしているが、それも限界というものはある。

そしてやって来たのは淡島の銭洗弁天。

千歌ちゃんが貯金箱に入っていた五円玉を洗っている。

「どうか……どうか五円を十倍・百倍に!!」

「五円の百倍は五百円だよー」

無いに等しい神頼みとはこれ如何に。

「それに神頼みするくらいなら……」

鞠莉頼み……といきたいところだけれど、

「小原家の力に頼ることは出来ませーんっ!」

「ですよー」

今のところ、Aqoursには完全に打つ手はほ無い……。

「ねえダイヤさん」

「……………」

反応が無い。

今度は目の前で手を振って呼んでみる。

「ダイヤさん？」

「!?ど、どうしました、耀太さん？」

「これからどうしようかって話なんだけど……ダイヤさん、大丈夫？」

「な、何の問題もありませんわ。資金の方についてはわたくしにアイデアがありますわ」

というわけで、目を改めてやって来たのはフリーマーケット。

「なるほど、フリーマーケットなら高校生でも簡単にお金が稼げるし、何より時間も取られない。流石ダイヤさん！」

メンバー（主に後輩）からの絶賛にダイヤさんは、善子ちゃんから貰った羽根を髪に刺して、怪しく笑みを浮かべていた。

そして、

「ねえ、千歌ちゃん。それは何？」

「何って、ミカンだよ？」

謎の物体改めミカンの着ぐるみを着ている千歌ちゃん。

それどつから持ってきたのとツッコもうかと考えていると、

「ねえねえ、ミカンのおねーちゃん」

「はーい！ミカンだよー！」

小さな女の子がぬいぐるみを抱きながら千歌ちゃんを呼び止めた。

「いくらですか？」

「えーつと……どうしよつか……」

そう尋ねられて、千歌ちゃんは歯切れが悪くなる。

理由は商品ぬいぐるみの値段であるが……。

「でも……今これしか持ってない……」

女の子の手の上で輝くのは……五円……。流石にこれでは……。

「毎度ありー！」

などと思った矢先、千歌ちゃんは五円を受け取り、ペンギンのぬいぐるみを女の子に譲ったのでした。

「やった！五円が二倍に！」

……うん、ご利益はあつたね。

五円が二倍で十円……。

ま、まあ、あの可愛さに勝てる人なんてそうそういないし……それこそあの子が泣い

てしまえば、心に変なつかえが残ってしまっただろう……。

その後、ぬいぐるみの金額分のお金は俺が納め、またダイヤさんが物凄い剣幕を、お客様相手に見せてしまったのだった……。

フリーマーケットが終了し、売れ残った商品を片付けている時、やっと俺はある異変に気付いた。

そしてそれは俺だけじゃない。

千歌ちゃんの見つめる先にもまた、ダイヤさんがいる。

「ねえ耀太くん、ダイヤさんの様子なんか変じゃない？」

「うん。多分何かあるんだろうけど……果南ちゃん」

「どうしたの、二人とも？」

「ダイヤさんが何か元気が無いように見えたからさ……」

「どうしたのかなあつて」

すると果南ちゃんは苦笑した。

「千歌は不思議と鼻が利くよね。耀太に至ってはこういう時に限ってだし……」

果南ちゃんは何かを呟くが、声が小さくて聞き取れなかった。

「まあ、ダイヤのことはわたしと鞠莉に任せて」

ともあれ、彼女の言う通り、ダイヤちゃんのことには二人に任せることにし、今日はお

開きになったのだ。

「んで、今日は曜ちゃんのところに入った救援要請を、みんなで手伝うってことで、オーケー？」

「救援要請って……まあ、間違っではないんだけどね」

やって来たのは「伊豆・三津シーパラダイス」。

その名の通り水族館だ。

以前曜ちゃんがバイトをしていたようで、今日はイベントの予定になっていて、人手が足りないらしい。その為、スクールアイドル部総出プラス二人で手伝うことになったのだ。

「それにしても、アंकクが自分から進んでやるなんてな……」

「部屋で寝てると虫頭ウヴァがいつもうるさくてな」

「ああ……なるほど」

要するにウヴァに怒られるのが嫌なんだな……。なんかウヴァも真っ当になってきてるよ、本当。

「まあ何にせよ、やるならちゃんとやってくれ。A q o u r s の名前に傷をつけるわけにはいかないからな」

アंकにそれだけ伝えて自分の仕事を始める。
俺に与えられたのは売店でレジと品出しだ。

滑り出しは順調。

それから何の問題も無く、休憩時間を迎えることとなった。

「ダイヤさんの様子、おかしくない？」

そう話を始めたのは曜ちゃんだった。それに次いで善子ちゃんも、

「あれは、きつと魔界からの使者よ！」

しかしそれは違うと花丸ちゃんと千歌ちゃんが、

「あの時ダイヤさんは確かに凄い怒ってたぞら……」

「うんうん！だからわたしたち、ダイヤさんがこれ以上怒らないように頑張つて——」

「ククク……」

そこへ果南ちゃんと鞠莉ちゃん、それからアंकが笑いながら来た。

「あ、アंक？ね、ねえ二人とも、アंकどうしたの？」

「えーつと、それが……」

果南ちゃんたちの言った話は、今まさに俺たちも話していたダイヤさんのことだった。

「『ダイヤちゃん？』」

全員が揃ってその呼び方を声にする。

みんなから「ダイヤちゃん」と呼ばれたい、要するにみんなとの距離を縮めたいのは、ということだ。

「小学生の頃から、わたしたち以外は中々近づけなくって……」

「…ダイヤ先輩って真面目で、どこか違う世界の人、みたいな感じ、最初はしてたかもなあ……」

「確かにバカな宮沢と違うだろうな」

「……おい、アंक。もういつべん言ってみろ」

「はいはい。ケンカは他所でやってこい。ところでアंक、どうしてさつき笑ってたんだ？」

「自分の欲望を満たすのがあんなに下手な人間がいるとは思わなくてな」

うわあ……こいつ最低だ。

「女の子の悩み事を笑うなんて、趣味が悪いよ、アंक」

「はっ！どの口がそんなことを言うんだかな？」

「この口だけど？」

この後は言うまでもなく、アंकとカザリがバチバチと火花を散らしたので、すぐに二人を引き離し、人生で一番緊張感のある休憩を過ごしたのだった。

休憩を挟んだ次の仕事は、いよいよイベントの準備……なのだが、ある問題が発生した。

その問題とは……。

「わーい！」

「ああ?! みんな列にならないとダメよ！」

幼稚園の子どもたちが、先生のいうことを聞かずに走り回っている。

何とか事態を収めようとするが、収まる気配は全く無く、むしろ悪化してるところも……。

「みんなー! スタジアムに集まれー!!」

辺りに大きな声が響き渡る。

ダイヤさんだ。

好奇心旺盛な園児たちは、何が始まるのかと、まるで磁石に引き寄せられているかのように、ダイヤさんの方へ集まっていく。

「園児のみんな、走ったり大声を出すのは、他の人に迷惑になるからぶつぶー、ですわ! みんな、ちゃんとしましょうね!」

ダイヤさんが舞を始め、園児たちはみな釘付けに。

「凄いですね、ダイヤさん。あれだけまとまりが無かった子供たちを一瞬で……」

「うん。全く…ダイヤさんには敵わないな」

晴也と二人、苦笑しながら、ダイヤさんに脱帽した。

日が沈み始め、シーパラダイスは暗闇に覆われつつあった。

一時はどうなるかと思われたが、アルバイトも無事終了。

あとやらなきやいけないことは……。

「ダイヤさん、お疲れ様」

「お疲れ様です、耀太さん……」

今のダイヤさんは、見ただけで落ち込んでいるというのが分かる。

まあ、無理もないのだろうけど。

「耀太さん。あなたの瞳めに映るわたくしは、一体どのように見えていますか？」

「ダイヤさんはダイヤさんだと思う」

「それはどういう意味ですか？」

「そのままの意味だよ。ね、みんな！」

俺が振り返ると、次いでダイヤさんも振り返る。

そこにはスクールアイドル部のみんながいた。

「ダイヤさんは、果南ちゃんや鞠莉ちゃんみたいになつてくれたり、冗談を言ったり出来ないなつて思うけど、でもいざという時頼りになつて、わたしたちがだらけてる時叱つてく

れる。わたしは——わたしたちは、そんなダイヤさんでいて欲しい！そんなダイヤさん
でいて下さい！」

無理に変わる必要なんて無い。みんな、「今のままの黒澤ダイヤ」が大好きなのだか
ら。

「わたくしはどつちでも良いのですわよ、別に……」

照れ隠しのようなことを言いながら、彼女はホクロをかく仕草を見せる。

「せーの——」

——ダイヤちゃん!!

デートと尾行と二人のオーズ

最近、マルは妙な感覚を覚えるようになった。

二つ上の先輩、島村耀太くんと一緒にいる時や彼のことを考えている時。彼が誰かとい
いる時、胸がドキドキしたり、モヤモヤしたり、あるいは締め付けられるように感じる。
「それはきつと『恋』だよ！花丸ちゃん！」

「こ、恋？マルが？」

「そうか？俺なんて先生に呼び出される時は毎回ドキドキしてるぞ」

「それは慎司くんが悪いことをしてるからでしょ」

マルが恋？耀太くんに恋？

脳がそれを認識すると、どんどん顔が熱くなっていく。

「わ、分かりやすいわね、ずら丸……」

「ず、ずらあ……」

「でも耀太先輩となるとライバル多いんじゃない？果南先輩は間違いないし、カザリ程
じゃないにしても人気もあるしな。本人は自覚してないっほいけど」

まさに前途多難。というか、そんなに多いならマルでは勝てないような気がしてきた

……。

「諦めちゃうの!？」

「え、オラまだ何も……」

「顔に書いてあるのよ。『オラじゃ勝ち目ないずらく』って。もつと自信を持ちなさいよ」

「そうだよ。花丸ちゃんは可愛いんだから」

マルの弱い心をすぐに察してフォローしてくれる二人。

「善子ちゃん、ルビィちゃん……」

「しようがない。恋する幼馴染のため、ここは一肌脱ぎますか」

「慎司くん……」

慎司くんもそう言って立ち上がり、笑みを浮かべる。何かを企んでいる時の笑い方が、今はとでも頼もしく見える。

「まずは、先輩を『デート』に誘うぞ!」

「……ええ?」

「え? じゃないだろ。今日は先輩と図書室の当番あるだろ? その時に誘うの? OK?」

「ええええええええ!?!」

その時のマルの叫び声は、他の階にまで聞こえていたそうなの。

とある日曜日。

バイト、そして部活も休みの今日、俺は花丸ちゃんと一緒に出掛ける——デートをすることになった。

正直、かなり緊張しています。

だって生まれて初めてのデートだし、相手が花丸ちゃん程の美少女だったら尚更でしょ。……誰に向かって言ってるんだろ。

まあ、それは置いといて、デートで待たせてしまったり、ましてや遅刻など以ての外。なので十五分前には待ち合わせ場所に間に合うように出てきた。

「お、おはよう。耀太くん……」

……目の前に天使が舞い降りた。

は?! いかんいかん。花丸ちゃんのあまりの可愛さに、危うく土下座するところだった(意味不明)。

「お、おはよう花丸ちゃん……」

ひとまず挨拶を返し……どうしよう、会話が続かない。

で、デートと言っても普通に遊ぶだけだし、そんな意識しなければ何も問題は無い! ……はずだ。

深呼吸で平常心を取り戻し、花丸ちゃんに話しかける。

「それじゃあ行くうか」

「うん…」

最初に訪れたのは映画館だ。デートと言えば映画。まさに王道オブ王道だろう。

「どの映画を観るの？」

「えっと……」

上に取り付けられているモニターに映るスケジュール表と数秒間にらめっこし、

「あ、これすらー」

花丸ちゃんが見つけたのは、ベストセラー小説が実写化された映画だ。

実に花丸ちゃんらしいチョイスだ。

二人でカウンターの列に並び、数分で順番が回ってきた。

「どちらの席にお座りになりますか？」

席は花丸ちゃんに決めてもらったので、支払いに移る。

「高校生二人で」

「はい。高校生お二人分で二千円になります」

金額を告げられ、財布から千円札を二枚取り出そうとすると、

「よ、耀太くん。マルは自分で払えるから……」

「このくらい大丈夫だよ。折角誘ってくれたんだから、せめてこういう形とかでもお礼はしなきゃだし」

一度はやってみたかった、デートで二人分の支払いを持つ。……ささやかな夢が一つ叶ったよ。

「はい、これ花丸ちゃんの分」

「…ありがとう」

花丸ちゃんの笑みに頬が緩むのを禁じ得なかった。滑り出しは順調なようだ。

今日この沼津でとあるイベントが行われ、それに伴った任務が遂行されていた。

「ね、ねえ…やっぱりやめない？」

「何言ってるんだよルビィ。ここまで来てやめられるわけないだろ」

「いや、まだ十分引き返せるからっ!？」

大声でツツコミを入れようとするルビィの口を瞬時に塞ぐ。

「あんま大きな声出すな! 聞こえちゃうでしょ!？」

念の為、ターゲット目標の確認…: 大丈夫、バレてない。

「いいか、ルビィ。俺たちはただ二人を尾行するんじゃないんだ」

「それってどういうこと？」

「例えば知り合いが二人を見つけたとする」

「うん」

「その人が空気を読める人なら問題ない。耀太先輩と花丸が何をしているのか察して、すぐ離れてくれるだろう。けど、世の中にはとんでもなく鈍い人もいるわけで……だから二人が出来るだけ長い時間楽しめるよう、俺たちで見守るんだよ」

「なるほどお」

ルビイも納得してくれたようだ。

これで堂々と尾行もとい見守り隊としての役目を果たせる。いや堂々とし過ぎてもバレルだろうけど。

「二人とも見て！ ずら丸が来たわ！」

「うーん……やつぱりあの二人には『ごめん、待った？』『ううん、今来たばかりだから大丈夫だよ』はハードルが高かったか……」

「そもそも二人ともそんなキャラじゃ……」

少しの間耀太先輩がフリーズし、しばらくしてから二人は移動を開始した。

そして到着したのは映画館。

ド定番だな。まあ、変に気合が入ってないって証拠だな。

二人ともチケットを購入してシアターへ入っていった。

「よし、俺たちも行くぞ」

「……………」

「どうしたんだよ？」

「二人はどの映画を観るの？」

「……………」

問題が発生した…………。

フィクションでは、こういう時はバレそうでバレないご都合主義的な変装して来るものだが、現実でそんなこと出来るわけではない。

よって二人と距離をとって尾行している『俺たちさんにん』には、会話は全く聞こえてこないのだ。

「どうするの？」

「どうするって…なあ……………」

二人がいなくなつて数分。何かを思い出したらしいルビイが「そう言えば」と、

「花丸ちゃんが読んでた本が映画化したって話をしたんだけど、それじゃないかな？」

「もしかしてアレのこと？」

善子もまた、カウンター上のモニターを示す。

「あ、そうそう！」

「よし！じゃあ改めて行くぞ！」

いぎゆかんとする俺に対し、二人は冷えた視線で、

「……何かシン、全然役に立ってないわね」

「そうだね」

……辛辣だな。いや実際そうだけど。

「仕方ない。俺は常日頃から善子しか見てないからな」

!?!?

善子は顔を真っ赤に染めて、ルビイはSっ気を出した時の顔になる。

「よくそんな恥ずかしいこと言えるよね」

「事実だもん」

「よ、よよよ、善子って言うな！」

精一杯の反論。可愛い。

何やかんやで、ルビイと善子の予想は当たりだったようで、シアターに入ると耀太先輩と花丸が確認出来た。

それから、この映画を観るには、善子とルビイはあと数年早かったとだけ言うておこう。

上映が終わり、俺と花丸ちゃんは映画館を後にした。

なかなか過激なシーンがあり、「これ年齢制限大丈夫かよ……」とか思ったりもしたが、最終的には面白かったに辿り着く。

「やっぱり本で読むのとは全然違ったよー」

「あ、それ分かる。想像だけだと、どうしても細かい部分がかんなくなるんだよね」

映画の感想を交換していると、花丸ちゃんのお腹の虫が「きゆるるるうう」と可愛らしい音で空腹を訴えてきた。

「ううう……」

「お腹空いたね。少し先にいいお店があるみたいだから、行こう」

事前に調べていた店を新たな目的地に定めて、歩き始めようとすると、

「よ、耀太くん……!」

「どうしたの?」

「その……手、繋ぎたいなって……」

……何この可愛い生き物。

俺は花丸ちゃんの手を握り、一緒に歩み始めた。

お食事処でお昼を済ませ、午後は本屋巡りという形になった。

それってデートとしてどうなの?とか言わない。というか言えない。楽しそうにし

ている花丸ちゃんを見ていたら。

時間はあつという間に過ぎていき、日が傾き始めて、外はオレンジ色に染まった。

「今日は本当に楽しかったあ」

「俺も楽しかったよ。花丸ちゃんもそう思ってくれててホント良かった」

夕日のせいで顔が赤らめているように見えるが、微笑んでいる様子が伺える。

「そろそろいい時間だし、帰ろうか。家まで送ってくよ」

「ま、待って！」

帰宅を促すと、花丸ちゃんが意を決したという声で俺を止める。

「花丸ちゃん？」

「……あのね、耀太くん——マルは耀太くんが……」

彼女が何を言おうとしているのか、それを察した時だった。

「これはこれは、出てくるタイミングを間違えましたかね？」

「この世で一番会いたくない相手が現れた。」

「察せるんなら出てこないで欲しかったな」

「申し訳ありません。色恋沙汰など、神であるわたしには無関係なこととして」

「そうかよ。花丸ちゃん、ごめん。アイツぶん殴ってすぐ終わらせるから」

「う、うん……」

戦いの邪魔にならないように、花丸ちゃんは俺から離れてくれた。

「変身！」

「タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

「サメ！クジラ！オオカミウオ！」

互いに変身し、得物を構える。

初動はポセイドン。ディーペストパープーンを振って、エネルギー弾を発射する。

メダジャリバーでそれを斬り落とし、今度はこちらの攻撃。

間合いを詰めて斬撃を繰り出す。一撃、二撃と当てるが、三撃目を防がれ、反撃を貰う。

「さっきまでの威勢の良さはどうしました？」

「さあね？さっきの所に置いてきたかも！」

体勢を立て直して新たな攻撃を繰り出す。

しかしメダジャリバーの刃は奴に届くことなく、槍の柄で止まってしまう。

左脇に蹴撃か直撃、その後、ディーペストパープーンで連撃を加えられ、吹き飛ばされる。

「くそーはあつ！！」

メダジャリバーを投げ、トラクローを展開。

トラックローで攻撃を仕掛けるも、空振りばかり。直撃の手応えも槍に吸われたものだった。

ポセイドンからは柄で一撃、さらに剣先で一撃。さらに胸部に蹴りが飛んでくる。

「ふん！」

「かはっ……」

蹴り飛ばされ、転がり倒れる。

「あなたの力はそんなものですか？あなたの『本気』とやらはそんなに脆いものなのですか？」

本気、その単語にあの戦いの記憶がフラッシュバックする。

「そんなわけあるかよ……！」

攻撃のダメージが残る箇所を右手で抑え、メダジャリバーを杖代わりに立ち上がる。

「耀太くん！」

花丸ちゃんが駆け寄ってくる。

「大丈夫……大丈夫だよ……花丸ちゃん……」

「でも、こんなにポロポロなのに……！」

「これ以上内浦このまちで好き勝手させるわけにはいかないんだ……！みんながいるこの内浦を……

！」

落ちていたメダジャリバーを拾い、構え直す。

「勇ましいい！勇ましいいですよ！『真の王』を決する戦いに挑む者はそうでなくては面白くない！」

「真の王を決する戦い……？」

ポセイドンはドライバーを取り外し、別のバックルを腰に当て、装着する。

「なっ……!?それは……！」

ポセイドンが装着したそれは、間違いなく俺と同じオーズドライバーだった。

ポセイドンは、緑・黄・赤のメダルを左（ポセイドン側から見て）から順に装填。

「変身——っ!!」

タカ！トラ！バツタ！

タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ!!

オースキャナーでメダルを読み取り、俺のモノよりやや低めの音声が読み上げる。

そして、そこに立っていたのは、赤、黄、緑の三色。

俺と全く同じ姿へと変身を遂げたポセイドン、否、真のオーズだった。

「オーズが……二人……」

二人が対峙し、初めて声を発したのは花丸ちゃん。

「それだけではありませんよ」

不敵な笑みをこぼす真のオーズ。

次の瞬間、オレンジ色の空から紫色の光が飛来してきた。

衝撃の連鎖に目を見開く。

「マジかよ……」

ポセイドンがオーズに変身した上、〃その力〃までもが姿を顕した。

紫色のそれは、俺と奴の頭上で円を描きながら周り、やがて半数ずつに分かれ、双方の身体へと飛び込んで来た。

「うっ……!?!」

俺は変身が解かれて地に倒れ伏し、真のオーズは膝を地につける。

「っ……やはりまだ上手く制御出来ませんね。ですが覚えておきなさい。これは全ての〃終わりの始まり〃なのだ。ふふふ……ははははは!!」

奴の笑い声が辺りに響く。

「耀太くん！耀太くん！」

そして俺を呼ぶ花丸ちゃんの声が聞こえた直後、俺の意識は絶えたのだった。

恋する少女と耀太と無敵のコンボ

重い臉をゆつくり持ち上げると、光と誰かの顔がぼやけて目に映る。

やがてはつきりし、その顔が誰なのか分かった。果南ちゃんとダイヤちゃんだ。

「あ、やっと起きた」

「果南ちゃん、ダイヤちゃん……」

「倒れて病院に運ばれたと聞いて、心配しましたのよ」

「そうだったんだ……ごめんね、二人とも」

二人に謝罪すると、初老の先生が部屋に入ってきた。

「二通り検査はしましたが、これと言って異常は見られませんでした。今日一日は家で安静にしてください。若いからと言って無理は禁物ですよ」

「はい、分かりました。ありがとうございます」

先生が出ていった後、帰る支度を済ませて病院を後にした。

その帰り道で、

「花丸ちゃんから聞いたよ。今日は二人でデートしてたんだってね」

ちよつとツンとした雰囲気醸し出す果南ちゃん。

「ま、まあそうだけど……」

「耀太さん？」

「……結局最後は怖い思いさせちゃったよ」

手も足も出せずボロクソにやられて、それを見ていた彼女が、一番恐怖を感じたはずだ。

「何を言ってますの。耀太さん、今のA q o u r sと内浦はあなたがいてこそそのものなのですよ」

「そうだよ。耀太がいなかったら、わたしたちはずっとすれ違ったままだった。耀太はそんなわたしたちを、確かに「繋いで」くれたんだよ」

そう言って俺の左手を握る果南ちゃん。その果南ちゃんの左手を、ダイヤちゃんが握っている。

「ありがとう、二人とも……」

「そう思うのなら、お医者さまに言われたように、今日はきちんと休んで、明日ちゃんと学校に来るんですよ」

「分かった。そうするよ」

その後、俺^{さん}たちはそれぞれの帰路についた。

十千万に帰ると、千歌ちゃんと梨子ちゃんが待っていてくれて、俺は二人にも謝罪と

お礼を述べたのだった。

昨日はぐつぐつと眠ることが出来、万全の状態で学校に登校、教室まで辿り着いた。

「おはよう、耀太」

「おはよう。それから昨日はお見舞いありがとう」

「大したことじゃないよ。わたしは耀太が心配だったただけだから」

そう笑う果南ちゃんは何処か照れた様子だった。

「おはようございます、お二人とも。その様子だと、昨晚はよく休めたようですね」

「もうバツチリだよ、ダイヤちゃん！」

「調子に乗りすぎないようなさい」

軽めに注意を促すダイヤちゃんと、

「Good morning！三人とも！」

相変わらずのテンションの鞠莉ちゃんも、俺と果南ちゃんの席にやって来る。

「昨日は大変だったみたいね」

「うん、まあね」

俺以外のオーズのことは、既にAoursのみんなは知っている。

花丸ちゃんと、何故かあの時近くにいた慎司たちが話したようだ。

「それにしてももう一人のオーズか…」

「耀太さんと同じ姿で悪事を働くことが可能というわけですね…」

もちろんそれもあるが、一番不安なのは「俺自身の状態」だ。それも、健康状態とか医学でどうにかなるものではない。

「どうしたの？耀太？」

「ん…うわ?!」

考え込んでいるところに名前を呼ばれて、意識をそちらに向けると、すぐそこに鞠莉ちゃんの顔があり、変な声を出してしまふ。

「ご、ごめん。顔が近かったから驚いて…」

「えー！それどういう意味!?!」

それを聞いた鞠莉ちゃんほっぺをむっと膨らませる。本気ではないにしろ、その怒っている仕草は可愛らしさを感じる。

「鞠莉さん。耀太さんはれっきとした男性なのですよ?」

「ああ。耀太つてば照れてるのね、可愛い♡」

女の子に可愛いって言われた……。男としては複雑な気分だが、少しだけ不安は和らいだ。

時間は過ぎ、昼休み。

昼食を早めに済ませて、図書室に向かうといつも通り花丸ちゃんがカウンターで本を読んでいた。

ただ、俺の姿を視認した後の彼女は、いつもとは違う態度で。

そのうちに何を思っているのかもすぐに分かった。

目を合わせようとしても、花丸ちゃんはいけないものを見たように、すぐに視線を本に戻した。

「このままじゃいけない。」

「花丸ちゃん」「耀太くん」

それぞれの名前を呼んだ声がハモる。

「あ……えと……耀太くんから……」

「う、うん……」

一度仕切り直しを入れて、話を切り出す。

「昨日のことなただけど……花丸ちゃんは何も気にしなくて大丈夫だよ。ポセイ^ポイドン^イが現れたのは花丸ちゃんの所為じゃない。それに——」

「それに？」

「それに、昨日は本当に楽しかったからさ！」

俺のことで落ち込んで欲しくないから、考え付く限りの言葉で想いを伝える。

上手く伝わっているか少し心配だったが、杞憂だったみたいだ。
「ありがとう、耀太くん」

花丸ちゃんは笑って返してくれた。

「いつもマルたちのことを守ってくれて、気にかけてくれて。マルはそんな優しい耀太くんがとつても大好きずら」

瞬間、心臓が跳ね上がるように脈を打つ。

……もしかして、今告白された…？

さつきとは違う種類の空気が、この場を沈黙させる。

ヤミーやグリードと戦っている時より緊張する……。

「あ、あの、花丸ちゃ——」

「すいません。本借りたいんですけど」

その真意を確かめる間も、勇気も無く、そのまま昼休みが終わったのだった。

時間はあつという間に過ぎ、放課後になった。

色々な部活の練習の音や声が響き渡るが、それも俺の耳に届いていなかった。

理由は昼休みの花丸ちゃんの言葉。

あれが告白だったとして、俺は何て返せばいい？

花丸ちゃんは優しくいい子だ。だけど俺自身が彼女に明確な好意を抱いてるわけじゃない。それを伝えれば、確実に花丸ちゃんを傷付けてしまう。

どうすればいいんだ……。

「耀太くん、大丈夫？」

そんな思案をしていると、梨子ちゃんから声をかけられた。

「何だか優れなさそうだけど……やっぱり昨日の今日じゃ無理があつたんじゃ……」

「ううん、大丈夫だよ。ちよつと今日、色々あつてね。考えごとしてたんだ」

「そうなんだ……。わたしで良かったら相談に乗るよ？力になれるかは分からないけど……」

梨子ちゃんの優しさがとても身に染みる。

けどこれは俺一人で解決しないといけない。

「ありがとう。でも、もうちよつと一人で頑張ってみるよ。もしどうしようもなくなつたら、その時はよろしくね」

梨子ちゃんは少し切なそうな顔をして、

「分かった。でももし耀太くんが困っていたら、わたしは絶対に耀太くんを助けるから」

「……ありがとう」

……まで想ってくれていると知ると、嬉しい反面、凄く恥ずかしい……。

「きゃあああああ!!」

……はあ。どうしてこういう時に限って出てくるんだよ!

間の悪さに苛立ちを覚えながら、悲鳴が聞こえたグラウンドの方を見た時には、既に奴らはすぐそこに迫っていた。

「マジかよ……」

その声を漏らしたのは慎司だった。

分が悪いとかそういう甘い話ではないからだ。

屋上足を付けた二体のヤミーは、かつて地上に君臨した最強の生物をモチーフとしたヤミー。

「感じる…強い思い」

「感じる…強い愛情」

紫色のプテラノドンヤミーだ。

「みんな早く——!?!」

逃げて、そう叫ぼうとするも、ヤミーは花丸ちゃん、果南ちゃん、善子ちゃんに接近し、何かを呟いていた。

「お前たちはあの者に」

「お前はあの人間に」

果南ちゃんと花丸ちゃんの方にいたヤミーは、素早い動きで俺の方へ。

善子ちゃんの方は慎司に急接近してきた。

俺は初撃を躲してベルトを装着。

慎司もバースバスターで応戦してドライバーを巻いた。

「晴也、みんなを頼む！」

晴也は九人の盾になるように立ち、ドライバーを着ける。

「変「変身!!」身！」

俺たちは、それぞれのシークエンスをこなし、変身した。

「タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ!!」

「慎司！こいつら下に落とすぞ！」

「了…ッ解！」

プテラノドンヤミーを掴み、屋上の際に移動し、ぶん投げる。

慎司も蹴りからのバースバスター連射でヤミーを吹き飛ばした。

当たり前だが、これしきのことで大したダメージを追うはずがなく、奴らはこちらを睨んでいる。

俺はバツタレグの能力を解放し、慎司はカッターウイングを装着してそれぞれのヤミーへと向かった。

昨日のアレがあつてからまだ一日も経つてねえのに……！

バースCLAWsを駆使しながら戦うが、かなり劣勢だ。

はつきり言つてパワーも速度も違い過ぎる。

辛うじて直撃は防いでいるが、防御する度にバースのボディが軋んで悲鳴をあげる。

「はっ！はっ！はっ！」

ドリルアームで正拳突きを三連打。

直撃するが、全く堪えていない。

「バケモンだな、こりゃ」

それどころか、回転するドリルを素手で掴み、俺の体を引き寄せて殴りつけてくる。

一、二、三回。キツチリ同じ回数やり返される。

胸部から煙が上がり、スパークが走る。

「オーシャニックブレエイクツ！！」

思わぬ襲撃者からの不意打ちに、プテラノドンヤミーは吹き飛んで倒れる。

「佐藤ちゃん…悪い…」

「お礼は後です。早く奴を仕留めて島村さんの加勢に行きましょう！」

「そうだな……！」

胸を押さえながら立ち上がり、佐藤ちゃんアと並び立つ。

「愛…実に不可解」

プテラノドンヤミーも胸から煙を上げながら立ち上がる。

そして空へと飛び上がり、火炎弾を放つ。

「目には目を！飛び道具には飛び道具を！」

バースバスターを構えて発射。光弾を全て相殺する。さらに数発を翼に当て、撃墜。

落ちたヤミーを待ち構えるのはアクアだ。

相手の攻撃をいなしで拳を叩き込む。そこから、流れるように右脚で蹴り、回りながら逆の脚でもう一撃。

「トドメ行きます！」

「おう！」

ポッドのセルメダル入れ替えて、バースバスターの銃口にセット&よろめくプテラノドンヤミーに標準を合わせ、トリガーを引く！

「セルバースト！」

ヤミーに砲撃をぶち込み、大ダメージを与える。

「アクアヴォルテエエクス！」

トドメはアクアの回し蹴り。

二重の必殺技を食らい、ヤミーは爆散した。

「よし！次は耀太さんの方に——」

「ぐわあああッ!?!」

先輩の悲鳴が聞こえたのは、俺たちがヤミーを撃破した直後だった。

「何なのアイツ？ヤミーのクセにボクの攻撃が効かないなんて……」

悲鳴を聞き駆けつけてきたカザリと共闘するも、カザリの攻撃も無力化され、俺も変身を強制解除させられた。

「随分ボロボロにされてるなあ」

ヤミーの気配を感じて、やっと到着したアंकもこの状況に苦虫を噛み潰したような顔をする。

「何だあのヤミー？」

「ボクだって知らないよ……。ただ一つ、〃恐ろしい力〃を持つてゐる以外はね」

「何だそれ？」

カザリの言う「恐ろしい力」。それはあの紫のヤミーの、「コアメダルを無力化する力」に他ならない。

そしてそれを知ったアंकも舌打ちし、表情はより悪くなっていく。

そうこうしている間にも、奴は俺たちを狙いから外さない。

「愛情、恋慕。それら全て、不要！」

プテラノドンヤミーは俺とカザリ目掛けて、複数の光弾を放つ。

終わった。

そう感じた直後、俺の意識は途絶えた。

嫌な予感がした鞠莉わたしは、果南たちの制止を振り切って校舎の外に出た。

舞い上がる土煙。

その手前にはさっきのヤミー。

まさか耀太たちは……。

そんな最悪の結果を想像したが、それはすぐに塗り替えられた。

やがて煙が収まり、人影が三人分見え始めた。

一人は耀太。もう一人はカザリ。そして最後は、耀太たちのピンチに駆けつけたであ

ろうアंकさん。

ひとまずは三人の存命に安堵した。

「プテラ！トリケラー！テイラー！プットッテイラーノザウルス!!」

突然白い何か——冷気が一人の影を中心に発生して、煙が完全に収まり、三人の姿が

ハッキリと見えた。

カザリともう一人は予想通りアंकさん。

「鞠莉ー！」

「鞠莉さん！危ないですよー！」

後ろから二人の声がある。

だけど、その内容が入ってこなかった。

「何…アレ…」

「まさかアレ…耀太さんですよ…？」

オーズ^{アレ}を見た瞬間の、底知れぬ畏怖の念から。

「ウオオオオオオオオオオツツツ！！！！」

翼と尾を巨大化させ、荒々しく振って雄叫びをあげる。

「何…!?!」

「この力は…同類にして——敵ッ！」

ヤミーがオーズに攻撃を仕掛けるべく動く。が、オーズに力チ上げられ、そうした本人も飛び上がる。

空中で何度かぶつかり合い、片方がグラウンドに落下。落ちてきたのはヤミー。

追うようにオーズも降りてきて、立ち上がったヤミーと対峙。

「フンッ！」

翼を扇ぐように展開して、発生させた冷気をヤミーに飛ばす。

ヤミーは下半身が凍りつき、拘束された。

そしてオーズは地面に手を突き刺し、何かを取り出した。

形状から斧と見て取れるソレは、見ただけでわたしの本能を刺激した。

危険以外の何ものでもない、と。

オーズはメダルを一枚取り出して、斧の刃の部分に入れ、変形させる。

「ガブツ！ゴックン！ゲフツ！プットツテイラーノヒツサーツ!!」

発射されたエネルギー波は、容赦無くヤミーを襲い、四散させた。

「ウウウウ……」

低い唸り声をあげるオーズ。その変身は解かれないままだ。

「ねえ鞠莉。耀太、どうして変身を解かないの!? ヤミーはもう倒したよ!」

やがてもう一体を倒したのか、バースバースとアクアアクアが現れた。

「なんてこった……」

「アレは不味いですね……」

オーズはゆつくりと身体の向きをカザリへと向ける。

そして悟った。

今耀^{かれ}太は、暴走していると。

「ウオオオ！」

オーズは斧を力ザリに向けて振り下ろす。間一髪で躲すも、あの様子から察するに力ザリに反撃出来るだけの力は残されていない。

「止めるぞ、佐藤ちゃん！」

「はい！」

慎司と晴也は二人でオーズの動きを止めようとする。けれど晴也は尾で弾き飛ばされる。

「佐藤ちゃん！」

「何て力だ……。あのヤミーより数段は強い……！」

晴也の変身が強制解除されて残るは慎司だけ。

「目え覚ませ、先輩！ あんたのこんな姿をみんなに見せちまう前に！」

「ウワアアウツ!!」

「カハツ……」

振りかざされた斧が慎司を捉える。

バースのボディから火花が飛び散り、変身が解けた慎司は倒れる。

動けなくなった慎司をじっと見据えるオーズ。

きっと今にでも止めを刺さんとしているのだ。
それを見たわたしは走り出した。彼に向かつて。

冷たい。暗い。闇の中で。

覚まして――

誰だ……。

目を覚まして――

誰だ……。

耀太――！

俺の名前を呼ぶのは――。

ぼんやりとした意識と視界に映るのはブロンドの髪の女の子。

お願い！これ元に戻って！

そして視界の片隅にもう二人。

青い髪と黒髪の女の子が、目の前の女の子を止めようと呼びかけている。

わたしの大切な友だちが…悲しむのはもう見たくないの！

友だち……。

危ないよ！鞠莉！

そうです鞠莉さん！離れてください！
ダメ！これは…わたしと耀太の――

約束だから――！

約…束…。

その言葉を聞いた瞬間、ボヤけていた視界がハッキリしたものになって、冷たい闇が払いのけられる。

それと同時に、温かい人――鞠莉ちゃんに抱きしめられていることが分かった。

「ま…り…:…ちゃん…:…」

「耀太!？」

「約そ…:く」

精一杯振り絞るが声が出ない。

意識を保つのが限界だ。

「耀太…:耀太…:!」

聞こえてくる鞠莉ちゃんの声はになっていた。

気を失う前に最後の力を振り絞って俺は、

「守って…:くれて…:ありが…:とう…:…」

そう言って再び意識を手放した。

犬と偶然と出会い

耀太先輩が暴走してから何日か過ぎた。

今日は雨が降っていて、A q o u r s の練習はとあるコンベンション施設で実施された。

あの日、耀太は変身が解かれた後、気を失い、一日で意識を取り戻した。

プトティラコンボの攻撃を受けた俺と佐藤ちゃんも、女神さまのおかげで大事に至ることは無かった。

「やっぱり元気ないな、耀太先輩……」

二年生の先輩たちと話している耀太先輩は笑っている。だけどそれが作り笑いであることに気付かない人間はここに一人もいない。

「俺たちを攻撃したことを負い目に感じているのでしょうか……。耀太さんはとても優しい人ですから」

俺は佐藤ちゃんの言葉に同意する。

「このままではラブライブ出場にも支障が出てしまいます」

「でも一体どうすれば……」

何かいい案は無いか、とダイヤ先輩と果南先輩はともに難しい顔をしていると、
「そんなに悩まなくても、耀太を元気づけるなら適任がいるじゃない！」

「鞠莉（さん・先輩）？」

鞠莉先輩は、一人余裕の笑みを浮かべていた。

練習は終わったが、雨は依然止む気配は無い。

帰りは車で二手と、俺と善子の計三組に分かれた。

「胸騒ぎがする、この空……最終決戦的な何かが始まろうと……」

……いつもならノツてやるところだが、今は変なフラグにしか聞こえない。

「おい、今日は風もあるし、早く帰らないと風邪引くぞー」

「分かってるわよー！」

刹那、一際強い風が吹いた。

善子の傘が吹き飛ばされる。

「ちよ、待て！待ちなさい！」

変な軌道で飛んでいく傘を善子は追いかける。

「何その動き……もしかしてわたしを導いてる……？」

そして少し先の所で傘は引っかけり、その動きを止めた。その傘を拾うと、善子も動かなくなる。

「?善子、本当に風邪引くぞ?」

「善子じゃなくてヨハネ!……ってそれより——」

彼女は手で俺を招く。

一体何だ?と思ひ、善子の方へ歩み寄り、見つけたのは——。

日と場所が変わり、十千万の千歌先輩の部屋。

地区予選へ向けてのミーティングだ。

耀太先輩は今日はシフトが入っているとのことで、今はいない。

まあ先輩のことは、これが終わった後にも、あの人がどうにかしてくれるだろう。

兎に角今は予選用の新曲だ。

「難しいもの何ですね、ゼロから曲を作るのって」

「確かに難しいけど、素敵な曲を作って、素敵なライブが出来たら凄く嬉しいんだよ!」

「ええ。それに歌を歌うわたくしたち自身で作るということは、A q o u r sの可能性を広げる模索をするということ。そうすることで、新たに身につけた魅力を以て、ライブを有利に進めることが出来ますわ」

千歌先輩とダイヤ先輩が佐藤ちゃんにそう話す。

衣装や曲を自分たちで協力して作る。それは多分、スクールアイドルとしてだけでな

く、一人の人としても成長を促すことも出来る。今までの彼女たちがそうであったように。

「なあ、善子。善子は何か良いアイデアは……っていねえし!」

さつきまで善子がいいた場所にしたいだけが座っていて、思わず変な声をあげてしまう。

「善子ちゃんからメールが……えっと、『天界の勢力の波動を察した為、現空間より離脱』……」

「花丸ちゃん……これどういうこと?」

「つまり家に帰るってことずら」

ああ……思い当たる節しかない。

何故津島善子が途轍もない速さでこの場からいなくなったのか。その答えはただ一つ。アイツがいるからだ。

「なるほど、善子のお母さんの携帯を届けに来たら……」

「う、うん……」

梨子先輩にSOSと送られて駆けつけると、そこにいたのはメッセージを送ってきた梨子先輩と善子、それからあの雨の日に見つけた一匹の犬だった。

「でも先輩、いくら何でもそこから飛び降りるのは危ないですよ……」

「し、しようがないじゃない！苦手なものは苦手なんだから！」

「兎も角この状況をまとめると、自分の家で犬を預かれコイツない善子が、梨子先輩に頼んだって感じ？」

「うん……」

確かにAqoursのメンバーのうちで、犬を預かれる条件をクリアしているのは少ない。その中でも最も頼みやすいのが梨子先輩ってわけだな。

「慎司くんはどうなの？」

俺に話が振られるが、

「家も動物は禁止ウチなんで……」

「そうなんだ……」

梨子先輩の顔が絶望に満ち溢れてる……。

「は、晴也くんとかはダメなの？」

「晴也の家、知ってるの？」

「……知らない」

最後の希望も打ち砕かれた。

結局犬は梨子先輩が預かることになった。

その時の梨子先輩の顔は……うん、まあその、ご想像にお任せします。

いつものわたしの部屋に見慣れないものが一つ。
テーブルの上に置いてあるそれは……。

「わん！」

犬の入ったケージ……。

預かっちゃったことは仕方が無いし、それに飼い主が見つかるまでなら……。

「わんわん！」

「しいー……もしかしてお腹空いてるのかな？善子ちゃん、この子はこれが好きって言うってたけど……」

骨を模した形の犬用ビスケットを皿に出して、ケージのそばに置いてみる。

「わん！わん！」

前足でガシガシと扉にアタックするも、開かない。

「……流石に食べれないわよね」

扉の取っ手に紐を縛る。これなら離れていても開けることが出来る。

後は……。

「いい？こつちに来ちゃダメよ？」

廊下に出て紐を引くと、ケージの扉が開き、犬が出て来た。

「わあ!ここつちに来ちゃダメだってば!」

ここつちに向かつて来たことに焦ってドアを閉めてしまう。

「くうーん…」

……寂しげな鳴き声。ちよつとだけ……とドアを開けると、犬はビスケットを食べていた。

……何だか少し可愛いかも…。

「わん!」

「しいー、ふいふ」

あれから数日が経った。

耀太先輩の様子は相変わらずだが、一人だけ、最近やけに機嫌の良い人がいる。

そしてそれがピークに達するのは、放課後の部活も終わる頃だ。

「ワン、ツ、スリー、フォー、ワン、ツ、スリー、フォー。ルビイちゃん、もうちよつとここつちに来て」

「はい!」

「うん、オツケー。よし、今日は終わりにしよつか」

「本当!?!」

こんな風に。

「う、うん。日が落ちるのも早くなってきたし、遅くまで続けるのは危ないからね」

「梨子ちゃん、何だかご機嫌だね。何かいいことあったの？」

「う、うん、ちよつとね」

それから梨子先輩はせつせと片付けを済ませて、帰っていった。

「最近梨子ちゃん帰るの早いよね……」

「あの様子だと悪いことじゃないと思うけど……」

機嫌のいい理由が不明瞭過ぎて、逆に心配されてない？

そして善子と俺は、梨子先輩の家にお邪魔している現在に至るのである。

「心配しなくても、この子は元気にしてるわよ。ね、ノクターン」

「ちよつと、ノクターンって何よ？」

「この子の名前だけど？」

「この子にはライラプスって名前があるのよ！」

ノクターンにライラプス……いつの間にそんな名前を……。

「くうーん？」

ケージの中のノクターン、あるいはライラプスは首を傾げる仕草を見せる。

お前も大変だな……。

目の前の光景がいつまで続くのか、と思つた矢先、それは訪れた。

「三人ともちよつといい？」

梨子先輩のお母さんだ。

「沼津のほうで貰つて来たんだけれど……」

迷い犬捜索のポスター。

名前は「あんこ」。そして写真の犬は、今まさに二人が取り合っているこの犬が写つていた。

「本当にありがとうございます」

沼津の住宅地に住む、この犬の飼い主の家までやつて来た。

頭下げている女性、そして隣の女の子に「あんこ」は抱えられている。

「いえ、この子を無事、家に帰すことが出来て良かったです」

「お姉さん、お兄さん、ありがとうございます！」

「今度は離しちゃダメだからな？」

「うん！」

何だかんだ少し名残惜しかったが、こうして「あんこ」は母娘の元へ帰っていったのだった……。

放課後。

部室に来てみると、耀太がいた。というよりあの様子だと寝ているという方が正しいのか……。

ともあれ、丁度良いので彼の隣に座る。

「……………」

気持ち良さそうな寝顔。そんな姿を眺めているだけなのに、とても落ち着く。

その次にやって来たのは、触れてみたいという衝動だった。

寝息を立てている彼の頬に指を近づける。起こしてしまわないように、そつと。

後もう少しというところまできて、

「……………」

一定だった呼吸のテンポが変わる。

慌てて手をすぐに引き、背筋を伸ばした姿勢になる。

「……………果南ちゃん？」

「お、おはよう耀太……………」

「おはよう……………？もう練習始まる？」

「ただだけど……………耀太どうしたの？このところあまり調子良くないみたいだけど……………」

耀太は「あー…」と頭を掻いて苦笑する。

「実は最近ヤミーが昼夜問わず暴れるようになって、その対処の所為で寝不足気味で……今みたいに気付かないうちに寝ちやつてたりするんだよね……」

「そうだったんだ……ごめんね、起こしちやつて……」

「あ、いや、果南ちゃんは謝る必要ないよ、うん。むしろ練習が始まる前に起こしてくれただし」

眠いのを我慢して、心配させまいとわたしに笑顔と向けてくれる。

そんな耀太を見ただけで鼓動が速くなる。

やっぱりわたしは……耀太のことが——。

「果南ちゃん……？どうしたの？」

「え？あ、ごめん、ちよつとブーツとしてた」

「もしかして具合悪いとか？少し顔赤いし……」

「だ、大丈夫！それより耀太の方こそ——」

「い、いや俺の方こそ大丈夫……」

「大丈夫じゃないよ！今度ダイヤに言つて休ませてもらおう？わたしも一緒に言つてあげるから」

耀太が更に「でも……」と言つた直後、千歌と曜ちゃんが部室に入つて来た。

千歌先輩と曜先輩が、耀太先輩と果南先輩を連れて来た。

理由はまあ……梨子先輩と善子のことだ。

「ノクターン……」

「ライラプス……」

二人は棒で地面に犬の絵を描き、取ってこさせる為に投げるといふ動作をシンクロさせていた。

「どうしちゃったの……あの二人」

「もしかして何かに取り憑かれた？……ずら」

「花丸ちゃん、善子ちゃんみたい」

くよくよしても始まらない、練習に集中してあの犬のことを忘れようと、放課後練習を始めた。

が。

「はあ……やっぱ無理い……」

と、すぐに音をあげたのだった。

「どうした？あんこが恋しいのか？」

「ライラプスよ！」

「いやあんこだろ」

「わたしにとってあの子はライラプスなの！」

“わたしにとって”……か。梨子先輩も同じことを思っているのだろうか。情が移れば別れるのが辛くなる。分かりきっていたことだ。それでもあの犬を放っておかなかつた理由は……。

「つてあれ!?善子は!?梨子先輩も何処いずこへ!？」

目を離しているうちに二人とも見失ってしまった。

と、とりあえずカンドロイドも使って手分けして探さないと!

少し移動してライドベンダーを見つけ、タカとタコのカンドロイドを捜索にあたらせた。

結果から言うと、見つけるのに要した時間は、そう多くはなかった。

そこは例の母娘の家の近く。

「こんな所にいたのか……」

さつきから雲行きが怪しかったが、着いた頃にはとうとう降り出してきた。

「梨子先輩は?一緒じゃなかったのか?」

「帰ったわ……」

「そうか」

傘を持っているが、この様子だと善子は動く気は無いだろう。

どうするものかと迷っていると。

「慎司くん？」

「あれ、梨子先輩、帰ったんじゃないかなかったですか？」

「戻って来たのよ」

「どうして戻って来たの？」と、善子が尋ねると、梨子先輩は「帰っちゃったら、本当に出てきた時に会えないから」と返した。

「なあ、どうしてあんこあの犬に拘るんだ？」

「……『運命』って言ったら信じる？」

「運命……？」

運命……か。そう聞かれて、俺が出す答えはたつた一つだ。それを言葉にしようとした刹那、ゴリラカンドロイドがヤミーの出現を感知した。

「おいおいマジかよ……」

狙ったようなタイミングで数十体の屑ヤミーたちが迫っていた。

「二人ともそこから離れるなよ」

梨子先輩と善子をそこに待機させ、プロトのドライバーを腰に巻く。

「変身！」

以前使用していたドライバーと同じように、セルメダルを一枚セット。レバーを回し

て仮面ライダーバース・プロトタイプへの変身を完了させる。

助走をつけて一体目に飛び掛り、グーで頭を狙い打った。

「硬っ!?!しかも一撃じゃ倒れてくれないのかよ!」

さらに逆の手で一撃を加えて一体目を撃破。

二体目に蹴りを食らわせ、後ろにいた三体目諸共吹き飛ばす。

四体目の腹部にラツシュを叩き込み、五体目にバックドロップをお見舞する。

「これじゃあジリ貧だな……!」

バックルのカプセルを閉じて、メダルを一枚投入し、レバーを回す。

「クレーンアーム」

プロトタイプなので、バースCLAWsはクレーンアームとブレストキャノンの二つしかないが、屑だけならそれで十分だ。

「うらあああっ!!」

ワイヤーを伸ばしてクレーンを振り回して薙ぎ払う。

ゴソツと数が減り、残るところ後は数体。

一気に決める!

「ブレストキャノン」

胸部にキャノンを装着し、バックルにメダルを一枚、二枚、三枚装填、チャージに入

る。

「さっきの話だけどきー！」

「え？」

そして俺は視界にヤミーたちを収めながら、善子に言葉を投げ掛けた。

「俺は信じる！ “運命”とか、そういう常識でははかれないもの！」

あの日一度死んで、ライダーになる者として生まれ変わって、決して出会うことが無いと思っていた人と出会えたこと。

それを否定しない、したくないから！

「プレストキャノン！ シュートツ！！」

砲身から放たれた三連射のエネルギー弾は、屑ヤミーたちに見事命中。

爆散したヤミーたちは割れたセルメダルに還元された。

変身を解くと、さっきまで降っていた雨はもう止んでいて、辺りはオレンジ色に染まっていた。

「お」

件の家の玄関が開いた。

「あんど、お散歩行くー！」

そして女の子とあんどあの犬が出てきた。

「萌、ちよつと来てー」

「はーい。あんこ、ちよつと待つててね」

リードを門に括り付け、萌と呼ばれた女の子は再び家に入っていく。

「お願い……！ 気づいて！」

善子があんこに向けて念を送る……ようなポーズをする。

それが向けられた先では……。

「くうん？」

「こつち向いた!？」

「あんこー」

「わんー！」

すぐに向きを変えて、ご主人様に抱えられる。

「雨が止んだばかりだから、お散歩はまた今度だつてー」

そしてそのまま家に入っていつてしまった。

「ははは……」

善子は顔を引きつらせながら笑みを保つ。

「やっぱり偶然だったのね、この墮天使ヨハネに気付かないなんて……」

運命を肯定したばかりでこれは……かける言葉が見つからない。

しかし、梨子先輩は違ったようだ。

「でも見てくれた。わたしもあると思う、そういう不思議な力」

「梨子……ふふ。いいわ、流石わたしのリトルデーモン！ヨハネの名において、上級リトルデーモンに認定してあげる！」

「ありがとう、ヨハネちゃん！」

「だから善子！……あれ？」

日が完全に沈み、家々の灯りだけが彼女たちを照らしていた。

「梨子ちゃん？」

「よ、耀太くん？」

出現したヤミーを倒して帰ってくると、梨子ちゃんがしいたけに何かを上げようとしていた。

そしてそれを見かけたらしい千歌ちゃんもこちらに寄って来る。

「耀太くん、アंकさんお疲れ様」

「ありがとう、千歌ちゃん」

千歌ちゃんは俺とアंकを労ってくれるが、アंकは「疲れたからアイス食って寝る」と言って部屋に戻って行ってしまった。

「ははは……ごめんね、千歌ちゃん」

「ううん、気にしないで。それより梨子ちゃんは何してるの？」

「やっぱり千歌ちゃんも梨子ちゃんの様子が気になっていたようだ。」

「試してみようかなって、これも出会いだから——」

「出会い？」

「そう言いながら梨子ちゃんは、犬用のバスケットをしいたけの口元まで運ぶ。」

「するとどうしたことだろう。今まで犬を見るなり逃げていた梨子ちゃんが、逃げずにしいたけの頭を撫でたのだ。」

「わたしね、この世界に偶然は無いと思うんだ。色んな人の色んな想いが不思議な力になって、『運命』になるんじゃないかなって」

「想いが……運命に……」

「そう思えば素敵じゃない？」

「梨子ちゃんは微笑んだ。」

「そして俺の瞳に映るその笑顔が、一瞬だけ色褪せたのを誰も知らない。」

地区予選と挑戦と起こす奇跡

「ワン、ツー、スリー、フォー、ワン、ツー、スリー、フォー。うん、オッケー！じゃあ一旦休憩して、その後で各個人での練習だね」

「休憩」という言葉が出ると、全員が「ふう……」と息をつく。

今日もいつもと変わりなく、A q o u r s は練習に励んでいる。来るべき地区大会にむけて。

前回の大会では、残念ながら突破することは叶わなかった。今回はそのリベンジなのだ。

それに必要なのは、千歌ちゃんたちの技術、それから情報も重要になってくる。

もちろんそれは俺たちマネージャーの役目だ。

こうした練習の休憩の合間にも、スマホを使って調べる。

「何見てるのー？」

「今度の地区大会について何か情報がないか探してるんだ。うん？『全国大会進出 有カグループ』……」

気になったので記事の見出しをタップし、ページを開く。

「凄い！たくさん名前が載ってるね！」

「うん、解説の方も結構細かく書いてあるみたいだしね」

指でスクロールしていくと、数多のグループ名の中にはあの “Saint Snow” の名前も。

「『前回の大会では地区大会をトップで通過し、決勝大会においても八位入賞を果たした。姉の鹿角聖良は三年生、今大会が最後のラブライブで、その活躍を期待されている。』……か。やっぱり凄いな……」

Saint Snowのライブは、以前Aqoursが参加したライブイベント、「スクールアイドルワールド」で一度見ている。

二人のパフォーマンスは、俺や慎司ですらその “世界” に惹き込んでしまう程のものだった。

もちろん今のAqoursは、あの時よりずっとレベルアップしている。無論、それは他のグループも同じだろうけれど、それでも乗り越えていけると信じている。

「あ、ねえ耀太くん！Aqoursの名前もあるよー！」

「えっと、『前回は地区大会で涙を飲んだ彼女たちだが、今回の予備予選では、全国大会出場グループにも引けを取らない見事なパフォーマンスを見せた。今後の成長にも期待したい。』だって」

「期待か……」

千歌ちゃんは何か思いつめたようにその言葉を呟く。

同時に表情も険しくなる。

「ふふふ……この堕天使ヨハネの力があれば、地区大会を突破するなど造作もないことなのです！」

そんな千歌ちゃんとは真逆で、厨二ぶつたセリフとポーズをキメる善子ちゃん。何故か梨子ちゃんまでも善子ちゃんと同じことを繰り返す。

「……梨子ちゃん？」

「……は!?、これはその……違うの！」

「流石はこのヨハネと契約を結んだリトルデーモン、リリーね！」

「ぶ、無礼な！わたしはそのような契約を結んでなど……」

反論の仕方、既に善子ちゃん風（つまり厨二チック）になってしまっている。

花丸ちゃん曰く、「これが堕天ずら」らしい。

「……でも本当にそんなに簡単なんでしょうか？以前は地区予選で……その、敗退してしまっただけですよ？」

晴也の指摘で空気が少し重くなる。

失敗した、負けたという事実が少なからずみんなの心に引っかかっているからだ。

「晴也さんの言う通り、簡単な話ではありませんわ」

「ええ。会場には出場グループの学校の生徒も応援に来ているわ」

「ネット投票もあるとは言え、生徒数が多い方が有利……」

「そして生徒数で言えば浦の星が一番不利ですわ」

鞠莉ちゃん、ルビィちゃん、そしてダイヤちゃん、晴也の発言に肯定と補足を加える。

人数というどうにもならない壁がAqoursの前に立ち塞がるのだった。

翌日の練習中のこと。

「Aqoursらしさ？」

「うん、わたしたちだけの道を歩くってどういうことだろう、わたしたちだけの輝きって何だろうって」

昨晚、聖良さんに言われたのだ。

ラブライブの人気を形作った先駆者たち（※）は決して手の届かない光だと。

だから“AqoursはAqoursで在り続ける”という答えを出した。

けれど、それはどうすればいいのか。

どう形にすればいいのか、千歌ちゃんは勿論、答えられなかったように、みんな分か

らないのだ。

そんな現状を打開する策を持ちかけたのはダイヤちゃんだった。

「このタイミングで千歌さんがこんな話をするなんて、運命ですわ！あれ、話しますわね」

「でもあれは……」

「それ何の話?」

「二年前、わたくしたち三人がラブライブ決勝に進む為に作ったフォーメーションがありますの」

千歌ちゃんは目を輝かせる。

「が、ダイヤちゃんがその話を始めた途端に果南ちゃんの表情が暗くなるのを見逃さない。い。」

「でもそれをやろうとして鞠莉は足を痛めた。それにみんなへの負担も大きいの」

つまり諸刃の剣である、ということか……。

それに果南ちゃんの話からすると、三年生彼女たちを隔てる原因の一つでもある。

「そこまでしてやる意味が……」

「あるよ?!ラブライブはすぐそこなんだよ?!その為にやれることは全部やりたいんだよ!」

千歌ちゃんはそう訴える。

リスクを冒してもやり遂げたいと。

なら俺がやることは一つだけだ。

「千歌ちゃんがやりたいなら、やってみてもいいと思う。少なくとも俺は」

「……本気？」

問いかける果南ちゃんの目もまた、真剣な人のそれだ。

「『本気』だし正気だよ」

それから果南ちゃんは嘆息して、

「……分かった。だけど千歌、出来ないと思ったたらすぐにやめさせるからね」

「うん！」

そして千歌ちゃんの厳しい特訓が始まった。

今も千歌ちゃんたちは「アレ」の完成の為に頑張っている。

出来れば俺は側で見えてあげたかったけど、奴らはそうはさせてくれないようだった。

「今千歌ちゃんたちは大事な時期なんでね。出来ればお引き取り願いたいな」

「久しぶりなのにつれないわね、オーズの坊や」

メズールとガメル。現在ポセイドンと行動を共にしているグリードだ。

メズールは「そうね……」と間を置いて答える。

「コアメダルを返してくれたら考えてもいいわ」

「お前達味方になってくれるって言うならくれてやってもいいんだけど？」

「わたしたちが？あなたの？本当におかしなことを言うのね」

メズールは甲高い笑い声をあげる。

「交渉決裂ですかね」

「みたいだな」

俺と晴也は同時にドライバーを取り出して腰に装着する。

「アイツら相手ならこれを使え」すず

「オーケー」

アंकから一枚受け取り、残り二箇所のメダルを手持ちから取り出す。

「変……変身……身……」

「ライオン！トラ！バッタ！」

亜種形態ラトラバとアクアにそれぞれ変身し、ガメルとメズールもグリードの姿に。

俺はガメルに、晴也はメズールに先制攻撃を仕掛けた。

拳での攻撃を腕をクロスして防ぎ、開いて弾き飛ばす。

「はあああああっ!!」

「う!? 眩しい……」

ライオネルフラッシュャーを放射、ガメルの視力を奪い、よろめくガメルの腹部に徒手で連打を叩き込む。

アクアもまたメズールの蹴撃に蹴撃で受け止め、続く一撃をしゃがんで回避し、ワンツーパーンチ。

「へえ、あなたもなかなか強いよね」

「それは……どうも……」

メズールはアクアを称賛しながらその攻撃を受け止める。

ガメルを怯ませた俺は向きを変え、バツタレツグの力で跳び、メズールにパンチヒツトさせる。

「すいません、耀太さん……!」

「気にすんな。それより今度はガメルを頼む!」

「了解です!」

アクアと背中を合わせ、相手をチェンジ。メズールと対峙する。

「あら、今度はオーズの坊やが相手なのね。いいわ、まずはあなたのメダルから!」
「やれるもんならやってみろ!」

再びライオネルフラッシュャーを発動。ラトラーター程ではないが、発生した熱はメ

ズールに確実にダメージを与える……はずだった。

「……………ふふふ」

ノーダメージ。それどころか。

「はっ!」

「っ!?!」

一瞬何が起こったのか分からなかったが、全身を襲った熱が全てを理解させた。

「まさかズールのヤツ……カザリのメダルを取り込んだのか!?!」

アंकが苦虫を噛み潰したような顔をして言う。

「そうよ。最初は変な感じがしたけれど、慣れるといいものね」

自慢げに笑みを浮かべるメズールを見て、背筋に悪寒が走る。それとほぼ同じタイミングで晴也の悲鳴が響いた。

「晴也!?!」

アクアのボディから煙が上がり、倒れる。

「ビリビリ、おもしろいー!」

そのセリフから察するに晴也に浴びせた攻撃は電撃。つまり……。

「ちっ……ガメルもか!」

舌打ちに貧乏ゆすり。アंकの苛立ちも目に見え、いよいよもって状況がヤバイ。

グリードたちが姿を現さなかったのは、他属性のメダルを慣れさせる為と考えると、奴らは既にその力を我が物にしていると思つていい。

サゴーズ、タジヤドル、シャウタ。いずれかのコンボでこの戦況を打破するのは難しい……。

「……これしか無いよな」

体が言うことをきいてくれるうちに立ち上がる。

「まだ諦めないのね。でも無理よ。そつちの坊やはボロボロ。対してこちらはわたしとガメルで二人。あなたたちが勝てる可能性はゼロよ」

変身は解けていないものの、地面に這いつくばる晴也。力が完全でない為に戦うことが出来ないアंक。そしてすぐそこには必死に頑張っている千歌ちゃんたち。

眼前にはメズールが、後方にはガメルが迫っている。

やるしかない……！

強く念じると、胸からメダルが三枚飛び出したのでそれを左手でキャッチする。

「つーよせ、ヨーター！また暴走するぞー！」

「でも今はこれしかない！じゃなきゃ、ここで三人仲良くお陀仏だー！」

ライオン、トラ、バッタのコアが弾き出され、同時にバッククルに収まる。

身体の中で今にも暴れ出しそうになるナニカを抑えてスキャナーに手を伸ばす。

「プテラー・トリケラー・ティラーノ！ プットットティラーノザウルース!!」

緑の複眼にプテラーノドンのような翼竜の翼を持つプテラヘッド。

トリケラトプスを彷彿とさせる、伸縮自在の角が方に装備されたトリケラアーム。

ヤミーをも粉碎する強靱な尾が特徴的なティラノレック。

タトバコンボやタジャドルコンボ同様に縁取られたオーラングサークル。

絶滅した三種の生物で構成される「プトティラコンボ」に変身した。

「うっ……ウオオオオオッ!!」

変身の完了と同時に意識がナニカに覆い尽くされる感覚に襲われる。

やがて俺の意識は闇に飲まれていった……。

「ちっ……」

戦いが始まって二度目の舌打ち。

どうしようもない苛立ちを覚えるアंकの目に映るのは、二体のグリードとオーズ^{羅太}。

二対一という一見すれば不利と思える状況で、優位に立っているのはオーズだ。

得物である斧——メダガブリューを力任せに振り回す。

その一撃は、刃を向けられているメズールとガメルは勿論、見ているだけのアंकや

晴也にまで恐怖に近い感情を与えている。

食らえば一撃で屠られる、そう感じているのだ。

「メズール、あのオーズ、怖い……」

「ええ、ここは一旦退いてポセイドンの坊やに事情を聞いた方が良さそうね……」

「分かった〜」

紫のメダル、そして紫のオーズのことを自分たちに黙っていたことを問い詰める。メズールはそうすることを決め、ガメルとともにこの場から消え失せた。

「ウウウウ……」

オーズは唸りながら体を翻す。

その目が捉えたのは満身創痍の晴也だ。

「くっ……」

晴也は全身の痛みには耐えながら立ち上がり構える。

今の暴走したオーズの攻撃を受ければタダでは済まない。けれど、ここで引くわけにはいかないのだ。

助走付きの振り下ろし攻撃を、右斜めへの前転で避けてストレートを食らわせる。

反撃を受けたオーズは怯み、メダガブリューは地面に突き刺さったまま手放される。

「今出せるだけの力に全てを賭ける！」

水をベルトに吸収し、さらに変換されたエネルギーを右拳に集中させる。

「マリンプレイザーツ!!!」

オーズのボディに拳での一撃を叩き込む。さらに拳が撃ち込まれた箇所逆側から、まるで貫いたかのように高水圧の水が噴き出た。

晴也はその場で膝をついて、崩れるように倒れ、オーズも後方へ吹き飛んで倒れる。
「っ!」

アंकは咄嗟に右腕を身体から切り離し、オーズの腰に装着されているドライバーのバツクルを元に戻す。

「はあ……はあはあ……!アंक……俺また暴走したのか……」

「バカが!佐藤がいなかったら今頃チカたちアイツらを襲ってたかもしれないぞ!」

「そうか……二人ともごめん」

耀太はゆっくりと立ち上がって、アंकと満身創痍の晴也に謝罪と、

「……それからありがとうな」

心の底からの礼を述べた。

千歌ちゃんたちが例の特訓を始めてから二週間。遂にこの時がやって来た。

「緊張するなあ……」

「はっ、踊るのはお前じゃないだろ」

「うるさいよ！俺はマネージャーとしてみんなが心配なの！」

「それならお前のバカでかい声でアイツらのリズムが崩れないかの心配だなあ？」

「あん?!」

相変わらずのアंकと慎司のこのやり取り。

火花を散らす二人だが、おかげでみんなはほとんど緊張していないようだ。

「ライブの前とは思えないくらい鞠莉たちリラックスしてるね」

「そうですね。でも今のみなさんなら大丈夫のような気がします」

初めてサポート役として参加したカザリも晴也も不安の一片も見せない。

きつと信じているんだ。千歌ちゃんたち、みんなを。

「それじゃあ耀太くん、いつてくるね！」

「うん、頑張れ、みんな！」

「うん!!」

A q o u r s は新曲「M I R A C L E W A V E」で、ドルフィンでのウェーブ、千歌ちゃんのロンダート・バク転のパフォーマンスを成功させた。

会場すべてを味方にした、そう言っても過言でない程のこと——奇跡を起こしたのだった——。

希望と廃校と守るべきもの

沼津市内のとある空き家。

幽霊が出ると噂される程に不気味な見た目をしたその家に、男は訪れた。

「お邪魔します。身体の調子はいかがですか？」

彼は青い衣服に身を包む少女と彼女が「愛でる」青年に尋ねる。

「問題ないわ。それより——」

簡潔な返答をした後、睨むように彼を見据え、問うと言うよりは咎めるように言葉を口にした。

「オーズの坊やが使ったメダルとコンボ……あれは何なの？」

「メダルとコンボ……ああ、これのことですね」

男はおもむろに一枚のメダル——プラメダルを取り出した。

「つ?!何故あなたがそれを!？」

「何故と言われましても……これは彼のものであり、同時にわたしのものでもありますから」

そう言って彼はそのメダルを取り込み、立ち去ろうとする。が、不審な点が多いこの

男を疑うメズールは、それを止めて問いかけた。

「どこに行くの？」

「わたしの古巣を見てくるだけです。彼も目覚めているようですしね」

「彼？」

「ええ、心強い味方ですよ」

今度こそ、彼はこの場を後にした。

メズールが彼に抱く不信感の材料をまた一つ残して。

ラブライブ地区大会。

全ての参加グループのパフォーマンスが終わり、結果発表を待つばかりだ。

「だだだだ、大丈夫ですよね、先輩?!」

「取り乱し過ぎだ。少し落ち着け」

ガタガタと震えている慎司を落ち着かせる。

何でお前が一番緊張してるんだよ……と言いたいところだけど、慎司のその気持ちは分からなくなかった。

スクールアイドルワールドでは最下位。前回の地区大会は突破することが出来なかった。

それを……正確にはその時の千歌ちゃんたちのことを思い出してしまおうのだろう。

「アイツらのことだ。いつもみたいにムカつくくらい笑って帰ってくるだろ」

「アंक…それって……」

不意にアंकが発したその一言。

それが何を意味するのか、確かめようとしたところで、

「それでは！見事、ライブ決勝に勝ち進んだグループを発表します!!」

控え室のスピーカーカーと生放送でライブを映していたスマホから、司会の女性の声が響いた。

スクールアイドルたちが立つステージに代わり、会場のモニターに画面が切り替わる。

「ライブ地区大会を勝ち抜き、決勝大会への切符を手に入れたファイナリストは——」

この場にいる全員（一部を除く）に緊張が走る。

会場にいる人たちに見守られながら、モニターに映し出された今大会の成績は——
A
ours、堂々のトップ通過だ。

「いよっしやあああああっ!!」

慎司が歓喜の雄叫びをあげる。

「ふん……」

一方のアंकは、こうなることが分かっていたかのように笑みを浮かべた。

「流石鞠莉たちだね。ま、分かりきっていたことだけど」

カザリも分かっていた風を装うが、その声色はいつもより嬉しそうだ。

「みなさんやりましたね」

「……」

スクリーンに映るA q o u r sの名前。これまでの彼女たちの姿が鮮明に蘇り、目頭が熱くなる。

「耀太さん……?」

くっそ……涙が止まらねえ……。

こんな泣き顔を見られたくなくて、上を向くことが出来ない。

ぜんばい「先輩、まだ泣ぐのは早いですよ!」

「泣いてねーよ!てか、お前は泣き過ぎだ!」

涙を拭って慎司に目をやると、ボロボロと涙を流して涙声になっていた。もはや号泣レベルだ。

「これは鞠莉たちに教えてあげないとね」

「ちよ、それはやめ……」

「ふ、面白そうだな」

「アंक！カザリ！」

カザリの悪ノリにアंकが乗っかり、千歌ちゃんたちが戻ってくるまで俺と慎司はからかい続けられたのだった。

A q o u r s が地区予選を突破出来たことの喜びに浸っていられたのも束の間、入学希望者が一人も増えていないという事実を突きつけられるのに、そう時間はかからなかった。

物音を出すことを禁じているかのように、理事長室は静かだった。

それも心が安らぐような優しいものではない。

そしてそれはドアの開閉音とともに終わりを告げた。

「鞠莉ちゃん、どうだった？」

千歌ちゃんの問いに鞠莉ちゃんは。

「何とか期限は延ばしてもらえたわ。日本時間で明日の午前五時までには、応募人数が百人に達していなければ、募集ページを閉じるって……」

アंकを除く全員が時計に注目する。

針が指していたのは八時。

九時間という残り時間は、まるで絶望のカウントダウンのように思えてしまう。

「……だ」

「え？」

「まだ何か、出来ることは無いかな……？」

そう呟いたのは千歌ちゃんだった。

後は待つしかないというのが耐えられないのだろう。けど、それに対する答えは非情なものだ。

「大丈夫だよ、千歌ちゃん。千歌ちゃんたちは良くやってくれたさ。それに待つのが大事になってくる時だってある。だから今は……ね」

「……うん」

今は待つことしか出来ない。

千歌ちゃんだけじゃない。きつとみんな同じだ。

ぐうううう、と誰かのお腹の虫が可愛らしい声で鳴いた。

「そ、そう言えばお昼食べた後何も食べてなかったわね……」

今のは梨子ちゃんのことだったようだ。

「じゃあ俺食べ物とか買ってきますよ」

「マルも行くぞらー！」

「ルビイもー！」

「わ、わたしも行くわ」

慎司が初めに声を挙げると、花丸ちゃんたちもそれに次いで手を挙げた。

「しようがないな。キミ一人じゃ不安だからボクも行くよ」

「カザリも行くのか。それじゃあこれ持ってけよ」

「！」

アंकに持つことを許してもらった三枚のメダルのうち、一枚を投げて渡す。

「これ……ボクのメダル。本当に良いの？」

「ああ、三人のこと頼んだぞ」

「了解」

カザリもついて行くことにやや不満そうな顔をした慎司だったが、プロト・バースだけで対処しきれない敵と遭遇した時のことを考え、納得してもらった。

そして五人が出掛けた数分後、差し入れと共にウヴァがやって来たのだった。

どうも俺も落ち着きがないように見えるらしい。

ダイヤちゃんに「一度外の空気を吸って落ち着いてきたらどうですか？」と言われてしまった。

「今の俺ってそんなに落ち着いてないように見えるかな？」

「そうだなあ……少なくともお前の中の“それ”はそう見える」

アイスが半分程残っている棒で俺の中の“それ”を指す示す。

「言えてる。早くコントロール出来るようにならないとな。戦闘以外でも暴走してみんなを襲わないように」

「そうか……」

上を見上げると、暗い、けれど星々が輝く空が広がっている。

静かで心落ち着く夜だ。

……本当なら、毎日ずっとこんな日が続くはずだったはずだろう。

この世界にもたらされてしまった俺たちの戦いイレギュラーを一刻も早く終わらせてあげたい。

「耀太」

不意に名前を呼ばれて振り返る。

「何黄昏てるの」

果南ちゃんと梨子ちゃんがいた。

「二人ともどうしたの?」

「わたしと果南ちゃんも外の空気が吸いたくなってるね。そしたら耀太くんとアंकさんがここにいたから」

俺とアंकに向けてられた笑顔はどこか不安気なのが拭えない。

「今不安そうな顔をしてる、って思ったでしょ？」

「え？そ、そんなこと……」

「耀太って本当分かりやすいよね。隠さなくてもいいよ、本当のことだから」

少し自嘲気味に果南ちゃんは笑う。

そんな表情を見て、チクリとした痛みに襲われるが、当然そんなこと知る由もない彼女は、俺に一つ問うてきた。

「耀太はどう思ってるの？」

「俺は——」

さつきは千歌ちゃんにああは言ったものの、自分では答えを返すのを躊躇ってしま
う。

もちろん、A q o u r s のみんななら「学校を救いたい」という願いを叶えられると
信じている。

しかし、ナニカが心に引っかかっているのだ。

ナニカ大切なことを忘れていている気がするのだ。

「耀太も不安なんだね。けどそれでいいと思う」

果南ちゃんに次いで梨子ちゃんが、

「わたしたちは出来る限りのことをやった。だから今は今日までのわたしたちを信じて

願うの」

そして二人の口から紡がれた言葉は、ナニカの正体を完璧に暴いてしまった。『助けて、ラブライブ!』って——。

さつきまで暗闇に包まれていたと思っていたのに、東の空から光が見え始めてきた。

「なあ、慎司」

「なんですか、耀太先輩」

「俺たちが来てから、この世界が変わったことってあったのかな」

“有り得ない存在”によって、この世界が変わってしまったのではないか。

そんな心配を千歌ちゃんたちはことごとく払ってくれた。

けど今は……。

「……分からないですよ、そんなこと」

「だよな……」

当然の答えが返ってきた。

神さまならまだしも、ただの人間がそんなこと……そう思っていると、不意に紡がれた言葉に目を見開いた。

「ただ……ただ耀太先輩や佐藤ちゃんも含めて、みんな変わった。正確に言えば成長している、それだけは言えますよ」

「慎司……」

「この先どんなことが待っているだろうと、きつと大丈夫。たとえそれが——残酷な現実だとしても」

人は確かに変わり得る。しかし、世界が変わることは無い。

慎司は慎司なりの答えを既に出していた。

対して俺は……。

「おーい！二人ともー！」

刹那、俺たち二人を呼ぶ声があった。

「今行くー！行きますよ、先輩ー！」

バン！と背中を押され、少し感じた痛みが引いていく。

俺も慎司の背中を追い、みんなの待つ理事長室へ走り出した。

鞠莉ちゃんがお父さんにお願ひし、更に延ばされた約束の時間。

それも既に終わりを迎えようとしていた。

現在の入学希望者は九十七人、目標の百人まであと三人だ。

「きたー！また一人増えたー！」

九十八、残り二人。

ここに来て増えたことで微かな希望が見えてきた。が、終わりが刻一刻と迫っている

のも事実。

喜びの中に焦りの表情も混じっている。

「あと一分……」

「大丈夫、大丈夫……」

画面に変化は無い。

俺が個別でつけているスマホもだ。

秒針はコクコクと小さな音を立てて進んでいく。

そしてやはり、最後には危惧していたことが待ち構えていた。

人数欄が募集終了の文字に切り替わる。

廃校を阻止することは……出来なかった。

それから数日経った。

登校してきたA q o u r sの、いや、生徒たちの面持ちはいつもと同じ……に見えることは無かった。

体育館に集められた数少ない全校生徒の前で、統廃合が決定したことを話した鞠莉ちゃん。

声色こそ明るく取り繕っていたものの、そのうちでは何を思っているのだろう。

そんな鞠莉ちゃんを生徒会長として支えてきたダイヤちゃんもきつと……。

そして果南ちゃんも気丈に振る舞っていながら、学校の為に奮闘していた二人の親友に何もしてやれなかったと、悔しきで一杯なことが、一瞬の表情の曇りになって現れた。

何が大丈夫だ……！千歌ちゃんたちの気持ちをも一つも理解せず、分かっているふりをして無責任な言葉をかけた。

「最悪だ……」

「本当に最悪だなあ？」

背後で誰かが俺の言葉を反芻する。

その誰かの正体は言うまでもない。

「休みでも、ましてや放課後でもないのに何してるんだよ」

「気になったから来てみただけだ。ここに入る許可は貰ってある」

アंकは食べかけアイスと一緒に、浦の星学院の入校許可証を見せてきた。

「随分静かになったもんだな」

「仕方ないさ。学校が無くなるって言うのに、普通は元気なんて出ないよ」

アंकの口ぶりから察するに、気付かなかっただけで、今までもこうして来ていたの
だろう。

そしてアंकの言う通り、以前のような賑やかさはすっかり消え失せてしまっている。

「あの、耀太先輩」

ほんの数日前のことを懐かしんでいると、また背後から声をかけられた。

翌日、放課後になって早々、ヤミーの気配を感じ、アंकとともに沼津市まで来た。

しかし、ヤミーが行動した形跡を追いかけられるばかりで、肝心のヤミーと遭遇出来なかった。

「大丈夫ですか!？」

「……あ、はい。大丈夫です……」

倒れていた男性は、すぐに俺から離れて去って行ってしまった。

そして男性が倒れていた傍には、真つ二つに裂かれた絵本が。

「また間に合わなかったのか……」

「欲望を壊す……か、随分と悪趣味なヤミーもいたもんだな」

「早く止めないともしかしたら千歌ちゃんたちのところにも……」

それだけは絶対に止めなくちゃいけない。

みんなの夢を壊させるわけには……。

「タカー」

俺の思考を妨げたのはタカカンドロイドだった。

バツタカンドロイドを唾えたそれは、学校の方角からやって来た。

「……た！耀太！聞こえる!？」

バツタカンドロイドをキャッチすると、ノイズ、鞠莉ちゃんの声、そして悲鳴が聞こえてきた。

「鞠莉ちゃん、何かあったの？」

「ヤミーと……オーズと一緒に学校に来て……」

「鞠莉ちゃん？鞠莉ちゃん！」

通信が切れた。

ヤミーとオーズと一緒に、鞠莉ちゃんは確かにそう言った。

「アंक、戻るぞ！手遅れになる前に！」

近くにあったライドベンダーを拾い、変身して学校まで引き返した。

俺とアंकが駆け付けると、既に慎司と晴也が交戦していた。

「つと、せい！遅いですよ、先輩！」

角生えた馬——ユニコーンヤミーのボディブローを食らわせた慎司がそう言った。

「ごめん、慎司。それからありがとな」

「……何か照れますね……じゃなくて！カザリと先生たちが残った人たちを非難させて
ますけど、アイツらが佐藤ちゃんたちのところに……！」

立ち上がったユニコーンヤミーが、再び慎司を襲う。

「慎司!？」

「俺は良いから早く!」

「分かった!」

ヤミーを引き留めている慎司を背に、校舎に入ってしまった。

中が荒らされている様子は無い。

しかし昇降口や廊下、教室で怯えている生徒が多く目に入った。

「オース」

誰かが俺を呼び止めた。

声のした方に振り返ると、怯える生徒たちを保護したらしい先生がいた。

「来てくれたのね……」

「先生、みんなはどこへ?」

「体育館の方に逃げていったわ。アクアも一緒よ」

「ありがとうございます。先生は逃げ遅れた人たちをお願いします」

「分かったわ」

居場所さえ分かれば後は走るだけ。

より脚に力を込めて走る。

「……」

「アंक、どうしたんだ？」

「いや、何でもない」

俺は気付いていなかった。

オーズおれの正体を知っている先生が、俺のことを「島村くん」ではなく、「オーズ」と呼んでいたことに。

耀太が学院に到着した頃、神しんオーズに変身したポセイドンと、アクアに変身した晴也が対峙していた。

千歌たちと逃げ遅れた数人の生徒を守りながらの戦いは、晴也にとって不利過ぎるものだった。

それでも負けるわけには……退くわけにはいかない。

耀太が来るまでみんなを守り通さなければいけない。

そう心に誓い、避けることを許さない理不尽な攻撃にも耐え、立ち上がっていた。

「まだ立ち上がれるとは、流星は仮面ライダーですね」

「あなたに褒められても素直に喜べないですね……」

神オーズは、メダジャリバーと似た、しかし禍々しい色の剣——メダジャラムで右から左へ真一文字を描く。

アクアは両腕でガードするも、後ろに押されてしまった上に、膝をついてしまう。

「グ……」

「ほう……ではこれはいかがでしょうか」

足下がおぼつかないアクアに近づきながら、神オーズはメダジャラムの刀身にサメ、クジラ、オオカミウオのコアメダルをはめ込む。

腰のオースキャナーをメダルにかざしてスライド、「スキャニングチャージ!!」の音声の後、ジャラムの刀身を水流が渦巻く。

「はあ……はあっ!!」

十文字の斬撃を繰り出す。

蓄積されたダメージで反応が鈍り、防御が間に合わず、攻撃はアクアに直撃した。「があああつ……!!」

斬撃のエネルギ―刃はアーマーを砕き、晴也の身体を直接切り裂く。変身が解かれ、倒れた晴也から血が流れ出す。

「晴也くん!!」

「千歌っちーダメよー！」

悲痛な叫びをあげる千歌を鞠莉が止める。

が、彼女は止まらず、倒れ伏した晴也を抱きしめた。

「晴也くん！しっかりして！晴也くん！！」

「けほっ……ちか……さん……」

「喋っっちゃダメだよ……」

「早く……にげ……こふっ……」

視界が霞み、千歌の顔がぼやける。

千歌のすすり泣く声と温もり。

その中で今晴也は意識を手放そうとしていた。

結局何も守れず……終わってしまうのか……。

悔しさと千歌たちへの謝罪の念が晴也の中で渦巻いていた。

そして神に、あの幼い女兒の容姿の女神に祈る。

願わくば、自分が愛する者とその友人を助けてくれと。

「ふふふ……可哀想に。今すぐその苦しみから解き放つてあげますよ」

剣を天井に向けて振りかざす。

そしてその刃が千歌と晴也を襲う……

「トリプル！スキャンニングチャージ!!」

ことはなかった。

代わりに神オーズの背中を斬撃波が襲った。

「!!」

直撃とともに巻き起こった煙が霧散し始め、神オーズ、そしてその奥にもう二人の人影が現れる。

「……やれやれ、やっと現れましたか」

この場にいる誰もが来てくれることを待った二人。

王とその相棒の鳥の王は、ただ怒りに震えていた。

怒りの変身と夢と新グリード

こんなに激しい怒りを感じたのは、この世界に来てもう二度目だ。

仲間を助けられなかった無力な自分に対する怒り、そんな綺麗なものじゃない。

ただ目の前の敵に対する憎しみ、殺意だ。

しかし、冷静さを欠いて己を見失わないよう、自制をかける。

「女神さま、聞こえるか」

『ああ、聞こえておるよ』

「無茶を承知でお願いします。晴也を助けてやって下さい……」

『……そのくらい頼まれるまでも無い。元々無茶をさせているのはわらわの方じやからの。じゃがここにおる者の記憶は……』

「（ありがとうございます……）」

念話の後、俺とアंक、そしてポセイドン以外のこの場にいる人は、みんな眠るよう
に氣を失った。

音を立てて倒れた人がいなかったのは、女神さまなりの優しさだろう。

やがて体育館全体に結界が張られ、千歌ちゃんたちのいた空間と完全に断絶された。

「……またあの神ひとの仕業ですか……。本当に鬱陶しい。ですがこの程度の結界、あなたたちを斃してぶち壊してあげます。はああ——今から楽しみです。最後の希望があつさりと砕かれて、絶望する彼女たちを見るのは……おっと、そんな怖い顔しないで下さいよ。わたしは必要以上にいたぶる趣味は持ち合わせていませんので」

「どの口がそんなこと言うんだよ。晴也にあんな怪我させておいて……!」

「あれは人間などを庇いながら戦った彼が悪いんですよ」

悪びれる様子もなく、言い切ったポセイドン。

完全に頭に来た……!

バツタレツグの力でポセイドンの目の前まで迫り、切り込む。

ポセイドンはそれが分かっていたかのように、自身の剣で防ぐ。

「そう言えばこの姿で手合わせするのは初めてでしたね。不思議なものですね、まるで鏡に映った自分と戦っている気分です」

「俺はそうは思わないね。果南ちゃんを利用して、カザリのことまで裏切って、今度は晴也と千歌ちゃんまであんな目に遭わせたヤツが鏡だなんて!」

「愚かな者たちには相応の制裁を。そのどこがいけないのです?」

「愚かな者」。その言葉は、今の俺の怒りを更に滾らせるには、十分すぎる火種だった。

「ふざけるなああッ!!」

剣を持つ両手に力を込めて、鏢迫り合いの均衡を崩す。

勢いに乗って剣を振り上げ、ポセイドンの胸部を斬りつける。

手ごたえもあつた。攻撃が当たったことを示すように、ヤツのオーラングサークルから煙が噴き出す。

『ふざけるな』？それはこちらのセリフですよ！人間を破滅させる為の力だったというのに……！それなのにあの神は……！』

ポセイドンがその声を怒りで震わせ、床に剣を突き立てる。

ドス黒いオーラを放つポセイドン。

そのタカヘツドが紫色の光を放つ。

「あなたのような人間に与え、わたしの計画を狂わせた！」

ほんの一瞬で眼前に現れ、とてつもない威圧感を発する。

「その罪……死を以て贖ってもらおう！」

左脚での回し蹴りが俺のボディにヒット。

重い一撃は俺の身体を簡単に吹き飛ばし、壁に叩き付ける。

人一人を軽々と吹き飛ばす蹴りに、壁が崩れ去るほどの衝撃で生じたダメージは、決して小さいものではない。

けど……！

「こんなの、千歌ちゃんたちが負った心の傷にも及ばないさ……」
「ならもう一撃いかがですか？」

再びポセイドンが急接近してきた。
でも同じ手は二度は食わない。

「ッ!？」

さつきとは逆の脚での蹴りを、紙一重で避けつつ、手放したメダジャリバーの代わりに展開したトラクローでヤツの胸を切り裂く。

「かっ……」

続けて膝蹴りを加えて、地に両手をついたポセイドンを蹴り飛ばした。

屋根に穴をあけて吹き飛んでいくポセイドン目掛けてジャンプし、肘うちで叩き落す。

「体育館から出ちゃったけど、まだ結果で覆われているのか。む……まだ倒れてないのか」
不死者のようによろめきながら、ポセイドンは立ち上がる。

「何だ今の光は……いや、そんなことどうでもいい！」

紫色に変色した複眼は鈍く輝き、ポセイドンの身体から溢れる黒いオーラが地面を抉り、建造物を破壊した。

「全テ破壊スル！」

刹那、背筋が凍るような感覚に襲われる。

ポセイダンの身体からメダルが三枚吐き出され、ヤツのドライバーから三色のメダルが弾き出される。

紫のメダルは、空いた穴を埋めるようにドライバーに装填され、スキヤナーがマリオネットで操られているように動き出した。

「プレラー・トリケラー・テイラーノ！ プットッテイラーノザウルス!!」

紫色のエフェクトに包まれ、その姿を変化させていく。

白い冷気が噴き出すと同時に変身が完了し、二度に渡り俺を暴走させた忌むべきあの形態が現れた。

「っ!？」

遅れて外に出てきたアंकと俺は、その変化に目を疑った。

そのシルエットは、オーズプトティラコンボに酷似している。

が、その全容は俺のそれとは明らかに別物だった。

黒いアンダースーツに、黒いアーマー。

鈍い光を放つ紫色の複眼。

そしておどろおどろしいフォルム。

ポセイダンは今、オーズに瓜二つの怪物——オーズグリードとも呼ぶべき存在へ変

身した。

暖かい。

覚醒し始めた千歌の意識が、一番最初に感じたことがそれだった。瞼を上げると、眼前には真つ白い世界が広がっていた。

雪景色……じゃない。

今まで寝ていた地面？は雪のように冷たなくなり、質感も何となく違う……気がする。どうしてわたしはこんなところに……。

一番新しい記憶は……そうだ！

耀太くんじゃないオーズが、ヤミーたちを引き連れてきて……。

思い出される惨劇は、心の傷を広げていく。

手の震えが止まらない。

目の前で大切な人がいなくなるかもしれない恐怖が、再び千歌を襲い来る。刹那、この幻想的な空間に相応しくない、ドアの開閉音がした。

「お、やっと目を覚ましたか」

……誰？

現れたのは幼い女の子。

しかし何故だろう。この女の子と初めて会った気がしない。

その女の子は、千歌に歩み寄り、彼女の手を握る。

「怖かったな。じゃがもう大丈夫」

恐怖に支配されかけた心に安らぎが訪れる。

「今はゆっくりおやすみ——」

優しい声と温もりは千歌を安らかな眠りへと誘ったのだった。

「危機的な状況で友人を思いやれる、優しい娘じゃな。次に目が覚めた時、あの忌まわしい記憶は完全に消えているじゃろう。あとは——」

眠りについた千歌の頭を優しく撫でながら、幼子もとい女神は、

「頼んだぞ、耀太……」

遠く離れた世界で自身の弟と戦う戦士を思い浮かべ、想いを託したのだった。

「ウオオオオオオ!!!」

ポセイドン改め、オーズグリードが雄叫びをあげる。

「なんてバカでかい鳴き声だ。ん……う？」

アंकが疑問符を浮かべながら空を見上げている。

視線の先にあったもの、それは空に入った「亀裂」だった。

「アイツ……ここから出ようとしてるのか!？」

苦虫を噛み潰したように顔を歪めるアंक。

きつと俺も同じ顔をしている。

アレがこれ以上力を解放する前に止めないと!

……どう考えても手はこれしかない。

忌むべきものでありながら、この戦いになくてはならない力。

「アंक!俺もあの力を使う!もし暴走した時は……」

「バカか……そう言いたいのが、今はその手しかない!」

俺は心を落ち着かせて、身体の中のメダルを上手く呼び出す。

俺に力を……!

俺の声が届いたらしく、三枚のメダルが手に収まった。

三枚のメダルをそれぞれ入れ替え、オースキャナーを手に取る。

「破壊!破壊!破壊イイイ!」

破壊衝動に取り憑かれた……いや、あれこそがあのメダルの本能なのかもしれない。

二度とそうならない、今度こそこの力を俺の物に!

オースキャナーをスライドさせた直後、むつちちゃんたちの話が頭の中を過った。

アंकと一緒に静かな学校で黄昏ていた時、背後から声をかけられた。

そこにいたのはよしみちゃん、いつきちゃん、むつちゃんの三人。

俺とアंकに相談があると、わざわざ探してくれていたのだという。

『わたしたちみんなで話し合って考えたんです。千歌たちにどうして欲しいか』

『千歌ちゃんたちに？』

『はい。ラブライブに出場することは出来た。けど、学校を守ることが出来なかった。千歌たちが、それに責任とかを感じてるのは分かっています。でも、だからこそ千歌たちに学校を救ってほしいんです！』

『でもどうやって？統廃合はもう……』

『ラブライブで優勝して欲しいんです！』

『ラブライブで？』

『はい、ラブライブで優勝して、浦の星の名前を残して欲しいんです！』

『学校の名前を……』

『スクールアイドル、Aqoursと一緒に浦の星学院の名前を……！』

「プテラ！トリケラ！ティラノ！プットツティラーノザウルース!!」

前に変身した時と同じ、紫色のエフェクトに身を包まれる。

頭に恐竜の咆哮が響き、身体から冷気が発せられ、プトティラコンボヘコンボチエン

ジが完了した。

「うおおおおお!!!」

全身に力が漲る。

同時に破壊衝動が俺の意識を乗っ取ろうとする。

「俺はもう……暴走しない！するわけにはいかないんだ!!」

彼女たちが俺に話してくれた「夢」。

それが俺を襲った破壊衝動を打ち消した。

「全テヲ破壊イイイイ!!!」

俺を破壊すべき敵だと認識したらしいオーズグリッドが、奇声を発しながら接近してきた。

自我を失っているからか、無軌道な攻撃を繰り返している。

だがその一撃一撃は強力で、防御しても腕に痛みが走る。

「破壊なんてさせない！『みんなの夢』を叶える為に、お前をここで止める！」

右、左、左……。

殴打を通り越して貫こうとしてくる拳を見極める。

反撃のチャンスを見つける為に防御ではなく回避に徹して、全ての攻撃を避け切る。

「グワアアアア!!!」

その咆哮に込められているのは間違いない怒りと憎悪。

勢いをのせた一撃が来る！

攻撃が当たる直前で回避し、オーズグリードが振り向く前に冷気は発生されて、エクスターナルフィンで扇ぎ、奴の下半身を凍らせる。

「ウガ!? ガアアア!!」

氷の枷から逃れるようとするオーズグリードだったが、メダガブリューの生成が氷を破るスピードを上回る。

セルメダル四枚を克蘭チガルバイダーで粉碎して圧縮。

アックスモードのままメダガブリューを構える。

「ウオオオオ!!」

「はあ……うおおっ!!」

迫り来るオーズグリード。

俺もヤツ目掛けて走る。

俺と奴とでの相打ち。

絶対に外せないこの一撃！

グランド・オブ・レイジは確実にオーズグリードの身体を捉えた。

「ぐ……」

相手の攻撃を完璧に避けることは出来なかった……。

「ガ……ガアア……」

が、俺の渾身の一撃は、オーズグリードの意識を屠った。

オーズグリードの変身が解除され、俺と奴の戦いで耐えきれなくなった結界が崩壊した。

「はあはあ……うお!？」

戦いが終わったことのア堵から、力が抜けて倒れかける。

「大丈夫か?」

「アंक……ごめん、ありがとう」

アंकが肩を貸してくれたおかげでそれは免れた。

「耀太先輩!?アंक!?!」

ヤミーを撃破したらしい慎司とカザリが駆けて来て、慎司がアंकとは逆の方を貸してくれた。

「やったんですね、先輩!」

「ちよ、バース、それはフラグに……」

最後まで言い切る直前、火炎弾が放たれた。

俺たちからは大きく外れていたが、明らかな「敵意」を感じた。
正直これ以上は戦いたくない。

というかそうなたらまた女神さまのお世話になつてしまう……。

冗談めいた言葉を自分に言い聞かせて、校舎の方を見る。

目に映つた光景に、俺は息を飲んだ。

——赤い鳥。

アレを見た誰もがそう言うだろう。

だがアレはそんなものではない。

「あーあ、僕抜きで何か面白いことをしてたみたいだね」

アングの右腕と同じ特徴を持つ左手。

鳥を思わせる風貌の怪人。

鳥の王——アング。

「まあ今日のところは見逃してあげるよ」

「待てっ!!」

「じゃあね、もう一人の僕——」

アングの身体……アング（ロスト）は翼を広げて飛び去つて行った。

そして倒れていたはずのポセイドンも消えていたのだった——。

ポセイドンとの激闘、あの惨劇は綺麗さっぱりみんなの記憶から消えていた。

瀕死の重傷を負った晴也は無事回復、その後、無茶したことを俺とともに女神さまにこつてり絞られた。

そして数日が経過した。

「やつと来たか」

俺は、慎司と晴也と一緒に部屋までやって来た。

部屋では、アイスを食べながらタブレットをいじるアंकが待っていた。

「いつアंक（ロスト）が行動を起こしても良いように、俺の近くにいる、というアंकらしい理由だ。」

「待たせて悪かったな」

「それでカンドロイドたちは？」

「言われた通りに配置はしてきた。後はお前たちの領分だ」

俺とアंकのやり取りに、二人は疑問符を浮かべる。

まあこれは二人がいなくて、二人は疑問符を浮かべる。仕方ない。

「サンキュー。じゃ、そろそろ『みんな』集まってることだし、俺たちも行くぞ」

「は、はあ……」

俺たちが足を運んだ場所。

それは「A q o u r s のみんな」が待つ、学校の屋上だ。

「あ、やっと来た」

既視感……というかついさっきのアンクと同じように、俺たちは迎え入れられた。

「ごめん、少し用事があつてね。……やっぱりみんなここに辿り着いちやうんだね」

「それはね。みんな出た方が良くって思いは同じだし……」

「でも、決勝で歌つて優勝出来たとしても……」

意味なんてない、敢えて口には出さないが、みんなそう思っているようだ。

「でもみなさんがスクールアイドルを始めたのつて……」

「輝きを探すため」

「みんなそれぞれ自分たちだけの輝きを見つける為。でも……」

見つからない。

そう言葉にしたのは、誰よりも輝きを追い求め、誰よりも足掻こうとしてきた千歌ちゃんだった。

らしくない言葉、らしくない声。

それらは、今の千歌ちゃんがどれだけ悲しみに囚われているのかを分からせるのに、十分な材料だった。

「これで優勝しても、学校は無くなっちゃうんだよ?! 奇跡を起こして、学校を救って、だから輝けたんだ。輝きを見つけれられたんだ……。学校が救えなかったのに、輝きなんて見つかりっこない!!」

その言葉は彼女が追ってきたものを、夢を否定し、諦めることを意味していた。

それに敏感に反応したのは、今ここにいた一人のグリード、アंकだった。

「じゃあ諦められるのか?」

「え?」

「『学校を救う』その欲望を諦められるのかって言うてるんだ」

イエスカノーで答えられる単純な質問。

単純だけど、千歌ちゃんのキモチを確かめる最善の方法。

「どうなんだ?」

「——しは……」

肩を震わせる千歌ちゃん。

もう叶わない、頭では分かかっていても、諦めることなんて出来ない。

言葉にせずとも、その本心は一目瞭然だ。

「わたしは……! 学校を救いたい! みんなと一緒に頑張ってきたここを……!!」

真正正銘の心からの叫び。

それに応えたのは、俺とアंकを除いた全員が予想だにしない、しかし、誰よりも近い場所です。彼女たちを見てきた娘たちだった。

「じゃあ救ってよ!!」

声が聞こえた中庭の方に、こぞって身体の向きを変える。

そこにいたのは、浦の星学院の生徒たちと、アंकとは別でカザリが用意してくれたカンドロイドたち。

「だったら救って!ラブライブに出て」

「優勝して!!」

「出来るならそうしたい!みんなと最後まで足掻きたい!そして……」

千歌ちゃんの拳を握る力が強くなる。

「そして?!」

「そして……!学校を存続させられたら……」

誰もが望んだ最高の結末。

でもその選択肢はもう選ぶことは出来ない。

けどもう一つだけ、学校を救う方法があるのだとしたら?

千歌ちゃんたちがラブライブに出て、優勝して、浦の星学院スクールアイドル A
ours”の名前をあの舞台に刻む。

誰からも忘れられない、永遠のものにする。

それが——浦の星学院の「みんなの夢」！

「耀太さん、これは……」

「ちよつとしたサプライズだよ」

「ここで隠れて待機していたバツタカンドロイドが肩に乗って来た。

「さてと千歌ちゃん、どうする？」

「「や・め・る？」」

曜ちゃん、梨子ちゃんとアイコンタクトをとって千歌ちゃんに問う。

「——やめる訳ないじゃん……！ 決まってんじゃん！ 決まってんじゃん！」

そして高らかに宣言する。

「優勝する！ ぶつちぎりで優勝する！ 相手なんか関係ない！ アキバドームも！ 決勝も

関係ない！ 優勝する！ 優勝して、この学校の名前を、一生消えない思い出を作ろう！！」

千歌ちゃんに……：A q u o r s に笑顔が戻った。

普通じゃない、新しい「みんなで叶える物語」が、今始まった——。

お菓子と好きなものと偽りの愛

ルビイと彼の出会いは、少しおかしなものだった。

花丸と本屋に行った帰り、おやつを食べながら談笑していた。

内容は……まあ、今読んでいる本だったり、耀太のことだったりと色々。

そこで如何にもといった感じの男二人に絡まれてしまった。

「ねえねえ、俺たちと遊ばない？」

「あ……あの、オラたちは……」

「ははは！今の聞いたか？『オラ』だってよ！」

「待て、もしかしてこの子、A q o u r sの花丸ちゃんじゃね!？」

「んー……マジだ！あれ？よく見ると君はルビイちゃんじゃん！ひゅー俺たちツイてるー！」

二人の会話に花丸は圧倒され、ルビイも恐怖を感じて何も言えなくなってしまった。

その時だった。

「うー……うるさいぞお」

目の前の二人とは違う男の声、それも何だか眠たそうな声が後ろのベンチから聞こえ

てきた。

振り返ると、伸びと欠伸をしながら立ち上がる一人の男が。ルビイたちの前に立つ二人が、その男を睨みつける。

「ああん？何だてめえ？」

そしてそのうちの一人が、寝起きと思われる男の人に近づくと……。

「だから、うるさい！」

「っ?!?!」

眠そうにしていた男が頭突きし、突っかかった方はうずくまってしまふ。

「てんめえやりやがっ?!?!」

もう一人にはデコピンを食らわせた。

二人とも頭と額を抑えながら、

「ち、ちくしょう……覚えてろ！」

「お、おい待てよ！」

捨て台詞を吐いて逃げていった。

二人を追い払った男はまた欠伸をする。

「あ、あの……」

「んー？」

「助けてくれてありがとうございますごさいました」

「ました！」

花丸がお礼を言い、遅れてルビイも。

しかし、男の人は「何のこと？」と言わんばかりに首を傾げた。

「ぐうぐ」と誰かのお腹の虫が鳴く。

「あ、ははは……オラ安心したら小腹が空いてきちゃったずら」

花丸が少し顔を赤くした。

「腹、減ったのか？」

また花丸は、頭に手を置いて答える。

すると男は、駄菓子屋によく置いてある、お菓子の入った容器を取り出して、

「これ、食べ」

「「え？」」

「美味いぞ」

彼は自分で一つとって口にする。

花丸もルビイもその行為に驚く。

名前も知らない自分たちに、満面の笑顔でお菓子を差し出してくれた彼。

これがルビイとガメルのお菓子な出会いだった。

「最近ルビィ（ちゃん）の様子が変？」

ある日の昼休み、俺と果南ちゃん、鞠莉ちゃんの三人に加え、慎司とカザリがダイヤちゃんからそう相談を受けた。

相談の内容はこうだ。

最近、部活のない休日になると、決まってルビィちゃんは出掛けるようになったのだという。それもかなりご機嫌な様子で。

気になって聞いてみたものの、上手くはぐらかされたり、誤魔化されてしまいうらしい。

「あんなに嬉しそうにして……はーまさか……彼氏が出来たのでは……っ!？」

「いやいや、流石に彼氏なんて……」

「何を言ってますの!?! あんなに可愛らしいルビィですよ!?! 一人でいるところを男性に声をかけられないわけがありませんわ!!」

果南ちゃんがそれを否定するが、ダイヤちゃんは鬼気迫る表情で果南ちゃんに詰め寄る。

「俺もルビィに彼氏が出来たっていうのはあまり考えられませんよ」

「ボクもバースに賛成かな。ルビィってそういう感じはあまりないし」

慎司とカザリがフォローを入れるが、

「もし本当に彼氏が出来ていたとしたら……ルビイが……ルビイが大人になってしまいますわああああ!!!」

ダメだ聞こえてねえ。

「ダイヤつてば相当重症ね。ルビイにボーイフレンドなんて、わたしも全然考えられないのに」

「ははは……やっぱり家族だからね。友だちでも分からないことつてよく分かっているはずだから……」

「それでもこれはちよつと……」

ダイヤちゃんの激しい感情の起伏は放課後まで続いた。

唐突に「はー」としたり、ブツブツと怖い顔で独りごちり始めたり、顔を真っ青にさせた。

もちろん、みんなその様子に気付かないわけはなく……

「ねえ、今日のダイヤちゃんちよつと変じゃない?」

「ちよつとつていうか、かなりつていうか……」

「耀太くんは何か知ってる?」

二年生三人が、ダイヤちゃんのことを俺に尋ねてくる。

俺はダイヤちゃんに何があったのか、包み隠さず三人に話した。

「ルビイちゃんに彼氏？」

疑問符を浮かべては、「ないない」と次の瞬間に三人とも否定する。

だよなあ。

「でも確かに気にはなるよね……」

「そうだ！今度の休みにルビイちゃんを尾行するとかどうかな？」

「尾行……尾行か……」

尾行という単語を反芻する。

正直、その手のことにあまりいい思い出はない。

以前ダイヤちゃんにこっぴどく怒られたからだ。しかもその時、『これからまた同じ

ようなことがあったり、万が一ルビイに何かしたらその時は……』

「耀太くん？どうしたの？」

「え!? な、何でもないよ!」

「でも今顔が凄く青くなって……」

「何でもないよ!?!何でもない!」

あの時のダイヤちゃんの剣幕がフラッシュバックした……。

「で、どうするの?」

「どうするって……」

なるべく、尾行ないし以前のような覗き未遂にされるような行動は避けたい。
が、真実を確かめなければ、ダイヤちゃんが元に戻らないわけで……。

「人間も随分面倒だな」

他人事のようにアイスを頬張るアंकに、

「よし、アंक、きみに決めた」

「は？」

と、ポ○モンを決めるサ○シのように、みちづれを選出したのだった。

「おい！何で俺をこんな面倒なことに巻き込んだ!？」

憤怒するアंक。

理由は、俺がルビイちゃんの尾行に無理やり連れてきたからだ。

「そう怒るなよ。高いアイス買ってやるからさー」

「毎回アイスで釣れると思っただら大間違いだ……」「五日分でどうだ?」……ちっ

舌打ちして抗議を取り下げる。

高級アイスの力は偉大なり。

代わりに俺の財布は既に大破寸前だが。

怪しまれない程度の変装をした俺とアंकは、タカちゃんを頼りにルビイちゃんを追

う。

ルビイちゃんを追い始めてから数分、アंकが何かに気付いた。

「おい、あそこに変なのがいるぞ」

「ん？本当だ。まさかルビイちゃんのストーカー!?」

後ろ姿しか見えないが、ルビイちゃんと俺たちの間に怪しい人物が確認出来た。

……何だろう。あの後ろ姿見覚えがあるっていうか、見覚えしかねえ。

腰の少し上あたりまで伸びた黒い髪。

目線の先は、間違いなく赤髪の少女。

意を決して俺は彼女に近づく。

「ダイヤちゃん」

「ルビイを誑たぶらかかした不埒な輩はまだ現れませんわね。ルビイにおかしなことをしたらそ

の時は……ふふふ……」

ブツブツと恐ろしい笑みを浮かべているうえ、俺の声は届いていない。

「ダイヤちゃん！ダイヤちゃん！」

「は！いけませんわ……わたくしとしたことが……はい？」

我に返ったダイヤちゃんは、独り言を止め、俺たちの方に振り返る。

「よ、耀太さんにアंकさん!? どうしてこんなところに……」

「え、あ、いやその……ア、アंकとアイスを買いに来てたんだよ！そしたらダイヤちゃんを見つけたから何をしていたのかなーって……」

ダイヤちゃんに尋ねられ、咄嗟に嘘を吐く。

流石にルビイちゃんを尾行してる、なんて言ったらどうなるか分かったもんじやないからな……。

「そ、そうでしたか……」

どうやら信じてくれたみたいだ。

「ダイヤちゃんこそ何してたの？」

「わ、わたくしは……その……」

はつきりとした返事が帰ってこない。

そりやそうだ。ルビイちゃんをつけてたなんて、口が裂けても言えないだろう。

そして、もごもごとしているダイヤちゃんに助け舟を出したのは、意外にもアंकだった。

「おい、ヨータあれを見ろ！」

「何？……男の人だな」

本当にルビイちゃんに彼氏が……？いや、でもなんかあの顔見たことあるような……。

「ふ……ふふふ……」

あ、ヤベえ。

「だ、ダイヤちゃん、落ち着いて？まだ彼氏って決まったわけじゃ……」

「そんなの決まってますわ……。男性の方とあんなに楽しそうに笑うルビィ……初めて見ましたわ。あの笑顔は互いに想い合っているからこそ生まれるもの……。あの子はいつの間にか、あんなに成長していたのですね……」

あら？なんか予想してた展開と違う……。ってあああ!?

ダイヤちゃんが真っ白になっていく!?

このままだと燃え尽きちゃうんじゃないか!?

「ダイヤちゃん気をしっかり持って!」

俺の呼びかけるも虚しく、遂に彼女は意識を手放してしまった……。

「……放っておけるわけないよな」

俺はダイヤちゃんをおぶさって、ルビィちゃんの尾行を続行した。

目の前の二人にめばしい展開は無く、一時間弱が経過した。

「……あの」

「あ、良かった。目が覚めたんだね」

「目が覚めた……。もしかしてわたくし気を失って……」

「うん。あのまま放っておくわけにはいかないから連れてきちゃったんだ」

「……ありがとうございます」

やっと目覚めたダイヤちゃん。

そんな彼女に俺は、今の想いを告げた。

「それから……」

「？」

「ごめん、さつき嘘吐いた。アंकとアイスを買いに来たって……」

「知ってますわ。あんな風に必死に言われれば誰でも分かります」

「え……」

バレてたの……マジで？

「あなたのことですから、ルビィとわたくしを想ったことだったのでしょう？」

「う、うん……」

「耀太さん、あなたという人はどこまでも優しいのですね……」

どうやら怒ってはいないみたい……だけど、気のせいだろうか、後ろから抱き締められる力が少し強くなったような……？

「ヨータ、メズールだ！」

「は?!嘘だろ!?!」

俺がダイヤちゃんと話している間に、ルビィちゃんと男性の前に人間状態のメズールが現れていた。

「アंक、ダイヤちゃんをお願い」

「変身にはこれを使え！」

ダイヤちゃんをアंकに預け、アंकからクワガタとチーターメダルを受け取り、ガタトラーターに変身しながらルビィちゃんたちのもとへ走り出した。

「ガメル、分かっているでしょう？ その子はオーズの仲間なのよ？」

「うう……でも……」

ルビィとガメルの前に現れた見覚えのある女性——メズールが、ガメルと言い争いを始めた。

短い会話の中で、ルビィはガメルに関する大変なことを知ってしまった。

ガメルはグリッドであるということ。

頭の中がこんがらがる。

グリッドは耀太たち仮面ライダーと敵対していたり、自分たちを襲った怪物だ。

ガメルもそうなのか、でも自分と話をしている時の彼は、本当に楽しそうに笑っていた。

その笑顔が、ルビィに迷いを与える。

「……もういいわ。そこまで言うのなら……」

「っ!？」

「さよなら、ガメル」

これ以上の説得は無駄であると判断したメズールが、グリードに変身し、ガメルとルビィを目掛けて高圧水流を放つ。

終わった……迫り来る死の恐怖から目を閉じる。

一方のガメルはグリードに変身し、ルビィを庇う。
が、メズールの攻撃が二人を襲うことはなかった。

「ふう……間一髪……つてええええっ!？」

二人を救った人物——耀太は間抜けな声で叫んだ。

「うん? あ、オーズ」

「さつきまでルビィちゃんといいたのガメルだったの!？」

「よ、耀太くん……ルビィ……」

「……聞きたいことは色々あるけど、まずはあつちをどうにかするのが先だな……」
攻撃を防がれたメズールは怒りに震えている。

「オーズ……!？」

「何があったのかは知らないけど、ルビイちゃんに危害を加えようとしたこと、許さないからな！」

「だったら何だっというの!?!」

先に仕掛けたのはメズール。

高圧水流を発射するが、オーズはそれを難なく回避する。

今度はオーズがメズールの懐に入り、ボディブローを見舞う。

攻撃に耐えたメズールは蹴撃を繰り返す。

蹴りはオーズのボディにヒット、それを転機にラツシユに入る。

オーズの拳を腕で防ぎ、カウンターを決めて更に薙ぎ蹴り。

「……っ！はあっ！」

ラツシユに耐えきったオーズは、クワガタヘッドの能力を解放、メズールが撒き散らした水に介して電撃を仕掛ける。

「きゃああ!?!……やったわね……!」

次は水流ではなく、竜巻を起こしてオーズを巻き込む。

渦巻く強風は、鋭利な刃と化してアーマー越しに耀太の身体を切り裂いた。

メズールに襲われていた男の人とルビイちゃん。

二人を助けたと思ったら、男の人の正体はガメルで、しかもメズールはガメルにも攻撃を仕掛けた。

何が起きてるのかはさっぱり分からないが、確かなことはメズールの猛攻を受けた俺は、彼女のペースに飲まれつつあるということ。

長引けば長引く程、勝てる可能性は無くなっていく。

「短期決戦しかないよな……！」

攻撃によるダメージの蓄積で悲鳴をあげる身体に鞭打ち、立ち上がる。

「……はー」

紫のメダルを出現させ、左手でキャッチ。

三枚同時にドライバーにセットしてスキャンする。

「プテラー・トリケラー・ティラーノ！ プットットティラーノザウルース!!」

プトティラーコンボに変身後、雄叫びをあげてから地面に手を突き刺し、メダガブリューを生成する。

「うおおおおおっ!!!」

助走をつけてメダガブリューを振り、メズールを斬りつける。

斬撃がヒットする度、金属のぶつかる音がなり、彼女の身体から煙が上がる。

さらに頭上からメダガブリューを振り下ろす。

メズールはそれを腕をクロスさせて防御した。

互いに腕と武器を震わせながら競り合う。

「そのコンボ……どうも嫌な感じがするわね！」

「そうかよー！」

ワイルドステインガーを伸ばし、メズールに突き立てる。

ステインガーはメズールの肩を貫き、ダメージを与えると共に固定する。

そのおかげか、斧を抑える力が弱まり、押し切ることに成功した。

トドメに入るべく、メダガブリューにセルメダルを一枚装填し、変形させる。

「ガブーゴックン！」

メダルを噛み砕いてエネルギーを圧縮、トリガーを引いて放つ一撃。

「プットツティラーノヒツサーツ!!」

ストレインドウムを撃ち放った。

ダメージを負ったメズールが避ける間もなく、エネルギー砲は標的に到達、爆風を起こした。

武器を下ろし、呼吸を整える。

「ふう………っ!?!」

爆風が止み、煙が晴れ始めると二人の影が現れる。

「アंक……何しに来たの……」

完全に煙が止むと、メズールと彼女を庇うように翼を広げたアंक（ロスト）が現れた。

「冷たいなあ。君を助けに来てあげたのに」

「そんな見え透いた嘘が通じると思ってた？」

「ふふふ、やっぱりバレちゃったか。本当はメダルを回収しに来たんだよ」
「!？」

ヤツの手に握られていたのは白のメダル三枚と緑のメダルが三枚。

ガメルが持っていたと思われるメダルだ。

ルビイちゃんたちの方へ振り返ると、胸を抑えながらメダルを零すガメルと、怯えてしまっているルビイちゃんが。

「お前……!？」

「君もそんなに怖い顔しないで。今日はこれだけだから。けど、僕のメダルも必ず返してもらおうからね」

俺ではなく、アंकに向けて最後の一言を吐き捨て、メズール共々飛び去っていった。

気を失ってしまったガメルを俺たちで保護し、ルビイちゃんはダイヤちゃんに連れて

帰ってもらった。

「悪いな、ウヴァ。部屋借りちゃって」

「それは構わんが……もう一人のアंकか。厄介なことになったな」

「ああ……」

この間のポセイ^でイドン^き襲撃^とから、ポセイ^でイドン^き側についているのは把握済み。

だが分からないのは、ヤツ自身がアंकのコアを直接狙ってきたことが一度も無いことだ。

機会を伺ってるのか、それとも何か目的があるのか……。

「う……うーん……」

思考を巡らせていると、ガメルが目を覚まし、起き上がった。

「久しぶりだな、ガメル」

「……ウヴァ？ここどこだ？」

「お前はメダルを取られて倒れたんだよ。んで、それを俺とアंकでここまで運んで来た」

「……メズール」

先の出来事は、ガメルにとっても相当ショックなものだっただろう。

何せ、メズールに攻撃された、つまり彼女に裏切られたのだから。

「なあガメル、ルビィちゃんを守ってくれたのは、あの子のことが好きになったからだろ？」

「うん……俺、ルビィのこと、メズールと同じくらい好き……」

「ならさ、俺たちと一緒に来ないか？」

「……」

「メダルは渡すし、ここで得られるものも沢山ある。メズールと仲直りする方法も見つかると思う」

「メズールと……。分かった、俺ここに住む」

「ってことだそうだ。志満さんには俺から言っておくから、ガメルのことよろしく頼むぞ」

「分かった。そっちは任せたぞ」

こうしてガメルが仲間に加わった。

そしてこの選択が間違っていないなかつたことを知ることになるのは、もうすぐなのだ、それはまた別のお話。

HAKODATEと妹と姉

ガメルが仲間に加わり、数週間が過ぎた。

世間はとうにクリスマススムードに包まれ、ツリーやリース、はたまたサンタの人形やコスプレで賑わっていた。

そんな中、俺たち浦の星学院のスクールアイドル部は、とあるイベントの招待を受けていた。

ラブライブ北海道地区予選。

その招待状が送られてきたのは、一週間ほど前だった。

「いやったあ!!」

歓喜の声を上げたのは、ドライバーを手にし掲げているいる慎司だった。

「随分嬉しそうですね」

「当たり前だろー！ようやく俺の相棒が帰ってきたんだからー！」

長らくプロトバースで戦っていた慎司。

原因は俺が暴走し、ドライバーを破壊してしまったからだ。

その様子を見ていると、やはり悪い事をしたと思う。

「ふふふ……ただ修理しただけではないぞ。以前のカザリとの戦闘、先の戦いで破損を考え、そして激化するであろう戦いに耐えられるよう、強化もしてある！その名もバースドライバー・ツヴァイじゃ！」

……何か聞いたことある響きだなおい。

「あざっすー！」

礼を述べた慎司に「うむ」と頷くと、女神さまは俺の方に向き直る。

「ぬしは……」

「俺はまあ……今のところは大丈夫かな。最近は暴走もなくなったし、大分安定してる」

「……そうか。じゃが気を付けるのじゃぞ？」

「ああ、分かってるさ」

俺の中にある紫のコアメダル、そしてその影響で少しずつ進行するグリード化。

これを知っているのは、元の世界で仮面ライダーを知っていた俺と慎司、晴也と女神さまだけ。

A q o u r sのみんなに伝ええないのは、余計な心配をかけたくないからだ。

しかし、それも最近になって症状が悪化し始めた。

初めは視界がおかしくなるだけだったのが、味を感じられなくなったり、時々、身体の一部がグリード化するようになるまで進行してきた。

いつまで隠し通していられるかな……。

「見て見て四人とも……つて神子みこさん？来てたんですね」

「ええ、お邪魔してます」

部室に入ってきた千歌ちゃんちかちゃんと女神さまが、互いに会釈する。

ちなみに神子みこというのは、こちらの世界で彼女が名乗っている名前だ。

「どうしたの千歌ちゃん？」

「あ、そうだ！これを見て！」

千歌ちゃんちかちゃんが差し出してきたのは、一通の招待状。

『ラブライブ！北海道地区予選 観覧のご案内 浦の星学院 スクールアイドル

oursの皆様』……」

晴也はるやが見出しとなっていた部分を読み上げてくれた。

……え？

「ええええええつ!!!?」

そして今現在、俺たちは静岡を離れ、北海道函館まで来ているのである。

……あるのだが。

「ダメだよ二人とも！寝たら死んじゃうよ！」

「ごめん千歌ちゃん、今そんなに深刻な場面じゃないからね？」

千歌ちゃんがみかんの目出し帽を着けながら、眠そうにしている梨子ちゃんと曜ちゃんの目を覚まさせようとしている。

何この光景……。

字面だけ見れば、吹雪の中で遭難し、眠りそうになっっている仲間を起こそうとしている場面なのだが、実際そこまで酷い天気ではなく、千歌ちゃんの格好の所為で、コメディ映画のワンシーンにしか思えない……。

「スノーホワイト……」

「あ、鞠莉！」

スノーホワイトって今の状況のことじゃない鞠莉ちゃん、それ白雪姫じゃん。

そして極めつけが……。

「は、花丸（ちゃん）!?!」

滅茶苦茶厚着して走ってくる花丸ちゃんである。

マジで何してるの!?

その格好そのものが振りと言わんばかりで、案の定花丸ちゃんは転び、慎司、ルビイちゃん、善子ちゃん、曜ちゃん目掛けて飛び込み、四人を下敷きにしたのだった。

いやホント何この光景……。

「どいかにいってもいっすら変わらないな」

「ははは……」

鼻で笑うアंकに、苦笑する晴也。

「出来たー！」

「へえ、ガメルつて意外と器用なんだね」

そして初めて見る雪を楽しんでいるガメルとカザリだ。

「雪のウサギか。よく出来てるじゃん」

「メズールにも見せてやりたい……」

ガメルの表情が暗くなる。

「……そうだな。絶対見てもらおう」

その言葉に俺は小さく頷いた。

雪で戯れるのも程々に、俺たちはラブライブの会場に足を運んだ。

そして訪れたのはもちろん……。

「失礼します——Saint Snowのお二人は……」

「はい、ああ！お久しぶりです、みなさん」

Saint Snowの二人の控え室だ。

「今日は楽しんでいってくださいね。みなさんと決勝で戦うのはまだ先ですから」

そう言い笑むのは聖良さん。

彼女は既に先のビジョンを見据えているようだ。

一見すると、挑発のように取れなくもない。だけど聖良さんは。

「あの時は失礼なことを言いました。お詫びします」

そう言つて頭を下げた。

あの頃より成長を遂げたAqoursは、既に優勝候補であると。

「聖良さん……」

「次に会う決勝は、Aqoursと一緒にラブライブの歴史に残る大会にしましょう！」

差し出された手。

千歌ちゃんはその手を取り、握手を交わす。

Saint Snowはきつと勝つ。そしてAqoursの前に立ちはだかるだろう。

——誰もがそう思っていた。

ラブライブ！北海道地区予選を突破し、決勝へコマを進めたグループの中に、Saint Snowの名前は無かった。

パフォーマンス中に二人が転倒。そこから彼女たちが歌うことはなかった。

「まさかあんなことになるなんて……」

「仕方ないさ。何が起ころうかなんて誰にも分からないんだから。でもこれが……」

「これがラブライブなんだね……」

俺の言葉に曜ちゃんが続き、俺はそれに首を縦に振る。

「あんな二人、初めて見た……」

ライバルのことなのに——いや、むしろライバルと認め合った仲だからなのかもしれない。

Aquoursの面々の表情は、言葉でははかり切れないものだった。

「……ああもう！いつまでも落ち込まない！終わっちゃまったことはもうどうにも出来ませんから！ずっとこうしているのは止めましょう！」

「そうですね、慎司さんの言う通りです。せっかく函館まで来たんですから、一度気持ちを入れ替えていきましょう」

慎司、そして晴也が続いてその空気を払拭した。

「そうだね。それにあの二人なら大丈夫だよ」

少しずつ彼女たちはいつもの調子を取り戻していった。たった一人を除いて。

そしてそれに気付いたのも、また、たった一人だった。

ホテルでの部屋割りには、男子は俺とアंक、晴也と慎司、カザリとガメルという風に

分けられた。

「まだ気にしてんのか」

ベッドで寝転がりながら、二人のことを考えていると、アंकにそう尋ねられた。

「まあな……。なあ、アंकはどう思う？ 聖良さんと理亞ちゃんのこと」

「どうだろうな。あいつらにまだ『歌いたい』という欲望が残ってるなら、また歌うかもな」

実にアंकらしい答えが返って来た。

「お前はそう言うと思ったよ」

そう、結局はそれなのだ。二人がどう思っているのか。それで全てが決まる。

「俺に出来ることはない……か」

「お前はどこまでもお人好しだな」

「目の前で困ってる人がいるなら、絶対に助きたい。ただそれだけだ」

「今は人の心配より、自分の心配をした方がいいんじゃないか？」

「……………」

自分の身体の……グリード化の心配をしろと言われる。

「まあいい。無茶だけはするな。お前に死なれたら困るからな、俺も、あいつらも」

「分かっているさ……」

何があつても死んではいけない。それだけは心に留め、この日は眠りについた。翌日、Aqours一行は予定通り、函館を観光することになった。

五稜郭タワーをはじめとする函館の名所から、Saint Snowの二人の母校、函館聖泉女子高等学院まで。

「なんだか落ち着くね——ここ」

「あ、それ俺も思った。けど何でだろう？」

「それって内浦と似てるからじゃないかな？」

「内浦と？」

「うん」

言われてみれば、似ているような気がしてきた。

海が見える、潮の香りがする、坂の上にある学校。

千歌ちゃんも納得出来たのか、「確かにそうかも」と果南ちゃんに返す。

「繋がってないようで、繋がってるものね——みんな」

俺たちが住む場所とどこか似たこの雰囲気浸っていると、「ぐうぐ」と誰かの腹の虫が鳴く。

「すいません、俺です……」

左手で顔を覆いながら、右手を上げて自己申告した晴也。

隠しきれない耳が真っ赤になって見ているのを見て、少し笑ってしまふ。

「そ、そんなに笑うことないじゃないですか……!」

「ごめんごめん。ついな。でも少し小腹は空いてきたかも」

「それじゃそれじゃ! 気になつてた店があるんですけど、そこいきませんか!」

という慎司の希望により、その手に握られているスマホに映されているお店に行くことに。

が、

「すいませーん」

……店員さんが来る気配が無い。

「あれ?」

しかし入り口には商い中と書かれている。

「ううう……早く中に入りたいずら……」

花丸ちゃんが寒いと訴えている。

それだけ来てても寒いのか……。

「ずっとここにいる訳にもいかないし、入ろうよ」

「それもそうだな。俺はカザリに賛成」

「仕方ないね……」

カザリが先陣をきり、店の中へ。

そして俺たちは衝撃の事実を知った。

和風テイストがきいた雰囲気のあるこの店。

入店してすぐに俺たちは衝撃に襲われた。

「わあ——綺麗！」

「凄く美味しそう！」

「とても温まりますよ。どうぞお召し上がりください」

A q u o u r s 一行に應對してくれたのは、なんとS a i n t S n o wの聖良さんだった。

何故こんなところにいるのかと尋ねてみると、ここは二人の家でもあるのだという。

ただの偶然なのか、はたまた奇跡なのか……。

慎司が図ったつてことは……。

「おお！これめっちゃ美味しいですね！」

「本当ですね！」

「ありがとうございます。お口に合ったみたいで何よりです」

……うん、無い。

みんなぜんざいやお茶を楽しんでいる。

「この町も、お店も、凄く素敵なところですね」

「ありがとうございます。わたしも理亞もここが大好きで、大人になったら二人でこの店を継いで暮らしていきたいねって」

「素敵なお店ですね——」

「……けど残念でしたわね、昨日は……」

千歌ちゃんたちが内浦に特別な想いを抱いているように、聖良さんたちにもそれがあつた。

それを知った今、やはり彼女たちのことを他人事なんだと割り切るのは到底できない。

ダイヤちゃんの一言を「いえ」と否定した聖良さん。

しかし彼女もまた遮られてしまった。

「食べたらしさつきと出て行って！」

叫んだのは理亞ちゃんだった。

「理亞！なんて言い方を……！」

聖良さんが理亞ちゃんをたしなめようとするが、理亞ちゃんは話を聞こうとせず、奥へ行ってしまった。

「ごめんなさい……まだちょっと昨日のこと引つかかっているみたいで……」

……昨日の今日じゃ完全に立ち直るなんて無理だろう。

こうして仕事を出来ているだけで、彼女たちは強いといっても過言ではない。

「わたしは後悔してません。だから理亞もきつと次は……」

「嫌!」

再び現れ、聖良さんの言葉を遮る理亞ちゃん。

「何度言っても同じ!わたしは続けない、スクールアイドルは! S a i n t S n o w

はもう終わり!」

「本当にいいの?あなたはまだ一年生。来年だつてチャンスは……」

「いい!もう関係ないから……ラブライブも、スクールアイドルも……」

頑なに「否」と言い続ける。

そんな理亞ちゃんの姿に少し既視感を感じる。

理亞ちゃんはきつと……。

二人の家を後にし、ファストフード店に来た。

やはり晴也と慎司の腹はあれだけでは満足できなかったらしい。ついでに花丸ちゃ

んも……。

それとあのままあそこにいられるムードではなかった、というのも大きいだろう。

「何もやめちゃうことないのにね……」

「けど仕方ないのかもね。来年もやるとしても、彼女、一人なんですよ？」
カザリの言う通りだ。

新しいメンバーを集めて再スタート!というわけにもいかないだろう。
ただ単に失敗してしまった、それだけならまた次頑張ればいい。

しかし今回は……。

「きつと——聖良さんがいなくなっちゃうから」

「え」

「お姉ちゃんと一緒に続けられないのが嫌なんだと思います。お姉ちゃんがいなくても、もう続けたくないって……」

その答えに辿り着いたのはルビイちゃん。

「ルビイ……」

「びぎやつ?!」

何かを悟ったかのような様子を見せたルビイちゃんだったが、ダイヤちゃんが声をかけると同時に我に返ったようだ。

「ち、違うの! ルビイはただ理亞ちゃんが泣いて……あ」

あ。

「びぎいいいい!!」

黒澤姉妹特融の悲鳴を上げながら、ルビィちゃんが飛び出して行ってしまった……。

一面に広がる銀世界。

しかし、彼女の瞳に映るのは、色のつかないモノクロな世界。

望むものが手に入らない。

何もかもが足りない世界。

彼女が望むもの、色褪せた世界で彼女が見つけたもの。

それは「愛」。

目の前に映る少女二人を取り込めれば……。

そんな思考が彼女の頭を過る。

しかし、それは実行に移されることなく、阻止されることになった。

「そんなところで何してるんだ?」

「オーズ、アंक……」

少女——メズールの前に現れた耀太とアंकに。

「偶々……なわけじゃないよな」

「大方あの二人を狙おうとしてたんだろな」

「もしそうなら……俺はお前を止める！」

「出来るものならやってみなさい！」

耀太はドライバーを腰に当て、メダルを取り出しセット。

メズールも本来の姿に戻り、戦闘態勢に。

「変身！」

「タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

アंकは後ろに下がり、二人は目の前の相手に意識を集中する。

同時に正拳突きを繰り出し、互いに対応する手で受け止める。

次いでオーズは頭突きをお見舞いする。

「きゃ!?!」

頭に衝撃を受け、よろめいたメズールは、態勢を崩してオーズの拳を離してしまう。

オーズはその隙を見逃さず、胴体に蹴りを入れる。

「くっ……少しはやるようになったわね……」

「守りたいものがあるからな。負けるわけにはいかないんだ！」

守りたいものがあるから戦う。

メズールには到底理解できないことだった。

グリードという存在である彼女からすれば、余計にだ。

「どうしてダイヤちゃんやルビィちゃんを狙おうとしたんだ!？」

「……あなたは『愛』が何だか分かる?」

「愛……?」

オーズは動きを止め、数秒の間思案する。

そして……。

「……誰かを好きになること、誰かが好きになってくれることじゃないかな? もちろん異性の誰かとかだけじゃなくて、友だちとか家族とかさ」

「好きになる……? 好きになってくれる……?」

「そう。お前の周りで言えばガメルみたいにさ」

「ふ……何を言ってるの? わたしはガメルのことなんてなんとも……」

「違うよ」

「っ!？」

メズールが耀太の言葉を否定するも、耀太もすぐさま否定する。

「お前は分かかってなかったみたいだけど、ガメルは本当にお前のことが好きだったんだ

よ」

「……嘘よ」

「嘘じゃないよ! 嘘だったら、あんなに悲しそうな顔しない! 今だってそうだ。ガメル

はまだお前のことを……!」

「黙りなさい!」

メズールは耀太の主張を遮り、高圧の水流をオーズに食らわせる。

オーズは胸の前で腕をクロスさせて防ぐ。

「ぐっ……どうして信じてあげないんだよ!」

「わたしたちはグリードよ!誰かを信じることなんてしないわ!」

「うぐ……!うおおおおつ!!」

水流をかき消したオーズ。

その身体から、微かな輝きが放たれている。

「!」

「それじゃあ、お前はいつまでも愛を知ることには出来ない」

「うるさい!うるさい!」

怒号しながらの水流連射。

オーズは避けることなく、攻撃を浴びながらメズールに一步、また一步近づいていく。

そして彼女の目の前で足を止めた。

「どうして……どうして倒れないの!?!」

「言っただろ——。負けるわけにはいかないって」

「守りたいものがあるから……。それは貴方の好きな人の為なの……」
「……かもね」

耀太の脳裏の二人の少女が過る。

しかし、すぐに意識をメズールに切り替えた。

「……メズール、お前に俺たちと一緒に来て欲しい。そして本当の意味で『愛』を知って欲しい」

「愛の……本当の意味……」

耀太は手を差し出す。

対するメズールは、ゆっくりと手を伸ばす。

そして二人の手が結ばれる直前、

「ぐわああああ!!」

「っ?!」

アングの叫び声が響き、二人がそちらの方に身体を向ける。

そこにいたのは、右腕を庇いながら倒れ伏すアングと、そんな彼を見下ろすアング（口スト）。

「アング!?!」

「ふふ……本当はもう一人の僕の顔も見たくないんだけど……仕方ないしこれだけ貰っ

ていくよ」

アंक（ロスト）の左手に納まっていたのは、青のコアメダルが三枚と赤のコアメダルが一枚。

一人離れていた隙を狙われたのだ。

「くそー！」

オーズはバツタレッグの力を解放して、二人の側まで跳ぶ。

トラクローも展開してメダルを取り返そうとするが、直前でアंक（ロスト）は、高所に避けられてしまう。

「惜しかったね。まずは一枚、返してもらったよ。それからメズール、君ももう用済み。

これは貰ってくね」

「待ちなさい！」

アंक（ロスト）目掛けて水流を放つも、彼が起こした風でまき散らされてしまった。

「えつと耀太、その人は……」

果南ちゃんには引き攣った笑顔で、そしてガメルには満面の笑顔で俺たちはホテルに迎えられた。

他のみんなは、慎司や晴也は言わずもがな、カザリに関しては「本当にお人好しだね」

と笑われた。

「——まあ色々あつてメズールも居場所を無くした。もちろん今までのこと全てを許してやれとは言わないけど……せめてアイツの居場所を作つてやつて欲しい……」

俺はみんなに頭を下げる。

数秒間が過ぎ、誰かの嘆息するのが聞こえた。

「仕方ありませんね。耀太さんがそこまでいうのなら」

「そうだね。一度言いだしたら、もう何を言つても聞かないし。まあそこが耀太の良いところなんだけど……」

「え、果南ちゃん今なんて……」

「な、何でもない!と、とにかくあの娘のことなら大丈夫だよ」

「!ありがとう——!」

みんな頷き、メズールのことを快く受け入れてくれた。

コアメダルは奪われてしまったものの、五人のグリード全員が、味方になった。

これで対ポセイドンの布陣は完全になったと思われたが、後にそれは甘い考えだったことを思い知らされることになった。

二人の妹と聖なる夜と成長

「ライブがしたい？」

ルビイに部屋に呼ばれ、花丸、そして善子ともども、その願いを告げられた。

「ライブって函館コクでってことか？」

「うん、理亞ちゃんと一緒にね」

Saint Snowの理亞とライブか。

多分、昨日のことがあってそう思うに至ったんだろう。

「本当に出来るの？」

「分からない……」

善子が強く言うのと、ルビイの声色が少し弱くなる。

「でも、聖良さんとお姉ちゃんに伝えたいの……。理亞ちゃんとルビイの気持ち……」

しかし、その弱さもすぐに掻き消された。

Aqoursに加入した時と同じ、いや、それ以上の強い意志が今のルビイから感じられる。

「……ふう。しょうがな「面白そうなら！マルも協力するよ！」……」

「ホント!?じゃあ、この後理亞ちゃんと会うんだけど、一緒に来てくれる?」
「うん!」

快く応じた花丸。

……やっぱり俺の扱い酷くない?

「もちろん善子ちゃんもね」

「善子じゃなくてヨハネ!それにそんなことをしてる暇はないの。わたしにはこの地に潜むリトルデーモンを探し出すという使命が……。けどどうしてもって言うならわたしも協力してあげなくもない——」

「善子——」

「善子言うな!私はヨハネ!……っつてずら丸とルビイは?!」

「お前がなんか言ってる間に行っちゃまったよ」

「え!?ちよ、嘘?!人の話は最後まで聞きなさいよ——!」

叫びながら花丸たちの後を追う善子。

肩をすくめて溜息をつきつつ、俺もその後を追うのだった。

と言うわけでルビイが待ち合わせをしている喫茶店へ……やって来たのだが——。
ストローから息を吹き込んで、ジューズを音立たせている理亞さん。
すっごい不機嫌なのが見て取れる。

「わたし、三人も来るなんて聞いてない！」

その発言から察するに、理亜は二人で話し合うつもりだったんだろう。

「で、でも、三人とも頼りになるし……慎司くんは仮面ライダーだし……」

「関係ない！そもそもわたし、みんなでワイワイやるのって好きじゃないの
ルビイがフォローを入れるが、あっさりとかわされる。

すみません……ワイワイやるの好きで……。

「それを言ったらマルだつてそうずら。善子ちゃんに至つてはさらに孤独ずら
フォローになつてないどころか、味方を背中から攻撃してるな、それ。

「ずら？」

「あ、これは、その……おらの口癖ずら……」

「おら？」

「あわわわ……違うずら……」

口を開く度にどんどん墓穴を掘っていく花丸。

「花丸はそれが口癖なんだよ。だからルビイと花丸はずっと図書室に籠つてたんだ
おどおどする花丸に見かねて、フォローを入れる。

すると理亜の刺々しい雰囲気が消えていく。

「そうなの……？」

「ずら……今年の春まではずつとそんな感じだったけど……」

「……わたしも、学校では結構そうだから……」

なるほど。花丸やルビイと通じるものがあつたってことか。

三人のやり取りを見ている理亜の表情が、だんだん緩んでいく。

どうやら警戒は解いてくれたようだ。

……が、本題はここからだつた。

理亜の考えた歌詞を読み上げる花丸。

そしてその内容は……うん、その……なんだ。

善子チツクというか、厨二チツクというか……。

まあ、ルビイたちが苦笑いするくらいのものであるとだけ述べておこう。

「い、言つたでしょう!? 詞も曲も姉さまが作つてるつて!」

「いやまだ何も言つてないじゃん……」

とは言え、本人がそう言つてしまうということは、そういう自覚はあるんだろうな

……。

「ふ……何の捻りも無い直接的な表現ばかりね」

おっと、突っかかっていく善子さん。

「何よ、文句あるの?」

しかし理亞さんも一歩も引かない！」

「でも歌いたいイメージはこれで分かったすら」

「ルビイも手伝うから、一緒に作って見よ？」

「あなたたち、ラブライブの決勝があるんでしょ？曲作りなんてしてる暇あるの？」

「それは……」

「そこら辺は心配ご無用！なんたつて頼りになる先輩たちがいるからな！」

「うん！それにルビイちゃんや理亞ちゃんのお手伝いがしたいすら」

「理亞ちゃんやお姉ちゃんと話してて思ったんだ。わたしたちだけでも出来るってことを見せなくちゃいけないんじゃないかなって。安心して卒業できないんじゃないかなって——」

……こうして見ていると、この三人——特にルビイは本当によく成長したと思う。

だからこそ、今は応援してやりたい。

ルビイが言った直後に、携帯の受信音が聞こえた。

「ゲッ！リリーだ！『どこにいろの！？もう帰る準備しなきゃダメよ！』って……」

善子のスマホの画面を覗くと、確かに梨子先輩からメッセージが来ていた。

しかも、そこそこ怒っていると、字面だけでも分かる。

「どうするの？」

「今は冬休みだろ？それなら——」

「()に残る!？」

帰って来た一年生四人から、信じられない話を持ち出された。

まあ、理由としては、落ち込んでいる理亞ちゃんを励ましてあげたいとのこと。

それは構わないんだけど……。

「すいません耀太先輩。今何で俺の方を見たんですか？」

あ、気付かれた。

「いやね、年頃の女の子三人と思春期真っ盛りの男を北海道に置いていくのはちよつと

……と思ったただだよ」

「そんな信用ないんですか俺?!言っておきますけど、俺は善子一筋なんで他の娘に手を

出すなんてことしませんから!」

「いや余計心配だわ」

そんなこと言うから善子ちゃんが顔赤くしちやつてるよ。

ていうか今の発言は結構ヤバイぞ。

もしネットに拡散なんてされようもんなら……。

「まあそれは置いておいて、泊まるどころとかはどうするの?」

「幸い、理亞ちゃんの部屋に余裕があるからお世話になるすら」

「なるほどね。で、慎司は？流石に理亞ちゃんの部屋に泊めてもらうなんてことないよな？」

「何言ってるんですか先輩。そんなの当たり前じゃないですかー」

まあ当たり前だよな。泊めてもらうとか言いでしたら、八倒して無理矢理沼津に……。

「もちろん泊めてもらいますよ（冗談）」

すぐさま戦闘態勢に入り、慎司の腹部目掛けてボディブローを仕掛ける。

「ちよーちよー！嘘！嘘ですよ！」

「時と場合を考えろ！思春期男児が冗談でもそんな発言していいと思ってるのか!？」

「ルビィ！ルビィがおかしいです、先輩！」

などという漫才を繰り広げ、千歌ちゃんの了承も得て、一年生は北海道に留まることになった。

所変わって飛行機の中。

慎司一人では心配だと、カザリを含めた一年生以外は予定通りに帰ることになった。

「来てよかったね」

「本当にね」

今回の函館訪問は、色々と得るものがたくさんあった。

それを糧にして、Aqoursのみんなには精進して欲しい。

そんな俺の想いを知らないダイヤちゃんの大きな溜め息が聞こえた。

「何か気に入らないことでもしたんじゃないの？」

「そんなことつ……！」

若干、もとい結構な勢いで涙目になっている。

やはり五人と別れた時に、「付き添いは無くて平気」と言われてしまったのがショック

だったのだろうか。

キャビンアテンダントさんから声がかかるも、果南ちゃんが対処してくれた。

「でもあの態度、何か隠してるようだったよ」

「まあ、それは分からなくはないかな」

「メンバーと別れてSaint Snowの家に泊まる……？もしかして——」

そして「あの三人+αがAqoursを脱退する」などというあり得ない妄想の末、
久々にダイヤちゃんの「ぶつぶーですわ！」が機内で炸裂した。

それにしてもこの展開、何か凄い既視感を感じる……なんでだろう……（すつとぼけ）。

「そうじゃないと思うな」

ダイヤちゃんのそれを否定したのは千歌ちゃんだった。

「多分あれは——」

「あれは……?」

「んー……言ーわない。きつともう少ししたら分かると思うよ」

千歌ちゃんはそう微笑んだ。

妹同士、何か思うところがあるのだろう。

俺はそう納得し、ダイヤちゃんは再び機内に声を響かせたのだった。

「今日は中々面白かったね」

「ん、確かにそうだな」

理亜の部屋での話し合いが終わり、ルビイたちはそのまま理亜の家に留まり、俺とカザリはホテルにチェックインした。

今日だけで何人かの意外な一面が見えた。

ルビイも理亜も中々なお姉ちゃんっ子だったとか……。いやルビイは何となく分かってはいたけど、まさか理亜までとは……。

「まあそれより俺はお前が残ったことが意外だったな」

「そう?」

「ああ。いつも鞠莉先輩にべったりないイメージがあったからな」

「ははは、確かにそうかもしれないね」

やけに素直なカザリ。

ついでにもう一つ、気になったことを問う。

「あとさ、あのメガネ、メズールにあげちゃって良かったのか？めが……神子さんに頼めば新しいのを……」

「良いんだよ。ボクにはもう必要のない代物だからね」

「それってどういうことなんだ……？」

「そうだねえ……」

一息程の間を開け、カザリはもう一度口を開く。

「満足出来たから……かな？」

「満足……」

本来、グリードから決して出るはずのない言葉。

しかし、何故か違和感の欠片すらも感じられなかった。

「なんてね。確かに色々と恵まれているとは思うけど、満足するにはもう少しだけ、足りないかな」

窓から夜空を見上げるカザリの横顔は、少し哀しいさを感じさせる。

まるで、その「足りないもの」は絶対に埋まるものではないと言っているように。

「さて、明日は早いんだし、今日はもう寝ようか」

「そうだな……」

カザリに促され、俺はベッドに入り、目を閉じた。

そしてイベントの選考会がやって来た。

この選考で見事受かることが出来れば、クリスマスのイベントで Saint SnowとAoursの二人の合同ライブをすることが出来る。

が、やはり二人の態度、表情、そして声色から不安や焦りがあるのは見て取れた。

「ルビイ知らない人と話すの苦手……」

「わたしだって……」

いざとなると仕方がないのかもしれない。しかし、今回はそんな弱音を吐いて、じつとしていくわけにはいかないのだ。

「そろそろだね」

「姉さまがいなのがこんなにも不安だなんて……」

そんな二人の震える手にそつと手を乗せ、

「でもさ、全部自分たちでやらなきゃ」

「全て意味がなくなるすら」

善子と花丸がエールを送る。

遂にルビィと理亞に順番が回り、二人は部屋の中に入っていった。

「さて、そろそろルビィたちの番かな？」

「時間的にもそうだろうね」

四人と別れ、俺とカザリは選考会の会場とは全く別な場所に来ていた。

「全く、こんな日にヤミーが出てくるなんて、ホントにTPOを考えて欲しいもんだぜ」
「つて言われても、前はボクもそんなこと考えなかったからねえ」

肩をすくめるカザリ。

そして目の前には成長体のヤミーが数体だ。

「キャンプの時（サバイバルとミステリーと未来へのトレジャー 参照）のこともあるし、ポセイドンの野郎が生み出した奴らなんだろうな……」

「その話は知らないけど、ボクが生み出した心当たりのないヤミーがいるあたり、そう考えるのが妥当だろうね」

カザリはそう言いながらグリードの姿に変身。

「新しいバースの力を試すにはもってこいだけど、これ以上好き勝手やられて、

ルビィと理亞が悲しむ顔は絶対に見たくないんでね。悪いが速攻でかたをつけさせてもらおう！」

ドライバーを腰に巻いてセルメダルを一枚投入、レバーを回転させてバース・ツヴァイへと変身した。

「ドリルアーム」

初めにドリルアームを武装し、ネコヤミーを撃破。

続いてカザリが、サメヤミーを吹き飛ばした。

サメヤミーと入れ替わるように、バイソンヤミーが突撃してくる。

「キヤタピラレッグ」

カザリとスイッチして、キヤタピラレッグを装着。

キヤタピラを高速回転させて進み、ドリルで迎え撃つ。

「バース！伏せて！」

「おっと」

バイソンヤミーをぶっ飛ばし、カザリの指示通り伏せると、頭上にいたらしいアゲハヤミーが、カザリの起こした竜巻で吹き飛ばされる。

「そのまま逃がしはしねーぞ！」

「クレーンアーム」

クレーンアームと組み合わせたドリルを、飛ばされているアゲハヤミー目掛けて投げ掛ける。

「カッターウィング ショベルアーム」

翅ごと拘束され、自由落下を始めたアゲハヤミーをショベルアームで叩き落とす。カザリがバイソンのヤミーをネコヤミー目掛けて殴り飛ばし、二体が激突。

そこに丁度良くアゲハヤミーが落下、直撃した。

「あと一匹……そこか！」

強化されて追加された新機能、《セルサーチャー》で地中を動き回るサメヤミーを感じ知。

ドリルをサメヤミー目掛けて投擲し、見事ヒット。

ヤミーの身体に突き刺さり、捕らえた。

クレーンアームを展開して、纏まっていた三体のヤミーとともに拘束した。

「そしてこれがバース・ツヴァイの目玉装備！」

「ブレストキャノン バスター！ブレイカー!!」

機械音声と共に胸部に展開されたブレストキャノン。

二枚目、三枚目とセルメダルを追加投入して、砲身を変形させていく。

双頭槍のような砲身の間にセルメダルのエネルギーが収束される。

「これが俺の……！全力全開ツ!!」

某魔法少女のような掛け声とともにエネルギー砲を発射。

「スターライトオオ……ブレイカアアアアア!!」

「それは関係ないと思うな」

カザリがそう言うが、そんなこと知ったことか。

放たれた白い閃光は四体のヤミーを爆発四散させた。

函館にいたとても短い期間の中で二人の妹は確かな成長を遂げた。

そしてそれをそれぞれのお姉さんに見てもらおう為にここまで来たんだ。

ルビイと理亜の、もうすぐ到着するお姉さんを待つ姿を、少し離れた場所から見守る。

「さっきのダイヤ先輩からのメール的に、そろそろ来てもよさげな時間だけど……」

今現在ここにいるのは、函館に残った一年生と、ダイヤ先輩より先に戻って来た耀太先輩たち。

後者の方は、ルビイたちにも内緒で来てもらっている。

まあ、なんだ。

あの四人へのささやかなサプライズってやつだ。

「見て。二人とも来たみたいだよ」

ダイヤ先輩と聖良さんへと、二人は歩みより、手紙を渡した。

今まで勇気をくれたことへの感謝と、少しでも成長した自分たちを見て欲しいという想いを込めて。

聖なる夜の前夜。

二人の姉と妹は、互いへの想いを歌にのせたのだった。

入れ替わりと果南のココロと耀太の秘密

とある休日。いつも通りに一日が始まり、終わっていくのだと俺は思っていた。

が、その日常はたった一つの事件により、現実離れた非日常となってしまうのだった。

……仮面ライダーとして怪人と戦ったり、体の中にメダルが入っていることが既に非現実的だろ、なんてツツコミ話の方向でお願いします。

アंक用のアイスがまたも無くなり、補充の為に向かったスーパーの帰り道。

「ふう……なあ、アंक、とりあえず今日はこんなもんで良いだろ？」

両手をふさぐビニール袋には、アイス、アイス、アイス。詰め込まれたアイスの箱に、保冷用のドライアイスとアイスづくめだ。

肝心のアंकは、買ったばかりのアイスキャンデーをもう食べ始めていて聞く耳を持たない。

俺の財布は轟沈寸前、そのうえ俺は荷物持ちときた。この境遇に深い溜息を吐いていると、見覚えのある人影が目に入った。

「あ、耀太にアंकさん、おはよう」

「おはよう、果南ちゃん。もしかしておつかい？」

「うん。そう言う二人は……聞くまでも無かったね」

俺の持ったビニール袋を見て、果南ちゃんは苦笑する。これだけ大量のアイスを見れば、当然の反応だろう。

「耀太も大変だね」

「本当だよ……。どれだけ買ってもすぐ食っちゃうし、買う量が量だからお金も無くなつてく……」

「本当、大変だね……」

彼女から感じられる同情の念。恥ずかしさやら悲しさやら、府の感情が俺の中で大渋滞を起こしていた。

「おい、ヨーター！早くしないとアイスが溶ける！」

「分かってるよ！つたく……そんなに早く帰りたいなら自分で持てばいいのに……。会ったばかりなのにごめん、果南ちゃん」

「大丈夫だよ。じゃあ、また明日学校で」

「うん、それじゃあ」

果南ちゃんと別れを告げ、「早く帰るぞ」と急かすアंकのもとへ走ろうとしたその時

だった。

「……ヤミーだ！」

「しかもかなり近い！」

「俺たちはヤミーの気配を察知。正確な位置は分からないが、間違いなく近くにいる……！」

「ヨータ、カナン！後ろだ！」

振り向くと、青い影が猛スピードでこちらに向かつて来ていた。

「果南ちゃん、ごめん！」

「え？ええええ!？」

俺は咄嗟に果南ちゃんを引き寄せ、ヤミーの攻撃から彼女を守る。

間一髪で回避するも、ヤミーは空中で旋回して再びこちらに突撃しようとしていた。

「ヨータ！コイツでいけ！」

バツクルを腰に当ててベルトを装着、次いでアंकから渡されたメダル三枚を装填、スキャンして変身した。

「変身！」

「サイ！ウナギ！バツタ！」

こちらに突貫してくるヤミーに対し、サイヘッドを突き出す構えをとる。更にバツタ

レッグに力を込め、ヤミーにずつきを喰らわせた。

失速したヤミーをウナギウィップで拘束し、地上に叩きつける。

そして明らかになったヤミーの正体、それはアंकの属性のヤミー、オウムヤミーだった。

「あれ……もしかしてアंकさんの……？」

「アレは俺のヤミーだが……俺のじゃない」

「アंकさんだけど、アंकさんじゃない……？」

今のアंकにヤミーを作る力はない。このヤミーを作ったグリードは、以前俺たちの前に姿を現したアंक（ロスト）だろう。

また飛び立とうとするオウムヤミーだったが、ウナギウィップで打って阻止する。

「ヨータ！ コアをコイツに変えろ！」

アंकから再びメダルを受け取り、サイメダルと入れ替える。

「シヤチ！ ウナギ！ バッタ」

サイヘッドはシヤチヘッドに変化し、サウバからシャウバへと亜種チェンジした。

シヤチヘッドから放水し、オウムヤミーに浴びせる。そして、水で濡れたヤミーをウナギウィップで再び捕え、電撃を浴びせた。

「はあああ……セイヤーッ!!……っ!？」

トドメを刺す為にキックを繰り返すが、どこからか飛ばされてきた氷柱に阻まれてしまった。

キックが不発に終わり、着地した直後にまた氷柱が飛んできた。

避けられないと読んだ俺は、腕をクロスさせて防御の構えをとる。

「また見たこと無いヤミーか……」

出現したのは、プテラヤミーと同じ紫色のヤミー、アンキロサウルスヤミーだった。

冷気と氷の粉塵で曇っていた視界が晴れると、アンキロサウルスヤミーは眼前まで迫ってきていた。右腕のハンマーで殴られた俺は、後ろに吹き飛ばされる。

不味い……。鳥系に加えて恐竜のヤミーが出てくるなんて……。

果南ちゃんには見せたくないけど……ここはやるしかない！

俺は、力を出来るだけ抑えて紫のメダルを出現させる。

「よせ、ヨーター！コンボならこっちにしとけ！」

それを使って、プトティラコンボに変身しようとする、アंकが投げたメダルによつて紫のメダルが弾かれた。紫のメダルは体の中に戻ったが、代わりにアंकに投げ渡されたメダルを使ったサゴゴゾコンボに変身することにした。

「サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴゴゾ！サゴゴゾ！！」

ハンマーを振り回しながら迫って来たアンキロサウルスヤミーにゴリバゴーンで反

撃し、突撃してきたオウムヤミーをドラミングによる重力操作で地面に叩きつけた。

「ヨータ、あまり長引かせるな。何か妙な感じがする」

「了解……つて言いたいけど、二対一はちときつい……」

不意打ちのダメージとコンボを使った反動で、思ったよりも体力が限界に近づいていた。

必殺技も撃ててあと一発。強力な敵を二体も相手にして、一撃で決めるのは流石に無理だ。

「吹き飛ば……」

アンキロサウルスヤミーとオウムヤミーは氷と炎による合体攻撃を繰り返す。

アレをまともに受ければ、一撃で倒されてしまっただろう。だが、避ければ甚大な被害が出るのは安易に予想がつく。俺は受けざるを得なかった。

ドラミングで再び重力を操作し、攻撃の威力を減少させる為に抵抗した。

「ぐ……うわあああッ!!」

威力を落とすことには成功したものの、やはり変身を保つことは出来なかった。

「チツ……」

二体のヤミーは、変身が解けた俺に次の攻撃を仕掛ける為に近寄ってきたが、アंकクの火炎弾によって阻まれる。

だが、危機的状況なのに変わりはない。

「ずっと、一緒に、いたい……」

不可解な言葉を呟きながら、オウムヤミーは二枚の蒼い羽根を飛ばしてきた。羽根は俺と果南ちゃんの腕に張り付き、その瞬間、妙な感覚に襲われる。

それとほぼ同時に、ヤミーたちの歩みは銃撃によって止められた。

「すいません、先輩方！ちよいと用事があつて遅れました！」

バースバスターを構えながら走つて来たバースとアクア。二人はヤミーと戦いを始めようとしたが、ヤミーたちは俺たちの目をくらし、逃げ去ってしまった。

ひとまずは窮地を脱した。慎司と晴也は変身を解除し、こちらに歩み寄つて来た。

「大丈夫ですか？耀太さん、果南さん」

「ああ、助かったよ。ありがとな、慎司、晴也」

「「え？」」

二人に礼をすると、おかしな顔をする。

いや、二人だけじゃない。俺も目を点にして固まっていた。

……え。

「な、なんで俺が俺の前に!？」

「また面倒臭いことになったな……」

先程まで苛立っていたアングが、呆れて溜め息を吐く。
恐る恐る体を見してみる。

いつもより細くなった腕。身に着けている服は果南ちゃんを着ていたもので、おまけに胸部は盛り上がっていて、いつもより重みを感じる。

「俺（わたし）たち……体が入れ替わってるううう!!?」

一難去ってまた一難。

俺たちの声は、沼津の青空に響き渡ったのだった。

「体が入れ替わったああああ!?!」

あの戦いの場にいたわたしたち以外の全員が驚愕の声をあげる。

「それじゃあ、今は果南のボディの中には耀太が、耀太のボディの中には果南がインしちゃってるってこと?」

「うん、実はヤミーと戦っている時に付けられた羽根が原因みたい……」

わたしたちが置かれている状態を説明すると、耀太は肩をすくめて溜め息を吐いた。

「どうにかして元に戻れないの?」

「ヨータとカナンに付けられた羽根が剥がれない限り、元には戻らない」

「原因であるヤミーを倒さないといけないわけですね……」

「そのヤミーも今は行方をくらましてる。カンドロイドたちが探してるけど、まだ見つかってないな」

つまりあの鳥のヤミーを倒さない限りはずっとこのまま……。

スクールアイドル活動だけでなく、日常生活にも支障をきたしてしまうのは、火を見るより明らかだ。

「これからどうしようか……」

「そんなの一つしかありませんわ」

打つ手無し……そんな言葉が頭に浮かんだ直後、ダイヤは腕を組んで立ち上がった。

「手分けして原因たるヤミーを探す。それ以外考えられません」

「ダイヤ……」

「善子さんと慎司さんは、ネット上に書き込みがないかを。わたくしたちは手分けして聞き込みですわ」

「任せなさい。わたしとリトルデーモンたちの力があれば、その程度造作もないわ!」

「先輩方の為ならたとえ火の中の水の中!カンドロイドたちとも連携して、必ずヤミーを見つけてやりますよ!」

ダイヤの折れない心と熱は、善子ちゃんと慎司くんをはじめとして、みんなにも伝わっていた。

かくして、ヤミー捜索隊が結成され、わたしたちを元に戻す為の活動が始まった。

流石に一日ではヤミーは見つからず、後はカンドロイドたちに任せて、解散した。

今日はこのまま帰るのはあまり良くないと言うことなので、わたしは十千万に泊まることになった。

夕食の時は。

「頂きまーす！」

「それにしても久しぶりね。果南ちゃんがうちに泊まるなんて」

「た、たまには小さかった頃みたいに千歌ち……千歌と一緒に寝るのもいいかなあって」

わたし耀太が質問やら何やらを、上手いこと交わし続けていた。

もちろん身体が入れ替わっていることは言っていない。

「あれ？少し味が薄いような……」

「そう？いつもと同じくらいにしたつもりなんだけど……」

「あ、いえ！やっぱり気のせいかも！」

「そう？」

うーん……どうしちゃったんだろう。

体が違うと、感じ方も違うのかな……？

ということがあったり。

お風呂の時は。

「……………どうすればいいの?」

「……………目隠しして千歌にやつてもらおうとか」

「……………まじか」

「わたしはどうすればいいの……………」

「……………タオルを腰に巻いて見えないように……………」

なんてことがあつて、お風呂に入る前から出るまでは、今日一日の中でも、かなり大変な時間だった。

そして……………

「じゃ、じゃあ俺は千歌ちゃんの部屋に行くから……………あ、変なことはしないから!絶対!絶対!」

「ふふ、分かってるよ。耀太がそんなことする人じゃないことくらい」

「そ、そうなんだ……………」

事情が事情とはいえ、耀太を千歌の部屋まで見送るのは、少し胸が痛む。

体は——見かけは確かにわたしだけけれど、そこにいるのは確かに耀太。

非常事態とはいえ、他の子千歌と耀太が二人きりなのは少し……………ううん、かなり羨ましい

し、妬ましく思えてしまう。

そんな自分の頬を強く叩く。

「ダメダメ！こんなこと考えちゃ！」

そう、考えちゃいけない。

今はラブライブが——Aqoursが最優先。

それまでこの気持ちは……。

わたしは、自分にそう言い聞かせて耀太の部屋へ。

「よう」

わたしを迎え入れたのは、赤い布団の上に寝転びながら、アイスを食べながらタブレット端末を操作するアंकさんだった。

「そう言えば、アंकさんも耀太と同じ部屋だったんだね」

「ああ。おかげで朝はうるさいがな」

うるさいというのは、きつと目覚ましのアラームや彼を起こす耀太自身のことだろう。

わたしは、耀太が使っている布団の上に座り込む。

「おい」

タブレットの画面をスクロールさせながら、アंकさんが、突然わたしに話しかけて

きた。

「何?」

「お前、ヨータのこと好きなんだろう?」

……え?

唐突過ぎる質問に脳の処理が追いつかない。

「え、えつと、それは……」

やつと出た言葉もどこかたどたどしくなる。

「それはそう……だけど……どうして……」

「見れば分かる。他のやつも気付いてるだろうしな」

「うう……」

顔が熱さを帯びる。

何これ? からかわれてるの!?

「今日一日、ヨータの体でいる時に何か違和感を感じたな?」

「え? えつと……これと言って変なことは……ご飯の味が少し薄かった気がしたくらい
だけ……っ!」

そう言い切ったところで、二度目の異変が訪れた。

一瞬、ほんの一瞬だけ、目に映った世界から色が消えた。

「……これなに……どういうこと？」

「ハナマルとデートに行つたとかいうあの日、その体にコアメダルが入り込んだ」

「あの紫色の……？」

「ああ。しかもそれはかなり危険な物でな、初めてそのコアで変身した時、あの氷のヤミーが出た時に暴走した」

暴走した……。

耀太が晴也くんや慎司くんを攻撃してしていたあの戦いは、まだ記憶に新しい。

「暴走を引き起こすだけじゃない。そのコアはヨータの体を少しずつ変えていつている。俺たちと同じ、グリードの体にな」

「そんな……」

初めて知らされた、突きつけられた現実はわたしに大きな衝撃を与えた。

耀太がグリードに……？

そんな危険な力を使って戦っていたの？

「本当は誰にも話すなと止められていたんだがな」

「どうしてわたしに教えてくれたの……？」

おおよそ一息分の間まを開けて、アंकクさんは再び口を開く。

「アイツは今も……体を蝕むコアメダルと戦っている。それは自分自身との戦いでもあ

る。体力と精神力、その両方をアイツは多く削ってしまったている。アイツには支えが
要だ、お前みたいな奴のな」

「わたしみたいなの……？」

アंकさんが言った言葉の意味。

きつとそれは……。

真夜中。

どうしても寝付けなかったわたしは、外で風に当たることにした。

「さむ……」

上に一枚羽織っているとはいえ、冬の夜はやつぱり寒い。

「ん？」

暗くてここからで良く見えないが、確かに誰かがいた。

「誰だろう……」

気になったわたしは、その人に少し近づいていった。

そして残り五、六、という所で。

「誰？」

その人は振り向いた。

聞こえてきたのはわたしの声。

つまりそこにいるのは。

「その声……耀太」

「果南ちゃんか。果南ちゃんも眠れなかったの？」

「うん。ちよつとね……」

アंकさんから聞いたあのこと。

この体にあるコアメダルのことが気になって……そう言いたかったけど、本当は言っ
てはいけなかったこと。

だからそれは言わなかった。

「ねえ、耀太」

「何？」

「前にスクールアイドルをやるのにした『約束』、覚えてる？」

「ああ、覚えてるよ。あの時は本当に大変だったな、本当に——」

ポセイドンというライダーに騙されて利用され、耀太を傷付けた。

後もう少いで命すらも奪ってしまふところだった。

なのに……。

『自分もいなくなる、なんてバカなこと言ってるヤツはぶっ飛ばしてでも止めるんだよ

！誰も……！誰も望んでなんかない！何より俺が望まない！」

そう言つて、闇の中からわたしを救い出してくれた。

みんなのことを繋ぐんだつて。

その時からわたしはこの人のことを……。

わたしは耀太の手を握つた。

「か、果南ちゃん!？」

「し。静かに。もう遅いんだから」

「ど、どうしたの、いきなり……」

「耀太の手はわたしが握る。わたしが耀太と繋がる。耀太が苦しい時、辛い時でもずつ

と側にいるよ——」

「——ありがとう」

一方的に握つていた手が、握り返された。

耀太がわたしのことを受け入れてくれたんだと思うと、嬉しさが静かに、けれど確か

にこみ上げてきた。

翌朝、ヤミーが見つかったと慎司と晴也が十千万に駆け込んできた。

現場には慎司と晴也、アंकと俺と果南ちゃんの五人で赴いた。

本当は四人だけで来るはずだったが、アンクと果南ちゃんにどうしても頼まれ、危なくなる前に逃げることを条件に同行を許すことにした。

二体のヤミーが現れたのは沼津の町中。オウムヤミーは羽根をばらまき、アンキロサウルスヤミーは建造物を破壊するなど、暴虐の限りを尽くしていた。

更には無数の屑ヤミーまでもが出現していて、町は恐怖と混乱に陥っていた。

「これ以上、好き勝手暴れさせるか！」

慎司、晴也とともに変身しようとしたが、ベルトが出現しなかった。

「やっばこうなったか……」

「やっばって……」

「今のお前の体はカナンのものだ。ドライバ^ッがその体をお前自身だと認識出来ていないから変身出来ないんだ」

「そんな……」

「ヤミーは俺たちが倒します。耀太さんは果南さんを守ってあげて下さい」

俺はアクアの言葉に頷き、彼女を守る為に群がる屑ヤミーを蹴散らした。

だが、一体一体倒しているだけではキリがない。

どうにかして一気に倒さなければ……けど、どうすれば良い？

「こうなったら賭けだ！カナン、オーズに変身しろ！」

「え、ええ!? わたしが!」

「おい、アंक! 一体何を考えて……いや、そうか!」

「ちよ、耀太までどうしちゃったの!」

「オーズならヤミーの力を無効に出来るかもしれないだ!」

あまりにも突然過ぎるアंकの提案に、果南ちゃんは慌ててしまう。

しかし、何とか彼女を落ち着かせて変身させることに成功した。

「えつと……こ、こうすれば良いの?」

「タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!!」

エフェクトとともに姿を変えていく果南ちゃん。

そして、体が入れ替わった時と同様の感覚が、再び俺を襲った。

妙な気配を感じた直後、閉じてしまった目をそつと開けると、俺の体はオーズへと変身していた——つまり元に戻ったのだ。

「作戦は成功だな。さてと、今度こそヤミーを倒す!」

「その前に屑を掃除しとけ」

「クワガタ!トラ!バッタ!」

アंकから受け取ったメダルで、タトバからガタトラバにフォームチェンジ。クワガタヘッドの電撃で屑ヤミーを掃討した。

それから再度タトバコンボに戻り、メダジャリバーを構えてアクアとバースに加勢した。

「セイ！ハアアア!!」

「耀太先輩！元に戻れたんですね！」

「なんとかな。果南ちゃんに変身してもらって、ヤミーの力を解いてもらったんだ」

「……その理屈が通るのであれば、初めから変身してもらえば良かったんじゃないか!?」

「……あ」

オーズの力を完全に失念していたが故に起きた悲劇である。

……いや、俺が忘れてたとしても、アंकは何となく気付いてたんじゃないか!? 実際、提案してきたのはアंकだし。

「つと……細かいことは後でだな」

「そうした方が良さそうですね」

炎と氷柱を飛びしてくるヤミーたち。俺たちはそれを躲しながら、距離を詰める。

俺たちはそれぞれの間合いから反撃を開始する。

俺はオウムヤミー、アクアはアंकキロサウルスヤミーと戦うことで二体のヤミーを分断し、バースはバースバスターでの援護射撃にまわる。

いつもなら相性の問題で不利に立たされてしまう。けど、今は仲間たちが隣にいる。

そして何より——後ろには果南ちゃんがいるんだ！

負けられるわけがない！

「クレーンアーム」

バースは、追い詰めた二体のヤミーをクレーンアームで拘束する。

「今だ、二人とも！」

「はい！いききますよ、耀太さん！」

「ああ！これで決める！」

アクアとともに跳び上がり、ヤミー目掛けてダブルライダーキックを放った。

ヤミーは爆発し、セルメダルに還元された。

こうして事件は幕を閉じたのだった。

果南先輩と耀太先輩の入れ替わり事件が収まり、いつもの平穏が戻って来た……かのように思えたが、世間は年末年始だと大忙しだ。

そんな中、本来は忙しいはずが、一日だけ休みをとることが出来た耀太先輩から、俺と佐藤ちゃんの二人が呼び出された。

『二人に相談したいことがある。もし暇なら来てくださいお願いします——〱〱〱』というメッセージが来たのだ。

「どうしたんでしょね、耀太さん……」

「ポセイドン関連なら、女神さまも来るだろうしなあ。まあ、そこまでシリアスな話にはならないだろう」

と、夕力をくくつていた俺とガチで先輩を心配する佐藤ちゃん。

ただ待つのも暇なので、俺たちはそれぞれお菓子と飲み物を買って、それを食べていると、耀太先輩がやって来た。

「二人とも来てくれてありがとな」

「いえいえ！先輩の頼みとあらば、たとえ火の中海の中！地獄にだって行きますよー」

いつものように大袈裟なりアクションを取り、呆れる佐藤ちゃんを横目に、これまたいつものようにツッコまれ……

「本当にありがとな……」

ない!?

どういうことだ……。

いつもなら「いや、それは流石にキモいわ」とか「マジかお前……それは引くわ」ぐらいの言われようなのにな！

「耀太さん……？何かあったんですか？」

佐藤ちゃんも驚きを隠せてはいなかったが、すぐにそれを引つ込め、先輩に尋ねた。

「ああ……実は——」

「神妙な表情で始まった話は……まあ、俗に言う『恋愛相談』というやつだった。話を整理するところだ。」

「先輩とはある人——まあ果南先輩だろう——が好きらしい。が、それとは異なる人——話を聞く限り恐らく花丸——からの告白が未遂で終わっているらしい。」

「なるほど……で、先輩はどうしたいんですか？」

「俺は……その……」

「言っておきますけど、『選べない』とか『振るのは可哀想だから』とかは無いですよ。それを言い出すくらいなら恋愛なんてしない方がいいです」

「ちよ、宮沢さん?!」

「俺のキツイ言い方に佐藤ちゃんが止めようとするが、先輩は。」

「いいんだ、晴也。慎司の言う通りだからな」

「先輩は反論せずに、俺の言葉を肯定してきた。」

「ということは、ハーレムラノベ主人公のような甘ったれたことを言われる心配はないだろう。」

「で、いつ告白するんですか？」

「相手側の事情のことも考えると、もうちよつと後の方が良いのかなって思ったんだけ

ど……」

「そうやっているうちに別の人とくつついちゃったら……って思ってるんですね？」

「なるほど、普通なら十分ありえる展開ですね」

その相手が、片想いもしていない完全フリーな女の子なら。

「それなんだよなあ……。どのタイミングですべきか……。下手に今告白すると、死亡フラグになりかねないからな……」

「先輩、どんな心配してるんですか。まあ、戦いに身を置く立場としては間違っではないなような……。いや、気にしてる時点で既に立ちまくりなのは……？」

「宮沢さん、善子さんが感染うつってますよ」

とはいえ、先輩はオーズ。欲望の王にしてこの世界では女神さま公認の主人公と言っても過言ではない。

フラグの十本や二十本は簡単に折ってくれるだろう（フラグ）。

「んーでもよくよく考えたら、先輩が危惧してるような展開は無いんじゃないでしょうか？」

「どうしてそう言えるんだ？」

「いやあ……だって、ねえ？」

俺は佐藤ちゃんにも同意を求めぬ。

「流石に佐藤ちゃんでもこれは分かって……」

「そうですよ、宮沢さん！」

「なかつたああああ!!!」

「マジか二人とも……あんなに分かりやすいアプローチに気付かないなんて……」

「はあ……恋愛関係で一番頭を悩ませるのって俺で決定なんですね……」

「何を言ってるんだ？」

「俺は鈍感系主人公たちを尻目に、深く、深くため息をついたのだった。」

年明けと流れ星と告白

星が輝く夜空の下。

鞠莉はその手に星座の早見表を持ち、バルコニーから空を眺めて、幼き日のことを思い出していた。

ダイヤ、果南とともに家を抜け出し、流れ星を見つけに行った。

ずっと三人でいられるように願う為に。

使用人たちの呼ぶ声が聞こえる。

しかし彼女は止まらない。

天気は曇り。

はつきり言つて星を見るのは難しいだろう。

それでも星を見つける為に、高く、高く、もっと高い場所を目指して。

一番高い場所についたところで振り出した雨。

お願いをするのは絶望的に思えた。

けれど、親友の手で書かれた流れ星は、そんな不安を掻き消した。

そしてあの日の祈りは――。

「鞠莉？ちよつといい……かなと思つたけど、取り込み中みたいだね」

鞠莉を探し、部屋までやって来たカザリ。

彼女の名前を呼ぶも、肝心の本人は気付いていない。

彼の角度からだど、彼女がどんな表情で、何を思っているのか、全く分からない。だが今はそつとしておこうと、カザリは部屋を出ていくのだった。

日が変わり、そして年が変わつた今日。

去年という激動の年を、俺は振り返っていた。

突然女神さまに召喚され、メダルを集めて来いと言われて降り立つたこの世界。

たくさんの友人に恵まれ、頼もしい仲間が出来、敵だったグリードたちとも和解した。そして今年――。

『先輩！先輩！』

仲間の一人である慎司から入った一本の電話が……。

『晴れ着の善子がヤバイです！破壊力抜群です！某世界の破壊者にも、火星を滅ぼした破壊者にも負けないくらい！』

超ウゼエ……。

『ちよつと先輩聞いてますか?!』

「あーうん、ごめん。グリッド化の所為で聞こえないわー」

『あーごまかした！知ってますよ、ちゃんと聞こえてるの!!』

「うるさいぞ、宮沢！」

スマホはスピーカーカーモードにしてある為、タブレットをいじっているアंकがキレる。

「あ」

そのままアंकが通話終了のボタンを押して、慎司の声はこの部屋から抹消された。

「お前容赦ないな」

「知らん。うるさいアイツが悪い」

それは擁護出来ないな。

うるさかったのは確かだし。

「千歌ちゃん、耀太くん、アंकさーん！」

外から俺たちを呼ぶ声が聞こえる。

「二人とも来たみたいだね」

「ああ、そうだな」

「あれ？なんだよ、お前も来いよ」

「年明けから面倒なことに首は突っ込みたくない」

「そんなこというなって。ほら、行くぞ！」

腕を掴んで立たせ、玄関へ。

「面倒くさい」と言いながら、満更でもなさそうなアंक。

メズールとガメルも引つ張り出して、四人でみんなと合流した。

ちなみにウヴァは、高海家のみなさんと談笑していた。

「あけましておめでどう、二人とも」

「耀太くんたちもおめでどう！」

交わされる新年最初の挨拶。

千歌ちゃん同様、二人とも晴れ着だ。

「へえ、綺麗な服を着るのね、人間って」

「まあお正月だしね。……でもさ、今日って普通に練習あるよね？まさかその格好で行

く気じゃ……ってもういないし！」

「アイツらならもう行ったぞ」

「まじかよ！本当に晴れ着着て行ったのか！」

もはや凶行に類するぞ！

晴れ着で練習に行くって……ム☒sよりぶっ飛んでるぞ!?

「はあ……仕方ない。追いかけるぞ」

そして学校についた俺たちは、衝撃的な光景を目にした。

「……なんでみんな晴れ着^そ着^れてるんだよおおお!!」

「なんでって、そりゃあ新年だし……」

「いや確かにそうだけでも!」

もうどつからツッコんでいいか分からない……。

よりにもよってみんな晴れ着……。

晴也や慎司までなんて聞いてないよ……。

ダイヤちゃん、ルビイちゃん姉妹も到着。格好?晴れ着に決まってるじゃん(諦め)。

そして二人と一緒にやってきたのは……。

「聖良さんに理亞ちゃん……ありがとう……」

「ど、どういたしまして?」

ちゃんとした服(晴れ着がちゃんとしてないわけではないぞ)で来てくれた二人に心から感謝。

聖良さんは苦笑しながら、しかし二人とも俺の心中を察してくれたようだ。

「お正月から大変そうですね……」

「いえいえ、普段に比べたらこれくらい……」

火花散らして戦うことに比べれば……はあ。

「ははは……。でも、良い学校ですね。わたしたちの学校と同じで、丘の上に建ってるんですね」

「でも、無くなっちゃうんだよね」

「函館で梨子ちゃんたちが言ったように、聖良さんも浦の星のことをそう言ってくれた。」

「が、曜ちゃんの返した言葉に二人は、小さく驚きの声をあげる。

「今年の春で統廃合になるんです」

「だから……は三月でジ・エンド」

「さらに追い打ちをかけるかのように晴也と鞠莉ちゃんがその事実を告げる。

「何で？ ラブライブで優勝して、入学希望者を集めるんじゃない……」

「理亜ちゃんの問いに、千歌ちゃんは首を横に振る。

「それは果たされなかった夢なのだ。」

「でもね、学校みんなが言ってくれたんだ！ 『ラブライブで優勝して、この学校の名前を残してきてほしい』 って！」

「二人に打ち明ける千歌ちゃんの表情は、みんなの表情は清々しい笑顔。

「最高の仲間じゃないですか！ 素敵です！」

「それに応えてくれた聖良さんたちも、また笑顔に。」

「じゃあ遠慮しないよ！ラブライブで優勝する為に、妥協しないで徹底的に鍛えてあげる！」

「マジずら……？」

「マジずらー！」

「マジですか……」

うんうん……もつと言つてやってください。

と、そんな冗談はさておき、Saint Snowの二人による、猛特訓が幕を開けた。

みんなの訛った体をたたき起こす為、校門まで坂道ダツシユ+校舎を三周とかいう地獄のメニューに耐え、誰一人として欠けることなく休憩に。

「すげえ……A q o u r sはほぼ全員ダウンしてるのに、聖良さんたちは疲れすらも見えない……」

「こんな調子で決勝なんて……本当に大丈夫なのかな……」

「いけると思いますよ。ステージって、不思議とメンバーの気持ちがお客さんに伝わると思うんです。今のみなさんの気持ちが無言に伝われば、きつと素晴らしいステージになると思います！」

弱音は吐く梨子ちゃんだったが、聖良さんはそれを否定する。

それと同時に疲れ切っていたみんなの顔も元氣を取り戻した。

「ライバルから直々のお墨付きなんて！これは勝利の法則は決まったも同然！」

「お前が余計なことを言わなければな」

「は？おいアंक、それはどういうことだ？」

アंकと慎司の言い争いいっもが始まり、笑い声が生まれる。

「あれ？そう言えば鞠莉ちゃんの姿が見えないけど」

「何か？両親からお電話だったみたいですが」

両親から電話？一体何なのだろうか。

善子ちゃんが、勝手なキヤラ付けとともに「統廃合がなくなるんじゃない!?」と推測したが、まあそれは無いだろうな……。

ほんの少しだけ、また悪い話なんじゃ……と心配になったが、それは杞憂だった。

「理事?」

「オフコース。統合先の学校の理事に就任して欲しいって。ほら、浦の星からの生徒もたくさんいるし、わたしがいた方がみんな安心するだろうからって」

なるほど、鞠莉ちゃんを理事になんて考えたもんだな。

「理事って?」

「鞠莉ちゃんは浦の星の理事長さんでもあるの!」

「ええっ!？」

ルビイちゃんの一言で驚く理亞ちゃん。

うん、そうだよね。そりゃ驚くよね。

生徒が理事長なんて普通じゃあり得ないからね。

「じゃあ鞠莉ちゃんも春から学校に!？ A q o u r s も続けられる!？」

「いや、それ留年したみたいだし」

はっはっは……シヤレになってねえ。

「大丈夫、断ったから」

「……………え？」

「理事にはならないよ。わたしね、この学校を卒業したら、パパが薦めるイタリアの学校に留学するの」

「てことは、鞠莉ちゃんが日本にいるのは後三ヶ月ってこと？」

「ザッツライ！」

俺たちを襲った衝撃の告白。

あまりに突然のことに、しばらく口が塞がることはなかった。

陽が落ち始め、景色が赤く染まり始めた。

俺たちは聖良さんと理亞ちゃんを見送りに駅までやって来た。

「それでは」

「もうちよつとゆつくりしてればいいのに」

「ちよつと他にもよる予定があるので」

それを尋ねると、聖良さんでも理亞ちゃんでもなく、ルビィちゃんが二人の予定を教えてくださいました。

二人で遊園地に行くらしい。

プライベートな情報を教えてもらえるくらい二人が仲良くなっていたことを微笑ましく見守りつつ、俺は理亞ちゃんから折りたたまれた紙を受け取った。

「これは……練習メニュー？」

「うわー！こんなに……」

「ライブで優勝するんでしょ？そのくらいやらなきゃ」

Aquorsが優勝するために……。

みんなの為に二人がここまでしてくれた嬉しさのあまり、涙腺が緩みかける。

「ただの思い出作りじゃないはずですよ」

「必ず優勝して、信じてる」

「うん！」

そして、まさに背中を押してくれるかのようなエール。それに耐えられず、遂に熱い雫が零れた。

「ガンバルビー！」

「……何それ」

直後のルビィちゃんと理亜ちゃんたちのやり取りで、みんなにそれがバレることはなかった。

「キミって意外と涙脆いんだね」

「仕方ないだろ」

「ふん」

「鼻で笑うな、鼻で」

ただ二人、アंकとカザリを除いて。

千歌ちゃんたちとの帰り道。

どうやら思うことは（一人を除いて）一緒だったらしく、切り出された話は鞠莉ちゃんのことだった。

「イタリアかあ……」

「果南ちゃんとダイヤちゃんの反応を見ると、二人も聞いてなかったみたいだね。俺も

初耳だったけど」

「いつかはこうなるんじゃないかって思ってたけど……」

「実際に本当になるとね……」

受け入れ難い……というより、実感が湧かないという感じだ。

「後三ヶ月も無いんだよね……」

「ラブライブが終わったら、すぐ卒業式で」

「鞠莉ちゃんだけじゃないわ。ダイヤちゃんも果南ちゃんも……それに耀太くんも」

「春になったら、もうみんなと一緒に学校から帰ったり、バス停でバイバイしたりも無くなって……制服も教室も……」

……仕方のないことだ。

それは、例え浦の星が廃校にならなくとも、いずれ訪れる別れ。

ずっと子供でいるわけじゃない。

それぞれが自分の道を歩まなければならないんだ。

「Aqoursはどうなるの？」

「三年生が卒業したら……」

「分かんない。本当に考えてない……」

夕日が沈みつつある水平線を見つめて、千歌ちゃんは言う。

「なんかね、ラブライブが終わるまでは……決勝で結果が出るまでは、そこから先のことは考えちゃいけない気がするんだ」

「みんなの為……?」

「全身全霊! 全ての想いを懸けて、ラブライブ決勝に出て優勝して、ずっと探していた輝きを見つけて……それが、学校のみんなと、卒業する鞠莉ちゃん、果南ちゃん、ダイヤちゃん、それから耀太くんに対する礼儀だと思う」

最後は俺の方を見た千歌ちゃん。

一片の迷いも、後悔も感じられない瞳。

「賛成!」

「大賛成!」

浜辺で抱きしめ合う三人。

「——本当に成長したな」

そして意外にも、アंकが俺の想いと同じことを口にした。

「そうだな。三人とも、本当に強くなった——」

おれたち三年生がいなくても、彼女たちはもう大丈夫——。

今日は一段と疲れたので、早めに寝ようとしていると、果南ちゃんたちがやって来た。

何かあったのだろうか、と少し心配になったが、どうやらそんな心配はいらなかったようだ。

“そんな心配”は。

「あれ？また鞠莉ちゃんの姿が見えないんだけど……」

「んー、そろそろ来ると思うんだけど……」

と、彼女のことを尋ねているとエンジンの音が聞こえてきた。

なんだ、車で来たのか。と思ったもの束の間、やって来たのはマイクロバス。

「ねえ、まさかアレじゃないよね？」

「ん？あれだけど？」

鞠莉ちゃんの所在を聞いた俺に対し、あのバスを指して答える果南ちゃん。

どうしよう……カーナーリ、嫌な予感しかしない。

旅館の前でマイクロバスは停車し、運転席から……。

「チャオ♪」

鞠莉ちゃんが顔を出した。

……マジで？

「鞠莉さんって車の免許持ってたんですか……」

「春からは一人暮らしだし、誕生日に取ったのよ」

「な、なるほど……」

すげえ、あの晴也が今までで一番不安そうな顔してる……。

「そ、そういえばカザリのやつもいないみたいだけど……」

「カザリはお腹の調子が悪いみたい。部屋で寝てるわ」

「へ、へえ……」

あの野郎……逃げやがったな。

うわ……アंकもすげえ嫌そうな顔してる……。

「ていうかさ、アंकも合わせると、俺ら十三人……鞠莉先輩、先輩の免許って普通免許ですよ？」

「ノープロブレム！バレなきや犯罪じゃないんだよ！」

いやいや！ヤバいから！

道交法違反ンンン！

「よーし……俺はライドベンダーで……」

そう言いながら逃げようとしている慎司の首をアंकが掴む。

「おい、何逃げようとしてんだ」

「に、逃げようなんてしてないさ！せ、先輩とお前までちゃんと乗れるよう、俺はバイクに乗ってだな……」

「ヨータ」

「あいよ」

俺はウナギカンドロイドを数個起動させ、慎司を拘束した。

「ちよー！先輩！」

「ほら、よく言うだろ？旅は道連れって」

「うわあああああああ!!!」

一人絶叫する慎司を一番奥の席に押し込むアंकと俺。

「それじゃ善子ちゃん、コイツ慎司は任せた」

そして俺、アंक、晴也はライドベンダーを起動させてエンジンをかけて待機。

バスが発車するのを待ったが、案の定、心臓に悪いスタートをしたのだった……。

到着したのは西伊豆スカイライン、土肥駐車場。

空は雲で覆われ、雨が降り続けている。

俺はバイクから降り、運転席まで歩いて近づく。

「で、ここまで何をしに来たの？」

「星にお祈りしておくの」

「お祈り？」

「うん。わたしたちはみんな離れ離れになる。だから、また一緒になれますようにって。」

「……でも無理なのかな……」

悲しげな顔を空に向ける鞠莉ちゃん。

「……無理なんて言わないで」

「え？」

「そんなに素敵なお願いなんだ。諦めさせなんてしないよ」

バスから離れ、俺は空を見上げる。

「プテラー！トリケラー！ティラーノ！プットツティラーノザウルース!!」

変身と同時にメダガブリューを生成、更にエクスターナルフィンを展開して飛び立つ。

「耀太!？」

俺の名前を呼ぶ声が聞こえたが、振り向かず雲に突っ込んだ。

みんなとこうしてられる時間ももうほとんど残ってない。

なら俺は、みんなが少しでも長く一緒に笑っていられるように……!

「ガブ！ガブ！ガブ！ガブ！ゴックン！プットツティラーノヒツサーツ!!」

「うおおおおおおお!!」

メダル四枚分のストレインドウムを放ち、高速回転。

周囲の雲を吹き飛ばす。

「ぐ……………この辺が限界か……………」

今引き出せる限界までの力、光線の反動の影響が身体に出始めた。

「せ……………せめて人のいない所に……………」

変身が解け、地面まで一気に急降下。

ははは……………こりやあまた怒られるかな……………。

「全く……………無茶しますね、先輩も」

体が地面に叩き付けられることは無く、代わりに慎司の声が聞こえた。

「っ！先輩、その腕……………」

感覚が無くなった左腕。

力の使い過ぎで遂に表面に現れるまでに進行してしまつたらしい。

「悪いな、助けてもらつちまつて……………」

「全く……………全然道連れじゃないうえに、こんな無茶を……………。先輩、果南先輩たちのお説教からは逃げられませんからね」

「ああ……………」

慎司に抱えられて地上に戻る頃には、腕は元の状態に戻っていた。

いつかは話さなくてはならない。

けど今は、この幸せなひと時を過ごしていたいと、みんなのお説教を聞きながら思う

の
だ
っ
た。
。

メズールと人生ゲームと伝える想い

とある日のこと。

「ねえ、ちよつといいかしら？」

バイトも休み、部活もない。

部屋でゲームをして暇をつぶしていた俺をメズールが尋ねてきた。

「うん？どうしたの？」

「あのね、『友達と一緒に遊ぶ』ってことをしてみたいの」

彼女が言ったことにながりの違和感と驚きを覚え、一瞬だけフリーズする。

だがよくよく考えてみると、メズールがそう言うのも不思議ではないのかもしれない。

俺たち人間は、それを日常的な行為の一つとして認識しているが、グリードの彼女からしたら、未知のことなのだろう。

「そうか……友達と一緒にか……」

「出来ないかしら？」

グリード 彼女たちの願いは出来るだけ叶えてあげたいし、それを無下にするわけにはいかな

い。

「よし、千歌ちゃんに相談してみるから、ちよつと待つてて」

「ありがとう、助かるわ」

千歌ちゃんのことを話すと、彼女は快く了承してくれて、さらに集まれる人がいないか、連絡をすることに。

そして数十分後……。

「お邪魔しまーす！」

来てくれたみんなの声が聞こえてきた。

「お、来た来た」

「千歌ちゃん、みんなが来たわよー」

「はーいー！」

志満さんもそれを知らせてくれて、千歌ちゃんがみんなを迎え行つた。

千歌ちゃんに連れられてやって来たのは、曜ちゃん、ルビイちゃん、花丸ちゃん、果南ちゃん、晴也、カザリの五人。

加えて、先に来ていた梨子ちゃんがいるので、集まってくれたのは六人だ。

「珍しいな、カザリが一人で来るなんて」

「丁度暇だったしね。何か面白そうだったから来たんだよ」

ダイヤちゃんと鞠莉ちゃんは、溜まってしまった仕事に追われたく、善子ちゃんと慎司に関しては何も情報が無い。

……あの二人のことだ。二人で出掛けてるんだらうな、多分。

「ま、今日はみんなで楽しく遊ぼうか！」

「うーん、でも何して遊ぶの？」

「そうだなあ……」

呼んだは良いが、それは考えてなかったな……。

「メズールちゃんは何かやりたいこととかある？」

「そうね……『人生ゲーム』をやってみたいわ」

「人生ゲームか、人数は少し多いけどちよつとルールに手を加えてやってみようか」

こうしてスタートして人生ゲーム。

みんなが着々と就職し、お金を稼ぐようになる社会人パートから一気に盛り上がりを見せた。

『『考案した新商品が大ヒット！臨時収入五万円！』』

「晴也くんすごい！さつきからずつとお金貰い続けて、二位との差がかなり広がってるよー！」

一位は晴也。大きな差をつけられているが、二位に梨子ちゃん、次いで曜ちゃん。四

位が俺で、同列六位のカザリとメズール。僅差で千歌ちゃんを上回るルビィちゃんと、残念ながら最下位にいる花丸ちゃんと果南ちゃんだ。

「いいなあ……貧乏ってわけじゃないけど、わたしたちは最下位だから、羨ましいよ」「マルたちに少し分けて欲しいすら……」

がつくりと肩を落とす二人。

うーん……ゲームでそこまで落ち込むなんて予想外だな。

「ま、まあこの人生ゲームはプレイヤー同士で結婚出来て、その財産も共有になるし……」

「よし！頑張ろう!!」

「お、おう……頑張れ……」

俺がそう言うと、二人の瞳に炎が宿る……。

いやそこまで本気になるの!?

「人間って不思議よね」

「メズールちゃん?いきなりどうしたの?」

「結婚って、愛し合う二人が結ばれることを言うのでしょう?そんなに特別なことをこんなゲームにまで取り入れるのは不思議だなと思って」

彼女の欲望は「愛情」。

それ故にメズールは人一倍そう思うのだろうか。

「確かに俺もそう思う。人間って妙なところに現実味を求めて……」

彼女の疑問に共感の意を示しつつ、ルーレットを回す。

「ただのゲームだけど、やっぱり人間だからそういうのに憧れちゃうんだよ。作ってる人にそういう意図があるかは分からないけどね」

「あ……」

コマを進めて止まったマスは……丁度話題に上がった結婚マス。

結婚の相手はルーレットで決める為、俺はもう一度回す。

1が出れば千歌ちゃん、2なら梨子ちゃん、3は曜ちゃん、4でルビィちゃん、5で花丸ちゃん、6で果南ちゃん、7になればメズールだ。

順位が大きく変わるのでみんなルーレットに注目する。

……若干二名、他のみんなより食い気味になっているが、ここは気にしないでおこう。回転力が弱まっていくルーレット。

それが指し示すのは……3だった。

「やったーよーっし！二人で追い上げよう、耀太くん！」

「よろしく。超キョウリヨクプレーで一位になるうー！」

四位の俺と三位の曜ちゃんの財産が合わさり、一気に晴也に肉薄。

が……。

その後、晴也も結婚マスに止まり、結果は梨子ちゃんとの結婚。

再び一位との差が広がり、最終結果は梨子ちゃん晴也ペアが一位で終わった。

「あ〜……惜しかったね〜」

「まさか晴也まで結婚マスに止まるとは……しかも相手が梨子ちゃんって……」

「勝たせる気ないよね……」

「これにはカザリもお手上げのようだ。

「ははは……なんかごめんね」

「こういうゲームは運要素も強いしね。仕方ないよ」

最後まで何が起こるか分からない……。

うーむ……ボードゲームも侮れませんかあ。

「ねえ耀太」

ボードゲームの感動の余韻に浸っていると、メズールが俺を呼んだ。

「何？」

「さつき人間だから憧れるって言ったけど、耀太もそうなの？」

「はい？」

「耀太も結婚に憧れてたり、結婚したいと思う人がいるの？」

そう来ますか……。

「ボクもそれは気になったね。まあそういう人がいる人じゃないと、ああいうことは言えない気はするしね」

カザリまで乗ってきやがったよ、こん畜生が……。

しかも丁寧な理由まで添えつけて……。

「それわたし（マル）も気になる（ずら）!!」

果南ちゃんと花丸ちゃんまで……。

「いい、いないことはないけど……」

「やつぱりいるんだ!?!」

「ちよー！二人とも近い！近いから!!」

二人の顔が超至近距離まで近づいて来る。

美少女二人から迫られている……というより、もつと別な意味で心臓への負荷が凄い……。

「落ち着いて二人とも！耀太くんがオーバーヒートしちゃってるよー!」

「(ぎょ、ごめん……)」

千歌ちゃんの一喝で二人とも俺から離れる。

彼女の顔を間近で見えてしまい、まだ動悸が収まらない……。

「ちよ、ちよつと飲み物買ってくるよ……みんなは何か欲しい物無い？」

ひとまず自分を落ち着かせる為にこの場から離れようと、買い出しを志願する。

みんなの注文を一通り聞き、部屋を出ようとすると、

「ま、待つて！マルも一緒に行くずら！」

「花丸ちゃん？」

「えつと、その……一人だと荷物を持つのは大変だと思うから……」

「ありがとう、花丸ちゃん」

「じゃ、じゃあわたしも……」

「果南ちゃんもありがとう。でもバイクは二人までだし、俺たちだけで大丈夫だよ」

彼女の申し出も本当に嬉しい。

……けど一旦心を落ち着かせなければ、きつと変なことを口走ってしまうだろう。

残念そうにする果南ちゃんに見送られながら、俺たちは十千万を後にした。

「うっし、これで全部かな」

みんなに袋の中に入っているものを見て、頼まれたものを全て買えているか確かめる。

買い物をしている間に大分気持ちが落ち着いた。

バイクに荷物を積み込み、あとは十千万に戻るだけ。

「あ、あの……耀太くん……」

そう考えていると、花丸ちゃんが何か言いたそうに俺を止めた。

「どうかしたの？もしかしてまだ買いたい物があったとか……」

「ううん。ちよつと寄りたいところがあるんだ」

「いいよ。じゃあ後ろに乗って……」

「大丈夫。すぐ近くだから……」

「花丸ちゃん？」

無言で彼女は歩いていく。

俺はバイクを押しながら、その後が続いた。

ほんの五分ほど歩くと、目的の場所に着いたようで、花丸ちゃんは歩みを止めた。

そこで彼女が何をしようとしているのか、全て悟った。

ここは、俺の中に紫のコアメダルが飛び込んだできたあの場所。

すなわち、花丸ちゃんが何か「大切なこと」を俺に伝えようとしたあの場所だ。

「あの日……耀太くんに言えなかったこと、今言うね」

何も言わず、小さく首を縦に振る。

花丸ちゃんは、一度目を閉じて深く息を吸い、言葉を紡ぎ始めた。

「本屋で会った時のこと、覚えてる？」

「うん、覚えてるよ。あの時は怒鳴っちゃったから、嫌われたかと思つたよ」

「マルたちを逃がしてくれたのに、嫌うはずないよ。あの時からね、耀太くんを見ると凄くドキドキするようになって、顔が凄く熱くなって……。慎司くんたちに言われて分かつたんだ。これは「恋」なんだって——」

そう語る彼女は頬を赤く染める。

「マルは……オラは耀太くんのが好きです……！」

そして俺にその想いを打ち明けた。

……覚悟を決めなければ。

少し前に慎司に言われたことを思い出す。

『遅かれ早かれ、先輩は決めなくちゃいけません。先輩は二人の女性ひとを幸せにすることは出来ませんから』

俺が今しようとしてることが、どんなに残酷なことなのかは分かつてる。

けどそれを言わないのは、彼女の為にはならない。

だから俺は……。

「ごめんなさい。俺は花丸ちゃんの気持ちに応えてあげることが出来ません」

頭を下げ、それ以上言葉にはしない。

……少しの間、周りの人たちの声や車の音のみが耳に届く。

「知ってたずら」

「え……」

「知ってた」。その言葉に俺は驚きの声を漏らす。

「オラはずつと耀太くんを見てたから……。耀太くんはいつもたつた一人を——果南ちゃんを目で追ってた。だからこの気持ちが届くことは無いんだって」

そう話す花丸ちゃん。

微笑んではいるものの、その瞳からは雫が零れようとしている。

「でもやっぱり……。分かっていても胸はとても痛くて……」

その笑みはやはり崩れ、花丸ちゃんは俺の方に寄って来た。

胸に倒れこんできた花丸ちゃんを抱き締めることは出来ない。

それをしてしまえば、彼女の心の傷をより深いものにしてしまう。

ただ花丸ちゃんが泣き止むまで、俺は立ち尽くすだけだった。

花丸ちゃんが落ち着いてから、俺たちは十千万に帰って来た。

「大丈夫、花丸ちゃん？」

流石にさつきまでの態度をとり続けるわけにはいかない……。というか、あれ以上は俺

の方も耐えられなくなる。

……慎司に聞かれたら、「まだまだ甘い」と言われそうだな。

「マルは大丈夫。……今度は耀太くんの番だよ。耀太くんの気持ち、果南ちゃんに伝えてあげて」

「……分かった」

答えを返すと、花丸ちゃんは笑顔で頷き、玄関から入って行った。

俺もその後ろから扉をくぐる。

「ただいまー」

「お帰りなさい」

迎えてくれたのは、志満さん。

「今日はお泊り会をするみたいだから、カザリくと晴也くんのことよろしくね」

「あ、はい、分かりました。……ええ？」

一瞬だけ反応に遅れた。

今志満さんは何て言った!?!お泊り会!?

俺は走って部屋に向かう。

ドアの前に立ち、それを開けると……いつの間にか、俺の知らない荷物が部屋に置かれていた。

「あ、耀太くんお帰りー」

「お帰りじゃないよ!? お泊り会ってどういうこと、千歌ちゃん!」

俺と花丸ちゃん抜きで話が進んでいたことに対し、千歌ちゃんにコメントを求めた。

「えつとお……メズールちゃんがお泊り会もしてみたいって言ったから……」

オー……マジですかメズールさん……。

「ダメだったかしら……?」

高海家の意向があるなら、俺は逆らうことは出来ない……。

「ダメではないんだけど……」

俺はメズールではなく、男二人に目を向ける。

「晴也はともかく、お前も泊まるのか」

「ボクが泊まると何か困ることも?」

「いや無いけど……ますます珍しいなと思ってさ」

「それ、前にバースにも言われたよ。ボクってそんなに鞠莉と一緒にいるイメージある

?」

「ある」

「即答だね……」

寧ろ即答できない人はここにはいないのでは?

ともあれ、みんな参加する気満々だったので、花丸ちゃんも一度家に戻り着替えを持ってきてから三度十千万みたびに戻って来た。

「今日は随分と客が多いんだな」

アイスの食べ歩きをしていたアंकが帰ってきて、俺に尋ねてきた。

多分みんなの靴を見たのだろう。

「お泊り会だつてさ。晴也とカザリもいるから」

「は？カザリもいんのか」

「今は別の空き部屋に荷物を置いて来てるけどな。ま、喧嘩だけはしないでくれよ？」

「どうだかなあ？」

「おいおい……」

曖昧な返事しかしないアंकに、俺は頭を垂れ、右手で支える。

その後、千歌ちゃんたちに誘われ、今度はアंकにも（強制的に）参加してもらい、王様ゲームが始まった。

……そして今現在、俺は箱アイスの入った袋を手に持ち、果南ちゃんとドラッグストアを出たところだ。

何故こうなったかは……説明しなくても分かると思う。

が、一応説明しておく、アंकの命令「アイス十日分買ってこい」が果南ちゃんに

当たってしまい、女の子一人で夜道を歩かせるわけにはいかないので俺も同伴した、という感じだ。

「はあ……アंकの奴、最近アイス食い過ぎなんだよなあ……」

「あははは……ごめんね、本当はわたしへの命令だったのに……」

「気にしないで。いつものことだから」

夜だからか、出歩いている人はほとんどおらず、車の通りも少ない。

けれど、これはある意味チャンスでもある。

今日花丸ちゃんに言われたこと。

果南ちゃんに俺の気持ちを伝える――。

尻込みしてしまいそうな弱い俺と勇気を振り絞ろうとする俺。

勝ったのは……。

「ちよつと寄り道するね」

花丸かのちゃんから勇氣を受け取った俺だった。

バイクのエンジンを掛けながら、俺はそう告げる。

「え?でもアイスが……」

後部座席にまたがりながら、アイスの心配をする果南ちゃん。

「ドライアイスもあるし、しばらくは大丈夫だよ」

「なら良いけど……どこに行くの？」

「すぐその浜辺まで、ね」

バイクを発進させてから五分程経った。

道路の脇にライドベンダーを停車させ、砂浜に降りる。

「……やっぱり綺麗だな」

「そうだね……」

昼間は透き通る青い海は、夜空の闇と星々と月の光たちを映し出す。

聞こえてくるのは波の音だけ。

そんな中、俺はちよつとした昔話を始めた。

「ねえ」

「何？」

「俺たちが出会ってから、もうすぐ一年だよね」

「あく、言われてみればそうだね。あの時はびっくりしたよ。千歌が知らない男の子を、しかも二人も連れて来たんだもん」

「ははは……そうだよね……」

苦笑いでそれに同意する。

あの時の果南ちゃんの驚いた表情は、今でもよく覚えている。

「けど、事情を話したらすぐ分かってくれて。この町でまた一人友達が増えて本当に嬉しかったし、何より心強かった。学校が始まってからも、右も左も分からない俺に色々教えてくれたり、みんなに紹介してくれたら……思い返したらお礼なんて一生かけても出来ないくらいじゃないかな？」

「大袈裟だなあ。内浦の仲間になったんだもん。この町を、この町の人たちを好きになつて欲しかっただけ」

「それからもたくさんあつたよね。千歌ちゃんたちがA q o u r sを立ち上げてからさ」

「うん……」

たくさんの苦難があつた。

けど、その度に俺たちは……みんなはそれを乗り越えて、打ち砕いて……前に進んで来た。

「わたし……ううん、わたしたちは耀太たちに凄く感謝してる。耀太たちがいなかったら、どうにもならないこともたくさんあつた。わたしが騙されて、利用されちゃった時なんてそう……耀太とアंकさんがいたから、今のわたしがいる。本当にありがとう――」

感謝が込められた満面の笑み。

その笑顔を見るだけで、俺は想ってしまう。

ああ……やっぱり俺は、この子のことが好きなんだと。

俺は一度果南ちゃんから視線を外し、空を見上げる。

深く息を吸って吐き、覚悟を決めた。

「さてと……みんな待ってるだろうし、帰ろうか」

果南ちゃんがバイクの方へ体の向きを変え、歩き出そうとする。

「待って！」

「?どうしたの?」

歩みを止め、振り向いた果南ちゃん。

「ここに来たのは、他に話したいことが……伝えたいことがあったからなんだ。ごめんね、俺がヘタレたばかりに時間を無駄にしちゃって……」

「全然気にしてないよ。それより伝えたいことって?」

疑問符を浮かべ、尋ねてくる果南ちゃん。

“それ”を伝えれば、きつと俺たちの関係はどこか変化してしまう。良い結果になるのか、それとも悪い方に転がってしまうのか。ただ伝えずに後悔するよりは……!

俺は至高をそこで放棄し、ただ彼女の顔を、瞳を見つめる。

「松浦果南さん。俺は——」

「松浦果南さん。俺は君のことが好きです」

向かい合った耀太に表情は真剣そのもの。

そしてその瞳も嘘をついている人のそれではない。

「え……」

突然過ぎて情報の伝達速度、脳の処理が遅れる。

耀太は言った、「わたしのことが好きだ」と。

ただそれだけなのに、その言葉を耳にした瞬間、鼓動が高鳴る。

二人きりという状況下で、近づけば音が聞こえてしまう程打っていた脈が跳ね上が

る。

「嘘じゃ……ないよね？」

「本当だよ。本当に君のことが……果南ちゃんのことを好きだ。もう自分じゃどうしようもないくらいに」

静かな……けど熱の籠った声で耀太はそう答え、「だから……」と続けた。

「ラブライブと俺たちの戦い、その両方が終わったら……結婚を前提に、俺とお付き合いしてください」

思わず両手で顔の下半分を覆ってしまう。

そして嬉しさがこみ上げてきて、涙になって溢れてくる。

「か、果南ちゃん!？」

「大丈夫……嬉しくて涙が出ただけだから……」

耀太は「え？」と声を漏らす。わたしが何を言っているのか、理解が追い付いてないのかも。

「わたしも——」

「果南ちゃ……おう!？」

少しだけ助走をつけて耀太にハグする。

勢いを付けすぎたのか、それとも不意のことだったからか、体を支えきれずに耀太は倒れた。

「耀太のこと、大好きだよ!」

「もう……危ないよ果南ちゃん。でも……ありがとう」

そう言つて耀太は、わたしの頭を優しく撫でてくれた。

さらに彼の告白は続く。

「あと、俺も海外に行こうと思ってるんだ」

「!?!それホント!?!」

「ホント。まあ、戦いが終わってからだから、いつになるかは分からないけどね」

「大丈夫、わたし待ってるから」

「遅くなり過ぎて、帰ってくる間際になっちゃうっていうのはないよう善処します」
「うむ、良きに計らえ」

数秒の間は波の音のみが聞こえ、すぐに二人揃って「ぷつ」と吹き出す音が響いた。
「あ、そう言えば告白の返事ちゃんとしてなかった」

「なんかほぼしてくれたようなものだったけどね」

「ちゃんと答えたいから、もう一回だけお願いして良い？」

「果南ちゃんがそう言うなら……」

耀太は一呼吸分間を空けて、

「果南ちゃん。全部が終わったら、俺と付き合ってください」

さっきのように、嬉しさが心の奥底からこみ上げてくる。

溢れてしまうのを懸命に抑えつつ、わたしは答えを彼に返した。

「はい。ふつつか者ですが、よろしくお願いします——」

そして……。

そして……。

「耀太先輩も果南先輩も大胆ですね〜」

「ホント、見てるこっちが恥ずかしくなってくるわね〜」

PCのモニタを見ながらにやけている慎司くんと鞠莉。憐れみを含んだように笑みを浮かべている梨子ちゃんたち。隣にはわたしと同じく顔を真っ赤にする耀太。

慎司くんたちが見ているモニタに映っているのは、一昨日の夜の出来事。わたしが耀太に告白された時の映像だ。

『本当だよ。本当に君のことが……果南ちゃんのことを好きだ。もう自分じゃどうしようもないくらいに。だから……ラブライブと俺たちの戦い、その両方が終わったら……結婚を前提に、俺とお付き合いしてください』

湯気が出てきそうなくらい顔が熱い……。

ルビイちゃんたちも頬を赤くする。

「おいコラ止めろ！でなきやコレを……」

「ちよちよちよ！分かりましたから止めてください！」

耀太がスマホに表示されている音声データを再生しようとする、慎司くんは慌てて画面を閉じた。

「それにしてもびっくりしましたよ。まさか誰もいないところでこんなことを……」

「し、仕方ないだろ……っていうか、何でお前はこんなところで見てるんだよ……。自分の部屋でも見れるだろ……」

「いやあ、昨日チェックしてたら見つけましてね。これはみなさんにも見てもらおうしかない（使命感）と思いまして……」

「よし決めた。今からお前を冷凍するから、何万年か後に化石として発見されろ」

「え？またまたあ、先輩にそんなこと出来るはずないじゃないですかあ……あれ？ちよ！待ってください！目がマジです！やめてください！やめて！さ、佐藤ちゃん助けてえええええ!!」

慎司くんはやがて、迫り来る異形に恐れるような表情になって逃げだし、耀太はそれを追って行った。

「はあ……自業自得ね」

その背中を見て、善子ちゃんが嘆息する。

その後、まつげと髪の毛の先が凍り付いた慎司くんが目撃されたという。

記憶とメダルの秘密とWアंक

時を遡り数週間前、耀太たちが再び函館を訪れていた頃、沼津の空に謎の飛行物体が現れた。

鳥のような翼に、赤い羽根。

「僕はどい……」

彼の記憶にあるのは、別れてしまったもう一人の自分と思しき姿。

彼は記憶に残るその姿と本能だけを頼りに探し続けた。

自身の片割れ、赤い右腕を。

「ふう……」

既に平らげた後のお昼ご飯を前にして一息。

久しぶりにこんななゆっくり出来たな。

と言っても今はバイトのお昼休みで、時間が来ればまた仕事が始まるのだが。

まあ、激動の日常や年末年始のラッシュに比べればどうってことはないな。

……日常に激動とかおかしいな。でも間違っではないんだよな、俺の場合。

「随分疲れてるみたいだな。午後からまた団体のお客様の予約が入ってるが、大丈夫か？」

俺の考えていることが分かっているかののように、的確に尋ねてくるウヴァ。

「問題ないよ。それにしても珍しいな、お前が休憩時間を合わせてくるなんて」

「それは……その、なんだ。お前に相談したいことがあってな……」

「相談？」

いや本当に珍しいな、ウヴァが俺に相談なんて。

仕事のこと……ではないだろう。

そのことに関しては、ウヴァは俺よりしつかりしてる節がある。

むしろ俺が相談に乗ってほしいくらいに。

では一体何なのだろうか。

「実は少し前から、志満さんを見ていると妙な感覚に襲われるんだ」

……ん？

「こう、胸が締め付けられるような感じがしてな。志満さんが笑った時は特に」

んんんんんんん!!

まさかの恋愛相談だった……。

いや、うん。全然良いんだよ？

段々と人間らしくなっていて、最終的には人間とほとんど変わらない存在になって欲しいと思ってる。

……でもね？これは俺の守備範囲外というか、俺が何とか出来る話ではないというか……。

「これが一体何なのか、どうすれば治るのか……頼む！教えてくれ、耀太！」

深く頭を下げているウヱア。

これは本気だ。

だが、恋愛どころか、つい最近までうだうだと告白するのを躊躇していた俺にどうこうできる問題ではない。

……よし、こうなったら……。

「そうだな、以前俺も丁度同じような悩みを抱えてたんだ。だからその手のプロに相談して、まあ……解決にはかなり近づいたかな？そう言うわけだから、ソイツに聞いてみよう」

「おお！そんな奴がいるのか！頼もしいな！」

恋愛相談のプロ……プロというか、一途な奴というか……。

けど、その手のことに関しては俺より詳しいはずだし、大丈夫だろう。

俺はおもむろにスマホを操作し、電話帳を開く。

そして『宮沢 慎司』の名前をタップする直前、画面が切り替わり、着信音が鳴る。相手は千歌ちゃん。

……なんだろう、嫌な予感しかないんだが。

「どうした、出ないのか？」

「あ、ああ……」

大きく息を吸って吐く。

腹を括って、彼女の呼び出しに応えることにした。

「もしもし、千歌ちゃん？ どうしたの？」

『もしもし!? 大変なの、耀太くん!』

大変という単語が聞こえ、彼女の—A q o u r s—のみんなに何か良くないことが起こったのでは? と一瞬焦る。

そしてその焦りは、次に千歌ちゃんもたらした情報により、困惑へと変わり果てた。

『アンクさんが子供になっちゃったの!』

「……ちよつと待って。なあウヴァ、アンクってさつきいたよな……?」

「ああ……そこでアイスを食べたと思うが……」

……ああ、やっぱり嫌な予感しかない。

「ウヴァ悪い。今の話はまた今度ってことで」

「それは構わないが……」

「本当にすまん！」

俺は志満さんに事情を話し、アंकとともに学院までバイクを走らせた。

学院に到着し、みんなと合流出来た俺たち。

結果から言うと、俺が感じていた嫌な予感は半分正解といったところだった。

まあひとまずは、俺たちが着いたシーンから始めよう。

俺たちが着た時、目に映ったのは昇降口の前で休憩をとるA q o u r sと慎司たち。そして、小学生ほどの背丈の少年だった。

「何でお前がここに……！」

怒号とともにアंकはそこにいた少年を睨んだ。

その声には、困惑や怒りといった感情が込められているようだった。

「分からない……君は……君はもしかして僕？」

「ふざけるな！お前なんかと一緒にするんじゃない！早く俺のコアを返せ!!」

少年——アंक（ロスト）（以降ロスト）に迫るアंक。

だがそれを千歌ちゃんは許さなかった。

「ダメだよ、アंकさん！こんな小さな子を……え？今なんて……？」

が、アंकとロストとの間に立つ千歌ちゃんが疑問符を浮かべる……というかアंकとロストを何度も見直す。

千歌ちゃんだけじゃない。他のみんなも、慎司と晴也、カザリ以外は「一体何なの？」と言いたげな表情カオをしている。

「アंक、ここは一度落ち着いてくれ。じやなきやみんなにおちおち説明も出来ない」「ちつ……」

苛立ち方がいつもより激しいアंकに、みんな動揺あるいは若干の恐怖を覚えてしまっているだろう。

慎司は垂れた頭を右手で支え、晴也もバツの悪そうな表情をする。

俺は一旦落ち着くようアंकに言い聞かせ、みんなの方へ向きを変える。

「それじゃあ説明するよ。アंकとその男の子の関係を」

俺は二人の奇妙な関係について、みんなに話した。

アंकというグリードと初代オーズ。

封印と逃れた右腕。

そして新たな意思が芽生えた体の話を。

もちろんこれは、女神さまたちの相反する意図のもと起きてしまったこと。それだけは伏せて彼女たちに伝えた。

「それでは『彼』とアंकさんは元々一人のグリードだったというわけですね」

「そういうこと。みんなには教えてなかったけど、もう何度か会ってはいたんだ」

「え？ そうなの？」

「アंकがただでさえ強力なグリードなのに、それがもう一人いてこの町を闊歩してる。ここ最近の色々あつたばかりなのに、それをみんなが知ったら、ラブライブへの練習に支障が出るかとも思ったんだ……。今にしてみれば、伝えてた方が良かったと思うよ。本当にごめんね」

「俺からも謝ります。本当にすいません……」

慎司、そして晴也も俺に続いて頭を下げた。

「三人ともちゃんと謝ってるんだし、今回は咎めないでにおいてあげようよ。それより……」

「カザリさん？」

「今は『あのアंक』のことが少し気になるかな」

カザリはロストに目を向けながら、そう話す。

「どういうこと、カザリくん？」

その言葉に疑問符を浮かべたみんなの代表のような形で、花丸ちゃんはカザリに尋ねた。

「ボクたちは人間のような器官を持ってない。人間で言う心臓、脳の役割を意思を宿したコアが担ってるから。だからね、有り得ないんだ。今の彼のような状態になるのは」
「……つまりどうということ？」

「オーズたちなら分かるよね？彼に起きている『異変』が何なのか」
それは人間になら、誰しもに起こり得る減少。

だけど、グリードにとつては本当にイレギュラーな出来事らしい。

「記憶喪失……か（ですか）？」

晴也と慎司が同時に答える。

そしてその答えは……。

「正解。人間たちは何かショックを受けたりすると、それを起こすって言うのはボクも知ってる。けどグリードはそうじゃない。もつとも今のボクたちはその限りじゃないと思うけど……。それでも彼は違うと思うんだ。まだ『例外』にはなっていないはず……」

例外……それは恐らく、グリードたちの中で何かが変わりつつあるということ。

そしてそのきっかけを与えたのは、Aqoursであることに間違いない。

Aqoursと関わりを一切持っていないロスト。

何一つ変わらないままの彼に何があったのか。

その答えもまた、すぐに見つかった。

「つまり、あのアंकが持つコアメダルに何かあった……って考えるのが妥当ってところか」

「うん。例えば……ボクたちも知らない力が作用してる……とかかな」

カザリたちですら知り得ない力……その言葉を聞き、俺はふと思いついた。

アंकが奪われたメダルは、コンドルのメダル。そしてそのメダルは、かつてポセイドンと戦った時に女神さまがクジャクくんとともに送ってきたものだ。

もしかしたらと思い、俺は女神さまへと念話を試みる。

『全く……なんじゃ、このクソ忙しい時に』

応答してくれた声はいつにも増して言葉使いが荒い。そんなに仕事が大変なんだろうか。

『大変じゃよ。なんせ時空に変な歪みを見つけたんでな。その調査に追われてるんじゃないよ』

そんな仕事まであるのか……神さまも大変なんだな……。

『そう思うなら、さっさと用件を言ってくれ！さもなければ着信拒否するぞ!』

「(いや念話って携帯でしてたのかよ!?!って今はどうでも良くて!)」

意外な事実には驚きの声をあげてしまうが、本題を忘れてはいけない。

「今、アンク（ロスト）がそこにいてな、どうも記憶を失ってるみたいなんだ。カザリが言うには、コアメダルに何か異常があったんじゃないかって話なんだけど……」

『ほう……なるほど。どうやらわらわの仕掛けたトラップに引っかかってくれたようじゃの』

「（トラップ……もしかしてあの時のコンドルメダルに何かしたのか？）」

『もしかしくなくてもその通りじゃ。あれには、アンク以外のグリードが取り込んだ時、そやつの記憶をほぼ消去する効力を持たせてある』

……想像以上にえげつないものだった。

アンク以外が取り込んだら記憶が無くなるって……それ俺も該当するんじゃないや……。

『心配ない。ぬしは一度ドライバーを介して変身に使っておる。その時に効力に対する抗体が注入されるようにしたんじゃない。あれを使うぬしが影響を受けては元も子もないからのお』

「（良かったあ……。あ、じゃあ今までアイツがアンクを直接狙って来なかったのは……）」

『本能的に恐れを感じていたんじゃないやろうな』

「（なるほどな……。でもこれからアイツはどうすればいいんだ？ 何だか倒せる雰囲気じゃないんだよなあ……）」

ロストと千歌ちゃんたちがワイワイと会話している。

『ふむ。ならカザリたちの時と同様に和解してみたらどうじゃ?』

「それはそれでこっちのアंकが面倒くさいんだよな……」

『ま、それはぬしらで決めることじゃな。そろそろ切るぞ。どうやら新しいものが見つかったようなんでな』

「(お、おう……お仕事頑張ってください)」

といったところで念話は終了。

……さて、どうするか……。

アंक的には倒してコアを手に入れたいんだろうけど、千歌ちゃんたちの前でそんな酷いこと出来る訳ない。

はあ……仕方ない。

「その子は倒さない。メダルは……後で考えよう」

「え、本当!？」

ばあつと表情が明るくなる千歌ちゃんと。

「あ? お前何言ってるんだ」

苛立ちがさらに濃くなるアंक。

「やったー!」と喜ぶ千歌ちゃんを微笑ましく思いながら、鬼のような形相をしたアंक

に睨まれる。

胃が痛い…………。

「ヨータ、お前正気か？ コイツはボセイあのふざけた野郎ドンの側側のグリードだ！ こうして記憶を失ったふりをして、メダルを狙ってるかもしれないぞ！」

「それにはボクも同意するよ。さつきはああ言っただけ、アंकの言う通り演技してるだけの可能性も捨てきれない」

激昂するアंकと静かにだがそれを肯定するカザリ。

女神さまのことを教えてもいいが、せめて本人に許可をもらってからにした方が良さ
だろう。

けど、あの様子だと今日はもう繋がらない。

「分かった…………それじゃあ今日はこうしよう…………」

「？」

俺は苦し紛れにある提案を出したのだった。

耀太さんの提案。それはアंकさんとロストを遠ざけることと、ロストに見張りをつ
けることだった。

俺と宮沢さんはその案に同意し、俺たちは十千万に。そして耀太さんたちは淡島ホテ

ルに泊まることになった……のだが……。

「ねえ見て、アंकくん！これがスクールアイドルって言うんだよ！」

千歌さん、ルビィさん、花丸さん、善子さんがロストを囲い、DVDを見ながら彼にスクールアイドルについて熱弁していた。どうしてこうなった……。

「あははー……これじゃあお泊まり会だね……」

「ですね……」

そう苦笑する曜さんと、これまた眉をハの字にして笑う宮沢さん。

本当は俺と宮沢さんだけが十千万に泊めてもらう予定だったのだが、耀太さんが淡島ホテルに泊まると決めるや否や、果南さんが「わたしも泊めてもらおうかな……」と始まり、珍しく梨子さんまでもがそれに続いた結果、見事に二グループに分かれたのである。

「でもこうやってみんなで過ごすのもいいかもしれませんね。もうそう長くはないんですから……」

「晴也くん、それは言わない約束だよ？」

「そうでした。すいません」

ラブライブが終われば、後は先輩達が卒業し、浦の星も終わってしまう。

今は考えてはいけない。

そう千歌さんとちと約束したんだ。

「はい、アンクくん、みかんだよー」

「みかん？」

「そう、みかん！美味しいよー」

ロストにみかんを手渡す千歌さん。

彼は皮が剥かれたみかんを一つ、口に放り込むが……。

「……分かんない」

「あ……」

ロストはグリード。味わうということが出来ないのだ。

「それじゃあこれならどう？」

メズールさんが、自身がしていたメガネをロストにかけてやる。すると。

「っ！美味しい……！」

味というものを知り、笑顔になったロスト。

物凄い勢いでみかんを食べていく。

「前々から思ってたんだけど、メズールちゃんやカザリくんが着けてたそれってなんなの？」

「そうね……わたしたちグリード専用の秘密道具かしら」

「秘密道具？」

「わたしもカザリから貰ったものだから、詳しいことはわからないけどね」

「そうなんだ」

初めは不思議そうな表情をしていたが、やがて彼の^{ロスト}の方に興味が移り、深く追求するこ
とは無かった。

「よっ。ぼどみかんを気に入ったみたいだな」

「そのようですね」

「気に入る？」

「みかんが好きってことだよ」

「みかんが好き……うん！僕、みかん好き！チカも！」

「なっ！アंकそれは……！」

「ほう……佐藤ちゃんや、『それは』何だって？」

「しまった……」

ロストの発言に過敏に反応してしまい、ボロを出してしまった俺。

そして宮沢さんがニヤニヤと笑みを浮かべ、耀太さんや果南さんをいじっていた時の
ような顔になる。

ああ……耀太さんは、一瞬で殴りたくなる衝動に駆られる仕打ちに耐えていたのか

……。

「ま、まあまあ慎司くん、からかうのは程々に。晴也くんも。それに、あの子の『好き』はLikeの方だと思うし、ね？」

「それは……え？」

「ごめんね」と小さく謝る曜さん。曰く、「果南ちゃんと千歌ちゃん以外は、みんな知ってると思うよ」だそうだ。

……嘘だと信じたかった。

けど彼女は嘘を言うような人ではない。

「曜さん……俺失踪してもいいですかね？」

「だ、大丈夫だよ、わたしたちからは何も言わないから」

「ありがとうございます……」

俺は曜さんにお礼を言い、その後も宮沢さんを殴りそうになるも、なんとか耐えるのだった。

ホテルのベランダから夜の海と空を眺める。

つい最近も見えた景色だが、やはりとても綺麗だ。

あの後、何度か女神さまとの交信を試したが、一度も繋がらなかった。

「やっぱ忙しいんだなあ……」

アंकとロスト。

昼間のアंकのあの態度を見る限り、相容れることはないだろう。それにロストも今は何とかなっているが、いつまた奴が現れて、何かしら介入してくるかも分からない。

二人のことを考えているだけなのに、頭がこんがらがってくる。

「ああ、もうどうすりゃいいんだ……」

「耀太くん、ちよつと良い？」

ノックとともに入室の許しを求めてきたのは梨子ちゃん。「どうぞ」と声をかけると、彼女はドアを開けて俺の隣まで歩いて来た。

「どうしたの、梨子ちゃん？」

「アंकさんのことが気になっちゃって……」

「あー……今は散歩でもしてるんじゃないかな、アイス食べながら」

「そうなんだ……」

さつきまでの俺と同じく、梨子ちゃんは海を眺める。そして海を眺めたまま、話を始めた。

「昼間見たアंकさんの顔、今まで見たことないくらい怖かった。けど、それ以上に何かを恐れているようにも見えたの」

「そうだね……。あの時、アンクとロスト……。小さい方のアンクの関係の話をしたでしよ？あれに実は続きがあるんだ」

「続き？」

「うん。二人に分かれてしまったアンクなんだけど、もう一度一人に戻ることが出来るんだ。ただし、その時にある問題が起こる。力の弱い方が消えるんだ」

「消える……!?!」

「だから梨子ちゃんが言った『恐れてる』って言うのは、その事だと思う。アンクは右腕だけでの復活で、コアメダルも三枚。対してロストは記憶が無いとはいえ、六枚のコアを持っていて、かつほぼ全身が復活出来る。つまり消えるのは……」

「アンクさんの方……。二人とも消えずに一人に戻ることは……」

「多分出来ない」

梨子ちゃんは絶句する。

消える……。つまり死ぬことのない彼らにとって、唯一の“死”を意味する。ロストの存在そのものが、アンクの“死”の象徴と言っても過言ではないことに、彼女も気付いてしまったのだ。

「ロストは敵であるうちに倒してしまった方が良かったんじゃないかと思う。こんなこと言うのは良くないし、千歌ちゃんの前じゃ絶対に言えないけど、こればかりは……」

打つ手無しのお手上げ状態。下がりに下がった声のトーンは、梨子ちゃんの表情をもより暗くしてしまう。

「そんなこと言うなんて、らしくないよ」

突然、背後からそう言われた。

二人揃って振り返ると、さつきまで誰もいなかったこの部屋に、果南ちゃん、ダイヤモンドちゃん、鞠莉ちゃんの三人が入って来ていた。

「三人とも……いつから聞いてたの？」

「そうですね、梨子さんが『アंकさんのことが気になっちゃって』と言っていたところからでしょうか？」

「それって全部ってことじゃないですか……」

これには流石に梨子ちゃんも苦笑する。

何しろあの辛気臭い話をすべて聞かれていたのだから。

「やっぱりわたくしたちに隠していることがあったんですね」
「ッやっぱり？」

「『耀太のことだから、わたしたちに心配をかけないようにまだ隠していることがあるかも』って果南が。ホント、よく見てただけあるわね」

「ちよ、鞠莉!？」

しかしそんな雰囲気もほとんど霧散していった。

「ありがとう、三人とも」

「え？」

「もう少し考えてみるよ。あの二人が和解出来るように」

俺の決意表明を聞くと、梨子ちゃん、ダイヤちゃん、取っ組み合っている果南ちゃんと鞠莉ちゃんもやがて笑顔になる。

そうだ……あの世界とは何もかも違う。ロストとも分かり合えるはずだ。

「だってよ、アंक」

「は、出来るもんならやってみろ」

信じてくれているみんなの為に、俺はやり遂げてみせる。

俺は心にそう誓うのだった。

「くつくつく……目を覚ましてみればこの様ですか。ですがこれは好都合。あなたのその知恵も利用させてもらいましよう、愚姉さま」

そう……奴がすぐそこまで迫っていたことに気付かないまま——。

アंकとみかんと託されたメダル

ロストが俺たちの前に現れてから一晩が過ぎた。

今日はもう少し二人に話し合ってもらおう、昨晚のうちにそう決め、俺は眠りについた。

そして今日、十千万に戻る為に連絡船に乗ったところで一本の電話が入った。

『ロストと千歌先輩が見当たらないんです!』

声の主は慎司。そしてその知らせは、最悪なものだった。

「分かった。今船に乗ったところだから、すぐにそつちに行く。それまでもうちよつと探してくれ」

『了解です』

そこで通話は終了。

俺はスマホを持った手を強く握りしめる。

「何かあったの?」

さつきとは打って変わった俺の様子を察知した梨子ちゃんが、俺に尋ねてくる。

「千歌ちゃんとロストが見つからないらしい……」

「っ!?!」

「まさかもう一人のアンクさんが千歌さんを?」

「やっぱりな。あの時倒しておくのが良かったんだ。それを情なんか流されやがって」

「仕方ないだろ!あの時は千歌ちゃんたちがいたんだ!目の前でそんなこと出来るわけないだろ!!」

「お前はいつも甘いんだよ!ポセイドンと戦った時も、その甘さが原因で死にかけたんだろが!」

「なんだと!?!」

激しい口論。そして胸ぐらを掴み合う。果南ちゃんもダイヤちゃんも、そして鞠莉ちゃんも。それを見て、みんな怯えた表情を浮かべる。

「もうやめてッ!!!」

ただ一人、梨子ちゃんを除いて。

彼女の平手が俺とアンクの頬を打ち、俺たちを……恐怖を感じる心をも止めた。

「耀太くんも!アンクさんも!二人が争って何になるの!?!何にも、どうにもならないよ!そんなことしても千歌ちゃんは見つかからない!ううん、見つけられないよ!」

目尻に涙を溜めながら絶叫する梨子ちゃん。その瞳には静かな怒りと悲しみが宿っ

ている。

「梨子の言う通りだよ。今キミたちが争うのは、ポセイドン^{ポァイ}だけしか得をしない。ボクたちには利が一切無いんだよ」

「……うん？カザリ、今お前なんて言った？」

「え？ボクたちには一切利が無いってところ？」

「違う！その前だ！」

「その前？ああ……そういうことか……」

この場で疑問符を浮かべる者はいない。

確証はない。けど可能性としては一番高い。

俺は持つてきていたノートPCをカンドロイドと接続し、十千万近辺の映像を映し出す。

三十分前、誰も映らない。一時間前……映らない。二時間前もダメ……。三時間前は……ビンゴ！

「きた！あれは……ロストか」

けれど、出てきたのはロスト一人。肝心の千歌ちゃんの姿が無い。

「もつと前の時間も見てみましょう」

ダイヤちゃんの言葉に頷き、俺はさらに時間を遡る。

巻き戻される映像。そして遂に……。

「つ！映った、千歌だ！」

千歌^探ちゃん^人の姿がそこにあつた。

けど何だ……。

「何か変だ……」

アンクと声が、言葉が、そして考えが重なる。

「上手く言えないんだけど……ここに映ってる千歌ちゃんはいつもと違う感じがする

……」

「寝ぼけてるとか？」

鞠莉ちゃんがそう言うが、アンクがそれを否定する。

「違うな。アイツが寝ぼけた時はもつと酷い」

「そうなの？」

「……否定は出来ない……じゃなくて！……何か……虚ろな感じが……!?!」

その瞬間、映像の中の千歌ちゃんに信じられない現象が起こった。

「消えた……!?!」

「いや、一瞬、ほんの一瞬だけ映像が乱れた。何か妨害電波みたいなものの干渉を受けたのかも」

「なるほど……この時か」

「ああ、あの時の違和感の正体はこれだったんだね」

何か心当たりがあるような反応を示すアंकとカザリ。

「何か知ってるのか？」

「今朝変な気配を感じたんだ。ボクたちに酷くそっくりな気配をね」

グリードに近い気配……そう言えば……！今朝、少しだけ妙なものを感じて目が覚めたな。すぐ寝ちやっただけど……。画面に表示された撮影時刻に目をやる。俺が起きた時間とほぼ同時刻だ。

「あ、そろそろ着くよ」

短い時間の中で得た情報は、千歌ちゃんとロストを見つけるうえでかなり重要な手掛かりになってくれるはず。そう信じて、俺たちは慎司たちが待つ十千万に向かった。

十千万に着いてからすぐに船で見た映像を慎司たちにも見せた。

もちろん女神さまにもビデオ通話で見てもらっている。

「これ……」

『この映像、改ざんされた痕があるわね』

「改ざん？」

『ええ。送ってもらった録画データを調べたのよ』

「いつの間に送ってたの?」

何も知らない果南ちゃんが俺にそう問う。

すいません、送ってません。

が、正直に言えるはずもなく。

「さ、さつきパソコンを閉じる前にめが……じゃなくて神子さんに送ったんだよ。そ、それより……!」

咄嗟に考えた嘘を吐き、再びみんなの視線を画面に集中させる。

「手が加えられた箇所って……でしょ?」

『ええ。ただ……』

「ただ?」

『科学では解析するのは不可能ね。魔法、もしくはそれに準ずる何かね』

「魔法だなんてそんな……もしそれが本当だしたら一体どうやって調べて……」

「無いとは言い切れないですね」

「言い切れないの!?!」

真顔で女神さまに同意した慎司に対し、驚嘆の声を漏らすみんな。

……いや、多分ツッコむところはそこじゃない。

『!………たつた今いい知らせと悪い知らせが入ったわ……』

突然女神さまの声色が変わる。このタイミングで言うということは、千歌ちゃんが関係していることは間違いないか。

「じゃあいい知らせから」

『千歌さんの居場所が分かったわ』

「!?どこなんだ!?教えてくれ!」

『今データを送ったわ。送り主不明の文書をね』

パソコンのメールを開き、送られてきたデータを確認する。

背景に三枚のメダルがデザインされた文書。そこには確かに千歌ちゃんの居場所が示されていた。しかし、同時に悪い知らせもそこに書かれていた。

『高海千歌さんは預かりました。返して欲しければ、下の地図に示された場所まで来てください。ただし、このメールが届いてから24時間以内に来なければ、彼女の命は保証しません』だって!」

『これが届いたのは今日の午前四時頃……さっきの映像と合致するわね』
「クソッ!ふざけやがって!」

久しぶりに心の底から怒りを感じた。果南ちゃん続いてみんなを狙い、今度は千歌ちゃんを。

「待って耀太!もしかして一人で行くつもり?」

「そんな無謀なことさせませんよ。俺と佐藤ちゃんも行きます！」

「ええ。奴を許せないのは俺も……いえ、俺たちも同じですから！」

俺たち三人とアンクは、みんなに十千万で待っているように言い、文書に記された場所まで向かうのだった。

「ん……ん、ど、ど？」

目を覚ました千歌がいたのは、自分の部屋ではない全く知らない場所。

ところどころ壊れていたり、クモの巣が張っていて人が住めるような環境ではない。

「なにこれ、腕が……」

手錠をかけられているうえに、柱に繋がれている為自由に動くことが出来ない。

「どうして？ わたし……自分の部屋にいたはずなのに……」

誰も答えてはくれない。答えてくれる誰かがいないのだから当然だ。けれど、

「それはあなたを操つてここまで来てもらったからですよ」

誰もいなかったはずのこの場所に、その男は現れた。

「おはようございます、高海千歌さん」

「あなたは誰!? どうしてこんなことをするの!？」

「慌てないでください。一度に聞かれても答えられませんから。ではまずはわたしが誰

なのか、教えてあげましょう。わたしはカムイ。あなたのお友達からは、ポセイドン“と呼ばれている者です”

「ツ!?!」

ポセイドン……それは耀太たちと敵対しているという男の呼び名。

「ふふふ……恐れ慄くその表情——いつ見てもいいものですね!」

冷たい狂気を宿した綺麗な瞳を前に、心の底から恐怖を感じた。

「ですが安心してください。あなたのことは殺しませんので」

男は一瞬だけ穏やかな笑顔を造り、

「彼らの……おと仮面ライダーの死に様を見届けてあげてください」

口角を吊り上げ、歪んだ笑みを浮かべた。

千歌の中で警鐘が鳴らされる。この男は危険だ、と。

今すぐにここから逃げ出したい。けれど、冷たい手錠と鎖がそれを許さない。

「チカから離れろ!」

けたけたという笑い声を遮る炎。

それは背中を焦がす程度にとどまるが、彼の注意は完全に炎を飛ばした人物に向いた。

「おや? 誰かと思えば、アंकくんではないですか。一体どうしたんですか? 君とわた

しは「仲間」ではありませんか」

「僕は君なんて知らない！早くチカを離せ!!」

ロストは彼の言葉を否定し、千歌を解放するよう要求する。

「それは出来ません。彼女は大切な人質ですから。どうしても言うのなら、力づくで助けてみなさい」

「タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ!!」

赤・黄・緑の戦士 神オーズに変身した男。その姿は耀太と瓜二つで、真逆の雰囲気
を纏っている。

「はああああ!!!」

ロストは炎を連続で撃ちながら神オーズに接近する。

一方で、攻撃を受けているはずの神オーズはそれをものともせず仁王立ち。

そして徒手空拳での攻撃の間合いに入ると、ロストは神オーズに殴り掛かった。

何度も何度も拳を当てていく。しかし、神オーズは立ち尽くしたまま。

「はっはっは。かゆい、かゆいですよ。かゆすぎて掻き塗りたくなりそうだ!」

右手に持った剣でロストを斬りつける。斬られたロストは傷を負ったのか、その体からメダルが零れ落ちる。

「おやおや、強く掻き過ぎてメダル血が出てしまいましたね〜」

「ぐっ……！」

「では今度はこちらから行きましょう！」

横真一文字に剣を振り、縦にもう一振り。十文字の斬撃を受けたロストから再びメダルが零れた。

さらに神オーズは剣を捨て、ロストの肩を掴み、空いた手で握る拳を作り、腹部にパンチを連続で撃つ。

腹を押さえるロストに蹴りでの追撃を加え、跪かせる。

立ち上がろうとする彼に、ダメ押し of 蹴撃。ロストは転がって壁にぶつかる。

あまりに一方的過ぎるそれは、戦いというよりはただの暴力にしか見えない。

「ふふふ……そうだ。君が記憶を無くした原因、姉さまが細工をしたコアメダルを取り出したらどうなるでしょうね？やってみましょう」

神オーズはそう言うのと、トラクローを広げてロストの体に突き刺した。

「がああああああつ?!」

それと同時にロストは苦しみ始める。

廃屋に響く悲鳴。聞きたくない。今すぐ耳を塞ぎたい。

「やめて……やめてよう……」

けど……。

「これですか？いえ、違いますね。どれなんでしょうか……ね！」

「ぎゃあああああ!？」

彼は止まらない。もがき悶えるロストにさらに苦しみを与えていく。

そして……。

「見つけましたよ……しかし、これはもう使えないですね……」

爪の間に挟まっていた赤いメダル。神オーズはそれを投げ捨て、そのメダルは千歌のすぐそばに落ちる。

「……………」

メダルを抜かれ、ピクリとも動かなくなってしまったロスト。

まさか死んでしまったのではないか、そんな不安が千歌の頭を過るが、やがてゆらりと立ち上がる。

「目覚めの気分はどうですか？」

「……最悪だよ。こんなことになるなんてね」

「仕方ありません。完全に記憶を失っていたのですから。しかし良かったです。奴らに毒される前に助け出すことが出来て」

神オーズと戦っていた時とは別人のように、彼と会話するロスト。昨日からの彼とは様子がまるで違う。

「あのコは？」

「ああ、彼女は人質ですよ。オーズたちをおびき寄せせる為のね」

「ふうん……」

つまらなそうなものを見る目。それからロストは左手の掌を千歌に向けた。その手から赤い光、否、炎が発生する。

「おや、もう殺してしまうのですか？二十四時間は生かしておこうと思ったのですが……まあいいでしょう。死ぬのが少し早くなるだけです」

火の粉を散らしながら手の中で燃え続ける炎。簡単に命を奪えるであろうそれは、千歌に向けて放たれた。

しかし、それが焼き尽くしたのは、千歌と柱を繋いでいた手枷だけだった。

「……何のつもりですか」

「言ったよね？『チカを離せ』って」

「メダルを抜いたことで、君の記憶は完全に戻ったはず。つまりそれは君の意志ということですか？」

「そうだよ。僕はチカたちといた間に色々なことを知った。楽しいこと、嬉しいこと。それからみかんの美味しさ。それを教えてくれたチカを傷付けさせはしない！」

そう叫んだロストは炎をオーズに向けて発射する。

「そうですか……とても残念です。ではあなたにも消えてもらいましょう」

神オーズはトラクローでその炎を斬り裂く。そしてそれがゴングとなり、二人は再び戦い始めた。が、やはり戦況は神オーズの方が有利だ。

ロストも攻撃を当ててはいるが、大したダメージは与えられていない様子。メダルが減ってしまったことと、さっきまでのダメージが響いてしまっているのだ。

「ほらほら、どうしました？先程より攻撃の威力が落ちてますよ？ああ、わたしがメダルを一枚抜いてしまったからです。もつとも、一枚増えたところでわたしに勝てるとは思いませんがね！」

「ぐわああああ?!?!」

「既に君も用済み。メダルを頂きましょうか」

そのセリフとロストの悲鳴。そして神オーズの腕の動きからきつと彼のコアメダルを探っているのだろう。

やがてロストの体から神オーズの腕が抜かれる。その爪にはメダルが二枚挟まっていた。

「僕の、メダルが……」

ロストの体からセルメダルが弾け飛ぶ。メダルを抜かれたことでさらに力を失ったのだ。

「……まだ……だ」

「ほう……立ち上がれるだけの力が残っていますか。けどこれで——」

クロスさせた腕を勢いよく広げ、トラクローがロストの体を引き裂く。

「がは……」

「アंकくん?!」

「終わりです」

ロストを足蹴にし、千歌の側まで転がした。

彼を抱き上げる千歌。その瞳には涙が溜められている。

「……チカ、これを持って逃げて……」

ロストは千歌の手にメダルを二枚乗せる。

「アイツの狙いはそのメダル……それをアイツに渡しちゃいけない……」

「な、ならアंकくんも一緒に……」

「僕はここでアイツを足止めする。だから……」

「出来る訳ないよ、こんな体で……!」

無理矢理に立ち上がろうとするロスト。だが蓄積されたダメージは大きいうえに、メダルも足りない。それでは当然立つことが出来ない。

「そうです。今ここで楽になってしまった方が良いでしょう? わたしが苦しみから解き

放つてあげますよ」

振り上げた剣を下ろさんとする神オーズ。

そして――。

「ハア――ツ!!」

廃屋の壁をぶち破り、彼らは現れた。

そこにいたのは、オーズに変身していたポセイドンと満身創痕のロスト。そして彼を抱きかかえる千歌ちゃんだ。

いつかと重なるその光景は俺の怒りを滾らせるには十分だった。

「ポセイドン……ツ!!」

「おやおや、怖い顔してるのが仮面越しでも分かりますよ」

奴は煽り、俺は今すぐぶん殴りたい衝動に駆られる。

けれど、

「はああ!!」

慎司と晴也が奴に殴りかかった。

それを見て、俺は千歌ちゃんたちの方へ足を向ける。

「耀太くん……」

「ごめん千歌ちゃん……ロストもありがとな、千歌ちゃんを守ってくれて」

「まさか……オーズにお礼を言われるなんてね……」

「つ!?まさかお前、記憶が……」

「それより……チカ……それを彼に渡して……」

ロストが千歌ちゃんにそう言うと、千歌ちゃんはその手に握られていた三枚のコアメダルを俺に渡してくれた。

クジャクメダルとコンドルメダルが二枚。

「これ……どうして……」

「アイツはコアメダルを集めて何かしようとしてる。……だからこれだけは渡さないで

……」

「分かった——」

「それから……もう一人の僕、こっちに來て」

「何だ?メダルを渡す気にでもなつたか?」

「ふふふ……違う、と言いたいところだけど、その通りだよ。手を貸して……」

ロストの言う通り、手を差し出したアंक。そしてロストはその手を掴んだ。

「僕にはもう力は残されていない……。だから君に全部託すよ」

「……………」

赤い光がロストの左手からアンクの左手に移っていく。

それと同時に彼の体は薄くなっていく。

「アンクくん……何を……？」

ロストの異変に気付いた千歌ちゃん。けれど彼は答ええない。しかし、その代わりと言うように口を開いた。

「チカ……ありがとう、僕にたくさん教えてくれて……。本当にありがとう。みかん、美味しかったよ——」

千歌ちゃんにお礼の言葉を贈り、ロストは完全に消滅した。

「アンクくん……アンクくん……！」

大きな声を上げ、涙を流す千歌ちゃん。

……俺は拳を強く握り、例の黒いプトテイラコンボに変身したらしいポセイドンを見る。

慎司も晴也も、変身は解けていなものの、息が上がっていて、力尽きてしまうのも時間の問題だ。

「ヨータ、これを使え」

アンクが手渡してきたのは一枚のタカ・コアメダル。

俺が変身に使っているもの、アンクの意志が宿っているもの、そのどちらでもない。

ロストの意志が宿っていたであろうメダルだ。

「ああ、やってやるさ」

ドライブバーから三枚のメダルを外し、新たに三枚のメダルを装填する。

そしてバツクルを傾け、オースキャナーをスライドさせた。

「タカ！クジャク！コンドル！タージャードルー!!」

赤い炎が俺のアーマーを覆う。

ボデイは読み込んだメダルに対応した変化を遂げていく。

「くつくつく……彼の力を使うあなたも！彼と同じ運命を辿らせてあげましょう!!」

二人に興味を失ったポセイドンは、俺に飛び掛かって来た。

黒いメダガブリューでの攻撃をタジャスピナーで受け止める。

「今度はコントロール出来てるみたいだな……」

「ええ、あなたへの憎しみと恨みのおかげ様ですよー！」

隙だらけになった奴の腹部にパンチを叩き込む。

「!?……前よりさらに力を上げたようですね……。ですがそれはわたしも同じですよ

……ッ!？」

タジャスピナー越しに腕に伝わる奴の力。俺はそれを跳ね除け、エネルギー弾をぶつ

ける。

「……今の俺は無性に腹が立ってる。だからこれで決めるッ!!」

ドライブバーにはめられたメダル三枚をタジャスピナーにセットする。

そして再びオースキャナーをベルトから外し、スピナーのメダルを読み込んだ。

「タカ!クジャク!コンドル!ギン!ギン!ギン!ギガスキャン!!」

俺は炎を纏い、廃屋を壊しながら飛翔する。

「わたしも最大級の力で迎え撃ってあげましょう!!」

「バク!バク!バク!バク!ゴックン!!プットッティラーノヒツサーツ!!」

奴のエネルギー波と俺のマグナブレイズがぶつかり合う。

「はああああああ!!」

高エネルギー同士の衝突で壊れかけていた廃屋がさらに崩れていく。

「不味いな……おいチカ、逃げるぞ!」

「う、うん……」

危険を感じたアンクが千歌ちゃんを廃屋から連れ出してくれた。

「……俺たちも退避した方が良さそうですね」

「だな……」

慎司と晴也も負傷したらしい箇所を押さえながら外に出て行った。

これで心置きなく吹っ飛ばせる!!

「今度こそ！お前をここで……………」

「ぐっ……………まだあなたに一步及ばないとは……………ここは一度退かせてもらいましょう……………」

「な!?待て!!」

奴はそう言つてこの場から消え、エネルギー波も消滅した。

俺も技を止め、変身を解除した。

廃屋は既に半壊。

「はあ……………逃げられたか……………」

外に出ると千歌ちゃんは晴也の腕の中で泣いていた。

晴也たちによると、二人は本当の姉弟のようだったという。そんなロストを失った悲

しみは、言葉で囿り知れるものではないと思う。

千歌ちゃんの中の深い悲しみ。

その涙を、俺たちは忘れることはないだろう。

あれから数日が経った。

アंकに取り込まれたロストの意識は完全に消滅してしまつたらしい。

分かり切つていたことだ。けれど、千歌^かちゃん^{じょ}のことを考えると心苦しい。

千歌ちゃんは気丈に振舞っているが、誰も見ていないところでは泣いていることがある。

「ああ……どうすりやあ良いんだ？俺は……」

『こればかりはどうしようもねえ……』

『時間が解決してくれるのを待つしかないね……』

ビデオ通話で果南ちゃん、曜ちゃんに相談に乗ってもらっているが、流石にこれにはお手上げのようだ。

とそうこうしていると、

「ねえ耀太くん」

「な、何千歌ちゃん？」

「わたしの冷凍みかん知らない？」

「冷凍みかん？俺は知らないけど……うん？待てよ、さっきアンクがそれっぽい持ってたよな……」

「呼んだか？」

俺たちが話していたのを聞いてやって来たアンク。その手には千歌ちゃんの冷凍みかんと思しきものが収められていた。

「あああ!!わたしの冷凍みかん!!どうしてアンクさんが!？」

「知るか。急に食べたくなっただよ」

左手でみかんをちらつかせている。

「!?……そっか、そう言うことだったんだ」

「あん？何だ？」

「うん、何でもない！それよりアंकさん！冷凍庫から取ったのならちゃんと——」

アंकの左手に何かを感じたのか、千歌ちゃんにいつもの笑顔が戻った。

『……何だか』

『いつもの千歌ちゃんに戻ったみたいだね』

「うん、そうだね。きっともう大丈夫……」

そう、きつと——。

コラボ長編 時空を超えた饗宴

本日は日曜日、天気は雲一つ無い快晴。

まさにお出かけ日和だ。

「ねえねえ耀太ようちた、あつちのお店も見てこうよ！」

名前を呼びながら、腕を引く果南ちゃん。

その笑顔は今日の空に負けないほど澄んでいる。

……惚気じゃないぞ？

「そんなに急がなくてもお店は逃げないよ」

「でも時間は待つてくれないんだよ？」

「いやだって、そんなに時間無いわけじゃないし」

「むう……でも耀太と二人だけの時間は滅多にないし……」

……可愛すぎか。

いや、うん、これ完全に惚気になってるな……。

「分かったよ。でも今日は……」

「大丈夫。閉校祭で使うものの買い出し、でしょ？」

「そうそう。今日のメインはそれだからね」

さて、俺たちが来ているのは沼津のとあるお店。

今話していた通り、閉校祭の準備に必要なものを買出しに来ているのだ。

ラブライブの決勝を除けば、浦の星学院最後の重大イベント、閉校祭。

みんなで最後まで楽しめるよう、絶対に成功させたい。

「耀太ー！はやくはやくー！」

……その前に今日はこれだな。

楽しそうな声でおれを呼ぶ果南ちゃん。

デートのように……というかデートと化してしまっているのは、慎司たちの所為とい

うかおかげというか……。

まあ、あの笑顔が見れるなら、慎司たちのおかけということにしておこう。

「ほら、これなんか部室に飾ってみるのはどうかな？」

「そうだね。色の種類も結構あるみたいだし、一色ずつ買って飾るのもいいかも」

「あ、これも可愛い！」

「こつちもいいんじゃない？」

あつち、こつち、そつちと品物を手に取っては、ひよいひよいと新しいものに目を付

けていく俺たち。

こんな時間がいつまでも続けばいいのに……。

だがそれを願っても、叶うことはなく、むしろフラグとなってしまうのが世の常というもので……。

「きやああああああ!!」

「うわああああああ!!」

爆発音とともに悲鳴が響いたのだった。

「果南ちゃんはここにいて!」

「あ、耀太!」

彼女を店に残し、音がした場所に走る。

店から出て数百メートル程、赤い炎と黒い煙が車と店から噴き出している。

「酷い……」

救急車、消防車が呼ばれたらしく、サイレンと放送が鳴り始める。

燃え盛る店から、一人、ゆったりとした歩みで出てきた。

「あん?なんだお前」

この事件の犯人、それは見たことのない仮面ライダーだった。

「何故こんなことをするんだ!?!」

謎のライダーに問いかける。

奴は、俺になど興味すら持たず立ち去ろうとする。

「待て！どんな目的であれ、こんな酷いことする奴を放っておけるか！」

「だつたらどうする？」

「ここでお前を倒す！」

オーカテドラルを腰に当てると、ベルトとオースキャナー、オーメダルネストが出現。

タカ、バッタのメダルをバックルにはめ、トラのメダルをその間にはめる。

カテドラルを斜めに倒し、スキャナーを走らせる。

「変身!!」

「タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！

タ・ト・バ!!」

タカの意匠が刻まれたタカヘッド。

展開することで武器になるトラクロウを装備したトラアーム。

驚異的な跳躍力を持つバッタレッグ。

オーズの基本形態、タトバコンボに変身した。

「ほう、仮面ライダーか」

変身したことで、俺に興味を持ち始めた青いライダー。

俺はメダジャリバーとメダガブリューを構える。

「丁度いい。さつき目覚めたばかりなんぞな。準備運動に付き合ってもらおう」
その口ぶりから、奴はまだ暴れるつもりらしい。

「ソードベント」

「はあああー！」

青いライダーは剣を召喚し、それを持って向かってきた。

奴の剣をメダジャリバーで受け止め、鏢迫り合いに持ち込む。

「こいつ……なんて力だ！」

抑えるのが精一杯で、押し返すことが出来ない。

「どうした、この程度か？」

「へへへ……まだまだあ!!」

メダジャリバーに加えて、メダガブリューをでも抑える。

「うおおお!!」

両手でやっと押し返せる程の強さなんて……。

「ふ……」

不意に奴が笑う。

両手で、かつ踏ん張っている俺に対して、目の前のライダーはまだまだ余裕を持っている。

それに気付くのが遅れた俺は、

「うらあつ！」

「うがっ……」

腹部に蹴りをもらい、体勢が崩れたところをさらにもう一撃。

蹴り転がされ、武器を手放してしまう。

「他愛もないな」

期待外れだと、奴は俺に目掛けて剣が振り下ろす。

奴にとってはこれがトドメになるはずだったのだろう。

「何?！」

俺の体から出現した三枚のメダルに攻撃を阻まれ、さらに反撃されたことで怯んだ。腹部を押さえながら立ち上がり、メダル三枚を入れ替えてスキャン。

「プテラー！トリケラー！ティラノ！」

「プットツティラーノザウルス!!」

先程と同じように、今度は紫色のエフェクトに包まれる俺の体。

さらに白い冷気が放たれる。

恐竜の雄叫びとともに完了した変身、オーズプトティラコンボ。

「つうおおおおおおお!!」

俺自身も咆哮し、再び奴と対峙する。

「フォームチェンジか、良いだろう！」

二度目の突撃。

だが今度は、左腕で斬撃を受け止める。

「ぐ……。パワーも硬さもさつきとは段違いか」

「出来れば使いたくなかったんだがな……」

解放したのは、禁忌とも呼べる力。

みんなからも使って欲しくないと言われた力だ。

「だけど今はそんなこと言ってる場合じゃないみたいだからな！」

右の拳で奴の腹部に強烈な一撃を叩き込む。

「がは……」

一発、二発、三発。

「だあああああ!!」

最後に全力で力を込めて四発目。

「がああああ!!」

青いライダーは吹き飛び、建物の壁にめり込む。

「ははは……やり過ぎちまったな」

ボロボロになってしまった店。

……後で女神さまに直してもらおうか。

「やってくれるじゃねえか……」

「やっぱこれくらいじゃ倒れてくれないよな……」

瓦礫をどかしながら、立ち上がってくるライダー。

しかしその装甲は傷だらけで、肌や服が見えるほどの破損も見られる。

これ以上戦えば、命に関わるだろう。

「もう戦えないはずだ。変身を解いて降参しろ」

俺は諦めるよう、奴に促す。

「くくくく……」

だが奴は、「分かってないな」と言わんばかりに笑い始めた。

「降参だど？少し優勢になったからって勝った気でいるとはな」

「何？」

するとどうだろうか。

奴の傷が、そして装甲がみるみるうちに修復されていく。

「なっ……」

「残念だったな。お前に俺は倒せない」

強いうえに不死身なんて話にならないぞ!?

何処その王子のようなことを思い、どうすればいいか考える。

「耀太!」

不意に背後から名前を呼ばれる。

もちろん声の主は……。

「果南ちゃん!?ここに来ちゃダメだ!」

果南ちゃんだった。

やはりさっきの叫んだのが聞こえてしまったか……。

だがそれより……。

「ほう……」

奴が邪悪な笑みを浮かべたのが、仮面越しでもわかる。

それは面白いものを見つけたと言うような笑い方。

「どうやらお前は、俺が相手をするまでもないようだ。じゃあな」

「あ、待て!!」

捨て台詞を吐いて逃げていく青いライダー。

とんでない跳躍と速度で逃げていく。

奴を野放しにしたらこの町が……!」

エクスターナルフィンを展開して追いかけてようとするが、突如この世界に起きた異変により、それは阻まれた。

「な、何!？」

「果南ちゃん、掴まって!」

突然地面が大きく揺れる。

彼女の手を引き、抱き締めた。

所謂お姫様抱っこの状態で、空へ飛翔。

「耀太……これ、何が起こってるの……?」

「分からない……。なんだよ……。これ……」

建物が、人が、光になって消え、何も無くなった場所に、新たな建物と人が現れる。

そして……。

「あれ見て!」

果南ちゃんが指差したのは浦の星学院。

浦の星の校舎も光に包まれ消えていく。

「あそこにはまだみんなが!」

果南ちゃんに負担が掛からないよう、しかしなるべくスピードを上げて学校に向かう。

しかし……到着と同時に、

「そんな……」

「千歌も鞠莉も……みんな消えちゃったの……?」

浦の星学院は、校門を残して完全に消失してしまったのだった。

「今の凄い地震だったね……」

「ああ……震度五、六はあつたんじゃないか?」

生徒会室で書類の整理をしていた時に起きた大きな揺れ。

突然のことだったが、みんな机の下に隠れたようだ。

「三人とも大丈夫でしたか?」

「わたしは大丈夫だよ。ヨウタくと穂乃果ちゃんは?」

「穂乃果も平気だよ。ヨウタくんは?」

「ああ。俺も何ともない。けど……」

俺が書類に目をやると、三人も視線をそつちを見た。

「もう一度まとめ直しですね……」

「マジか……」

「ええ……」

俺と穂乃果が露骨に嫌な顔をする。

「そんな顔をしてダメですよ。早く片付けてしまわないと」

「だってなあ……二時間近くかけてやったのを、またやり直しか……」

正直、やりたくないです。

「せめて一回休憩しようよ。ダメ……？」

穂乃果が上目遣いで海未に迫る。

穂乃果たちレベルの美少女になれば性別など意味をなさない。

女子だろうと男子だろうと、潤んだ瞳で迫られれば、否と言うことはほぼ出来ない。

「う……分かりました……。少しだけですよ？休憩したらまた作業に戻りますからね」

「海未ちゃんありがとう——！大好き!!」

海未に抱き着いて頬擦りする穂乃果。

うーむ、眼福である。

「わたしお菓子作って来たんだ。みんなで食べよう」

「わーい！ことりちゃんも大好き〜！」

「ありがとう、穂乃果ちゃん」

穂乃果はことりにも抱き着く。

何だこの空間は!?

見ているだけでもうお腹いっぱいです。

目から栄養分を摂取していると、携帯の着信音が鳴り響いた。

「ハイサイ？」

『ヨ……タ……へんだ！』

聞こえてきたのはシオンの声。

だがノイズ混じりで何を言っているのか分からない。

「シオン？何言ってるのか分からないんだけど？」

『た……のが……えて！』

ツイッター、という通話の終了を知らせる音が鳴る。

「……何だったんだ？」

「なにかあったんですか？」

「分からん。シオンからだっただけ、ノイズの所為で何て言ってるのか分かんなかった」

世界に起きていた『異変』に、この時の俺は気付くことは無く、ことりのお手製お菓

子を腹に収めていたのだった。

それに気付いたのは、本当に事態が手遅れになる一歩手前だった。

「よおーし！腹も膨れたし、次は昼n……」

「作業を再開しますよ」

昼寝の単語を出そうとすると、冷たい笑顔を向けられた。
こ、怖え！

無言で放たれる威圧感よりヤバいな……。

ふざけて長い時間怒られるのは、真つ平御免だ。

俺は腹を括り、山積みになっている書類に手を伸ばす。

……伸ばそうとした時だった。

「た、大変です！」

生徒の一人が生徒会室に乗り込んできた。

「どうかしましたか？」

息を切らしながらやって来たその子。

その表情には、疲れ以外の感情——困惑の色が見られた。

「た、建物が消えて！う、海がすぐそこに！ふ、船が！」

海？船？

音ノ木坂の近辺では、まず聞かない言葉が出てきた。

けれど、戸惑う余り言葉が上手くまとめられておらず、こちらとしては疑問符しか出てこない。

「これ飲んで、一旦落ち着こう？」

ことりはお茶をコップに注ぎ、生徒に渡す。

「あ、ありがとうございます……」

彼女は、渡されたお茶を喉を鳴らして飲み干す。

「どう？落ち着いた？」

「は、はい……」

「良かった」

本当に落ち着いた様子の子の生徒を見て、ことりは安堵した。

「それで何があったの？ゆつくりでいいから教えて」

あくまで優しく、急かさないうちに穂乃果が尋ねる。

「はい……。わたしは今日図書室に来ていたんですけど、用が済んだので帰ろうとしたら、突然地震が来て……」

「ああ、さっきのか。デカかったよなあ」

「でもそれだけでしたよね？」

「その後なんです。窓から外を見たら、建物や人が消えていって、その跡に新しい建物が出てきて……。急いで外に出ようとしたら、いつの間にか潮の香り？みたいなのがしてきて……」

そう言われてみると、確かに……少しだけ空いた窓から海近辺の潮の香りがするな。

「だけど、音ノ木坂の近くに海なんて無かったはず……。」

「また窓から覗いたら、海と船が見えて……それで……。」

「生徒会室まで駆け込んだってことね」

「はい……ごめんなさい。お仕事で忙しくしているとは思ってたんですけど……。」

落ち込んだ声、表情で、彼女は頭こゝろを垂れる。

「大丈夫だよ！ありがとう、大事なことを教えてくれて！」

「生徒会長……！」

「何が起きてるのか気になるし、一度外に出てみるか」

「ヨウタ!? 書類はどうするのですか!?!」

海未がそれを指差して言うが、

「この子の様子から察するに、多分ヤバいことが起きてるんだろ? ならそつちを優先す

べきじゃないかね?」

「ですが……。」

「何も無かつたらまた戻ってきて再開すればいいだけじゃん。それに生徒の為に活動するのが生徒会だろ?」

俺の言葉を聞き、海未は嘆息する。

「……分かりました。終わり次第すぐ書類まともに戻りますからね」

「了解！」

海未の同意も貰い、書類を一旦片付けて外にでた。

そして俺たちは衝撃的な光景とある二人を目の当たりにしたのだった。

浦の星学院が消え、現れた音ノ木坂学院。

これは何か大きな野望が動いている。

いつもの耀太ならそう考えられるはず。

けど今は……。

「どうして……どうしてなんだ！」

唯一残った浦の星の校門の前で膝をつき、拳を地面に叩きつけていた。

「やめて耀太！自分を傷付けても何も始まらないよ！」

耀太の手を掴み、彼を叱咤する。

「でも……でも……！」

耀太は酷く顔を歪ませていた。

「誰も守れなかった……誰も……」

「誰も守れなかった」。

仮面ライダーとして戦う耀太にとって、その結果は彼を後悔の念に苛ませているのか

もしれない。

「諦めないで。あなたはいつもそうだった。どんなに状況が悪くなっても、どんなに強い敵が現れても、その度に乗り越えてきた。わたしが好きになつたのは、[〃]諦めることを知らない[〃] 耀太なんだから」

わたしは嗚咽を漏らす耀太を抱き締める。

強く逞しい体が、今だけは弱々しく感じる。

けど、そう感じたのもほんのわずかだった。

「ありがとう、果南ちゃん——」

涙を拭い、わたしにお礼を言う耀太。

……冷静に考えたら、今凄く恥ずかしいこと言っちゃったな……。

顔が熱を帯びて熱い。

鏡を見たら、茹蛸みたいな色をしているわたしが映るだろう。

そしてわたしは、もう少し言葉を選べばよかったと後悔することになった。

「えーつと……そこのお二人さん？大丈夫ですか？」

大変なものを見てしまったという表情をした男の子と、その後ろで顔を赤く染めている三人の女の子がいた。

「え、あ、これは……その……！」

弁解しようにも、羞恥心が抑え切れずに上手く喋れない。

「あ、いえ、その……」

相手の男の子も、間が悪かったと思ってしまったようで、はつきりと言葉を発せていない。

ど、どうすれば……。

「ありがとう、果南ちゃん。ここは俺に任せて」

不意に耳打ちされ、ドキツとしてしまう。

その声は既にいつもの耀太に戻っていた。

「すみません、お恥ずかしいところを見せてしまつて……」

「あ、いえ……俺の方もずっと見ちゃつててすみません……。えっと何かあつたんですか？」

「実は、ここにあつた学校ごと、友達がみんな消えてしまつたんです」

言っていることは非常識であるけれど、

「つまり、わたしたちの学校とあなたたちの学校が入れ替わつてしまつたということですか？」

黒髪の女の子が耀太の言つたことに付け加える。

「はい、その認識で合つてると思いま……」

耀太はそれを肯定した……したはずなんだけど……。

その耀太が、硬直した。

「入れ替わった？今入れ替わったって言った!？」

「は、はい!」

「耀太、落ち着いて。ごめんね、びつくりさせちゃったみたいで」

「い、いえ、大丈夫です。それより——」

「?」

「あなたも『ヨウタ』くんって言うんですね」

おっとりとした雰囲気の子が、黒髪の子に続くようにそう言った。

「あなた『も』?」

そんな彼女の言ったことに疑問符を浮かべて首を傾げる耀太。

すると男の子が、

「ああ。俺の名前が小野寺ヨウタって言うんです。名前言ってませんでしたね」

「なるほど、そう言うことですか。俺は島村耀太って言います」

「わたしは松浦果南です」

耀太に続いてわたしも自己紹介をする。

それについて向こうの女の子たちも名乗った。

、sの三人だった。

「ちよつと若すぎない？」

二人揃つて出た意見は、表現方法はともあれ、的を射てはいた。

μ、sの名前は目にしたことはあるが、どれも過去のことを綴った記事や特集だ。

それにμ、sのライバル、A—R—I—S—Eはプロのアイドルとして活動しているし、梨子ちゃんも音ノ木坂にいた頃、メンバーの名前も一度も聞いたことはないと言つていた。

けど、今日の前にいる彼女たちは音ノ木の制服を着ていて、見た目も果南ちゃんとはとんど変わらないように見える。

「どうかしましたか？」

「い、いや！何でもないよ！？何でも！？」

「何かこの前のことりちゃんみたいだね」

「ははは……」

苦笑することりちゃん。

そして穂乃果ちゃんが「この前」と言ったことを聞き逃さなかつた。

「さつき海未ちゃ……海未さんが入れ替わつたつて言つてたけど、もしかして時代を超えちゃつたとか……」

「わたしも同じこと考えたよ……」

もしそうだとしたら……。

「千歌（ちゃん）たちが今の時代のことを喋っちゃったらどうしよう……」

タイムスリップ物のド定番、タイムパラドックスが起こってしまうかもしれない……。

梨子ちゃんやダイヤちゃん、曜ちゃんもいるから大丈夫か……？

「さつきから二人で何話してるのー？」

「本当に何でもないから、気にしないで！」

「う、うん……」

二人揃って叫んだことで、穂乃果ちゃんが後ろに下がってしまった。

「そ、それよりさつきの話の続きだけど……」

「は、はあ……」

四人とも間の抜けた表情カオになる。

「ま、まあ、俺たちもその話を聞こうと思ってたんだ。立ち話もなんだし、一度生徒会室に戻ろう」

「待ってくださいヨウタ。この二人の入校許可証が……」

「いいじゃないの。緊急事態なんだし」

「ですが……」

「ほら二人ともついてきて」

海未ちゃんの言うことを聞かず、ヨウタくんは歩いて行ってしまふ。

「はあ……仕方ありません。二人ともついて来てください」

彼女も遂に諦め、俺たちは彼女たちついていくことにした。

やって来た音ノ木の生徒会室。

まだ仕事の途中だったのか、書類が横にどかさされている。

「二人ともお茶をどうぞ」

「ありがとうございます」

席に着くと、ことりちゃんがお茶を淹れてくれた。

うーん、流石ミナリンスキー。

「美味しい……！」

果南ちゃんも絶賛のようだ。

「ありがとう、果南ちゃん♪」

「早速話に入りたいんだけど、ここはどこなんだ？海があるってことは太平洋か、日本海沿いなのは分かるけど……」

「ここは内浦だよ」

「内浦!?!」

海未ちゃん、ことりちゃんがその地名に驚き、海未ちゃんは声も上げた。

そして穂乃果ちゃんは……、

「内浦って?」

ピンと来ていないようだ。

「静岡県だよ、穂乃果ちゃん」

「なあんだ、静岡県か……ってええええ?!?静岡県!?!」

Oh……まるでギャグマンガのような時間差に、某小学生探偵のような笑い声が出てしまう。

「ここ以外にも消えたり、いきなり現れたりしたものであるのか?」

「うん。色んな店や民家が消えて、そこに別なものが現れたよ」

「そうか……」

頭を抱え、唸る俺たち。

そこに……、

「失礼します。ヨウタさんにお客さんです」

ノック音と一人の生徒の声。

「どうぞー」

ヨウタクくんがそう言うのと、生徒と一緒に女性と男性が入って来た。しかも見覚えのあるところではない二人が。

「案内してくれてありがとう」

「いいえ。わたしは部活があるのでこれで」

「頑張つてね」

「神子さんにアंक（さん）!?!」

「……誰?」

女神さま（大人モード）に、アイスとコンビニの袋を持ったアंक。

ヨウタクくんたち四人は完全にあれ誰状態。

俺たち二人に関しても「どうして?」の一言しか出てこない。

「二人ともみんなと一緒に準備してたんじゃない?」

「アंकくんがアイスが食べたって言ったから、一緒に行ったのよ」

「そしたら建物が変わってたもんでな。さっきの奴に案内してもらったんだ」

なるほどな……。

とか何とか言つて、本当はこうなることを察知してたりして……。

『ほう、よく分かったな。その通りじゃよ』

「（本当なのかよ!?!）」

『ま、アंकも付いて来たのはのは不幸中の幸いじゃな』

「(あ、アंकは偶然なのね)」

ともあれ戦いで困ることは無くなったわけか。

「耀太くん、果南ちゃん、この人たちは？」

念話をしていると、穂乃果ちゃんが俺たちに二人のことを聞いてきた。

「えつとね、そつちの女の人は俺の叔母で島村神子さん。そつちが俺の……相棒って言つたらいいのかな？ まあそんな感じのアंकだよ」

「四人ともよろしくね」

女神さまは四人に会釈し、四人もまた会釈する。

「それにしても驚いたわ。いきなり学校が変わってるんですけど」

「耀太くんは泣いてたもんねー」

穂乃果ちゃんがからかい気味にさっきのことを話し始める。

「ちよ、それは言わないでよー！」

「くつくつく……ははははは！」

「おいアंकー！」

それを聞いたアंकが大笑いしやがった。

「そう言えば、その時果南ちゃんが耀太くんを抱き締めてたけど、二人つてもしかして

……」

「へえ、果南さんなかなかやるわね」

「こそ、それはあの、そのお……」

ことりちゃんによる追撃。

果南ちゃんは顔を真つ赤に染め上げ、今度は女神さまが微笑ましげにこちらを見てくる。

耀太と果南は9999のダメージを受けた。

「つて！話を脱線させるな——！！！」

そして俺と果南ちゃん、二人の怒号が学校中に響き渡ったという一連の流れは、後にメンバーに伝えられたと言う。

「申し訳ありませんお二人とも……二人には後で言っておきますので……」

「ははは……大丈夫ですよ。人目につく場所であんなことをした方も悪かったんですし……」

「そうそう、だからあんまり厳しく言うのは……」

果南ちゃんからご容赦の声。

やっぱ優しいな。

「何があったのかは二人に聞くとして、異変の話をしましょうか」

「うん、前半凄いい気になること言ったけど、後半のそれには賛成かな」

この状況をどうにかする為にも、それが良いだろうとみんなが賛成だった。

「建物や人が消えたり、現れたりしているのはみんな知っているわね？」

「俺たちは目の前で見たし……」

「わたしたちも突然内浦に来てしまいましたからね。しかも学校ごと……」

俺や果南ちゃんの考察としては時代を超えてしまったのではないか、というものだったが、それを凌駕する恐ろしい事態が起きていた。

「あなたたち、空は見た？」

「「空？」」

六人全員が揃って疑問符を浮かべる。

どうしていきなり空の話なんだ……？

「その顔だと見てないのね」

「ああ……？」

女神さまはノートPCを取り出し、画面をつけた。

「なあ、アंक。お前は空見たのか？」

「ああ。今度の相手はかなり厄介だぞ」

「今度の相手？」

ヨウタクくんが俺とアंकの会話、特にアंकが言った「相手」という言葉に反応を示した。

「これを見て」

モニターに映し出されたのは、空を飛んでいるものから撮っている映像。

多分、タカちゃんとバツタくんだろう。

建物の入れ替わりはまだ続いているようだ。

だが問題はそこではなかった。

映像が町から空に移り変わる。

雲一つない青空。

そして浮かぶ青い星。

「え……」

誰かが声を漏らす。

映し出された青い星は、見間違うはずもない。

「神子さん……これどういうこと……?」

誰もが思っているであろうことを、果南ちゃんは尋ねた。

「これは地球よ。平行世界のね」

「平行、世界……?」

つい一年程前までは架空のものだと思っていた。

だがそれも、転移させられたことで本当に存在するということをお願い知らされた。

しかし、また何で平行世界の地球が……。

「ええ。地球にそっくりな星……というのも考えたけれど、太陽系にはそんな星ないし、その線が妥当ね」

「でも……そんなことあり得るの？ 平行世界なんて、お話の中だけなんじゃ……」

「いえ、平行世界というのは存在してるようなんです」

「「え？」」

平行世界なんて言葉とは程遠いと思っていた海未ちゃんからのその言葉。

俺も果南ちゃんも思わず声を漏らす。

「俺ちゃんは一度死んで、転生した人間だからな。しかも穂乃果たちとは別の世界からの」

「「え？ ？ ？ ええええええ！」」

俺たちは今日一日で、何度驚けばいいんだ？

同じ異世界から来た人間としては、包み隠さず話しているのは正直驚き以外の何でもない。

「そうなんだ……」

開いた口が塞がらないとは、今の果南ちゃんのようなことを言うのだろう。

「まあそれは良いとしても、二つの地球を繋げる目的は——」

刹那、PCの画面が砂嵐のようになり……。

「ん？おい、何だこれ？」

謎の空間——どちらかというと部屋か——が映し出された。

さらに謎の人物一人と、今日戦った仮面ライダーが一人。

そして……。

「!?」

俺が戦ったライダーとはもう一人。

仮面ライダーポセイドンが立っていた。

「なんでアイツがあそこに!？」

ヨウタくと声もセリフもかぶる。

「え？」

「ど、どういうこと？なんであの人があそこに……」

「何故ユウヤがあそこに……」

果南ちゃん、海未ちゃんがそう声に出す。

だが画面の向こうの二人がそれに答えてくれるはずもなく、その真ん中に座る、ロー

ブの人物が口を開いた。

『地球人のみなさん、初めまして。わたしの名前は“次元王”。全ての次元、全ての世界を管理するものです』

次元王と名乗った人物は、ボイスチェンジャーを使っているようで、性別の判別すらつかない。

『突然ですが、あなたがたの住むこの地球は——滅亡します』

「!?!」

滅亡、その言葉が本当か否か、俺は直感的に悟った。

これはマジだと。

『もうご覧になった方もいるでしょう。空に浮かぶ“もう一つの地球”を。あの地球はこちららとほとんど同じ進化を遂げた地球。ですが、決定的に違うのがあります。それは科学力です』

俺と果南ちゃん、女神さまとアंकが四人を見ると、四人は思い切り顔を横に振る。

『あちらの地球は科学が大幅な進歩を遂げ、いずれの国もある兵器を持つようになりました。あなたがたの言葉を借りるならば怪人……とも呼べる生物兵器。それらの力は絶大で、ありとあらゆる兵器を凌駕する存在。そして彼らはその兵器を使って、恐ろしい計画を企てたのです』

「ふざけんな！よくもまあ、あんな口からでまかせを……！」

『その計画は“全地球統合理化計画”』

「全地球……統合理化計画……」

『全ての次元の世界の地球を、自らの世界と融合させ支配下に置こうという恐ろしい計画をわたしたちは知り、それを止めるために二人の戦士を送り込みました。しかし、圧倒的な数の差に成す術もなく、このままでは奴らの計画を止めることが出来ないのです。そこで地球人のみなさんに有志としての戦士……義勇軍を募ろうと考えました。怪人に対抗する仮面ライダーの』

「!?!」

次元王はクロニクルガシヤット、そしてライオトルーパーのベルトを見せてきた。

仮面ライダーの……義勇軍？

一体こいつは何を言ってるんだ……！

『みなさん、わたしたちとともに戦い、故郷の平和を守るのです！……現在わたしたちは次元母艦よりこれをお伝えしています。間もなく、ポイント301“内浦”に停泊します。我こそはと思うそのあなた、是非わたしたちとともに戦いましょう!!』

その言葉を最後に映像は途絶え、もとのカンドロイドの映像に戻った。

「……アイツらなのか。この世界を……二つの地球をおかしくした黒幕は……」

「恐らく。全地球統合化計画というのも奴らがでっち上げたもの。向こうの地球でも同じものが流れたはずよ」

「じゃあ生物兵器の怪人って!」

「……同じく募られた義勇軍ね」

人間同士で同士討ちさせるつもりなのか!?

なんて卑怯なやり方なんだ!

「ちよつとヨウタクくん、どこに行くの!?!」

穂乃果ちゃんが彼の名を呼ぶと、ヨウタクくんは扉の前に立っていた、左手に何かを持っていた。

「決まってる、アイツをぶっ飛ばしに行くんだよ。次元王だかなんだか知らないが、そんなふざけたことさせるか!」

「待ちなさい」

出ていこうとするヨウタクくんを女神さまが止める。

「何でだよ!早くしないとアンタらだって……!」

「何の考えもなしに動けば、それこそ奴らの思うつぼよ。ただえさえ分断されてしまっているのに、あなたと耀太、アंकくんを頭数に数えてもこちらは三人。対するあちらの戦力は未知数。無謀にも程があるわ」

「三人……もしかしてお二人も仮面ライダーなんですか？」

「あ、うん。アंकはライダーじゃなくてグリードって言う怪人で……あ、悪い奴じやないから大丈夫だよ。……まあ、アイスばかり食べて財布の敵かもしれないけど……」

「ふん、知るか。だが確かにミコの言う通りだ。俺たちを誘おびき出す罠つてのも考えられる」

「なら一体どうすれば……」

打つ手はないのか……そんな雰囲気の中、一人女神さまは不敵な笑みを浮かべた。

「ふふふ……わたしにいい考えがあるわ。どうせならその罠を有効活用させてもらいましよう」

「え？」

こうして俺たちは、別れてしまった仲間たちと合流する為、それぞれの戦いを始めるのだった。

「はあ……アンタの叔母さんってあんなヤベー人なのな……」

「……否定はしないよ」

「つべこべ言うな。とつとと行くぞ」

コイツ……高級アイス一ヶ月分に釣られやがって……。

ヨウタクくんが「ヤベー人」と称する、自称俺の叔母の女神さまが考えた作戦。

それは、俺とヨウタクくん、そしてアंकの三人で内浦に停泊している次元母艦を爆破することだった。

こちらとあちら、二つの地球を繋ぐ母艦を爆破してパニックを起こしている間に、女神さまがシステムをハッキング。

自称義勇軍を送り込む為のゲートを開いて、向こうにいるみんなと合流するというものだ。

「変身！」

「タカ！クジャク！バッター！」

俺はオーズ タジャバ亜種に変身、ヨウタクくんはなんと王蛇に変身し、アंकはグリードへ姿を変える。

変身が完了した三人が並び……

「タカ！クジャク！バッター！ギン！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！！」

「ファイナルベント」

「はあああ！！」

「セイヤ——！！」

それぞれが船に向けて大技を放った。

アंकと俺の火炎弾、ベノクラッシュが船に直撃し、大穴を開け、爆炎が上がる。そしてアラートが鳴り響き、あつという間に戦闘員に囲まれてしまった。

「そうなるよなあ」

「丁度良いや。手始めにこいつらを血祭りにあげてから、ボスに殴り込むに行く」
物騒なこと言うな……。

「つていうかこの戦闘員たち、Xガーディアンじゃねーか！」

頭部と胸部にXの文字が刻まれたロボットたち。

ビルドに登場する戦闘員、ガーディアンの財団X製のものだ。

今回の事件に財団Xが関わっているっていうのか？

「ソードベント」

「おらおらおらおら!!!」

ベノサーベルを召喚したヨウタくんがガーディアンを斬りつけていく。

砕け散った残骸が周りに散らばった。

「わお……」

「アイツ、バカだろ」

「おいアंक、失礼だろ」

アंकも俺もガーディアンを壊しながら言葉を交わす。

メダジャリバーで斬り、タジャスピナーで火炎弾を撃つ。

一斉に掛かって来る奴らを、一体一体確実に減らしていく。

「行くぞみんな——!!」

いつの間にかアドベントでエビルダイバーとメタルゲラスも召喚し、モンスター三体とともに奴らを蹴散らしていた。

「コンボ使うか？」

「やめとくわ。てかガーディアンなら使わなくても……」

その発言がフラグであったことに気付いたのは、それが現れた後だった。

俺たちを覆う影。

「なんじゃこりやああああ?!」

合体したガーディアンを見たヨウタクくんが絶叫する。

周りをよく見ると、さっきまでうじゃうじゃといたガーディアンたちが一体も残っていない。

「全部アレに合体したのか」

「アंक！クワガタとウナギとゾウでお願い！」

「ほらよ」

アंकから渡されたメダルを三枚受け取り、ドライバーに装填。

「クワガタ！ウナギ！ゾウ！」

亜種形態、ガタウゾにチェンジした。

「耀太もムチか。んじゃ俺も」

「スイングベント」

ベノサーベルからエビルウィップに持ち替え、俺とヨウタクくんはガーディアンに攻撃を開始する。

「とお！せい！！」

ヨウタクくんがムチを脚にかけるが、引っ張られるばかりで止めることが出来ない。

「うおおおお！ちよ、耀太そっちもお願い！」

「了解！」

俺もウィップをもう片方の脚にかけ、ゾウレッグの力で踏ん張る。

「ふん！」

二人がかりでも、ガーディアンに引っ張られる。

「コイツ、パワーが尋常じゃねえぞ……」

「ならこれでどうだ！」

クワガタヘッドとウナギウィップに電気を流し、カーディアンを感電させる。

合体しても所詮は機械。

許容範囲以上の電流を流され、ショートしたようだ。

ガーディアンは煙を上げながら機能停止し、崩れた。

「ふう……」

出てきた敵は全て片付いた。

後は女神さまがゲートを開いてくれるのを待つだけだけど……。

「お、神子さんから連絡だ」

丁度いいタイミングで、タカちゃんとバツタくんがやって来た。

タカちゃんがバツタくんを離したので、自由落下を始めたバツタくんを掌でキャッチする。

「神子さん、敵は全部片付けたけど……」

『ごめんね、耀太』

「え？果南ちゃん？」

唐突に謝罪してきたのは果南ちゃん。

……何だろう、胸騒ぎがする。

『ハッキングは出来たみたいなんだけど、敵に見つかっちゃって……』

「……分かった。すぐ行く」

……まさか裏の裏をかいいた罠だったのか？

今となつてはどうでもいいか……。

兎にも角にも、窮地に立たされているであろう女神さまたちを救う為、俺たちはタカちゃんの家内のもと、船の中を走つたのだった。

……そして到着すると、ガーディアンや人、ブレイクされたガイアメモリの残骸が転がる中、ポッピーに変身した女神さまがコンソールで何かを操作していた。

「ホントにごめんね、耀太！」

「申し訳ありません……」

「え？これどういうこと？」

敵に会つた……というより、管理室に乗り込んで大暴れしたようにしか見えないこの状況。

話が全く見えてこない……。

「えつと……この部屋に入つたら、いきなりこの人たちに襲われちゃつて……」
ことりちゃんが分かりやすく説明してくれた。

つまり、部屋に入った瞬間、ガーディアンたちに襲われ、俺たちを呼ぶも、何故かゲーマドライバーを持つてた女神さまが蹴散らしたつてことか……。

「良かった……」

俺たちは二人揃つて安堵の息を漏らす。

果南ちゃんたちに何かあったらみんなに顔向けできない。ヨウタクくんも俺と同じようだった。

「みんなこれを見て」

女神さまが操作したものを見るのは、今日はこれで二度目になる。

モニターが映していたのは、恐らく艦内のカメラの映像。

そのうちの一つに、次元王がゲートと呼んだものと思われるものがあつた。

「あれが『ゲート』か」

「それで間違いなさそうね」

「開いてるのは分かったけど、ここまでどうやっていくんだ？さっきので警戒はだいぶされてると思うんだが……」

「大丈夫よ。セキュリティーも大体潰したし、わたしの端末に地図のデータをインストールしておいたから」

「アンタマジで何者だよ!？」

女神さまです……。

ヨウタクくんが叫んだ疑問に、心の中で答える。

「この子耀太の叔母よ」

年甲斐もなく？ウインクして答える女神さま。

『誰が年甲斐もなくじゃ！まだ千年しか生きとらんわ!!』

俺らからしたら十分生きてるよ!!

「それより問題はこの二人よ」

ゲートのある場所にいる二人のライダー。

ポセイドンとともにいる青いライダー——アビスは、元々は敵だったが、今はヨウタクんたちの仲間だと言う。

そんな彼が何故この世界にいるのか、そしてたぐさんの人の命を奪ったのか……。

「あーアビスがゲートを通って行った!」

「これであそこを守ってるのはアイツ一人か」

「よし!四人でいけば一人くらい楽勝だろ」

ヨウタクんがそう言うが、俺は首を横に振り、それを否定する。

「奴は強い。俺は一度、奴に負けてるんだ」

「え……そうなの……?」

俺は果南ちゃんに確認を取り、その時の出来事を四人に話した。

欲望ねがいにつけ込まれ、それを暴走させてしまった果南ちゃんと戦ったこと。

そしてその時に敗北したことを。

「そうか……そんなことがあったんだな……」

四人は暗い顔になる。

こんな話を聞かされたら当然か。

だがそんな雰囲気も彼女によってぶち壊された。

「そして試練を乗り越えた二人はどうとう結ばれ……」

「まだ結ばれてません!!」

「“まだ”か、つてことはそのうちそうなるつてことか」

「あ、いや、それは……」

アंकによる追撃。

もう止めて！俺たちのライフはゼロよ!!

「まあでも、確かに四人でなら、油断さえしなければ勝てない相手ではないわね」

「そうですね……今みたいな連携プレーを是非戦闘で発揮していただければ幸いです」

念には念を入れて、停止はしているはずだが、最後にこの部屋のカメラを潰し、ゲートに向かった。

セキユリティー管理室のカメラが壊され、映像が途絶える。

「警戒心の強い人たちですね。もつともこちらには筒抜けですが」

ローブを纏った人物、次元王は“彼女”に通信を入れる。

「彼らがそちらに向かっています。あなたがやるべきことは……分かってますね？」
『……………』

彼女は何も喋らない。

覚悟はどうに出来ているから？

違う。まだ迷いがあるから。

けれどやらなければいけない。

大切なものを取り戻すために、もう一度――。

次元王は通信を切り、もう一つのモニターを覗く。

「彼も果たせると良いですねえ。復讐とやらを」

モニターの向こうのアビスを見てほくそ笑む次元王。

そしてその手には、石化したドライバーが収まっていた。

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！

今日は閉校祭の準備を学校全体で行っていた！

と思っていたら、いつの間にか学校ごと東京に飛ばされていた。

それも音ノ木坂学院があるべき場所に。

何を言っているか分からねえと思うが、俺も何を言っているか分からねえ……。

転生とか転移とか、そんなちやっちいもんじや断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

「えつと……これはどういうことなの？」

「分かりません……ただ……」

梨子先輩、佐藤ちゃんとともに見つめた先にいるのはA q o u r sのメンバーと、浦の星の生徒たち。

そして音ノ木坂のスクールアイドル、μ⁴ sのメンバー+俺も見たことの無い男たちだ。

μ⁴ sのメンバーに関してはいさつきまで練習をしていたであろうことが伺える。

「もしかしたら俺たちのいた世界じゃないかもしれないですね……」

遙か上空に浮かぶ青い星。

誰が見ても間違うことは無いだろう。

「あれって地球よね？」

「地球ですね。誰がどう見ても地球ですね」

何の情報も無い以上、今しなければいけないことは一つ。

千歌先輩たちに、俺たちの世界のこと、特にラブライブに関してのことを喋らせてはいけないということ……

「本当にエリーチカですわ！あ、あああ握手！握手をお願いします！」
「え、ええ……わたしで良ければ……」

あの絵里ちゃんが引いちゃってる……。

μ sの背中を追うことは止めた……が、やはり憧れの存在に変わりはないみたいだ。

まあ当たり前か。

今やμ sは伝説の……

「今や伝説となつても!?むぐぐぐぐ!?」

「お姉ちゃん!?」

「ちよ、シン!?何してるの!?」

「みんなも一度こつちに来ようか」

あつぶね——!!

タイムスリップにしろ、平行世界にしろ、時代が違うのに変わりはない為、余計なことを口走ろうとしたダイヤ先輩の口を塞ぐ。

それと同時に梨子先輩と佐藤ちゃんが残りのメンバーを俺たちの方に連れてきた。

「何をしますの!?折角人が感動に浸つてるときに!!」

「ちよつとポリュームを下げてください！今から大事なことを話すんですから！」

「大事なこと?」

これがアニメや漫画なら、頭の上に大きな疑問符が浮かんでいることだろう。ああ……やっぱりこれ目の前しか見えてないな……。

「みんな、上を見てくれる?」

「上?上って言われても空が見える以外何も……え?」

千歌先輩が空を見上げたまま固まる。

「何ですか?梨子さんまで一緒になつて一体……へ?」

「お姉ちゃん?」

ダイヤ先輩、ルビィと続き、次々と空を見上げては硬直する。

俺たちの異変に気付いたのか、μ sの面々も空を見上げて動かなくなった。

「ええええええええ?!?!」

そして数秒後、A q o u r s七人、μ s六人十男三人の計十六人の叫び声が響いた。それから少しして……ここは生徒会室。

「つまり、お前たちはあの地球からここに飛ばされたことで良いんだな?」

「この状況を考える限りそうとしか……」

自己紹介、そして状況整理を済ませると、μ sのマナージャーの一人、シオンさんが梨子先輩に尋ねた。

信じられない……という表情には見えないな……。

寧ろ平行世界というものが存在することを知っているようにも見える。

「そんなこともあるのか……」

「そんなことも？」

今度はシオンさんが気になることを口にし、それに対して鞠莉先輩が反応を示した。

「ああ、俺たちは元々この世界の人間じゃないんだ」

「はい？」

そう言ったのはシュウジさん。

さらっととんでもないことを言った為、梨子先輩たちはもちろん、俺や佐藤ちゃんも

脳の処理が追い付いていない。

「この三人とあともう一人、穂乃果たちと一緒にいるはずのヨウタつて男の子もそうら

しいの」

「そ、それは所謂転生者というものずら!？」

「そ、そうだけど……」

花丸が、これまたマネージャーであるフミさんに迫る。

「は!?!背筋に悪寒が……」

その反応……どうやら恋愛が関わってきそうだな……。

「と、とりあえず、話を一旦整理しましょう。本来なら音ノ木坂学院がある場所に浦の星学院が建っていること。そして上空に地球が浮かんでいることを踏まえると、俺たちの世界は交わってしまっている……そう捉えても問題は無いでしょうか？」

「それで間違いないと思うにこー。穂乃果たちの様子を見に来たら、学校が変わっちゃってるんだもの。もうにこ、何が何だかわからないっ!?!……いきなり何すんのよ! 痛いじゃない!」

「おい、アイツらドン引きしてるぞ」

「そんなわけ無いでしょう。あくもしかしてにこに嫉妬してる? 自分は顔を見ただけで泣かれたからっ!?!何で二回も叩くのよ!」

「すまん、手が滑った」

グーでいつてる辺り絶対そうじゃないだろ……。

「すいません……そろそろ話進めても……」

「ごめんなさい、梨子さん。二人とも、ふざけるのもいい加減にして真面目に聞きましょう?」

「分かったわよ……」

「悪かったな、話の腰を折っちゃまって」

「い、いえ……」

流石絵里ちゃん……μ sの中で一位二位を争う真面目枠（俺的に）なだけある。こほんと咳払いし、梨子先輩が本題に戻した。

「これはわたしの想像なんですけど……今回の事件、何だか良くないことが起きようとしている……!?!」

梨子先輩がそう話そうとすると、突然、この場にいる全員の携帯に謎の通知が送られ、操作することなく動き出した。

「な、何?!」

「何だこれ……」

動画……どこか気味の悪い場所が映し出され、画面の中央にローブを着た人物。

そして両サイドに青いアーマーのライダーが二人佇んでいた。

「ユウヤ／ポセイドン!」

片方はシオンさんたちの知り合いだったようで、俺たちはもちろん、彼らも驚いていた。

『地球人のみなさん、初めまして。わたしの名前は“次元王”。全ての次元、全ての世界を管理するものです』

「次元王……?」

それから次元王と名乗る人物からとてつもなく壮大な話を聞かされた。

全地球統合化計画、宇宙の上に浮かぶ地球と戦うなど、俺からしたら胡散臭すぎる話を。

それは向こうも同じようで、

「バカバカしい。ていうか、黒幕コイツで決まりだろ」

「それには同意ですね。こちらとあちらの世界の一部を入れ替えたのは、恐らく出現した人たちを尖兵だと思わせる為。そこからさらに混乱を起こして……」

シユウジさんと佐藤ちゃんが自分たちの見解を出していると、近くで爆発音が聞こえた。

「今度は何なの!?!」

「いよいよ奴らが本格的に動いてきたってことだろ」

「このタイミングではそうとしか言えないしな」

「お前らはここにいろ。奴らは俺たちがぶっ飛ばす」

そう言つて三人は、俺たちにもとても馴染みのあるものを取り出し、出ていった。

「カザリ、ここは任せた。俺たちも行くぞ、佐藤ちゃん!」

「ええ、行きましょう!」

「変身!」

「変……身!」

俺たちも姿を変え、三人のあとを追った。

外に出ると、ガーディアン、マスカレイド・ドーパント、屑ヤミーなどなどの戦闘員たちが街の人々を襲い、建物を破壊していた。

「これ多すぎじゃねーか？」

「だが、このままにしておく訳にはいかない。やるしかないだろう」

「そういうことだな」

先に来ていた三人が合わせて二十体ほど片付けていた。

「ドリルアーム ショベルアーム クレーンアーム キヤタピラレッグ」

「オラオラオラオラオラア!!!」

CLAWSを四つ装着し、俺もガーディアンたちを粉碎する。

「アクアウェーブ!!」

佐藤ちゃん
アクアは大量の水を生み出し、津波のようにドーパントたちを攫い、水中でキックを決めていく。

「アイツらもライダーなのか。俺たちも負けてられないな」

「テンガン！サンゾウ！メガウルオウド！サイユウロード」

ネクロム——声から判断してフミさん——は、眼魂を変えてサンゾウ魂にフォーム

チェンジ。

孫悟空、猪八戒、沙悟浄をモデルとした三人を召喚し、四人で連携し、敵を倒している。

「ダイテンガン！サンゾウ！オメガウルオウド!!」

ガンガンキャッチャーを出現させ、四人で連続攻撃で十体以上の屑ヤミーを葬った。

「雑魚ばかりだとどうも手応えがないな」

戦闘狂のようなセリフを吐いたギルス——シウウジさんはギルスクロウでガーディアンを引き裂いていく。

近接で戦っていたガーディアンをほとんど倒すと、距離を置いてのライフルでの一撃がギルスを屠ろうとしていた。

が、

「ふんー」

弾丸をクロウで真つ二つにし、今度はギルスフィーラーを展開。

ギルスフィーラーに捕えられたガーディアンを、他のガーディアンと接触させ、破壊する。

そしてギャレン——シオンさんも負けていない。

「ファイアバレット」

ラウズカードを駆使し、屑ヤミーの数を確実に減らしていく。

「いくら倒してもキリがないな。近づいてんじやねー！おら！離れろー！」

ギヤレンラウザーを逆手に持ち、トンファーのように使ってヤミーの顔を砕く。

「ドロップ ファイア ジェミニ バーニングディバイド」

ラウズカードの効果で二人に分身、脚に炎を纏って、ヤミーの大群にキックをぶち込んだ。

戦い続けること約十分弱、戦闘員たちの数は大体半分程度まで減ってきた。

「ブレストバスター」

「ディバイイイン……バスター——ツ!!」

「慎司さん、それ絶対違います」

ディバイインバスターもとい、ブレストバスターをキャタピラレッグを使って回転しながら撃ち、佐藤ちゃんにツッコまれながら周りの敵を掃討した。

「全部倒したあ……」

「こんなに多い数を相手したのは初めてだったな」

「俺たちですよ。でもこれでひとまずは安心ですね」

変身を解き、学校に戻ろうとしたその時だった。

「ストライクベント」

俺は何者かに攻撃されて吹き飛ばされ、壁に激突し、瓦礫の下敷きに。

「宮沢（さん）!?!」

「今の攻撃……まさか!」

瓦礫をかき分けながら見たのは、あの映像で見た青い仮面ライダーだった。

オペレーター室を出た俺たちは、もう一つの地球と繋がっているはずのゲートを目指していた。

「この角を曲がって真っ直ぐ行つた所にゲートがあるわね」

「そこにアイツが……」

フラッシュバックする敗北の記憶。

けど恐れている時間なんて無い。

一刻も早くみんなと合流しなければいけないんだ。

二つの地球を救う為に。

遂に目的地の直前まで迫った。

「良い? さつきカメラで見ることが出来たのはゲートをくぐつたあのライダー——アビスとポセイドンの二人だけ。映らなかつた死角に敵がいる可能性もあるわ」

「要するに敵を一人だと決めるのは早計だつてことだろ」

「そうだね。それからこつちには果南ちゃんたちがいる。四人に危険が及びそうになつ

たらずぐに撤退する」

「了解。んじや、行きます……か!!」

「ちよ! ヨウタ!?!」

ドアを蹴り破ろうとしたヨウタくんだったが……。

「硬^{かて}え……」

相当痛かったのか、うずくまって足を押しえている。

「生身の人間の力じゃ壊れないわよ」

「は、やっぱりバカだったな」

アंकクが再びヨウタくんをバカ呼ばわり。

……ごめん、フォロー出来ないわ。

心の中でヨウタくんに謝罪していると、まるでスーパーの出入り口のようにドアが開く。

ヨウタくんは足を押しさえながら、俺を含めたそれ以外の六人も扉の向こうに目を向ける。

アビスが通って行ったゲート、そしてゲートの前には、一人ポセイドンが佇んでいた。「さあて、大人しくそこを通してもらおうか。抵抗するっていうなら……分かってるよな?」

バックルを構えながら、半ば脅し染みたセルフを吐くヨウタくん。

しかしポセイドンは何も言わず、そのディーペストハーブの穂を俺に向けた。

「指名ってことか」

「おい！俺たちのことは無視ってことか!？」

ポセイドンは俺以外眼中にないらしい。

けど、今はその方が都合が良い。

「神子さん、ヨウタくん」

「っ!?!耀太、やめて！二人も何か言ってよ!」

流石果南ちゃんだ。

俺が何をしようとしているのか分かったらしい。

「分かった。絶対死ぬなよ」

ヨウタくんも察してくれたようだ。

「ダメだよ耀太!!一人でなんて……!」

「安心しろ。俺は残る。コイツを死なせるわけにはいかないからな」

「アंकさん……でも……」

それでも俺一人で戦うことを許したくない果南ちゃん。

「無理よ、果南さん。こうなった耀太を止めることが出来ないのは、あなたが一番分かっ

ているはずよ」

「……………」

無理だとしても、死ぬかもしれない戦いに行こうとする仲間を止めない人はいないだろう。

それが好きな人ならば、尚更だ。

もし俺が果南ちゃんと立場が逆だったとしても、そうするだろう。

「ごめんね、果南ちゃ……………!?!」

果南ちゃんに謝ろうとすると、不意に彼女の唇が俺の頬に触れた。

「んな!?!」

「わあ!?!」

「あらあら」

海末ちゃん、穂乃果ちゃんことりちゃん、そして女神さまがそれぞれ違った反応をする。

え? ちよ、今何が起きたの!?!

て、敵が目の前にいるのに……………ていうか全く攻撃してこないって……………。

頬を少しだけ赤く染めた果南ちゃんは、

「絶対追いついて来てね」

「——約束する」

小指を差し出し、俺も自分の小指を絡めた。

ポセイドンは彼女たちをあつきりと通し、俺とアंक、ポセイドンの三人だけがこの場に残った。

「随分と待ってくれるんだな」

「……………」

「何も言わないのは『早く変身しろ』ってどこか」

アंकが訳してくれるが、大体それで合っているだろう。

俺はオーカテドラルを腰に当て、ベルトとスキヤナーを装備。

タカ、トラ、バッタの三色のメダルを装填。

バックルを傾け、スキヤナーで読み込む。

「タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

オーズ タトバコンボへの変身が完了し、俺はメダジャリバーを構える。

ポセイドンも無言でディーペストハープーンを構え、お互いに臨戦態勢に入る。

先に動いたのはポセイドン。

奴は突きを繰り返し、俺はそれを避け、避けきれない攻撃をメダジャリバーでいなす。

次いで左から大振りの一撃。

トラクローを展開して攻撃を受けきる。
槍とクローが擦れ合い、金属音が鳴る。

「ぐ…… 以前よりパワーが上がってる……」

けどそれは俺も同じ。

デーパーストハーブーンを弾き、体勢を崩したポセイドンの懐に素早く入る。

「は……は……はあ……」

腹部にパンチを打ち込み、ポセイドンを壁まで吹き飛ばす。

だがポセイドンは立ち上がり、槍を構えて迫ってくる。

右に左に攻撃を避け、槍を掴んでポセイドンと肉薄する。

おかしい。相手の攻撃が単調……というより、戦い慣れていないような気がする。

姿形はポセイドンだが、変身者が違うのか……？

「おい、ヨタ何してる！ さっさと決めろ!!」

「あ、ああ……」

槍を離して後にジャンプ。

スキヤナーでもう一度メダルを読み込む。

「スキヤニングチャージ!!」

バッタレッグの能力を解放して、技の体勢に入る。

脚にエネルギーを溜め、跳躍。

両足を揃え、タトバキツクを放った。

しかし――。

「っ!？」

怯んだ……ではなく、怯えた挙動を見せたポセイドン。

その姿を、かつての彼女と重ねる。

油断させる為の作戦かもしれない、そう考えることも出来ただろう。

けど俺は……。

「くそっ!」

体を大きく横に逸らしてポセイドンを避け、技は壁を破壊するに留まった。

「お前……マジで何してんだ」

「あんな姿見たら攻撃なんて出来る訳ないだろ。ねえ、君は果南ちゃんなんですよ!？」

「っ!？」

正体を見破られたことに動揺し、一步退いた。

「その反応、やっぱりそうなんですよ?」

また一步。

そして彼女はゲートに飛び込んで消えてしまった。

「待って果南ちゃん！アंक、追うぞ！」

「どつちにしろ行かなきゃいけないからな」

俺とアंकは彼女の後を追うべく、ゲートをくぐったのだった。

「くくくく……全て計画通りです。フェーズ1は終了。フェーズ2に移行しましょう」

次元王は、アंक、耀太、そしてポセイ^果イドン^南がゲートの向こうに消えたのを確認すると、コンソールを起動して操作を始める。

複雑怪奇な数列が画面に並んではスクロールしていき、やがて画面中央に「ENTE R」の文字が現れ、点滅する。

「フェーズ2、開始」

次元王はその文字に手を当て、操作を全て終えた。

それと同時に、二つの地球の大地が大きく揺れ始める。

謎の地震に戸惑う人々。

次元王に欺かれた人々は、それが頭上の上の地球に住む者たちによって行われたのだと誤認する。

そして戦士たちは気付く。

大地から出現しようとしている謎の物体に。

果南を追う耀太とアंक。

「ヨータ、あれを見ろ！」

「何だよあれ……」

仲間の元へ向かうヨウタたち。

「嘘だろ……」

「これは……」

交戦しているアビスと五人のライダーたち。

「くくくく……とうとう始めやがったな」

「お前たち……一体何を企んでやがる!?!」

「佐藤！避ける！」

二つの地球に現れた巨大な女人像。
にょにんぞう

その美しさに人々は絶句する。

だがその像は、世界を破滅へと導く災厄そのものであることを、まだ誰も知らない。

突如として現れた巨大な女人像。

上半身は人形なのだが、下半身がどう見ても魚類の類いのものだ。

きつと奴の仕業に違いないだろう。

けど今は果南ちゃんとのチェイスの真っ最中。

いつの間にかアंकが消え、俺一人で奮闘していた。

「流石果南ちゃんだ……足は速いし、スタミナも全然切れてないみたい……」

それに引き換え、俺は息が上がり始め、足も限界が近い。

アंकの野郎マジでどこ行きやがったんだよ!?

そう思った矢先、果南ちゃんの目の前にアंकは降りてきた。

「……っ!」

「はあはあ……やっど追いついた……」

「ったく、このくらいでへばってどうする」

「悪かったな……こちらら体力は普通の人間並みなんだよ……」

二人で挟みうち——と言っても俺はもう追いかけることも出来ないが——にし、逃げ

場を失わせる。

「……どうして追いかけてくるの」

「どうしてって……そりゃあいきなり逃げたから……」

思っていたのと違う答えを返されたからか、「じゃあ……」と、質問を変えてきた。

「どうしてあの時技を当てなかったの……」

「言ったでしょ。あんな怯えた姿見ちゃったら攻撃なんて出来ないって」

「わたしはあなたを攻撃したんだよ!? それなのにどうして!？」

どうして、という悲痛な怒号。

まるで、あの時倒して欲しかったと言っているかのように聞こえる。

俺は一息吐いて、その問いかけに答えた。

「だって果南ちゃん、怖かったんでしょ?」

「え——?」

「まあ、誰だってあんなの食らうのは痛いだろうし怖いと思うよ。俺たちはそれを覚悟で戦ってるけど、果南ちゃんからはこう……半ばヤケクソみたいな感じがしたんだよ。逆らえない誰かにやらされてるみたいなの」

果南ちゃんは黙って俯いてしまう。

聞いているかどうか分からないが、俺は続ける。

「もし何か嫌なことや辛いことがあるなら俺に言っつて。俺は君の力になるから。……つて言っつても俺なんかが出来ることなんて限られてるし、本当に力になれるかは分からないけど……」

「……して」

「え?」

「どうして……そんなに優しくするの?」

俺の胸に泣き崩れた彼女の体はとても冷たく、それだけで俺は何もかも悟ったのだった。

泣き止んだ果南ちゃんから、大体の事情は聞くことが出来た。

まず一つ、この果南ちゃんばパラレルワールド、それも俺が倒れた最悪の世界から来たらしい。

続いて二つ、俺が倒れた際、果南ちゃんも一度息絶えたはずだったが、あの次元母艦の中で目覚めた。

そして三つ、彼女ともう一人、アビスはネクロオーバー——通称NEVERの進化系、^{ニュー}レネクロオーバーであること。

通常NEVERは特殊な酵素を注入することで体を保つが、彼女たちはそれを必要としないらしい。

またNEVER同様、不死身らしいがマキシマムドライブやそれに相当する技を受ければ死んでしまうと言う。

だからさつきはあんなに怯えてたんだな……。

「ごめんね、そんなこと知らずにあんな攻撃を……」

「ううん、耀太は何も悪くないよ。むしろ当然のことだと思う」

知らなかった……とは言え果南ちゃんに剣を向けてしまったことに罪悪感を感じぎ

るを得ない。

二人とも黙ってしまい、気まずい空気になるが、それも一瞬だった。

「何揃って辛気臭い顔してんだ」

「アंक……：……しようがないだろ、実際そんな話してたんだから」

「ほら、お前らも食つとけ」

アंकから渡されたのはアイス。

「お、お……：……てかお前これ買いに行ってたのか」

さつきから見えないなと思つたら……。

「ありがとう、アंकさん……」

「気にするな。お前ら二人に倒れられるとチカたちがうるさいからな」

そう言いながらアंकはアイスを頬張る。

果南ちゃんが話してくれたんだ。

今度は俺の番だな。

「それじゃ今度は俺の秘密を教えるよ。みんなも、こつちの果南ちゃんも知らない秘密」

「耀太の秘密？」

この時は知らなかったのだが、アंकの奴は俺の体のことを果南ちゃんに喋っていた

らしい。

まあ、その話はまた後でということ……。。

俺は左腕に力を込める。

「!?その腕……」

「俺もね、もう人間じゃないんだ。体の中にメダルが入り込んで、それからどンドングリード化が進んで、今じゃ味も景色もハッキリしない。みんなの歌も……」

「そんな……」

「でも、体が怪人になってしまっても、人間じゃなくなっても、心は……心だけは人間でいるつもりだから……」

「心……」

アंकクが買ってきたアイスを平らげ、立ち上がる。

「さて、そろそろ行こうか」

「え、行くってどこに……」

「学校だよ。ヨウタクくんたちが音ノ木と入れ替わったって言ってたから、多分音ノ木があったところに浦の星があるんじゃないかな」

「わ、わたしは……」

「果南ちゃんも行くよ」

俺は果南ちゃんの手を握り、引いていく。

「あ……」

冷たいはずの彼女の手。

それが少しだけ、温もりを持った気がした。

そして彼らの言った通り、浦の星学院の校舎は音ノ木坂学院があつた土地に建つていた。

「千歌ちゃん！」

「耀太くんにアंकさん！それから……え？果南ちゃん!？」

最初に再会であつたのは千歌ちゃん。

良かった……無事だったのか。

果南ちゃんを見て驚いている反応を見るに、ヨウタくんたちはもう着いているのだらう。

果南ちゃんは俺の後ろに隠れてしまった。

「あー……そのことなんだけど、みんなを集めてくれないかな？」

「……えーつと、実はね……」

「？」

俺たちがここに向かっている間に起きた出来事を千歌ちゃんは教えてくれた。

浦の星ごところらの地球に来てしまったこと。

μ sのメンバーと会ったこと。

ヨウタクくん同様、ごところらの地球にも仮面ライダーがいたこと、などなど。

「なるほどね……とにかく一度集まって話をまとめよう」

「そうだね」

千歌ちゃんに頼み、鞠莉ちゃんに話を通してもらい、浦の星のアイドル部＋アルファで十六人、音ノ木坂アイドル部＋アルファで十四人、総勢三十人が俺たちのクラスに集まった。

改めての自己紹介を済ませ、俺たちと一緒に来た果南ちゃんのことを話す。

「つて言うわけで、果南ちゃんは次元王に従ってたみたいなんだ」

「そうだったんだ……」

みんなが暗い顔をする。

そんな中、

「辛かったよね、果南ちゃん。でももう大丈夫だから」

千歌ちゃんが彼女に近づき、抱きしめた。

一瞬、千歌ちゃんが悲しげな表情カオになる。

だがすぐに優しい表情に戻った。

「千歌……」

「そうね、たとえ別の世界だったとしても果南は果南。Aqoursのメンバーで、わたしたちの大切な仲間よ」

「鞠莉……」

千歌ちゃんに続いて鞠莉ちゃんも果南ちゃんにハグする。

耐えきれなくなつたのか、果南ちゃんは泣き出してしまった。

「果南先輩……良がっただです……ほんとう本当に良がっただです……」

いつぞやと同じくらいに号泣する慎司。

「宮沢……お前泣き過ぎだろ……」

「慎司さんはこういうの本当に弱いですからね」

シユウジくんが慎司の泣きっぷりを見て引き気味になり、晴也がそれをフォローする。

それから十分後、果南ちゃんは落ち着いたように泣き止み、本題に入る為に話を切り出した。

「今俺たちが置かれてる状況だけど、はっきり言ってかなり分が悪い」

「ああ。俺の偽物に大量の怪人。おまけに変な像まで出てきたときた」

そう言ったのはユウヤくん。

自分と同じ姿で暴れられたことになんり頭にきているようだ。

「あの像、外の人たちは綺麗だなんだって言ってるけど、俺には悪魔にしか見えないのだが」

「それには同意です。なんなら俺のスターライトブレイカーで……」

「うん、それは違うと思うんだ（います）」

カザリと晴也からのWツツコミをもらう慎司。

だがそれを実行したとしても破壊できるとは正直思わない。

刹那、

『キイイイイイイイツ!!!』

「!？」

女人像が不快な音を発した。

脳に直接響くような音。

「ぐっ……何だこれ……」

その中に……。

「よ……耀太？」

「悲鳴だ……」

「何？」

俺の言葉に反応したフミくん。

頭を押さえながら俺に問うてきた。

「悲鳴つて……どういいうことだ……？ どうしてお前は平気なんだ……」

「それは……」

おそらく、俺がグリードだから。

その証拠にアंकは人間の体に憑いているから影響を受けているが、カザリからはそんな様子は見られない。

「そんなことよりこの音、これがある限り、ボクたちはまともに戦うことも出来ないね」
「……もしかしたら、あの像は悲鳴……いや、人間たちが発する恐怖や憎悪。そういった負の感情を吸収してるのかも」

「なるほどな……あの音はさしずめ吸引音つてところか……」

やがて音は収まり、教室は静かになった。

奇怪な音から解放されたみんなは立ち上がる。

「俺たち以外の地球人からしたら、あれは上の地球からの攻撃……つてことになるんか？」

「そうだろうな。早く何とかしないと……」

ヨウタクんとシオンくんが予想を立てる。

けれど相手に動きがない以上、こちらも動くことはできない。

「けど敵がどう動くかわからない今、下手に動くのは危険だと思うわ。夜のうちにカンドロイドたちに情報を集めさせるから、今日は明日の為に休みましょう」

その一声で今日の話し合いは終了。

バラバラになるのは危険だということで、鞠莉ちゃんの理事長権限を発動し、全員が浦の星に泊まることになった。

ちなみにその時の音ノ木側の反応としては……

「理事長!?嘘だろ!?!」

「ハラショー……」

などなど、予想通り過ぎるものだった。

次元母艦司令官室にて。

次元王はある人物と通信していた。

「そちらの様子はどうですか?」

『こちらは何も問題はありません。けれどこちらに仮面ライダーが大集合していますねえ』

同じ口調、同じボイスチェンジャーを使い、話す人物。

「ですがあなたの？それ？もあと少しで使えるようになりますね」

『ええ。フェーズ2は順調に進んでいます。？これ？を使えるようになるのも時間の問題です』

「義勇軍の方がどうなりました？」

『ふふふ……船の定員がオーバーするほど集まりましたよ』

「やはりわたしたちは同じなのです」

二人は同じ声で笑う。

その手に握られたドライバーは、三分の一が真の姿を取り戻していた。

学校で夜を過ごすなんて、決勝があつたあの日以来だ。

中々寝付けなかつた俺は屋上に向かい、足を進めていた。

「あ……」

屋上に続く最後の階段の前で二人の果南ちゃんと出会った。

……凄いいシーンだなこれ。

「二人とも眠れなかつたんだね」

「耀太も、でしょ？」

「ちよつとね。二人も屋上に？」

「うん」

屋上に出ると、内浦で見える景色とはまた違ったそれが広がっていた……つて当たり前か。

光の消えない街。

そして、大きな地球もまた、暗闇の中でも消えることは無い。

そして巨大な女人像。

初めの一回目の音が鳴った数時間後、現時刻からすると二時間ほど前にもう一度音が響いた。

何か良くないことが起きてるのだろうが、今のままではどうすることも出来ない。

「耀太、顔が怖いよ?」

悔しさが顔に出ていたのか、果南ちゃんに指摘される。

「そんなに?」

「そんなに」

「マジか……」

「悩みがあるなら一人で抱えないで。あなたの側にはずっとわたしがいるから」

寄り添ってくる果南ちゃん。

出来ることなら腕を回したい。

が、ここにはもう一人の果南ちゃんがいる。

同情のような念を覚えるのは失礼ではないかと思うも、やはり人間であるからか、無意識的に感じてしまうのだ。

「ねえ」

不意にその果南ちゃんから声をかけられた。

「な、何？」

反応が遅れ、少しばかり変な返事になる。

「ずっと気になってただけけど、こっちのわたしと耀太はその……恋人同士なの？」

やはりその質問をしてくるか……まああんなことをすれば、そう思わなくはないか……。

今日の出来事が鮮明に脳に焼き付きすぎて、すぐに思い返される。

「うーん、まだ付き合っていないんだよね。でも約束してるんだ。ラブライブと俺たち仮面ライダーの戦いが終わったら……その……け、結婚を前提に付き合おうって」

……かつてこんなにかたがたに恥ずかしい思いをしたことがあるだろうか、いやない（反語）。

あつて、あの告白をした時だけ。

……高校生のくせして結婚を前提にとか……なんてことを言ってしまったんだろうな、過去の俺……。

「け、結婚!？」

「しー、だよ?」

「ご、ごめん……」

まあ、そうなるよね、うん。

「わたしもそう言われた時はすごく驚いたから分かるよ」

苦笑しながらもう一人の自分にそう言う果南ちゃん。

「でもすごい嬉しかった。耀太がわたしを選んでくれて——」

「俺は選んだつもりは無いんだけどなー。果南ちゃんのが好き、その心に従っただけだよ」

「も、もう耀太!」

「え!?俺だけ!?果南ちゃんも赤面ものなこと言ったよね!？」

果南ちゃんとわちやわちやと言いつ合っていると、

「二人とも!」

「はい!？」

「しー、じゃなかったの?」

「すみません……」

もう一人の果南ちゃんに諭された。

「よろしい。ふふ……でも羨ましいな。もしかしたらわたしも……そうなのかなー」

星明かりに照らされた果南ちゃんの微笑みは、どこか切なげで、声をかけるのも憚れる。

それから少しすると眠気がやってきて、俺たちは部屋に帰り眠りについたのだった。

翌朝、女神さまの呼びかけで、俺たちは昨日のように教室に集められた。

どうやらカンドロイドたちによる調査が終わったので、その報告のようだ。

「夜の調査で分かったことはあの船に集められた義勇兵がすでに定員を超えたこと。それからあの像。あれは昨日耀太が予想したように、人間の負の感情を吸収するマシンよ。そして吸収された負のエネルギーは次元王が持つ何らかの兵器に動力源、あるいは起動させるためのエネルギーに変換されていることの二つよ」

「やっぱりそうか……」

「待つてください！兵が集まったってことは……！」

「今日中に攻め入るつもりね」

「!?!」

早い。あまりにも早すぎる。

何一つ対策できないうちに敵の作戦が動き出してしまふなんて……。

「こうなつたらもう敵に殴り込みに行くしか……」

「でもそれって危険なんじゃ……」

「それでも行くしか……!」

「やめなさい二人とも」

言い争いを始めようとしていた善子ちゃんと慎司を、女神さまが止める。

「ここでそんなことをしていても敵の思うつぽよ」

さつきも言ったお通り、敵は負の感情を力に変える。

つまり、俺たちが仲間割れを起こせば敵が強くなってしまふということだ。

「わたしたちに残された手段はたった一つよ。ここにいる全員が協力して敵を……次元

王を倒すこと」

「その通りだね。ボクたちが勝つにはそれしかない」

女神さま、さらに力ザリが念を押す。

「あのアビスとかいう仮面ライダーも気になるわ。あらかじめ分散して行きましょう。

幸いにもここには仮面ライダーが九人、わたしも入れて十人いるわ」

「ちよ、神子さん!?!それって果南ちゃんも含まれてない!?!」

「ええ。今は戦える人は一人でも多い方がいいわ」

「それはそうだけど……」

それでも奴らからすれば果南ちゃんは裏切り者。

もし負けたら、捕まってしまうばどんな目にあわされるか……。

その点を踏まえても残ってほしいんだけど……。

『どちらにしろ同じことじゃ。ここに残ってもアビスが連れ戻しにくる。なら大人数で行動していた方が安全じゃ』

念話で話しかけてくる女神さま。

そうか……女神さまもただ果南ちゃんを危険にさらそうとしているわけではない。

考えられる最善策を言ってくれたようだ。

「ありがとうございます。でも大丈夫、わたしも行きます。あの船の構造もよく分かってるし、それにあの人の、次元王の居場所も」

「ありがとうございます」

果南ちゃんも一緒に攻めることになり、女神さまの指名で二チームに分けられた。

俺、果南ちゃん、アंक、シウウジくん、シオンくんチームとヨウタクくん、フミくん、ユウヤくん、慎司、晴也チームに分けられた。

ちなみに神子さんは「わたしは別にやることがあるの」と言って、そして護衛要員でカザリがμs、Aquoursのみんなとどこかに行ってしまった。

先輩たちと別れ、現在船に向かって進行中。

いつ戦闘になっても良いように全員変身済みだ。

「人っ子一人見えないな」

「ですね。女性や子供はみんな家の中つてことでしょうか」

「だろうな。次元王アイツの言った通り怪人が攻めてきたんだからな。ま、それはアイツの手先なのは間違いないが」

不気味な静寂の中母艦を目指して進む俺たち。

だがやはり、それは阻まれることになる。

「ストライクベント」

どこからか水流攻撃が放たれた。

「危ない！」

あの攻撃の的は俺。

それに気付いたアクア佐藤ちゃんが俺は弾き、庇ってくれた。

「佐藤（ちゃん）!?!」

胸の前でクロスして防御しているアクア。

やがて水流攻撃は、その勢いが弱まっていき、アクアのベルトに吸収された。

「ほう……俺の攻撃を防ぎ切ったか」

昨日俺たちを襲ってきたライダーと同じ声。

「アビス……！」

アビスラッシャー・アビスハンマーを従え、見下ろしてきたアビス。

「ためえか、俺の偽者は！」

「あん？あー……そういうことか。ふ、残念だが俺は偽者じゃない、本物だよ。ただし、蘇ることの無かった世界線のな」

もう一人の果南先輩の言った通りか。

まあそれが証明されたところで倒すだけなのだが。

「黙れ。俺からしたらお前は偽者なんだよ」

「アドベント ソードベント」

こちらのアビスもアビスラッシャー・アビスハンマーを召喚。
ユウチャン

さらにアビスセイバーも装備し、偽アビスに斬り掛かる。が、

「本物を名乗る割には随分と弱すぎるんじゃないか？」

アビススクローで防がれ、そのうえ本物のアビスが押されているように見える。

契約モンスターたちも本人と同様に、偽アビスの方が押しているようだ。

「あのバカ、一人で突っ込みやがって！」

「ソードベント」

ユウタさん
王蛇もベノサーベルを召喚し、加勢に入る。

だが、本物のアビスラッシャーを倒した奴のアビスラッシャーが王蛇の前に出る。

「くっそーどきやがれ！」

しかしアビスラッシャーは退くことなく、立ちはだかる。

「俺の邪魔はするんじゃないぞ！この偽者は俺が倒す!!」

「弱者のお前が勝てる訳ないだろ」

奴はアビスクロードでユウヤさんのアビスセイバーを奪い投げ、腹部に蹴りを叩き込む。

「がっ……」

「おらー！」

更にもう一撃加えられ、ユウヤさんは転がされ、変身が解除されてしまう。

「弱い！弱すぎる!!弱すぎて話にもならねえ!!」

ユウヤさんを下し、高笑いするアビス。

「アイツをたつた二発で……」

「どうやら強さは本物みたいですね」

「テンガン！グリム！メガウルオウド！ファイティングペン」

「ドリルアーム クレーンアーム ショベルアーム カッターウィング キヤタピラ
レッグ プレストキヤノン」

ネクロムフミさん、そして俺の二人がフォームチェンジしてアビスと対峙する俺たち。

「俺一人に対して最大火力か」

ネクロムが仕掛けた先制攻撃をアビスクロードで叩き落とし、変形させたガンガン
キヤツチャーを同じくアビスクロードで防ぐ。

「流石にこれは防げねーだろおお!!」

キヤタピラレッグ、ドリルアームを出力全開でアビスに突っ込む。

しかし、アビスラツチャー同様、勝利したアビスハンマーが盾となり、攻撃を防いだ。

さらに胸部の主砲にエネルギーを溜めている。

「ちっ……」

「プレストキヤノン セルバースト!」

互いにゼロ距離で砲撃、俺もアビスハンマーも吹き飛ばされ、俺は変身解除、アビス
ハンマーも主砲が潰れる重症を負った。

「かは……」

「慎司さん!」

「佐藤ちゃん……!俺のことは良い!早く奴を止める!」

「っ！分かりました！」

俺に駆け寄って来た佐藤ちゃんに喝を入れ、アビスに向かわせる。

「もう二人ダウンか。あっけないな」

ネクロムたちを軽くあしらいながら挑発してくるアビス。

「ダイカイガン！オメガファイニッシュー！」

「アクアボルテエックス!!」

合わせて必殺技を放ち、アビスに集中砲火を浴びせる。

完全に決まった、誰もがそう思えるこの場面。

しかし、

「ネオサバイブ」

その音声とともに、その希望は打ち砕かれた。

「何?!アビスラッシュャーが……」

ヨウタさんと交戦していたアビスラッシュャーと、気を失っていたアビスハンマーが合体し、アビソドンに。

さらにアビソドンがバラバラになり、必殺技を浴びたアビスに向かつていく。

「うわああああ!!」

爆発が起き、佐藤ちゃんが吹き飛ばされ、変身が解ける。

そして爆発後に発生した煙が消え始めると、右手を突き出したアビスが、アビソドンを纏ったような姿で現れた。

「な……！技を消しやがったのか!？」

禍々しい鎧を纏ったアビス。

「力が……力が溢れる!!!」

その咆哮と同時にどす黒いオーラが放たれる。

「何だこの威圧感……全く勝てる気がしねえ……けどやるしかねえ!!」

ネクロムが武器を構えて突っ込む。

しかし――。

「かは……攻撃が……見えない……」

何が起きたのか理解出来なかった。

ネクロムの前に立っていたはずのアビスが、いつの間にかフミさんの背後にいて、その彼は倒れ、変身が解かれてしまった。

「ふっふっふ……ふははははは!!!遂に俺は最強の存在になった!!!俺に敵う者など存在しない!!!」

高々に笑うアビス。

五人いたうちの四人が既に倒され、残るはヨウタさん一人。

「ヨウタ……早く逃げろ……」

「バカ野郎！ダチを置いて逃げるなんて出来るかよ！それに、どうせ逃がしてなんてくれないだろうしな」

王蛇は、フミさんの警告を無視し、ペノサーベルを構えて対峙する。

「その通りだ。お前たちは一人残さず殺してやる。が、勝てないと分かっているでも立ち向かうその勇気を讃え、全員仲良くあの世に送ってやるよ」

「ファイナルベント」

アビスの右足に青黒いエネルギーが凝縮されていく。

このままだと本当に全員殺されてしまう……！！

飛び上がり、ライダーキックを放ったアビス。

万事休すか……。

キックはヨウタさんに直撃……することは無かった。

「Ready? Go! ハザードファイニーッッシュュ!! ラビットラビットファイニーッッシュュ!!」
「何!?!」

黒いボディに赤い鎧を纏ったライダーがどこからともなく現れ、技を相殺……どころか、アビスを押し返してヨウタさんを守った。

この場にいる全員が、今の状況を上手く掴めていない。

突然現れたライダー。

俺が言えることはたった一つだけ。

今俺たちの目の前にいるこの仮面ライダーは、俺たちを救ってくれたということだけだ。

「ギリギリセーフ……だな」

黒いライダー……間違いない。

彼はビルドだ。

けどどうしてこの世界に……。

「貴様……何者だ!？」

悪役お決まりのセリフを彼に投げかけるアビス。

トドメになるはずだった攻撃を防がれ、さらに自分の力を超えられたかもしれないことからの怒りと焦りが奴の声から伺える。

「俺? しかないよね。俺は仮面ライダービルド。創る、形成するって意味のビルドだ。

以後、お見知りおきを」

「ビルドだあ? 何者かは知らないが、俺の邪魔をしたことを後悔させてやる!!」

アビスが拳にエネルギーを乗せ、ビルドにパンチを食らわせる。

しかし、

「ふむ。中々いい一撃だね」

ビルドはそれを片手で受け止める。

「マジかよ……」

開いた口が塞がらないとはこのことか。

フミさんは、自分が見ることの出来なかつた攻撃をいとも容易く受け止めた彼に驚きの一言。

「それじゃあ今度はこっちの番かな？」

ビルドは空いている右手で、アビスのマスク目掛けてパンチした……と思う。

ビルドの攻撃もまた、速過ぎてみる事が出来ない。

「が……」

頭を揺らし、後ろに下がるアビス。

ビルドは隙だらけになったアビスに追撃。

やはり見ることは叶わない。

「あり得ない……この俺が負ける訳ない!!」

怒りに任せた攻撃を難なく回避。

攻撃を仕掛けた本人は、腹部に強烈な一撃を叩き込まれたのか、腹を押さえる。

「クソがああ……!!」

怒りが極まったのか、黒いオーラが溢れて建物や地面を抉る。

「あつぶな……でもあと少しダメージを与えれば、大人しくなるかな？」

ビルドはフルフルボトルを抜き取って、上下に振る。

「タンク！」

ボトルからタンクの音声が出ると、再び折り曲げ、

「タンク&タンク！」

ベルトに装填する。

「ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！Are you ready?」

タンクタンクアーマーがどこからともなくやって来て、アビスに砲撃を浴びせる。

「ビルドアップ！」

「鋼鉄のブルーウォーリアー！タンクタンク!!ヤベー！ツエーイ!!」

ビルドは纏うアーマーをラビットラビットアーマーから、タンクタンクアーマーに換装。

タンクタンクフォームへの変身が完了した。

「何がヤベーだ！色が変わった程度でええええ!!」

「色だけじゃないんだなあ」

ビルドが正座すると、脚部のダッシュユマッシュユガレースが、まるで戦車のキャタピラのようになり、動き始める。

アビスの周囲を囲うように動き、逃げ場を失わせながら、フルボトルバスター　キャノンモードで砲撃を繰り返す。

「クソ！クソ！クソ!!」

反撃のチャンスすら与えず、一方的に追い詰めていくビルド。

彼はボトルを一本取り出し、バスターに装填。

「ラビット！フルボトルブレイク！」

まずは一撃。赤いエネルギー弾が、アビスを吹っ飛ばす。

「ラビット！パンダー！ジャストマッチです！ジャストマッチブレイク!!」

紅白カラーのエネルギー弾が、さらにアビスを襲う。

「ラビット！パンダー！電車！ミラクルマッチです！ミラクルマッチブレイク
!!!」

赤い大きなエネルギー弾がアビスに直撃。

ビルドはまだ止まらない。

四本目を取り出して装填する。

「ラビット！パンダー！電車！ダイヤモンド！アルティメットマッチです！アルティ

メットマッチブレエエイク!!!」

セツトされたボトルと同じ色のエネルギーが収束されていき、充填が終わったところで、彼はトリガーを引く。

途轍もない量のエネルギー砲。

俺のブレストブレイカーを超える威力であるのは見ただけで分かる。

「ぐわああああああ!!!」

砲撃に飲み込まれたアビス。

エネルギーが爆発した後、そこに奴の姿は無く、立っていたのはヨウタさんとビルドだけだった。

「嘘だろ……あの化け物を倒しやがった……」

傷を押さえながら立ち上がるフミさん。

「な、なあ……アンタは一体……」

「うん? あ、そうだ。これを君に」

ビルドはヨウタさんに一枚のカードを渡した。

「これは……?」

「それは次元王を倒す為の切り札だ。それじゃ、人を待たせてるから、俺はいくよ」

カードを手放した彼の背後にワームホールのようなもの……というか、まんまワーム

ホールが現れた。

ホールの向こうに消えようとするビルド。

ヨウタさんは、彼に最後の質問をした。

「ちよつと待ってくれ！本当にアンタは何者なんだ?！」

「そうだな……君たちと同じ、愛と平和の為に戦う仮面ライダー、とだけ言っておくよ」

そう言い、彼はワームホールをくぐり、そのホールも消えてしまった。

「ヨウタ……今の人がくれたカードは……」

「これ……よく分かんねえけど、これから凄^{すげ}え力が感じる」

「それじゃあ……」

「行ってくる」

ヨウタさんがそう言い、エビルダイバーを召喚して耀太先輩たちのところへ向かった

直後、

「おおおおおおお!!!」

「っ!?!」

男たちの勇ましい叫び声が聞こえ、迫り来るトルーパーのような集団が見えた。

まさか義勇軍が……間に合わなかったのか……。

そう思った刹那、キイイーン!という音が響き渡る。

あの女人像からのものと、それを掻き消そうとする音。

スピーカーから聞こえてきたものだ。

「何だ今の……」「おい！あれを見る！」

すぐそこまで迫っていたトルーパーたちから、何かを見つけたような声が聞こえた。彼らの視線の先に何かがあるのか？

俺たちもその方向に目を向けた。

「マジかよ……」

そこにあつた……いや、浮かんでいたのはライブの為のステージ。

そしてステージ上には十八人の少女たちと、仮面ライダーポッピーが立っていた。

「ライブをする!?!」

わたしたちを学校から連れ出した神子さんはいきなりライブをするという話を切り出した。

「ど、どうしてこんな時にライブを?」

「こんな時だからこそよ」

「?」

神子さんの意図が全くわからない。

それは他のみんなも、μΣsのみなさんも同じだった。

「このままだと、仮面ライダーたちは絶対に勝てないわ」

みんなが驚きの声をあげる。

絶対に勝てない。

今までは、「仮面ライダーは何があつても負けない」というような話しかしてこなかった神子さんが、「絶対に勝てない」と言い放ったからだ。

「耀太くんたちが絶対に勝てないってどういうことですか!？」

「それは、次元王の力が実質的に無限大だからよ」

「無限……大……?？」

「さっきも話した通り、次元王はあの像から力を得ている。そしてあの像力の源は……」

「人間の負の感情……」

「そうよ、園田さん。今この地球は負の感情で溢れかえっている。次元王は惑星単位で力を集められるのよ」

「そんな……」

惑星単位……。

それは規模の大きすぎる言葉。

「仮面ライダーが負けるなんてウソよ……そんなことありえないわ……」

真姫さんがそれを否定する。

けれど……。

「見てみなさい。これが現実よ」

神子さんが開いたタブレット端末。

映し出されていたのは、ボロボロになりながらも立ち上がるとする仮面ライダーの姿。

「シン……」

「フミくん……」

善子ちゃんと同じくさんが彼らの名を呟く。

「ライダーたちを救うには、あなたたちの力……あなたたちの歌の力が必要なの」

「歌の力？ 本当にそれで耀太さんたちを助けることができますの？」

「ええ」

信じたい、けど簡単には信じられないというのがみんなの本音だと思う。

なら、わたしは……。

「やろう！」

みんなの迷いに揺れる顔を見ると、そう叫ばずにはいられなかった。

「千歌？」

「穂乃果？」

「今までわたしたちは色々なことに立ち向かってきたよね？それを支えてくれたのは誰？・耀太くんたちでしょ？」

「わたしたちもだよ。ヨウタクんたちは素直じゃないし、素行もあまりいいとは言えないけど……けど穂乃果たちのことを守って、支えてくれた。だから今度は……」

わたしたちは声を揃えてみんなに訴えた。

「わたしたちが仮面ライダーを助けようよ!!」

ずっと支えてくれていた彼らを、今度が自分たちが支えるんだと。

「そうね……二人の言う通りだわ」

「いつもは助けられる立場やったけど、今回はウチらが!」

「イエース! 助けられない理由なんてありません!」

「わたしも!あの時の恩返し!」

絵里さん、希さん、鞠莉ちゃん、曜ちゃんが。

「わたくしも耀太さんには借りがありますわ」

「ルビイも!」

「わたしもフミくんたちのことを助けたい!」

「仕方ないわねー。この宇宙ナンバーワンアイドル、にこにこが力を貸してあげるにこ

！」

「ダイヤちゃん、ルビィちゃん、ことりさん、にこさんが。」

「マルも耀太くんを助けてあげたいぞら！あ、もちろん慎司くんも！」

「くつくつく……どうやらこの墮天使ヨハネが、リトルデーモンたちに力を授ける時が来たようね！」

「わたしも、シウジのことを放っておくのは出来ませんね」

「仕方ないわね。シオン、負けたら承知しないんだから！」

「スクールアイドルの力で仮面ライダーを助ける……いつもは助けを求めてばかりだけど、今回は……！」

「ヒーローを、憧れの仮面ライダーを助ける！凜もやるにやー！」

花丸ちゃん、善子ちゃん、真姫さん、花陽さん、凜さんが。

「梨子ちゃんと果南ちゃんは!？」

「千歌ちゃんつてば……！」

「わたしたちには聞くまでもないでしょ？」

眉をハの字にしながらかう二人。

「決まりみたいね」

「ところで、どうやって歌を力に変えるの？」

カザリくんが神子さんに問いかける。
すると、

「こうするのよ」

神子さんが取り出したのは、緑色のベルトと……ゲームカセット？

「ときめきクライシス！」

「ドレミファライブ！」

「変身！」

「ガシャット！ガッチョーン！レベルアップ！」

背伸びしたいけど、ちよっぴり照れるわ、ときめきクライシス！

アガツチャ！ド・ド・ドレミファソライブ！ダンシング！ドレミファライブ！！

軽快なリズムの音楽とともに、パネルのようなものが現れ、神子さんはその中の一枚を選ぶ。

すると、ピンクのボブカットにハートの髪飾り。

青い瞳の仮面ライダーに変身した。

「……神子さんも仮面ライダーだったの？……それにしても耀太くんたちと少し違うよ
うな……」

「わたしもそれは思ったけど、ちゃんとした仮面ライダーだよ。それにかんりの強さの

ね」

そう告げる果南ちゃんの瞳はどこか遠くを見つめていて、まるで、あの可愛らしい姿に反する戦いを見たようだ……。

「まだ終わってないわ」

神子さんがそう言うのと、頭上に神子さんが押したのと同じようなパネル、それもかなりのサイズのものが現れた。

そこから出てきたのは……。

「ライブのステージ!?!」

「衣装はこれでいいかしら?」

いつの間にか神子さんが手にしていたマイク。

それについていたボタンが押されると、わたしたちの服がステージ衣装に変化した。

「す、凄い!」

「ハラシヨ……」

「アメイジング……」

花陽さん、絵里さん、鞠莉ちゃんが驚嘆の声を出す。

他のみんなも驚いているが、三人と違い、声が出せない様子。

「さ、みんな乗って」

「乗るってあれにですか!？」

「それ以外に何かあるの？」

疑問符を浮かべる神子さん。

みんな戸惑っているが、

「ヨウタクんたちが待つてる！みんな、行こう!!」

穂乃果さんが声をかけ、みんながステージの乗った。

その後、ステージは再び浮かび上がり、進み始めた。

ガーディアンやマスカレイドなどの戦闘員たち以外との接敵が全くないまま、俺たちは次元母艦の艦長室まで辿り着いた。

「はあ！」

技で扉をぶち破り、部屋に突入した。

艦長室にしてはかなり広い。

『彼らが来たようですね』

「そのようですね」

部屋の中央にいた人物。

次元王本人がそこにいた。

しかし、不可解なことに奴の向こう側のモニターにも同じ特徴の人物が映っていた。

「みなさん、ようこそおいで下さいました。おや？あなたも帰って来てくれたのですね」「ふざけるな。お前に果南ちゃんは渡さない！」

俺は果南ちゃんの前に腕を出して庇う。

すると次元王は、それが可笑しかったのか笑い始めた。

「失礼。あなたは中々面白い方ですね、自分たちを攻撃した相手を庇おうとするなど」

「こつちは全部聞いたんだ。お前ら、こいつが逆らえないのをいいことに好き勝手やらせようとしたんだってな」

シユウジくんも怒りを孕んだ声と眼で次元王を睨む。

『怖い怖い。それで？あなた方はわたしたちを倒しに来たど？』

「その口ぶりからするに、お前も次元王とかいう奴か」

『ええ。あなたも随分と相方を心配しているようでしたね』

「は、コイツがいないと、メダルが集められなくなるだけだ」

モニターの向こうの人物——もう一人の次元王とアंकが火花を散らす。

「何が目的でこんなことをしてるんだ!？」

『何が目的か？そんなもの一つしかありませんよ』

「忌々しい、憎たらしい人間どもを根絶やしにする為です。許せないんですよ、下等な存

在でありながら、何かを欲することを許された人間がね!!」

未だ戦闘態勢に入っていないだろうに、奴らから放たれるオーラは異常としか言いようがない。

「なんて身勝手な……なら、尚更お前たちはここで倒す!俺たちの地球ほしと向こうの地球ほしの為にも!」

ギャレンは銃口を次元王に向けた。

「そう熱くならないでください。わたしたちはまだ戦えるだけの力がありません。なので、彼がお相手します」

パチンツと指を鳴らすと、奴の眼前の床がスライドし、その下からユートピア・ドールが現れた。

「とんでもないのを出してきたな……」

既に変身済みな為、そのフェーズは飛ばし、襲い掛かって来たユートピアに応戦した。ギルススクロウを解放したギルスシュウジくんが理想郷の杖での一撃を防ぐ。

「何だこのパワー……今まで戦ってきた相手の誰よりも強い!」

左脚でギルスを蹴り飛ばす。

飛ばされたギルスと入れ替わって、今度は俺がメダジャリバーとメダガブリューの二刀流で攻撃を仕掛ける。

剣での一撃は杖で防がれてしまうが、斧での斬撃はユートピアの体にヒット。後退させることに成功する。

が、すぐに徒手で反撃され、メダガブリューを落としてしまう。

「ふー！」

「はー！」

「ファイア バレット ファイアバレット」

俺が怯んでしまったのをみたアंकと果南ホセイちゃん、ギャレンが後方から遠距離攻撃。

ユートピアの背に当たるが、びくともしていない。

「硬さだけはあるみたいだな」

「いいえ。防御だけではありませんよ。彼にはこんな攻撃方法もあるんですから」

次元王が言うとうと、ユートピアはその杖を振るう。

その力で俺たちは浮遊させられ、床に叩き付けられる。

「うが……!?!」

「きゃ!?!」

地面に押さえつけられた俺は蹴撃をもらい、アंकたちのところまで飛ばされる。

「耀太……」

「俺は大丈夫……アंक」

「分かつてる。重力には重力だ」

アंकはメダルを取り出し、重々しく俺に渡しに来る。

ユートピアの所為で、メダルはいつもより数倍重く感じる。

それでも俺はなんとかメダルをドライブバーまで持っていき、装填、スキャンする。

「サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴゾー！サゴゾー!!」

サイ、ゴリラ、ゾウの三枚のメダルから成る、サゴゾコンボにチェンジ完了。

その能力を解放し、重力を元に戻す。

「体が軽くなった……いや、元に戻ったのか」

重力が元に戻り、立ち上がった俺たち。

次元王たちはこうなることが分かっていたのか、動揺した様子は見られない。

「今度はこっちのターンだ!」

俺はゴリバゴーンを発射する、バゴーンプレッシャーを繰り出し、ユートピアにぶつ

ける。

さらに追撃で、ギルスがクロウで切り裂き攻撃。

二段攻撃を杖で受け止めるも、同じ箇所を受けたからか、理想郷の杖は折れ、ユート

ピアに直接ヒットした。

再び後退するユートピア。

「スキヤニングチャージ!!」

俺はもう一度、スキヤンしてサゴーズインパクトを発動。

ユートピアを引き寄せ、ゴリバゴーンとサイヘッドによる頭突きを食らわせる。

「セイヤ——!!!」

さらに後ろに下がったユートピア目掛けて、今度はギャレンとギルスが前に出てきた。

「ドロップ ファイア バーニングスマッシュ」

「はああああ!!」

ユートピアの胸部にダブルライダーキックを直撃させ、そのまま貫く。

ユートピアは爆散し、メモリはブレイク。

変身者は、消滅してしまっただのか、もとよりいなかったのか、その姿は無かった。

『素晴らしい。まさか、わたしたちが誇るクローン怪人の中でも最強の戦士を倒してしまおうとは』

「さて、残るはお前たちだけだ」

「そうですね。そろそろ良い時間でしょう」

「時間？何のことだ？」

シオンくんが尋ねた直後、再びあの音が響いた。

しかし、すぐに別の音で上書きされる。

「何です？この音……」

奴らにとつても二度目の音は想定外のことだったのか、少々訝しげな声になる。

『大方、彼らの仲間が何かしているんでしよう。それより、これを見てください』

向こうの次元王が取り出したのは、禍々しい形のドライバー。

金色の縁のある黒い堕天使の片翼を模ったバツクル。

一方中央部には、全体的に対称的な色である白いオーブがはめられてる。

「ではお見せしましょう、最終フェーズ!!」

『わたしたちの絶対的な力を!!』

モニターの向こうと目の前の次元王、二人が同時にドライバーを腰に巻く。

「変身!!」

どす黒いオーラがベルトに吸収されていき、二人の体が黒に包まれていく。

そしてモニターからもう一人の次元王が現れ、二人の次元王は一人へと融合した。

やがて闇は晴れ、黒い装甲を身に纏った次元王が姿を現した。

翼を模ったかのような複眼。

オレノツノのようなものが伸びるシヨルダーアーマー。

背部にあしらわれた黒い片翼。

「わたしの名はルシフ。仮面ライダールシフ」

次元王——ルシフと名乗った漆黒の仮面ライダー。

奴からは、変身時以上の闇のオーラが噴き出ている。

「息が……詰まる……」

「あのオーラの所為か……」

シユウジくんとシオンくん、そしてアंकが苦しみだし、二人に至っては、変身が強
制解除される。

「あなた方二人が平気でいられるのは、やはり人間ではないからでしょうか」

その道理で説明をつけようとすると、アंकも平気なはずだが、やはり人間の体に憑
依しているからだろう。

「二人だけでどこまで抗えますかね？」

完全に見下した言い方で挑発してくるルシフ。

けど、そんな安っぽい挑発に乗ってやるわけにはいかない。

「抗う？ いや、勝ってみせる！」

「プテラ！ トリケラ！ テイラノ！ プットツテイラーノザウルース!!」

サゴーズのメダルを弾き出し、プトテイラコンボにコンボチェンジ。

メダガブリューを生成し直し、ルシフに斬り掛かる。

「おっと。先制攻撃はとられてしまいましたか……」

残念そうな声を出すルシフだったが、奴は俺の全力の一撃を片手の、それも人差し指と中指だけで受け止めている。

「くっ……動かない……」

「おや？少し力み過ぎましたか？では——ふん!!」

掴んだメダガブリューを俺ごと投げ飛ばし、俺は壁を打ち抜いてしまう。

「島……村……」

「耀太!!」

オーラの影響で苦しんでいるシユウジくと果南ちゃんが、俺に近寄って来る。

「俺は……大丈夫だから……。それより、アイツ……ユートピアなんか比にならないくらい強い……」

「そんな……」

瓦礫をどかしながら、俺は立ち上がる。

さっきの一撃。

たった一撃で、この威力。

あと一発でも食らえば、変身は解かれるだろう。

けど……。

「やるしかないッ!!」

俺は歯を食いしばり、床を蹴って一直線に跳び、ルシフに殴り掛かる。マスクに直撃するも一ミクロンも動いた様子はない。

もう一撃、さらに一撃。

だがピクリともしない。

「圧倒的過ぎるようですね。あなたの力は確かに素晴らしい。ですが……」
腹部に奴の拳がめり込む。

「が……」

ほとんど残っていないはずの痛覚が、腹に激痛を感じさせる。

「無限の負の力の前では無力でしたね」

腹を押さえる俺に回転蹴りがヒット。

先程の壁を完全に貫き、向かい側の部屋まで飛ばされる。

ダメージが許容範囲を超え、俺の変身も強制解除。

残った果南ちゃんも、あの攻撃を食らえば一撃で消滅してしまうだろう。

つまり、もう誰も勝つことは出来ない。

「耀太！しつかりして！耀太！」

既に体を動かせなくなった俺を果南ちゃんが抱き起そうとする。

「果南ちゃん、早く逃げて……」

「出来る訳ないよ！耀太を……みんなを置いてくなんて!!」
泣きながら叫ぶ彼女。

だが無慈悲にも、奴はそこまで迫って来た。

「どきなさい、果南さん。さもなければあなたも消しますよ」

「いや！わたしはどかない！逃げない！ここであなたを止める！それが出来なくても……せめて最後まで足掻いて耀太と一緒に！」

槍を構え、ルシフと対峙する果南ちゃん。

「ダメだ……！君じゃ勝てない……！逃げるんだ……!!」

しかし彼女は言うことを聞かず、ルシフに槍を振るう。

「やれやれ……彼の言うことを聞いていればいいものを……」

奴に向けられたディーペストハーブーンは、腕で防がれ、砂塵と化する。

ルシフは黒いエネルギー弾を右手に収束し、果南ちゃんに向ける。

「や、やめろ……！」

無情な一撃が彼女に放たれた。

力なく倒れた果南ちゃん。

俺は残っていないはずの力を振り絞り、彼女に近づく。

「果南ちゃん……どうして……」

「ごめんね……せつかく助けてもらったのに……」

抱き抱えた果南ちゃんの体は、塵になり始めている。

「わたしは一度死んだ人間……だからこれで良いの……」

「良くない！良いはずない！折角幸せになれるチャンスがあつたかもしれないのに……！」

果南ちゃんは涙を流しながら続ける。

「みんなと……耀太ともう一度出会えただけで、わたしは幸せだった……。だから今度は……こっちのわたしを幸せにしてあげて……この力で、次元王を倒して……約束だよ……」

「分かった……」

彼女は俺の手に何かを握らせる。

そして……。

「耀太……大好きだよ——」

最期に……最期に果南ちゃんは、その想いは俺に伝え、笑顔で完全に消滅した。「残念でしたね。ですがあなたもすぐに……」

後を追わせてやる、そう言おうとしたのだろう。

「ファイナルベント」

エネルギー弾をもう一度放とうとしていたルシフに、王蛇がキックを叩き込み、吹っ飛ばした。

不意打ちのキックを食らったルシフはかなり遠くまで吹き飛んでいった。

「悪い、遅くなつたな……って、また泣いてんのか!？」

駆け付けてくれたヨウタくん。

また泣いているところを見られてしまった。

「……なるほどな、大体分かった。お前はもう少しそこで泣いてろ。それくらいの間は稼いでやる」

そう言って、彼はエビルダイバーとともにルシフを追った。

……さつきまで隣にいた果南ちゃんは、もういない。

残されたのは、俺の手に握らされた何か。

俺は手を開いて、それを確かめる。

「メダル……」

三枚の透明なメダル。

色も無ければ、動物の意匠も彫られていない。

俺はそれを再び握る。

涙を拭い、天井を見上げる。

「ヨーター！」

ルシフが離れたおかげか、オーラから解放されたアंकが二枚のメダルを投げる。

「アイツの仇をとってこい!!」

「……ありがとう、アंक!!」

視線をアंकから天井に戻し、俺は三枚のメダルを装填する。

「変身!!」

「タカ！クジャク！コンドル！タージャードル——!!」

タカヘッドから進化したタカヘッド・ブレイブ。

固有装備タジャスピナーを装着し、高速での飛行を可能にする翼を持ったクジャクアーム。

真空刃生み出し、また能力を解放することで、強力な一撃を放つことが出来るコンドルレツグ。

そして、他のコンボと一線を画す、三枚で一枚となる火の鳥の紋様を持つ、オーズタジャドルコンボに変身した。

タジャスピナーからエネルギー弾を発射し、天井を撃ち抜く。

穴から空を確認し、翼を展開して飛び上がる。

「はああああッ!!」

ルシフ目掛けて高速で飛び、三十メートルほど手前で回転してキツクの体勢に入る。
「うお!何だ!?!」

ルシフと対峙していた王蛇は、突然俺が乱入したことに驚く。

一方俺は、キツクをルシフに当て、そのまま押していく。

「またあなたですか。あなたの攻撃はわたしには……何?」

「はあああああッ!!」

受け止められたところで、俺はさらに力を込める!!

「パワーが上がっている……!?バカな……そんなことありえない!!」

それでもルシフは俺を跳ね除け、俺は王蛇の隣まで飛ぶ。

「随分早かったじゃねえか」

「いつまでも泣いてなんかいられないよ。それに約束したんだ!次元王を倒すつて!!」

刹那、俺の手に握られていが透明なメダルが輝きを放ち、さらにそのメダルに、どこからか来た虹色の光が集まる。

「その光……一体何なのですか!?!」

予想外過ぎる現象が目の前で起こり、次元王は戸惑いの声をあげる。

俺のベルトからメダルが外れ、輝くメダルと融合。

赤かったメダルは、青に色が変わった。

それを掴むと、色々なものが流れ込んできた。

人々の歓声、そして――

ホンキをぶつけあつて 手に入れよう 未来を！

みんなの歌声。

「お前には聴こえねえみてえだな、アイツらの歌がよ」

「歌だと……」

「そうだ。たくさんの人を笑顔に出来る歌。あの子たちがその歌を歌い続ける限り、俺たちは戦うんだ!!」

俺は手にしたメダル三枚に順番にドライバーにセット。

オースキヤナーをスライドさせ、そのメダルを読み込んだ。

タカ！

クジャク！

コンドル！

タージャードル――!!

どこか熱を感じるいつもの音声ではなく、歌を歌う彼女たちの声で読み上げられたメダル。

青い炎が体を包み、赤いボディを青色に染めていく。

タジャスピナーはスロットが拡張され、最大九枚の装填が可能に。

翼は生物的なものになり、虹色に輝く。

タジャドルコンボ・ブルーブレイズ。

「なら俺も、コイツ使わせてもらおうかな」

ヨウタクくんはベノバイザーに一枚のカードを読み込ませた。

スーパーサバイブ！

こちららも機械音声ではなく、少女たちの声がカードを読み上げる。

頭部から龍のような角が生え、シヨルダーアーマーはさながら龍の爪を模ったもの

ろうか。

そして俺とは違ったカラーリングの九色の翼が生える。

王蛇 スーパーサバイブ。

彼はエビルダイバーから降り、その力をしみじみと実感していた。

『なるほどな、まさか奴が事件の黒幕じゃったとは』

「(女神さま……奴を知ってるのか?)」

『うむ、奴はルシフェル。かつては大天使と呼ばれた存在じゃったが、あろうことか人間

に嫉妬し、神に謀反を起こし、天界を追放された愚か者じゃ』

「(ルシフェル……そんな奴が本当にいたんだな……)」

『今、ぬしらの体に力が漲っているじゃろう?』

「(ああ。とてつもない力——でも、凄く温かい力だ」

『あの子たちの力じゃ。歌に想いを乗せ、それがぬしらに力を与えている。奴を倒せ! ぬしらに全てを託した者たちの為に!!』

「分かった……」

「どうした、耀太?」

「いや、何でもない。それよりこの力……」

「ああ、俺も感じる。あの歌と一緒に全身に流れ込んでくるんだ」

俺たちは見合った後、奴の方に向き直る。

「何度姿を変えようと、同じことです!!」

ルシフは俺とヨウタくん、二人一度に挑みかかる。

早い……けど……!!

「見えない程じゃない!!」

一人では勝てなくても、二人なら!

全ての攻撃を王蛇とともに弾き、避けていく。

高速移動と拳の応酬。

初めはほぼ互角だったが、徐々にこちらが押し始めた。最初はマスクをかすり、次に肩を強打する。

そして胸部にダブルパンチ。

強烈な一撃を与えられたルシフは、地面を抉る。

「ふん!!」

しかし、奴はすぐに復帰。

俺が叩き落とされた。

「ぐお……」

上空で残された王蛇が奴と応戦。

「一人ずつ潰してあげましょう!!」

「は、俺は一人じゃねーつての。行くぜ相棒!!」

「アドベント」

アドベントのカードを読み、ベノスネーカーが進化したベノヴァイパー……ではなく、さらに進化を遂げ、古代メソポタミアの霊獣ムシフシユをモチーフとしたベノムシフシユが召喚された。

「グオオオオオ!!」

「何!?!」

ムシユフシユは咆哮し、前足でルシフを叩き落す。

「クソッ！このわたしを地に落とすなど……!!」

「空を飛ぶのがお望みなら、俺が飛ばしてやるよ!!」

「!？」

左拳とタジヤスピナー・ブルーに虹色のエネルギーを収束。

アツパーと同時にエネルギー弾をゼロ距離でぶつけ、ルシフをかちあげる。

「ぐわああああ!!」

さらに俺は飛翔し、タジヤスピナーからエネルギー弾を発射。

弾幕を浴び続けるルシフを、ムシユフシユが噛みつく。

「ガ……」

そしてムシユフシユはルシフを投げ飛ばし、

「ソードベント」

ベノサーベルを召喚した王蛇が、奴を斬った。

ルシフは斬られた箇所を押さえ、俺たちを睨む。

「まだまだ……セイレーンの像よ！わたしに更なる力を!!」

奴が叫ぶとあの女人像——セイレーンの像が奇声を発揮し始める。

さらに上空の地球からも黒いオーラが奴に流れ込む。

「まだパワーアップするのかよ……」

シオルダーの角が二回り大きくなり、背部の翼も巨大化した。

「!？」

途轍もないスピードで王蛇に突貫したルシフ。

彼のマスクを掴み、ビルに押し付けている。

「はああああああ!!」

高速飛行で助走をつけたキックをルシフに食らわせるが、

「何ですか？その攻撃は？」

「ち……でたらめ過ぎる……」

逆に蹴りをもらい、別のビルに突っ込んでしまう。

迷えどハナは朝のひかりを 待ち望むよ、咲くよ！

だから綺麗なハナになりましたか 夢見るような

「うおおおお!!」

再び翼を展開して、右拳にエネルギーを集中させながらルシフに突撃する。

「まだ来るのか……」

が、王蛇の頭を掴んでいるのは逆の手で押さえられる。

「当たり前だ……お前がパワーアップしようとも、俺は……俺たちはお前を倒さなきゃ

いけないんだ!!」

ルシフは静かに、不気味に笑う。

「哀しいな……勝てないと分かっているでも戦うとは……」

「ふざけるな……勝てる勝てないは、てめえが決めることじゃねえ……!」

頭を掴んでいる手を引き剥がしながら、反論する。

「それにさつき言っただろ……! あの子たちが歌い続ける限り、俺たちも戦うと!!」

「何? うぐ……ぐわああああ?!」

俺と彼を押さえるルシフの腕が震え始める。

そして俺たちから虹色のエネルギーを流し込まれたルシフは苦しみ始めた。

「何故だ……!?! 何故このわたしの力が超えられた?! 無限に溢れるはずの負の力が!!!」

俺とヨウタクくん、ムシユフシユを前にして、そう叫ぶルシフ。

「当たり前だ! 一人一人の憎しみや怒り、そんなものが、あの子たちの歌に……人を幸せにする歌に敵うはずないだろう!!」

俺たち二人に流れ込んでいる歌。

そう……あの日同じ夢を描いたんだ

輝く瞳は 明日を信じてた

「認めん! 認めんぞおおおお!! あんなものが……人間ごときがわたしの力を上回る

俺たちの纏うオーラは翼の生えた巨大な蛇と鳥のエネルギー体に変化、その翼を広げ、エネルギーボールとぶつかる。

「うおおおおお!!!」

「無駄だああああ!!!」

押し返せない。

進行を留めておくことが精一杯だ。

「くっそおおお!!」

「足りない!!跳ね返せるだけの力が……!!」

「ははははは!!終わりだ!!これで……わたしは勝ちだあああ!!!」

少しづつ、ルシフの方が押し始める。

多分、これを見た人たちが絶望の感情を吸収したんだ……。

「ぐぐぐ……まだだ……まだ諦めねえ!!」

だが、俺たちの下がる速度はどんどん上がっていく。

こんなところで負けられない……!

しかし、それでも頭を過ってしまう敗北の二文字。

だが……

『負けないで!』

頭に直接響いて来た穂乃果ちゃんの声。

「穂乃果……?」

『耀太くんもだよ!こんなところで諦めないで!みんなで決めたでしょ?最後まで足掻こうって!!』

……そうだった。

みんなで決めたことじゃないか。

覚悟を決め、ヨウタに問おうとする直前、

「ブレストブレイカー!シユートオオオ!!」

「オーシヤニックブレイエエク!!」

「バーニングショット」

「ダイカイガン!ネクロム!オメガファイニッシュ!!」

「ファイナルベント」

「うおおおお!!」

白と緑の二つのエネルギー砲、火炎弾、ギルスとアクア、アビスとアビソドンがエネルギーボールと競り合う。

「みんな(お前ら)!!」

「すいません、先輩!遅くなりました!」

「悪かったな、ヨウタ」

別動隊として行動していた慎司たちと、アंकと同じく、オーラから解放されたシオンくんたちが駆け付けてくれた。

さらに、

「Exceed Charge」

「ギリギリ！クリティカルフィニ——ツシユ!!」

デルタとレーザー コンバットバイクゲーマーがどこからともなく現れ、慎司たちと同じくエネルギーボールに攻撃をぶつける。

「すいません……ミイラみたいなのとロボットが店に押し寄せてきて……」

「ヤヨイっち！それに……」

「俺たちだつてこの世界が消されたら困るんでね。だから今は協力してやるよ」

王蛇とレーザーの間が良いとも悪いとも言えない雰囲気が出るが、すぐに二人とも攻撃に集中し直す。

「どれだけ人数が増えようと、どれだけ足掻こうと、結果は変わらない!!」

「なあ、耀太……お前が思ったこと、当ててやろうか？」

「どうせヨウタも同じこと考えてるんでしょ？ならいいよ」

「そうかよ……なら……」

俺たちも相当ボロボロになったが。

「はあ……ただいま、みんな」

巨大な謎のステージとみんなの衣装。

そしてポッピーに変身している女神さま。

どれもこれも気になったが、今は……。

「お帰り、みんな！」

穂乃果ちゃん、千歌ちゃんが、そしてみんなが笑顔で出迎えてくれた。

「あれ？もう一人の果南ちゃんは？」

彼女がいないことに気付いた千歌ちゃんが俺に尋ねる。

俺は言葉で返すことが出来ず、首を横に振る。

「そっか……」

それだけで理解したのでろう。

みんなの面持ちは、少し暗くなる。

「最期に俺に力をくれたんだ。次元王を倒して……」

「そうだったんだね……」

俺は握っていたメダルを見せる。

次元王を倒し、変身を解除した後、このメダルはアंकのメダルから分離して、アン

クのメダルは元の色に戻り、このメダルも輝きを失った。

そして彼女が消えた時と同じように、メダルは消滅してしまった。

——こっちのわたしのこと、幸せにしてあげてね——

「っ!？」

今の……果南ちゃんが俺に託したこと……つてそうじゃない!!

「ふむ、何となく察していたが、やはり二人はそう言う……」

「ちよちよちよ! シュウジくん何言い出すの!? まだそう言うのじゃなくて……!」

「ほほう…… “まだ” なのか」

しまったああああ!!!

「やっぱりく、だからあんなに大胆なことを……」

「ことりさん!? それは言わないで……」

顔を真っ赤に染め上げながら、ことりちゃんに申す果南ちゃん。

だが時既に遅し。

「えー? 何何?」「二人とも何したの?」

ああ……もうダメだ……。

ワイワイと騒ぎ出すみんな。

やっつと訪れた平穏な時間。

それももうじき終わりを迎える。

「あれ？千歌ちゃん、体が透けて……」

「本当だ！つて曜ちゃんもだよ！」

「ええ!？」

みんなに異変が訪れた。

それは俺や慎司たち、果ては女神さまにすらも。

「どうやらお別れの時間が来たようね」

「そんなー！まだ色んな話をしたかったのにー！」

「仕方ないよ千歌ちゃん。本当はわたしたちはここには来れない、来ちゃいけない人間なんだから」

千歌ちゃんをそつと諭す梨子ちゃん。

「梨子の言う通りね。それに早く帰らないと、準備が間に合わなくなるわよ？」

「あ、忘れてた」

ズコーツと滑り、肩口をずらすみんな。

本当に千歌ちゃんは……。

「耀太」

「……お別れだね。でも……俺、ヨウタやみんなと出会えて本当に良かった！」

「俺たちもだ。またもし会う時が来たら、その時も一緒に戦ってくれよ?」
「もちろん!」

再会した時、それが世界のピンチなら、もう一度ともに戦うことを約束し、友情の証を交わす。

そして俺たちは光に包まれ、元の世界へ戻ったのだった。

ハッと意識が覚醒する。

ここは……あの雑貨屋……。

「耀太ー!早く早くー!」

屈託のない笑顔と声で、俺を手招きする果南ちゃん。

あの様子だと、今までのことは覚えてないのだろう。

「待ってよ果南ちゃん!」

俺は彼女の方へ駆け出す。

「ほら、これなんか部屋に飾ってみるのはどうかな?」

店に入ると、彼が示したのはやはりあのカラフルな飾り物。

「そうだね。色の種類も結構あるみたいだし、一色ずつ買って飾るのもいいかも」

「あ、これも可愛い!」

「こっちもいいんじゃない?」

並べられた品物を選ぶ俺たち。

果南ちゃんが欲したものを、俺が手に取り、買う物に追加していく。

隣で笑う果南ちゃん。

ここにはいないもう一人の彼女と俺は約束した。

世界に平和を取り戻し、必ず果南ちゃんを幸せにすると。

閉校祭と妙案と準備

「へいこうさい?」

あまり聞き慣れない言葉に一瞬だけ疑問符を浮かべる俺。何度か反芻し、「閉校祭」であるということに気付く。

「ああ!閉校祭か!」

「はい。直接の申し出は千歌さんたちのクラスメイトからです。『最後にみんなで楽しい思い出を作りたい』と」

「へえ、いいじゃん!やろうよ!」

「オフコース!もちろん承認したわ!」

承認印を片手にウインクする鞠莉ちゃん。

「そうと決まれば早速準備だね。それじゃ、俺たちもちよつとしたみんながびつくりするものを用意しようかな」

「びつくりするもの?」

「ま、楽しみにしててよ」

二人にそう告げ、俺は理事長室を後にする。

その後すぐに閉校祭の知らせは学校中に広まっていき、和気あいあいとしたムードが学校を覆うのだった。

そして俺は、慎司と晴也を喫茶店に呼んで、ダイヤちゃんたちに話した。びつくりするもの、つまるところ、サプライズについて計画を練っていた。

「サプライズですか、そうですね……」

「花火なんてどうですか？女神さまに頼めばそのくらいしてくれますよ、きつとー！」

「それもやりたいけど、やっぱり俺たちだけで何かしたいじゃん？だからそれとは別に何かないかなあって」

「うーん……そうですね……」

頭を悩ませる俺たち。

「……ライプ、なんてどうでしょう？」

ふと晴也が呟いた。

「ライプ？」

「はい。俺たちつていつも見てる側だったじゃないですか。だから今度は俺たちが歌うのもいいんじゃないかなって。流石にオリジナル曲は難しいかもしれないけど……」

「……それはいいかもしれない！まだまだ時間もあまるし、練習も出来る！」

「それはいいとして、問題は何を歌うかですよ。俺たち三人が歌える共通の曲って……」

まあ……それは「アレ」の歌しかないわけで……。

あれ？でもこの世界にはその概念がないから、オリジナル曲つてことになっちゃうのか？

「いいじゃないですか。きつとみなさん喜んでくれるはずですよ」

「……そうだな、佐藤ちゃんの言う通りだ」

晴也の案を採用し、そうと決まればと準備に取り掛かろうと店を出ようとした時だった。

「ほう……ぬしらなかなか面白いことを企んどるのお」

「っ!?!」

俺の後ろの席でコーヒーとケーキを楽しんでいた人物が、耳に覚えのある喋り方で俺たちに話しかけてきた。

「な、なんでここに!?!この間まであんなに忙しそうにしてたのに……」

「やつと一段落付いてな、今日は休みじゃ。ところでぬしら、閉校祭なるものをするようじゃの」

「は、はい。そこで俺たちもライブをしようと思って……と言っても、歌える曲なんて知れてますけど」

「聞いておったぞ。花火がどうのという話もな」

初めから聞かれてたのか……。てか何で気付かなかったんだ、俺たち……。

「どれ、わらわも一肌脱いでやろうかの。花火はもちろん、ぬしらにピッタリの衣装も用意してやる」

「ま、マジですか!？」

「おう、楽しみにしておれ」

「よろしくお願いしまーす!!」

こうして女神さまの協力も得ることとなり、閉校祭が開かれるまで一週間、俺たちは歌の練習をびっちり行うことになった。

そして時間は過ぎていき、あっという間に閉校祭まであと一日まで迫った。

Aquorsの練習に、サブライズライブの練習。さらにもう一波乱(コラボ回参照)を何とか乗り切り、残るは仕上げのみ。俺は果南ちゃんと一緒に買ってきた装飾品を教室や部室に飾っていく。

「ごめんね、耀太。わたしじゃどうしても付けられなくて…」

「気にしないで。こういう高い所は俺に任せて…よつと」

天井付近の飾り付けをする俺に、果南ちゃんは「ごめん」と謝ってくれる。

「よし、これで終わりつと」

「ホントにごめん、結局この部屋は全部付けてもらっちゃって……」

「だから気にしないで言って言ってるでしょ？ 何事も助け合い。果南ちゃんが出来ないことは俺がやる。逆に俺に出来ないことは果南ちゃんがやる。オーケー？」

「うん……ありがとう」

笑顔で返事をくれた果南ちゃん。

……何この子可愛い……いやそうじゃねえ！

二人きりの今こそ、チャンスなんだ！

俺はあの時と同じように勇気を振り絞って彼女に話を切り出す。

「ねえ、果南ちゃん」「ねえ、耀太」

果南ちゃんと声が重なる。

「よ、耀太から先に……」

「う、うん……」

仕切り直す為に一度深呼吸する。……一々大げさな気もするけど。

気持ちを変えて今一度、口を開いた。

「明日の閉校祭、その……果南ちゃんさえ良ければ、俺と一緒に周らない？」

うわあ……実際に言葉にしてみるとめっちゃくちや恥ずかしい……」

「……それってデートのお誘いだよね？」

「そうなる……かな」

恥ずかしさに耐えながら、問いに答えを返す。体温が上昇するのはきつと気の所為じゃない……。

そして……。

「ありがとう、耀太。そのお誘いお受けします」

少し頬を赤く染めながら、とても可愛らしい笑みで答えを返してくれた。

や……ヤバイ……直視出来ない……。

「そ、そうだ！か、果南ちゃんも何か言おうとしてたよね!？」

「あはは……実はわたしも耀太と同じこと言おうとしてたんだ……」

「あー……そういうことかあ」

「こんなこと言うのはちよつと恥ずかしいけど……わたしたちって本当に両思いなんだね」

「そうだね……」

それは少し照れくさいが、同時にとても嬉しいと思う。

けれど、残念なことに時間は待つてはくれない。仕上げと言っても、まだまだやるべきことは残っている。

「さてと、残りもちやちやつと終わらせちゃおう」

「うん、賛成！」

俺と果南ちゃんは、それぞれ荷物を持ちながら次の部屋に向かった。

映写機やフィルムのセットなどの明日の準備を済ませ、ダイヤ先輩、ルビイ、花丸と視聴覚室の戸締りをする。

「うゆ……大丈夫かな？勝手にあんなことしちゃって……」

「問題ありませんわ。鞠莉さんからの承認はきちんと——」

「そうじゃなくて！耀太くんと果南ちゃんの!!」

ルビイの叫び声が耳に響く。こんなに大声出したこと初めてなんじゃないか？ルビイの奴。

「心配すんなって。それをこれから話に行くんじゃないか」

「絶対順番が違う気がするよ……計画的犯行すら」

「犯行だなんて人聞きの悪い。先に話を通したら、絶対却下されるから承認貰ってから話に行くだけだろ？」

「それやつぱり怒られるやつじゃない!?絶対大丈夫じゃないよう……」

絶叫しながら涙目になるルビイ。確かに耀太先輩と果南先輩、特に耀太先輩は怒るとめっちゃくちゃ怖い。氷漬けの化石にしようと本気でしてくるくらいだから……。

……トラウマが蘇るが、今回はそうならない為にルビイと花丸を呼んだんじゃないか！

耀太先輩はルビイこのふたりと花丸にはめっぽう弱い。二人も関与したとなれば、きつと寛大な対応してくれるだろう（フラグ）。

「あれ？ そう言えば先輩たちがどこにいるか知ってます？」

「それ一番重要なことじゃ……」

花丸がジト目でそう呟く。

「その点は問題ありません。先程果南さんに連絡したところ、飾り付けを終えて、部室で休憩していると行っていました」

「うっし、じゃあ部室までレッツゴー！」

その後も何やかんやありながら（主にルビイをなだめながら）体育館まで足を運ぶ。扉の前までやって来て、ノブを回そうと手を置いた時だった。

「っ!？」

「だ、大丈夫!？」

「……平気だよ……少し痛んだだけ……けど、もう少し優しくしてくれると嬉しいかな……」

「ご、ごめんね。力の加減が分からなくて……少し弱めるから、また痛かったら言って

ね」

「うん、ありがとう」

空気が凍てついた……。

扉越しに聞こえる意味深な会話、荒い息遣い。

こ、これはもう何をしてるっていうか、ナニをしてるしかない展開じゃん！い、いや
 まで……ラノベ主人公バりに奥手で鈍い先輩たちのことだ……きつと勘違いな展開に
 違いな……

「ひゃん！あ！そ、そこは……！」

(^ ^ 三 ^ ^ >ギヤアアアアアアア

が、学校……それも部室でなんてことを……。

き、きつと『そんなに声出したら、外の人に聞こえちゃうよ？』とか『だ、だつて耀
 太とすると、気持ち良すぎて声が抑えられないんだもん……』とか言ったりしちゃうん
 だあああ!!

じゃなくて！早くルビイたちをここから離さないと！つて、立ちながら気絶してる!?
 ダイヤ先輩に関してはベ○薔薇みたいな顔になつてるし……もうダメだあ、おしま
 だあ……。

「あれ？慎司くんたち、何してるの？」

混沌渦巻くこの場所に現れたのは曜先輩、千歌先輩、梨子先輩に鞠莉先輩と佐藤ちゃん、善子を加えた六人。

「なんか三人とも立ったまま気を失ってない……?」

「せ、先輩?!今ここに来たら——!」

曜先輩たちもルビイたちの二の舞に……そう言おうとする直前、パンドラの箱と化した部室の扉が、千歌先輩によって開かれた。

……終わった……色々なものが終わった……。俺は守れなかった……。耀太先輩と果南先輩のイケナイ秘密を……。

「あー果南ちゃんだけずるーい!わたしにもしてよー、マッサージー!」

「……は?」

千歌先輩の言葉を聞き、俺は部室の方へ目をやる。

するとそこには、並べられた椅子にうつ伏せになる果南先輩と、その背中に手を当てる耀太先輩の姿が。

「みんなおかえりー……つてなんか後ろの三人气絶してない!」

顔面蒼白になり、立ったまま気を失っているルビイと花丸。オマケに白目を向いているダイヤ先輩を見て驚く先輩。

三人の意識を取り戻させた後、俺はみんなに事情を説明した。

「ははは……申し訳ない。いや、本当に……」

「全く……本当に紛らわしいですわ……」

「ご、ごめんってダイヤ」

少しだけ怒気を感じるダイヤ先輩に。

「それにしても四人が本気で勘違いするなんて、果南はどんな声を出てたのかしら？」

「そ、それは……その……」

いつものように鞠莉先輩が果南先輩を茶化し始める。

耀太先輩は千歌先輩の要望に応え、彼女をマツサージしている。

……本当に気持ちよさそうだな。先輩の表情がその心地良さを物語っている。

「あれ？そう言えば、ルビイたち何か大事なことを忘れてるような……？」

「んー……思い出せねーや」

かなり大事なことだった気がするんだけど……ダメだ、やっぱり思い出せない。

ま、そのうち思い出すだろ、と軽く考えていた俺だったが、それを思い出した時は既に手遅れで、俺は新たなトラウマを植え付けられ、ダイヤ先輩はこっぴどく叱られたのは、また別なお話。

開催とデート・リターンズと三人のサプライズ

待ちに待った閉校祭当日！

昨日は様々なアクシデントがありながらも、何とか全ての準備を終えて今日を迎えることが出来た。

そして俺が今向かっているのは、曜ちゃん、果南ちゃん、晴也の持ち場となっている教室だ。

理由はまあ……果南ちゃんを迎えに行くこと。

昨日約束したデート。流石に一日は無理だが、午前中は二人ともシフトを合わせてもらい、自由に行動できるようにしてもらった。

「えつと確か……この教室か」

三人で海を再現したという教室。既に一度目の公演が始まっていて、うちっちー、初代っちー、そしてアクアの三人が泳ぐ仕事をしたり、助っ人でメズールが怪人役を引き受け、海を守るヒーロー劇を行っていた。

それが終わり、晴也たちは一度目の休憩に入る。俺はそのタイミングを見計らい、彼らに声をかけた。

「よ、なかなか盛り上がってるな」

「お客さんは小さな子たちが多いですからね。着ぐるみやヒーローショーは大盛況ですよ」

「だろうね」

「ただ一つ問題が……」

「問題？」

晴也の言う問題という言葉を疑問形で繰り返すと、彼は嘆息し、頭を抱えながら答えた。

「お母さん方からも受けが良くて……」

あー……それは仮面ライダーとしての宿命としか言いようがないだろう。それなりにルックスが良い晴也にはいずれ訪れるものだ。

「まあ、その……なんだ、頑張れ」

「はあ……」

「メズールはどう？楽しんでる？」

「ええ、もちろんよ。ショーこれれをすること自体も楽しいけど……それ以上にあの子たちが笑ってるのを見ると、不思議な気持ちになるわ。そうね……まだまだ満足出来ない、かしら」

「そりゃあいいや。あれだけで満足されたらこっちとしても少し困るからね」

後に控えているサプライズ。あれは何も、A q o u r s へ向けたものだけではない。グリードたちにも見てほしいものだ。……とはいえ、三名ほど協力してもらっているわけだが……。

「耀太ー、お待たせー!」

着ぐるみを脱いでやって来た果南ちゃんが俺の名前を呼ぶ。

「晴也くんもメズールちゃんも、曜もしばらくよろしくね」

「了解であります! 果南ちゃんと耀太くんもしっかり楽しんで来てね〜!」

うちつちーの頭を外し、敬礼する曜ちゃん。本当ならタブーな行為なのだが、彼女の場合そんな風には全く感じられないな。

「じゃあ行こっか」

「うん!」

果南ちゃんと手を繋ぎ、三人に見守られながら教室を後にした。

「いいですね……青春って」

「あなたも青春真っ盛りじゃない。千歌のところにも行ってきたら? きつと素敵な衣装を着た彼女に会えるわよ?」

「な、なんで千歌さんなんですか!?!」

「さあ？何故でしょう？」

最初で最後の閉校祭デート。

出店なんかは普通のお祭りで大差なく、中には例のシャイ煮をさらに豪華にしたシャイ煮プレミアムなるものまで……。食べてみたくは思うけど原価が気になって手が届かない……。

「さて、何をしようか？」

「そうだねえ……プログラムに書いてある映画上映って言うのが気になるけど、まだ少し時間があるし……」

あ、やっぱり果南ちゃんも気になってたんだ。……まあ、出しているところが「スクールアイドル部、演劇部合同」って書いてあるからなんだろうけど……そこすげえ嫌な予感しかないんだよね……。

「それなら千歌ちゃんたちのところに行ってみない？大正ロマンをイメージした制服を着て喫茶店」

「曜が真っ先に行きたがりたそうなところだね。いいよ、行ってみよう！」

二人で二年生の教室まで足を運ぶ。

するとそこで待っていたのは、大正時代をイメージした服を着た千歌ちゃんたち。

「やっぱり色々とレベル高いよなあ……」

その制服もさることながら、それを身に纏う彼女たちに関しても、やはり流石美人度平均の高い学校だ……と感心せざるを得ない。

「この制服ってどうやって仕入れたの？買ったものではないみたいだし……」

そんな果南ちゃんの疑問に答えたのはいつきちゃん。その手に持っていたのは「壁クイ 大正ロマン編」……。

「だ、だからその本が家にあつたのはたまたまで！」

「たまたまなの！」と必死になる梨子ちゃん。その反応だと、寧ろ逆効果なのではないだろうか……。分からなくはないけれど。

「そ、それより二人はお客さんとして来たんでしょ!？」

「う、うん……」

多少強引ではあつたが、目的としては間違っていないので案内されるまま、席に着いた。

メニューはつと……みかんソフト、みかんケーキ、みかんどらやき、みかんジュース……みかんばっかり……。

「あ、これもメニューの一つだから、ゆっくり決めてね」
梨子ちゃんがくれたもう一つのメニューを見る。

「……………これもしかして全部慎司くんの？」

「……………しかないよなあ」

いつかの海の家で見たのと同じ名前が書かれていた。しかも新作までありやがる…………。

「じゃ、じゃあこのビルドケーキを頼もうかな…………」

「わたしはみかんケーキをお願いね」

「かしこまりました」

本物の喫茶店の店員のように会釈をし、席から離れていく梨子ちゃん。

「可愛い服だね」

「うん、それに着てる子たちもみんな可愛いし、衣装の魅力も最大限引き出されてると思うよ」

A q o u r s の衣装を作ったり、近くで見ているうちについてしまった、衣装を分析するクセ。すると、

「むう……………耀太は一体どこを見てるの？」

果南ちゃんが顔をむくれさせ、ジト目で俺を睨んでくる。しかし、怖さというものは感じず、むしろ可愛らしく感じる。…………あれ？もしかして妬いてくれてる？

「ごめん、今は果南ちゃんとデートだもんね。あ、今の『今は』って言うのはデートのこ

とであって、果南ちゃんと一緒にいるのは今だけじゃなくて……」

自分の言動に対してテンパリ、どんどんおかしな発言を重ねていく俺。そんな俺を見て、果南ちゃんはクスクスと笑い出す。

「え？ちよつと待って、状況が理解出来ないんだけど……」

「ごめんね、ちよつとからかっただけなんだ。ああいう風に言われたら、耀太はどんな反応をするのか見てみたくて」

いたずらっぽい笑みを浮かべ、謝る果南ちゃん。なるほど……俺はまんまと引つかかったわけか……。

右手で胸をそつと撫で下ろし、大きく息を吐く。

「お待たせしました〜」

店の奥に消えていった梨子ちゃんが、ケーキとジュースを乗せたおぼんを持って、再びやって来た。

「ねえ梨子ちゃん……これって……」

おおよそ一人分とは思えない大きさで、さらにカップルが使っているのをたまに見るハートをかたどったストロー。それを指さす果南ちゃんに対して、苦笑いしながら梨子ちゃんは答える。

「と、当店のシェフからのサービスです……なんて」

よく見ると、彼女が持ってきたパンケーキも二人分を合わせるとハートになるように出来ていて、オマケにデフォルメされた似顔絵、更にビルドとクローズがそれぞれ描かれていた……。

「クオリティ高過ぎでは……っていうか、この真ん中のやつは……」

「ええつと……『これは当店からのサービスです』って慎司くんが言ってたわ……」

……パンケーキの中央部には、ビルドのベストマッチの模様。そこに俺と果南ちゃん
のイニシャル、Y/Kと書かれていた。

「……梨子ちゃん、慎司は？」

「そ、それが……『別の持ち場が気になるから行ってくる』って……」

逃げやがってあん畜生が！

「ま、まあ折角作ってくれたんだし、一緒に食べようよ」

「そ、そうだね……」

湧き上がる怒りをケーキとともに腹に沈める為、フォークを取る。

「美味しい♡見た目はともかく、やっぱり料理上手いなあ」

果南ちゃんが美味しそうに食べているのだから、きつとそうなのだろう。けど、慎司の作ったものを食べて喜んでるのを見ると、すごいモヤモヤする……。

「ねえ、耀太もそう思うでしょ？」

「あ、うん……確かに美味しいね」

「?どうしたの?」

これくらいなら俺にも作れる、そう言いたい……。けど、今じゃ味覚もほとんど残っておらず、料理なんて出来ないだろう。

「何でもないよ。早く食べて次の所へ行こう」

「う、うん」

だけど今は……今だけは、それを知られたくない。みんなが楽しんでいるこの時に、そんな暗い話なんて……。

そうこうしているうちに、映画の上映時間が近づいてきた。

間に合わなくなるかもしれないよう、十分程前に視聴覚室まで来たが、どうやら正解だったらしい。一度に入室出来ないほどの人が集まり、次の上映の整理券まで配っていた。

「凄い数だね……」

「それだけ今日の映画を楽しみにしてたんだよね。……生徒の自作映画って書いてあったけど、スクールアイドル部と演劇部の合同作成ってことは……」

「十中八九、夏休みに撮ったアレだね……」

……思い出を振り返るという意味では、悪くは無いかもしれない。が、なんだか嫌

な予感しかない……。

「……ねえ耀太」

「どうしたの、果南ちゃん……？」

「あれ見て……」

果南ちゃんが指さしたのは上映スケジュール。上映される映画のタイトルは、やはり「仮面ライダー」。だが、彼女が知らせたかったであろう情報はそこじゃない。

……仮面ライダーのタイトルの隣に、「R」の文字が表示されている……。

……これ出た方が良くないか？そう思うが、時すでに遅し。部屋の明かりが消え、スクリーンに映像が映し出された。

『映画の上映中は、他のお客様のご迷惑にならないよう、携帯電話の電源を切るか、マナーモードにして下さい。また、大声を出したり、隣の人とお喋りするの、ブツブツですわ！』

ダイヤちゃんの読み上げる注意事項が消え、東〇とう〇のような海を背景にしたロゴが現れ、映画本編が始まってしまった……。

上映が終わり、教室を出た俺と果南ちゃんは二人揃って茹でダコのような顔になっていた。

「うう……まさかあのシーンが入ってるなんて……」

「元のデータは削除させたと思ったのに……慎司あのやろバックアップを残してやがったな……」

ダイヤ監督のもと撮影されたあの映画。実は夏の交流会で放映したのは、俺が手を加えたものだ。

何故そんなことをしたのかと言うと、お年寄りや小さな子たちに見せるには、刺激が強過ぎるシーンがあったからだ。穢れを知らない子供たちには特に見せるわけにはいかない。……そう思つて削除したのだが……。

今現在の俺たちの関係を考えて、かなり生々しい気分になってしまう。

……いつかはあの映画みたいに……。

「あの映画みたいになるのかなあ……」

「え?」

小さく何か呟いた果南ちゃん。……映画がどうのとか言つたような気がしたけど……。

「な、何でもないよ!?そ、そろそろ良い時間だし、持ち場に戻らないと……」

そう言われて腕時計を見てみる。……確かにシフトの交代の時間が迫ってきている。

「もうそんな時間か……」

「ちよつと物足りないね……」

「そうだねえ……あの映画で何気に時間使っちゃったし、しようがないのかも。でもまだ終わったわけではないし……」

「そうじゃなくて、もつと耀太と一緒にいたかったなって」

「……俺もだよ。欲を言えば果南ちゃんも、みんなともつと一緒にいたい。けどやつぱり時間は進んでいて、いつかは終わりの時は来てしまう。でもその先、〃いつかの明日〃にはきつと、今よりずっと楽しい未来が、輝く未来が待ってる。そう信じて今を生懸命生きているんだ」

「今を……一生懸命生きる……」

始まりがあれば終わりがあつた。けれど、終わりというものがいつ来るか分からない。そんなとりとめもない話。

何か遠いものを見るような顔になつた果南ちゃんの顔を見て、俺はハツと我に返る。

「つて、ごめんね。何か偉そうな話しちゃつて……」

「ふふ……何かいいね、そういうの。いつかの明日、か……」

「……その言葉は俺が尊敬する人の言葉なんだ。お金とパンツさえ有れば世界を旅出来る、なんてめっちゃくちゃな人だけだ」

「何それ、変な人」

笑い出す果南ちゃん。今まで守るだけだつた笑顔。スクールアイドルのように、誰か

を笑顔に出来るだろうか？そんな不安が渦巻いていたが、そんなものの心底どうでもよくなった。

「よし、戻ろう果南ちゃん」

「うん！」

俺たちはまた手を繋ぎ、それぞれの持ち場まで戻って行ったのだった。

それから時間は過ぎていき、閉校祭もいよいよクライマックス。全校生徒でキャンプファイヤーを囲みながら、閉催式を始めている頃だろう。

「……なあ、確かにみんなを驚かせようとは言ったけど、何もこんな時間まで待ってることは無かったんじゃ……」

「甘いですよ先輩！いつも果南先輩と醸し出してる甘々な雰囲気より甘いです!!」

「流石にそれは言い過ぎですよ、宮沢さん」

そんな中俺たちは、三人で話し合ったサプライズを執行しようと準備を進めていたのだった。

あとは女神さまが衣装を持ってくるだけなんだけど……。

「三人とも待たせたな」

バツチリ過ぎるタイミングで現れた彼女。その背に大荷物を背負っている。

「……もしかしてそれ全部衣装？……にしてはなんかガチャガチャいってない？」
「当たり前じゃ」

ドスンと音を立てながら下ろされたその荷物。中身を見てみると……。

「……これどう見ても仮面ライダーのベルトですよね……」

「言ったじゃろ。ぬしらにピッタリな衣装を用意すると」

確かに言っただけども！何でベルトになるのかな!?

「一つ言っておくがこれらは全て本物じゃぞ？」

「……は？」

「それにこれは耀太、ぬしの為のものでもある」

「俺の為？」

「グリード化の影響でほとんど音楽なんて分からんじやろ？それでも練習はしておったようじゃが……。まあとにかく、これらにはアーマーを通して景色や音が人間の時と同じようにぬしに伝えられるようになっておる。じゃから安心して歌うが良い」

「女神さま……」

俺に気を遣ってくれてこれにしてくれたのか……。初めはなんて無茶振りをさせようとしてるのかと思っただが、ちゃんと考えてくれてるんだな……。

「さあ、これでしんみりとしている外のムードをぶっ壊して来い！」

女神さまがそう言うのと、慎司が先行してドライバーを一つ手にする。

「それじゃあ最初はこれで行きますかね！」

「つてことは俺もこれですね」

次いで晴也も拾い上げる。

「……つてこの流れだと俺はこれか!？」

「つべこべ言うな。早うせんと終わってしまうぞ！」

「はあ……もうどうにでもなれ！」

俺もベルトとその付属品を手に取り、カザリたちが待機しているであろうステージに移動した。

もちろん、女神さまも大量のベルトたちを持って。

女神さまの言う通り、外はかなりしんみりとしたムードになっていた。が、みんな鞠莉ちゃんたちの方に気を取られていて、俺たちには気付いていない。

「随分時間がかかったみたいだね？もう用意は出来てるよ」

「照明と音響は任せておけ。俺たち三人がサポートしてやるからな」

「報酬のアイス、忘れるなよ」

ステージを整えて待つてくれている三人。

「サンキュー、三人とも」

「ほんじゃ任せませ」

「よろしくお願ひします」

三人に裏方せなかを預け、俺たちは明かりの落ちた暗いステージに立った。

「緊張しますね、耀太さん」

「ああ。まだ誰も気付いてないのにな」

「何を言ってるんですか！そんなんじゃ、これから大変ですよ！」

「そうだな。よし、慎司！言ってやれ！」

「その言葉を待ってましたよ！」

マイクのスイッチを入れた慎司。そして彼は、大きく息を吸いこみ、この場にいる全員に向けて言葉を放った。

「レディースアンドジェントルメン！」

もう終わりも近づいたことで、完全にこちらに気付いていなかったみんながざわつき始める。

そして極めつけは……。

「何あれ？何か飛んでる……ううん、走ってる!？」

小さな赤い車と、白と紫の二台のバイク。

それぞれが俺たちに向かって走って来て、手に収まっていく。

「イッツタイムフォー……スーパースターアクション!!」

その掛け声とともに、俺たち三人はスポットライトを浴びる。

そして手に収められた車たち、シフトカーとシグナルバイクをブレスとベルトにセツトした。

「レッツ……「変身!!」」

変身のコールとともに「Spinning Wheel」のイントロが流れ出す。

仮面ライダーたちのライブが、今始まった――。

日が沈むまで続いたライブが終わり、閉校祭は幕を閉じた。

生徒たちは小原家の送迎により帰宅し、彼女たちもまた、帰路についていた。

「まさか耀太たちがライブをするなんてね」

「そうねえ。けど、ノリノリだったでしょ、果南?」

「そういう鞠莉もね」

「確かにあれは凄い盛り上がりだったね。裏で作業しながら見てたボクたちからしても
圧巻だったよ」

学校から船着場までを走る車。それに乗っていた三人が、今日の話で車内を盛り上げていた。

「それにしても、耀太たちが変身してた仮面ライダーって……」

ふと、思いついた疑問を言葉にした果南。それを言い切る前に、突然車が停車した。

「止まった……?」

「ホワツツ? 一体どうしたの?」

「す、すいません。車の前に人が……」

「人?」

彼らは目を細め、暗い闇の中を見つめる。

「!? 不味い、みんな逃げるんだ!」

最初に「ソレ」に気が付いたのはカザリだった。

「え? 何……」

「いいから早く! オーズたちの所まで!!」

「は、はい!」

車から降り、十千万まで逃げるよう指示するカザリ。

彼の気迫に圧倒され、運転手は方向転換し、一人残ったカザリの前に立ちはだかるのは、来た道を戻っていく。耀太と瓜二つの戦士、オーズだった。

狙われた少女とカザリの戦いと謎のメダル

月と星。そして街灯だけが明かりを灯すこの場所で、家に帰る途中だった鞠莉たちの前に現れたカムイ。既に変身は完了し、武器を手にして、いつでも戦うことが出来ると言っているようだ。

「何をしに来たの？言っておくけど、これ以上コアメダルを渡すつもりは無いよ。むしろ、ボクたちのコアを返してくれないかな？」

「そんなに怖い顔をしないでください。わたしの持つメダルを返すことは出来ませんが、君からメダルを奪うつもりはないのでご安心ください」

「それじゃあ本当に何が目的？」

「今のわたしが欲しいのは、君が逃がしたあの少女ですよ」

「鞠莉たちのことか！」

「ええ。正確にはその欲望ですがね」

カムイの目的を聞いて戦闘態勢に入るカザリ。そんな彼を見て、カムイはやれやれと肩をすくめる。

「しかし逃がしてしまうとは……君もなかなか酷いことをしますね」

「どういふこと?」

「よもや、わたしが一人でここに来たとしても?わたしが作り出したヤミーたちが、この周りを囲っているのですよ」

「なっ……!?!」

しまった。既に車は随分と離れてしまっている。彼の速さなら追いつくのは容易いだろう。しかし、今日の前にいる敵を足止めしなければ、彼女たちがさらなる危険に晒される。……なら自分に出来ることは……。

「ここで君を足止めして、少しでも鞠莉たちが逃げられる確率を高くする!」

「面白い冗談ですね。今の君にわたしが止められるとは思いません……が、その敬意を評して、お相手を勤めさせていただきましょう!!」

ジャラムを構えるカムイ。対するカザリもグリードへと姿を変え、戦闘の構えを取る。

「頼んだよ、オーズ、アंक……!」

鞠莉たちを救うことが出来る戦士たちに全てを託して。

「はあ……歌うのつてあんなに疲れるんだな……。千歌ちゃんたちつて凄いわ」

「えへへー、それほど」

「つていうか耀太くんたちは歌ってる以外に演武もしてたじゃない」

千歌、梨子ちゃん、そしてアंकと帰路につき、十千万でしばらくお喋りをしていた。

まあ、内容はお察しの通り今日の閉校祭のゲリラライブだ。

「でも本当にびつくりしたわ。『もう終わりかあ…』つて雰囲気だったのに、いきなり始まったんだもの」

「それは俺も思った……。慎司が『どうせやるなら最後にド派手にやりましょう！』つて」

「それであんな花火まで用意しちゃうなんて……。一体どこから持ってきたの？」

「うーん……。それは秘密かな？」

「ええー！ 凄い気になるう！」

モヤモヤを抱えたような表情になる千歌ちゃんとそれを見て苦笑する梨子ちゃん。

そんな微笑ましい光景を見ていたはずなのに、この瞬間に俺の心を覆った感情は焦りや不安と言った負の感情。

「耀太くん……。？」

そんな俺の表情を見て、千歌ちゃんが不安そうな声で俺の名前を呼ぶ。

「どうしたの？ 何だか怖い顔をしてるけど……」

刹那、焦燥感やらなんやらを引ひつ括めた嫌な予感、大きく膨れ上がる。

「ヨーター！」

「アंक、それにみんなも感じたのか……」

「ああ。それもかなりの数のな」

気のせいじゃなかったか……大多数のヤミーの気配。

それにグリードに酷似した気配が一人分だ。

「感じたって何？ 一体何を感じたの？」

二人の中でも、俺から感じ取った正体不明の焦りを、良くないことが起こったという結論に至ったようだ。

何を感じたの？ 千歌ちゃんがそう尋ねた時、俺はしまったと顔を手で覆う。

「ごめん二人とも。このことは戻って来たら話す。だから……」

待っていて、そう告げようとした矢先、バツタカンドロイドがやって来る。

『耀太!! 助けて!!』

「っ?!」

「鞠莉ちゃん!?! 何があつたの!?!」

必死に助けを求める鞠莉ちゃんの声が、カンドロイドから流れます。

『もう一人のオーズが現れて、カザリが残って逃がしてくれて……その後たくさんのヤミーが追いかけて来て! それで……!』

「分かった！俺たちが行くまで絶対に逃げ切って！」

事態はかなり不味い方向へ傾いているようだ。

大量のヤミーが鞠莉ちゃんたちを追って、カザリは一人でカムイと戦っている……。早く行かなければ！

「ウヴァ、メズール、ガメル！こことみんなのことを頼む！アंक、行くぞー！」

「言われるまでもない！」

俺とアंकはライドベンダーを変形させ、待つていたらしいタカカンドロイドの案内に従って鞠莉ちゃんたちが助けを待つ場所へ向かった。

「はあ……はあ……」

「大丈夫ですか？もう随分と息が上がっているようですが」

まだまだ余裕を見せるカムイに対し、カザリはかなり体力を消耗している。カムイとの戦いで、相当な量のセルメダルを消費してしまったからだ。

「息が上がる？ボクはグリードだよ。コアを取り込んだ所為で目が悪くなってるんじゃない？」

「ふふふ……そうだと良いですねえ」

笑いながらジャラムを振るい、カザリに近づいていく。一方のカザリは、傷口からメ

ダルが零れないように押さえている。

「はああああ!!」

左腕をぶらりと垂らしながら、右手だけで攻撃を仕掛ける。

しかし、それは簡単に剣でいなされ、弾かれてしまう。

「君といいアंकくんといい、本当に彼らに毒されてしまったんですね……一度はともに行動してただけあり、哀しく思いますよ」

「よく言うよ……君たちがボクらを捨てたんじやないか」

カムイともう一人、翼をもつ男にコアを裏切られ、コアを奪われたあの日のことを思い出す。

「……まあそのおかげで鞠莉たちに出会えた。それについては感謝してるかな」

「なるほど……やはり君を逃がした彼の判断は甘かったということですね」

「そういうことだね。君はつくづく仲間にも恵まれないみたいだね」

「口は禍の元……人間たちの言葉だそうですね」

カザリの発言に少し頭に來たのか、カムイの声色が若干怒りを孕んだようなものになる。

カムイは紫のメダル三枚をジャラムのくぼみにはめる。

「スキヤニングチャージ！」

劍の刀身が冷気と紫色のスパークを帯びる。

「消えなさい」

振り上げられたメダジャラム。それはカザリに振り下ろされるはずだった。

だが、その時が来ることは無かった。

「……？」

いつまで経っても攻撃が来ないことに気付いたカザリは、閉じていた目を開ける。

劍は彼の頭上スレスレの場所で止まっていた。

「……くつくつく……やつと捕まえましたか。予想より時間が掛かってしまいました
が、まあいいでしょう」

一人ごちるカムイを前にして、カザリは疑問符を浮かべる。奴はいったい何を言っているのか。予想をつけることが出来ないわくではない。カムイの言葉を冷静に分析する。

カムイの狙いは鞠莉。そして「捕まえた」と言った。……カザリの意識の中に最悪の情景が映し出される。

「君とのお遊びもここまでです。命拾いしましたね」

カムイはバツタレッグの力を解放し、最大まで跳躍力を引き出して跳び去っていく。

「ちっ………待て………！」

カザリもボロボロの体に鞭打ち、その後を追いかけた。

そのスピードは尋常ではなく、グリードである彼にさえも追いつかせることを許さない。

今出せる目一杯のスピードを出す、カムイとの戦闘で負ってしまったダメージが響き、セルメダルが零れ落ちていく。

それでも……！それでも彼は走る。

大切な人を守る為に。

体を酷使し続け、辿り着いた時には、鞠莉と果南、そして運転手は軍鶏ヤミーの力で拘束されていた。

「おや、追いついて来たんですか？けれどボロボロですねえ。ここに来るまでにどれだけメダルを落としてしまったんですか？」

途切れ途切れの息に、傷だらけの体。

カムイはそんな様のカザリを見てせせら笑う。

「その子たちを離せ！」

「そう言われて素直に『はい、分かりました』と応じるとでも思いました？特に彼女は私の計画には必ず必要になってくるのですから」

彼はそう言いながら、一枚のメダルを取り出す。

一見すると、何の変哲もないメダル。

しかし、それはカザリにとつては異常な代物だった。

「何そのメダル……それで鞠莉に何をするつもりなの!？」

「さあ、何でしょうね？君なら分かるんじゃないですか？欲望を持つ人間にすることと言えば」

彼はその得体の知れないメダルを使い、鞠莉からヤミーを生み出す気でののか。

そんな考えが、カザリの頭の中で自然に出来上がる。

「そんなことさせない！鞠莉はボクが守る!!」

右手をかざして竜巻を発生させるも、軍鶏ヤミーとゾウヤミー、カマキリヤミーに阻まれる。

「ヤミーのクセにボクの邪魔をしないでよ!!」

三体のヤミーに攻撃を始める。

だが、グリードとは言え、三対一なうえに深手を負っている。

攻撃は容易く防がれ、また簡単に腕を捕らえられてしまう。

軍鶏ヤミーに腕を捕られ、ゾウヤミーに体を押さえられて、カマキリヤミーに胸を裂かれる。

「ぐわあああ!!!」

さらに拘束を解いたゾウヤミーから追撃を貰ってしまい、グリードとしての姿を保てなくなってしまう。

「カザリ!!もうやめて!わたしはどうなっても構わないから!カザリたちにはこれ以上手を出さないで!!」

「鞠莉(お嬢さま)!!?」

鞠莉の悲痛な叫びが辺りに響く。

「ダメだ……」

しかし、彼は立ち上がろうとしていた。

「キミを渡すわけにはいかない………それをしてしまえば、オーズたちに………耀太たちに合わせる顔が無い………。何より、そんなことボクが許さない………!」

「カザリ……」

血のようにメダルを零しながら、怒りの色を露わにするカザリ。

その姿に、果南はかつて自らを救った耀太を重ねる。

「ふっふっふ、そんななりで何が出来ると言うのですか。自らが死ぬことで彼女たちの後悔と恐怖心を植え付けることですか?」

ヤミーたちを退かせ、カザリに剣を突きつけるカムイ。

「やめて………!お願いだからやめてよ!!」

再び鞠莉が叫ぶ。

もう一度、カザリはそれを止めようとするが、声を出すことが出来ない。

カムイは軍鶏ヤミーに命じ、鞠莉を自身のすぐそばまで連れてこさせた。

「鞠莉を離して！その代わりにわたしが……」

「ふむ……申し訳ありません。今の貴女の欲望ではわたしの望みを果たせないので
よ。ですからその望みを聞いてあげることとは出来ませんね」

その手に持つ金色こんじきのメダルをちらつかせるカムイ。

「ごめんね、果南。また勝手なこととして……。ダイヤと耀太にも……。わたしの代わりに
謝っておいて」

「鞠莉っ!!」

その瞳に涙を溜め、申し訳なさそうに笑う鞠莉。

彼はそんな鞠莉の額に挿入口を出現させ、そのメダルを投げ入れた。

「う……うう……うう……!!!!ああああああああ!!!!」

直後、鞠莉は自ら拘束を破り、絶叫し、その体は投げ入れられたものと同じ金色のメ
ダルに包まれていく。

「そんな……」

そして鞠莉は、ライオンの頭、ゴリラの上半身、肩には虫の頭がついていて、背から

鳥の翼、下半身はタコの足のような装飾を持ち、尾に位置する場所から蛇が生えている
ヤミー——キマイラヤミーに取り込まれてしまったのだった。

明かされた真実と秘密と休息

俺はプトティラコンボに、そしてアंकはグリードの姿に変身し、道中の屑や成体ヤミーたちを蹴散らしながら、嫌な気配の方へと近づいていた。

そして遂に、屑ヤミーたちのその向こうで複数人の姿を確認が出来た。

とても良くないことが起きている気がしてならない。

一刻も早く彼女たちのもとへ行きたいのに、屑ヤミーたちが壁を作り、行く手を阻む。俺たちの邪魔をするんじゃない——!!」

冷気を広範囲で発生させ、エクスターナルフィンで扇いでヤミーたちを凍らせる。

「はあ!!」

凍りつき動かなくなった屑たちを、アंकは火炎弾で、俺はテイルデイベイダーで粉砕する。

砕け散った氷たちは粉塵となり、宙に舞う。

「ライオン・トラ・チャーター・ラッタ・ラッタア! ラトラーター!!」

ラトラーターにコンボチェンジ。

ライオディアスで氷の粉塵を全て溶かし、視界を回復させていく。

晴れ始めた視界に入ったのは八人程のシルエツト。そのうち二人は座っていて、一人は倒れていた。

やがて全ての氷が溶けると、その光景が露わになった。

地に伏していたのはカザリ。縛られていたのは果南ちゃんと運転手さんだけ。

そしてポセイドン、否、カムイが変身しているオーズと、軍鶏ヤミー、ゾウヤミー、カマキリヤミーと悶えているように見える合成ヤミーも目に映る。

……鞠莉ちゃんがない。

「カムイ！鞠莉ちゃんをどこにやった!?!」

「出会って早々、挨拶もなしに聞くことがそれですか……」

やれやれと肩をすくめるカムイ。その仕草は、俺をさらに苛立たせる。

「答えろ！鞠莉ちゃんはどこだ!?!」

「彼女ならそこにいるではないですか。おっと……君は見えていないんですね」

「……どういふことだ」

「そこですよ。今君の目の前にいるヤミー——それが小原鞠莉さんです」

恐竜系を除くヤミーが全て混ぜられた容姿のヤミーを指差すカムイ。……やはり嫌な予感の中ってしまった。

「貴様ああああ!!!」

灼熱の肩書きを持つラトラーターのボディから、絶対零度の冷気が発生する。

俺はメダガブリューを生成して、カムイに斬り掛るが、三体のヤミーに阻まれる。

「くっ……邪魔だつて言ってるんだよ!!」

再び発生した冷気は、三体のヤミーの下半身を捕らえる。

「カブー！ゴックン！ラトラーター!!」

セルメダル一枚をメダガブリューに噛み砕かせ、エネルギーの充填。

「はああああッ!!」

横一文字に斧を振り、三体のヤミーを爆散させた。

そして次に向かう先はカムイ。

俺は斧を構え直し、奴と対峙する。

「君は……いえ、君たちは随分と変わった人間です。何故この世界の為に、そしてこの世界の人間の為に戦えるのですか？この世界とは無関係な異世界の住人であった君たちが」

やっぱり気付いていたんだな。

腐つても神、そして女神さまの弟ということだろう。

「関係あるよ。この世界も、そしてみんなも、あとちよつとで丁度一年の長い付き合いだ

！それに……」

俺は一瞬だけ果南ちゃんの方を見、すぐにカムイの方へ向き直る。

「……そうですか。やはりわたしたちは戦う運命にあるのですね。世界は違えど、人間を守りたい君と、人間を滅ぼしたいわたし。どちらの欲望が“王たる器”に相応しいか、すぐにでも決着をつけたいところですが……彼女との約束なのでね。今はここまでにしておきます。次に会う時が、“最後の審判”の時です——」

「！待て、カムイ!!」

奴は黒い霧を発生させて奴自身と鞠莉ちゃんを取り込んだヤミーとともに姿をくらませた。

……俺は今にでも叫びたいほどの憤りを抑え、果南ちゃんと運転手さんの拘束を解いた。

「鞠莉……」

二人がいた場所を見つめながら、果南ちゃんは鞠莉ちゃんの名を呟いた。

十千万に戻ると、慎司と晴也、そして二人と一緒に帰ったはずのみんなが集まっていた。

どうやら帰る途中でヤミーに襲われ異変を感じ、散らばっているのは危険だと判断したらしい。

「そんな……」

「鞠莉ちゃんか……」

俺たちはつい先程までに起きたことを、包み隠さずみんなに話した。

今回のヤミーの大量発生がカムイの仕業であること。

鞠莉ちゃんがヤミーの親にされ、攫われたこと。

後者は特にみんなに打撃を与え、その面持ちは暗く落ち込んでいた。

「ねえ、耀太」

そんな中、あの場にいたうちの一人——果南ちゃんが俺にであることを尋ねてきた。

「あの人が言ってくれたこと、『この世界とは無関係な異世界の住人であった君たち』ってど

ういうことなの？」

……いつかは話さなければいけない。

俺のグリード化と合わせて、ずっとそう思ってきたことだ。

今がその時だ。

「……みんなにはいつか言おうと思ってたことだ。本当は全員揃ってる時が良かったんだけど、こうなった以上、そうも言ってもらえない。だから全部話すよ、俺が……俺たちが知ってること、全部。（女神さま、今の話聞いてた？）」

『うむ。一語一句落とさず聞いてたぞ。真実を話すか否かはぬしらの自由じゃ。といっ

ても、あやつが言ってしまった以上、もう言うしかないじやろうがな』

「(慎司と晴也も良いな?)」

「(俺は構いません。いつまでもみなさんに隠し事をするのは心苦しいですから)」

「(俺も佐藤ちゃんと同じです。まあ、あとは信じてもらえるかですね)」

『待つておれ。今からわらわもそっちに行く』

「(なるべく早く来てくれ。俺たちだけじゃ信じてもらえないから)」

『任せておけ。ちゃんとタイミング良く行けるようにする』

……タイミング良くつて……いや、そんなことより、今は女神さまが来るまで話を進めよう。

「耀太さん?」

「つと、ごめんね。じゃあ話すよ。……俺と晴也、それから慎司は、元々この世界の人間じゃないんだ。神子さん……女神さまに頼まれて、コアメダルを集める為にこの世界に来たんだ」

みんな……グリードたちですら言葉を失う。

そりやそうだ。本当は仮面ライダーだの、ヤミーだの、グリードだのと、こんな非常識に関わるはずではなかったのだ。

そして極めつけは神から遣わされた異世界の人間。

グリードたちもそう易々と信じられはしないだろう。

「信じられないかもしれないけど、これは事実なんだ」

俺は念を押すように、そう告げる。

「シン……本当なの？」

「本当だ。もつとも、俺はちよつと特殊なんだけどな」

善子ちゃんが、慎司に真偽を問うが、慎司からの答えは、当然イエスだ。

『詳しいことはわからわから話そう』

部屋中にあの人の声が響く。

「神子さんの声……？…？…？…？…？…？…？…？…？…？…？」

しかし、いつもとは全く違う雰囲気、みんな何処と無く気付いている。

そして次の瞬間、部屋の中にワームホールが出現。

その中から、幼い容姿ながらも、気高く、美しく、そして神々しさを持つ彼女、女神さまが現れた。

「うそ……」

驚愕に次ぐ驚愕。

今この瞬間の出来事は、一生忘れることが出来ないだろう。

「神子……さん……？」

「おう、『ミコ』じゃよ。女神ミコじゃがの」

千歌ちゃんと呼んだ名、かつて彼女自身が名乗った名前を正す女神さま。てか女神さまのそれって本名だったのか……。

「当たり前じゃ。こんななりでもわらわは女神。嘘などつかん」

「いや、今心の声を読まなくていいよ！ほら早く説明してよ！」

女神さま——女神ミコは、「やれやれ……」と嘆息してから語り始めた。

「話を始める前に、みな記憶を戻そう。耀太たちと出会ってから、わらわが改ざんした全ての記憶をな」

女神さまは右手に光を纏わせ、それを上に掲げる。

すると、

「……そうだ、あの時わたしは……」

失われていた記憶を、初めに言葉にしたのは千歌ちゃんだった。

「済まなかったな、千歌。ぬしのような心の綺麗な者に、あんなものを覚えていて欲しくなかつたんじゃない」

「俺からも謝ります。あの時は本当にごめんさい」

千歌ちゃんに頭を下げる女神さまと晴也。

三人が話しているのは、きつとカムイが学校に攻めてきた時のことだろう。

それに続いて果南ちゃんが。

「わたしも思い出した——。千歌たちが初めてライブした時、巨大な怪物が外に現れて……それを倒した緑色のオーズ……」

「初めて俺がコンボを使った時だね。あの後、コンボの反動で倒れて大変だったのは、今でも良く覚えてるよ」

「あの時耀太くんが保健室に運ばれたのって過労じゃなかったんだ……」

曜ちゃんに言われ、そんな言い訳をしていたことも思い出す。

それからあとの出来事でも色々あったが、今は話し込んでいる場合ではない。

「では順番に、まずはグリードたちとコアメダルについてじゃ。みなは耀太たちからの誕生について話は聞いておるじやろう。それは確かに本当じゃ。じゃがそれはまた別の世界での話。今ここにいるアंकたちが持っているものは、わらわと弟——カムイの二人で創り出したものじゃ」

「っ!?!」

ウヴァやメズールはもちろん、カザリとアंकも目を見開く。

「で、でもボクたちには『あの王』と戦った記憶が……」

「ぬしらが持っている八百年前の記憶、それらは全てわらわが埋め込んだ虚像じゃ。現世の者たちに神の存在を知られることを良しとしない輩も多いうえに、そういった神は

色々とうるさいからの」

「……………」

人間によつて造られたのではなく、神により生み出されたという事実。

それは途方もなく壮大なスケールであり、グリードたちもそう簡単に飲み込めるものではないのだろう。

そう言えばいつだったか、「神は原則、直接下界で力を使つてはいけない」みたいなことを言つてたけど、やつぱりそういうことだったんだな。

「ま、……まで来てしまえばそんな輩も何も言えんじやろ。そんな堅苦しい考えでは手遅れになるやもしれんということが分かったじやろうからな」

そこまで話し、彼女はもう一度息を吐いた。

「あ、あの……女神、さま……？」

女神さまをそう呼んだのは、梨子ちゃんだ。今までずっと「神子さん」と呼んでいた所為で、慣れないらしい。

「今まで通り『神子』で構わんよ。どこかの誰かのようにタメで話しかけてくる輩もあるからの」

どこかの誰つて思いっきりピンポイントじゃねーか！

しかも視線が明らかに俺の方を向いてるしな。

「えつとじゃあ、神子さん……そのカムイって人のことを弟って……」

「ああ、わらわの愚弟じゃ。人間を『同じ過ちを繰り返す愚かな存在』と考え、滅ぼそうとしている。じゃからそれを止める為に、耀太と慎司、晴也をこの世界に喚んだのじゃ」
元々はコアメダルを集める為。

そして封印するという真の目的を告げられ、今の目的はカムイを止めること。

こちらもまた、随分と話が大きくなつてしまったものだ。

「……じゃあその目的が達成出来たら、耀太たちは元の世界に帰っちゃうの……？」

不安そうな声で問うてくる果南ちゃん。

俺はそれに対して、首を横に振る。

「帰らないよ。戦いが終わっても、俺たちは帰らない。みんなと別れるなんて嫌だからね」

「三人とも異世界で大切なものを見つけちゃうバカですからね」

「惚気けるのは後にしてくれよ。まだ言いたいことがある者がいるようじゃからな」

女神さまが目を向けた先にいるのは、もちろん俺。

ただし、今度はさっきのようなふざけが混じつたものではない。

語りのバトンが、女神さまから俺へと渡された。

「俺からもう一つ、みんなに話したいことがある。色々聞かされて混乱してると思っけ

ど、この話もちゃんと聞いて欲しい。……俺の体は……」

「グリード化してるんだよね……?」

「っ!」

「え?」

突然割って入ってきた果南ちゃんに、みんなだけでなく、俺や晴也、慎司も驚かされる。

「ど、どうしてそのことを……」

「忘れたの? 体が入れ替わっちゃった時のこと」

「あ……」

完全に失念していた。

そうか……あの時果南ちゃんは、俺の体で異変を感じてしまったんだ。

「耀太の体でいた時、変な違和感を感じて、初めは気のせいかと思ったんだけど、アंकさんからその話を聞いて、その時に一瞬だけ見えるもの全部の色が消えたんだ」

「アंक……誰にも言うなって約束だろ」

「お前だつて大層なことを隠してただろ。これであいこだ。それにカナンがいつただろ。異変を感じたつて。あの時は、いつお前の秘密がバレてもおかしくなかったんだよ」

それを言われると、何も言えなくなってしまう。

「今の話は本当なんですか?」

「本当だよ。もう俺の体はほとんどグリッド化してる。お腹は空くけど、味は分からないし、目に映るものを色褪せて……聞こえる音は全て雑音のようになってしまった。みんなの歌をちゃんと聴けたのは、地区予選を突破した時が最後かな」

「そんなに前から……一体何故?」

「コアメダルだ。お前は直接見たはずだ、暴走したオーズをな」

「暴走……あの時の紫色のオーズですか?」

「そうだ。アレがヨータの中に入り込んで、コイツの体をグリッド化させていつてる。

……まあ今となっては進行しきってると思うがな」

みんなの視線が俺へと向けられる。

「そうなの、耀太くん……?」

「進行しきるとの言い過ぎだ……って言いたいけど、実際左半身はほとんどグリッド化してる。完全にグリッドになってしまうのも時間の問題かな……」

これ以上落ち込みようが無かったと思われるみんなの気持ちだが、さらに深くなっているのが分かる。

隠し事をしていたことに対して何も言わないのは、それを知ればラブライブに集中出

来なかったと理解してしまったからか、それとも言葉が見つからないのか。

どちらにしろ、彼女たちには悪いことをしてしまった、そんな罪悪感が俺を襲う。

「……その力を手放すことは出来ないの？」

ルビィちゃんの声が振り絞り、そう聞いてきた。

「女神さまの力を使えば多分出来ると思う。けど、これが無いと、俺は奴を止められない。皮肉なことに、毒とも呼べるこの力は、俺に奴と対等に戦えるだけの力を与えてくれているんだ」

「気に入らんが、耀太の言う通りじゃ。それは今耀太が使える中で最強の力。もちろん戦いが終われば、それはわらわらわらわら取り除く。じゃから済まないがそれまでは……」

本当に申し訳ないと、謝罪の言葉を述べる彼女。

「大丈夫さ。それより今は鞠莉ちゃんが心配だ。一刻も早く助け出さないと……」

今は俺の体より、鞠莉ちゃんの方が優先だ。

俺は自分のことから鞠莉ヘシフトし、さっきの状況について話し始める。

「助け出すって言っても、情報が何もなくなっちゃ始まらない。……辛いかもしれないけど、さっきのこと教えて欲しい」

「鞠莉のことを助ける為だもん。わたしが聞いた限りの話だけだけど……」

「お嬢さまの為ならば、微力ながらわたしも協力させていただきます」

果南ちゃん、そして運転手さんもそう言ってくれた。

あの場にいたもう一人——カザリは。

「鞠莉を守れなかったのはボクの責任だ。ボクはボクでやらせてもらうよ」

「カザリ、待て！」

「はあ、仕方のない子ね」

「カザリー？どこに行くんだー？」

鞠莉ちゃんを守れなかったことに強い責任を感じているらしく、一人出て行ってしまった。

「済まん、耀太。俺たちも行かせてもらう」

「ええ。カザリが無茶しないよう、様子見も兼ねてね」

「分かった。でも無理だけはするな。もちろんカザリのこと、危ない真似をする前に止めてくれよ」

「了解よ」

ウヴァたちにカザリの後を追いつ、彼のブレーキになつてくれるよう頼んだ。

そしてアंक以外のグリード……って俺ももうグリードみたいなものか……。

ともかく四人が出て行った後、話をもとに戻し、鞠莉ちゃん奪還作戦を考えることになった。

果南ちゃんと運転手さん、二人から聞いた話だと、奴は俺たちから聞いたことのないメダルを使つたらしい。

「金色のメダル……そんなメダルは聞いたことは……」

「ないな」

「わらわもそのようなメダルは知らぬ」

「……ということはカムイが新造したメダルつてことか……」

「だけど、普通のメダルと何が違うんだ？二人が言うには、鞠莉ちゃんの額に挿入口が現れて、そこにメダルが投入されてヤミーになった……正確にはヤミーに取り込まれてしまったらしい。」

「果南先輩、他には何か言つてませんか？例えば欲望がどうか？」

「そう言えば、わたしは鞠莉の代わりになろうとした時、『今の貴女の欲望ではわたしの望みを果たせない』つて言つてた」

「果南ちゃんの欲望では望みを果たせない……？」

「ようは、マリくらいの大きさの欲望がなければ成し得ない何かがあるつてことだろうな」

「成し得ないこと……もしかしたら、カムイの計画が最終段階にまで達したとか？」

「多分、それで合つてると思う」

晴也の推測は、これまでのことを考えれば、何となく想像ができるだろう。

けれど、ただ鞠莉ちゃんをヤミーにすることだけが、奴が目的を達成する為の引き金ではないだろう。

何を条件として、カムイの“望み”が果たされるのかは分からない。

けど、今は早く鞠莉ちゃんを助けなければいけないことに変わりはない。

「どこに行くの、耀太。まさか今から戦いに行くなんて言うわけじゃないよね？ さつき
の戦いで消耗しているまま行っても、鞠莉を助けるどころか、耀太がやられちゃうよ!!」
部屋を出ようとする、果南ちゃんに止められる、

「果南の言う通りじゃ。それにあやつがいそんな場所にあてがあるのか？」

「……カンドロイドたちと一緒に見つける」

「無謀ですわ。それこそ、見つける前に貴方が倒れてしまいますわよ」

「でも早く見つけないと……!!」

「ヨーター！」

焦りを感じ始めると同時に、アंकに怒鳴られる。

「カムイは、次に会う時が最後の審判だと言った。その言葉に嘘がなければ、アイツが行
動を起すことはまだ無い」

「……信用は出来ませんが、今は信じるしかありませんね」

「晴也……」

「そうです、先輩。今は休んで、出来るだけ体力を回復させましょう」

晴也、慎司もアंकクに続いて俺は止めた。

……あいつらの言っていることは、一理あるどころか、ドがつくほど正論だ。

「分かった……今日はもう休むよ」

みんなの説得に、俺は冷静さを取り戻し、今日カムイたちを見つけるのは諦めることにした。

俺は自室に戻り、アंकクの俺、二人分の布団を敷く。

「これでよしと……ふう……」

いつもより疲れたのは、恐らく戦いの所為だ。

風呂にも入ったし、アंकクはそのうち戻ってくるだろ。

俺は自分の布団に潜り込むが、なかなか眠りにつくことが出来ない。

鞠莉ちゃんのこと、どれだけ苦しい思いをしているだろう。

今彼女は、どれだけ苦しい思いをしているだろう。

どれだけ辛い思いをしているだろう。

そう思うと、眠ることなど出来ない。

休むに休めないこの状況に嘆息していると、誰かがドアをノックした。

今日は色々なことがあった。

鞠莉がヤミーにされてしまったこと。

神子さんは実は女神さまだったこと。

そして耀太たちは他の世界から来た人たちということ。

どれもにわかには信じ難いことだし、鞠莉のことに関しては信じたくもない。

けれど、どれもこの目で確かに見てしまった。

信じるしかないことなんだ。

女神さま……神子さんが、「バラけていると、まだ誰かが危険な目に遭うかもしれない

い」と言ったことで、今日は全員が十千万に泊まることになった。

そしてわたしは、今耀太の部屋の前まで来ている。

どうしてここまで来てしまったのか、それは十数分前に遡る。

お風呂を出て着替え、髪を纏めていると、アंकさんがやって来た。

もちろん、「扉越しにはあつたけど。

「どうしたの、アंकさん？」

「ヨータのところに行行ってやれ」

「……へ？ちよ、ちよつと待って！ど、どういふこと!?耀太のところに行けて……」

突然耀太のところに行けと言われ、動揺してしまうわたし。

い、いや、それは普通だと思っただけ……。

「前にも言っただろ。アイツには……ヨータにはお前の支えが必要だ。特に今回はかなり気に病んでる。あの様子だと、十分休むことも出来ないだろうな」

わたしやダイヤ、そして今や千歌たちもそうであるように、耀太にとっても鞠莉は大切な仲間で、友達。

そんな鞠莉を助けることが出来なかったことは、耀太に精神的なダメージを十分与えたはず。

力を持っていながら、成すことが出来なかった彼からしてみれば、それは尚更だ。

そんな状態で耀太を戦いに行かせるわけにはいかないし、何より行かせたくない。

「……分かった。それじゃあ耀太を元氣付けて来る」

「任せたぞ。俺は晴也たちの部屋で寝るから、お前は俺の布団を使え」

「ありがとう、アंकクさん」

アंकクさんにお礼を言っていると、彼は言った通り、晴也くんたちがいる部屋に行ってしまった。

……そして彼が見えなくなった後で、わたしは事の重大さに気付いた。

「……………え? 『俺の布団を使え』 って……………えええええ!!」

そして今に至るわけなんだけど……。

ど、どどどうしよう……アंकさんは、その……つまり、耀太と一緒に寝てくれって……。

体温が一気に上昇していく。

だ、だってわたしたちはまだ高校生だし、まだちゃんとお付き合いもしてないわけ……。

い、いや、アंकさんは耀太を元気にしてあげてと言っただけで、やましいことをしろとは……でででも、げ、元氣ってそういう……。

頭の中がこんがらがっていく。

こ、こんな状態で部屋の前で躊躇っているのを誰かに見られたら……。

わたしは覚悟を決め、扉をノックした。

「ん、アंकク？」

「わ、わたしだよ……その、入って良い……？」

「うん、良いよ」

耀太から入室の許しを貰い、ドアを開ける前に深呼吸する。

それからわたしは耀太の部屋に入り、耀太の隣に座った。

「お邪魔しまーす……」

「どうぞー……と言っても、時間が時間だから何も出せないけど。それにしても、俺の部屋に来るなんて何かあったの？」

「えっと、その……もしかしたら耀太、落ち込んで休めないんじゃないかと思って、気になっちゃって……」

「ははは、果南ちゃんには敵わないな。……うん、全くもってその通りだよ。明日の為に早く寝た方がいいのに、全然寝れなくて……」

耀太は後頭部を掻きながら苦笑する。

どこか無理をされていて痛々しく思える彼。

そんな姿を見ていると、羞恥心なんてものは、いつの間にか消え去っていた。

「じゃあ、ちよつと横になって？」

「え？う、うん……」

言う通り横になってくれた耀太。

わたしも横になって耀太の頭が自分の胸元にくるように、そして息が出来なくならないよう、耀太を抱きしめた。

「あ、あの、果南さん？これは一体どういう状況でしょうか？」

顔を真っ赤にする耀太。

息が当たって少しくすぐったい。

「こうすればちゃんと寝られるかなと思って。どう？わたしの胸の音、聞こえる？」
「う、うん……これだけ近ければ流石に……」

霧散していったはずの恥ずかしさが次第に戻ってくるも、それから数分後、胸元から「すうすう」という寝息が聴こえてきた。

「良かった、ちゃんと寝れたみたい」

幸せそうな顔で眠る耀太の頭を撫でる。

眠るまでの過程も相まって、幼い子どものように見えてしまう。

「わたしもなんだか眠くなってきたな……」

けど、部屋に戻ろうにも、下手に動けば耀太が起きてしまうかもしれない。

……今日だけなら良いよね？

わたしは部屋に戻らず、そのままこの部屋で夜を明かしたのだった。

欲張りな少女と王たちと復活

熱く盛り上がり、とても楽しかった閉校祭。

普通なら、その余韻に浸って友人や家族、人によつては恋人と語り合ったりするものだ。

けれど、俺たちにはそんなことする余裕はなかった。

否、許されなかった。

鞠莉ちゃんさがらわれてから、およそ半日が経った。

俺は部屋を抜け出し、日が出たばかりの海を眺めていた。

『次に会う時が、最後の審判』の時です——』

最後の審判——俺と奴の決着、そして人類の未来。

もちろん、最優先は鞠莉ちゃんもだちを助けること。

けど、カムのイの言ったことが気になってしまうのもまた事実だ。

「なーに考え込んでるんですか、耀太先輩」

不意に背後から声をかけられた。

振り向くと、慎司と晴也の姿があった。

「不安なんですか、耀太さん」

「……かもしれない、いや、きつとそうだな。鞠莉ちゃんのが心配だし、絶対に助きたい。それに今度の戦いは間違いなく、今までで一番厳しい戦いになるはずだ。人類の存亡をかけた戦いに」

今まで、どんな手を使ってでも俺たちを倒そうとしてきた奴のことだ。

また良からぬ手段を用いて、俺たちを翻弄しようとするだろう。

「……そんなの、百も承知ですよ」

「たとえ、どんなに卑怯な手を使ってこようと、正々堂々、真つ向からそれを破って勝つだけです」

……本当、頼もしい後輩たちだな。

俺の中の曇りが、少しだけ拭われる。

「さて、そろそろ戻りましょう。朝飯の支度もしないといけないんだし」
「だな」

俺たちは十千万に戻り、後から目を覚ましてきたみんなと朝食を食べた。

その後はカンドロイドたちによる搜索。

俺たちも行くこうとしたが、体力を温存しておくと女神さまとアंकに言われ、何かあるまで待つことにした。

パソコンでカンドロイドたちから送られてくる映像や画像を確認しながら、俺はふと思った。

戦いが終わった後、アंकたちグリードはどうなるのだろう。

当初の予定ならば、全てのメダルを回収、封印するはずだった。

初めは俺もそれに賛成だった。

けど、アイツらと過ごした時間は、グリードに対する俺の意識を少しずつ変えていった。

出来ることなら、みんなを封印なんてしたくない。

誰かに想いを寄せるようになったウヴァ。

気持ち共有できるようになったガメル。

人と触れ合うことで愛を知り始めたメズール。

誰かの為に戦うことが出来るカザリ。

そしてもう一人――。

「何だ？」

アイスを頬張りながら、タブレットを操作していたアंकが尋ねてくる。

「いや、何でもない」

「……そうか」

俺が答えると、少しだけ間を開けてそう言い、視線をタブレットへ戻す。

そうだ……今は鞠莉ちゃんを助け、カムイを止めることだけを考える。

再びパソコンのモニターに目を向ける。

やはり何も見つからない……そう思った直後、

「！」

きた！アイツの気配だ！

俺はパソコンを閉じてからあぐらを解いて立ち上がり、起き上がったアंकとともに扉の前まで来て、開こうとした時だった。

扉に手を伸ばすも、触る暇なくひとりでに開いていく。

この部屋に……俺を訪ねてきたのは、ダイヤちゃんだった。

「ダイヤちゃん？」

「もう行くのですか？」

「ああ。やっとアイツが現れたからな」

アंकが問いに答えると、彼女は「そうですか……」と一言呟き、言葉を続けた。

「耀太さん、貴方に渡すものがあります。手を」

そう言われた俺は、ダイヤちゃんの方へ手を差し出す。

ダイヤちゃんは、両手で俺の手を包み込み、ソレを握らせた。

「これ……本当に良いの？」

「はい。彼がわたしに言うのです。『僕も連れて行ってくれ』と。役に立ててあげてください」

「……ありがとう。その思い、たしかに受け取ったよ」

俺はダイヤちゃんにそう告げ、部屋を出ていった。

「頼みましたわよ。仮面ライダー……」

沼津の町に現れたカムイとヤミーたち。

町の人々は、突然現れた怪物の群れを目の当たりにし、逃げ惑っていた。

俺、晴也、そしてアंकは生身で、慎司は徒手に加え、バスターも使って屑ヤミーたちを蹴散らし、逃げ遅れた人を助けながら奴らに近づいていった。

「おはようございませす。今日は絶好の終末日和ですね」

「何が終末日和だよ。ふざけるのもいい加減にしろよ」

既に変身しているカムイからの挑発に、怒りの言葉を返す慎司。

バスターの銃口を奴らの方向に向け、トリガーを引いた。

だがエネルギー弾はカムイにも、隣に並んでいるヤミーたちにも着弾することは無かった。

「どこを狙っているんです？わたしたちは目の前にいるというのに」

「狙ったのはお前じやねえ。あそこにいた人を襲つてた^肩ふてえ野郎だ」

奴らの背後には、確かに腰を抜かしている男性と、頭を失い、欠けたメダルに還元されていく屑ヤミーの姿があつた。

「ほう……まだ人間が残っていましたか。それも中々良い欲望をお持ちのようで……」

「っ!？」

奴はノールックでメダルを男性に投げ入れ、彼はライオンヤミーに姿を変えられた。

「お前……!？」

「ふふふ。憤るのは良いですが、この数を相手にたつた四人でどこまで出来るでしょうか」

たつた四人。

そう言つたカムイの背後には、無数の成体ヤミーたちが吠えていた。

数では圧倒的にこちら負けている。

コンボに慣れてきたとは言え、ガタキリバ五十人分の体力を維持するのに何分持つか……。

「やっぱりグリード化の所為で目が悪くなってるんじゃないかい?」

そう思うやいなや、黄色の竜巻おうしよくがヤミーたちを襲った。

さらに水流、電撃、投石攻撃が成体ヤミーと屑ヤミーたちに直撃する。

「質より量、そんな考えが俺たちに通用すると思うなよ!」

「ルビイたち泣かす奴、俺許さない!」

「ええそうね。そう言うことだからポセイドンの坊や、いえ、今はカムイの坊やだったわね。鞠莉を返してもらおうわよ!」

カザリ、ウヴァ、ガメル、メズールが俺たちの加勢に来てくれたのだ。

「みなさん……」

「感動してる場合か。お前らもさっさと変身しろ」

「ああ!行くぞ二人とも!!」

「はい!!」

俺と晴也、慎司は各々のドライバーを腰に装着し、変身の準備に入る。

晴也はドライバーに水を集め、慎司はセルメダルを指で弾いてキャッチして装填。

そして俺は三枚のコアメダルをオーカテドラルにセットし、傾け、全員同時に最後の変身シークエンスを踏む。

「変……」「変身!!」……身!!」

「タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

仮面ライダーへの変身が完了し、カザリたちとともに並び立った。

「くつくつく……最後の戦いに相応しい役者が揃いましたね。さあ、決着の時です!!」
どす黒いオーラを噴出するカムイ。

オーラと同時に衝撃波が放たれ、付近の建物の窓ガラスが全て砕け散る。

「お前の思い通りにはさせない！俺は……俺たちはこの世界の全てを守る為に戦う!!」
互いに酷似した剣と戦斧を構え、仲間たちも交戦の構えに入る。

「ふっー」

カムイは剣を振り下ろし、それを命令と受け取ったヤミーたちが一斉に飛び出した。

バース・ツヴァイへと変身し、慎司おれはヤミーを何体も薙ぎ払う。

腹部に拳をめり込ませ、足蹴にして払い、バースバスターを連射して吹き飛ばす。

しかし、その数と勢いは衰えることなく、なだれ込んで来る。

「クソッ！これじゃあキリがねえ！」

「慎司、後ろだ！」

ウヴァの警告が耳に入ると、背後からの攻撃をノールックで躲す。

「あつぶねー！助かったぜ。ありがとウヴァ!!」

ウヴァに礼を言いながら、攻撃してきたヤミーの顔面を殴り、爆散させる。

「ふざける暇があったら一体でも多く敵を倒せ！」

「倒せ倒せー！」

ウヴァだけじゃなくガメルにまで怒られた……。

まさかこんな日が来るなんてな……。

とは言え、本当にふざけている余裕が無いのは事実。

その点は省みながら、どうするか考える。

バースCLAWSを装着しただけでどうこうできる量ではないし……。

「おい、慎司！何か良い策はないのか!？」

ウヴァに言われ、一つだけ考えついた案を提案する。

「あるにはある。けど、コイツはセルメダルを千枚も消費するとしてもない金食い虫、もといメダル食い虫。発動させるのに時間がかかっちゃうっていうのが大弱点なんだ」

「なるほどな。ならばその時間、俺たちが稼いでやる！」

「やるー！」

「……済まない、恩に着る！」

俺はカッターウイングを装着し、一時退避。

ありったけのゴリラカンドロイドを起動させ、ポットに入れていたセルメダルをぶち

まける。

「ゴリラちゃん、お手伝い頼むぜ！」

ゴリラカンドロイドたちは、「任せろ！」と返事をするように腕をブンブン振り回す。そしてセルメダルを投入開始した。

メズールさんとともに、ヤミーたちを散らしていく。

だが、いくら倒しても数が減っている様子は見られない。

「くっ……強さはそうでもないけど、これだけの数を相手にしてると流石に……」

「全くもってその通りだわ。本当に鬱陶しい！」

屑ヤミーに関しては分かっていたことだが、成体ヤミーすらもほぼ無限に湧いて来る始末。

戦いが始まってから十数分、既に二十体以上の敵を倒した。

どうする!?!このまま一体一体相手をしていてもジリ貧だ……。

いつかは体力が無くなって敗^まけてしまう……。

「!?!」

思考回路を働かせながら戦っていると、いつの間にか敵が目の前まで迫ってきていた。

しかも大技を仕掛けようとしている。

まずい……!!

攻撃を受ける覚悟を決め、腕を頭上でクロスさせる。

けれど、耐えきることが出来るだろうか？

「はあっ!!」

そう思ったのも束の間、目の前にいたヤミーは水流攻撃をくらい、吹き飛んだ。

「もう少し周りを見なさい。こうしていつも助けてあげられるわけじゃないのよ!」

メズールさんが俺に叱責しながら敵を薙ぎ倒していく。

「す、すいません……。けど、このままではみなさん……」

「やられてしまうわね」

互いの背中を守りながら、メズールさんと話を続ける。

「だからと言って、今攻撃の手を緩めれば、すぐにそうなってしまいうわよ」

「それは……そうですが……」

正論過ぎてぐうの音も出ない。

確かに今手を休めている暇は無くて、しかし何策を練らなければ、このままひたすら倒しているだけでは埒が明かないのもまた事実で。

この危機から脱することは出来るのか……。

「坊や。大切なのは諦めないことよ。耀太や千歌たちのようにね」
「耀太さんや……千歌さん……」

俺はその名前を反芻し、みなさんのことを想う。

彼らが諦めたところを、見たことがあつただろうか。

少なくとも、俺の知っている耀太さんや千歌さんは、簡単に何かを諦めるような人ではない。

そして諦めないことで、ラブライブ決勝大会出場というところまで来れたんだ。

「……そうでした。諦めたらそこで何もかも終わり。たとえ絶望的な状況でも、何度でも立ち上がる。それがあの人たち。なら俺も……その一人として、諦めるわけにはいきません!!」

俺は拳にありつたけの力を乗せ、ヤミーたちを打ち上げる。

さらに水流……否、水龍を纏い、技の体勢に入る。

地面から噴き出た水が、まるで逆さの滝のようにさらに多くのヤミーたちを上空に吹き飛ばし、その体内に拘束する。

「ウォーターフォールクライムツ!!」

そしてトドメにキックの姿勢になり、水龍とともに滝登り。

「はあああああっ!!」

噴水に巻き込まれたヤミー全てにライダーキックを命中させ、爆発四散させた。

「やるじゃない。流石仮面ライダーね」

俺たちを囲んでいた大半の敵を倒した。

それでもその数はまだまだ多い。

「うおりゃああああっ!!」

響く宮沢さんの声。

それがした方向からCLAWS・サソリと、それを操る宮沢さんバース、そしてウヴァさんと

ガメルさんの姿があった。

「よお、佐藤ちゃん。さっきぶりだな」

「また凄いのを出して来ましたね」

「まあな。けど、サソリちゃんを使ってもまだ全然減らねーよ」

「ですね……」

倒せど倒せど、新しいヤミーが現れる。

まるでパンデミックのようだ。

全員が背中合わせになって円を作り、再び構える。

刹那、

「っ!?!」

一体のヤミーが崩れ去り、セルメダルの山に還元された。

それに続くように、一体、また一体とヤミーたちがメダルに形を変えていく。

「どういうことだ……」

「うう……分らない……」

「考えられることがあるとすれば……」

メズールさんがそう言いながら、ある方向を見つめる。

その視線の先には、ヤミーたちで見えなくなっていたアंकクさん、カザリさん、そして気を失っている様子の鞠莉さんをお姫様抱っこで抱えるオーズと、もう一人のオーズカムの姿があった。

慎司たちがヤミー軍団を相手にしてくれている最中、俺、アंकク、カザリの三人で、キマイラヤミーとカムイの二人と対峙していた。

「君たちも随分酷いことをしますね。あの数のヤミーたちをたった五人に任せるなんて」

「はーどの口がそんなことを言うんだらうな？」

「キミだって人のことは言えないよね？」

「それに五人に大変な役を押し付けてしまったのは、俺がよく分かってる。だから、必ず

鞠莉ちゃんを助けて、お前を止めるんだよ!!」

俺は奴の目の前まで跳躍し、メダジャリバーで奴を斬ろうとする。

「ウガアアア!!」

だがそれは、ヤミーによって阻まれる。

こちらを睨みつけるキマイラヤミー。

コイツの中に鞠莉ちゃんを取り込まれているのか……。

早く助けないと!

「アंक! チーターのメダル頂戴! それで鞠莉ちゃんを……!」

俺はアंकにチーターメダルを要求。

それに応じて、アイツはメダルを取り出すが、

「やめておいた方が良いでしょう」

カムイのその声により、行為を妨げられた。

「何?」

「どういうことだ」

「彼女を取り込んだヤミーは、少々特殊なメダルを使っていますね。無理やり引き剥がせば、鞠莉さんの意識は永遠に戻らないでしょう」

「お前……!!」

普段怒ることの無いカザリが、その感情を爆発させ、カムイに攻撃を仕掛ける。

攻撃は剣で容易く受け止められてしまった。

「ぐっ……」

「ほう……コアメダルが増えていないにもかかわらず、以前より力が増しているようですよ」

「……キミの相手はボクだ!! 耀太、キミはアंकと一緒に鞠莉を助けてくれ! それが出るのは、きつとキミだけだ!」

奴を相手にするのに一人で戦うのは無茶だ。

しかし、彼の目はそれを言わせようとしなかった。

「分かった」

一言だけ、了承の返事をし、俺は目の前のヤミーに意識を集中させた。

むりやり引き剥がすのはダメ。

それ以外の方法で助けないといけない……。

考えている途中でも、ヤミーはお構いなしに攻撃してくる。

重量級ヤミーの特徴を持つ拳での一撃はとても重く、肩から放たれる電撃は、俺の体に強い衝撃と痺れを与える。

さらには、空中から風圧弾を発射し、オクトバニツシュのように装飾の足をドリル状

にし突貫してくる。

俺は攻撃を躲し、あるいは受け止めるだけ。

どうすればあの子を救い出せるんだ……！

「何モ……」

「え？」

「何モ失イタクナイ……耀太……果南……」

俺と果南ちゃんの名を呼んだキマイラヤミー。

このヤミーの欲望は……鞠莉ちゃんは一体、何を想っているんだ……。

分からない……。

『耀太、聞こえるか？』

「女神さま。ああ、聞こえてるよ。このタイミングで念話してきたってことは、何か考

えでもあるの？」

『うむ。わらわが、ぬしと鞠莉の意識をリンクさせる。リンクしている間は無防備に

なってしまうが、強引な方法が取れない以上、直接彼女を説得するしかない』

「(分かった、やってくれ)」

『それには、まずあのヤミーと触れ合うのじゃ。その状態が一番安定して同調させることが出来る』

俺はもう一度領き、アंकクに呼びかけた。

「アंकク！これから俺は、鞠莉ちゃんを助ける為に彼女と意識をリンクさせる。その間、俺とヤミーに攻撃が当たらないようにしてくれ！」

「アイス一週間分で引き受けた」

交渉させる気も、拒否させる気も無いのアंकクだったが、一週間分程度のアイスなど、安いもんだ。

再びヤミーが拳による打撃を食らわせようとしている。

そのチャンスを逃すわけにはいかない。

ヤミーの拳をしつかりと受け止める。

腕が痺れるが、今更その程度で音を上げるようなヤワな体はしていない。

『いくぞー！三、二、一！』

女神さまのカウントダウン。

『ゼロ！！』

それがゼロになった瞬間、内浦の町だった場所は真っ白な空間になり、俺の変身も解かれていた。

そして目の前には、目を閉じ、体育座りのように丸まっている鞠莉ちゃんがいた。

「鞠莉ちゃん！鞠莉ちゃん！！」

「……耀太？」

俺の呼びかけで目を覚ました彼女。

けれど、その瞳からは生気が感じられなかった。

「みんなのところに戻ろう。千歌ちゃんも、果南ちゃんもダイヤモンドちゃんも、みんな待つて
る」

「……もういいの。わたしはみんなを裏切つて、迷惑かけて、貴方たちの手を煩わせてる。それに……あそこにいたら、また果南を……今度は耀太のことも傷つけちゃう！ ならいつそ、このままわたしごとヤミーを……」

「……けんな」

「え……」

「ふざけんなっ!!」

「っ!？」

気付けば、俺は彼女を怒鳴りつけていた。

いつもより強く怒りを感じるの、ここが精神世界だからだろうか。

「何だよ、もういいって。裏切るって何をだよ。手を煩わせてる？ こんなこと、今までいくらでもあつたよ！ それに……分からないよ！ 何なんだよ、果南ちゃんを傷付けるって！ そんなこと言われても、全然分かんないよ!! 言つとくけどな、自分勝手に『消える』な

んて言ってることこそが、俺に対する……みんなに對する一番の裏切りなんだからな!!
俺たちの気も知らないで、良くもまあそんなことを……」

「それは……それはこっちのセリフよ! 貴方こそ、わたしの気持ちを知らないクセに!!」
今度は鞠莉ちゃんが、感情的な声で叫ぶ。

光の宿らぬその瞳から、涙が溢れ頬を伝う。

「わたしは……! 貴方のことが好きなの!! 愛してるの!! 初めて会った時からずっと!!」
彼女の口から放たれた言葉は、俺に強い衝撃を与えた。

ヤミー、グリード、カムイ、どんな強敵からの攻撃よりも強い衝撃。

「二年前、わたしと果南とダイヤで立ち上げたスクールアイドル部。最初は興味すら無かった。けど、二人と一緒にやってみていくうちに、スクールアイドルが好きになって、二人と一緒にいたあの場所が好きだった。けどあの日、わたしたちは歌うことが出来なくて、そのままわたしは留学……: A q o u r s は解散して、スクールアイドル部も廃部になった……。でも、今年の春、千歌つちと梨子と曜と耀太……: 四人でスクールアイドル部を創部して、一年生の花丸とルビィ、善子と慎司が加わって、果南とダイヤの心からの笑顔を取り戻して……。耀太はずっと、わたしの大切な場所を守っていてくれた」

外では、鞠莉ちゃんを助ける俺を待って、みんなが戦ってくれてる。

かなりヤバい状況なはずなのに、鞠莉ちゃんの話聞いてみると、これまでのことが、まるで走馬灯のように過ぎていく。

「耀太のを見ていると、考えていると、スクールアイドルを好きになった時と同じ……ううん、それ以上に胸がドキドキして、この想いを貴方に伝えて、貴方もわたしのことを見てくれたら……。そう考えるだけで、わたしは幸せだった。でもね、わたし、分かっちゃったの。耀太は本当にみんなのことをよく見てる。けど、その瞳めに映っているのは、果南だけなんだって」

「鞠莉ちゃん……」

「果南は大切な幼馴染で親友。もう二度と傷付けたくない。けど、わたしは耀太のことが好き。この二つの気持ちは、決して交われない。どちらかを諦めるしかない」
「だから、今までずつと言わなかったんだね……」

こくと頷く鞠莉ちゃん。

その表情はどこか自虐的で、悲しげだった。

「でもやっぱり諦められなかった……。果南も耀太も、わたしは二人のことが大好き。でもこのことを二人に伝えたら、果南ちゃんは傷付くし、耀太も困るでしょ？ 欲張りで、醜みにくいわたしのことなんて……」

「醜みにくくなんてない」

また、俺の意識とは無関係に、俺の口が動き始めた。
俺の心からの声を紡ぐ為に。

「欲張りでもいいじゃん、人間なんだから。同時にいくつも欲しいものがあつたつて、それは当たり前のことなんだよ。それがたとえ、好きな人と友達、その両方だったとしても。それに鞠莉ちゃんは、果南ちゃんを傷付けたくなかつたから、ずっと言わなかつたつて言つたよね？そんなことが出来るのは、本当に友達が大好きな優しい子だけ。やっぱり鞠莉ちゃんは醜くなんてない。だから戻つて来て」

俺は手のひらが上になるように、手を差し伸べる。

すると虚ろだつた鞠莉ちゃんの瞳に、再び涙が溜まり始め、光が戻る。

「本当に良いの？」

「うん、みんな待つてるよ」

鞠莉ちゃんは俺の手を握る為、左手を近づけてくる。

が、手に触れる直前で、動きを止めた。

「鞠莉ちゃん？」

「もう一度……もう一度だけ言わせて」

何を、なんて無粋なことと言わない。

ただ彼女の言葉を待つ。

「耀太、好きよ」

俺は一息吸いこんでから、

「ごめんなさい」

そう返事をした。

それから鞠莉ちゃんは、少し悲しげな笑みを浮かべた。

「知ってた」

彼女の瞳から涙が零れた直後、俺の視界はホワイトアウトしていった。

現実世界に意識が戻ると、先程まで拳を交えていたキマイラヤミーの姿は無く、代わりに、俺の腕の中に気を失っている鞠莉ちゃんがいた。

「おかえり、鞠莉ちゃん」

静かに眠る彼女から視線を外し、カムイの方へ目をやる。

「本当に助け出してしまったとは……いやはや、流石としか言いようがありません」

一人拍手をするカムイ。

よく見ると、周りにいたヤミーは全てセルメダルになっていた。

多分、あのキマイラヤミーが司令塔のようなものだったのだろう。

『良くやった、耀太。鞠莉はわらわがみな元へ連れていく。ぬしはあやつを……』

「ああ、必ず止める。この世界の人たちを守る為に！」

抱きかかえていた鞠莉ちゃんの体が光の粒になり消失。十千万に送られた。

「カムイ！次はお前だ!!」

「くつくつくつ……………フハハハハハハ!!」

鞠莉ちゃんを奪還され、ヤミーも全滅。

追い込まれまはらずのカムイは笑い声を響かせる。

「何だアイツ……………頭でもおかしくなったのか?」

「いや、違う……………」

慎司の言葉を真つ先に否定したアंक。

晴也と慎司、二人が疑問符を浮かべる中、俺たち六人は強い気配を感じた。

「貴方が小原鞠莉ふじゆんぶつを取り除いてくれたおかげで、ようやく彼が目を覚ましますよ!!」

「彼だと? 一体何のことだ!」

奴に聞き返した直後、落ちていたセルメダルが奴の背後に集められていく。

キマイラヤミーだったメダルが塊となり、核のようなものを形成。

他のヤミーだったセルメダルが体を形作っていく。

「あれは……………!!」

ヤミーやグリードを圧倒する強大な力を持った気配。

その正体は、俺の知っているコアメダルの生みの親。

錬金術師ガラの怪人態だった。

終わりの始まりとそれぞれの戦いとグリードたちの想い

「ウオオオオオオ!!」

雄叫びをあげながら、伸びた両腕で建物や地面を破壊するガラ。

「ふふふ……素晴らしい! 流石は平行世界の生みの親、完全体にならずともこの力とは……愚かな人間どもを断罪するのに相応しい!!」

そんなガラを見て、カムイは喜び、否、悦びの声をあげる。

「またとんでもない化物を喚よびやがりましたね……」

「ですね。八対二なのにさつきより最悪な状況な気がします……」

慎司と晴也が今の戦況に対して、感想を述べる。

まさかガラまで手中に収めていたなんて……。

しかし、奴が用意していたのはそれだけではなかった。

「ウヴァさん、確か先程、『質より量という考えは通用しない』と言いましたね? それならばこれはどうです?」

「!?」

カムイは、ガメルとメズール、そしてカザリとウヴァ目掛けて二つの光球を飛ばし、四

人はそれに閉じ込められてしまい、光球は消滅してしまった。

「メズールさん!?ガメルさん!?それにウヴァさんにカザリさんも……」

「テメエ……アイツらに何をした!?!」

「彼の中に閉じ込めたんですよ。正確には、彼の力の供給源にですが。彼らには彼のエネルギーになってもらいます。心配はいりません。キミたちも、すぐに会えますよ——あの世でね!!」

刹那、カムイから黒いオーラ……否、冷気が発生し、地面が凍り付く。

「ぎっけんなあああつ!!」

「セルバースト!!!」

バース懐司はバースバスターからビームを撃ち放つが、

「ふん!」

奴は剣で光線を掻き消す。

「なっ……威力を最大限まで引き上げたのに……」

「なるほど。今の羽虫のような技が、貴方の切り札の一つ……やはりわたしが直接手を下すまでもありません」

「アクアヴォルテックス!!」

次いでアクア暗也がキックを放つも、氷の壁に阻まれる。

「くっ……攻撃が通らない……!」

「貴方の攻撃は中々です。並のヤミーやグリードでは耐えきれないでしょう。ですが、彼を相手に同じことが言えるでしょうか？」

カムイがそう言うと、奴の背後にいたガラが腕を伸ばし、アクアを拘束して地面に叩きつける。

「佐藤ちゃん! 待ってろ、すぐに助ける!!」

「カッターウイング ドリルアーム」

バースCLAWSを二つ装着し、ガラに突撃していくバース。

「待て、慎司! 俺も……!?!」

俺もそのあとを追おうとするが、斬撃波がそれを許してくれなかった。

「貴方たちの相手はわたしです。アレの完成に必要なメダルを渡してもらいます」

「誰がお前なんかに渡すか。それより、俺のメダルを返せ!」

アंकは怒号を飛ばしながら火炎弾を発射した。

しかし、その全てを奴の剣の刀身に吸収されてしまう。

「お返ししますよ。この炎をですがね」

剣を振るい、火炎弾が一の字を形作るように飛来する。

「ぐああああ!!」

攻撃は全て俺たち二人の足下に着弾。

地面を抉り、俺たちを吹っ飛ばす。

「攻撃を吸収するなんて……」

「本当に面倒な相手だな……」

俺とアंकはほこりを払いながら立ち上がる。

奴の持つ剣……確かに攻撃を吸収してはいたけど、それはアंकの炎だけ……。

慎司のバースバスターでの一撃は、防がれてはしまったが吸収はされていなかった

……。

「分かった！アंक、アイツの剣は多分、属性を持つ攻撃を力に変えられるんだ。その証拠に、さっきのお前の攻撃は吸収したけど、慎司の攻撃は弾いただけだった」

「なるほどな、対コアメダルに特化した剣ってわけか」

アंकは頷きながら手のひらで作った炎を握りつぶす。

「なら直接叩くまでだ!!」

翼を広げ、地面を蹴って奴の目の前まで飛ぶ。

だがアंकの攻撃は簡単に躲かれ、逆にアイツは蹴りを貰い、建物まで吹き飛ばされた。

「クソツ！はああああっ!!」

俺はメダジャリバーを振りかぶりながらカムイに接近。

自分の剣と奴の剣を衝突させる。

「キミのその洞察眼は大したものです。先程の推測は半分正解ですよ」

「へえ、それじゃあもう半分は何なんだよ？」

「その手には乗りませんよ。わたしはそんなに単純ではありませんので」

「だよな……」

カムイは俺の剣を弾き、俺自身へ攻撃を加えようとするも、紙一重で躲すことに成功する。

そこからは攻撃と攻撃の応酬。

しかし、斬っては弾かれ、蹴撃や打撃を躲し、お互いに決定打を決められてはいない。

「アंक！コンボで行こう！」

「は？お前バカか？属性攻撃は吸収されるつたろうが」

「パワーでゴリ押しするんだよ!!くっ……はあ！」

罅迫り合いから、カムイの剣を弾き飛ばし、振り返ってアंकからメダルを三枚受け取る。

「サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーズ！サゴーズ!!」

「うおおおお!!」

雄叫びとともにドラミング。

それからカムイと向き合った。

奴の剣をガントレットで防ぎ、逆の腕で腹部に打撃を与える。

「ぐはっ……」

カムイが退いたところに、さらにゴリバゴーンを飛ばして追撃を食らわせた。

追い詰めるべく、俺は奴に近づいていく。

「カムイ……こんなことはもうやめろ！人間を滅ぼして……一体何になるんだ！」

「……キミは何も分かっていない。人間は実に愚かな生き物だ。誰も幸せにならない争いを幾度も繰り返してきた。それによつて失われた命のことを考えたことはありませんか!？」

「がはっ!？」

「何っ!？」

怒りに満ちた声で黒いメダガブリューを真一文字に振ったカムイ。

その一撃は俺のドライバーを捉え、コアメダル三枚が破壊されてしまう。

受け身を取りながらタトバにコンボチエンジし、剣と斧を構えながら膝立ちになる。

「苦しい、辛い、怖い、助けて……罪の無い命が、兵器と無慈悲な殺意と……人の心無き人間クズどもの欲望に奪われた……そんな彼らの気持ちがありますか!？」

冷気を発し、地面を凍り付かせるカムイ。

その氷は俺の方へと向かい、脚を拘束する。

「つ…………ヤバい…………！」

「ヨーター！コアを変えろ!!」

投げ渡された二枚のメダルをキヤツチ。

タカ、バッタのメダルと入れ替え、スキャンする。

「ライオン！トラ！チーター！ラッタア・ラッタア！ラトラーター!!」

「はああああ!!」

ライオディアスを発動して脚の氷を溶かす。

だが、脚の自由を奪おうとする氷に気を取られ、奴の剣の特性を失念してしまっていた。

「ちつ…………はあつ!!」

灼熱の風刃が三度にわたって放たれ、二発目はアंकが火炎弾で防ぐも、一発目と三発目をもろに食らってしまい、二枚のメダルが外れてしまう。

「ふん!!」

メダガブリューの一閃で、そのメダルも砕かれてしまった。

「たった数分で五枚も…………」

「ヨータ、今の一体なんだ!？」

「……あれが俺と奴のコアの力だ……。お前は俺が変身した紫のコンボに何か感じなかったか？」

「……そういうことか。あの得体の知れない感覚……恐怖か……」
やっぱりな……。

恐竜系メダルの話はしてはいはいたが、俺はどうやら肝心な話をし忘れてらしい。いや、カザリたち敢えてしなかったのかもしれない。

あの四人が俺を恐れ、俺から離れるのを恐れて。

「さあ、次はどのメダルでできますか？ いずれにせよ、キミたちが持つメダルはすべて破壊させてもらいますがね。おっと、もちろん最後のメダルは渡してもらいますよ」

最後のメダル……カムイが回収出来ないのは、アングの持つタカメダル。

アングだけ、あの光球から外されたのはそのためか……!」

「アング、アイツの狙いはお前の持つコアだ!」

「んなもん分かってる!だが逃げたところで、コイツを止められなきや意味が無い」

アングのそれは全くもって正論だった。

今ここでアングを逃がしても、俺が負けてしまえばどっちみち終わりだ。

「コアをコイツに変えろ。奴の間合いに入らせるな!」

「分かった」

「シャチ！ウナギ！タコ！シャ・シャ・シャウター！シャ・シャ・シャウター!!」

シャウタコンボにコンボチェンジして、再びカムイと対峙した。

光球に取り込まれてしまったカザリとウヴァ。

彼らが目を開けると、そこは見慣れない場所だった。

「……………(っ)は(っ)だ」

「さあね。内浦でないことは確かだけど」

青い海の代わりに、眼前に広がるのは緑色の草原。

色とりどりの花々が風に揺れている。

「ここがどこであれ、早く戻らないといけないことに変わりはないよ」

「確かにそうだが、どうするつもりだ？」

「それはこれから——っ！」

「っ！」

これから考える、そうウヴァに告げようとしたカザリだったが、黒い竜巻での攻撃によつて阻まれる。

咄嗟に回避したおかげで、二人は傷つくことすらなかったが、花たちは無残にも引き

裂かれてしまった。

「……なかなか酷いことをするじゃないか」

「っ！なんだと……!?!」

攻撃が飛ばされてきた方向に目を向けると、そこにはカザリ、ウヴァに瓜二つの二人が立っていた。

「黒いボクたち……悪趣味だね」

「だがやるべきことは分かった」

ウヴァが黒い自分たちを睨み付けると、その爪が日の光で反射する。

黒いウヴァとカザリは、二人の敵意を認識したのか、再度攻撃を仕掛ける。

黒ウヴァの電撃をウヴァが相殺し、偽物に殴り掛かった。

だが、たやすく防がれ、腹部に反撃にパンチを食らう。

カザリも、黒い自身と交戦を開始する。

高速移動しながら拳を交え、その度に衝撃で空気が振動する。

「コイツ……！偽者のクセに強い！」

「ああ。完全体の俺たちと同等、いや、それ以上か」

「ボクたちがこうしているってことは、ガメルとメズールも……」

カザリの読み通り、二人とは別の空間に飛ばされたガメルとメズールも、黒い自分た

ちと戦っていた。

「俺の偽者……強い……」

「ええ。以前、カザリたちのメダルを取り込んだことがあったけれど、その時のわたしたちより、数段……いえ、数倍は強いわ……」

水流同士、拳同士をぶつけ合い、その威力を凶った二人。

カザリたち同様、その力は彼女たちを凌駕していた。

しかし、そう簡単にやられてやる気はない。

離れ離れになってしまった四人の気持ちは同じだった。

メズールが前に出ると、それを止めるように黒メズールが立ちふさがる。

蹴撃を蹴撃で防がれる、否、押し返される。

「くっ……負けたくはないけど、どうやったら勝てるのかしらね……」

あらゆる面でオリジナルの自分たちを上回る偽者。

今度は黒メズールから攻撃を仕掛けられる。

一気に接近してからの格闘戦。

やはりメズールの方が押され気味だ。

また、ガメルも手を組み合って押し相撲のようになっていく。

が、やはり完全体とセルメンでは体格差があり過ぎる為、勝負になっていない。

張り手を食らい、よろけたところを左腕の砲身で撃たれ、更なるダメージを負う。

「ガメル！」

「メズール、危ない……！」

ガメルの身を案じ、目の前の敵から目を離してしまったメズールは、黒メズールに背後から回し蹴りを食らってしまう。

「ボクに……キミに居場所なんて無い……」

「俺は弱い……力を持たない俺は……お前は何も出来ない……」

「愛なんて無い……貴女がしているのは、所詮ごっこ遊び。本当の愛なんて、分かるはず無い」

「誰も振り向いてくれない……メズールもルビイも……誰も……」

黒いグリードたちは、四人にそう語りかける。

彼らを受け入れてくれたものは、全て虚構なのだ。

絶望へと誘うその囁きは、

「鞠莉たちのことを何も知らないクセに、よくそんなことが言えるね」

今の彼らには微塵も響かなかった、否、響かなかったわけではない。

「そのセリフ……わたしの友達を侮辱した、と受け取って構わないわよね？」

黒いグリードたちは、彼らの逆鱗に触れてしまったのだ。

「以前の俺なら、そう思ったかもしれない。が……」
「ルビイたちがウソつくなんて、あり得ない!!」

感情を爆発させた彼らは、その感情が高まり、不足してるコアメダルの力を補い、それどころか、更なる力を与えていく。

完全体の姿へと変わっていく彼らを前に、黒いグリードたちは初めてうろたえて見せた。

しかし、時すでに遅し。

カザリは髪のような触手を黒カザリに向かわせ、ウヴァは先程とは比べものにならない電圧の電撃を放つ。

一方、メズールは体を液化化させて黒メズールを翻弄し、ガメルは再び黒ガメルと激突して吹っ飛ばす。

力に圧倒的な差があった四人が、偽者たちをじわじわと追いつめていく。
「あり得ない……グリードにこんな現象はあつてはならない……」

「これで終わりだよ(だ)(よ)!!」

四人は最大限までパワーを引き上げて、カザリとウヴァ、メズールとガメルが、それぞれ二人でエネルギーボールを形成する。

そしてそれを、黒い偽者たち目掛けて発射、命中。

黒いグリードたちは爆散し、カザリたちのものとは違うコアメダルに変化する。
が……。

「ボクたちのにそっくりだけど、別物だね」

黒いモヤを纏っていた銀色の縁のメダルは、カザリたちがキャッチすると、数秒で形が崩れてしまった。

「それよりもカザリ、あれを見ろ」

ウヴァが指さした場所には、今までそこにはなかったワームホールが出現していた。

「彼らを倒したから現れたのか……行こう、耀太たちが待つてる」

そしてメズールたちの前にもワームホールは現れ、彼らはその空間から脱出するのだった。

ヤミーはもちろん、グリードすら凌ぐ強敵ガラの前に、懐司バースと佐藤ちゃんアクアはかつてないほどの苦戦を強いられていた。

「大丈夫か、佐藤ちゃん……」

「俺はなんとかか……そっちこそ平気ですか……？」

「問題無い……って言いてえけど、そんな余裕ねーな……」

バースの最強形態、バース・デイのその装備のうちのクレーンアームとドリルアーム

は完全に機能停止、カッターウイングも右翼がへし折られ、バース本体の損傷率も四十パーセントを超えていた。

「ま、まだキャノンが生きてるのは不幸中の幸いだな」

だがそれも完全な状態とは言えない。

これまでに何発もガラに撃ち込み、次にフルチャージして撃てば、壊れてしまうだろう。

「ウガアアア!!」

腕を伸ばし、鋭い爪で二人の装甲を斬り裂こうとする。

「アクアヴォルテクス!!」

アクアは蹴りで全て跳ね除け、ギリギリでバースを守りきる。

「済まねえ、佐藤ちゃん……」

「お礼はいいです。こういう時こそ助け合いですから。けど、これじゃあいつまで経っても勝てません。むしろ体力を消耗してる分、俺たちに勝ち目はほとんどありませんよ」

「でも何とかするしかない。ここで負けたら、コイツは全てを破壊しようとするだろう。それだけは防がねえと……」

どうすればいい？

二人は同時に思考を働かせる。

高い攻撃力と防御力、加えて伸縮自在の体。

それでもなお、このガラは完全体では無いと言うのだ。

もしこの怪物が完全体になってしまったら……そうなる前にどうにかして倒さなければいけない。

「宮沢さん」

そんな状況の中、慎司は晴也に名前を呼ばれ、彼の方を見る。

「何だよ、佐藤ちゃん。良い作戦でも思いついた？」

「ブレストブレイカー、今の状態の最大火力でどれだけアイツにダメージを与えられるか？」

「そうだな、上手く当てられれば一撃で倒せると思う。ブレイカーモードの威力を最大まで上げれば、街一つを吹き飛ばせるって、女神さま言ってたからな」

「……俺がアイツの動きを止めてみせます。そしたら宮沢さんの……」
「慎司」さんの全力全開をガラにぶつけてください！」

「……了解！ そんじやいっちょ頼んだぜ、晴也ちゃん！」

一人でガラを足止めすることがどれだけ困難なことか。

そしてそれを敢行すると申し出た晴也の覚悟が如何程のものか。

二人はお互いにそれを理解した上で、各々の準備を始める。

晴也は、慎司ならガラを倒せると信じて奴と見合い、慎司は、晴也なら、自分が技の準備を整えるまで耐えてくれると信じ、CLAWsをブレストキャノンを除いて全て解除し、収束の体勢に入った。

「ブレストバスター！ブレイカー!!」

慎司はセルメダルを連投し、双槍状になったブレストブレイカーにエネルギーボールが収束され始めた。

そして晴也は、ガラとの一対一の戦いに挑む。

万全の状態ならまだしも、やはりヤミーたちを相手にしていた所為で体力のない今はかなり苦戦している。

パワー、防御力、攻撃範囲、その全てにおいて晴也はガラに劣っている。

しかし、それでも立ち向かってしまうのは、仮面ライダーとしての性^{さが}と、そして守りたいものの為なのだろう。

ガラの重い一撃を身に受け、全身に強い衝撃が走る。

だが、その瞬間にガラの動きが鈍る。

晴也はそれを見逃さず、その攻撃を繰り返した腕を掴み、ジャイアントスイングで空中に投げ飛ばす。

地面を力強く蹴って跳び、ガララの頭上まで来た。

「オーシャニックブレイク!!」

水を噴射しながら、その勢いを利用してライダーキックを放つ。

落下したガララによってアスファルトの地面に大穴が開く。

「タイミングバッチリだぜ、晴也ちゃん!!」

ガララの落下とほぼ同時にバースのブレストブレイカーのエネルギーの充填が完了する。

「ロックオン! 見ろ、これが俺の全力全開!! ブレストブレイカー! シュート!!」

「ガアアアアアアアアア!!」

バースがガララに照準を合わせ、トリガーを引くと、収束砲は眩い閃光を放ち、立ち上がろうとしていたガララを飲み込んだ。

「……やったな、晴也ちゃん」

蓄積されたダメージに加え、ブレストブレイカーをフルパワーで発射したことにより、慎司の変身は強制解除された。

「ええ、これであとは……」

「?!? 晴也ちゃん!?!」

突然、晴也が倒れてその変身が解かれる。

ボロボロの体に鞭打って、彼に近づくと、慎司。

晴也を仰向けにすると、腹部に刺傷があり、そこから出血していた。

「あの時か……」

ガラを投げ飛ばした時、晴也は鋭利な一撃をその身で受けきり、カウンターを決めた。その際にガラの鋭い爪がアーマーを貫通して、晴也の体を傷つけてしまったのだ。

「よつと……やあ、さつきぶりだね」

「カザリ！お前らも！無事だったんだな！」

そこに、偽物たちを撃破したカザリたちがワームホールを通ってこの場に戻って来た。

「そつちも無事……というわけではなさそうだな」

慎司の腕の中で苦しそうにしている晴也を見たウヴァが、心配そうな顔をする。

「済まねえ……俺が危険な役目をやらせちまったばかりに……」

慎司の声は震え、悔しさが滲み出ているのがよく分かる。

一度もならず、二度までも晴也に大変な役目を引き受けてもらい、大怪我をさせてしまった。

その事実が、彼の心に大きな打撃を与えているのだ。

『そう悔やむな。ぬしらは見事かガラの止めたのじゃ』

十千万で千歌たちとともにいるミコが、慎司たちに向けて念話で話しかけてきた。
『ぬしらはもう休め』

彼女がそう言うのと、慎司と晴也の体が光の粒子になり始める。

「あとは耀太とボクたちに任せておいて。必ず戻って来る」

「ああ。任せたぞ、お前ら……」

二人はこの場所から完全に消失した。

「さてと、行こうか」

「良かったの？必ずあんな戻なるなんて言ことって」

二人がいた場所から振り返り、歩き出すカザリ。

そんな彼をメズールが止める。

「ボクは誰が戻るかまでは言ことってないよ？」

「貴方……」

その場にいる誰もが、彼が死ぬ気であることを悟る。

だがそれは、今の彼らの状態からすれば、至極当然の選択なのだ。

「ふ、水臭い。お前一人にはいかせんぞ」

「ウヴァ……」

「アイツらには、返しても返しきれない恩がある。だからこの身をもってして、出来るだ

けのことをする」

「俺もいく。俺も、みんなのこと、守りたい！」

「全く……しようがない子たちね。でも……友達の為に命を懸けるのも、案外悪くないわね」

四人は空を見つめる。

黒い雲のすぐ側で戦っている三人を。

彼らの「命」が、風前の灯火であることを、まだ誰も知らない。

理由とぶつかる二人とMIRAIのコンボ

戦いが始まってから十数分が経った。

サゴーズ、ラトラーターに続き、シャウタとガタキリバのメダルまで破壊されてしまった。

今使えるメダルは、変身に使っているタトバの三枚と俺の中の五枚、それからアंकクのメダルが六枚だ。

中遠距離で攻撃しても、すぐに間合いを詰められ、数で押し切ろうとしても、あつという間に分身たちを倒された。

「はあはあ……」

「流石の貴方も、通常の五十倍のダメージと疲労は相当こたえたようですね」

ガタキリバの特性上、分身たちが受けたダメージが俺にも反映される。

左半身は痛みを全く感じないが、右半身には剣で滅多刺しにされた、そして巨大な岩石に押しつぶされたかのような激痛が走り、ろくに動かすことが出来ない。

「ですが、こんなものではありません。わたしの怒りは！復讐はね!!」

さらに腹部に、それも痛みが残る右腹に正拳突きが突き刺さる。

攻撃箇所を庇うようにうずくまってしまい、隙を見せたところに、今度は回し蹴りを食らわせられる。

「ち……」

アंकが舌打ちしながら奴に殴りかかる。

が、その拳が顔面に直撃しても、カムイは微動だにしない。

「何?」

「無駄です。完全でない貴方の攻撃など、避ける必要もありません」

そう言いながらカムイはアंकの腕を掴み、自身の顔から離していく。

そして俺にした時と同じように、腹部に拳をめり込ませた。

「そうでした。貴方たち二人のメダルも回収しなければいけませんね。やはり王はこのわたし……人類はみな、わたしに滅ぼされる運命にあるのです」

カツンカツンという足音が、俺の方へと近づいてくる。

俺の体内のメダル……これを除いてくれるってだけなら、喜んで差し出してやるつもりだ。

だが、奴はこのメダルの力を使ってとんでもないことをしようとしている。

そんな奴に渡してやるわけにはいかない!

俺は体中を駆け巡る凄まじい痛みを耐えながら、立ち上がる。

「さっさと楽になつてしまえばいいものを……」

「かもな……。けど、ここでそれを選んだら、後で死ぬほど後悔する。いや、死んでも後悔する。だから、これはお前には渡さない!!」

ベルトに収められていた三枚のメダルが、俺の体内から出てきたメダルに弾き出される。

そして自分の手でバックルを傾け、オースキャナーでメダルを読み込んだ。

「プテラー・トリケラー・テイラーノ！ プットットテイラーノザウルース!!」

プトテイラコンボにコンボチェンジし、地を割りメダガブリューを生成して構える。

「無駄だと言うのに……」

「プテラー・トリケラー・テイラーノ！ プットットテイラーノザウルース!!」

奴も同じく、体内から放出されたメダルをドライバーに収めて、低音の変身音を響かせる。

俺とは違い、黒いプトテイラコンボに変身し、奴もメダガブリューを構えた。

「うおおおお!!」

初めに動いたのは俺。

カムイに向かって走り出し、メダガブリューを振り下ろし、奴はその一撃を同じくメダガブリューで受け止める。

「流石のパワーです。以前と比べてまた強くなっている。しかし、それはわたしも同じこと。ふん!!」

鏢迫り合いは、俺が押し退けられ、奴が勝利。

俺は数歩後退させられて、さらにテイルデイバイダーで吹き飛ばされる。

「はあ!!」

再びアंकが飛翔し、火炎弾をカムイに向けて放つ。

「無駄だと言っているでしよう!!」

炎を斧で斬り落とし、アंक本人にも斬撃を浴びせようとする。

だが、アंकはそれを左手で受け止めた。

「何……?」

それだけではない。

メダガブリューを介して、アंकの左腕と繋がっているカムイの右手が震え出した。

それはカムイが力を込めている証拠。

つまり、アंकは奴の全力の一撃を片手で受け切ったのだ。

「ひとのことを完全でないだのなんだのって、いちいち癪に障るんだよ。よく見も知りもしないクセに、過小評価するのはやめておけ!」

空いている手でゼロ距離での火炎放射を浴びせるアंक。

炎の勢いに負け、カムイは後方に押されていった。

俺は瓦礫をどかして、アングの隣に並ぶ。

「大丈夫か」

「なんとか。けど、これでアイツの逆鱗に触れたみたいだな」

「何言ってるんだ。アイツは初めから俺たちの逆鱗に触れてただろ」

「ああ。アイツのしたこと許すわけにはいかないし、人類を滅ぼさせもしない……!!
くぞ!!」

俺とアングはそれぞれの翼を広げ、カムイに向かっていく。

一方のカムイも、漆黒の翼を広げて、空高く昇っていき、俺たち二人はそれを追いかけた。

衝突する拳と拳。

放たれる炎と絶対零度の氷。

雲を切り裂く斬撃。

おれたち
三人の力が交わっては離れて、大気を、大地を、海を震わせる。

やがて、雨粒が俺たちの体を打ち、稲妻が轟き始める。

天災すら起こしかねない次元にまで、戦いは激化していった。

「人間の身でありながら、わたしとの戦いについてこられるとは……。だがわたしは負

けない!!」

カムイは黒い冷気を発生させ、エクスターナルフィンで俺たちの方へ向けて扇いだ。俺とアंकは、それを避けてカムイに接近。

二人で連携攻撃を仕掛ける。

俺の攻撃を回避したカムイに、アंकが攻撃を当てて、彼が奴を止めている間に再び攻撃に移る。

「カムイ、もう一度だけ聞く。どうしてお前は人間を滅ぼそうとするんだ?! 人間を滅ぼして、お前は何がしたいんだ?!」

斧で迫り合いながら奴に問いを投げかける。

すると、奴は俺の得物の刃を弾き、退けさせてから話し始めた。

「……キミが元いた世界と同じように、かつてこの世界でもこの星全てを巻き込んだ大規模な大戦がありました。それは権力ある者たちの身勝手な欲望が引き起こしたものです。多くの人々は、平穏とは程遠い中で怯えながら暮らしていました。そんな中、わたしと姉さまが祀られていた社やしろに一人の少女が訪れては、祈りを捧げていました。下界への干渉は禁じられていましたが、わたしは姉さまたちの目を盗み、彼女のもとを訪れ、尋ねました。『何故、こんな辺鄙な場所まで来て、祈るのか』と。すると、彼女はこう言ったのです。『早く戦争が終わって欲しい。みんなに笑顔になって欲しいんだ』と……。

わたしは少女の願いを叶えてあげたかった。だがわたしにはそれだけの力は無かった。ただ見守るしか出来なかった。……それから、少女は毎日社に来るようになりました。しかし突然、少女の姿を見ることは無くなってしまいました。それからすぐのことで、辺境の地にまで及んだ戦火により、彼女が命を落としたことを……。欲望が罪の無い命を奪った。欲望が穢れ無き願いを踏みじった。欲望が……。欲望が光ある未来を失わせた!!……それからわたしは、人間たちに制裁を与えることだけを考えて生きてきました。どんな方法が、一番相応しいかをね」

カムイは、手のひらに三枚のメダル——サメ、クジラ、オオカミウオのメダルを、見せつけるように出現させた。

「それでコアメダル……か」

「ええ。欲望に塗れた人間たちが最期を迎えるには、これ以上のものは無いと直感しました。自らの欲望によって人間は滅びる！ 実に皮肉でしょう？」

俺は愕然とした。

彼が行って来たこと、その全ての裏側に、人間を憎む気持ちとともに、人間を想う気持ちがあったという事実。

その願いの先に辿り着いてしまったのが、「人間を滅ぼす」という本末転倒な方法であることに。

「それじゃあダメだ……」

カムイの話を聞き、心の言葉が口から零れる。

「アンタのしてることは、アンタが憎んだ人間と同じじゃないか!! 罪の無い人たちごと、関係の無い人たちごと滅ぼそうとするなんて間違ってるツ!!」

俺は彼に向かって叫びながら、メダガブリューを振る。

「わたしの計画を果たす為には、致し方ない犠牲です! 貴方たち人間も、その言葉で自らを正当化してきたではありませんか!」

カムイは俺の攻撃を黒いメダガブリューで受け止め、反撃してきた。

「だからそれじゃあ……なんにも変わらないって言ってるんだよおおお!!」

斧での攻撃は何度も躲され、弾かれ、彼を捉えることは無かった。

仕掛ける度にダメージを負ったのは俺の方。

一人で無茶するな、そう言ってアंकもカムイに立ち向かうが、戦況は一向に良くなるらない。

寧ろ、感情に任せてしまった分、俺たちが不利な状況に傾き始めていた。

「どうする? このまま戦っても、こっちが消耗するだけだぞ」

「分かってる……」

いつかは負けてしまう。

俺もともに戦っているのだから、そんなこと分かつてる。

そしてその時は、そう遠くないことも。

どうすればそうならず済むか、俺は一つだけ方法を思いついていた。

「アイツのコアメダルを破壊する。それが、今出来る最善の手段だ」

「……出来るのか？」

「やってみなきゃわかんねえ。協力してくれるか？」

「アイス一年分、追加だな」

さりげなく、俺の財布に大打撃を与える条件を提示してくるが、世界を——人類を守るなら、それくらい安いものか。

俺はアंकに、出来るだけカムイが俺に集中出来なくなるように攻撃するよう頼み、俺自身もカムイとの戦いを再開した。

拳と斧が、お互いの体を傷つけ合う。

さらにカムイには、炎が襲い掛かる。

カムイと俺はほぼ互角。

この戦いで、今まで負ったダメージは俺の方が多い。

しかし、カムイにも徐々にダメージが蓄積していった。

「ええい、鬱陶しい！」

そして好機は訪れた。

自分の攻撃を妨害するように攻撃してきたアंकを睨んだカムイ。

その瞬間、俺は彼の視界から外れた為、隙だらけになった懐に入り込んだ。

「!?しまっ……!」

「はあ!はあああ!!」

斧を二度、力強く振り、カムイを斬り付ける。

二振りの攻撃は、見事カムイのメダルを捉えた。

「ぐ……!」

だが、カムイもただ攻撃を喰らうだけではなく、反撃を仕掛けてきた。

それにより、俺の体内のメダルが一枚、音を立てて砕けた。

そして奴のメダルは、その全てが真つ二つに裂け、粒子となり消滅し、今の形態を保

てなくなったカムイは、地上に落下した。

「わたしのコアメダルが……今の連携は、初めからそれが目的か……」

タトバコンボに戻り、苦しそうに胸を押さえるカムイ。

メダルの喪失とともに多大なダメージを受けたようだ。

俺は地上に降り、アंकも地に足を着け、カザリたちも地に膝をつく彼を囲んだ。

「もう終わりだ。アンタの野望は潰える。最後のメダルを引き渡して、罪を償うんだ!」

完全に勝利したと、誰もが思った。

だが、彼は……。

「まだだ……まだわたしは！終わっていない!! 審判を下すまで！人間たちを断罪するまで！わたしは終わらない!!」

カムイが叫ぶと、青黒いオーラを発生し、俺たちの体を打つような衝撃を放つ。

彼のドライバーに収まっていた三枚のメダルは、バツクルから外れて黒いオーラに飲み込まれる。

再びその姿を現した時、それらは全く別の存在に変化していた。

まるで意志を持っているかのように、黒いコアメダルはオーズドライバーに戻っていく。

そしてスキヤナーが外れ、その三枚のメダルを読み込んだ。

「ダーク！ダーク！ダーク！」

ダークタカ！ダークトラ！ダークバツタ！

ダーク！タ・ト・バ！タ・ト・バ!!

ダークネス!!!」

黒いメダルのエフェクトがオーズの体を囲み、黒いタカ、トラ、バツタのクレストがそのアーマーを変化させていった。

究極のオーズと瓜二つの姿。

だが、その色は黒混じりの濃い色で、炎のような形の青い斑点が左右対称になる位置についている。

「何だあのコンボは……」

あのアंकやカザリですら、目の前で起きたことに目を見開き、驚いている。奴から感じる底知れぬ。

その力を前に、俺も、グリードたちも恐怖を感じることを禁じ得ない。

「まさか……神であったわたしの闇が……ここまで活性化するのは……。欲望の力のおかげということか……。だが、たとえ心が闇に染まろうと……。わたしのやることは変わらない……」

その力を見定めるように、握り拳を作ったり、黒いエネルギーを発生させながらカムイは呟いていた。

そして確認が済むと、今度は俺たちを睨む。

「っ！来るぞ！構えろ!!」

俺がそう叫んだ刹那、すぐ側でドンツ、という鈍い音が響いた。

音のした方に目をやると、ウヴァの腹部に拳をうち下ろしたカムイがいた。

次いでカザリ、メズール、ガメル、そしてアंकが。

グリードたちが全員、たった一撃で屠られた。

最後は俺が、目にも止まらぬ速さで、防御する間もなく吹き飛ばされた。

攻撃を喰らった瞬間、俺の中で何かが音を立てた。

一撃で変身が解除され、激しい痛みに襲われる。

「……………どうですか？ 圧倒的な力を前にする気分は……………」

近づいて来たカムイが何か言っているが、内容までは聞き取れない。

「……………聞いていないようですね。せめて、これ以上苦しめないよう、今のうちに楽にしてあげましょう……………」

エネルギーが収束されていくのを肌で感じるが、抵抗することはおろか、指を動かすことも出来ない。

次第に意識が薄れていく。

このまま眠ってしまえば、楽になれるだろうか？

……………いや、楽になんてなれない。

さつきもそうだったじゃないか。

今ここで諦めてしまえば、みんなを守ることが出来ない。もし、そうなれば本当に死んでも後悔することになる。

そんなの絶対……………。

「絶対に嫌だ……」

こんなところで諦めたくない。

アイツを止めて、未来を必ず守る。

願いや欲望の域を超え、執念と化したものが、たったそれだけが、ボロボロになった俺の身体を突き動かす。

「まだ立ち上がるのですか……。もう諦めてしまった方が……」

「嫌だ!!俺は諦めない。たとえどんなに絶望的だったとしても!!」

「何故そこまでするのです……」

「決まってるんだろ……。俺は未来を守る為に立ち上がるんだ!!お前の間違いを正して、みんなが幸せでいられる……。笑顔でいられる未来を守る!!!」

俺の脳裏に彼女たちとの想い出が過ぎり、身体は温かい光に包まれていく。

「その光……。以前戦った時と同じ……」

そして光は、俺の着けているオースドライバーに集まって、三つの輝きへ変化し、俺の手に収まると同時に光は薄れて消え、三枚の金色のコアメダルが手の中に残っていた。

「なんだ……。そのメダルは……」

俺はそれを一枚ずつドライバーにセットしながら、答える。

「……これはミライのメダル。イマを一生懸命に生きる人たちが目指す先にある——ありとあらゆる可能性を秘めたミライのチカラ……！変身!!」

「スーパー！スーパー！スーパー！」

スーパータカ!

スーパートラ!

スーパーバッタ!

スーパー！タ・ト・バ！タ・ト・バ!!

スーパー!!!

タジャドルコンボ時と同じく、タカヘッドから進化したタカヘッド・ブレイブ。

トラアームがトラゴラスアームに進化し、トラクローもトラクローソリッドになり、より鋭利なものに。

バッタレッグも、ジャンプ力が格段にアップしたバッタゴラスレッグに変化している。

タトバコンボの進化系にして、オーズ究極の形態。

オーズ スーパータトバコンボが、イマここに誕生した。

神と少女と伝わる想い

慎司と晴也が十千万に戻ってから十分程が経過した。

晴也の姿を見たまなは、酷く動揺した。

神子が彼の傷を癒し、命に別状は無いことを明言したが、それでも彼女たちの表情は暗いままだった。

プロジェクターで映していた戦いの様子。

それも原因の一つだ

映像とは言え、その壮絶な戦いは、彼女たちを戦々恐々せんせんきょうきょうとさせた。

「二人がかりでも勝てないなんて……」

「それだけあの人が強いってことなんだね……」

梨子と曜が、不安に満ちた表情でコメントする。

どんなコンボも、攻撃も決定打にならない。

それどころか、コンボは耀太の体力を奪っていく。

それを知っているからこそ、彼が連続でコンボを使用しているのを見ると、余計に不安と心配に飲まれてしまうのだ。

「あー！オーズが、耀太くんがいっぱい……!?」

「分身の術ずらー!」

「あ、あの数なら流石に……」

ガタキリバの力で、分身 ブレンチシエードを生み出して総攻撃を仕掛けた耀太。それだけ見れば、誰であろうと勝ちを確信するだろう。

「あれが何体も倒されなければな……」

「どういうことですか?」

「あのコンボ、ガタキリバコンボで生み出した分身は、そのスペックが下がることはありません。けど、分身は耀太先輩本体とダメージや疲労を共有するんです。最大で……五人分……」

「五十人分っ!?!」

「そんなのいくら耀太でも耐えられるわけないよ!」

『ぐわあああ!!』

果南がそう言った直後、映像の中で耀太が悲鳴をあげた。

五、六体の分身たちが氷漬けにされて砕かれていく。

「コンボの力すらものともしないと……カムイはそこまで力を高めたというのか……」

分身は次々と倒されていき、遂に耀太は一人となった

ブレンチシェードたちのダメージを負いながらも、耀太は膝をつきながら立ち上がり、武器を構えていた。

「普通の人間なら立つことも出来ないはず……グリード化の進行で感覚が鈍っているからか……」

「そんな……」

痛みが鈍っていたとしても、友人の、親友の、恩人の、そして愛する人の苦痛に歪む表情は見るに堪えない、見たくない。

この場にいる全員が、女神も含めてそう思っていた。

だが、最早耀太以外に世界を救うことが出来ないのも事実。

『プテラー！トリケラー！ティラーノ！プットツティラーノザウルス!!』

「っ!?!」

「またあのコンボ……」

声を漏らしたのは鞠莉。

彼女たちがあの姿を見たのは二回だけ。

一度目は暴走し、鞠莉がそれを止めた。

次は星を見た夜に、空を覆う雲を掻き消した。

その二回とも、あの変身には良い印象を持ってなかった。

忌むべき姿になった二人とアंकが拳を交え始める。

戦いの舞台は大空に移っていった。

「地上からの映像ではよく見えないのお……じゃがこれ以上は危険か」

三人が空で戦いを始めた為に、その様子を詳しく伺えなくなってしまうた。

撮影が出来るカンドロイドでは、地上からだとその機能には限界がある。

かといって、空を飛ばして二人の邪魔をしてはいけないと、神子なりに考えていた。

「どうして……」

「千歌ちゃん？」

「どうして耀太くんたちは戦うの？元々違う世界に住んでいた人なんでしょ？それなのに、どうして命をかけてまで……」

不意に千歌が呟いたこと。

A q o u r s の面々が、「耀太たちが平行世界の人間である」という事実を知ったのは、つい一日前。

そしてその疑問を持っていたのは、千歌だけではない。

全員が同じことを思っていた。

「それは……この世界が好きだから……っていうだけじゃ、理由として足りませんか？」

「慎司くん（シン）……」

「ま、俺たちは聖人じゃないんで、そんなヒーロー染みた理由だけじゃないと思いますけどね」

「それってどういうことよ、シン？」

「それはまあ、そういうことですよ」

果南をちらりと見て口元を緩めた慎司。

その真意を理解し、紅潮する果南と微笑む A q o u r s メンバーと神子。

少しの間だけが、みな緊張は和らいだ。

直後、プロジェクトに接続されているスピーカーから激突音が響く。

映像の中に彼らが戻って来た。

「あのオーズは……カムイさんの方？三色のオーズに戻ってるってことは……」

「それじゃあ耀太くんたちが……！」

耀太たちが勝利した、誰もがそう確信した。

だが次の瞬間、画面の向こう側は黒に……否、黒く染まった青に飲まれた。

禍々しい波動を発して現れた黒いオーズ。

先程の黒とは、似ても似つかない色合いで、より邪悪な力を、神子と慎司はひしひし

を感じていた。

「何アレ……怖い……見てるだけで震えが……」

ルビィがそう言ったように、他のメンバーからも恐怖を感じているのが伺える。生物としての直感が、彼女たちに語り掛けているのだ。

刹那、黒いオーズの姿が画面から消える。

それとほぼ同時に画面外から悲鳴と破壊音が聞こえた。

「カザリくんたちの悲鳴……?」

カンドロイドが移動したのか、映像が回転して悲鳴が聞こえた方を映された。

「!?!」

倒れもがくアंकたち。

その中心にいるのは、カムイが変身した黒いオーズだ。

「たった一瞬である五人が……」

「時間を止めて、奴らを攻撃したか……」

「時間を止める? どういうことよ?!」

神子の言葉に反応し、善子は彼女に問いかける。

「そのままの意味じゃ。たった今、この世界の時間が、ほんの一瞬じゃが止まった」

「ウソ……」

「アイツ……スーパータトバと同じ能力を持つてることか」

神子は、慎司の言葉に頷き、無言で肯定した。

「『スーパータトバ』ってなんなんすら？ 慎司くん」

「オーズの究極の形態だ。時間を止めるチカラがあるうえ、止まっている時間の中で動くことが出来る。女神さまの言ったことが正しければ、多分アイツもその力を使うことが出来る」

「それじゃあ、耀太たちに勝ち目は無いってこと？」

「……………」

果南が尋ねると、慎司は黙って俯いてしまう。

現状、彼が把握している耀太の形態は、プトティラコンボが最強。

そして今、その形態も敗れた。

「変身が解けてしまったようデスね……………」

グリード五人と同様、地に倒れ伏し、もがき苦しむ耀太。

そんな彼の前に立つカムイ。

カムイが黒いエネルギーを集め始めると、映像にノイズが混じり砂嵐のようになり始める。

「神子さん……このままじゃ耀太くんが……………」

途絶え途絶えで流れる映像に映るのは、満身創痍で苦しむ少年と闇に囚われた哀しき

神。

彼らは勝っていた。

だが予想外の力が目覚め、形成が逆転した。

全てが終わる、最悪の結末とともに……そう絶望の底に落とされた。

『絶対に嫌だ……』

しかし、誰よりも絶望の淵に立たされている彼は、諦めてなどいなかった。

『まだ立ち上がるのですか……。もう諦めてしまった方が……』

『嫌だ!!俺は諦めない。たとえどんなに絶望的だったとしても!!』

『何故そこまでするのです……』

『決まってるんだろ……。俺は未来を守る為に立ち上がるんだ!!お前の間違いを正して、みんなが幸せでいられる……。笑顔でいられる未来を守る!!!』

耀太がそう返すと同時に眩い輝きに包まれる。

やがて光は消えてしまったが、耀太はその時に手に入れたらしいモノ——メダルをベルトにセットしていく。

『……これはミライのメダル。イマを一生懸命に生きる人たちが目指す先にある——ありとあらゆる可能性を秘めたミライのチカラ……。変身!!』

再び耀太の身体が光に包まれる。

それが消えた時、そこに立っていたのは、今までのオーズとは全てが異なる次元の存在。

仮面ライダーオーズ スーパータトバコンボだった。

「スーパー！スーパー！スーパー！」

スーパータカ！

スーパートラ！

スーパーバツタ！

スーパー！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！

スーパー！！」

棒立ちになっていた俺に向けて、カムイは収束していたエネルギー弾は放つ。

しかし、全身を包む金色の輝きによって、エネルギーは掻き消された。

「……………」

あの黒い姿——ダークタトバに変身してから、感情をあまり表に出なくなってしまうカムイが、狼狽えた様子を露わにする。

次の瞬間、奴の姿は目の前には無かった。

後方へと回っていたカムイのキックを、左腕で防ぐ。

「!?防いだ……どうして……?」

攻撃を打ち消されただけでなく、移動した位置を読まれて防御されたことで、彼はさらに焦りをみせ、驚きのあまり後ろに数歩退く。

そして驚愕の表情を見せたのは、アंकたちも同じだった。

「今の攻撃、見えたか?」

「いや、ボクの目でも追いつけなかった……」

「一体どれだけの速さで動いているんだ……」

茫然とする彼らを尻目に、俺は奴と対峙する。

見れば見るほどダークタトバコンボの姿は、スーパータトバコンボと酷似している。

まるで鏡の前に立っているような気分だ。

「来ないのか?なら今度はこっちの番だ!」

俺はスーパータトバの能力を解放し、奴の背後に回り込み、トラクローソリッドで斬り裂く。

カムイは俺の攻撃を受けるが、ダークタトバもスーパータトバと同様の能力チカラを持っているようで、瞬時に反撃をしてきた。

「……貴方のソレも、わたしと同じ力のようなですね」

「ああ。確かに似ているな。能力も、姿も。けど——」

再び能力を使つて時を止め、トラクローで攻撃を繰り出した。

「お前のソレとは何もかも違う!!」

周りの時間はあまり進んでいないが、俺たちの戦いは激しさを増していく。

奴の体を俺の拳が打つように、俺の体を奴の拳が打ちつけた。

「お前は言つた。戦争が……人間の欲望が未来を奪つたつて。お前はその復讐に為にみんなを……果南ちゃんや鞠莉ちゃんを利用して、その未来を奪おうとした! 致し方ない犠牲”つて言つた。それが人間と同じだということも。だけど、どんな言葉で正当化しても、苦しみや悲しみは生まれて、繰り返されることで新たな悲しみを生む。そんな負の連鎖を作つてしまふ復讐を、その子は本当に望んでいると思うのか!」

一撃、また一撃と、俺は彼に訴えながら攻撃をしていく。

彼女たちと過ごしてきた時間を思い返しながら。

辛かったことや苦しかったことは、数え切れないほどあった。

だけど、本当に楽しかった時、嬉しかった時、そんな時の彼女たちの笑顔は、とても眩しく輝いていた。

カムイが出会つたという少女も、きつとそんな笑顔を望んでいたはず。

それを彼に伝えなければ……。

「(女神さま、聞こえるか?)」

『おう、聞こえておる。それに、ぬしが何をしたいのかも分かってる』

「(だよな。じゃあ頼めるか?)」

『……奴を止められるとは限らんぞ?』

「(いや、アイツにまだ心が残ってるなら……きつと聞いてくれるはずだ。その子の本当の気持ち……)」

『分かった。じゃが、現世でない分、それなりに時間がかかる』

「(上等。耐えてみせるさ!)」

さて、ひとまず手は打った。

後は時間を稼ぐだけだ。

俺は翼を展開して、上空に飛び立つ。

それを見たカムイは、両手を広げて黒いエネルギー弾を複数生成し、俺に向けて放った。

エネルギー弾を回避し、避けられないものは弾き飛ばして奴から離れていく。

だが、このままでは埒が明かないと考えたようで、カムイも黒い翼を広げて、俺を追って来た。

再び後方に黒い光が集まっていく。

エネルギーの収束を妨害する為に、体を翻して、カムイの手元目掛けて、トラクロー

ソリッドで斬撃波を飛ばした。

直撃して誘爆したらしく、赤い炎と黒い煙があがる。

煙の向こう側から、カムイが一直線に飛んできた。

奴は俺の顔を掴み、下に急降下する。

町からかなり離れたので、真下は地面ではなかったが、叩きつけられる時の痛みとは、

別種の苦痛に襲われた。

呼吸いきが出来ない。

水中に落とされ、沈む体。

なんとか水面まで上がろうと試みる。

すると、右目に映る世界が青から黒に変色する。

「(まずい……!）」

それがあのエネルギー弾——否、それ以上のエネルギーボールであることを悟り、焦燥感にかられる。

直撃すれば、いくらこの形態でもただでは済まない。

けど、避ければ海底に直撃……その衝撃で地震や津波なんかが起きれば、内浦……いや、沼津が大変なことになる!!

どうすれば……。

『耀太！準備出来たぞ！つと……ちとヤバそうじゃな』

「ああ、めちやくちやババいよ。あんなもんが水底にぶち当たったら、どうなるか分からない」

『なら、あのエネルギーを使わない手はないな』

「(は？女神さま、一体何を……)」

『良いか？あやつに少女の声を聞かせるには、直接接触し、かつ膨大なエネルギーを消費しなければならぬ』

なるほど。今あのエネルギーを集めてるアイツに、俺が技をぶつければ、とんでもないエネルギー量になる。

確かにそれを利用しない手はないな。

『出来るか？』

「(やってやるさ……！)」

再び翼を広げ、海中から勢いよく飛び出す。

カムイの頭上、そして彼が作っているエネルギーボールの遥か上で制止し、彼を見下ろす。

「スキヤニングチャージ!!」

メダルを再スキヤンし両足を揃えて、狙いをカムイに定める。

〇〇〇のリングを通り、エネルギーを脚に収束して、カムイ目掛けてキックを打ち込む。

そしてカムイも、エネルギーボールを俺に向けて放った。

「はああああああ!!」

「……………!!」

凄まじい衝撃が俺の体に襲い掛かり、ビリビリと痺れるような感覚が駆け巡る。

今までのどんな攻撃よりも重い。

さらにエネルギーボールから漏れる青黒いオーラは、俺の精神に干渉し、技を阻もうとしている。

——めろ……やめろおおおっ!!

「やめるわけにはいかない!カムイを、本当の復讐鬼にしてしまう前に止めるんだ!!」
ありったけの力を脚に乗せ、足へと伝わせる。

俺の力がカムイの力を上回り、エネルギーボールを押し返した!

エネルギーボールは、威力が上がったキックに耐えきれず、爆発。

その爆発は、その場の全てのエネルギーを使い果たし、俺たちの精神を異空間に引きずり込んだ。

目の前に広がるのは、鞠莉ちゃんを助けた時と同じあの空間。
真っ白で何も無い空間に……。

「……は……だ……」

カムイがいた。

「ここは女神さまが……ミコさんが作り出した場所だ」

「キミは……なるほど。キミごとこの場所に閉じ込め、世界を人間を守った……という
ことですか……」

「いや。残念ながらそれは違うね。ここにアンタを呼んだ理由は……彼女だ」

俺が横にずれると、そこには少女の——女神さまに連れてきてもらった、祈りの少女
の姿があった。

「お久しぶりです、女神さま」

「な……！まさか、キミは……！どうしてここに……」

「女神さまのお姉さまが連れてきて下さったんです。『バカな弟を叱ってやってくれ』って
……」

少女は苦笑しながらカムイにそう話す。

一方のカムイは困惑しているが、徐々に笑顔を見せ始めた。

いつも俺たちに向けていたような邪悪な笑みではなく、少年が見せるような純真な笑

顔だ。

「わたし聞いたんです。神さまが色んな人に迷惑をかけてるって。その理由は、わたしたちが死んでしまった所為だってことも……」

「そんな……キミたちは何も悪くない！悪いのは、戦争を始めた悪しき者たちで……」
「たとえそうだったとしても、神さまが悪さをしてしまったのは事実です」

「……………」

カムイの表情が暗くなっていく。

やはり彼にも、悪事を働いたという意識はあつたようだ。

もつとも、そうでなければ俺の問いかけに、あんなに真剣な声で、「致し方ない犠牲」などと言えるはずがない。

「けど……神さまが、そこまでわたしたちのことを想ってくれていたんだって分かった時、わたし凄く嬉しかったです。神さまは、人間の哀しみを、苦しみを知り、心を痛めることが出来る、優しい神さま。だから——」

少女が身体を保てる時間に限界が迫っているのか、光の粒子になり始めている。

「だから今度は、イマを生きる人たちがみんな笑顔になれる、幸せになれる、そんな平和な世界を作ってください」

約束、ですよ——

そして少女はひとしずくの涙を落とし、この場所から完全に消失した。
曇りも、陰りも無く、屈託のない笑顔を、心優しき神さまに向けて……。

復讐と決着と八つのコンボ

少女が去り、この異空間に残ったのは俺とカムイの二人だけ。

彼女の心からの言葉を聞いたカムイは、彼女がいた場所を見つめ、涙を流しながら呟いた。

「……イマを生きる人たちを笑顔に……か。取り返しようの無い罪を犯し続けてきたわたしに……そんな資格があるのだろうか……」

「資格なんていらないよ。アンタが本当にそうしたいって望むなら、そうすれば良いんじゃないかな」

「わたしが望む……」

今の彼からは、邪悪な力が微塵も感じられない。

それ自体は良いことなのだが……。

プテティラコンボに変身した時、そして黒いタトバコンボに変身した時のカムイから発せられた黒い気配。

あの闇がカムイのものだったとは思えない。

ともあれ、全ては終わった。

俺は再び女神さまに呼びかけようとした。その時だった。

「うぐ……うおおおお!!」

突如、カムイが青黒いオーラに包まれて苦しみ始めた。

「カムイ?!」

「やめ、ろ……わたしはもう……」

『知ったことか』

「ツ!?!」

俺とカムイ以外の三人目の声。

男とも女ともとれないその声は、まるで頭の中に直接語り掛けてきているように響いた。

『折角この俺が力を与えてやったのに、それを無駄にするとは……。だが、俺の目的は果たした』

カムイを覆う闇が、人の形を作っていく。

そして最後に、カムイが持っていた三枚のメダルが、黒い人型も入り込んで……。否、黒い人型の中心で三角形を形成した。

「サメー・クジラー！オオカミウオー！」

その姿が完全なものに成る直前、黒いオーラが弾け飛んでこの世界を崩壊させた。

意識が現実に取り戻されると、そこでもカムイはあの世界と同じように黒いオーラに覆われていた。

「カムイ！」

「ぐわあああああああ！」

やがてそのオーラはカムイから離れていき、収縮して人型を形成していく。

「サメー！クジラー！オオカミウオ！」

姿を現したのは、以前カムイが、そして果南ちゃんや俺の前に立ちはだかつた際に変身した姿、仮面ライダーポセイドンだった。

「お前は……」

「何故……お前がその姿に……」

力を奪われたのか、カムイから先程までの気迫が無くなり、息も切らしている。

「俺を蘇らせたのは他でもない、お前の憎しみだ。誰かに復讐したい、その欲望が俺に力を与えた。そして俺は力を取り戻しながら、お前の復讐心を刺激し続け、コアを復活させた！……一度は破壊されたが、お前のその姿が俺に強い力を注ぎ込み、俺を完全に蘇らせたのだ。更なる力を与えてな」

ポセイドンの影響を受けたカムイは、その欲望を暴走させられ、卑怯極まりない手段

をとった……。

「果南ちゃんの時と同じ……まさかあの時、カムイが生み出してた半身は……！」

「心の薄れた半身は、俺の影響を強く受けたんだろうな」

あの出来事は実に滑稽だった、そう奴は嘲笑った。

「だが……」

しかし、笑いが止まると奴は俺を睨み、ドスの効いた低い声で威圧するような声をだした。

「オーズの力を手に入れ、お前と戦ったあの時、あの光を浴びたソイツは、俺の力を受けにくくなった」

「オーズの力を手に入れ戦った……あの時か」

ヤミーを連れて学校まで来たあの時、確かに俺は湧き出るような不思議な力のおかげで、暴走せずに力を振るうことが出来た。

暴走せずに……。

「どういう原理化は知らんが、その力は厄介だ。お前の力ももう要らない」

ポセイドンが指を弾くと、カムイのドライバーに納まっていた三枚のコアメダルが砕け散った。

メダルと纏っていた鎧を失い、彼は落下していく。

下は海だが、この高さから水面に叩き付けられれば間違いなく大怪我どころでは済まない。

俺は時間を止め、彼を受け止めて落下を防いだ。

「済まない……島村耀太くん……」

「気にすんな。それより大丈夫か？」

「あ、ああ……しかしメダルが砕けて……これでは変身が出来ない……」

どうやらカムイが持っていたメダルは、全てポセイドンに奪われたらしい。

さっき苦しんでいたのは、メダルを一気に引き抜かれた所為か……。

「問題無い。あとは俺が……」

「『俺が』……なんだって？」

「なっ……!?!」

すぐ目の前まで接近してきたポセイドン。

奴は俺のドライバー目掛けて槍で薙ぎ払った。

ベルトにはめられていた三枚のメダルは弾き出され、海に沈んでしまった。

カムイと同じく、力を失ってしまい、俺もカムイも海に落ちてしまった。

力を奪われてしまったカムイはもちろん、泳ぎが苦手な俺もどうにか上まで上がろう

とするが、浮き上がるどころか、どんどん沈んでいってしまう。

「ダメだ……息が続かな……」

意識が遠のきかけた瞬間、誰かが俺とカムイを掴み、海中を高速で移動していった。

「けほっけほっ……」

「二人とも大丈夫？」

溺れていた俺たちを砂浜まで連れて来てくれたのは、メズールだった。

「メズール……助けてくれてありがとうな」

「良いのよ。貴方がいなくなってしまうたら、アレを止める人がいなくなってしまう。」

それに、そうなってしまったらわたしの友達が悲しむもの」

「そうか……」

彼女が見上げた空には、黒いオーラを纏ったポセイドンがこちらを睨んでいた。

「勝算はあるの？」

「残念ながら。勝算どころかメダルも……」

タカ・トラ・バツタの三枚と戦いの直前でダイヤちゃんから託されたコブラ・カメ・ワ

ニの三枚。

そしてカムイとの戦いで、彼の攻撃に耐え切った四枚の恐竜系メダル。

俺の手元に残ったのはこの十枚だけ。

「さっきのコンボで使ったメダルは？」

メズールの問いかけに俺は首を横に振る。

「ポセイドンの攻撃を受けた時に海に……」

「そう。今はそれしかないのね」

「悪い……お前たちのメダルは……」

「謝るのは後だよ。今はアレを倒すことが先決」

いつの間にかやって来たカザリたちもポセイドンを見据えている。

気のせいだろうか？

奴の気配がどんどん大きくなってきている気がする……いや、気のせいじゃないっ!!

ポセイドンの周りに発生していた黒いオーラ。

その中に銀色の輝きがちらつく。

海の水や街の建物を大量のセルメダルへと還元、吸収し、その姿は異形の物に変化し

ようとしていた。

「どうする……今残ってるメダルだけじゃ、そんな化け物を倒すなんて到底出来っこな

いで……」

「メダルならあるじゃないか、ここに三枚」

ウヴァの手に握られていたメダルは二枚。

つまり三枚目は……。

「お前、まさか……」

「奴を倒さなければ、どの道助かりなどしない。そしてそれが出来るのは、オーズであるお前だけだ！」

「ウヴァ……」

「行け、耀太。お前がこの世界の未来あしたを掴め！」

ウヴァは最後のメダルを、その想いとともにも俺に託し、自身の形を崩していった。「受け取ったぞ、お前の想い……」

手の中に残った三枚のコアメダル。

セルメダルを集め続けているポセイドンがいる空に向き直り、その三枚をベルトに装着する。

「変身！」

「クワガター！カマキリ！バッター！ガーター・ガタ・ガタキリツバ！ガタキリバ！！」

俺はオーズ。ガタキリバコンボへの変身を完了させた。

七体のブレンチシエードを生み出し、八人のオーズが並ぶ。

「耀太、ボクたちからもだよ」

カザリが、メズールが、ガメルが二枚ずつメダルを投げ渡してくれる。

「必ず守るのよ。あの子たちの未来を」

「絶対、守れ！」

彼らも、自身の意識が宿ったコアメダルをブレンチシエードに託してくれた。

「コイツも使っとけ」

アंकは意思のあるコアではないが、三枚のメダルをブレンチシエードの一人に渡す。

さらに俺は、爬虫類系と恐竜系のコアメダルを分身に渡した。

俺たちは、それぞれのコアメダルをベルトにセットし直す。

八つのオースキャナーは、二十四枚のコアメダルを読み込んだ。

「クワガタ！カマキリ！バッタ！」

「ライオン！トラ！チーター！」

「サイ！ゴリラ！ゾウ」

「シャチ！ウナギ！タコ！」

「タカ！クジャク！コンドル！」

「プテラ！トリケラ！ティラノ！」

「コブラ！カメ！ワニ！」

「タカ！トラ！バッタ！」

「ガータ・ガタ・ガタキリツバ！ガタキリバ！！」

「ラツタア・ラツタア！ラトラーター！！」

「サゴーズ！サゴーズ！！」

「シャ・シャ・シャウタ！シャ・シャ・シャウタ！！」

「タージャードルウー！！」

「プットツテイラーノザウルース！！」

「ブラカーワニ！！」

「タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！」

並び立った八人おれたちのオーズたちの見つめる先は、ただ一つ。

みんなが笑顔でいられる、希望にあふれた未来！

後方からタカカンドロイドたちが奴への道を作ってくれる。

「グリアアアア！！」

トライドベンダーが咆え、プテラカンドロイドとタカカンドロイドたちが空を舞い、闇のオーラを掻き消す。

さらに他のカンドロイドたちも後方支援に回ってくれている。

「これが真正正銘、最後の戦いだ。行くぞー！」

「おう！！」

タトバはメダジャリバーを構え、ラトラーターはトライドベンダーに跨り、他のコンボたちも戦闘態勢に入った。

『オーズ、貴様がどれだけ抗おうとも、俺は止められない！この世界を吸収して貴様を倒し、あの男への復讐も果たす!!』

もはや上半身以外はその原型を留めず、肥大化して黒いオーラを触手のように暴れさせるポセイドン。

プロテイラとタジャドルが空中から、ラトラーターがタコカンドロイドの道をトライドベンダーで爆走しながら触手を破壊していく。

「誰にだろうと、どんな理由だろうと、そんなことさせない!」

奴が放ったエネルギー弾をガタキリバとともに切り刻む。

背後から迫って来ていた触手を、サゴーズがゴリバゴーンを放って粉碎し、シャウタとブラカワニが奴の体に沿って上昇して、本体にキックを放った。

『バ、バカな……!パワーアップしたはずの俺が押されているだ?!』

「当たり前だ!俺は今、みんなの想いも受け取って戦ってるんだからな。この町で、この世界で未来を望む人たちの想いが、お前のくだらない復讐に負けるかあああああ!!!」

ポセイドンの胸にメダジャリバーを突き刺す。

その柄から手を離し、全てのコンボと再び並ぶ。

「スキヤニングチャージ!!!」

全員がドライバーにオースキヤナーを走らせ、メダルを再スキヤン。

巨大な〇〇〇の文字が浮かび上がり、オースの最大級の技の一つ、ボンディングエイトクラツシユを発動した。

サゴーズが重力を操作してポセイドン海面を叩きつけ、その瞬間にプトテイラが冷気を発して海面を凍らせる。

ブラカワニ、タジャドル、シャウタ、ガタキリバがキツクを浴びせ、最後にタトバもポセイドンに突き立てたメダジャリバーに向けてタトバキツクを放ち、杭の如く奴の体に打ち込んで貫いた。

『ぐわあああああ!!』

ポセイドンは大爆発を起こし、その炎で沼津の空を真っ赤に染め上げた。

それと同時に、俺のオーズドライバーに収まっていたコアメダルが砕け散った。

どうやら、先のカムイとの戦いでダメージを負っていたらしい。

そして炎が収まると、ポセイドンと融合していた異形が醜い龍になり、咆哮していた。

最後の戦いとキセキの炎と消失

ポセイドンが遺していった最悪の置き土産。

醜悪な姿をした龍が咆哮すると、海の水が渦を巻いて浮き上がり、セルメダルに変換されて吸収されていく。

「また面倒臭そうなのが出てきたな」

「面倒臭いじゃ済まないだろ、アレ……」

倒すのに骨が折れるとか、そんなレベルの相手ではないのは見ただけで分かる。

「もう一度さっきのをやるしか……」

ガタキリバコンボに変身する為にメダルを取り出すと、カマキリとバツタのコアメダルが砕けてしまった。

「……いやはるか」

「これって……」

「……どうやらポセイ^かドンの^れ力がメダルに負荷をかけてしまったらしい……。わたしがカザリくんたちを異空間に閉じ込め、彼らのダミーと戦わせた……。そのダミーにポセイドンの闇の力を注いだのだ……。そしてポセイドンとの戦いだ……。メダルも耐えき

れなかったのだ……」

「つてことは他のメダルも……!?!」

他のメダルも取り出そうとするも、手にした瞬間に光の粒となり、消えていった。

「もしかしてカザリたちはそれを知ってて……」

「キミに最期の望みを託したんだ……。意思が宿ったコアはだけは、仲間として……。友として受け入れてくれたキミの力になるべく、最期の力を振り絞って今の形を保っている……」

……なら俺が出来ることはただ一つ。

全てを託してくれた友達のために、アレを倒す!

「プテラー・トリケラー・ティラノ! プットツティラーノザウルース!!」

エクスターナルフィンを広げ、龍に高速で接近する。

龍はエネルギー波を乱射して俺の行く手を阻もうとする。

俺はその攻撃を、体を大きく動かすことで避け、メダガブリューで斬撃を食らわせていく。

しかし、強固な防御力により刃は阻まれ、甲高い金属音を鳴らすに留まる。

「不味いな、攻撃が全く効かないなんて……」

あの龍の攻撃は、一撃の威力が凄まじく、掠っただけでビルを蒸発させてしまってい

た。

そんなものを食らえば、いくら変身しているとはいえ耐えられない。

攻撃は当たっても効果は無し。逆に相手の攻撃は、一発でも当たればアウトという理不尽極まりない状態で、俺は切羽詰まっていた。

他のコアメダルが使えていたとしても、プトテイラの力を使ってこれでは、勝ち目はほとんど……待てよ……。

奴は元々、ポセイドンがパワーアップした際に生まれた存在。

言うなれば、副産物のようなものだ。

ポセイドンは倒れたが、そのコアメダルは排出はおろか、破壊も出来ていない。

つまり、ポセイドンを倒した時に、あの龍はコアメダル吸収したということになる。

コアメダルが核になっているのなら、どうにかして破壊出来ればアレを止めることが出来る。

だがどうやって攻撃を奴の体内のコアまで届ける？

俺は思案し、メダガブリューという武器の特性を思い出した。

メダガブリューは、セルメダルを粉碎、圧縮してその力を極限まで引き上げることの出来る武器だ。

それをより強力なコアメダルで行った場合、どうなるのか……。

コアメダルを砕いてエネルギーに変換出来るかは正直分からないが、今はこの手しかない……！

俺はドライバーに収めた三枚のコアメダルを取り出し、メダガブリューに装填。

克蘭チガルバイダーを下ろそうとすると、いつも使っている時より、動作が固い。

やはりコアメダルは砕けないのか……？

「うおおおおおおお!!」

俺はメダガブリューを持つ力をさらに強める。

「ゴックン〜」

バキバキツ、という音を立てて、メダガブリューに凄まじいエネルギーが宿る。それ

も、俺の方が参ってしまいそうなくらいの。

けど、これなら!

刃にエネルギーが宿り、紫色に発光し始める。

俺は紫色の刃を龍に向けて振り落とした。

「セイヤー——ッ!!!」

紫色のコアメダルは粉々になって消滅し、メダガブリューはパワーに耐えきれなかつ

たのか、砕け散ってしまった。

俺は変身が解けて海に落下しかけたが、間一髪のところであんぐに助けられた。

「全く、無茶しやがって」

「サンキュー、アंक。あの龍は……」

「倒せてはいないみたいだな……」

俺を掴んでいる手とは逆の手で龍を示す。

決死の攻撃が効いたのか、かなり苦しんでいた。

「だがだいたい弱っている。もう一度強力な一撃を叩き込めれば、今度こそ倒せる」

「そうは言っても、もうメダルが……」

強力な一撃を与えられる……コンボが出来るメダルはもう残っていない。

アंकのコアメダルを除けば。

俺とアंकは砂浜まで戻り、苦しんでいる龍を見つめる。

「ヨータ。メダルはあと何枚残ってる？」

「……これしかないよ」

カザリたちの意志が宿ったコアメダルをアंकに見せる。

クワガタ、ライオン、サイ、シャチ、そしてコブラ。

どれも光の粒子を放出し始めていた。

アंकは「そうか……」と呟くと、先程の彼らと同じように二枚のコアメダルを俺に

握らせた。

「アंक……」

「それしかないんだろ？変身出来なきや、守れるはずのものも守れない。それにこれは貸した。アイス一年分、さらに追加の……な」

そう言つて最後の一枚を投げた。

俺はそのタカコアをキャッチする。

核となる意思を内包したコアを失つたことで、アंकが憑依していた体は倒れ、右腕からはセルメダルが零れた。

コンドル、クジャクの順にメダルをセットしていく。

「本当にサンキューな、アंक。お前がいなかったら、俺はここまで来れなかった」

ヤミーと戦う時はもちろん、A q o u r s のライブの時も協力してくれた。

みんなにとつても心の支えであつたに違いない。

そんなアंकへの感謝の気持ちを込め、彼のコアメダルを全てドライバーに装填し終えた。

「だから今度も——俺と一緒に戦つてくれっ!!変身!!」

オーカテドラルを傾け、オースキャナーを走らせる。

——タカ!クジャク!コンドル!——

タージャードルウ!!

アंकが自らの声でメダルを読み上げると、赤・緑・黄のタカのエフェクトが現れ、クジャクとコンドルと並んで俺の体をアーマーで覆っていく。

赤い翼はオーズの物ではなく、アंकの翼。

また発生した炎も、いつもより熱量が大きく感じられた。

翼を広げて、俺は飛翔する。

あの龍に再接近すると、所持していたカザリたちのコアメダルが動き出し、タジャスピナーに収まっていく。

「お前たちがやりたいって言うのなら……！」

俺も体内から最後の一枚をタジャスピナーに収めると、最後にアंकのコアもベルトから外れてスピナーにはまる。

「クワガター・ライオン！サイ！シャチ！プテラ！コブラ！」

読み上げられる六枚のコアメダル。

本来ならば呼ばれることの無い七枚目のメダルが、「俺を忘れるんじゃない！」と言おうとしているかのように、その名を叫んだ。

——タカ!!!ギガスキャン!!!

赤、緑、黄、白、青、紫、そして橙の七色に煌めく炎の鳥が、俺の体を包み込む。

「はああああああああああ!!!」

ウヴァ、カザリ、ガメル、メズール、そしてアンク。

五人とひとつつになり、火の鳥はさらに成長し、龍に突撃する。

「グガアアアアアアアアアアアッ!!!」

これがトドメの一撃となり、龍は断末魔をあげ、四肢がバラバラになっていく。

龍の中心でブラックホールのようなものが発生し、龍の体を作っていたセルメダルとコアメダルが吸い込まれていく。

何とかそれから逃れようと、町の方へ向かって飛ぶが、その吸引力は恐ろしく強く、タジャスピナーに収まっていたメダルたちが吸い込まれてしまう。

「クソ……カザリたちのメダルが……」

そして遂に。

「っ?!しまっ……」

オーズドライバーに填めていたアंकのメダルも外れてしまい、変身は強制解除。抗う術を失った俺は、ホールに飲み込まれてしまった……。

ごめん……果南ちゃん。

約束、守れそうにないや……。

「耀太？」

気のせいだろうか。

今、耀太の声が聞こえたような気がした。

ごめん、と。

その日、耀太たちが戻って来ることは無かった。

救世と帰還とラブライブ！

妙な浮遊感が体を包んでいる。

目を開けると、やはり俺は奇妙な場所にいた。

あちこちが歪んだ空間で、時々「泡」のようなもの頭の上や足の下、すぐ隣を通過していく。

色々と疑問はあるが、一つ分かったことは俺が死んでいないということだ。

手を握った時の感覚は確かに感じられ、体が透ける様子も無い。

死んでいないというなら、ここは一体……？

この状況で湧き上がってくる疑問に答えたのは……。

「ここは時空の裂け目の向こう側、時空の繋ぎ目じゃよ」

やはり女神さまだった。

「女神さま、どうしてここに？」

「決まっておる。ぬしを助ける為じゃ。じゃが、まさかあの裂け目がこんな所に繋がっているとはな」

「こんな所……ここは一体何なんだ？」

それを尋ねると、彼女は「ふむ」と頷いて話を始めた。

「ここは『時空の繋ぎ目』と呼ばれる場所。無数に存在する平行世界同士を支える柱を担っている空間じゃ」

「平行世界同士を支える柱……」

「うむ。通常、人間がここに入ることは不可能なんじゃが……：どうやらぬしらの強大なエネルギーの衝突が、この空間への入り口をこじ開けてしまったようじゃな」

「なるほどな……：それでこの泡みたいなの一つ一つが世界つてことか」

女神さまは頷くと、両手をかざしてワームホールを出現させた。

「さて、早う戻らんとあやつらに余計な心配をさせてしまふ。ここは空間が安定しておらんから、念話が使えないからの」

彼女の言葉に俺は頷き、そのワームホールに入ろうとした、その時だった。

とある世界を映す泡が俺の視界に入った。

「なあ、女神さま。ちよつと聞いて良いか？」

「なんじゃ？」

「あの泡、あれ映し出されてるのってループしてる気がするんだけど、気のせいじゃないよな。」

「ああ。気のせいじゃないぞ」

その泡に映し出されていたのは、俺の記憶にもある戦いの場面。

だが、俺が知っているものと決定的な違いが一つあった。

「あれってもしかして……」

「ぬしがカムイ……いや、ポセイドンに敗れた世界じゃ。正確に言えば、戦っている最中に背後から不意打ちを食らい、そのままトドメを刺された、じゃがな」

最後にはそのポセイドンも……否、ポセイドンに憑依されていた人物も命を奪われ、その世界は一番初めの状態まで戻っていく。

「これは既に滅んでしまった世界に起こる現象じゃ。滅ぶということは、それ以上の続きがないこと。時間はその瞬間で停止し、次の瞬間には生まれた状態に戻る。それを永遠に繰り返していくのじゃ」

「既に滅んだ世界……」

そんな彼女の言葉に、俺はある出来事を思い出す。

異世界の戦士たちと共に、二つの世界の融合を阻止する為に戦ったあの事件を。そしてあの時、命を失った一人の少女のことを。

「……女神さま、寄り道して良い？」

「……そう来ると思っておったわ」

やれやれと溜息を吐きながら、女神さまはソレを手渡してくれた。

「これ……ビルドドライブバー。貸してくれるの?」

「丸腰でポセイドンと正体不明の敵に挑むのか?」

「あー……無理だな」

苦笑しながらそう返すと、女神さまは開いているワームホールを一旦消し、別のホールを開いた。

「それには変声機が仕組んである。声で正体がバレることはないだろう。……この先では、今まさに世界の命運を決する戦いが起きておる。じゃが、今のぬしとそのベルトがあれば苦はないはずじゃ。わらわは隠れて見ておる。上手くやるんじやぞ」

「了解!」

俺は女神さまの後を追ひ、ホールをくぐった。

ワームホールの先は少し暑く、強めの雨が降っていた。

そしてここは浦の星学院の屋上。

下ではポセイドンとライオンクラゲヤミー、そして平行世界の俺が死闘を繰り広げていた。

「ここは、あの平行世界の果南が元いた世界。さつきも言ったように、滅ぶ運命にあった世界じゃ」

「それを俺たちは変えに来た」

「世界の運命力は強い。もしかすると、ぬしもそれに巻き込まれて、死ぬか消えてしまうかもしれない」

「ならねーよ。約束したんだからな。果南ちゃんを必ず幸せにするって——」

俺はビルドドライバを腰に当てて装着し、二本のフルボトルを振ってキャップを回してからスロットに挿し込んだ。

「ラビット！タンク！ベストマッチ！」

レバーを回すとスナップビルドライダーが形成され、赤と青のアーマーが形作られていく。

「Are You Ready?」

「変身！」

「鋼のムーンサルト！ラビットタンク！！イエーイ！！」

二つのアーマーが俺を挟み、俺は仮面ライダービルド ラビットタンクフォームへと変身を遂げた。

「世界を救って来い、耀太！」

「ああ！」

俺は屋上から飛び降り、先程の変身音で動きが止まった三人がいるグラウンドに着地した。

ヤミーは勿論、ポセイドンと平行^オ世界の俺もマスクの下で驚愕^ズの表情を浮かべているだろう。

「やあ、オーズ。君たちを助けに来たよ」

手を地に付いていたオーズにそう声を掛ける。

「ビ、ビルド!?! どうしてここに!?!」

「言つたでしょ、君たちを助けに来たつて。聞きたいことは色々あるだろうけど、今はアイツらをどうにかする方が先決だと思うよ」

「……そうだな」

オーズに手を差し出すと、彼は俺の手を掴んで立ち上がった。

「貴様……何者だ!」

人質を取つて二対一で追い詰め、勝利を目の前にしながら、突然現れた乱入者^{おれ}に苛立ちを隠せない様子のポセイドン。

奴の怒号に対し、俺はあの口上で名乗ることにした。

「俺はビルド。創る、形成するって意味のビルドだ。以後、お見知りおきを」

「ビルド……何者かは知らんが、わたしの邪魔をする者は誰であろうと許さん!」

怒りに任せてエネルギー刃を飛ばしてくるが、蹴りで粉碎する。

「許さん? 許さないのはこっちの方だ!」

ポセイドンの懐に潜り込んでパンチを食らわせ、瞬時にライオンクラゲヤミーの方に跳び、蹴りをお見舞いした。

「まずはお前を取り巻き共々吹っ飛ばす！」

ラビットとタンクのフルボトルを外し、新たなフルボトルをセットしてレバーを回す。

「海賊！電車！ベストマッチ！Are You Ready?」

「ビルドアップ！」

「定刻の反逆者！海賊レッシャー！！イエーイ！！」

ラビットとタンクフォームから海賊レッシャーフォームにチェンジし、専用武器であるカイゾクハツシャーを取り出す。

ヤミーたちに照準を定め、カイゾクハツシャーのトリガーとなっているビルドオーシャン号を引く。

「各駅電車 急行電車 快速電車 海賊電車!!」

オーシャン号から手を離すと、エネルギー状態のビルドアロー号がクラゲヤミーたちを粉碎し、最後に本体であるライオンクラゲヤミーにも命中、爆発四散させた。

「次はお前だ、ポセイドン!!」

俺はカイゾクハツシャーをポセイドンに向ける。

すると奴はけたけたと笑い出した。

「お前にそれが出来るのか?」

「何? どういう意味だ!」

問いかけに答えたのは、ポセイドンではなくオーズだった。

「アイツは人の体に……俺の大切な人に取り憑いてるんだ……」

「何だと!」

「どうだ? お前に女ごとわたしを倒すことが出来るか?」

「くっ……なんてな」

「何……?」

「言っただろう? 俺は君たちを助けに来たつて。でもその前に……」

俺はポセイドンとは別の方向に弓を向け、エネルギー弾を撃ち放った。

「!」

側にいる二人と、俺が撃ち抜いた場所に隠れて居た人物が、三者三様の驚きの声を漏らす。

あの時とは違う、白いアーマーを身に纏っていたが、誰であるかはすぐに分かった。

「後ろから不意打ちしようだなんて、お前らしい卑怯な方法だな。ルシフェル」

「何故下賤な人間がわたしの名を……!? どうしてわたしの居場所が分かった!」

「名前を知ってる理由は教えられないな。でも上から見たら、お前の位置なんて丸見えだったの。さて、これで二対二だ。オーズ、君と俺とで彼女を助ける。そして奴らを倒す。オーケー？」

「分かった。誰だか知らないけど、ありがとう」

「礼には及ばないよ。俺は俺のやりたいことをやってるだけだからね」

俺はルシフェルと、そしてオーズはポセイドンと見合い、背中合わせになる。

「ビルド……貴方を危険な存在と断定し、ここで倒す!!」

「それはこっちのセリフだ。お前は……絶対に許さない!!」

俺が再びカイゾクハツシャーでエネルギー弾を撃つと同時に、オーズはポセイドンへと走り出す。

俺とルシフェルは、中距離での撃ち合い勝負になった。

奴がエネルギー弾を生成し、俺がそれを撃ち落とそうと試みるが、パワーで劣つてしまい、完全に打ち消すことが出来ない。

「どうです？わたしのパワーは？不完全とはいえ、貴方を倒すにはこれで十分です!!」
「くっ……だったらこれでどうだい！」

ボトルをもう一度入れ替え、フォームチェンジ。

「ドラゴン！ロック！ベストマッチ！Are You Ready？」

「ビルドアップ!」

「封印のファンタジスタ! キードラゴン!! イエーイ!!」

ベストマッチフォームの一つ、キードラゴンフォームへの変身を完了させた。

「はあ!」

蒼い火炎放射でエネルギー弾を全て焼き尽くし、ルシフ本体にも炎を浴びせる。

さらに左腕に装備された巨大な鍵——バインドマスターキーから鎖を放ち、奴を拘束する。

「何!? 体が動かない!」

「勝利の法則は決まった!」

俺はレバーに手を伸ばし、回転させる。

「Ready Go! ボルテックフィニッシュ! イエーイ!」

右腕に蒼い炎を纏わせ、さらにブレイズアップモードに移行させる。

「これで……決まりだあああつ!!」

助走をつけて、炎を纏った拳をルシフの体に叩き込む。

炎は拳から奴の体に燃え移り、そのベルトを焼き尽くした。

「バカな……わたしの力が……。くっ、申し訳ありません……ただでは済まさんぞ!」

「あ、待て!」

ベルトを破壊され、力を失ったルシフェルは、カムイに対しての謝罪と思われる一言と捨て台詞を残し、ワームホールを開いて逃げて行った。

逃がしはしたが、これでポセイドンの味方はいなくなつた。

あとは奴から果南ちゃんを奪還し、ぶつ飛ばすだけだ。

二人が戦つているのであろう方向に視線を移すと、ポセイドンは剣を杖代わりに立ち上がろうとしているオーズを見下していた。

「大丈夫か？」

「何とか……でも、精神的に堪えるな……。『わたしとあなたは敵』、か……」

かつて俺も言われた言葉。

あの時は妙に心に突き刺さつたことが、とても不思議に思えた。

だが、今はその理由が分かる。

思えば、俺は誰よりも果南ちゃんと二人でいることが多かった。

出会つて間もないにもかかわらず、自然と好きになつていったのだろう。

「俺もそんなこと言われたことがある。大切な人を操られて、いざ立ち向かつたら『敵だ』って……。心にグサツときたけど、それでも俺は、本気の想いを伝えた。だからオーズ、君も諦めるな。彼女が君を……そして仲間たちを本当に拒絶しようとするはず無いんだ。君が想いをぶつければ、きっと彼女も自分の気持ちを打ち明けてくれるはずだ」

「……分かった、やってみるよ」

立ち上がって俺と肩を並べた平行世界の俺。

二人でポセイドンを見据えていると、

「やっぱここにいたか」

「アंक！アイツの気配を感じたんだな」

俺とともに戦い、最後には力を貸してくれた俺の相棒、アंकがやって来た。

「ああ。で、ソイツは何者だ」

「俺は仮面ライダービルド。君たちの味方だよ」

「……そういうことか」

「アंक？」

何かに気付いたような含み笑いを浮かべるアंक。

「……大丈夫？これバレてないか？」

「それにしても、またこっ酷くやられたな」

「うるせえ。タトバじゃパワー不足なんだよ……」

「なら、コイツでさっさと決着ケツリを着けてこい」

アंकがオーズに差し出したのは、二枚の鳥系メダル。

俺の時はアंकはクジャクだけしか持ってこなかったが、どうやらこの世界線では二

枚ともアंकが持つてくることになっていたらしい。

「これ……どうやって?」

「お前の叔母とかいう女に渡されたのと、カザリから取り返したやつだ。特別に貸してやるから、さっさと決めてアイツを取り返してこい」

「もちろんだ!」

オーズが渡されたメダルをドライバーにセットしていく。

俺もそれと同時にフルボトルを外して、一際大きいボトル——ラビットタンクスパークリングのプルタブを開け、ベルトにセット。

「ラビットタンクスパークリング!」

互いに変身シークエンスを踏み、今の形態から姿を変えていく。

「タカ!クジャク!コンドル!タージャードルウ!!」

「Are You Ready? シュワツと弾ける!ラビットタンクスパークリング!!
イエー!イエー!!」

オーズ タジャドルコンボとビルド ラビットタンクスパークリングフォームへの強化変身が完了し、俺たちは奴と対峙する。

「姿が変わった程度で良い気になるな!!」

ポセイドンが放った二つのエネルギー弾を、二人で一発ずつ弾き飛ばす。

奴に向かつて走り、攻撃を開始した。

ビルドおれが拳を打ち込む度に泡が弾け、オーズが打撃を与える度に炎がポセイドンが襲う。

「良いのか!?この体はお前の仲間の……!」

「分かってる!自分もいなくなる、なんてバカなこと言ってるヤツはぶつ飛ばしてでも止めるんだよ!誰も……!誰も望んでなんかない!」

やはりどの世界の俺も、想っていることは変わらないだろう。

彼はありつたけの想いを攻撃に乗せ、ポセイドンに浴びせていく。

「それに……まだ伝えてないことだつてある。それを伝えるまで、消えるなんて絶対許さない!」

オーズが強烈な一撃を叩き込み、ポセイドンは退いていく。

「ボルテックブレイク!」

ドリルクラッシュシャー ガンモードにロックフルボトルを装填し、トリガーを引くと鎖状のエネルギー弾がポセイドンの動きを封じる。

「今だオーズ!君の気持ちを彼女に伝えるんだ!」

俺の言葉に彼は頷き、ポセイドン……否、彼女に向き合う。

「果南ちゃん、君が好きだ」

そして彼女にその想いを伝えた。

「……………へ？」

突然の告白に、俺は間の抜けた声を出してしまった。

「いきなりこんなこと、それもこうして戦っている時に言うことじゃないのは分かっている。でも、今を逃したら二度と言えなくなる、そう思ったから、君に伝えるよ」

茫然としてしまう俺と呆れ果てているアंक。

そしてポセイドン……………否、彼女は鎖に縛られたままたじろいでいた。

「そんなの……………そんなのダメだよ……………わたしたちは、敵なのに……………戦わなくちゃいけないのに……………」

彼女の声は次第に涙声になり、最後には震えていた。

あともう一押しすれば、彼女を取り返すことが出来るかもしれない。

「君はどうしたい？」

「わたしは……………わたしは……………みんなと、耀太と一緒にいたい！」

「うっ……………うわああああ!!!」

俺が問いを投げかけると、ポセイドンは苦しみだす。

そしてポセイドンの体から、囚われていた彼女の腕が現れた。

「果南ちゃん!!」

二人同時に彼女の名を叫び、平行世界の俺が果南ちゃんの手を握り、ポセイドンの体から引つ張り出した。

勢い良く腕を引いた為、二人は転がってしまふ。

だが、オーズが果南ちゃんを庇っていた為、彼女は無事のようなだ。

「痛つ……果南ちゃん、大丈夫?」

「……耀太……ごめん!ごめん!」

泣き崩れる果南ちゃんを、オーズは抱き締めて頭を撫でる。

俺は大きく息を吐き、彼女の無事にひとまず安堵する。

そして未だ苦しみ続けているポセイドンを睨んだ。

「果南ちゃんは助け出した。あとはお前だけだ、ポセイドン!」

「グ……はあああああ!!……ハアハア……まだまだ、まだわたしは負けていない!!」

奴はその拘束具を弾き飛ばし、槍を杖のようにして体勢を保っている。

果南ちゃんを取り返されたことで、力を大幅に失ってしまったからだろう。

「いや、お前の負けだ。これで終わらせる!!」

果南ちゃんをアंकに預けた平行世界オの俺はオースキャナーズでメダルを再び読み込

み、俺はレバーに手を伸ばして回転させる。

「スキャニングチャージ!」

「Ready Go!スパークリングファイニッシュ!」

同タイミングで飛び上がり、それぞれの脚にエネルギーが収束されていく。

「はああああああ!!負けるかああああああ!!」

槍を投げ捨て、拳で迎え撃ったポセイドン。

しかし、その力はとても弱々しい。

「それはこっちのセリフだ!!」

「人の想いを弄ぶような奴に!」

「絶対に負けるかああああああああ!!」

「バ、バカなああああ!!」

俺たち二人の合体技、ダブルライダーキックはポセイドンに炸裂し、奴の体を貫いた。

そしてポセイドンは断末魔を上げ、大爆発を起こした。

オーズは反動で変身が解除され、元の姿に戻る。

「耀太!」

「果南ちゃん、大丈夫っ?!」

アंकのもとを離れ、彼に抱き着いた果南ちゃん。

彼女は泣きながら、「ごめん、ごめんなさい」と彼に謝り続けていた。

「大丈夫、大丈夫だから。ありがとう、戻ってきてくれて——」

そうやって平行世界の俺は彼女の頭を撫でた。

ここでの俺の役目は終わった。

俺は二人の側から離れる。

「ま、待ってくれ!」

そんな俺の姿が目に入ったようで、平行世界の俺が俺に声をかけてきた。

「ここでの俺の役目は終わった。元の場所に帰るよ」

「ありがとう、俺たちを助けてくれて」

「さつきも言っただろ、お礼はいい。どうしても言うなら、彼女を幸せにしてあげてくれ」

頬を赤らめて照れる二人。

そんな彼女を見てみると、俺もみんなのいる世界が……果南ちゃんの隣が恋しくなってきた。

「それじゃ、シーユー」

俺は思い切りジャンプし、女神さまが待つ場所まで戻って行った。

「上手くいったみたいじゃな」

「ああ。ちゃんと救えたよ。けど、ルシフェルは……」

「心配するな。奴は倒れる。ぬしら仮面ライダーの、愛と正義を信じる心の前にな」

女神さまは、戦いを終えた俺を笑顔で迎えてくれた。

「そっか……それじゃ、全部片付いたし、みんなの元に戻ろう」

俺がそう切り出すと、彼女はバツの悪そうな笑みを浮かべた。

……何だか、凄い嫌な予感がする……。

「あー……それなんじゃがな、実はやらねばならんことが増えた」

「……は？」

激しい戦いの直後に再び戦いに身を投じたっていうのに……勘弁してくれよ……。

大きい溜め息を吐き、女神さまに尋ねる。

「今度は何なのさ……」

「以前、平行世界との融合を防ぐ為に、次元王……ルシフェルと戦ったことは覚えておるな？」

「あ、ああ。人間では俺だけが覚えてるあの事件だろ。それがどうしたんだよ」

「実はあの時、ぬしたちと異世界の戦士たちの他にもう一人、二つの世界に干渉していた戦士がいたようなのじゃ」

「……まさかそれって……」

「仮面ライダービルド……つまりぬしのことじゃ」

マジかよ……。

あんなとんでもない所にまた行かなきゃいけないのか……。

「はあ……分かった、行くよ」

「済まんの」

女神さまは謝罪の言葉を述べながら、繋ぎ目へのワームホールを開く。

ホールをくぐると、再びあの浮遊感に包まれる……ことは無く、女神さまが足場を作ってくれたおかげで、ちゃんと立つことが出来た。

「はあ……さつさと終わらせて帰ろう……」

俺は女神さまが開いたホールから、再び世界を超えようとする。

「ちよつと待て」

「何?」

「コイツを持っていけ」

彼女が渡してきたのは、一枚のカード。

それも仮面ライダー龍騎に出てきたあのカードと同様の種類の物。

しかし、劇中では一度も見ることが無い。

「これは?」

「わらわ特性のオリジナルアイテムじゃ。が、まだ試作品で一度しか使用できん」

「もしかしてこれって……」

「うむ。あの時王蛇が使ってみせたカードじゃ」

あの形態……このカードを使つてたのか……。

「じゃあ俺の役目はこのカードを彼に渡すこと？」

「……実はそのカードを渡したタイミングが、戦闘中の、それもかなりギリギリな時でな。相手もかなり強いうえ、このホールの時間軸じゃと早く行かんと……」

「そういうことは早く言ええええええええ!!」

俺はビルド ラビットトラビットフオームに変身し、即座に必殺技を発動させながら、ワームホールをくぐつたのだった……。

「つつつつつつかれた!!」

アビスを倒し、俺と同じ名前の彼にカードを渡して繋ぎ目に帰つて来た。

もうしばらく戦いたくない……。

「本当にご苦労じゃつたな」

「……もう何も無いよな？ 帰れるよな？」

激戦に次ぐ激戦、そのまたさらに激戦を越え、身も心もボロボロになった俺は、疑いの目で女神さまを睨む。

「そんな顔をするな。大丈夫じゃよ、さっきので正真正銘最後じゃ。あやつらのいる世

界に帰るぞ」

そう告げられて、俺は心の底から安堵した。

ああ……やつと帰れる……。

そして、そんな想いを踏みにじるかのように、彼女は告げた。

「……済まん。ホールが開けん」

「……は？え？ちよ、どういうこと!？」

「カムイとの戦いでの莫大な力の消費、そして幾度にもわたるホールの生成で、力が尽きてしまったのじゃ……」

ようはガス欠になってしまったらしい。

しかも、その原因はほぼ……というか全面的に俺の所為……。

完全に自業自得じゃねえか……。

「……それじゃあ俺たち、帰れないってこと?」

「いや、方法はある。小さなホール程度なら作ることが出来るから、あとはそこに高エネルギーをぶつけてやればいい」

「結局俺の出番ってことか……」

「そういうことじゃ」

俺はビルド最強の形態に変身する為のボトル——ジーニアスフルボトルを取り出し、

起動してベルトのスロットに挿し込む。

「グレート！オールイエイ！！ジーニアス！！」

レバーを回転させて待機音を鳴らし、プラントライドビルダーGNを出現させてから回転を止めてポーズをとった。

「Are You Ready？」

「変身！！」

「完全無欠のポトルヤロー！ビルド ジーニアス！！スゲイ！モノスゲイ！！」

俺はビルドの最終形態、ジーニアスフォームに変身し、女神さまが開いてくれた小さなワームホールの前に立つ。

「ワンサイド！逆サイド！オールサイド！！」

もう一度レバーを回し、必殺技の準備を整えていく。

「ジーニアスフィニー——ツッシュ！！！！」

ワームホール目掛けてライダーキックを放った。

「はああああああああ！！！！」

バチバチと火花が散り、まるで電流が流れているかのように全身が痺れる。

注がれていく力を受け、穴は少しずつ大きくなっていく。

そして遂に……。

「うおっ!!」

「開いた!!」

ワームホールは突然大きくなり、途轍もない吸引力で俺たちを吸い込んでいく。

「あーベルトが!」

激しい力の流動に巻き込まれ、ベルトが腰から外れ、変身が強制解除。

俺たち二人はホールの吸い込まれていった。

そして、俺たちとともに六つの物体が吸い込まれていくのを、俺は見逃さなかった。

戦いは終わった。

激しい爆音や地鳴り、町の崩壊を引き起こした戦いがまるで嘘だったかのように平穏な日々を取り戻した。

けれど、わたしたちの心にそれが訪れることは無かった。

「もう一週間、か……」

彼——島村耀太くんがいなくなってから七日が経過していた。

海上に現れた巨大な怪物。

それが爆発した時、ブラックホールのようなものが発生して、あの付近にあったものをほとんど吸い込んでいった。

その中に、耀太くんたちも……。

女神さまなら耀太くんを助けてくれる、慎司くんはそう言い、彼女と連絡を試みたが、通信は繋がらなかった。

最後の希望まで断たれてしまい、わたしたちは一気に絶望まで突き落とされた。

「りーちゃん」

突然後ろから声をかけられて、わたしは振り向いた。

そこには千歌ちゃんと曜ちゃんの二人が立っていた。

「こんな所で何してるの？」

曜ちゃんがわたしにそう問いかけてくる。

わたしは「あの時」のことを少し思い出しながら、それに答えた。

「ここはね、わたしと耀太くんが初めて出逢った場所なんだ。ヤミーに襲われてたわたしを助けてくれた場所……」

「そうなんだ……。でも、どうしてここに？」

「ここに来ればまた会えるような気がするんだ……。耀太くんに」

「もしかして、あの日から毎日？」

「うん」

根拠はない。

保証もない。

けれど、何故かそんな気がしてならないのだ。

ここにいれば、また彼がやって来る。

わたしを……ううん。今度は、わたしたちを助けに……。

みんなの心を救ってきた彼が。

「あ、そろそろ練習に行かないと……」

「そうだね……」

二人と一緒に学校に行こうとした、その時だった。

「はあああああああああああああああ!!!」

声が聞こえた。

聞いたことの無い、大きな声。

それも、何故かエコーがかかっているかのように辺りに響き渡る。

「な、何?」

「分かんない!でもなんかヤバそう!」

声が止むとすぐ後ろで何かの水に落ちる音がした。

そしてその直後。

「ざつむつつつ!!!なんで海に落ちるんだよつ!!!」

「仕方ないじゃろ。途中から無理やりこじ開けたようなもんじゃからな」
聞き覚えのある声が響いた。

わたしたちは、三人同時に海の方に振り返る。

そこには、あの日、穴の中に消えていった彼、島村耀太くんとその隣には、音信不通になつていた神子さんがいた。

「耀太くん?!」

「うん? あ、千歌ちゃん、梨子ちゃん、曜ちゃんんんんつ?!」

わたしの後ろにいた千歌ちゃんが、誰よりも早く耀太くんまで近づいて行って、彼に抱き着いた。

「帰つて来て早々、女子から熱い抱擁を受けるとは、やはりやりおるのお」

「変なこと言うなよ、女神さま」

「ホントに……ホントに耀太くんなんだよね?!」

「うん、ホントだよ」

「夢じゃないよね?」

「夢じゃないよ」

涙声になつていく千歌ちゃんを、耀太くんは優しく抱き、頭を撫でた。

次第にわたしたちも、涙が込み上げてきた。

「もう、ずっと心配してたんだから。一体何やってたの?」

「い、いやあ……実は世界を三つほど救うお手伝いをしました……なんて」
「三つ!?!」

まるで、隣町まで遊びに行ったかのような感覚でそう告げた耀太くん。

彼には終始驚かされっぱなしだ。

……けど、それが耀太くんらしい。

「みんなはこれから学校?」

「うん!ラブライブももうすぐだから、みんなで練習するんだ!」

「オツケー、ちよつと待ってて!俺、着替えてくるから!」

彼はそう言って、足早に去って行く。

神子さんも「わらわも耀太と共に行く」と彼のあとを追う。

そしてそんな二人の……いや、耀太くんの隣には、青白く光る赤い腕が見えた気がした。

平和な時間が内浦に戻って来た。

家から一歩外に出れば、町の人たちの笑い声が聞こえてくる。

とても楽しそうな声が。

けれど……わたしたちの時間は、あの日からずっと止まったままだった。理由はただ一つ。耀太だ。

あの戦いの時、全てを終わらせる一撃を放った彼は、空に現れた大きな穴に吸い込まれて消えてしまった。

慎司くんが神子さんに助けを求めると、返事は無く、最期の希望まで断られた。

その事実が、わたしたちの心を完全に打ち砕いた。

あの日から一週間、まともな練習は一度も出来ていない。

出来るはず無かった。

それでも、今日もまたこの場所ぶしに集まる。

そして、誰も一言も話さずに、一日が終わる。

そう思ってた。

「ちよーそんなに押さないでよ」

「!?!」

声が聞こえた。

初めは気のせいかと思っていたけれど、みんなもわたしと同じような反応をしているのを見ると、気のせいなんかじゃない。

「ほら、みんな待ってるんだから!」

次に聞こえてきたのは千歌の声。

そして部室のドアが開かれた。

そこにいたのは千歌たち二年生と……あの日、空に消えた耀太だった。

「えつとー……ただいま」

彼の声を聞いて、彼の顔を見て、言葉では到底表せない感情の爆発が、私の中で起こった。

そして知らず知らずのうちに、体が耀太の方に向かっていった。

勢いよく抱きしめて、耀太を押し倒す。

「うお!?痛いよ、果南ちゃん……」

そう言っているが口調はとても優しく、ちゃんとわたしを抱きとめて、頭を撫でてくれる。

「先輩、今痛いつて……!」

「あ、ああ。体の中のメダルが無くなったからな。だから、こうして果南ちゃんの温もりを感じれて、凄いい落ち着いてる」

恥ずかしい、なんて気持ちは不思議と湧いてこなかった。

それどころか、わたしの心は喜びで満たされていた。

「ふ、二人とも……」

「お、重い……」

わたしと耀太の下敷きになってしまった千歌と曜が、苦しみの声をあげた。

「ご、ごめん！耀太にまた会えたのが嬉しくてつい……」

少しだけ名残惜しいが、わたしは耀太の上から降りる。

そして耀太も、二人の上から降りた。

「全く……随分と遅い帰りでしたわね」

「大事な大事な果南をほったらかしにして、一体何をしていたのかしらー？」

鞠莉がいたずらっぽく尋ねると、耀太は少し困った表情になる。

「えっと、実は……世界を救うお手伝いをしてました……」

「世界を救うお手伝い!？」

「ははは……やっぱりみんなもそうなるよね……」

今は驚いてはいないが、そう苦笑するということは、梨子ちゃんたちは既にそれを聞かされたんだろう。

「実はあともう一つ、みんなが驚く報告をしなきゃいけないんだけど……」

「今の聞いて、さらに驚くことなんてあるんですか……?？」

「それがだな……」

「耀太ー。すまん、連れてきたぞ」

耀太の声を遮るようにやって来た神子さん。

そしてその隣には、あの人が立っていた。

「な……なんでカムイがここに!? 耀太先輩と戦って負けたんじゃ……」

「まあ、負かしたと言えば負かしたのかな?」

疑問形になる辺り、また小難しい話があるのだと、みんな理解し、それ以上聞くことは無かった。

が、今まで敵対していた彼が、全く別人の雰囲気纏って現れたのか、それはかつてわたしも味わった苦しみの所為だったらしい。

彼も、カムイさんもまた、弱さに付け込まれ、暴走させられていたんだと。

「これまでわたしがしてきたことは、決して許されることではない。だが、わたしの限りある命をかけて、この罪を償い続けようと思う」

「ってわけで……これからカムイも沼津（ぬまづ）に住むんだけど、どうか気を悪くしないで欲しい。俺からのお願いだ……!」

カザリたちの時と同じ。

自分をあれほど苦しめた相手でも、最後は許してしまう。

……わたしは、そんな優しさにも惹かれたのだけだ。

「はあ……仕方ないですね……」

「耀太さんは一度言ったら曲げませんからね」

「本当、耀太くんらしい」

「じゃあ……!」

「耀太くんが信じたのなら、ルビイたちも信じる!」

こうしてカムイさんは、この町の新たな仲間として迎え入れられた。

そして……。

そして待ちに待ったこの日が、とうとうやって来た。

ここは東京のアキバドーム。

そう、今俺たちは、ラブライブの決勝大会に来ているのだ。

「いよいよだね、千歌ちゃん……」

「うん、ちよつと……ううん、凄い緊張する……」

「うゆ……大丈夫かな……」

緊張から少しだけ体を震わせる曜ちゃん、千歌ちゃん、そしてルビイちゃん。

「心配ありませんわ。今日の為に今までずっと頑張つて来たのですから」

「そうだよ。だから自信を持って!」

「ルビイちゃん、こういう時こそ がんばルビイ! ずら!」

そんな三人を勇気づけるように言葉をかけるダイヤちゃん、果南ちゃん、花丸ちゃん
の三人。

「ザツツライト！九人が揃ったA q o u r s ……いいえ、慎司と晴也、それに耀太。三人も合わせれば百万馬力でーす！」

「それを言うなら百人力なんじや……」

「くつくつく……聴こえます。眷リトルデーモン属たちが我らの儀式ライブを望む声が!!」

さらに三人に同意する鞠莉ちゃんと、彼女の間違いを正す梨子ちゃんに、いつものように中二全開な善子ちゃん。

そんな彼女たち自身のやり取りが、彼女たちの緊張をほぐしていく。

「今までは、アアイツンクがみんなの気を紛らわしてくれてましたけど……」

「みなさん成長したってことですよ。それでも、あの言い争恒例行事いも無くなると、少し寂しいですけど」

アंकたちは、最後の戦いで自身のコアメダルを俺に託し、最期の力を暴走龍にぶつけて消えてしまった。

しかし、俺と女神さまがこの世界に戻ってきた際、タカ・クワガタ・ライオン・サイ・シャチ・コブラの六枚だけは、まるで意思があるかのように俺たちについてきたのだ。

「だな。けどきつと五人もこのライブを観てる、そんな気がする」

俺は、色の失われた六枚のメダルを見ながら、そう呟くとみんな頷く。
その顔には、もはや不安は感じられなかった。

「よおーし！じゃあ行くよ！」

「1！」

「2！」

「3！」

「4！」

「5！」

「6！」

「7！」

「8！」

「9！」

普段なら9で終わるAqoursのライブ前のコール。

よく見ると、いつもは九人で円になるはずが、今日は円が完成していない。

「耀太くん！慎司くん！晴也くん！」

千歌ちゃんに呼ばれて、俺たちはやっとその意味を理解する。

慎司と晴也が動き、その輪に入っていく。

「耀太先輩（さん）」

そして俺も二人の間に立ち、指を繋げて0を完成させる。

——10!

「A q u o u r s ……サンシャイン!!」

戦いの末、みんなが守り抜いた“イマ”

そんな“イマ”のなかで、彼女たちは輝く。

——ゼロからイチへ

イチから000へ！——

卒業と想い出と輝きの物語

カムイとの戦い。

そしてラブライブ。

全てが終わった。

いや、一つだけやり残していたことがある。

「耀太先輩、何してるんですか？」

屋上から青空を眺めていると、背後から名前を呼ばれた。

振り向くと、そこには共に戦った二人が立っていた。

「ちよつとな。今までのことを思い出してたんだ」

「そういうことでしたか」

「色々ありましたよね。部員勧誘の時は特に大変でしたね」

「そうだな……」

頭下げたり、襲われたり、殴られたり、殴ったり。

……ある意味では、あの時期が一番大変だった気がする……。

「耀太くーんー！」

再び俺を呼ぶ声。

今度は女の子——千歌ちゃんだ。

俺たち三人は、中庭の方に目を向ける。

そこにはペンキで顔を汚し、手を振る千歌ちゃんと、同じく顔の汚れた八人の姿があった。

しかも、よく見ると校舎も汚れている……いや、あれは文字が書かれているのか。

所々に綴られた感謝の言葉。

「つたく……学校、こんなにしちゃって良かったのー？」

「やってしまったものは仕方ありませんわ。それより耀太さん、慎司さん、晴也さん。あなたたちも何かしたらいいかがですか？」

おっと、まさかダイヤちゃんからそんな言葉が聞けるとは。

「そうだな……慎司、バースドライブ貸してくれるか？」

「何をするんです？」

「それは見てからのお楽しみ！」

俺はバースに変身してカッターウイングを展開する。

刷毛^{はけ}を借りるのに一度、九人の所まで降りると、

「ちよつと刷毛を……!」

ルビイちゃんが刷毛を落とし、嗚咽を漏らし始めた。

「ダメだよルビイちゃん。最後まで泣かないって、みんなで約束したんだから」
ルビイちゃんをなだめる花丸ちゃん。

そして他のみんなも、寂しさを含んだ笑みを浮かべている。

そんな彼女たちから刷毛を一本ずつ借り、再び飛翔する。

何をしようとしているのか、と疑問符を浮かべながら慎司や晴也、そしてみんなが俺を見る。

『み・ん・な・あ・り・が・と・う・!』……」

千歌ちゃんが読んだのは、俺から彼女たちへ感謝の気持ちの言葉。

この世界で、大切な思い出をくれたみんなへの。

「それじゃ、俺も!」

屋上に戻り、ドライバーを慎司に返却すると、慎司もまた何かを書き始めた。

『よ・し・こ・あ・い・し・て・る』……あはは」

「な、なななな、何を書いているのよ、シン!!」

「ソーグッド!素敵な告白ね!」

梨子ちゃんが苦笑しながら読み上げると、善子ちゃんは顔を真っ赤に染め上げた。

「何雰囲気ぶち壊してんだよ」

「良いじゃないですか、今日くらい」

『『今日くらい』って言いますけど、慎司さんはいつも善子さん大好きオーラ全開じゃないですか』

「だって大好きだもん。仕方ない」

そう言つて胸を張る慎司。

慎司の自分に正直なところは羨ましいと思う。

「おうおう。わらわが大変な思いをしている時に、随分楽しそうなおことをしておったんじゃない」

何も無かった場所から現れたのは、女神さまとカムイ。

あの事件が終息し、元のような仲の良い姉弟に戻ったようだ。

「楽しそうって……まあ、楽しいは楽しいけどさ」

「ここに来ると、わたしの行いがつくづく愚かだったと思い知らされる。彼女たちの笑顔は、どこかあの少女に通ずるものがある……」

大事な物を見失っていたカムイだったが、もうそれも昔の話。

今の彼ならば、二度と道を踏み外すことは無いだろう。

「それが分かれば良いんだ」

「ところで、これからのことなのだが、わたしは現世で——この世界でコアメダルの研究をしようと思っている。神の力はもう無いが……それでも、いつか必ず彼らを復活させる。それがわたしに出来る数少ない贖罪の一つだと思っている」

「そつか……で、どうする女神さま?」

「何のことじゃ? わらわは忙しいんじや。人間一人がしていることに口出ししている暇など無い」

興味なさげな態度を演じる女神さま。

こういう時のテンプレ展開だな。

「それよりぬしたちとの約束を果たす時が来た」

「約束?」

何のことかと、三人揃って首を傾げる。

そんな俺たちを見て、彼女はあきれ果てて垂れる頭を抱える。

「初めに言っただじやろ。無事メダルを集められたら願いを三つ叶えると」

「あ、忘れてた」

そういや言ってたな、そんなこと。

本当に初めのこと過ぎたのと、色々なことがあり過ぎてすっかり失念していた。

「でも、メダルなんてほとんど砕いちやって……残ったのも、六枚だけだし……」

「構わん。元々天界にとつても不要な物。無くなるに越したことは無い。それにぬしらは世界を救ったのじゃ。何の見返りもないのは嫌じゃろう？」

俺は無理矢理連れてこられたうえに、欲しい物なんてもう無いし……。

それに見返りを求めたら、それは正義じゃないって言葉も、仮面ライダーにはあるしな。

「ほう……欲しいものは無いか。確かに今のぬしは、以前は持っていなかったものをたくさん持っているからの。例えば……そう、恋人じゃな」

「いや、そこ掘り下げるところじゃないからな」

「ま、今すぐじゃなくても構わん。気が向いたらいつでも言うがいい。わらわに出来ることならな」

「じゃあ俺も願いを——」

その後、慎司が報酬一億円の願いを叶え、その更に後に三人の口座に一億円が振込まれたのはまた別のお話。

「卒業証書授与。——」

浦の星女学院、そして共学化したのちの浦の星学院としての最後の卒業式。

理事長である鞠莉ちゃんの手から、俺を含む卒業生一人一人に卒業証書が授与されて

いった。

生徒から生徒へ、なんて実におかしな光景なのだが、不思議なことにそれが自然であるように見える。

「島村耀太さん」

「はいー」

名前を呼ばれた俺は、大きな声で返事をして壇上に上がる。

「卒業証書、感謝状、島村耀太殿」

卒業証書に続いた感謝状という言葉に、俺は思わず目を見開く。

困惑する俺の様子を見て、鞠莉ちゃんとダイヤちゃんはクスリと笑い、読むのを続けた。

「右の者は、高等学校の課程を全て修了するとともに、仮面ライダーとして本校とこの町を守り続けてきたことをここに証明し、感謝とともに表彰します。私立浦の星学院理事長及び全校生徒一同。代表、小原鞠莉」

わき起こる拍手喝采。そして聞こえてくる感謝の言葉。

みんなの想いが心に響き、感情が昂っていく。

「はあ……こんなの反則じゃない?」

「あれー? 耀太ってば、もしかして泣いてるのー?」

「泣いてないよーちよつと目にゴミが入っただけ……」

熱くなる目頭と溢れる涙。

押し殺すことのできない嗚咽が、マイクを通じて体育館全体に広がっていく。

「本当に素直じゃないんですから」

何とか証書を受け取り、その後も次々と証書は授与された。

「閉式の言葉。黒澤ダイヤさん」

「はいー」

全ての証書が卒業生に手渡され、その他もろもろの挨拶も終わった。

司会は、そのマイクを生徒会長であるダイヤちゃんに譲る。

「今日この日、浦の星学院はその長い歴史に幕を閉じることになりました。でも、わたしたちの心にこの学校の景色はずっと残っていきます。それを胸に新たな道を歩めることを……浦の星学院の生徒であったことを誇りに思います。ただいまをもって、浦の星学院を——

——閉校します！」

最後の挨拶が終わると、ダイヤちゃんの横にいた鞠莉ちゃんがラブライブの優勝旗を

かざした。

「わたしたちはやったんだ！」

「ラブライブで!!」

「優勝したんだ!!!」

戦いが終わった。

ラブライブが終わった。

そして今度は、浦の星学院が終わりを迎えようとしていた。

「おお……!」

扉を閉める為に教室までやって来た俺たち。

そこで見たのは、千歌さんたち A q u o r s が優勝した瞬間を描いた絵。

「凄いですね、この絵」

「本当によく描けてるわ」

それはもう見惚れてしまうほどに。

「みんなで思い出しながら描いたんだよ!あの時、わたしたちから見えてた千歌たち、輝いてたな、本当。……目が開かないくらい……!」

ステージの上で輝いていたみなさんの姿は、今でも瞼の裏に焼き付いている。

会場に響く歓声、そして光輝く青色。

まるで、光の海のようなだった。

「わたしたちにも見えてたよ。輝いてるみんなが……。会場いっぱい広がる、みんなの光が……!!」

視覚が捉えた光……普通の人ならそう言うだろう。

そして以前の俺でも……。

けれど、今は……。

「ええ。A q o u r sのみなさんも、会場のみなさんも——みんな、とても輝いてました」

今は違う。

みんなの想いが、願いが、あの場所を眩く、暖かい光で包んでいた。

確かにそう感じたんだ。

「俺はA q o u r sの全部を知りません。千歌さんが……。みなさんがどれだけ大変な想いをしたのか。どんな想いでここまで辿り着いたのかも。途中参加だったから……。けど……。いえ、だからこそ、俺凄く嬉しかったです。みなさんと……。千歌さんと同じものを感じられたことが……」

「晴也くん……」

「本当にありがとうございますございました——っ!!」

俺は深々と頭を下げる。

いくら感謝してもしきれないものがある。

「晴也くん、顔を上げて」

顔を上げると、あの時と同じ、とても優しい笑みを浮かべる千歌さんがいた。

「お礼を言うのはわたしたちの方よ」

「そうだね。初めての地区予選の時も、わたしたちの知らない所で、ヤミーからわたしたちを守ってくれてたんだしね」

「今わたしたちがここにいられるのは、晴也くんのおかげなんだよ。晴也くん、もちろん耀太くんも慎司くんも、三人が守っていてくれたから、わたしたちは輝きを見つけないとが出来た。だから——」

——ありがとう!

三人からの感謝の言葉。

それを聞いた瞬間、視界が霞み、熱い何か頬を伝った。

先輩たちと一度別れ、おれたち一年生も教室の扉を閉める為に各教室を回っていた。

そしてこの階は図書室を残すのみとなった。

それらは、また別の場所でたくさんの人に読まれることだろう。

残ったのは、本が入っていない本棚と花丸が座っていたカウンター。

もうここに本を借りに来る人がいないんだと、否が応でも思わされる。

「四月からは別の……それも慎司くんたち以外の男の子もいる共学の学校に通うんだよね……」

「頭では分かっているけど、やっぱり少し怖いずら……」

「ルビイもだよ……。でも、これまで花丸ちゃんたちとスクールアイドルをやってこれたんだもん。だから大丈夫かな!」

この三人の中で……いや、恐らくAqoursの中で一番成長したルビイ。

一年前までの彼女からは、こんな頼もしい言葉はきつと聞けない。

「ま、その辺は安心しとけ。お前らリトルデューモンに何かあったら、おれのヨハネご主人さまが悲しむからな。そんなことにならないよう、ちゃんと守ってやるよ」

「慎司くん……」

「誰がアンタのヨハネよ!それに善子!!……あれ?」

花丸が、ルビイが笑い始める。

つられて俺と善子も。

そう、終わるわけじゃない。

ここではない別の場所で、これからも一緒にいられるんだ。

図書室を出て、最後はドアを閉めるだけ。

ルビィと花丸がのぶに手をかけ、俺はドアを直接押せるように手を当てる。

「善子ちゃん、一緒に閉めるずら」

「嫌よ」

「一緒に閉めるずら」

「だから嫌だってば!」

「一緒に閉めるずらっ!!!」

ドアを閉めたくないと駄々をこねる善子に、花丸が声を荒らげる。

十六年間一緒にいて、一度も聞いたことがなかった声。

しかし、どこか弱く、そして脆く感じられた。

「お願いだから……」

「……分かったわよ」

そして先程とは真反対に、小さくなった花丸の声を聞き、観念した善子。

三人がドアをスライドさせ、俺も押して動かした。

「今までまるたちを守ってくれて、ありがとう……」

「ありがとうね……」

感謝の念とともに扉は閉じられ、俺たち以外誰もいない廊下にその音が響いた。

バツタカンドロイドが俺のもとまで戻り、缶へと姿を変えた。
「また盗撮ですか？」

「気付かれないように様子を探れって言ったのはダイヤちゃんじゃない……」
「冗談ですわ」

クスクスと笑うダイヤちゃん。

揺れる画面、響く怒号、かけられた冤罪……。

あの時の出来事あくむはもう思い出したくない……。

「大丈夫、耀太？ 顔色が悪いよ」

「い、いや、大丈夫……。それより鞠莉ちゃんだけど、やっぱり泣いてるみたいだよ」
「そうだよね……」

無理もない。

あれだけ頑張ったのに、結局廃校は阻止出来なかつたんだ。

想い出の詰まったこの学校の最期の日に泣くなと言うのは酷いというものだ。

「でもいつまでもあんな顔をさせてるわけにはいかないよ。それに今日の借りも返さな

いよ」

「借り?」

俺たち三人は、鞠莉ちゃんが一人泣いているであろう理事長室に向かい、そのドアをノックした。

「鞠莉ちゃん、いる?」

「よ、耀太!?!ちよ、ちよつと待つてて!」

ほんの数十秒だけその場で待ち、鞠莉ちゃんが「どうぞ」と言ってから扉を開いて部屋に入った。

「もうそろそろ閉めようと思ってたのだけど、どうかしたかしら?」

「実は鞠莉ちゃんに渡したいものがあってね」

「渡したいもの?」

鞠莉ちゃんが疑問符を浮かべると、一旦俺は後ろに下がり、ダイヤちゃんと果南ちゃんとの二人が前に出る。

「卒業証書、感謝状。小原鞠莉殿。右の者は、生徒でありながら本校の理事長として」

「尽力してきたことをここに証明し、感謝と共に表彰します。浦の星学院全校生徒一同。代表、松浦果南」

「黒澤ダイヤ」

「島村耀太」

鞠莉ちゃんの表情が曇ったのは、決して気のせいではない。

証書それを受け取ることは、この学校で過ごしてきたことの終わりを意味するのだから。

「受け取って、鞠莉」

「大丈夫ですわ。これを受け取ったからと言って、みんなの手を離れたわけじゃありません」

「そうだよ。わたしたちはいつも繋がってる。どんなに離れて、見えなくなっても」「いつか……」「いつかの明日」で、また一緒になれる」

二人の手から、鞠莉ちゃんへ卒業証書が手渡される。

そしてもう一つ。

「卒業記念品贈呈」

「え?」

また二人が後ろに下がり、俺が鞠莉ちゃんの前に立つ。

「手を出して」

「()うっ?」

鞠莉ちゃんの手を包み、その手にあるものを握らせた。

手を離すと、鞠莉ちゃんは手を開いてそれを見た。

「()れ……」

「カザリのメダルだよ」

カザリの意志が宿っていたライオンのコアメダル。

その色は褪せて灰色になり、その意識も力とともに既に消失してしまっていた。

「もうアイツの意識は無いけれど、こっちに戻って来た時、俺たちと一緒に戻って来たみたいなんだ。だから鞠莉ちゃんが持つてて。アイツが帰ってくるその日まで」

途端に、鞠莉ちゃんの瞳から涙が滝のように流れだした。

「ありがとう……ありがとう……!!」

泣きながらハグしてきた鞠莉ちゃん。

俺が彼女の背に手を回すと、果南ちゃんとダイヤちゃんも鞠莉ちゃんを抱きしめた。

泣き止んだ鞠莉ちゃんは、いよいよこの場所を終わりにすることを決めたようだ。

俺たち三人が部屋を出た後、最後に鞠莉ちゃんが廊下に出て、

「さよなら……」

その言葉とともに、扉を閉じたのだった……。

学校の戸締りが終わり、みんなが校門前に集まった。

これで本当に最後。

浦の星学院は終わりを迎える。

「それじゃあ閉めるよ」

千歌ちゃんの言葉にみんなが頷く。

そして門に手をかけ、動かしていった。

が、門は閉まりきる直前で止まってしまふ。

「千歌ちゃん？」

千歌ちゃんを見ると、その体は小刻みに震えていた。

「最後は……笑顔で終わろうって決めたんだ！……泣くもんか……泣いてたまるか……
!!」

必死に涙を堪えようとしている千歌ちゃん。

最後の最後で、今まで我慢出来ていた感情が、一気に込み上げてきたのだろう。

「千歌ちゃん」

「一緒に閉めよ」

曜ちゃん、そして梨子ちゃんが、千歌ちゃんに言葉をかける。

そして遂に、浦の星学院はその長い歴史に幕を下ろしたのだった。

卒業式、そして閉校式から数日が経った。

俺は、鞠莉ちゃんを見送り、ダイヤちゃん、そして果南ちゃんとともに出発した……はずだった。

『ごめん耀太！忘れ物しちゃったから、ちよつと待ってて！』

と、果南ちゃんとダイヤちゃんは元来た道に戻り、俺は一人駅に残されてしまった。仕方ないので、果南ちゃんが戻って来るまでネットでも見てみようか、とスマホを取り出そうとポケットに手を入れると、出てきたのはスマホではなく、タカメダルだった。赤かったそれは、カザリたちのメダル同様色を失い、灰色になっている。

残った六枚は、封印するまでもない状態である為、俺たちに譲渡されたのだ。今俺が持っているのはこれ一枚だけ。

クワガタは千歌ちゃん、ライオンは鞠莉ちゃんに、サイとシャチはルビィちゃんに譲り、コブラは再びダイヤちゃんに返還した。

紫色のコアメダルは全て消滅し、俺の体は徐々に人間のものへと戻っていった。カムイとの戦いで無くしてしまった金色のコアメダルは未だ見つかっていない。

コアメダルが悪用される心配は無い。

「耀太くーん！」

そんなことを考えていると、名前を呼ばれた気がした。周りを見回すと、一人の女の子が手を振っている。

千歌ちゃんたちのクラスメイト、いつきちゃんだ。

いつきちゃんは、俺の傍まで走って来た。

「いつきちゃん、どうしたの?」

「耀太くんにどうしても来て欲しい場所があるの。だから一緒に来て」

「え?でも俺は果南ちゃんたちを……」

待つてるから、そう言おうとしたが、いつきちゃんは強引に俺の手を引いて、その場所から引き離されてしまった。

そして連れてこられた場所は……まさかの浦の星学院だった。しかも、校門が開いている。

「いつきちゃん、これは……?ってあれ?!いつきちゃん!」

いつの間にかいつきちゃんは姿を消していた。

一体どこに……。

「あ、耀太先輩!」

また名前を呼ばれた。

今度は男の、それもいつも聞いていた声だ。

「耀太さんもここに連れてこられたんですね」

慎司、そして晴也がそこにいた。

晴也の口ぶりから、二人もむつちゃんたちにここまで引つ張られてきたのだろう。

「一体何なんでしょうね……」

「うーん……でも、ここが開いてるってことは、入ってることなのか？」

「迷ってても仕方ないですよ。ほら先輩、晴也ちゃんも行くぞー！」

二人で悩んでいると、何も考えていなそうな顔で、慎司が校内に進んでいく。

「……それもそうですね」

「だな」

俺と晴也も腹を括り、慎司の後についていった。

そこからは、まるで誘導されているかのように、迷うことなくある場所まで辿り着いた。

「体育館？」

晴也がそう呟くと、とても懐かしいことを思い出した。

「そう言えば、千歌ちゃんたちのファーストライブはこの体育館だったな」

「あ、その話知ってます。千歌さんから聞きました。あの時は酷い天気で停電してしまっただすよね？」

「そうそう。おまけに駐車場の整理をしてる時に大量のヤミーが来ましたよね」

「ああ……」

一年前のことなのに、どこか昔のことにように思える。

そんな戦いの記憶を再びしまい、俺たちは体育館に足を踏み入れた。

中に入ると、生徒たちが俺たちを囲むように立っていた。

その中心にいたのは、俺たちをここに連れてきたいつきちゃん、むつちゃん、よしみちゃんの三人。

「……これはどういうこと？」

「みんな」に頼まれたの。三人をここに連れて来てつて」

「みんな？それってここにいるみなさんのことですか？」

「うーん……半分正解かな？」

「半分つて……先輩、勿体ぶらないで教えてくださいよー」

「そろそろ良いかな」

「？」

これがアニメや漫画なら、頭の上にドデカい疑問符を浮かべているように見えるだろう。

そんなリアクションをする俺たちを他所に、そこにいた全員は話を進めていった。

「!？」

突然、体育館の灯りが落とされ、舞台などが開演される時の「ブー」という音が鳴る。

何事かと驚いていると、生徒たちが分かれるように移動し、さらに舞台幕が開いていった。

すると、壇上に立つ彼女たちの姿が現れた。

千歌ちゃんを始めとする二年生や花丸ちゃんたち一年生はもちろん、見送ったはずの鞠莉ちゃん。そして「忘れ物をした」と、俺を残して戻って行つた果南ちゃんとダイヤモンドちゃんまで。

「……本当にどういふこと？」

開いた口が塞がらない。

茫然と立ち尽くす俺たち。

そんな俺たちとは真逆で、千歌ちゃんたちは笑みを浮かべ、そして言葉を紡ぎ始めた。「耀太くん！初めて出逢つた時のこと、わたし今でもはっきりと覚えてる。思えば、それが全ての始まりだった」

「ここに来るまでにたくさん大変なことがあつたよね」

「マルたちが危ない目に遭つた時には」

「いつも駆け付けてくれて」

「守ってくれて、大事なことも教えてくれたわ」

「わたしたちが何かに負けそうになる度に」

「何度も奮い立たせてくれて」

「一番近くでチアーアップしてくれた」

「そんな三人の為に、わたしたちみんなでこの歌を、この曲を創りました！輝きを追いかけてきたわたしたちの物語!!!」

それは九人の少女と

三人の少年と

人ならざる者たちの物語

決して交わることの無かった輝きが一つになって、ヒカリ輝くキセキを起こした

そしてその物語は終わることは無い

それぞれが新しい場所で

新しい夢を追いかけて

物語は続いていく

いつまでも、ずっと——

ラブオーズ外伝

仮面ライダーアークア

世界の平穏を脅かした大厄災。それは、仮面の戦士と人の心を持つ異形たちにより討ち払われた。

彼らの活躍で世界の平和は守られた……はずだった。

それは、人々が眠りについた夜の世界での出来事だった。

星々が輝く空の下、空間がねじ曲がってワームホールが発生し、そのホールから何者かが世界を覗く。

「この夜景……間違いない。十年前と同じ景色。どうやら時間移動に成功したようね」

ホールから姿を現したのは、人間……ではない。

透き通るような体。クラゲを彷彿とさせる頭部に、更にそこから伸びる四本の触手。

唯一、人間らしいのは体のフォルム。グラマラスと言って差し支えない体を持つ彼女は、ある種の人間にはウケることだろう。

「世界を越えれば、流石にヤツでも追つては来れないはず……。今度こそ世界を海に沈め、このジェパルが支配する魔海族の理想郷を築き上げるのよ！」

闇の中でただ一人、ジエパルはその赤い瞳に宿した邪悪を炎の如く燃やし、哄笑する。この世界は、再び滅亡の危機を迎えようとしていたのだった。

コアメダルを巡る戦いが終結し、数ヶ月程の時間が経過した。

世界の危機は過ぎ去り、俺こと佐藤晴也は、前の世界と同じくらい……いや、以前よりも充実した毎日を過ごしていた。

「充実した毎日ねえ……本当にそうかい？晴也ちゃんよ」

沼津の喫茶店で、俺と相席で座っているのは宮沢慎司さんは、かつてグリードやヤミーたちと戦った仲間の一人だ。

二年生に進級した今でも、そのゲキレッツな善子さんLOVEは健在だ。寧ろ酷くなっている気がする。

「本当ですつて。ていうか、心読まないでくださいよ……。女神さまじゃないんですから……」

「心読むなって、そう言っていること自体、何か引つ掛かりがある証拠だぞ？」
分かっているのにわざわざ口にする辺り、本当に慎司さんらしい。

わざとらしいこの人の反応に俺は嘆息した。

「溜息吐いてると、幸せが逃げちまうぞ」

「誰の所為だと思ってるんですか……」

「まあまあ。んで、実際どうなの？千歌先輩と何か進展あった？」

彼がそう尋ねたのは、俺が高海千歌さんに好意を抱いているからだ。

けれど……。

「それが……残念ながら全く……」

慎司さんは「だよな……」と、苦い笑いを浮かべた。

俺が彼女を好きになってから、既に半年以上が経過している。

その間、一切のアプローチは出来ていない。

カムイさんとの戦いで手一杯だった……なんて言い訳をしているが、耀太さんのよう

に想いを伝えられる時間はあった。

出来なかったのではない。しなかったのだ。

「このままじゃいけないって、分かっているんです。でも、俺の気持ちを伝えたら、俺たちの関係がおかしくなってしまうかもしれない。そう考えたら怖くなってしまつて

……」

「……そうか」

慎司さんは一息吐き、コーヒーを一口含む。

俺の意気地の無さに幻滅してしまったのだろうか……。

「まあ、晴也ちゃんはどういうことは初めてなんだろう？仕方ないさ。これは晴也ちゃんの問題だから、俺から口出しは出来ないけど、相談ならいつでも乗ってやるし、応援もする。だから、諦めるなよ」

俺の肩を叩く慎司さんは、いつもとは全く違う雰囲気を感じていて、俺よりもずっと「大人」のように思えた。

「慎司さん……。 慎司さんってそんな顔出来たんですね……」

「どういう意味だ、それ！まるで、俺がいつもふざけてるみたいじゃねーか！」

「いつもふざけてるじゃないですか」

反論する「いつもの彼」に、思わず笑ってしまう。

やはり、慎司さんは慎司さんだ。

「でも……。ありがとうございます」

「おう！んじや、早速千歌先輩をデートに誘おうぜ」

「で、デート!?ちよつと急すぎじゃないですか……?」

「今までずつと何もしなかったんだろ?それに『このままじゃいけない』って思ってるんだろ?なら、いい機会なんじゃないか?」

慎司さんにそう言われて俺はハツとする。

そうだ……このままじゃダメなんだ。このままじゃ、ずっと千歌さんに想いを伝えられない。そんなの絶対に嫌だ。

「すいません、慎司さん。今日はこれで失礼します」

「おう、健闘を祈ってるよ」

千歌さんをデートに誘う、そう決めた俺はすぐに行動に移すべく、慎司さんに断つて喫茶店を後にした。

「晴也ちゃん……しれつと会計押し付けて行ったな……」

慎司さんの激励を受けてから一週間が経った。

この一週間の間、俺は千歌さんをデートに誘う為に乏しい知識を絞り出し、どうにか計画を立てて彼女を誘うことが出来た。

今は待ち合わせ場所である沼津駅前で千歌さんを待っている。

身なりは出来るだけ整えてきた。

現在時刻は九時四十七分、待ち合わせ時間の十三分前だ。

千歌さんが来た時に焦らないよう、深呼吸をしていると、「晴也くん！」と俺を呼ぶ声が聞こえた。

声の主はもちろん、待ち人である千歌さんだ。

「ごめんね、晴也くん、待たせちゃって」

「いえ、俺もさつき来たばかりですから、大丈夫ですよ」

「ありがとう。それじゃあ、早速映画館へレッツゴー！」

「はい！」

俺たちが最初に足を運んだのは、千歌さんも言った通り映画館だ。

現在、公開されている映画の中に、スクールアイドルを題材とした映画がある。今日観に来た映画はそれだ。

「楽しみだなあ、『スクールアイドル・ザ・ムービー』！ね、晴也くん！」

「そうですね。実は、俺もこの映画のことが少し気になってたんです」

「あ、やっぱり晴也くんもだったんだ。わたしもすごく気になっててね、特に今回はこの映画の為の歌が凄いの！もう何回もPVで聴いちゃったんだ……」

「それ分かります！俺のアカウソの再生履歴もそれで埋まっちゃって」

「ふふふ……晴也くん、変わったね」

「え？」

「初めて会った時は、ガチガチに緊張してたのに、今ではこんな風に話せるようになって」

「……千歌たちのおかげですよ。千歌さんたちと一緒にいて、俺の女性嫌いも少しずつ良くなって行って、ラブライブ優勝も見届けることが出来た。本当に感謝してます」

そう伝えると、千歌さんは少し顔を赤く染め、恥ずかしそうに頬をかいた。

「そ、そこまで言われると照れちゃうな……。でも、わたしたちが優勝出来たのは、晴也くんたちのサポートがあつたからだよ。こちらこそ、ありがとう」

俺に向けられたその笑顔は、とても眩しくて、そして愛おしく思えた。

やはり、俺はこの人のことが好きなんだ。

そう、再認識させられる。

そんな俺を現実に引き戻したのは、劇場への入場アナウンス。

俺たちは、購入したチケットを手にし、映画の上映されるシアターに入ったのだった。

上映が終わった頃、既に時刻は正午を過ぎていた。

昼食をとる為、近くのファミレスに訪れたのだが、映画を観た俺たちの興奮は治まる事を知らず、料理が運ばれてくる間、先程の映画の感想を語り合っていた。

「あの映画、本当に面白かったね！」

「ええ！ステージの上に立つ煌びやかな姿だけでなく、普段の彼女たちの姿！そして苦悩を抱え、それでもなお立ち上がる！なんだか、他人事じやないようなそんな気持ちになりました！」

「うんうん！わたしもそうだよ！まるで、今までわたしたちが走ってきた道を見てるみたいで……思い出して少し泣いちゃった」

およそ百分という時間の中に詰め込まれた、スクールアイドルたちの姿。彼女たちの世界を疑似体験した俺たちの語らいは、料理が来た後もとどまることは無かった。

料理を全て平らげた俺たちは、ファミレスに長居することは出来ない。まだ語り合っていたという思いをなんとか抑え、会計を済ませた。

「ねえねえ、晴也くん！次はカラオケ行こうよ！映画観てたら、千歌、歌いたくなっちゃった」

「カラオケかあ。良いですね、行きましょう！」

「やったー！」

次に向かったのは、千歌さんのリクエストに応えてカラオケ。

一時間程の待ち時間があつたが、近くのゲームセンターで時間を潰していると、あつという間に一時間が経っていた。

「晴也くん！千歌と勝負しよう！」と一言から始まったカラオケバトル。

当然ながら結果は千歌さんの全勝。だが、圧倒的な差を付けられたということは無く、点数自体は僅差だった。

……俺も少し歌の練習してみよう、そう密かに心に決めた。

一日中遊び倒し、日も傾き始めてきた。

まだ西の空の端が赤くなり始めた程度だが、俺も千歌さんも遊び疲れてきていた。

「はあ………楽しかったー！」

「俺も凄く楽しかったです。また今度、一緒に遊びましょう」

「うん！」

もうすぐ終わってしまう千歌とのデート。

今日のデートは、俺の想いを彼女に伝える為に計画したものだ。

だが、いざ言葉にしようとする、やはり、腰が引けてしまう。

……いや、何を考えてるんだ。決めたじゃないか。この想いを伝えるって。

好きだと伝えるんだって。

「……千歌さん」

「どうしたの？」

もう一度、俺は覚悟を決めて彼女の名前を呼んだ。

首を傾げる千歌さんを見据え、言葉を紡ぐ。

……はずだった。

「きやああああああ!!」

突如として悲鳴が響き渡り、その数秒後に空が何かに覆い尽くされた。

「な、何?」

「千歌さん、俺から離れないで下さい!」

「う、うん……」

俺は千歌さんに近づき、絶対に離さないように肩を抱く。

そして起きた第二の異変。空を覆った何かから雨のように液体が降り始めた。

「雨……?」

「……ただの雨じゃ無さそうです」

「え……?」

悲鳴が聞こえた先に、空を覆う何かの発生源と思しき怪人が佇んでいた。

クラゲを彷彿とさせるその怪人からは、言うまでもなく邪悪な雰囲気を感じていた。

「お前、何者だ!?!」

「わたしはジェパル。この世界を統べる女王……」

ジエパルと名乗ったクラゲ怪人は、魚類のような頭を持つ怪人を何体も召喚した。

俺たちはあつという間に囲まれてしまい、逃げ場を失ってしまう。

「その為に、邪魔なあなたたち人間には消えてもらおうわ」

ジエパルに指令を下された怪人たちは、一斉に俺たちに襲い掛かって来た。

変身しようにもこれでは間に合わない。それでも、俺は千歌さんだけでも守り切ろうと、彼女の盾になるように抱きしめる。

目を閉じ、暗闇の中で待っていた絶望と死。しかし、それらが訪うことは無く、聞こえてきたのは銃声と怪人の悲鳴らしき音だった。

「全弾命中、ヘッドショット！危機一髪、だな」

目を開けて視界に確認出来たのは、頭が吹き飛び絶命した怪人たちと、バスターを構えた仮面ライダーバース。

そして、部下が倒されたことで、驚愕の表情を見せるジエパルだ。

「慎司さん!? 一体どうして……」

「千歌先輩を守る晴也ちゃん、格好良かったぜ!」

「はあ……全部見てたんですね?」

「まあな。みんな! 千歌先輩たちのこと、頼んだぞ!」

バースの号令に答えたのは、カンドロイドたち。そして彼らは、梨子さんたちスクー

ルアイドル部のみなさんに、月さんを加えた六人を守っていた。

「……後で話は聞かせてもらいますからね」

「仕方ねーか。ま、今はアイツをぶっ飛ばす方が先だな！」

俺はバツクルを腰に当てて、アクアドライバーを装着する。

そしてバツクル部分の水車を水のエネルギーで回転させ、仮面ライダーアクアへと変身した。

「仮面ライダーアクア……!?!」

俺が変身すると、彼女はアクアの名を憎々しげに口にする。

「アイツ、晴也ちゃんのこと知ってるみたいだけど？」

「俺の知り合いにあんな怪人いませんよ」

何故、アクアの名前を知ってるのか、ジエパルに聞きだしたいところだが、千歌さんたちを守ることが先決だ。

俺とバースはジエパルに対し、先制して連携攻撃を仕掛けた。

攻撃は捌かれてしまうが、確実にジエパルを後退させていく。

「へっ！あんだだけ派手に登場したクセに、大したこと無いな」

「調子に乗るな！仮面ライダー!!」

アクアの姿を見た直後から奴から放たれていた怒気が、バースの挑発で爆発し、頭部

の触手が四方八方に広がって電撃を発した。

電撃は俺たちの体を焼き焦がし、ダメージを与えると共に麻痺で体の自由を奪う。

「仮面ライダーアクア……！わたしたち魔海族を滅ぼしたあなただけは、絶対に許さない！！」

麻痺でまともに動けない俺は、魔海族と名乗ったジエパルの攻撃をもろに受けてしま
う。

電気を纏わせた拳が、何度も俺のボディに打ち込まれた。

その攻撃は、今まで戦ったどの敵よりも重く、鋭い。

まるで、体を貫かれたかのような激痛に襲われ、瞬く間に変身が解除されてしまった。

「晴也ちゃん!?……この野郎!!」

バースは怒りに身を任せ、ジエパルに殴り掛かろうとするが、突然、彼の動きは鈍く
なる。

攻撃は簡単に避けられ、カウンターのハイキックを喰らってしまった。

吹き飛ばされたバースは、あっさりと変身が解除されてしまう。

「嘘……シンの変身があんなに簡単に……!?!」

その事実には善子さんはもちろん、俺や慎司さん本人も驚きを隠せなかった。

「どういふことだ……。そんなにダメージは受けてないはず……」

そして異変は突然訪れた。健康体そのものと言って良い彼が、悶え始め、血を吐いたのだ。

「何だ……これ……」

「毒よ。今もこうして振り続けている雨……これはわたしの可愛い子供たちが作り出している毒……。この毒を浴びた人間は、徐々に体を侵されて一週間程で命を落とす。彼のように血を吹き出してね」

「この程度の毒なんて……気合いで……ゲホッゲホッ……」

膝を地につけながらも、慎司さんは立ち上がろうとするが、再び血を吐いてしまう。

慎司さんが血が吐き出した血の量は尋常ではなく、彼は溜まった血の中に倒れる。善子さんは彼を抱き起し、自身の膝に乗せた。

「シン！しっかりしなさい！シン!!」

「無理はしない方が良いわ。彼には、このわたしの毒を打ち込んだのだから。子供たちの毒と違って、わたしの毒は強力なの。そうね……一日も持てば大したものかしら」

ジェパルは邪悪な笑みを浮かべ、彼に死を告げた。

その口ぶりから、毒が全身に回るのにそう時間は掛からないだろう。

「アクア……あなたの所為で彼は死ぬのよ。仲間が死にゆく様をその目に焼き付けなさい。ふふふ……はっはっはっはっ!!」

悪魔のような笑い声と共にジエパルは姿を消した。

やっと手にした平穩は、どこからともなく現れた狂気により崩壊してしまつたのだつた。

ここは市内の病院。慎司さんは今、集中治療室で治療を受けていた。

ただごとではないという院内の雰囲気、そして医師や看護師たちの顔色から、状況が良くないことは嫌というほど伝わってくる。

千歌さんたちも、言葉では到底表せない程、落ち込んだ様子だつた。

『一日も持てば大したものね』

『あなたの所為でアイツは死ぬの』

ジエパルが去り際に残した言葉が、先程から何度も頭の中で響いていた。

早く彼女を見つけ倒す、あるいは解毒剤を作らせなければ、慎司さんは本当に死んでしまう。

慎司さんだけじゃない。千歌さんたちも毒の雨を浴びてしまっている。あの雨が、どれだけの範囲に降つたのかは分からないが、いずれ世界中に毒の雨を降らせるつもりだろう。

その前に、俺が！

「晴也くん、どこに行くの？」

千歌さんが、病院から出て行くこうとする俺を引き留める。

「ジエパルを倒しに行きます」

「無茶だよ！ 慎司くんだって毒にやられてあんな風に……」

「俺が行かなきゃ……俺が行かないんだ！ 千歌さんたちだって毒を浴びてる。俺が戦わなきゃ、千歌さんたちだって死んでしまう。それだけじゃない。いずれ、彼女は世界中に毒の雨を降らせるつもりだ。今、ジエパルを止められるのは、俺しかないんだ……！」

つい感情的になり、千歌さんに向けて声を荒げてしまう。

そのことに気付き、少しだけ冷静さを取り戻し、目に入った彼女は完全に怯えてしまっていた。

「ごめんなさい、千歌さん。絶対戻りますから」

俺はそう言い残し、病院を後にした。

「ごめんなさい、千歌さん。絶対戻りますから」

晴也くんはそう言って、わたしの前から去って行った。

彼から浴びせられた怒号。狼狽する彼の姿。

あんなに優しかった晴也くんが、あんな顔をするなんて思わなかった。

晴也くんの言っていたことは、きつと間違っていない。

あのジエパルという怪人は、今なお降り続けている毒の雨で、世界中の人たちの命を奪う。

それを止められるのは、晴也くんしかいないのだ。

晴也くんは言っていた。絶対に戻ると。

けれど、晴也くんは一度ジエパルと戦い、そして負けた。

嫌な予感と憶測が、わたしの頭の中を過る。

もしかしたら、晴也くんは自分の命と引き換えにジエパルを倒そうと——死のうとしている？

必ず戻るというあの言葉は、わたしを安心させる為の嘘？

そんなはずはない、彼は必ず帰ってくる。そう自分に言い聞かせても、嫌な感覚は消えない。

「千歌ちゃん」

不意に名前を呼ばれ、そつと後ろに振り返る。

わたしに声をかけたのは、曜ちゃんと月ちゃんの二人。

「ち、千歌ちゃん!?!ど、どうしたの!?!」

さつき程ではないけれど、二人とも驚いた顔をしていた。

「あれ? 晴也くんは? さつきまで千歌ちゃんと一緒にいたはずじゃ……」

驚きの表情は、一瞬でわたしを心配するもの変わった。

それもそのはず、わたしは泣いていたのだ。自分でも気が付かないうちに、わたしは泣いていた。

「何があつたのか、僕たちに教えてくれる?」

「あのね、晴也くん死ぬつもりなんじゃないかって……」

「え? もしかして晴也くん、あのジエパルって人の所に行ったの!?!」

「多分……」

わたしの話を聞くと、曜ちゃんも月ちゃんも慌てふためく。

でも、今から引き留めに行こうにも、多分間に合わない。

ここで慌てていても、何の解決にもならない。

そう諦めかけていたわたしの肩に、一台のバツタカンドロイドが飛び乗った。

『千歌くん、聞こえているかい? 千歌くん』

聞こえてきたのはカムイさんの声だ。

「カムイさん……」

『事情は大体把握している。晴也くんことはカンドロイドたちに追わせている。ジェパルという侵略者のことも搜索中だ。ここからは、わたしに任せてくれ』

「カムイさん、あのジェパルって怪人は、一体何者なんですか？」

『実は、一週間程前に沼津の上空で時空の歪みが観測されたんだ。恐らく、その歪みを発生させた張本人であり、異世界から来た怪人だろう。君たちが浴びた雨。あれは、彼女の言った通り、生物を短期間で死に至らしめることが出来る毒だ。現代の地球の医学力では解毒することは不可能だ』

「じゃあ、わたしたちは全員……」

『いや、解毒する方法はもう見つけている。だが、その前にジェパルを倒す必要がある。これから彼に、その為の新装備を渡しに行く。だからこれで失礼するよ』

「待って！」

「千歌ちゃん？」

わたしは、髪を纏めていたヘアピンを外して、手に乗せてカンドロイド越しにカムイさんに見せる。

「これも一緒に晴也くんに渡してください。絶対に帰って来て欲しいから……」

『……分かった。必ず彼の手から返すようにと伝えておこう』

飛んできたタカカンドロイドが、掌に乗せたのへアピンを加えて飛び去って行った。わたしに出来ることはもう残っていない。

後は、晴也くんが無事に帰ってくることを祈って待つだけ。

——お願い神さま。どうか、慎司くんを守ってください。

カンドロイドの案内に従い、辿り着いたのは廃工場。

建物は、立ち入られないように囲われていたが、この中にジエパルがいる以上、入るしかない。

クジャクカンドロイドで、有刺鉄線を切り落とし、敷地内に足を踏み入れた。

「あら？こんな所まで来るなんて、ご苦労なことね」

建物の中で、ジエパルは無数の卵を愛でていた。

「それが空を覆い、毒の雨を降らせたものの正体か」

「ええ。けれど、それを知ったところでどうするの？言っておくけど、あなたに私は倒せないわ。たとえ、あなたの命と引き換えにしても……ね」

「そんなのやってみないと分からない!」

「良いわ。口で言つて分からないなら、その体に刻んであげる!」

ジェパルは触手を伸ばし、鞭で打つように攻撃を仕掛けてきた。

俺は触手の中を掻い潜りながら、ベルトを腰に装着する。

「変……身!」

そして水のエネルギーを集めて水車を回し、仮面ライダーアクアへ変身した。

アクアに変身した俺は、触手を避けながらジェパルの懐に潜り込む。彼女に勢いを乗せた一撃を喰らわせ、後ろに仰け反らせる。

俺は、更にジェパルに迫り、追撃を浴びせようとするが、彼女の触手に阻まれた。

腕を捕まれ、逃げるのが叶わなくなった俺に、ジェパルは電撃を纏った拳を叩き込む。その威力は、先の戦いの時よりも上がっていた。

「どうしてアンタは、毒の雨を降らせたんだ!?! どうして人間を殺そうとする!?!」

「そうね。冥途の土産に教えてあげようかしら。わたしはね、この世界とは別の世界から来たの。そこには、ここと同じようにたくさんの人々が蔓延っていた。その世界の地球に古くから棲んでいたわたしたち魔海族は、人間を支配し、地球を魔海族の理想郷に変えようとした。けれど、それはたった一人の人間によって阻まれた。それが、わたしたちの世界の仮面ライダー……アクアなのよ!」

「ちよつと待つて！それつて、こつちの世界に来たのは……！」

「元の世界の代わり……てことね」

そんな身勝手な理由で、千歌さんや慎司さんの命を危険な目に……！

心の底から怒りが込み上げてくる。

だが、ジェパルの攻撃は、俺の怒りでどうにか出来る程甘くは無く、攻撃の手が緩むことは無かった。

捌いても捌いても、捌ききれないジェパルの攻撃。

それを受けているうちに、俺の中に疑問が一つ生じた。

何故、ジェパルは俺に毒を使わない？

慎司さんに使った毒を俺に打ち込めば、勝負は一瞬で決められるはずだ。

ジェパルは、何故か俺に強い恨みを抱いている。それを考えると、あえて毒を使わず苦しめている。その可能性があるが、どうも腑に落ちない。

「ッ!」

俺は、撃ち込まれたジェパルの拳を受け止める。

手が焼けるように熱い。が、この手を退けるわけにはいかない!

「何故、毒を使わない? 毒を使えば、俺なんか簡単に倒せるはずだ」

攻撃を受け止められ、驚いていたジェパルだったが、俺の質問を聞くと、不敵に笑つ

た。

「あなた、もしかして気付いていないの？」

「何？」

「効かない相手に毒を使ったところで、何の意味もないでしょう？」

俺に毒が効かない？

「忌々しい力……仮面ライダーアクア。けど、まあ良いわ。あなたは、このわたしが直々に殺してあげる。でも、安心して。あなたの仲間もすぐに後を追わせてあげるから」

歪な笑みを浮かべるジェパル。

俺の拳は簡単に払われ、回し蹴りを喰らわせられた。

吹き飛ばされた俺は、工場の壁を崩した。

やはり力の差は歴然だった。

強力な打撃、素早い蹴撃、大地すらも焼き焦がし得る電撃。

ジェパルの持つありとあらゆる能力が、アクアの性能を遥かに凌駕していた。

しかし、完璧に見えるジェパルにも弱点は確かに存在していた。

俺が最初に当てた攻撃は、大した攻撃ではない。だが、その一撃を受けたジェパルは、大きく退いたのだ。

ジェパルの体は決して丈夫であるとは言えず、その脆さは、たった一撃で体勢を崩す

程。

つまり、一撃必殺の威力を込めた攻撃を一発撃ち込めれば、ジエパルを倒すことが出来るのだ。

俺はその好機を掴む為、立ち上がり彼女に接近していく。

行く手を阻むジエパルの触手は、彼女の拳と同様、電気を纏うようになる。

拳に持てる力の全てを集中させ、攻撃を避けて近づく。

「これで全てを終わらせる！」

「させるわけないでしょ！」

拳を叩き込む直前に、ジエパルは触手で俺を捕らえた。

更にジエパルは、触手を介して電撃を放った。

焼かれるような不快感と激痛に襲われるが、それも計算のうちだ。

「……いや、お終いだ！」

ジエパル目掛けて拳を思い切り振り上げる。

渾身の一撃は、至近距離でジエパルに炸裂した。

彼女の体は四散し、エネルギーを使い果たした俺の変身も解かれた。

「まさか……こんなことがあぁあぁ……」

下半身、そして左半身が消え去り、体だった物はゲル状の破片となって散らばってい

た。

「そんな姿ではもう何もできないだろう……。慎司さんと千歌さんたちの毒を……!?!」
突如、飛び散っていたゲルが動き始める。

この光景に俺は嫌な予感を覚えた。

そしてその予感は、的中してしまうことになった。

動き出したゲルは、無残な姿となっていたジエパルに集まっていく。

「まさか、自分の身を捨ててまでわたしを倒そうとするなんて……。その覚悟だけは認めてあげる。けど、残念ね。わたしは、たった少しの肉片でも残っていれば再生出来るのよ」

ジエパルを瀕死にすることは不可能。そのうえ、倒すには完全に消し去らなければいけない。

だが、戦うことはおろか、変身出来るだけの力も残されていない。

「もつと苦しむ姿が見たかったのだけれど、それじゃあ仕方ないわね。感謝なさい。一瞬で楽にしてあげる」

電流の流れる触手が俺に迫ってくる。

生身でアレに触れれば、死は免れない。

万事休すかと思われたその時、ジエパルの触手が吹き飛んだ。

「あら？わたしに楯突くバカがまだいたのね」

触手は瞬時に再生してしまいが、介入されたことで彼女の意識は完全に俺から逸れた。

俺を救った戦士の正体は、仮面ライダーバースだった。

だが、正規の装着者である慎司さんは、今は病院で治療を受けている。となれば、バースに変身出来る可能性がある人物は一人。

「どうやら間に合ったようだね、晴也くん」

「カムイさん……ソイツは！」

「分かっているよ。私では倒せない。彼女を倒せるのは君しかない」

バースは俺に歩み寄り、腰を落として新しいドライバーを俺の手に乗せた。

そのドライバーは水車が内蔵されていて、構造自体はアクアドライバーと変わりはないが、その形はイルカを彷彿とさせるものだった。

「それからこれを」

更に、三つ葉の形をしたヘアピンが俺の手に握らされた。

「このヘアピンは……」

「必ず君の手で返すんだ」

バースは立ち上がり、ジエバルと対峙する。

「お別れの挨拶は済んだかしら？」

「生憎だが、わたしは死ぬつもりはない。わたしには、まだやらなければならないことがあるんでね！」

ジェパルに返答し、バースバスターを構えたバース。

互いに駆け寄り、二人の戦いは幕を開けた。

初めは拮抗しているように思われたが、徐々にバースは劣勢になっていった。

原因はバースの立ち回りにある。

ジェパルに毒を打たれないよう、遠距離からの攻撃がほとんどで、近接攻撃を主とする武装を多く持つバースの力を十分に発揮できていないのだ。

長期戦になれば、ただの人間であるカムイさんが不利になるのは火を見るよりも明らか。

彼が敗北するのは、時間の問題だった。

カムイさんが、俺の体力を少しでも回復させる為に時間稼ぎをしてくれていることに気付くのに、多くの時間は要さなかった。

——彼女を倒せるのは君しかない。

カムイさんはそう言ったが、相手はほぼ不死身。

そのうえ、毒を抜きで考えても、その能力はアクアの性能を凌駕する。

そんなジエパルに勝てるとは到底思えない。

——『このままじゃいけない』って思ってるんだろ？

ふと、脳裏を過る慎司さんの言葉。

それは、一週間前に彼と会話していた時に、彼の口から出たものだ。

その時の俺は、千歌さんに想いを伝えることに思い悩んでいた。

千歌さんに気持ちを伝えることで、今の関係が壊れてしまう可能性を恐れて。

……そうだ。最初から失敗を恐れて諦めてしまったら、何も変わらない。変えられな

い。

——わたしたちが優勝出来たのは、晴也くんたちのサポートがあつたからだよ。こち

らこそ、ありがとう。

俺が守らなきゃいけないんだ……。この世界を、千歌さんを！

俺は、残る力の全てを振り絞り、立ち上がる。

そんな俺の姿が目に入ったのか、バースを踏みつけていたジエパルの動きは制止し

た。

立ち上がった俺は、カムイさんから受け取ったドライバーを腰に当てて装着する。すると、アクアドライバー同様、バックルの水車が回転し始めた。

水車を介して水のエネルギーが体中を駆け巡った。

立つこともままならなかった俺の体に、たちまち力が充ち満ちる。

「変身！」

アクアと同じカラーリングの装甲が、俺の体を覆い尽くす。

だが、そのシルエットはアクアとは全く異なり、複眼は吊り目となっていた。

更に、バックルからエネルギー体のイルカが二体出現し、海の中を泳ぐかのように空中を疾走する。

エネルギー体のイルカは、それぞれアクアの頭部と体に衝突し、アーマーを形成した。イルカのシルエットをデフォルメしたドルフィンヘッド。

シオルダーアーマーは、右から左にかけてイルカの形をしていて、チェストプレートには、飛び跳ねる二頭のイルカのシルエットが左右に描かれていた。

「なんだ……あの姿は!？」

「ふっふっふ……どうやら成功したようだね。仮面ライダー……アクアトリートンの変身に……!」

アクアトリトーン……この力なら勝てる！

「面白いわ。死に損ないがどこまで戦えるのか、試してあげる！」

ジェパルが叫ぶと、彼女が愛でていた卵が孵化して大量のクラゲが発生した。孵ったクラゲたちは、一斉に俺に襲い掛かって来た。

俺は、三又の槍「アクアトライデント」を召喚し、クラゲたちを薙ぎ払う。

無数のクラゲたちは、一瞬で消し飛び、消滅していった。

「まさか……たった一撃で、あれだけの数の子供たちを消し去った!？」

「次はアンタだー！」

ジェパルの懐に素早く潜り込み、トライデントを振るう。

槍の先は数本の触手を斬り裂いた。

斬り落とされた触手は、しばらくは動いていたが、やがて黒く変色して消滅した。

「再生しない!?!どうして!?!くっ……」

斬られた触手が再生せず、ジェパルは戸惑っていた。

先程まで見せていた余裕の表情が、初めてアクアとして対峙した時と同じ、憎々しげなものに変わる。

「仮面ライダーアクアアアアアア!!」

電流を纏った拳が、雨が降るかの如く撃ち放たれる。

俺は、槍にエネルギーを纏わせて、それを迎え撃った。

トライデントから放たれたエネルギーは、無数のイルカとなって拳撃を押し返していった。

拳撃とイルカのエネルギー体の衝突は、徐々にジェパルに近づいていき、遂に彼女を吹き飛ばした。

ジェパルは廃工場の壁をぶち抜き、外に飛び出していった。

俺は、吹き飛んだジェパルを追いかける。

倉庫の壁に当たり、ジェパルは壁をへこませた。

「またしても邪魔をするのか……この世界でも、わたしの邪魔をオオオオ!!」

よろよろと立ち上がるジェパルは、その身を怒りに震わせた。

怒るジェパルは、毒々しいオーラを纏い、赤い瞳を鈍く輝かせて飛翔した。

彼女がとった行動が何を意味するのか、俺は瞬時に理解した。

「不味い! ジェパルはより強い毒の雨を降らせるつもりなんだ!」

けど、あの毒を解毒する方法は分からない……。

どうすれば良いんだ……。

「アクアの力の源、マナスアクア。それを放出すれば毒を無力化出来る!」

マナスアクアで解毒……?」

そうか！だから、ジエパルは俺に毒は効かないと言っていたのか！

俺はアクアトライデントを空に向けて振り、人間一人が乗れる程度の大きさのエネルギー体のイルカを召喚し、それに乗って上昇する。

速く！もつと速く！

そう念じれば念じる程、イルカの速度は上がっていった。

そして、辿り着いた先では、先程とは比べ物にならない数のクラゲとジエパルが、紫色の巨大なオーラを放っていた。

「この世界の人間を……一匹残らず殺してやるうううう!!」

「させるかああああ!!」

激昂するジエパル目掛けてトライデントを投げ、彼女の体に突き刺す。

そうすることでジエパルの動きを封じ、右足にエネルギーを収束してキックを放った。

「そんな……この世界でも……わたしたちは敗れるのかあああああ……!」

キックはジエパルを貫き、その体は爆散。

同時に、イルカたちが大量に生まれ、空を覆うクラゲたちを消滅させ、マナスアクアの雨を降らせた。

空を昇った時のイルカに再び跨り、地上へと降りていく。

「終わった……。これでみんな助かるんだ……」

地に足をつけると同時に変身は解かれた。

長いようで短かった戦いの幕は閉じ、再び世界に平穏が戻ったのだった。

ジェパルを討ち倒してから数日が経過した頃、俺は病院のベッドの上で目を覚ました。

どうやら、戦いが終わった後、限界を超える力を行使した反動で倒れてしまったらしく、カムイさんの手によって運ばれたようだ。

怪我こそしていたものの、命に別状は無く、すぐに退院できた。

また、一時は予断を許さない危険な状態だった慎司さんも、今は回復に向かっているらしい。

俺たちの日常は、少しずつ元に戻り始めていた。

そうこうしているうちに、部室の前まで辿り着いた。

カムイさんから預かった千歌さんのヘアピンをポケットから取り出す。

これを千歌さんに返すんだ。

ドアを開いて部屋に入ると、千歌さんだけが一人部屋の中で座っていた。「晴也くん……もう動いて大丈夫なの!？」

「は、はい。おかげさまで……。えっと、これをお返ししようと思って」

「わたしのヘアピン……。ありがとう、帰って来てくれて」

ヘアピンは俺の手から千歌さんの手へ、そして彼女はそのヘアピンで再び前髪を束ねた。

俺へと向けられた笑顔。

やはり、俺はこの女性ひとが好きなんだ。

今、この部屋にいるのは俺と千歌さんだけ。

気持ちを伝えるタイミングとしては、またとない絶好の機会だ。

「千歌さん!」

意を決した俺は、千歌さんの名を呼んで彼女を振り向かせた。

「どうしたの?」と首を傾げて俺を見つめる彼女。

俺もその瞳を真っ直ぐ見て、それを言葉にした。

「好きです」

「……え?」

「千歌さんのことが好きです!」

顔がとても熱い。鏡を見たら、多分、燃えるように真っ赤な顔をした俺が映るだろう。千歌さんも目を点にした後、頬を紅潮させ、若干パニック気味になりながら、俺に尋ねた。

「そ、そそそそれは『ライク』じゃなくて『ラブ』の方の好きってこと?!」

「はい……!」

「そ、そんな……千歌に晴也くんは勿体ないよ。晴也くんはカッコイイし、仮面ライダーだし……。ほ、ほら、千歌は普通怪獣チカつちだし!」

「関係ないです。誰にでも優しい千歌さんが好きです。諦めない、強い心を持つ千歌さんが好きです。キラキラ輝く千歌さんが好きです。とても可愛らしい千歌さんが好きです。千歌さんの全部が大好きです!」

頬を染めるだけにとどまらず、千歌さんの顔全体が真っ赤に染っていく。

千歌さんは、赤くなった顔を隠すように俯き、言葉を紡いだ。

「千歌、本当に普通なんだよ? 梨子ちゃんやダイちゃんみたいな美人さんじゃないし、曜ちゃんみたいに運動ができるわけでもない。果南ちゃんや鞠莉ちゃんみたいに胸も大きくない。善子ちゃんみたいに頭が良い訳でもないし、花丸ちゃんやルビィちゃんもたく可愛くもないよ?」

「俺にとって、一番魅力的な女性は千歌さんなんです。『ありがとう』って初めて言われ

たあの日から、色んな千歌さんを見てきて、その全部を愛おしく思えた。そんな女性^{ひと}は、千歌さんが最初で最後なんです。千歌さん、好きです。大好きです！俺と……付き合ってください!!」

訪れた沈黙は、実際の時間よりも長く感じられた。

赤く染った顔は、更にその熱と赤みを増していき、湯気が出てもおおかしくない。

高鳴る鼓動だけが聞こえるこの空間で、遂に千歌さんの口が開かれた。

「……………れば……………こんなわたしで良ければ、よろしく願います……………」

聞こえた小さな声は、それでも精一杯振り絞られたように思えた。

俺の顔もかなり熱くなっているが、千歌の顔もとても赤い。

茹で上がったように、顔を染める千歌さんの顔に近づいていく。

俺が何をしようとしているのか、察した彼女もまた、目を閉じて唇を突き出してきた。

そんな一生懸命な千歌さんをずっと見ていたいが、そうもいかない。

俺も目を閉じ、そして、彼女と唇を重ねたのだった――。

仮面ライダーバース

憎い。

僕からヨハネを、僕の全てを奪ったアイツが。

ヨハネを崇める同士たちと共に彼女と一つの存在になるという願望を踏みにじったあの男が。

緑衣の男に与えられた力で、僕は仲間たちを見つけて彼らと一つになった。

膨大な数の意識を取り込み、計画はヨハネとの融合を残すのみとなった。

だが、その前に奴が立ちはだかった。

僕は願いを成就させる為に戦った。

奴の攻撃は、僕の同士を一人、また一人と元の器へ還していった。

『ば、ばかな……！僕のヨハネへの想いが！こんなガキに負けるなんて！』

『想い？こっちは十年以上の片想い中なんだ！善子と同一化したなんてふざけた欲望叶えさせるわけにはいかねえんだよっ！！』

戦いの最後、僕は凄まじい光に飲まれて意識を失った。

それから目を覚ました僕は、全ての力を失い、ただの人間へと戻ってしまった。

もう一度力を手に入れる為に緑衣の男を探したが、既にあの男の仲間へと成り下がっていた。

僕の望みは完全に絶たれた。

僕にはただ見ているしか出来なかった。

憎いあの男に向けられる彼女の笑顔。

彼女と共に笑う憎いあの男を。

……だが、それももうすぐ終わる。

僕は遂に手に入れた。

奴に復讐する為の道具を……!!

今度こそ彼女を手に入れてみせる。

そして……復讐してやる!

死以上の屈辱をお前に与えてやる!

待っている、仮面ライダー……バース!!

耳元で鳴り響く目覚ましのアラーム。

それは朝が来たこと、一日が始まるという知らせだ。

「ふわあああ……」

体を起こしても、脳の半分はまだ眠ったまま。

少しでも気を抜けば、また夢の世界に戻ってしまうだろう。

そうならないよう、重い体を動かしてリビングに向かう。

半覚醒状態の俺の鼻腔をくすぐる匂いは、淹れたてのコーヒー……ではなく、お椀によそわれた味噌汁。

そして並べられた朝食たちだ。

「おはよう、慎司、って凄い寝癖ね。早く食べて支度しちやいな」

「へーい」

キッチンに立っているのは、俺の母さん。

その後ろ姿から感じる懐かしさは、あの日からおよそ一年が経った今も変わることは無い。

初めてヤミーが現れたあの日、俺の中に封じ込められていた全ての記憶が頭の中を駆け巡った。

俺は、一度死んで蘇ったのだ。

遡ること十五年前、俺は交通事故で死んだ。

あの世へ召された俺は、そこで一人の幼女……否、女神と出会う。

その女神こそ、俺を今の世界へ転生させてくれた女神さまだ。

生まれ変わった俺は仮面ライダーバースとして、世界の平和を守る為に戦うことになったのだ。

朝食を摂った後はすぐに出かける準備をし、それが終わる頃にはインターホンのチャイムが鳴らされる。

「慎司ー、もう二人とも来たわよー」

「すぐ行くー!」

タオルと水筒をカバンに詰め込んで玄関まで小走り。

「ようやく来たわね。最上位リトルの我が眷属デーモン!」

「おはヨーソロー、慎司くん!」

「おはようございます、曜先輩。善子も」

「む……善子じゃなくて、ヨ・ハ・ネ!」

俺を待つてくれていた渡辺曜先輩と幼馴染の善子と挨拶を交わし、外へ。

「行つてきます」と母さんと我が家に告げ、俺こと宮沢慎司みやざわしんじは今日という日を始めのだ。

家を出た俺たちは、まず向かうのは十千万。

内浦で営まれている老舗旅館にして、我らがA q o u r sのリーダーである高海千歌先輩の実家だ。

「おはヨーソローであります！」

「おはよう、曜ちゃん、善子ちゃん、慎司くん」

「おはようございます」

迎えてくれたのは、高海家の長女の志満さん。

この旅館の若女将を務めていて、俺たちにも何かと気をかけてくれる優しいお姉さんだ。

「今三人を呼ぶから、ちよつと待っていてね」

志満さんはそう言つて奥へと消えていく。

しばらくすると、千歌さんを初めとし、志満さん、耀太先輩とアंकの順で奥から歩いてきた。

「おはよう、曜ちゃん、善子ちゃん、慎司くん！」

「おはヨーソロー、千歌ちゃん、耀太くん、アंकさん！」

「待たせてごめん、三人とも」

「大丈夫ですよ。俺たち、今来たところですから。それより、体の調子はどうです？」

「ああ……あんな目に遭うのは、もうコリゴリだよ。コアメダルの方も、一応は大丈夫だったみたいけど……」

耀太先輩は深い溜め息を吐いて答える。

つい先日、彼は果南先輩と体を入れ替えられてしまう事件に見舞われた。

コアメダルが体内にあるというのに、何とも間の悪い事件だった。

事件は無事解決したものの、色々大変だったと言っていた耀太先輩だったが、今の彼の反応を見るだけでそんな目には遭うのはゴメンだと思う。

「ははは……でも、元に戻れて良かったね」

「もし元に戻れなかったらと思うと……」

若干顔が青くなつた先輩を見て、皆苦笑する。

本当にそうなつてしまっていたら、耀太先輩と果南先輩は一生に一緒にいなければならないだろう。

それはそれで見てみたい気はする。もちろん、そんなことは言うつもりは無いし、言えるわけもないが。

「はあ……」の話はもうやめようよ。そろそろバスも来るし」

「了解つと……ん？」

耀太先輩に返事をし、体の向きを変えて外に出た俺は妙なものを目にした。

「慎司?どうかしたか?」

「いえ、今挙動のおかしいカンドロイドがいたような……」

「挙動のおかしいカンドロイド?」

出入り口の目の前で、まるで何かを待っているかのように止まっていた黒いバッタカンドロイド。

しかし、俺が見つけた直後に捕まえる暇も無く、逃げていつてしまった。

「……少し警戒した方が良さそうだな」

何かを感じとったらしいアंकも、耀太先輩にそう促す。

同時に先輩の顔も少し深刻なものになり、「そうだな」とアंकに言葉を返した。

結局この日は何事も無く終わりを迎えた。

だが、既に俺たちは……いや、俺は復讐者にとらえられていたのだった。

翌日、放課後の体育館に俺と耀太先輩の声が響き渡った。

「曜ちゃん（先輩）が（も）来てない!?!」

「うん……」。今日もいつもと同じ時間に家を出た、つて曜ちゃんのお母さんは言っ

けど……」

「それに電話もつながらないんです」

そう言つて佐藤ちゃんは曜先輩に電話をかけ、スピーカーモードにして俺たちにも分かるように聞かせてくれた。

佐藤ちゃんのスマホからは、通話が繋がらない時に流れるガイドダンスの音声が届くだけ。

更に、何回も電話をかけた履歴が残っていることから、普通ではないことが伺える。

「ねえ、慎司くん。今、曜ちゃん『も』って言った？」

「はい……。実は善子も来てないんです。いつもは曜先輩と善子が迎えに来るんですけど、今日は来なかつたんです二人だけで先に行つた、つてのは妙な感じがしたんですけど、それしか考えられないし、いざ着いたら善子はまだ来てなくて……。もう何が何だか」

「マルもまた何かやつちやつたのかなって思つてただけど……」

初めは「心配ないぞら」と言つていた花丸だったが、いつまで経つても善子が現れないことですから落ち込んでしまつていた。

俯く花丸の肩を抱くルビイも。

二人だけじゃない。

他のみんなも心配そうな表所を浮かべ、そのうちの何人かは険しい表情をしていた。

「ストレンジな話ね。同じ二人と近くに住んでるのに、慎司だけ来てるなんて……」

二人とも家を出るまでは確認できているが、学校には来ていない。

善子はともかく、曜先輩が学校をサボるのは考えにくい。

二人の身に何かあったと考えるのが自然だ。

「二人とも誘拐された、って言うのが一番有力だよね……。考えたくはないけど」

果南先輩は苦虫を噛み潰したような顔をする。

何度考えても、今回の事件を説明するにはそれが一番筋が通っている。

一年前ならいざ知らず、今の彼女たちは世間が注目する人気スクールアイドルだ。

誘拐する動機も十分にある。

「欲に溺れた人間がヨシコとヨウを誘拐した……。これで決まりだな」

アंकがとどめを刺してしまい、ルビイは泣きだし、他のみんなの顔もより深刻さを増した。

本当に誘拐だとすれば、そんな犯罪行為を働く輩が二人に危害を加えないはずがない。

曜先輩も善子も怖い思いをしているに違いない。

そう考えると心の底から激しい怒りが沸き上がってきた。

顔も名前も知らない下衆に。

そして、大事な人たちが危険にさらされているにもかかわらず、何も出来ない無力な自分自身に。

「クソ……！どうして二人が……！」

思わず俺は拳を壁に叩き付けた。

怒りをあらわにした俺に、みんな怯えてしまう。

「落ち着け……つてのは無理だよな。俺も同じだ。けど、何かにあたっても二人は見つけられないぞ」

俺の肩を掴み、少し冷静になるように諭してくる耀太先輩。

その手を振り払い、部屋を出て行こうとした。

「待て、慎司！どこに行くんだ!？」

「二人を探しに行きます。先輩たちはみんなと一緒にいてください。これ以上誰かを危険にさらすわけにはいきませんから」

「慎司くん!」

梨子さんの呼びかけも振り切り、俺は部屋から走り去った。

絶対に見つけ出す。

曜先輩と善子を。

この事件の犯人を。

「……ちゃん！善子ちゃん！」

誰かがわたしの名前を呼ぶ。

花丸？違う。ルビィでも無い。

この声は……曜？

次第にハッキリと聞こえてくるようになったのは、曜の声。

わたしの意識は刺激され、意識が完全に覚醒した。

「良かった……目が覚めたんだね」

「曜……ここはどこ？」

「分からない……」

薄暗く、埃っぽい空間。

けれど狭くはなく、むしろ広い。

多分、今は使われていない倉庫だろう。

「何でわたしたち、こんなところに……」

「やあ、ようやくお目覚めかい？善子ちゃん……いや、ヨハネちゃん」

突然、向こうの方から男の声が聞こえてきた。
カツカツカツ、と靴の音もする。

暗さになれた目に映ったのは、見たことの無い一人の男。

「あなたがわたしたちを……」

「アンタ、こんなこととしてタダで済むと思ってるの!？」

わたしたちが男に噛み付くと、男は狂ったように笑う。

いや、この男は狂っている。

少なくとも、誘拐ごんかくをする人間が正常なわけが無い。

「誰も僕を止められないよ。警察なんてもつてのほかだ。僕には力があるからね」

「力……?？」

「そう……世界の理、秩序すらも凌駕する力さ」

そう言つて男が取り出したもの、それを見たわたしと曜は声を上げて驚愕した。

「それは慎司くんの……!？」

「バース……ドライバー!？」

「クツクツクツ……ハーツハツハツハ！違うよ、これはバースドライバーなんかじゃない。これはデスドライバーさ！」

男はバースドライバーと似たベルト、デスドライバーを腰に巻いた。

そしてシンが変身に使うセルメダルを填めてレバーを回す。

男の体はベルトから排出されたカプセルに覆われ、アーマーに包まれた。バースそっくりで、それでいて全く違う。

バースを機械的と表現するならば、デスは生物に近い見た目をしている。まるで本当に生きているかのように脈打ち、禍々しい雰囲気を放つデス。

男の狂気と相まって、仮面ライダーというよりもグリードかヤミーに近いものを感じた。

「邪魔者を排除したら、今度こそわたしと一つになりましょう。ヨハネさま」
嫌な寒気が背筋を走る。

この感じ……シンが初めてわたしの前で変身した時と同じ!?

じゃあ、コイツの言う邪魔者って……!?

「アンタ、シンをどうするつもりなの!？」

「どうって復讐するに決まっているでしょう。死以上の屈辱を味あわせてあげるんです。その為に……あなた方にも協力してもらいますよ」

また、この男は狂気に満ちた声で笑った。

嫌……! 怖い……。シン、お願い、助けて……。

わたしに出来るのは、シンが来てくれることを願うだけ。

曜とわたしをこの狂った男から救い出してくれる仮面ライダーの到着を。

どこだ！どこだ！どこだ！

どれほどバイクを走らせ続けただろうか。

カンドロイドたちの力も借りて二人を探すが、二人の「よ」の字も見えてこない。カンドロイドの警備は完璧なはずだった。

怪しい動きをする者がいれば、すぐさまゴリラちゃんに伝わる。

しかし、ゴリラちゃんは身動き一つとらなかつた。

警備の穴を突かれたか、あるいは……。

「(女神さま！女神さま！お願いだ……聞こえてるなら返事をしてくれ！)」

『聞こえておるぞ。大変なことになったな……』

「(事態じたいが分かつてるなら話が早い。女神さまの力で二人がどこにいるか探せないか？)」

『すまん……さつきからやっておるが、どうやら特殊な結界が張られているらしく、気配を感じとれないんじや』

「(そんな……)」

女神さまでも見つけられないなんて……。

カンドロイド、そして女神さまが追えないとなると、望みは完全に潰えたことになる。そして同時に、この事件の犯人がポセイダンの男と関わりがあることが証明された。

つまり、二人を攫ったのはヤミーであり、犯人はヤミーを生み出せるほどの欲望を持った危険な人物ということだ。

強く握り過ぎた拳から血が流れる。

だが、怒りが痛みを凌駕している所為か、何も感じなかった。

『慎司、ぬしのスマホに地図を送った。そこに示されている場所まで来るといい。渡すものがある』

「(……分かった)」

俺は女神さまとの念話を終え、スマホに送られていた地図を確認してからバイクを再び走らせた。

目的の場所に着くと、大人モードの女神さまがアタッシュケースを持って俺を待っていた。

「渡したいものって……」

「これじゃ」

アタツシユケースの中に収められていたのは、バーストライバーとそっくりな、だが俺の持つそれとは全くの別物のベルトだった。

「これはリバースドライブ。名前くらいは知ってるであろう。これを持っていけ」

「良いのか……?」

「ああ。だが、気を付けろ。これは試作品故、一度きりしか使えない。加えて長時間使い続けられれば死は免れないぞ」

「分かった」

女神さまからアタツシユケースごとリバースドライブを受け取る。

それと同時に、俺たちの前に二体のカンドロイドが現れた。

「コイツ……昨日見た奴と同じカンドロイドか」

あの時、このカンドロイドは下見をする為に俺たちの元に来たということか。

『気付いてくれていたみたいだね、宮沢慎司くん。いや、仮面ライダーバースと呼ぶべきかな』

カンドロイドから男の声と拍手の音が聞こえた。

「ナニモンだ? てめえが善子たちを攫った犯人か!？」

『そうだ、と言ったら?』

「一体何が目的だ!？」

『クツクツクツ……』

「何がおかしい」

『いやなに。今日は同じことをよく聞かれるな、と思ってね。そうだな、何も知らずに終わるのは可哀想だ。このロボットに従ってある場所まで来たまえ。そしたら教えてあげるよ』

通信を切ったらしく、男の声はそこで途切れた。

「十中八九罠だと思いが……」

「行くしかない。善子と曜先輩が助けを待ってるんだ。女神さまは耀太先輩を呼んで来てくれ」

「……分かった」

彼女は俺を止めない。

止めても無駄だと分かっているから。

俺は再びバイクのエンジンをかけ、カンドロイドたちの案内に従い、犯人と善子たちの待つ場所へ向かった。

バイクを走らせること数十分、カンドロイドたちは廃倉庫へと俺を導いた。侵入を防ぐ為の有刺鉄線が張り巡らされていたが、一部が切り取られ、大人の間一人が入れるほどの穴が空いていた。

この中に奴はいる。

そして善子と曜先輩も。

バリケードから建物までの距離は十メートルほどだった。

鉄線を潜り抜けた俺は、倉庫の内部に足を踏み入れた。

光は無く、薄暗い。

だが、そんな暗さにも次第に目は慣れていった。

「シン（慎司くん）！」

「善子！曜先輩！」

闇に順応した目に映ったのは、ロープで拘束されている二人。

そしてその二人をいやらしい目で見ている、犯人と思しき男だった。

「やあ、会えて嬉しいよ。慎司くん」

「約束だ。どうしてこんなことをしたのか教えろ！」

「良いだろう、教えてあげるよ。……冥土の土産としてね！」

叫んだ男は、驚くべきことに仮面ライダーのベルトを装着した。

それも、俺のバースドライバールとよく似たベルトを。

「それはバースドライバール!？」

「違う、これはデスドライバールさ。見たまえ、最凶にして最高の僕の姿を！」

デスドライバールを装着した男はセルメダルを一枚取り出して、俺と全く同じ手順で仮面ライダーに変身した。

俺のバースとそっくりな仮面ライダーデス。

だが、ここで怯んでしまつては、二人を助けるなんて出来やしない。

「変身！」

俺もバースドライバールを装着し、セルメダルを投入してバースの装備を展開した。

変身した俺は、助走をつけてデスに殴りかかる。

拳はデスの胸部にヒットし、奴を後ろに下がらせた。

「何の為に彼女たちを攫つたか……君はそう言ったな。答えは一つ、君に復讐する為だ」

「復讐だと……?？」

「忘れもしない……『墮天使ヨハネとひとつになる』という崇高な願いを君に壊されたあの日は」

覚えている。善子と一緒にスクールアイドル部に入った時、俺たちを襲ったクロアゲ

ハヤミー。

そうか、コイツはあの時のヤミーの親になった人間だったんだ。

「わたしはお前を許さない！わたしのだだひとつの夢を奪ったお前を！」

デスの反撃の拳がバースの腹部に突き刺さる。

その威力は、不完全な状態のグリード以上だ。

衝撃と痛みのあまり、俺は体をくの字に折ってしまふ。

そこへ回し蹴りの追撃が入り、吹き飛ばされてしまった。

「なんてパワーだ……。並のヤミーなんて目じゃねえ……」

「これは素晴らしい。まさかここまでのもとは、正直思いませんでしたよ」

恐らく、デスの性能はバースを遥かに凌ぐ。

真つ向から立ち向かっても勝てる見込みはない。

女神さまが託してくれたリバースドライブ……。

あれを使えば勝てるかもしれない。

だが、後一步が踏み出せなかった。

「うらああああー！」

「シヨベルアーム」

セルメダルを装填し、シヨベルアームを展開してデスに攻撃を仕掛ける。

デスは攻撃を受け止め、なんと、武装をセルメダルに変えてしまった。

「そんな攻撃、わたしには通じません。あの時とは立場が逆転してしまいましたねえ」
奴は俺を見下し笑う。

耳につく笑い声を俺は止めることが出来ない。

俺の攻撃はデスには届かず、デスの攻撃を受けた俺は確実にダメージを蓄積させていった。

とうとう、俺は立ち上がることにすらままならないほど消耗し、変身も保てなくなってしまう。

俺は、近づいてきたデスに足で仰向けに転がされる。

「良いですねえ。苦痛と屈辱で歪む顔……。復讐のしがいがあるというものだ……」
俺にそう言い放つと、デスは俺から離れていく。

そしてデスは縛られている二人のところまで歩いていった。

「君に死以上の制裁を下すにはどうしたらいいか……ずっと考えていた。そうしたら、とてもいい考えが浮かんだんだよ。僕は満たされ、君が悔しがる方法が……」

奴が何をしようとしているのか、俺は一瞬で理解した。

善子と曜先輩の命を奪う？ 違う。それでは奴の欲望は満たされない。

「よせーやめろー！」

「ブツハハハハハハ!!」

デスは善子を無理やり立たせ、その身に纏っていた衣服を引き裂いた。手足の自由を奪われ、抗うことが出来ない善子はあられもない姿になっていく。

善子と曜先輩の悲鳴。奴の狂った笑い声。

奴は二人を辱めることで、俺に復讐することを選んだ。

「ハ」の……」

かつてない感情の渦が……。

「……クソ野郎が……!」

怒りが爆発した。

大切な人を、何の罪もない少女を。

「うん?」

奴は穢した。

涙を流させた。

「お前は……お前だけは絶対に許さない……!」

俺は、バースドライバーの代わりにリバースドライバーを装着した。

そしてドライバーを起動、リバースの装備を展開し、この身に纏った。

「何だ……その姿は……」

赤と金をバースカラーとしたアーマー。

左腕は巨大なハサミになり、背中から主砲が伸びている。

その他にめバースの武装を強化した武装がいくつも搭載されている。

「仮面ライダー……リバース」

俺の再変身が完了すると、デスは善子から手を離し、俺の方に向き直った。

「何がリバースだ。私に勝つことは不可能だ」

放たれたデスの拳。

俺はそれを片手で受止めた。

「お前は……越えてはいけない一線を越えた。たとえ、『死』の名を冠する邪悪な存在だとしても、お前に『仮面ライダー』の名前を名乗る資格は無い」

今度は俺がデスの腹部に拳を叩き込む。

さっきの俺と同じように、奴は倒れ込んだ。

「バカな……わたしは最強なんだぞ……!」

「てめえは最強なんかじゃねえ。てめえは、俺が戦った相手の中で一番『最低』な野郎だ」

「黙れ……黙れ黙れえ! 調子に乗るな、この死に損ないがああああ!!」

デスの一撃が顔面に直撃するが、痛みなど感じない。

俺はもう一度デスの腹部に拳を撃ち下ろし、うずくまった奴に蹴撃を喰らわせる。

「これで終わりだ、デス。いや、名前も知らない復讐鬼」
「ふざけるなアアアアア!!」

主砲の砲口を奴に向け、俺は引き金を引いた。

放たれた光線は凄まじい威力をもって奴を飲み込み、そのベルトを消滅させた。

デスは一人の人間に戻り、意識を失って倒れた。

リバースドライバーも限界を迎え、火花を散らして碎け散った。

それに伴ってリバースの装備も消失し、俺もまた力尽き掛けていた。

俺は最後の力を振り絞って善子と曜先輩のところまで行き、二人の縄をほどいた。

「悪い……善子……」

「……バカ！怖かったんだから……」

下着だけとなってしまった善子に上着をかけ、抱きしめる。

俺よりも小さくて細い体は、まだ震えていた。

もう絶対に離さない。

俺が善子を守るんだ。

たとえ、神さまが相手だとしても。

事件から数日が経過した。

デスに変身していた男は警察に逮捕された。

色々面倒なこともあったが、ようやく日常が戻ってきた。

「いてて……まだ体中がいてーな……」

リバース自体が強力なライダーであること、そして使用したのがプロトタイプのドライバーだったこともあり、俺は全身筋肉痛に悩まされることとなった。

まあ、それはさておき。

俺が一番懸念していたのは善子のことだった。

善子はデスの男から辱められ傷付いたはずだ。

もしかしたら、また学校に来れなくなってしまうかもしれないとまで考えた。

だがそれは杞憂だった。

「遅いわよ、シン」

「勘弁してくれよ……まだ痛みが引かねーってのに……」

事件前と同じように、善子は俺を迎えに来た。

前と違うことがあるとすれば、曜先輩がいないこと。

曰く「善子ちゃんを元気づけてあげられるのは、慎司くんだけ！だからちゃんと見て

てあげてね」だそうだ。

曜先輩なりの気遣いなのだろう。

「なあ善子、お前もう平気なのか？」

「平気って？」

「えつと……こないだのこと」

そう尋ねると善子は歩みを止めて俯いた。

「……『もう平気』って言えば嘘になるわ。あの時を思い出すと、怖くて震えが止まらなくなる。でも——」

突然、善子は俺の胸に飛び込んできた。

震えていた声からは一切の恐怖が感じられず、代わりに安堵感や落ち着きを感じた。

「シンがそばにいてくれれば、大丈夫よ」

「……あの、善子さん？人が見てるんですけど？」

「なによ。いつも躊躇いもなくは恥ずかしいこと言うくせに」

「いや……言うのとするのは……ああ、もういいや」

俺は考えることをやめ、善子を抱きしめる。

周囲から微笑ましい顔で見守られるが関係ない。

「大好きよ、シン」

「俺もだ、善子」

震える善子を抱きしめたあの日の誓いをもう一度誓おう。

この笑顔を、温もりを必ず守り通す。

そして、いつか必ず――。

仮面ライダーオーズ

深く暗い闇の中。

俺の意識はそこの中にあつた。

体はとうの昔に失われ、あるのは意識だけ。

動くことすら出来ずに闇という牢獄に囚われていた。

俺をこんな無様な姿に変えた奴の名は、仮面ライダー。

仮面ライダーオーズ。

一度ならず、二度、そして三度も俺をこの場所におくつた忌々しい存在。

オーズはその力で俺を倒し、俺の野望を打ち砕いた。

“奴”に復讐し、ありとあらゆる歴史に存在する仮面ライダーを倒すという俺の欲望を。

だが、俺とてただ囚われていたわけではない。

俺は二度この闇から抜け出している。

時間をかけて力を蓄え、この忌々しい闇の力も奪いながら蘇るのだ。

そう……俺はもう一度蘇る。

今度こそ、俺の野望を果たす為に。

一つは、全ての仮面ライダーをこの手で討ち倒すこと。

一つは、最初に俺を倒した“奴”に復讐すること。

そしてもう一つ……俺を二度もこの闇に葬ったオーズに復讐すること。

まずは準備を始めよう。

オーズに復讐する為には体セルメダルが必要だ。

だがこの世界には人間たちが腐る程いる。

さあ、人間たち！ その欲望、解放しろ！

俺たちが日本を発つてから四年の月日が流れた。

四年前、この世界で過ごしたあの時間は忘れない。

いや、忘れられないと言った方が正しいだろう。

コアメダルを巡る戦い。

それは、哀しき過去を背負った一人の神と彼を利用した悪しき存在が巻き起こしたものだ。

最初は彼が生み出したグリードたちとの戦いだ。

強敵揃いの彼らを初めて相手にした時は、絶望すら感じたものだ。

それでも俺たちは諦めなかった。

千歌ちゃんたちの真つ直ぐな瞳が、純粋な想いが俺を立ち上がらせてくれた。

俺たちは何度も何度も戦った。

その中で俺たちは次第に心を通わせていった。

ウヴァが、カザリが、ガメルが、メズールが。

千歌ちゃんたちと触れ合い、変わっていったのだ。

みんなが笑っていられる、そんな時間がずっと続けばいいのに、って何度思ったことか。

だがそんな平和は理不尽な悪によって塗り潰された。

悪の権化とも言える仮面ライダーポセイドンの手により、世界は滅亡の危機を迎えた。

個人の怒りと欲望の為に世界を滅ぼそうとする奴を止める為、俺たちは立ち向かった。

結果、俺たちは奴を追い詰め撃退することが出来た。

しかし、その代償はとても大きなものだった。

ポセイドンの死に際、奴のエネルギーが怪物となり、世界を滅ぼそうとしたのだ。怪物を討つ為、グリードたちはその力の全てを使い果たし、消滅してしまった。

彼らを失った悲しみを乗り越え、俺たちは前へ進むことを選んだ。

いつか、彼らを復活させられるその日を掴む為に。

未来で、その時の自分に胸を張って彼らと再会する為に。

「耀太……」

入国の為、パスポートを探していると、隣で寝息を立てている果南ちゃんが俺の名前を呼んだ。

幸せそうな寝顔で一体どんな夢を見ているのだろうか。

「千歌……鞠莉……ダイヤ」

俺の名前に続いてみんなの名前も呼ぶ果南ちゃん。

なるほど、彼女が見ている夢が分かった。

きつとあの思い出の日々を夢見ているのだ。

内浦でみんなで過ごしたあの時間を。

「もうすぐ着くよ。みんながいるあの場所にね」

眠る果南ちゃんの耳元でそっと囁く。

眠りにつきながらも、俺の声に反応したようで果南ちゃんは微笑んだ。

俺はバッグから手のひらサイズの小箱取り出し、それを開けた。中にはおさめられているのは、翡翠の宝石がはめ込まれたエンゲージリング。帰ったら果南ちゃんにこれを渡そう。四年前の約束を果たす為に。

空港に着くと、やはりたくさんの人があちらこちらへ行き交っていた。これから日本を発つ人もいれば、俺たちのように戻ってきた人もいる。

友人たちとの別れを惜しむ人、家族との再会を喜ぶ人。本当にさまざまだ。

「あ、来た来た！ 待ってましたよ。耀太先輩、果南先輩！」

「二人ともー、迎えに来たよー！」

「チャオ、二人とも」

俺たちを呼んで手を振ってくれているのは、慎司と千歌ちゃん、そして鞠莉ちゃんの三人。

「久しぶり、慎司、千歌ちゃん、鞠莉ちゃん……って鞠莉ちゃんも!?!」

「鞠莉、帰って来てたんだ」

「イエース。果南たちよりも少し先にね」

三人ともビデオ通話ではちよくちよく顔を合わせていたが、直接会うのは実に四年ぶり。

慎司は相変わらずの善子ちゃんラブで、連絡する度に惚気話を聞かされていた。

鞠莉ちゃんとは、ついこの間もビデオ通話をしたばかりだったが、まさかこんなに早い再会になるとは……。

それに俺たちよりも早く戻ってきていたことにも驚きだ。

そして千歌ちゃんも以前より成長し、画面越しでも薄々思っていたが、少し大人の雰囲気纏った美人さんになっていた。

実は俺たちが日本を発つてすぐに晴也と交際を始めたらしい。

恋をすると女の子は綺麗になると聞いたことがあるけれど、まさかここまでとは想像もしていなかった。

「ねえ耀太。どうして千歌をじつと見つめてるのかな?」

「え? いや、これはその……なんと言いますか……」

「ダメですよ、耀太先輩。帰ってきて早々浮気だなんて。それに千歌先輩はもうフリーじゃないんですよ?」

「分かってるから! 浮気なんて俺はしないよ!」

「これは……スメルぶんぶん嫉妬ファイヤー!」

ジト目でこちらを睨んでくる果南ちゃんに、慎司と鞠莉ちゃんの一言。

更には、恐らく晴也の話が出たことで顔を少し赤く染めた千歌ちゃんと、傍から見たら軽い修羅場だ。

人の目もあるので俺は慌てて弁明を試みる。

だが次の瞬間には、果南ちゃんはふくれっ面は崩して笑い始めた。

「なんてね。昔から言ってるでしょ? 耀太がそんなことする人じゃないのは分かっている、って」

どうやら果南ちゃんの方は演技だったらしく、俺は安堵しそつと胸を撫で下ろした。

「はあ……びつくりした……。そう言えば、前にもこんなやり取りしたな……」

「あれは確か閉校祭の時だね。あの時もそうだったけど、耀太のことからかうと反応が面白くてつい」

そう言いながら果南ちゃんは笑う。

彼女につられるように慎司や千歌ちゃん、鞠莉ちゃんとそして俺も。

いつの間にかみんな笑っていた。

ああ、なんて懐かしいんだろう。

それに、こうしているだけで幸せな気持ち満ちてくる。

だが、あまりここで長話をしていると、他のみんなを待たせてしまう。

「それじゃあ、そろそろ行こうか」という言葉に頷き、俺たちは三人の案内で車まで向かった。

そこで見たのはいつぞやのマイクロバス。

ということは運転手は……。

「運転はマリーにお任せよ！ 二人を迎えに行く、つて言うからわたしが立候補したの！」

鞠莉ちゃんの気持ちは嬉しいが、彼女の運転は少し不安だ。

「その顔。耀太、わたしのドライブテクニクを疑ってるでしょ？」

「だ……だって、ねえ？」

「むうう、耀太つてばひどい。オーケー、成長したわたしをそのアイでよく見てなさい！」

「エンジンスタート！」という軽快な号令とともにマイクロバスは動き始める。

初めて見た時とはうって変わり、今回はちゃんとスタート出来ていた。

「おお、ちゃんと運転出来てる！」

「四年も一人暮らししてたんだもの。これくらい出来るようになるわ」

ふふん、と鞠莉ちゃんは自慢げに胸を張る。

「ところで鞠莉。一体どこへ向かってるの？」

「近くに小原の所有するヘリポートがあるの」

「今日はそれに乗って迎えに来たんですよ。まあ、流石に空港までは来れなかったんで、車で来たんですけどね」

「へ、へえ……流石鞠莉ちゃん……」

「これだから金持ちは」

果南ちゃんがそう言うときみんなが笑い始める。

こんなやり取り、本当に久しぶりだ。

四年前に進路を分かち、内浦を離れた俺たち。

そしてこの四年の間でも色々なことが変わっていった。

だけど俺たちの絆は何一つ変わらない。

どれだけの時間離れて暮らしていても、どれだけ離れた場所においても。

「とーんーろーで」

四年ぶりのこの空間に浸っていると、車を運転する鞠莉ちゃんがミラー越しに話しかけてきた。

「耀太と果南はどこまで進んだの？」

「四年も一緒に暮らしてたんですから、何も無かったなんてわけありませんよね!？」

「ハグ？ キス？ それとももうそういう関係に!?」

「……黙秘させていただきます」

「もうケチねく。千歌っちだつて晴也とどこまで進展したのか教えてくれたのにく」

鞠莉ちゃんがそう言つた直後、千歌ちゃんは顔を赤く染める。

え……何言わされたの……？

「もう鞠莉ちゃん！ 恥ずかしいからあんまり言わないでよー！」

「照れる千歌っちがベリーキュートだったからつい……てへぺろ」

「てへぺろ、じゃないよー！ もう！」

「つて鞠莉！ 前！ 前見て！」

完全に後ろに振り向いていた鞠莉ちゃん。

バスはぐりんぐりんと滅茶苦茶な軌道を描いて走る。

やっぱり鞠莉ちゃんの運転は怖い。

ヘリポートに着きヘリに乗つてからも慎司と鞠莉ちゃんの質問攻めは続いた。

俺たちは終始誤魔化し続けたが、二人とも何となく分かっているのだろう。

それでもしつこく追及してくる二人だったが、不思議と苛立ちや怒りは感じられず、

この懐かしい感じをもう一度味わうことが出来る嬉しさが込み上げてきた。

やっとの思いで帰ってきた内浦。

バスごとヘリで飛んだ時は驚いたが、無事に帰って来れたので、まあ良しとしよう。十千万に到着した俺たちを最初に迎えてくれたのは意外な人だった。

「お久しぶりです。耀太さん、果南さん」

かつてAqoursのライバルだったスクールアイドル「Saint Snow」の聖良さん。

彼女は卒業後に東京の大学に進学し、同じく東京の大学に進んだダイヤちゃんとは、休日や講義が無い日はよく会っていたらしい。

「久しぶりです、聖良さん。内浦こっちに来てたんですね」

「はい。ダイヤさんに招待していただいたので、卒業旅行もかねて」

「へえ、そうなんだ。まあ、何も無いところだけどゆっくりしていつてよ」

「そんなことありませんよ。とても素敵なところだと思いますよ」

「今回は聖良さんの言う通りだと思うよ。内浦には良いところがいっぱいある。みんなが教えてくれた素敵な魅力がね」

俺は聖良さんの言葉に頷いた。

それは本当に心の底から思っていることだ。

「それにさ、ここは俺がみんなと出会った場所だから。ここから今の俺の全てが始まった。俺にとって内浦は特別な場所だよ」

俺がそう言うと、みんなは静かに微笑んだ。

「さつすが耀太先輩！ 良いこと言う！ でもちよつとは正直に言っちゃっても良いんですよ？ 『みんな』じゃなくて『果南ちゃん』って」

「んなっ?! お前なあー！」

慎司が余計なことを口走り、果南ちゃんは顔を頬を赤く染める。

多分俺も同じくらい赤くなっているだろう。

「二人とも。そうやってじゃれ合うのも良いけど、みんな待つてるんだから。ね?」

「ええ、行きましよう。理亜もお二人と会うの楽しみにしてましたよ」

俺と慎司は鞠莉ちゃんと聖良さんに諭され、千歌ちゃんの案内で十千万の中に入っていろいろとした時だ。

俺は妙な気配を感じた。

「うん……? 何だ、今の……」

「どうしました、先輩?」

「今、一瞬だけ変な気配を感じた気がしたんだ……」

「変な気配？　まさか先輩、まだ体の中にコアがあるんじゃないでしょうね？」

冗談めかして言う慎司だが、俺の場合冗談にはならない。もつとも、四年前だったならだ。

「きつと気の所為です。疲れてるんですよ、きつと」

「ならいいんだけど……」

千歌ちゃんに案内されたのは大きな宴会部屋。

そこには懐かしい顔ぶれが揃っていた。

音楽の勉強をする為に美術大学に進学した梨子ちゃんに、お父さんと同じ船長を目指して絶賛修行中の曜ちゃん。

十千万で料理人の修行をしている晴也。

花丸ちゃん、ルビイちゃん、善子ちゃんも今は大学生だ。

そして三人と一緒にいる理亜ちゃんに、曜ちゃんの従姉妹の月ちゃん。

東京の大学に進学していたダイヤちゃん。

そして、メダルの研究の傍ら、生計を立てる為に私立探偵を始めたというカムイ。

ビデオ通話は何度かしていたが、こうして直接会うのは実に四年ぶり。

鞠莉ちゃんたちと再会した時と同様、懐かしい気持ちの方が沸き上がってきた。

「久しぶり」と挨拶を交わした後は、和気あいあいとしたムードが部屋に広がっていつ

た。

まるで昨日まで毎日顔を合わせていたような気がして、四年も会っていないかったのが嘘みたいに思えた。

「隣、大丈夫ですか？」

「ダイヤちゃん。どうぞ、今は誰もいないから」

立つて部屋を出ていった慎司の席にダイヤちゃんが座った。

「果南さんとは上手くいってますの？」

「うん、大丈夫だよ。まあ、時々喧嘩する時もあるけどね。それでも俺は果南ちゃんを幸せにしてあげたいと思ってるし、今はすごく幸せだと思う」

「そうですか。それを聞いて安心しました。あの子はああ見えてとても繊細ですから」

「大丈夫。果南ちゃんを悲しませるようなことはしないよ。少なくとも、果南ちゃんの前からいなくなることは絶対にしない」

「ええ、お願いしますね」

かつて彼女とすれ違ってしまったことがあった。

お互いの守りたいものの為に。

ダイヤちゃんは、果南ちゃんに二度とあんな目に遭って欲しくない、きつとそう言いたいんだと思う。

果南ちゃんだけじゃない。俺は鞠莉ちゃんにも、ダイヤちゃんにもそんな目に遭って欲しくないし、幸せになつて欲しいと願っている。

「先輩、先輩。ちよつと」

みんなと一緒に会話と料理を楽しんでいると、慎司が俺を手招きした。

「ごめんダイヤちゃん。ちよつと行つてくる」

ダイヤちゃんに一言断りを入れ、俺は部屋を出た。

部屋の外で待つていた慎司。その隣には晴也とカムイもいた。

三人とも、この再会の場には相応しくない深刻な面持ちだ。

「どうしたんだ？　もしかして大変なことでも？」

俺がそう問い掛けると、カムイがタブレット端末を取り出して、周波数を読み取るようなグラフを見せてくれた。

「それは？」

「これはこの沼津市近辺で検出されたエネルギーの脈のようなものだ」

「エネルギーの脈？」

「はい。実は四年前にもこれと同じようにエネルギーが乱れたんです。その原因は平行世界からの侵略者でした」

その話は晴也から聞いたことがあった。

沼津に毒の雨を降らせ、ゆくゆくは地球に生ける全ての生物を抹殺しようとした怪人の話だ。

その怪人は仮面ライダーアクアとなった晴也によつて倒されたのだが……。

「まさかまた侵略者が!？」

「いや、今回の事件は我々の管轄かもしれない」

「我々の管轄……?」

次いでカムイはカンドロイドが撮影したと思われる写真を見せてきた。

写真に写っていたのは大量の卵だ。

それもただの卵ではない。メズールが生み出すヤミーが孵る卵だ。

「嘘だろ……なんでヤミーの卵が……」

「わたしにも分からない。一つ言えることがあるとすればこの町で……この世界で、また何か良くないことが起ころうとしている。そんな予感がするんだ」

そしてカムイの悪い予感的中してしまう。

ドカン、そう遠くは無い場所で爆音が鳴った。

あの後、俺たちの会合はお開きになってしまった。

爆音の正体はビルが爆発した音。

そして爆発したビルは、カンドロイドが撮影したヤミーの卵が産みつけられていたビルだった。

騒ぎがあつた現場に向かった慎司と晴也、そしてサポート役のカムイからそう連絡が入った。

一方、俺は果南ちゃんたちと一緒に十千万で待機だ。

俺はもう仮面ライダーには変身出来ないから仕方ないことなんだ。

そう言い聞かせてはいるが、こういう時に何も出来ないのは悔しいし腹立たしい。

「耀太、顔怖いよ」

「果南ちゃん……俺、悔しい。慎司や晴也たちは出てるのに、俺だけここに残っていることが。分かってるんだ。俺はもう戦えない、仮面ライダーじゃないんだって。それでもやっぱり……。いや、ごめん。今のは忘れて。本当に情けないな、俺……」

今の自分の気持ちを果南ちゃんに吐露する。

すると、彼女は両手で俺の拳を優しく包み込み、俺に微笑みかけてくれた。

「情けなくはないよ。ずっとわたしたちを守る為に戦ってくれて、『諦める』ってことを知らないみたいに、何度倒れても必ず立ち上がってきた。たとえ変身出来なくなつた

て、わたしにとって……わたしたちにとって耀太は『仮面ライダー』なんだから
「……ありがとう、果南ちゃん」

ありがとう、彼女への言葉はそれ以外には見つからない。

果南ちゃんは、「耀太がいつも守ってくれた」と言うが、それは俺も同じだった。

果南ちゃんやみんながいたから俺は立ち上がれた。

いつまでもこんな顔はしてられない。

みんなの為にも、果南ちゃんの為にも、そして……アイツらの為にも。

果南ちゃんの手にも包まれた拳を強く握り直すと、「それにさ……」と彼女は続けた。

「そんな耀太のことがわたしは大好きだから——」

少しだけ赤くなり照れながら果南ちゃんは言う。

不意に四年前の情景と重なり、俺は改めて思わされた。

俺はたくさんの人に、そして愛する人に支えられているのだと。

爆破されたビルは無残な様になり、その周りには警察や消防が人の立ち入りを制限している。

「これは酷いな……」

「ええ。死人が出なかつたのが不幸中の幸いですね……」

ビル、そして救急車で搬送されていく怪我人を目の当たりにし、現場の凄惨さを思い知らせれる慎司と晴也。

警察に詳細を聞きに行つたカムイを待っている間、二人はその光景を見て怒りに肩を震わせていた。

「遅くなつて済まない、二人とも」

そこへ情報を仕入れたであろうカムイが合流した。

「どうだった？」

「やはり爆発の起きた現場には、爆発物の類の破片などは見つからなかつたらしい。その代わりに水浸しになつていたと……」

「ということは、やつぱり爆発したのはあの卵が孵つて……」

ヤミーがビルを爆破した、という答えが既に三人の中で出されていた。

そしてヤミーはこの場を去り、まだこの町のどこかに潜んでいるとも。

「被害が拡大する前になんとしてでもヤミーを見つけろんだ」

「ああ、戦えない先輩の分まで俺たちが……」

この町を守る、慎司がそう言いかけた刹那、タカカンドロイドが飛来した。

「ヤミーを見つけたんだな、タカちゃん!」

慎司の問いに首を縦に振り答えるカンドロイド。

三人は近くに設置されていたライドベンダーを使い、カンドロイドとともにヤミーの出現した場所へ向かった。

カンドロイドの案内で着いた場所は宝石店。

爆発魔と化したヤミーから店を守るべく、三人は武装して店の中へ入った。

しかし、三人がそこで見たのは爆発の犯人と断定した水棲系ヤミーではなく、昆虫系のカマキリヤミーだった。

「カマキリヤミー!? メズールのヤミーじゃないのかよ!?!」

「慎司さん! そんなこと言ってる場合じゃありませんよ! 早く助けないと!」

アクアは到着してすぐさまカマキリヤミーに掴みかかり、店の客から引き剥がす。

それからカマキリヤミーの体を殴打し、吹き飛ばして店のガラスウィンドウを打ち破らせた。

「メズールのヤミーにウヴァのヤミーまで……一体どうなってやがる……。まさか他の奴らのヤミーまで出てくるんじゃないだろうな……」

最悪なシナリオを予想し、独りごちるバース。

考え過ぎであつて欲しい、そう思ったのもつかの間、彼の元に別のタカカンドロイドがやって来た。

「タカちゃん、まさか違うヤミーが出たつての……？」

「うん」と言うようにカンドロイドは頷く。

その様子を見たカムイはタブレットのロックを解除し、カンドロイドとの連携システムのアプリを起動した。

「……慎重くん、大変なことになっているようだ……」

カムイが開いたアプリに届いていた大量の通知。

それらは全て、ヤミーを発見したカンドロイドから送られてきたものだった。

「嘘だろ……」

立ち尽くすバースとカムイ。

そしてカマキリヤミーを撃破したアクア。

そして沼津市は、ヤミーに覆い尽くされたのだった。

「うん……うん……分かった。気を付けるよ」

たった今、慎司たちから連絡が入った。

内容としてはかなり絶望的なものだ。

「慎司くんたち、何かあったの?」

俺の声のトーンから良くないことを察したのか、不安げな顔を見せる千歌ちゃん。

千歌ちゃんだけじゃない。

慎司に指示され、一つの部屋に集められたメンバー全員が同じ面持ちだった。

「今、沼津でヤミーが大量発生しているらしい……。慎司たち三人だけじゃ対応しきれないみたいだ……」

不安は驚愕へと変わり、更に恐怖へと移り変わっていく。

無理もない。今、外にできればいつヤミーに出くわしてもおかしくはないのだから。

いや、今のこの地域には安全と言える場所自体無いのかも。

「どうしてそんなことに……?」

「分らない。ただ……何か嫌な予感がするんだ。だから行かなくちゃ!」

「行かなくちゃ、って……耀太はもう変身出来ないんだよ! 無茶だよ!」

オーズの力無しで出て行こうとすると、いつかの戦いの時と同じように果南ちゃんは声を荒げる。

そりやそうだ。自分の恋人が死地と言っても差し支えない場所へ赴こうとしている

のだから。

「本当よ。あんなにヤミーが溢れている中に生身で行こうだなんて、自殺行為もいいところだわ」

不意に聞き覚えのある女性の声が聞こえてきた。

自称「俺の叔母」で、俺や慎司、そして晴也をこの世界に呼んだ張本人。女神さまだ。

「えっと……知り合いみたいだけど……」

女神さまを見て頭上にはなマークを浮かべる月ちゃん、聖良さん、理亞ちゃんの三人。

そう言えば、三人は女神さまとは会ったことが無い。

女神さまの表情は俺を見る呆れ顔から一転、三人に微笑みかけて会釈した。

「初めまして。耀太がいつもお世話になっております。叔母の島村神子です」

「は、初めまして……」

三人も女神さまより数秒遅れて礼を返した。

それから彼女は再び俺の方に向き、呆れた表情に戻った。

「話は聞かせてもらってたわよ。確かに今の状況を打破するには、アクアとパスだけでは無理よ。オーズの力は必ず必要になってくる。けど、その力を無くしたあなたが行くのは無謀じゃなくって？」

悔しいが反論することは出来ない。

俺の手元にあるメダルは力を失ったタカコア一枚だけ。

他のメダルも同じように力は宿っておらず、たとえ使えたとしても全て頭部を司るメダルだから変身は出来ない。

「……………これを持って行きなさい」

深く溜め息を吐いた女神さまは、俺にメダルホルダーを差し出す。

中には、赤・黄・緑・白・青の銀縁のコアメダルがワンセットずつ収められていた。

「それはカムイが完成させたメダルよ。ただ、これはまだ試作品、何が起こるか分からないから気を付けなさい」

「分かった。ありがとう」

俺はホルダーをしまい、女神さまにお礼をしてから部屋を出ようとした。

その刹那、「待って！」と果南ちゃんが俺の袖を掴んで引き寄せた。

不意のことで体勢を崩しそうになるが、なんとか踏ん張る

そして次の瞬間、彼女の唇が俺の頬に触れた。

あまりに突然の出来事で、俺だけでなく他のみんなもフリーズしてしまう。

「絶対……………帰ってきてね」

少しだけ頬を赤くしながら果南ちゃんは呟いた。

「うん、約束する」

俺たちは小指を絡ませて指切りをする。

前にも今と同じことをしたことがあった。

果南ちゃんは忘れてしまっているけれど、俺はあの時と同じように「必ず生きて帰る」と約束した。

「じゃ、行ってくる！」

部屋を、そして十千万を飛び出し、女神さまが用意したと思われるライドベンダーに跨り、タトバコンボに変身して戦地へ向かった。

町に繰り出すと、慎司たちの報告通り至る所でヤミーが闊歩していた。

カンドロイドたちも応戦はしているが、成長しきったヤミーには手も足も出ていない。

早く慎司たちとも合流しなければならぬ今の状況に、一番適しているのは、やはりラトラーターとトライドベンダーだ。

「ライオン！ トラー！ チーター！」

「ラッタア・ラッタア！ ラトラーター!!」

トラカンドロイドとライドベンダーを合体させ、俺自身もラトラーターコンボに変身した。

トライドベンダーが咆哮すると、ヤミーたちはこちらの存在に気付いて襲いかかって来た。

「久しぶりだけど、行くぞトラくん！」

俺の呼び掛けに答えるように、再び吠えるトライドベンダーは、ヤミーを蹴散らしながら町を駆け抜けた。

トライドベンダーと連携し、数え切れない程のヤミーを撃破した。

それでも本当に減っているのか、と思うほど。

それでもやらないよりはと、ヤミーたちを屠り続けた。

しばらく走り続けていると、何かを囲んでいるヤミーの集団が視界に入った。

その中からエネルギー弾や水しぶきが上がっている。

間違いない、慎司たちだ。

俺は更にバイクのスピードを上げ、その集団に近づいた。

トライドベンダーを操り、俺は二人を追い詰めていたヤミーたちを蹴散らした。

「先輩!？」

「耀太さん!？」

変身出来ないはずの俺の登場に、バースとアクアは驚きの声を上げた。

「悪い二人とも。遅くなった」

「ど、どうしてまたオーズに……? コアメダルはもう……」

「わたしが姉上に頼んだんだ。試作品のコアメダルだが、耀太くんに届けてくれと、ね」
バースバスターを持ったカムイが、二人に教えるように答えた。

やっぱりカムイが女神さまに言ってくれたんだな。

彼に礼をしようとしたが、それにはまだ早い。

倒したのは別のヤミーがまた寄ってきた。

「行くぞ、みんな!」

俺はタトバコンボに戻り、メダジャリバーを召喚した。

数は多いが何度も戦った相手だ。苦戦するはずもなく、次から次へと遅い来るヤミーを斬り伏せた。

「やっぱり一体一体倒してたらキリがないな。今度はこれだ!」

「クワガタ! カマキリ! バッタ!」

「ガータ・ガタ・ガタキリツバ! ガタキリバ!!」

続いてガタキリバコンボにコンボチエンジし、ブレンチシエードを生み出して屑ヤミーを含めたヤミー軍団に突撃する。

総数五十体、百振りのカマキリソードは無数のヤミーを一瞬で斬り裂いていく。

「サイ！ ゴリラ！ ゾウ！」

「サゴーズ！ サゴーズ!!」

ガタキリバで地上のヤミーを一掃し、次は空中のヤミーたちに標的を変える。

「スキャニングチャージ！」

コンボチエンジ後、すぐさまスキャニングチャージを発動し、オーズを中心に重力波を発生させる。

空を飛ぶヤミーたちは俺に引き寄せられ、その全てをゴリバゴーンで粉碎した。

「シヤチ！ ウナギ！ タコー！」

「シヤ・シヤ・シヤウタ！ シヤ・シヤ・シヤウタ!!」

サゴーズからシヤウタコンボにチエンジし、ウナギウィップを展開して残りわずかとなったヤミーに追い打ちをかける。

何体かが地中に潜り逃走を図ろうとしているが、それも無駄だ。

俺はオーズのボディを液化化させ、地中のヤミーたちを追跡する。

逃走から数秒も経たないうちにヤミーを捕らえ、地上に打ち上げる。

トドメに必殺キックのオクトバニッシュユをヤミーたちにおみまいした。

慎司と晴也の方も終わったらしく、二人が戦っていたヤミーも全てセルメダルに還元されていた。

多分、ここら一带のヤミーは一体も残っていないだろう。

「これでこの辺りは大丈夫そうですね」

「ああ、多分な。けど油断はするな。まだ敵は残っているし、なんだか嫌な予感がするんだ……」

「何言ってるんですか！ 俺たちにかかれば、どんな敵がきたとしても問題ありませんって！」

「よく言うよ。この世の終わりを見たような顔で『もうダメだあ……おしまいだあ……』なんて言っていたクセに」

某王子のセリフとともに慎司の真似をするカムイ。

その時の本人の顔も安易に想像がつく。

少しの間、俺たちは戦場に身を置いていることを忘れ、声に出して笑った。

その後も俺たちは戦い続け、町に溢れかえっていたヤミーを一体残らず殲滅した。だが俺の胸中の不安が拭われることは無かった。

俺がけしかけたヤミーがこうも簡単に片付けられるとは……。所詮は使い捨ての駒か。

しかし、それでも完全復活に必要なメダルはもう集まったか。

グリードたちが人間の欲望に固執していたのがよく分かる。

……が、もはやそれも俺には必要ない。

時は来た！ さあ、復讐の時間だ！

ヤミーの大量発生は収束し、沼津に平和が戻った。

その祝賀会と中止になってしまった会合の二次会もかねて、また千歌ちゃんの家でパーティが開かれた。

みんなの笑顔や楽しそうな声で部屋は満たされているが、俺の中ではまだ嫌な気配が消えていなかった。

「先輩、なにボーツとしてるんですか？」

隣に座っていた慎司が、俺のグラスにオレンジジュースを注ぎながら尋ねてきた。

「……今回のことが気になつてな。本当に事件は全部終わったのか、つて……」

ヤミーは全て倒したが、原因は未だ不明のまま。

女神さまとカムイが調べてくれているが、沼津周辺に時空の歪みが多数起きている所
為で、調査は難航するかもしれないと言われた。

「なるほど。確かに俺も気にはなります。けど、今は善子やみんなに不安な気持ちを与
えたくない、そう思ったら辛気臭い顔なんてしてられませんよ」

「……凄いな、お前は」

「先輩には負けますよ」

普段はふざけていることが多かったが、時々慎司には敵わないと思うことがある。同
時にとっても頼もしいとも。

「たとえどんな敵が相手でも先輩なら大丈夫。なんとつて世界を救った男なんですから
！」

「……サンキューな」

女神さまとカムイから連絡が入ったのは、その夜だった。

時空の歪みをしらみ潰しに調べ、事件の元凶が潜んでいると思しき歪みを見つけた、

とのことだった。

夜が更けてからみんなが寝たことを確かめ、俺たちは十千万を出て、その歪みのある場所までバイクを走らせた。

「まさかこの場所だったなんて……」

ヘルメットを外して呟いた晴也の視線の先にあるのは、今はもう使われていない学校。

四年前、俺たちが通っていた浦の星学院の跡地だ。

「俺たちの思い出の場所に巣食うたあ、随分度胸のある奴みたいですね」

慎司の言葉に頷きながら、俺はこの場所での出来事を思い返していた。

楽しかった思い出じゃない。

ここでは辛く、苦しく、悲しい戦いもあった。

そんなこの場所に巣食う敵の正体を俺は悟った。

立ち入り禁止のバリケードを越え、校内に入るとすぐにそれは目に入った。

四年前に俺がぐり抜けたワームホールと似た穴。

闇というより虚。虚空と形容すべきそこに映った影。

それは俺がもつとも再会であいたくなかった敵だ。

「久しぶりだな、仮面ライダー」

「出来ればもう二度と会いたくなかったけどな。ポセイドン」

奴は虚空をくぐり、俺たちの前にその姿を現した。

魚類を彷彿とさせるシルエットに、黄色い複眼。

得物である槍を地につき立て、俺たちを見据える。

「俺はお前に復讐する為に力を蓄えた。そして体も……。ヤミーどもを駆逐するのに必死になっていた姿は実に滑稽だったなあ」

「テメエの身勝手な都合でこっちは迷惑被ったんだ。責任はキツチリとってもらうかなー！」

ポセイドンと対峙した俺たちは、各々のドライバーを装着して仮面ライダーへと姿を変えた。

「変……「変身！」……身！」

バース、オーズ、アクア。

最後の戦いの火蓋は切って落とされた。

ポセイドンは槍を振ってエネルギー弾を発射する。

それらをギリギリで回避し、俺たちは奴に接近した。

アクアとバースが先行し、連携してポセイドンに拳を叩き込む。

だがポセイドンはそれを槍で防ぎ、二人の体勢を崩して薙ぎ払った。

「以前より強い……………」

「俺たちだって強くなってるはずなのに……………」

弾かれた二人とスイツチし、メダジャリバーをポセイドンに振り下ろす。

俺は剣を、奴は槍を持つ手に力を込めて鏝迫り合いになる。

「やはりお前は他の奴とは違うな。だがそれでこそ倒しがいがある！」

互いに武器を弾き、後方へ跳ぶ。

着地と同時に地面を蹴り、もう一度奴のもとへ跳んだ。

再び剣を振りかざす。

しかし、その一瞬の隙に奴の槍は振るわれ、剣は弾き飛ばされた。

「しまった……………」

「もらったあああ……」

胸部にバツ字の槍撃、さらに柄で一撃を浴びせられて吹き飛ばされてしまう。

ダメージが許容量を超えてしまった所為で、トラメダルでの変身が保てなくなつてし

まった。

「まだだ！」

「タカ！ クジャク！ コンドル！」

「ターゲットドルー!!」

トラメダルとバツタメダルを外し、クジャクとコンドルのメダルを使って、燃え盛る炎の真紅のコンボ——タジャドルコンボにコンボチェンジした。

俺は翼を展開して空へ。

更にタジャスピナーを召喚し、ポセイドン目掛けて火炎弾を雨のように撃ち出した。ポセイドンと激突する直前で回避し、少しずつ上昇しながら慎司たちの方へ戻る。

「先ツ輩ツ!!」

二人のもとへ戻る俺を目掛けて、バースがメダジャリバーを投げた。

俺はすかさず剣をキャッチし、更に上昇する。

メダジャリバーには既にセルメダルが装填されていて、それが慎司の仕業だと理解した俺は、心の中で彼に礼を言いながら刀身にオースキャナーを走らせた。

「トリプル! スキャニングチャージ!!」

「はあああ!!」

メダジャリバーの刀身に炎を纏わせ、地上にいるポセイドンに狙いを定めて急降下した。

その過程で、刀身の炎はオーズのボディ全体を覆い、火の鳥となってポセイドンの体を貫いた。

「グウウウ……フツ、フハハハ! どうした。前に俺を倒した時はこんなものじゃない

かったはずだ！」

ポセイドンは胸に突き刺さった剣を抜き、なんと俺ごと剣を放り投げた。投げ飛ばされて地面に激突し、その衝撃は痛みとなって俺の体に響いた。

倒れた俺を庇うように、バースとアクアが立ちふさがる。

「ウオオオオオオオ!!」

獣のように咆哮するポセイドン。

大気が震え、まるで地震が起きたかのように大地が揺れる。

仮にも仮面ライダーの名を冠し、整っていたポセイドンの装甲は醜く変化していった。

複眼は歪み、大きく開いたサメの口を彷彿とさせるクラツシャーが現れ、サメのヒレを模した装飾も破れたようにボロボロになる。

胸の傷は眼と同じ黄色に輝き、完全に塞がることは無かったが、それはより生物らしさを感じさせるものとなった。

体色も元々の色に黒が混じって一層禍々しさが増した。

もはや仮面ライダーの面影はほとんど残していない。

ポセイドングリードとでも呼ぶべき存在と化した。

「これが俺が手に入れた力……お前を葬る為の力だああ!!」

ポセイドンは一瞬でバースとアクアに接近し、その装甲を砕く。

たった一撃のパンチで二人は吹き飛ばされ、その変身は強制解除された。

「そんな……一撃で……」

「強さの次元が違う……。正真正銘の……化物だ……!」

二人を一瞬のうちを下し、ポセイドンは標的を俺に絞る。

奴に頭を掴まれて立たされ、その拳を何度も体に打ち込まれた。

悲鳴をあげることも出来ない程の激痛を伴う攻撃は、一発喰らうだけで頭がどうにか
なってしまうそうだった。

「そろそろ楽にしてやろう。これで終わりだ」

青く発光するポセイドンの拳。

それを受ければただでは済まないだろう。

だが避ける力すら俺には残されていない。

「耀太さん!!」

「やめろおお!!」

晴也と慎司の悲痛な叫びが耳に入った直後、オーズのボディに拳が打ちおろされた。

俺の目に入った景色は、どこまでも広がっている青い空だった。

見上げれば上には太陽が、周りを見渡せば雲に手を突っ込むことも出来た。

初めて死にかけた時と同じような感覚が俺を覆っていた。

……今度こそ、俺は死んでしまったのだろうか……。

「このバカが。お前はどれだけ無茶をすれば気が済むんだ！」

突然、俺は懐かしい声で罵られた。

振り返ると、そこには四年前に俺の隣に立っていたアイツが——アंकの姿があった。

「アंकだけじゃないよ」

俺の心の中を読んでいるかのようにカザリが現れ、ウヴァ、メズール、ガメルと、あの戦いで消滅したはずのグリードたち全員が俺の前に現れた。

「お前ら……どうして……!?!」

「キミを助けてあげたんだよ」

「あのまま放っておいたら、本当に死んでしまうからな」

カザリとウヴァが俺の言葉に答える。

「しつかりなさいな、耀太。あなたが死んだら果南やみんなが悲しむわ」

「ルビイたちが泣くの……やだ！」
メズールとガメルが俺に叱咤する。

「もう十分ポロポロにされただろ。さっさと戻って片付けてこい」

アंकは、光輝くコアメダルを俺の手に握らせた。

その輝きは温かく、そして懐かしい。

「分かったよ、みんな」

アंकたちの姿が消えていく。

そして最後に笑ったみんなの顔が見えた後、視界はホワイトアウトした。

目を覚ますと、俺の変身は解けていた。

あの一撃でダメージ量が許容範囲を超えてしまったようだ。

だが不思議と痛みは消えていて、体力も全開している。

きつとアイツらの仕業だろう。

攻撃を受けてまだ間もないのか、俺のすぐ側で高笑いするポセイドンの声が聞こえる。

聞いていてとても不愉快な気分になる。

しかし、そんな声もすぐに聞こえなくなった。

「何がそんなにおかしいんだよ」

その理由はただ一つ。倒したはずの俺が立ち上がったからだ。

「……なぜ動ける。たしかにトドメは刺したはずだ」

「何度だつて立ち上がるさ。お前を倒す為ならな」

「ならもう一度倒れる。目障りだ!」

ポセイドンは再び拳にエネルギーを集中させ、俺の胸を目掛けて突き出す。

それをどこからか飛来してきた三つの光が阻止した。

「何ッ!?!」

俺は三つの光を胸の前で手に納め、頷く。

それを手にした瞬間、みんなの想いが俺に流れ込んできたからだ。

「みんな、俺に力を貸してくれ!」

空になったドライバーのスロットに光を差し込み、オーカテドラルを傾ける。

最後にドライバーの上にオースキヤナーを走らせて叫んだ。

「変身ッ!!」

「スーパー! スーパー! スーパー!」

スーパータカ！ スーパートラ！ スーパーバッター！

「スーパー！ タ・ト・バ！ タ・ト・バ！！ スーパー！！」

光はスキャンと同時に更に眩く輝き、俺の体を覆っていく。

タカヘッド・ブレイブ、トラクロソリッド、バッタゴラスレック。進化した武装が施されたオーズの究極進化。

オーズ スーパータトバコンボがこの世界に再誕した。

「その光……あの時の!? だが今の俺の敵ではない！」

吠えたポセイドンは一瞬にして俺の背後に回る。

そしてもう一度エネルギーを載せた一撃を浴びせようとするが、俺も奴と同じように一瞬で背後に回ってその腕を掴んだ。

「忘れたか？ このメダルにはお前と同じ力があることを」

「ぐっ……調子に乗るなあ!!」

俺の腕を強引に振り払い、拳撃のラッシュを始める。

ポセイドンの拳はオーズのボディに何度も撃ちつけられる。

避けられないのではない。避けるまでもないのだ。

どれだけ奴の攻撃を受けても、文字通り痛くもかゆくもない。

攻めているのは自分のはずなのに、ダメージを与えられず、ポセイドンは精神的に追

い詰められていった。

俺はポセイダンの攻撃を妨害することなく、奴の腹部に強烈な拳打を叩き込んだ。

更に、展開されていたトラクローソリッドがポセイダンの体に突き刺さる。

腕引いてトラクローソリッドを引き抜くと、爪の間に二枚のメダルが挟まっていた。

トラクローソリッドにエネルギーを流し込むと、紫色のスパークが走り、メダルは粉々に砕け散った。

「お、俺のコアが……。オーズ、貴様アアア!!」

傷口からセルメダルを零し、激昂して拳を振るうポセイドン。

俺は右脚に緑色の電撃を纏わせ、回し蹴りでカウンターを決める。

吹っ飛びそうになるポセイドンだったが、俺は左足で踏み込んで重力波を発生させて奴を地に落とす。

ボロボロになりながら立ち上がった奴を風と水の刃で斬り裂いた。

「あの力……。ウヴァとガメル、メズールとカザリの……」

「それだけじゃないですよ。コアメダルを破壊したのは、間違いなく紫の力……。あのメダルは消滅したんじゃない……」

俺の攻撃を受けたポセイドンだけでなく、それを見ていた慎司と晴也も驚愕の表情を浮かべていた。

今俺が変身しているのは、ただのスーパータトバコンボではない。

グリードたちやかかつて俺が手にした力が宿った姿だ。

俺が攻撃をする度、俺の目には彼らの姿が映り、その幻とともに攻撃を繰り出していた。

「これでトドメだ」

「スキヤニングチャージ!!」

オースキヤナーで再度メダルをスキヤンする。

バツタゴラスレッグを変化させて跳躍し、虹色に輝く翼を広げてキックの体勢に入った。

タトバ、ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、シャウタ、プトティラ、ブラカワニ、そしてタジャドルの影と重なり、九色に輝くリングを抜けて技はポセイドンに炸裂した。

「また……負ける、のか……。だが、俺は必ず蘇る！ お前を倒し、奴を……」
「火野映司を倒す為がいい!!」

ポセイドンの体は爆発四散し、セルメダルが雨のように降り注ぐ。

そして奴の最後のコアメダルが音を立てて砕け散った。

「俺たちは負けない。お前が何度も復活しようとも、その度にお前を倒してやる」

長かった戦いに終止符が打たれた。

変身を解くと、今まで光り輝いていたメダルはその光を失い、元のスーパーメダルへと戻った。

「また……いつかの未来で」

俺は空を見上げてそっと呟く。

俺の言葉に答えるように、夜空に浮かぶ星たちが輝いたような気がした。

十千万に帰ると、まだ日が昇っていないはずなのに、目覚めた果南ちゃんたちが俺たちを迎えてくれた。

みんなに譲ったメダルたちが輝き出して彼女たちを目覚めさせたらしい。

慎司も晴也もズタボロ、俺も服だけだがズタズタにされていて、各々恋人たちにお説教をもらってしまった。

「バカ……。本当に心配したんだから……」

「ごめん……。ただいま」

「うん、おかえり……」

涙を浮かべて、しかし笑顔で迎えてくれた果南ちゃんを強く抱きしめる。みんなが見ているが、そんなの関係ない。

「いつまでもしまつてないで、とつととアイツの欲望^{ゆめ}を叶えてやれ」
不意にアंकの声が聞こえた。

だが他のみんなの様子を見るに、俺以外には聞こえていないらしい。

気の所為かと思つたが、直後に空から何かがやってくる。

目を凝らして見ると、それはタカカンドロイドだった。

だが少し様子が変だ。こちらに向かつて来ているあのカンドロイドは何かを持っている。

それが何なのか、俺は数秒で理解した。

「アイツ……がらにもないことしやがつて」

「耀太……？」

自然と口元が緩んでしまい、それを不思議に思つたらしい果南ちゃんは俺の名前を呼んだ。

カンドロイドが運んできたのは翡翠色の小箱。

本当にやつてくれたな、アंक。

未だ戸惑いの色を隠せない果南ちゃん。

彼女の後ろで見ている何人かは既に察しが着いたらしく、俺たちのことを微笑んで見守っていた。

俺は息を吸い込み、果南ちゃんの瞳を、困惑の表情を浮かべる彼女に告げた。

「果南ちゃん、俺と結婚してください」

精一杯の俺のプロポーズ。

果南ちゃんは涙を流しながら、しかし、今まで見た中で一番の笑顔で答えてくれた。

「はい——」

そして開かれた結婚式。

隣にいるのは純白のウェディングドレスに身を包んだ果南ちゃん……いや、もう

「ちゃん」付けはやめよう。

雲一つない青空のもと、俺と果南は結ばれた。

出会ってから今日までいろいろなことがあった。

たくさんの人と出会って手を繋いだ。

手を繋いで、そして結んで。

そうして今の俺がいる。

みんな、俺たちのことを祝福してくれた。

その参列者の中に、俺はあの五人の姿を見た。

その姿を見ることが出来たのは俺だけだったけれど、アイツらは確かにそこにいた。俺たちはこれからも前へ進んでいく。

一人では無理でも、果南と二人でなら。それでもダメなら千歌ちゃんや慎司たちも一緒に。

みんなの笑顔が溢れる、そんな未来へ――。